

吉備群書集成

第參輯

（戰記部）

第參輯戰記部(上)

吉備群書集成第三輯凡例

一、本輯は戰記部上として、高松城水攻古圖一舖、及び原本貳拾八卷貳拾六册を收載し、其各書排列の順序は、記事內容の總括的なる、或は總括的性質に近きものを順次卷頭に登載し、以下一氏一姓、若くは一城一軍の獨立したる記事を、大體事件發生の年代順に收錄したり。

一、本輯各書の底本としては、備前軍記は沼田頼輔氏、中國兵亂記は總社町中島嘉一氏、美作國古城合戰記は矢吹金一郎氏、宇喜多戰記妙善寺合戰記備中兵亂記兒島常山軍記及佐柿入道常圓物語は高取輝雄氏、龍ノ口落城記は池田侯爵家岡山事務所、三星軍傳記は騎兵大佐安東直康氏の、夫れ〳〵秘藏珍襲せる物に據り、又備前文明亂記は故山田貞芳氏の遺書として、現在三門學園の保管せるもの、類纂虎倉物語は岡山縣立戰捷記念圖書館の所藏せるものを、各借出採用したり。

一、尙戰記部收載の豫定書目中抄本類は之を後輯に登載することゝし、又二三のものは、或は其內容に鑑みて他輯に變更し、或は書名異なるも記事殆ど大差なきものは、鼇頭若くは割注として研究者對照の便に資すると同時に、其異名類本、若くは異名同本の收錄は之を省略したり。

一、異名類本若くは同本中、萬燈記兒島常山軍記天神山記は別本との相違點を頭注として、注末括孤內に「イ」「落」等の文字を挿入し、或は單に傍注を施せり。即ち妙善寺合戰記頭注の「イ」は刊本たる妙善寺合戰記、兒島常山軍記の「イ」は別名兒島常山落城記及備前常山軍記、天神山記の「落」は天神山落城記並に天神山實錄等との、夫れ〳〵相違點頭注なり。但し其相違點にして文章書方の末技に屬し、內容事實に於て何等の變化なきものは、必ずしも登錄掲記せざるあり。

一、備前文明亂記備中兵亂記の二書は、共に史籍集覽に採錄する所、而して其既刊本との相違點は、大同小異と云ふを得べきも、本會の採れる文明亂記底本は、古人傳寫の年代に於て集覽記本より

も古く、殊に原著者の今回始めて明かになれると、又同じく兵亂記底本は既刊本に比較して遙に原著に近しと推定さるゝ理由に依り、共に之が相違點を明かにすべく、即ち文明亂記は既刊本を對照併記し、兵亂記は相違點の比較的長き所を頭注とし、然らざるものは字傍に細線を施して、其下に括孤内に別本の字句を六號にて照記し、或は字句を全く追加添補すべき形にあるものは、六號割注の續け讀みと否續け讀みに依て、其別本との相違點を明かにすることゝせり。

一、猶中國兵亂記は、同書別本の轉載たる備中集成志古戰場の部と、又虎倉物語は、三門學園本の虎倉記虎倉物語及虎倉聞書と、佐柿入道常圓物語は史籍集覧本の高松城攻物語と、各對照したり。

一、書中散見の字句に於て「設」に對し「儲」、「頃」に對し「比」、「攻」に對し「責」を用ゐ、又「卑怯」に「比興」、「郎黨」に「郎等」、「一統」に「一等」、「一々」に「逸々」、「譜代」に「普代」、「意見」に「異見」、「後備へ」に「跡備へ」、「駈出づ」に「蒐出づ」等の文字を使用したるは、明かに漢字の用法を誤り、或は現代の慣用に悖るものありと雖、一は原本尊重の意と、一は相違其ものが、好個の參考資料たるを思ひ、總て其儘として敢て訂正を加へず。勿論原本既に今日使用の漢字を用ゐたるもの、或は之を混用したるものは、凡て其儘に存置せること附言する迄もなし。

一、其他は大體一輯所載一般凡例に準則したりと雖、虎倉記の如く一面記錄の性質を帶ぶるものは、假令誦讀困難なるものも一字の送假名を附加せず、一切原本の形に依れり。

一、最後に本輯編纂上便宜を與へられたる池田侯爵家、及前岡山市長岡田盤、三門學園長岡村正義、岡山師範學校教諭木幡竹三郎、備中總社町中島嘉一、騎兵大佐安東直康、並に矢吹・高取・武藤諸氏に對し、茲に特筆して感謝の意を表す。

大正十年十一月十五日

編　者　識

解題

備前軍記　五卷

著者　土肥經平

此書は嘉吉元年赤松氏の滅亡より筆を起し、慶長八年池田氏の入部に至るまで、凡百六十年間に起りたる、備前國内に於ける爭戰の事蹟を記せるものにして、赤松•山名•浦上•松田•宇喜多諸氏の興亡より、小早川氏の治世に至るまで、凡そ備前國内に於ける爭戰の事跡は、これを記さゞるものなく、延いては備中美作の事に及ぼしたれば、啻に岡山縣下の好地方史たるのみならず、尼子毛利の衡爭の歷史も、亦これによりて闡明すること少なからざれば、苟も戰國時代に於ける中國の大勢を知らんとするものに取りては、必讀の書なるを失はず。本書の著者は有名なる土肥經平にして、その略歷は載せて第一輯に詳なれば爰に贅せず。而して經平が本書を編述するに當り、その史料を如何なる方面に取りしかといふに、彼が自序に、方今予所レ記受ニ諸稗官野史一刪ニ其可レ疑、而徵以ニ神祠佛宇之所レ存之籍一、又稽ニ諸控弦家所レ傳者一、併錄爲ニ五卷一とあり。即ち經平が記述する所は、これを稗官野史に受けたりといへども、而もこれを徵するに、神社佛宇に保存せられたる古文書に據りたるを見れば、その研究たる慥に今日史家の行ふ所と一致せるを見るべし。宜なり本書の記する所、正鵠を得たるもの多く、これを從來行はれたる軍記類に比するに、慥に一頭角地を拔んでたるものあることや。

本書卷末に附錄として、黑田美濃守職隆を始め、戶川肥後守達安、浮田左京亮等を始め、廿六人の名士を揭げて、その事歷を略叙せり。本書の記事と相參照して、彼此相補を得せしめたるは、謂はゆる漢史の紀傳體に倣へるが如きものにして、亦以つて用意の周到なるを見るべし。

中國兵亂記　六卷

著者　中島元行

此書は今を距ること、殆三百年前、即元和元年備中賀陽郡刑部郷地頭にして、經山城主たりし中島大炊助元行が、父祖及び自己の經歴せる事蹟を子孫に知らしめんが爲に、著述したるものなることは、卷末に記されたるその跋文に就いてこれを知るべし。中島氏本姓二階堂氏、その祖大藏少輔政行といふ。永正の頃、將軍義稙の命を奉じて備中國に來り、淺口郡片島に居城し、後窪屋郡高山城主となり、備中國探題に補せられ、更に轉じて賀陽郡經山城主となり、子孫世々此城に居りて重きを成せり。その後裔元行の時、毛利氏の威を中國に振ふに至り、その部下に屬して功あり。天正十年秀吉の征西に當り、高松城主淸水宗治を助けて秀吉の大軍に抗し、殊勳を樹てたりき。此書は明應以後より天正末年に至るの間、中國に於ける兵亂の事を記せるが故に、中國兵亂記と名づけたらんも、主として中島氏が父祖の武功を顯彰することを目的とせしを以つて、その記述せる事項は、槪して備中の外に出でず。中にも、天正十年に於ける高松役の如きは、最も委曲を盡せるものといふべし。本書の成れる元和元年は、天正十年を距ること僅に三十二年にして、而も著者は親しくその實戰に與れる身を以つて、その遭遇目視せる事實を卒直に記せるものなれば、謂はゆる根本史といふべきものにして、凡高松役後の史實を知らんには、全く此書の右に出づるものなかるべし。然るに、從來門外不出の書として、著者の後裔たる中島家に珍襲せられ、專門史家の眼に觸れざりしが故に、これを知るもの稀なりしも、今回所藏主の好意に依りてこれを收むるを得たるは、斯學の爲稗益すること極めて大なるものあるを疑はず。

此書六卷より成り、いづれも元行氏の編著に係るも、跋文より以後の事蹟は、元行の後裔昌行の追補せるものにして、その記事も亦編者の遭遇目視せる史實を記せるものなれば、淸水氏中島氏の

末路を知らんには、亦必要の記事たるべし。

今回刊行せるものは、中島氏の好意により、原本を底本としたるものなれば、最も誤謬なきを得たるべし。唯、印刷上の都合により、原文は片假名を用ゐしも、刊本には平假名を用ゐたり。

天正年中美作國古城合戰記　一卷　著者　未詳

此書天正年中に於ける美作西部の岩屋・神樂尾・高尾・横田五城の落去を記せるものなり。開卷目次には、此外岩尾山・安春・和泉・藤田四城の落去を記せるも、本文には見る所なし。底本とせるものにこれを脱落せるか、又始よりこの四城の事を記さゞるか、今考ふるに由なし。

天正年間、作州は備前の宇喜多氏と安藝の毛利氏との折衝點にして、當時美作西部の諸城は、大率毛利氏に屬して、宇喜多氏の攻陷する所となれり。本書はこの際に於ける右五城の落去を記せるものにして、陰德太平記、備前軍記、作陽誌等と相俟つて、能くこの消息を詳にするを得べし。著者の何人たるかは知るに由なきも、傳聞の誤にや、書中往々史實を誤り、中には神樂尾城沒落の條を記すに當り、永祿を以つて天正の後に置きたるが如きは、甚しき錯誤とすべし。今回刊行せる底本には、天保二年霜月西々條郡奥津村石原春房書寫とあり。思ふに、此書はこの地方に於ける古老の筆に係りしものにして、典據正しきものにはあらざるべし。

備前文明亂記　一卷　著者　目黑祐欣

此書從來その著者を詳にせざるも、今回刊行の底本には、永祿元年三月九日目黑祐欣とありて、明かにその編著の年代と、その著者を知るを得たり。尚ほこの底本には、奥書に貞享三年十一月十日朝染筆とあれば、即ち今回刊行の底本は、貞享三年の書寫に係れるを知るべし。今之を既刊の史

籍集覽本に對比するに、此書には、その奥書に『右作者不知如寫本　萬治三庚子二月下旬書之　常林坊判に常林寺日常賞　右寫本ヲ得テ元祿九年子仲秋上院之日江南隱寒士窓下染筆　江田宗眞老』とありて、即ち萬治三年に書寫せるものを、更に元祿九年に至りて書寫せしものなれば、もしこの轉寫の際改竄を加へたることなしとすれば、今回刊行の底本は結果に於て、史籍集覽本より二十七年の後に書寫せられたると同樣なることを知る。今兩書を取りてこれを對比するに、史籍集覽本はその文辭拙劣にして晦澁なるも、貞享本は簡潔にして流暢なれば、寧、史籍集覽本こそ原本に近きものといふべし。而して本輯には貞享本を執り、更に各項史籍集覽本を併べ掲げ、以つて彼此參照するの便に供へたり。

本書記する所、畠山義就の擧兵に始まり、赤松政則の備前入部となり、尋いで赤松松田兩氏の確執となり、遂に文明十五年に至り、松田氏は山名氏を誘ふて福岡城の包圍攻擊となり、その結果、赤松氏の勢力失墜し、松田氏これに代りて備前の覇權を握れる顚末を記せるものとす。從つて史籍集覽本には、その開卷第一に松田家歷代と、松田家の菩提寺たる妙國寺の歷代とを記せり。而してその奥書に見えたる常林坊日常の何人なるかは詳ならざるも、無論日蓮宗の僧侶にして、是等記事の竄入は、思ふに此人の手に成りしものか。

宇喜多戰記　一卷　著者未詳

此書題して宇喜多戰記と云ふも、宇喜多家三代の戰記にあらずして、主として直家一代の武功を記述せるものなり。而して記述の事項は、概して備前軍記等に比して、さして云ふべき程の新史實はなきも、亦一二異說の見るべきもの無きにあらず。例へば、直家が樽所治部を謀殺せる計策の如き、龍口落城記、備前軍記等には、岡清三郎が尺八の僞計を以て治部に仕ふることゝなり、その寵

を得てこれに近侍し、間に乘じて遂にこれを殺せしことを記したれども、此書には、岡五助が船山城主須々木氏に仕へ、乞丐の老婆を我母として城中に迎へ、これに奉仕して、城主の心を安んぜしめ、然る後城主の愛馬を盜み、これに乘りて龍口城に逃げ込み、治部を說いてその保護を受け、遂に治部に昵近し、間に乘じてこれを殺す事とせるが如きは、この書の外他に見る所なし。而して、余輩未だ是等の異說を斷定すべき根本史料を有せずといへども、幾多の異說を蒐集し、以つて滄海に遺珠を探るは、本會の目的とする所なれば、此書の刋行も、蓋し意義なきにあらざるべし。

龍口落城記　一卷　著者未詳

此書は備前上道郡龍口山落城の顚末を記せるものなり。卷末に記す所に據れば、この原本はもと和田村の庄官某が家にありしを、文辭粗笨にして字義亦誤謬多かりしを以つて、元祿元年の春某氏これを求め、記寫の序に潤色して、此書を成せしといふを見れば、此書の旣に元祿以前の編著に係りしを知るべし。本書もと池田侯爵家所藏土肥秘函の中に收められたりしを以つて、此書恐らく土肥經平の校訂に係りしものと思ひしに、經平は寶永四年に生れて、天明四年に歿じたれば、經平の校訂にあらざることは云ふ迄もなし。今回刋行せる底本には、卷末に明和元年書寫とあり。思ふに經平の子延平の書寫に係りしものか。

龍口落城に關しては、異說紛々たり。本書記する所は、宇喜多戰記と異なりて、備前軍記とその說を同うす。備前軍記は經平の著なれば、云ふ迄もなく經平は宇喜多戰記を取らずして、この說を取れるを知るべし。

妙善寺合戰記　一卷　著者未詳

此書は永祿九年、三村元親と宇喜多直家との合戰たる、所謂妙善寺崩の内容を記するものにして、其明禪寺と呼べるは、南北朝の頃此地に明禪寺といふ禪刹ありしによる。而て之を妙善寺と書せるは蓋字音の轉化によるなり。本書の著者及著作年代は明かならざるも、本文中に「拐澤田の西と八幡村の北の邊にかなたこなたにある首塚は皆此時の塚なるべし」とあるより推せば、遙か後代の者が、他の記錄或は傳說等によりて作せしものなるべし。但し比較的信ずるに足るものたるは、世既に之を認むる所にして、先人塙保己一の如きも、蒐めて其著群書類從中に收錄したり。

本書別名を萬燈記と云ふ。其故は此大戰に於ける陣歿の將士の冥福を、後年湯迫村近傍の者が、山上に松火を焚きて修する由來を記するを以てなり。

備中兵亂記　三卷　著者未詳

此書備中兵亂記と題するも、主として備中松山城主三村修理進元親が、織田信長に應じ、不倶戴天の仇敵たる宇喜多氏を滅さんとせしも、その一族たる同國成羽城主三村孫兵衞親成父子はこれに從はず。元親由りて親成父子を誅戮せんとせしより、親成即ち毛利氏に訴へて、その保護を仰ぎしかば、その結果元親毛利氏の征討を受くることゝなれり。故にこの戰爭たる三村對毛利の戰爭なるも、亦一面には織田對毛利の中國戰役の序幕といふべきものにして、中國戰史を講ずるもの〻必讀の書なりとす。

此書その著者を詳にせざるも、その記する所能く當地方の地理を明かにし、又三村家の事を知れるものにあらざれば能はざる所なれば、思ふに三村家遺臣の筆に成りしものか。

本書上中下の三卷に分ち、上卷には先づ此の戰爭の起因と、藝軍殺到の次第と、手莊・新見杜・山田鬼身、屬城の沒落を叙し、中卷には松山城の包圍攻擊と落城を叙し、下卷には元親及びその子勝法師丸の最期と、兒島常山城の歿落に及ぶ。

今回刊行せるものは、高取君所藏の古本にして、之を在來世に行はるゝ史籍集覽本に比較するに、文辭稍ゝ拙劣にして、技巧粉飾彼に及ばざるものあり。之れ恐らく、史籍集覽本よりも原本に近きの故なるべし。但し集覽本は、文政七甲辰年朽木侯泰綱の書寫に係り、類書中良好のものなりとは、世既に定評もあることなれば、同書との異同の點は、總て之を挿み、彼此對照の便に供したり。

兒島常山軍記　一卷　著者未詳

此書は備前兒島郡常山城主たる三村上野介高德（一に高龍に作る）が、備中松山城主たる三村修理亮元親に與せる故を以つて、天正三年六月毛利氏の大軍に攻圍せられ、奮戰苦鬪の後、一門枕を駢べて戰死したる顚末を記せるものにして、備中兵亂記を骨子とし、これを文飾したるものなれば、內容の史實は、兵亂記と殆ど異なる所なしといふべし。唯卷末に常山城の廣さと、池田氏入部の初城番として置きたる家士の氏名を列記せるを異なりとするのみ。此書の著者は知るに由なきも、池田氏入部以後に成りたるものなることは、卷末に同家城番の氏名を記せるに就いてこれを知るべし。而して、池田氏の入部は慶長八年なれば、本書の成りしは尠くともこの城番を置れたる時代なりしことを知るべし。

天神山記　一卷　著者藤一雲

此書一二別本あり。或は天神山記と云ひ、或は天神山實錄と云ひ、或は天神山落城記といふ。即ち

その表題は之を異にするも、内容は全く大同小異なりとす。今回刊行の書は天神山記を取り、落城記との異同は、これを欄外に掲げて參照に供することゝせり。而して此書の成りしは、天明七年三月なるも、承應の頃これに關する記錄のありしことは、此書の序文に『在昔承應の頃の記錄の一卷を持傳へしを祖として、實銀を記すもの也』とあるにてこれを知るべし。著者全水山人藤一雲といへる人、その事蹟を詳にせず。その記す所を見るに、浦上宗景を推稱して、武勇猛威の大將と稱し、宇喜多・明石・延原を逆臣と罵り、獅子身中の蟲と嘲けるが如きは、思ふに、浦上氏の遺臣にして、時世を憤慨せるの餘、この書を著はせしものゝ如し。殊に、天神山家臣の氏名を列擧し、〇印△印を以つて、忠邪の別を立てたるが如き、以つて著者の志の存せる所を見るに足る。

此書初に浦上氏の家系を記し、次に宗景が天神山入城の次第を記し、直家の奸計より天神山落城の事に及ぶ。浦上宇喜多兩家記、中國太平記、陰德太平記の記事に比して、最も委曲を盡せるは、蓋著者が浦上氏と密接の關係ありしによるならんか。中にも、下山氏に關する事蹟の如きは、伯耆大山下山神社緣起と相俟つて、下山神社の由來を知るべき希有の史料たるべし。

類纂 虎倉物語　一卷　　編者　塚本吉彥

此書は、虎倉物語虎倉聞書及び津高郡地誌編纂備考書中より、虎倉に關する事項を抄出して、合本したるものなるが故に、名づけて類纂虎倉物語といふ。

虎倉物語は、寬文元年九月虎倉村民又兵衞といふものゝ、天正年間虎倉に於いて自己の見聞せることを記述せるものにして、主として虎倉城主伊賀氏の事蹟、毛利氏と伊賀氏との戰爭、伊賀氏と宇喜多氏との關係等より、岡・長船越中の虎倉城番等の事蹟を記せるものにして、是等の事項を研究するには、實に根本史料に値するものといふべし。

次に虎倉聞書は、津高郡土井村庄屋土井六郎兵衞といふものゝ、虎倉に關する事蹟を物語りしを、某氏の筆記せるものなり。由つて聞書といふなり。その記する所、虎倉物語と略同じ。唯物語になくしてこの書に收めたるは、宇喜多直家の夫人に關する記事にして、作陽誌所載の三浦氏系圖と相俟つて、以つて秀家の所出を明にするを得べき好史料とす。此書何時代に成りしものなるか詳ならずといへども、本書の奧書に、虎倉物語虎倉聞書は、往年大丈軒正義氏の筆記を借用謄寫とあれば、大丈軒時代に、既にこの書のありしを知るべし。大丈軒は池田家の儒臣にして、元祿正德の頃の人なれば、此書の成れる少くともこの以前に係るを知るべし。

次に津高郡地誌編纂備考書は、池田家藩政の頃、この地方に於ける傳說遺聞を錄上せしめたるものにして、伊賀氏の世系、その所領、及びこの地方に關せる戰鬪の狀況、加茂庄官十三流、其他土豪の略歷、及び片山氏所藏の古文書を收めたり。中にはこの古文書には、享保十九年白貢軒主人山脇貞尙の考證を附錄したり。

以上の三書は、いづれも一小地方たる虎倉に關せる記錄なるも、是によりて伊賀氏の盛衰、毛利氏宇喜多氏の關係、地方鄕士の略歷、延いては池田家が浪人取扱の方策をも伺ふべきものにして、いづれも集成書類中の逸品たるべし。

三星軍傳記　五卷　著者　藤原姓某

此書三星軍傳記と名づけたるは、主として美作國勝田郡三星山城主後藤氏が、宇喜多氏の軍と攻戰し、遂に落城に至りし顚末を記せるに由る。本書の序文に、貞享の始乙丑仲春於播府之片田舍藤原の姓某とあれば、以つてこの書の成りし時代と、著者の播州に住せし人なりしを知るべし。然れども、單に藤原姓とのみありて、その實名を詳にせず。而して當時著者が如何なる史料に由りてこ

れを編輯せしか詳ならざるも、本書の序文に、後藤家の臣に菅原の姓江見幽齋と云ふ人ありて、此軍を委しく日記に殘す。西播に於いて見當りたりとあれば、著者が當時この戰爭に參加せしもの丶日記を根據とせることを知らる丶も、惜い哉、この書、散逸して今傳はらず。又著者は、右の如く日記を根據としてこれを記述せるのみならず、古老に就いて遺聞を探りしことも、本書の序文に後藤家の嫡流にして、當時津山に住居せし者に就いてこれを質せしことを記せるに依りて、亦これを知るべし。而して右の日記と古老の遺聞とが、果して信ずべきものなりしか、今これを詳にすることを得ざるも、著者の序文に記述せる所に據れば、古老の語る所幽齋日記に吻合することを記せるを見れば、從つてこの日記と古老の遺聞を根據とせる此書も、亦比較的その眞を傳へたるものなることを知るべし。

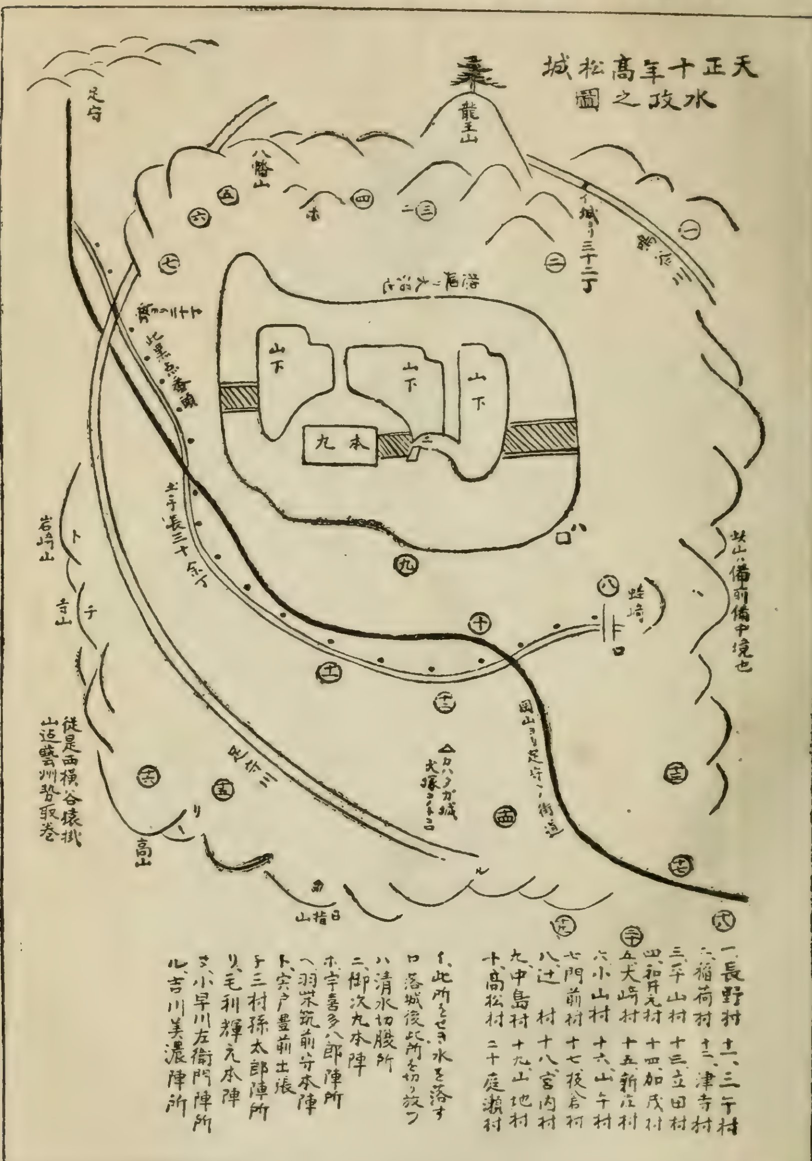
此書もとより三星山城主後藤氏を中心として記せるものなれども、同時にこれに關聯せる東作地方の諸城、及び難波●安東●相馬●植月●原田●有元等東作諸豪の盛衰興亡をも、併せて記せるが故に、一部の三星軍傳記は、やがて美作史の一半を成せるものといふべし。但、己を擧げて他を排するが如きは、此種の戰記類には免れざる所なれば、その取捨は須らく讀者の公平なる判斷に俟つべし。

備前國人佐柿入道　常圓物語　一卷　　著者　村瀨安兵衛

此書、史籍集覧本は高松城攻物語と改題せり。著者佐柿入道は、備前藩士にして、通稱彌左衛門といふ。天正十年親しく高松城攻に從軍し、その遭遇目視せしことを、同藩士村瀨安兵衛に物語りしを、貞享年中安兵衛がこれを記し置けるものあれば、即ち高松水攻の實歷談といふべきものなり。今回刊行せるものは、高取氏所藏本を底本としたるものなり。

高松城水攻古圖

本原圖は帝國大學史料編纂掛の所藏する所にして高松水攻當時の諸軍配置の狀其他を知る上には最も信憑するに足る唯一の古圖なりと謂はる



備前軍記

備前軍記序

此篇也記備前州爭戰之事矣。自應仁而至慶長中焉。蓋源大將軍開府鎌倉。北條氏執兵馬之權而及元亨建武。其間記爭戰之事者。東史平語源平盛衰記。及僧慧珍所錄可覩其大畧也。自室町將軍號令不行海內。四方盡衽金革。於是纔有識其一事者。或罹兵火。或散逸不傳。偶雖存于民間。無可爲證者。方今予所記受諸稗官野史。删其可疑。而徵以神祠佛宇之所存之籍。又稽諸控弦家所傳者。併錄爲五卷。名曰備前軍記。恐有所謬誤。觀者訂之。

安永三年甲午八月二十日

土肥經平識

本目次往々本文中見出しの字句へ相違するものあるも今は原本の儘としたり

備前軍記目錄

卷第一

巻第二

卷第二

卷第四

卷第五

*以下の目次新に入る

備前軍記附錄

▲黑田美濃守職隆*▲戸川肥後守達安▲浮田左京亮忠家▲岡豐前守利勝▲岡越前守▲長船越中守▲花房志摩守正成▲花房助兵衞職之▲明石飛驒守▲明石掃部頭景親▲明石右近宜行▲高取備中▲延原土佐▲江原兵庫▲岡本權之丞▲國富源右衞門▲馬場重介織家▲馬場與平次實職▲中吉與兵衞▲安東少七▲小瀨中務▲稻葉內匠頭▲堀田勘左衞門正利▲平岡石見守重定▲上田土佐▲村山越中▲河田八助。

備前軍記　巻第一

土肥經平著

備前國守護幷赤松家興廢の事

後鳥羽院の朝廷文治元年に、鎌倉右大將賴朝卿に日本惣追捕使を下されしより、諸國に國司の外に守護地頭を置き、逆亂を靜めらる。それより前元曆元年に、梶原平三景時・土肥次郎實平、備前國に下りて守護せし事、或は佐々木三郎盛綱兒島の地を給りて、其氏族來り住せし事共は聞えたれども（飽浦加地倉田等）鎌倉の時誰備前の守護職たりし事未詳。其後京都將軍のはじめ、文和四年に備前國の守護職を赤松律師則祐に賜りし時、其身は播州白旗城にありて、其後浦上掃部助宗隆を備前國三石城に置て當國を治めしむ。應安四年十一月二十九日に則祐白旗城に卒す。其子上總介義則續て國を治む。是も應永四年九月二十日卒す。其子左京大夫滿祐まで三代なりけるに、此滿祐義教將軍をうらむる事ありて逆心し、嘉吉元年六月二十四日京都にて將軍を弑し、播州に歸り白旗城に楯籠りける時、京都より討手として山名修理大夫義理・同相摸守教之・同左衞門佐持豐・細川讃岐守持常等播州に發向して、白旗の城を攻て九月十日落城し、滿祐以下自殺し、赤松家三代にして亡び失せぬ。

山名教之備前國守護の事

嘉吉元年、赤松滿祐を討たる功によりて備前國をば相摸守教之に賜はりければ、其國に下り赤松が殘黨を尋ね捜し、國中を追捕して是を誅し、又降人となる者をば所知を與へて臣とす。小鴨大和守を邑久郡福岡に置て備前國を治めしむ。三石城主たりし浦上四郎宗安（掃部助宗隆子）は白旗城にて赤松と

與に戰死す。其子はいまだ幼若なりしを、其後民間にかくし置きぬ。後に浦上美作守則宗といふ是也。其外松田宇野難波などいふも浪士となりて、國中にかくれ居て時の至るを待ちければ、暫く無異に屬しぬ。しかるに嘉吉三年七月二十八日、故赤松滿祐甥赤松二郎則重西國に漂泊してありしが備中に蜂起し、故の家人を催し集め備前へ打入るべきよし聞えければ、山名相摸守福岡の小鴨大和守に下知して是を討しむ。則重勇士なりけれども俄の集り勢なりければ、一戰に打負け備中の水田にて自害して失にけり。又滿祐が嫡子彥二郎教祐・二男彥五郎則尙は白旗落城の時、滿祐下知してひそかに白旗城を落としけるが、山野に身を隱して道をくらまし南朝へ參り仕へ、左馬助教祐と稱しけるが、文安五年南朝ものこりなく亡びければ、爰をも出て漂泊せしに、其比山名宗全、將軍の御勘氣を蒙て蟄居しければ、此時を幸なりと思ひはかり、細川讃岐守成之を賴みて、教祐・則尙兄弟の者身の科を御免あらば逆臣山名宗全を討て參らすべきよし訴へ申ければ、御免の事ありて播州へ馳下り、かくれ居たる舊臣を驅催して大田垣大炊助等を討て但馬へ押入り、宗全を討んと擬しけるに、宗全是を聞くとひとしく兵を帥ゐて播州へ打出て防戰しければ、忽に赤松兄弟打負て逃去ける。伊勢國司は教祐が緣者たる故是を賴みて暫く寄宿せしが、武家に聞えて教祐誅伐せらる。則尙は兒島へ落行けるを猶敵追懸ければ、其所をも立去て高麗へ押渡り、かの國の王に仕へて處々合戰に功ありて、國王是を感じ次第に昇進すべかりけるを、頻に骸骨を乞て日本に歸り、播州の側に忍び居けるが、此よし洩聞えて京都より討手下りければ、河內國へ逃れけるが終に太子*にて自害し失にける。

次郎法師再赤松家を起す事

文安五年南朝の宮を討奉り、又楠二郎等も戰死して悉く征伐ありし如く見えけれども、猶文安元

*太子現南河内郡磯長村中にあり

年に奪取りし神璽を捧て新帝を立奉り、殘黨集りて南朝を守護し奉りける。爰に故赤松滿祐が家僕石見太郎左衞門といふ者、流浪して諸國にかくれ居けるが、滿祐が子供等までみな殺されて、赤松の家絶えぬる事を深く愁へて思慮を回らし、京都に出て三條右大臣實量の家に便を得てまゐり仕へ、赤松家先祖入道圓心より、代々將軍家へ忠を竭せし事どもことのついでに物語どもなして、再び赤松の家の起らん事を望みければ、三條右府も是を憐みて、嘉吉の滿祐入道が大逆をあがなふ程の忠などあらば、愁訴をとりはからふべしと仰ありければ、石見答て、若南朝に赴て新帝を害し奉り、神璽を奪取て朝廷に返し入れ奉らんにはいかゞと申窺ひければ、右府もげにも然るべからんとおぼして、是をことの次でに武家へ歎き玉ひければ、勅命によるべきよし答へ玉ひける故、やがて奏聞に經られければ、神璽御歸座の事あらば赤松赦免の事仔細あらじと綸命ありければ、是を內々石見に語り給ひけるに、太郎左衞門大に悅で赤松が一族眞島某、其家僕中村彈正等十餘人相議して南朝へ赴き便を得て言上しけるは、主人赤松が一類將軍家に亡ぼされ鬱憤深く候へば、南朝に仕へ奉候。元來將軍家は南帝の朝敵にて候へば、南朝の威光をかり奉て主人の讎將軍家を一度討取り公私の讎を報じ皇居を京都へなし奉らば、其恩賞に赤松の家を立給ひ本領安堵の事を望み候よし實々敷申ける。皇居も吉野の奥地山と申所に最幽かなる御住居なれば、卒爾に御許容あり。實にも亦普廣院將軍は赤松家讎敵まぎれなければ、其臣として宿意を深く思ふべき事なれば、南方へ二心あるまじと御心安く召しつかはれ、月日を經て昵近し奉りければ、間島中村しすましぬと悅びて、長祿元年十二月二日、大雪ふりて靜なる夜寢殿へ忍び入り、一宮をば丹生屋帶刀左衞門同四郎左衞門兄弟討奉り、二宮をば中村彈正討奉り、神璽をも奪ひ得て出けるに、吉野十八鄕の者ども起りて追かけ、丹生屋兄弟・中村彈正を討取り、神璽も取かへして歸りける。其後猶赤松が浪人小寺藤兵衞・間島等計をめぐらし、和州越智といふ者亦鄕民等をかたらひ、明る長祿二年八月に難なく神璽を奪ひ

得て、中村・間島等三條殿へ參り此由を申ければ、將軍へ申し奏聞を經て、八月晦日神璽禁中へかへり入れ奉りければ、叡感斜ならず。諸臣も天下泰平を賀し奉る。さて今度勳功の賞によりて、赤松が浪人願ふ所の赤松次郎法師と云けるを御免を蒙り召出され、加賀半國備前國新田庄出雲國宇賀庄伊勢國高宮保を下し給はる。（櫻雲記には神璽を取返し奉る事長錄三年六月二十二日と云々）此次郎法師の祖父は嘉吉の滿祐が弟にて、伊豫守義雅といふ。兄とゝもに白旗にて生害す。此義雅に九歲の子ありしを、建仁寺の大昌院天隱和尙隱し、養ひて弟子とし、性存坊勝岳といひし。後還俗し時勝といふ。次郎法師は此時勝の子なり。此次郎法師召出されしかば、播州備前所々に隱れ居たりし舊臣ども追々に馳集て、先此度賜りし和氣郡新田庄を取敷べきために、宇野上野入道を大將として兵士七八十人計馳集り、寛正元年六月十九日に三石宿に着陣す。福岡に此事聞えければ、山名の家臣足達庄左衛門尉を首として、三石近く陣取て赤松勢を防ぐ。赤松方は猶國士馳集りて百餘騎になりて戰ひけるに、遂に山名勢打負け、大將足達庄左衛門を赤松が兵難波十郎兵衛行豊討捕り、勝鬨をあげて新田庄へ人數を引取り、其邊和氣村・伊里中村・弓削村・新庄村・吉原村・田土村以上七ヶ村を收めける。其後赤松士此所にありて福岡の山名勢と戰ふ事しば〳〵なりしに、赤松方毎度利を得ければ、次郎法師より諸士へ感狀等を出して其功を賞せられし。其狀ともに今民間に傳へて存するものあり。

赤松政則元服幷備前國へ打入事

寛正三年十一月二十六日、赤松二郎法師十一歲にて元服あり。任官して將軍の御諱の一字を賜り赤松左京大夫政則と名乘る。未若年なれども、威儀禮容すぐれたる生つきにて世に賞美しける。それより程なく、應仁元年の春より細川右京大夫勝元と山名宗全と權をあらそひて、京都に軍起りて諸家立わかれ、兩家に屬して相戰ふ。其時左京大夫政則は十六歲にて、無二の細川方なりしが、赤

松の舊國播州備前へ罷り下り、譜代恩顧の侍を集め其國を切したがへ、大勢を率して上洛すべしと約束して、京都を打立五月十日播州へ着陣し、兵を二手に分て所々の城壘を攻取り、山名が家人を追拂ひ漸く國中を取敷き備前國へ押入けるに、福岡の山名が臣小鴨大和守以下是をきゝ、急ぎ兵をかり集めて六十餘人三石境へ行向て防戰す。赤松左京大夫爰にても兵を二手に分け、一手は自ら大將となりて三石口より攻入り、一手は浦上美作守・宇野上野介を大將として船手より押寄せ、其上に備前國元來赤松の國なりければ、政則入國を悦び民間にかくれし兵士時を得て、鹿田・萱の一族隊長となりて一揆を起し、福岡へ打入り是を攻む。松田權頭も浪人にて居たりしが、打て出で新田の庄をとり固め福岡へ寄せんとす。又此時難波十郎兵衛行豊は小鴨大和守を引出して討取べしと思ひて、十郎兵衛が兄掃部助は大和守が家來にて、此時福岡に居たりしを幸に內通し、何とぞ謀を以て小鴨を引出すべしと言送りければ、掃部助領承し小鴨に謀ていひけるは、爰にて敵をさゝへ給はる事此不勢にては叶候まじ。一先作州へ立越え給ひ、味方を謀し合せて戰ひ給へといさむ。小鴨は內通ありとはしらず、掃部が申所の謀しかるべしとて、郎等少く引連て磐梨郡を經て作州へ行く。十郎兵衛兼て思ひまうけし事なれば、掃部助一族をかたらひ其途中へ出で小鴨を討つ。小鴨は不意を討れて郎等等十餘人討死す。されども大和は覺えある士なりければ、度々返し合せては戰ひ戰ひては引取して、難なく美作へ落行ける。福岡に殘りし山名士どもは、鹿田・萱が一族共攻入て討取ければ、左京大夫政則思ふまゝに打入り、時日をうつさず備前國を取敷き、國侍どもの此度の勳功を正されけるに、鹿田・萱の一族は福岡を攻取り山名侍等を討取る事、全く己が功也といふ。又難波掃部助・同十郎兵衛兄弟・沼田越中入道は、小鴨を謀を以て引出したる故に即時に福岡をも攻取たれば、其功己にありと爭ひたるを、政則是を聞き、ともに是を譽て恩賞をあたへ、其外勳功の侍に褒美(ホウビ)どもありて、昔のごとく三石城を築て浦上則宗を置き守護代とし、松田權守元隆も以前のごとく居福鄉

を領して八幡山（一に富山といふ。）の城を築て是に置て、備中を押へ國中を治め、是より作州へ打入べき評議せし所へ、京都細川右京大夫勝元より飛脚到來して、京都の軍甚だ急なる間早々上洛して加勢あるべきよし申來りければ、備前の留守居に浦上則宗・松田元隆等を置て、左京大夫政則は播州備前兩國の仕置大略申附て早速福岡を打立ち、五月二十五日上洛ありて細川勝元に加勢し、公方の花御所を警固して在陣ある。

備前勢京都軍の事

應仁元年六月、京都東軍の族細川備中守勝久一條大宮の館を、山名相摸守教之是を攻む。赤松左京大夫上洛の初なれば、其後詰として山名と戰ふ。赤松勢荒手の勢にて力戰し、依藤豐後守は敵に矢を射立られながら、それをも不ㇾ拔山名常陸介を討取り、明石越前守は片山備前を討取り、其外浦上・小寺等も高名して山名の兵二十四人赤松が手へ討取て、忽相摸守敗北す。同月山名の人數上洛すと風聞ありければ、政則下知して備前國の海陸にて防ぎ留べしと言やりて、其設をなすうちに山名勢播磨路を通りて上洛する由聞えければ、備前勢跡を追て馳せ上り、京都よりも浦上・宇野・明石・依藤・秋庭等を差下し、攝州にて山名勢を切崩して備前の勢は國に歸けるが、東方細川軍猶難義のよし備前に聞えければ、今度は守護代浦上則宗其勢七百餘人を率して八月朔日三石城を打立て、同七日京都に到着して大宮の細川が陣に入らんと五條通まで進みけれども、西軍さゝへて通路なりがたく、三十三間堂の脇より谷越に山科を通り、岩倉に陣取けるに、翌八日爰にも山名が軍を進めてさゝへけるを、浦上粉骨を盡して相戰ひ南禪寺に火をかけゝるに、折節風はげしくて民家に移る。其煙のまぎれに浦上爰を切ぬけ神樂岡を過ぎ、御靈口より細川の東軍に入て、左京大夫の陣に加りて主君に謁しける。其後、又松田權頭元隆にも催促ありければ、松田次郎左衛門に備前勢をつけて同

十月さし登せ三條殿を警固す。此次郎左衞門は以前より公方へも御目見え申ける故、此度も御前にめして合戰の次第ども仰有けるに、次郎左衞門命を捨て一方をば相防ぐべきよしいさぎよく御うけを申ければ、則御盃を賜りて罷立けるが、其日相國寺の戰、山名が軍鋒先甚鋭くして當りがたく、細川六郎も討死すれば、松田が勢も是に加り爰をかぎりと戰ひ、今朝公方の御前にて言ひしにたがはず二郎左衞門力戰して終に討死したりけるを、皆人是を感じける。是より後日々夜々京中の合戰絶ゆる事なかりしかども、記されしものなく、まして備前侍どもの戰功聞傳へしことなし。されども左京大夫政則、文明のはじめより侍所にて京都の所司をつかさどり、浦上遠江守則宗所司代たりければ、後花園上皇崩御、文明三年悲田寺に御葬送の時も、浦上則宗三千の兵を率して警固をなし事などありて、赤松家威勢ありて事を務め、拔群なる事あるべけれども、兵亂の時なれば更に記せる所とてなし。かくて文明五年三月九日西軍の大將山名右衞門佐入道宗全病死し、同五月十一日東軍の管領細川右京大夫勝元病死ありければ、其後ははかばかしき戰もなく、同年十二月十九日公方義政公隱居ましまし、若君義尙公御元服有り、將軍宣下ありて都も無異に復しける。

赤松政則播州歸國幷備前一宮社參の事

去る應仁元年、政則備前へ打入り國を取治められし時、直に作州へも打入るべしと議したれども、京都の軍急にて上洛ありしが、同年六月宇野入道・太田三郎等作州へ亂入して、山名の兵と戰けれども利なくして引返す。續きて作州の山名勢過半京都の留守なる所を見濟し、中村五郎左衞門國侍をかたらひ討入て所々城々を攻とりける。京都にて政則是を聞き、一族なりける平岡民部大輔をさし下し、中村に合力して働ける程に、文明三年の頃までに作州を取敷ければ、播磨備前三ケ國大概元のごとく赤松の領國となりけり。かくて京都の軍もはてければ、文明九年政則も播州小鹽に歸

城ありて三ヶ國の政道をなし、文明十二年には小鹽より備前に至り、當國の一宮吉備津宮へ參詣ある。其行列の隨兵の衣服馬具までも甚美麗をつくせり。奉幣事終て歸路には福岡に止宿あり、翌日は三石城にて浦上饗膳を設く。夫より小鹽へ歸城なり。政則は侍所をうけたまはり京都の所司なれ共、近年在國あれば家臣浦上美作守則宗それにかはり、所司代を勉て在京せしはどに、備前國中の政事は一向に松田權頭元隆一人して執行、西備前御野郡津高郡赤坂郡上道郡等は己が所領のごとくして、年貢等を我城下富山又金川に納め、諸社諸寺領ども心の儘に申附たり。夫故其頃松田が判形の寄附狀とても今も寺社に殘るもの有り。此權頭元隆は、去る文明五年富山の城にて病死す。是を津島村の福隆寺に葬る。松田代々日蓮宗を崇信しける故に此の寺を日蓮宗に改め、元隆か法名妙善といふ故に、是を寺號として妙善寺と改むといへり。

一說には、妙善は元隆が母の法名ともいふ。按に律師則祐の道號を妙善といふ。然れば元隆幷母の法名には稱すべからず。若是より以前に則祐の爲に寺號を妙善寺と改めけるにや、いかゞ覺束なし。

元隆が嫡子松田左近將監元成家を續て、父が時のごとく專ら備前の國政をとり、西備前を領とし我威をふるひける。其上自立の心ざしもありける故にや、今迄の居城富山は、西國往還の所に近き地にて要害よろしからずとて、津高郡金川の城にうつる。爰にも亦寺を建て妙國寺と號し、元成が弟松田元滿を出家させ住職として、是を花光院と稱し、いよ〳〵日蓮宗を尊信しける。

松田左近將監赤松に叛く事

文明十五年、松田元成が備前の國政餘り過分に振舞ひ、又國中過半押領せし事を大守政則惡みて、在所を改易すべきと小鹽の長臣どもに內談ありしに、是を元成傳へ聞て、元成、我備前を過半

押領するといふにはあらず。兵粮軍役の用に費すのみ。是を返すべしとあらば勿論の事也。又伊福郷に於ては軍功の賞に鎌倉の時に給はりたれば異議あるまじ。如此の沙汰ある事とて、事を左右によせて吾を亡さるべきの企と覺ゆれば此上は力及ばず、存亡を一戰に極むべしとて、金川城に猶要害を構ふ。もとより此山は谷ふかく山岳峙ち、東麓に大川を帶て松栢茂りて堅固の城地なるに、山上に櫓を上げ壁を付け陣屋を作りならべ、備前半國の人數を集めて是に楯籠る。松田が一族には元成が嫡子孫治郎元勝・元成弟惣右衞門元親（親秀イ）・其弟花光院元滿等十餘輩、家臣には伊賀修理亮・藤田・佐藤・大村・横井・宇垣等、其勢三百餘騎と到着に記しける。此よし同七月播州小鹽に聞えければ、當時の三石城主浦上紀　郎則國に是を討べきよし政則命じければ、則國小鹽に勢揃ひし三石城に歸り、猶勢を集めて福岡に着陣す。松田元成金川にて是を聞き、合力の勢を求んために藝州嚴島參詣と稱して備後國へ立越え、山名又次郎俊豊は赤松が敵なれば是に謁して、本備前は山名の御分國なり。此度赤松某を打んとす。此節御合力御加勢あらば、備前一國を切取り御旗下に參るべしと申ければ、俊豊兼て望む所なれば早速に許容し、近日に備前へ發向すべきよし返答あれば、松田大きに悅び其約束をなして金川に歸り、猶近國の勢を集め兵粮をたくはへ、防禦の用意頻なり。又福岡よりも松田が領分へ忍び間者を入置けるが、山名大勢にて備後より出て松田に加勢するよし聞えければ、浦上則國諸將と評議しけるは、今金川へ押寄て攻むとも、若長陣に及ばゞ備後の加勢來りて後詰せばゆゝ敷大事に及ぶべし。所詮當地福岡に要害を構へ備前備中の勢を居ながら引請て一戰なし、是を切崩して後直に金川に到り、松田を亡さんにはしかじと有ければ、何れも先づ事の易きにしたがひ、此議に同じて福岡の川中の島山を本城に構て要害をなしける。元來此城地は小鴨大和守在住の時、城壘を堅固にまうけて無双の要害なり。先東西に大河流て、其中の島山を本城として櫓をあげ屏をかけたり。此度は大軍の籠城の事なれば近邊の民屋一千餘宇を構の中に取入れ、その外

備前文明乱記には美作入道とは本郷との間に「舍弟三河守・同新右衛門尉・同左京亮・三吉太兵衛・同和泉守・杉原三郎・木梨遠江守」なる人本書「舍弟同遠江守一とあるは恐らくは上の脱文より生ぜし誤なるべし

に堀を二重三重にほり、川水をせき入れたれば究竟の要害たり。楯籠る人々には、浦上紀三郎則國・同伯耆守基景・同豊前守兄弟三人・基景が子同六郎次郎・同與三左衛門・櫛橋豊後守・同彌五郎・藥師寺四郎左衛門・同山城守・同二郎左衛門・延命寺六郎左衛門・　同小六・　難波掃部介・　同十郎兵衛・同四郎左衛門・同八郎二郎・山田平左衛門・同四郎左衛門・有松右京進・同與七・同彥八・裳掛（ムシアケ）伊賀守・是本筑後守・同孫二郎・津島修理亮・同三郎左衛門・小串藤左衛門・中村二郎右衛門・大島縫殿助・沼田與一郎・延原八郎左衛門・兒島太郎左衛門・山守八郎左衛門・內藤與左衛門・市村隼人佐・足立新三郎・藤田新兵衛・志方孫六・同藤兵衛・横山助五郎・靑津九郎左衛門・矢田二郎左衛門・伏見藤左衛門・本鄉孫九郎・　片岡孫左衛門・額田十郎左衛門・彌延九郎左衛門・其子新九郎・大工村八郎三郎・同富太郎・最所彈正左衛門・目黑新右衛門・奈島兵庫介・中村三郎兵衛、其外備前播磨兩國の軍勢都合二千餘騎とぞ聞えし。川上板屋瀨（吉井村大内村の間の瀨を板屋の瀨といふよし吉井村石津社記に見えたり）の東には、長船右京亮・同左京進香々登新田の野伏を差副て守らしむ。川下津坂口の瀨（一本に古津瀨）をば、坂口五ヶ庄六ヶ鄉の野伏是を堅めて敵のよするを待居たり。松田方には是を聞て、さらば福岡に押寄せ攻べしとて、同九月下旬金川の城を出陣す。松田左近將監元成を大將として、嫡子孫次郎元勝・元成が弟惣右衛門元親・其弟花光院元滿、家臣には宮內備中守・藤田備前・同掃部介・其子同次郎・同姓大炊介・同駿河守・其子同民部大輔・同修理亮・同孫四郎・同三河守・同越中守・同又三郎・伊賀修理亮（津高郡鍋谷城主）佐藤式部・大村彌五郎等一千八百餘騎は、福岡よりは西北に當りて吉井村の山に陣を取る。備中勢には上野土佐守・同豊前守・同三河守・同肥前守（按に上野は上月なるべしされども本書の儘に書す又備中の人といへど兒島の人なるべし四巻に委し）庄伊豆守・其子四郎次郎（右衛門四郎イ）・多喜川・西川・西・小坂・高木・東條等、其勢都合一千三百餘騎、是は吉井村の北の山下に陣を取り、備後の山名に兼て約束をなし置きければ、九月二十六日山名亦次郎俊豊備後國分寺を出陣す。相從ふ人々には、大田垣美作入道・*舍弟同遠江守・本鄉藤左衛門・山內新左衛門・同下野守・多賀新兵衛・滑良兵庫助・同四郎太郎・三河內河內守・　金谷山城

*一、列本文明亂記には「竹原則光、備中國には云々」別本文明亂記には「竹原則光備中守云々」とあり猶研究を要す

*二、高木は馬木を正しとすべし

守。花栗播磨守。湯川備中守。鍛冶屋五郎左衛門。和氣筑前守。安田掃部介。小越彈正左衛門尉。由谷加賀守。江田藏人佐(伊藏人佐イ)。同與三左衛門。涌喜上野介。敷名備中守。下見三郎。栗原刑部左衛門尉。吉原藤左衛門尉。田尻左馬允(森イ)。上山出雲守。板倉新左衛門等也。其外安藝國の小早川等に、草井和泉守。*一竹原備中守。毛利太郎。赤川和泉守、出雲國には高木*二惣兵衛、伯耆國には小鴨二郎四郎。同掃部亮、石見國には周布。福屋等加勢して、其勢都合三千餘騎、十一月七日に備前國に着陣し、是も吉井の西檜原に陣取り、檜原の東南の小山を本陣とす(是を火鉢城といふ。)是等の大勢福岡の川より西に陣しけるを見て、浦上方には兼て敵を福岡へ引請て打取べしと議したる謀に相違し、松田が大軍に恐れて軍を出さず要害にたてこもる。又松田方も大軍なれども福岡の城大川を隔て堅固なれば、卒爾に攻むべき便なくて、たがひに陣取たる計にて合戰もなく、十月も十一月も對陣してむなしくすぎにけり。

福岡合戰の事

福岡の要害堅固なれば、松田勢大軍なれども攻がたければ、先上の板屋が瀨、下の古津瀨を渡して一戰をなすべしと評定して、十一月二十二日上の松田勢の先手と下の檜原の山名勢が先手と、上下の瀨を渡し板屋が瀨の敵を打拂ひ、長船右京亮が家其外民屋に火をかけて、一宇も殘らず放火して輕く引取ける。下の古津の瀨の渡にても野伏ども數十人討捕て引取ける。かくて浦上紀三郎が士に檜村與三兵衛。同又四郎といふ兄弟の者あり。當時松田元成がもとに來り奉公して、今度も軍の供して吉井の陣中に有けるが、松田元成ひそかに檜村兄弟を近づけ、汝等浦上が方へ歸り行て奉公して、透間を見て紀三郎を討ち城に火をかくべし。左あらば過分の恩賞望にまかすべしと言聞せければ、檜村兄弟是を領承して、二人の者ども吾下の郎等を引連れ、吉井を出て浦上が陣へ行て、再び奉公の事を願ひて許容あれば、福岡に在陣して隙をうかゞへども、紀三郎を討べき便宜もなくて有

けるに、十一月二十二日上下の瀬を渡して合戰ありけるをよき時節と考へ、先城中に火をかけ、其さわぎにより　紀三郎を討べしと兄弟相計り、二十三日の夜に入り風も強く吹ければ、是を幸と城中に火をつけゝれば、忽に焔上り火の粉諸方へとび散り、陣や〳〵に火うつり燒にけり。松田方には是ぞ相圖の火なりと心得、松田も山陣を下り、其外も川を越て福岡の城へひし〳〵と攻かゝる。城中には銘々の持口を破られじと、衆を勵して爰を專どゝふせぎ戰ひ、櫓よりは指詰引詰射る矢、夜中なれども火の光白晝のごとくなればあだ矢は更になく、攻入者ども手負討死多くて攻入りかねて猶豫しける所を、城中より見すまして浦上三左衞門其子與三、今こそ時分はよきと士卒を下知して城戸をひらき突て出、山名勢を四方八方へ追拂ひければ、一支もせず我先にと引取り、川を越てみな〳〵本の陣にと歸りける。其紛れに楢原兄弟は、則國をいかにもして討べしと覗けれども叶はず。兎角する中に夜も明けゝればかねての謀も空しくなりし上に、其夜の火事を諸將相互に糺明をとげゝるに、此楢村與三兵衞兄弟を人もあやしみければ、其下人を密にとらへて尋ねければ、其主人の與三兵衞が所爲なりと始よりの密謀を一々告ければ、其事顯れ早速楢村兄弟を捕へて糺問に及べば、あらはに白狀しける故、兄弟ともに福岡の城下に磔にかけられける。かゝる事のみにて、はか〳〵敷一戰もなく日を送りける。十二月十三日庄伊豆守元資が手の者ども、野伏の體にして三百人計富岡といふ小山の北の陰より打出たり。浦上紀三郎が手の者城中より是を見て、此度一度もはか〳〵敷軍せねば、願ふ所なりとて川を越て無二無三に切て懸る。待設し事なれば兩方入亂れて相戰ふ。寄手に細屋七郎左衞門・白賀新兵衞討たるれば、城方にも岸野五郎左衞門討死して、暫く虎口をくつろげ守り居たる處に、庄伊豆守が悴右衞門四郎手勢五百計にて富岡山の南より討て出けるに、城方楢橋彌五郎・岩間孫四郎・難波十郎兵衞・沼田與市・延原八郎左衞門を始として、大勢右衞門四郎を引包み討捕んと進み戰ふ。伊豆守是を見て、右衞門四郎若武者にて麁忽の軍して討死もすべ

し。是を諫て伴ひ歸れとて、法性寺掃部助といふものを使として言やりければ、右衞門四郎是を聞き、仰にてはあれど戰場にて侍の討死は尋常の事、いかでかおめ〳〵と引退くやうやあると、楯の表へすゝみ出で、備中國の住人庄右衞門四郎なりと名乘て、二間柄の鎗を以て面もふらず突て懸る。沼田與市兵衞・岩間孫四郎・目黑次郎左衞門・弟與一左衞門以下庄を中に取込火花をちらし攻め戰ふ。目黑二郞左衞門は臑當を突拔れ、弟與一左衞門は弓手の肩を突れながら、少しもひるまず庄右衞門四郎を討取りけり。法性寺掃部助は右衞門四郎が働きを制すといへども、用ずして打死しければ立も歸られず、庄と同じく進み戰て延原右京進と渡り合ひ、あくまで戰ひ一足も引ず討死す。福屋藤四郎は延原彥八と渡り合ひ、鑓を捨て引組みけるに、延原福屋を組臥せ刀を內兜と胸板とに二刀さす。福屋さゝれながら下より、我は石見國の住人福屋藤四郎といふ者なり。一足も引ず爰に討死したりと言傳へて給はれと、是を最期の言葉にて首を捕られにけり。是にて兩方人馬の足を休めて物わかれになるべき所に、福岡城內より若武者二十騎計此勝負に逢はざるは無念なりとて掛出ける。備中勢も庄伊豆守を始として、是を眞中に取込め討て捕んとせし所に、浦上伯耆守城より出て大音上げて、無益の戰はや引上げよと下知して、初の勢も後の勢も一つに引まとひて引入れけるに、庄が兵士敵の引を追て、城へ付入にして攻め落せと進んで追行きければ、城兵返し合せ返し合せ相戰て引取りける。備中勢嚴しく追討ちければ、彌延九郎左衞門・井原孫右衞門・內藤四郎兵衞・福井小次郎、其外紀三郎が若黨伯耆守が若黨ども已上七十餘人討死す。浦上彌三郎も數ヶ所疵を蒙て漸く引取ける。其外疵を蒙むるものかぞふるに遑あらず。中にも福井小次郎といふもの、其父は福井源左衞門といひて京家の侍なりしが、いかなる仔細ありてや此國に下り住ける。其時此小次郎四歲なりしを引具し、其母をば京に殘し置きける。とし經て小次郎今年二十一歲になりけるをともなひて、こゝに籠城しけるが、今日のせり合に父子とも出で戰て、引取る時に及で親と子押隔て

られ、小次郎城に歸りて見るに親の源左衞門見えざれば、扨は討死せしと思ひ又取てかへし、追來る敵の大勢に向ひ福井小次郎と名乘つて、向ふ敵竪ざま横ざま戰て父を尋ねけれども行逢ねば、討死せんと死物狂に戰けるを、家の子やう〳〵肩に引かけて城中に入りけるに、淺手深手二十六ヶ所負て終に空しくなりにける。父源左衞門は又小次郎が行衞を尋ねかねて引取けるに、かく討死せしを聞き大になげき、陣所に入て箱のうちに書殘しけるものゝあるを見れば、都の親類どもへ此度の戰の事ども書きのべ、殊に母のもとへ書置きし文をみれば、幼少より副奉ることもなく、心計は通へども年を經てまみえ候事もなく、夢の浮橋絶て後御歎き有らんとこそ心に掛り侍れ。よしそれもあだし世のほどなき思召、慰め給へと細々と書て、文の奥に

生れこしおやこの契りいかなれは同し世にたに隔てはつらん

と書留ける。みな人是を聞て、けふの討死は思ひまうけし心にやといとゞ哀を催しける。かくて山名亦次郎後豐富國着陣の時より、但馬國へ飛脚を立て親父右衞門佐方へと申遣しけるは、此時但州より播州へ御發向あるべし。さあらば御勝利有るべし。又其事御延引あらば敵播州作州牒し合せて働き申べし。左あらば味方大に難儀たるべしと再三言送りけれども、上意を得ずしてはいかゞと、右衞門佐但馬の丸山の城に有て働き出ることなし。又福岡の城浦上紀三郎よりは赤松政則へ注進して、備中備後の大勢にて三方を取圍み候。其上阿波の大西備後の雨宮よりも近日敵に加勢として罷り向ふと風聞候。事實ならば以の外大事にて候間、美作勢をさし越させ赤坂郡鳥取邊へ打て出候はゞ、敵攻るに堪べからじと度々言遣しけれども、政則へは披露にも及ばず、其意を得たると計にて日を送りけるが、此頃宇野下野守浦上掃部助を福岡へさし向られけるよし聞えし計にて、是も途中に陣して福岡へは來らず。夫のみならず政則は本の知行但馬國朝來郡を打取べしとの企ありて、自ら軍を率ゐて十二月十六日小鹽を立て、同十八日大賀庄に着陣ある。此よしを福岡に聞て力を失ひ

此城を持ちあぐみてぞ籠りけるが、政則の但馬表の軍も利あらずして、小鹽へ引返されければ、宇野・浦上も片上より引返し、播州へ歸りけると福岡へ聞えて、城中愈言語を絕し、色を失ひてぞ居たりける。

文明十六年正月二日福岡合戰の事

かくて文明十五年月迫に及で、福岡後詰として美作國小瀨彈正忠・大河原彈正左衛門を大將として、一千餘騎備前美作の境大松山に陣を取ると聞えて、福岡にも少し色を直しける。松田方には是を聞て、松田孫次郎を大將として金川城に楯籠り、作州の勢をさゝへんとす。又福岡方よりは明石六郎兵衛新田庄の野伏を率ゐて日笠村に陣をとり、作州勢に力を合す。又松田方の松田孫四郎・佐藤式部丞・楢原・堤・小野田等、吉岡の南の山に陣取り、長船右京亮が館の跡の古城を取て播州の通路をさし塞ぎ、福岡より浦上豐前守を大將として熊山へ人數をあげ、大篝を燒て陣取る。かくのごとく兩陣より手配りして有けるが、十二月二十九日松田が陣より吉井の山を下り、川を渡し東をさして人數を出す。何の爲とはしらねども福岡勢打て出て、遠矢射かけ一戰をなさんとしけるが、松田勢いかゞ思ひけん一戰にも不ㇾ及引取ければ、福岡勢もしたはずして引取ける。明れば文明十六年正月二日、軍の首途の祝せんとて吉井川の東よりも西よりも人數を出して矢軍をし、夕日になるまで迫合て引退く。同六日城より見れば、山名勢の陣騷ぐと見えしが、やがて人數を出し城近く寄せ來る。福岡に是を待うけ野伏を出し矢軍して引退きけれ共、寄手は猶引取らず、外堀の河原へ押寄せ三百計の勢にてひかへたり。城中より藥師寺四郞左衛門貴能これを見て、今度は我一備にて一軍せんと城戶をひらきて叫てかゝれば、山名勢追捲られて引退く。時に和智左衛門下知して、きたなし者共何くへ引くぞ、こゝにて死よとよばゝりて眞先に取りて返し戰ひければ、是にいさめられて我劣ら

じと引返し切掛れば、城兵追立らる。藥師寺四郎左衛門白柄の長刀取直し、貴能是にあるぞ。返せ〱と下知して切掛りければ、又山名勢引色になる處に、大田垣美作入道・和氣筑前守・山内新左衛門・三吉和泉守馬に乘られ士卒を下知して、備後國を出しより骸を戰場にさらし、再び本國へは歸るべしとは思はざりし。引な者共とて槍長刀を引さげ進む。内にも筑前守・和泉守先を爭ひて切りかゝりければ、藥師寺等不ㇾ覺あとに引退く所に、藥師寺も敵と同じく士卒をいさめ、貴能爰にて討死するぞ、返せ〱と大音上て攻戰ふ。藥師寺彌四郎等、貴能を討せじとて取て返し〱て攻戰ひ津坂の山の麓より城の堀際まで、敵味方二三千の人數にて追つ返しつ戰ひしは誠に目醒しくぞ見えし。かゝる處に、山名勢の中より福屋九郎右衛門と名乘て、黑革威の腹卷に鍬形打たる甲の緒をしめ、五尺計なる太刀の鍔本まで血に成たるを以て藥師寺貴能に切て掛る。貴能長刀を以て渡り合ひ追つ返しつ戰けるが、貴能が家來助け來りて終に福屋ぞ討れにける。此勢ひに山名勢を追まくりけれ共、藥師寺貴能も戰つかれて既にあやふく見えければ、同二郎左衛門則能、貴能討すなものどもとて討てかゝれば、額田十郎左衛門・片岡孫左衛門も則能と同じく進みてきびしく戰て一足も退かず、三人ながら枕をならべて討死す。是に山名勢も切立らるゝ所に、江田・滑良・板倉等堀の水上を渡して中を遮て切り懸りけるに、又城兵まくり立られ崩れかゝる所に、櫛橋豐後守子息彌五郎を伴ひ、其身は黑革の腹卷に同毛の五枚兜に白熊黑熊を合せたる引まはしつけ、二間柄の鎗を持て眞先に進み大音聲をあげて、きたなし者共、山名は元來所領の敵也。本望の合戰なるぞ皆討死せよと喚はれば、士卒もふみ留り相戰ふ。彌五郎は弓手の脇に控へたり。山名士三吉左京允・滑良四郎太郎福田九郎左衛門衆に進て戰ひ、滑良と豐後守と渡り合ふ。滑良は大力の若武者にて、大太刀持て横さまに討ちけるを鎗にてうけ、餘る太刀櫛橋が左の腕を竪さまに切さかれ既に危く見えし所に、彌五郎走出て切合ひ郎等も落合ければ、終に滑良を討取ける。彌五郎は猶〻戰ひ三吉左京允に渡り合

ふ。三吉鎗を目釘本より切折られ兜の鉢をも二ヶ所切破られ、難波四郎左衞門が中差にて射ける矢内甲にあたりてこらへず、小膝を打て終に彌五郎に頭をとられける。福田九郎左衞門は志方孫六と戰ひ孫六が頭を取る。其外我も〳〵と戰て何れ勝負も見ざりけるが、山名勢次第にかさみ松田勢も討てかゝれば、城兵大勢にとりこめられて討たるべく見えければ、浦上三左衞門・息同與三父子三百計の勢を以て助け來る。大將紀三郎則國も是を見て、大將の討死爰なりと鎗提て飛で出るを同伯耆守強て押留め、此合戰今日に限るべからじ、麁忽の討死無益也と堅く制して出さずして、則國の侍內山彌五郎・下山彈正とて手利の精兵のありけるを、さしつめ引つめ寄手を射させける。松田が勢の中にも松田惣右衞門元親(親秀イ)と矢印書たる矢にて味方多く射られければ、此元親(親秀イ)を目がけて射出しけるに、惣右衞門が射る矢下山彈正が胸板に中り、矢先三寸計押付へ射出しければ其儘たふれ死にけり。內山其所を見すまし上差をつがひて惣右衞門を射る。あやまたず射向の袖のはづれに箆深に射込めば是も空しくなりにける。かく戰ひくらして山名勢も松田勢も引取ければ、福岡勢も兵を入て城を守りける。今日藥師寺二郎左衞門則能・額田十郎左衞門・片岡孫左衞門枕をならべ討死せしは覺悟せしことにてぞ有し。この頃此三人陣屋に寄合て藥師寺が言けるは、倩此合戰の始終を案ずるに、一定味方討負ぬと覺ゆるぞ。其故は松田は元來當國の者也。其上備中勢備後の山名勢合力して大勢也。味方は去年八月より籠城してあれども、播州より加勢の一騎も下らず。剰へ政則公眞弓峠の合戰に討負、僅の勢にて小鹽籠城と聞ゆれば、とてもはか〴〵敷事もなく討死すべき身なり。それに生殘り、赤松家の果を見んも物憂ければ一番に討死して名を後代に殘し、先祖の忠節をも顯しなんこそせめての事なれば、此戰に討死をば極めしと語りければ、額田も片岡も是に同じて、誰もさこそ思へ、さらば同時に死をともに極めんと堅く契り置けるとぞ。かくて此正月六日戰の有けるに、今日を其期と三人いひ語らひけるが、藥師寺則能陣所を出るとて、只今敵の手に渡す頸なれば最期の對

面なりとて、鏡に向ひ打笑ひて打立ける。額田はとし頃岡本筑後守にすぐれてねんごろなりければ吾討死せば一子又三郎を頼む也。一所にあらばともに討死すべしと別の備に置ぬるよしを言置けるとぞ。片岡は家來に向て、今日の戰には一定討死すべく覺ゆるなり。打込の戰なれば戰死の時何をしるしに吾討死の死骸とも見分がたかるべし。是をしるしに尋ねよとて、紙よりにて左の二の腕を二重に結て打立けるが、其詞にたがはず枕をならべ討死せしかば、あはれ勇士なりけりと皆をしみあへりける。

福岡落城の事

浦上美作守則宗は年來京都諸司代にて在京してありけるが、是を呼下さんとて福岡より飛脚を以て注進しければ、正月中旬則京都を立て東播磨まで下着しけるが、いかなる仔細ありてか主従の間隙出來て赤松に矛盾して軍勢を催促す。故に三石へは歸らずして東條に在陣す。其威勢つよければ國中則宗の陣へ馳附、赤松の一族たる高松の城主宇野下野守迄も是に馳加はる。小鹽の赤松政則へ隨從する者とては、宇野刑部少輔・小倉肥前守・其子少四郎・藥師寺四郎等僅殘りて皆落失せける。其上在田・廣岡も下野守に同心して相背くよし浮說すれば、政則とても此城に有て運もひらかれまじ、一先此城を引退上京して上意を伺ひ多勢を催し合戰すべしとて、同正月二十一日小鹽の城を出て攝州へ落られける。此事福岡へ聞えければ、城中赤松方・浦上方とて二ツになり、誰敵になるべしともしれずさわぎける。先櫛橋・藥師寺等は、去年冬より當城に籠り一命を投て軍するも、みな政則を世にあらせ奉らん爲にてこそあれ。今は專なき籠城なれば、此城出て政則の往末を尋ね奉る外はなしと落支度するも尤なり。紀三郎則國は此由どもを聞き、櫛橋・藥師寺兩人此城を落なば誰を賴みて合戰をなすべき。又さあればとて此城を去て何くにありて本意を達せん。所詮其兩人と刺違へ死を

極むるより外なしと、手の者ども引具し、夜廻りの體にて出立たるを、伯耆守基景是を見て申けるは、目の前にある大敵を閣きて同志討して大將の死をなす事、末代までの恥辱此上もなき不覺なりと堅く制してとゞめければ、力及ばず留りながら、則國猶死を極めて、千人萬人も落ちば落ちよかし。此負軍は我一人が恥也と、もとより覺悟の事なればさらば吾一人爰に切腹せんと刀をぬく所を基景すがり留め、こは狂氣とや申べき。よく〳〵心得給へ。此合戰にて事散ずべくば覺悟あるも尤といふべし。既に則宗播州にゐまして大勢是に屬する事なれば、爰を一先引取り身を全くして則宗に屬し、一方の大將をうけて其時に死を輕くして軍をなさば、など今の恥辱を雪ぎたまはざらん。其遠慮もなくかりそめの恥を忍びかねて死をなしたまはば、本意をとげざる上に後代に嘲弄を殘し給はん。よく〳〵考へ給へと言を盡して諫めければ、則國其理に服し力及ばず、正月二十四日の夜半ばかりに伯耆守を伴ひ、城を出でて下野守が居たりし高田の城へぞ落行きける。櫛橋・藥師寺は舟に乘りて政則の行衞を尋ねて四國の方へぞ落行きける。正月二十五日には昨夜浦上勢福岡の城退散せしを聞て、松田が兵共城に押寄てみれば敵の一人もなければ、勝どきをあげて即時に城を燒拂ひ其邊を放火亂妨し、浦上勢の集りし所々をば追落して、備中勢備後の山名勢其外近國の勢どもは、皆己が國々へよろこびを唱へて歸りける。松田勢は勝ほこりて、此勢ひに三石の城を攻取らんと猶陣を張て居たりけり。

松田元成討死の事

松田左近將監元成は金川へも歸らず、備前一國を取敷かんと兵を進め、先三石城を攻んとす。三石よりは片上伊部の邊の城々に兵をこめて是を防ぎ戰ふ。或日吉井川の東天王原にて戰ひしが、松田打負て敗軍し、諸勢にげちりて松田元成唯一騎になりて金川へ引取らんとしけるを、浦上勢しきり

に追かくれば引かへしてしばし戰て又引取けれども、深手淺手多く負たればせん方なく、磐梨郡矢上村の山の池といふ所にて自害して失にけり。松田が侍に大村出雲といふもの、雲州尼子家へ使に行て今日歸りけるに、元成が自害して臥たる所へ逢て、是を悔れども其甲斐なくて出雲も同じく腹切て死にけり。此事金川へ聞えければ、元成が子松田元勝こゝに來り其死骸を葬り、一寺を此所に建立し立雲山大乘寺といふ。大村出雲をも元成が墓の傍に葬りけり。

大乘寺は寛文年中廢して、元成が墓と出雲が墓とは池に殘れり。

政則再播州下向の事

政則播州を退き京都へ登り、將軍家へ浦上が不臣なる事を訴へ、軍勢乞ひあつめ二月半に播州へ下り、別所大藏少輔則治を先手として播州を取治め、白旗の城を山名勢是をとりて栖籠りしを追落しければ、浦上美作守高田の宇野下野守等も降參しければ、政則再ひ小鹽城へかへり住して播州備前等を治め、浦上則宗・同紀三郎則國・宇野下野守三人の老臣ことを取りて、しばらく靜謐したりける。

政則卒去の事

明應三年四月二十五日、赤松左京大夫政則播州小鹽[*一]の城に病死す。時に四十三歳なり。法名松泉院無等性雲といふ（一說に明應二年と言ふ。又五年といふ共に非なるべし。又松泉院な性善院に作る。本文のは書寫山の過去帳に載せたる所に據る。）しかるに女子ありて男子なき故、七條藏人元久の子才松丸とて當年七歳なるを養子とす（一說に三才といふ。）是は元祖圓心の子範資[*二]、範資の子敎政、敎政の子元久、元久の子此才松丸也。其後明應九年十二月小鹽城にて元服し左京大夫政村と名乘る（一說に此時は義村といふ。後に政村に改むといふ。又作州久米郡草木の城にて元服ともいふ。）永正元年六月に、政則の嫡女十三歳なりしを妻とし婚

*一〔原本註〕得平記曰、政則は與田のくも寺にて病死と云ふ。

*二〔原本註〕得平記曰、松才殿元服にて次郎義

村と申、後に兵部丞殿と申、くわういん殿と申は此御事也。しやういん就（本ノマヽ）

禮ありけり。浦上則宗は小鹽に居住し、政村家督の時より幼年なるをたすけて播磨備前美作三國の仕置を専らに執行、たゞ一人して權威を振ひ、三石には嫡子近江守宗助を置き城を守らせける。一說に、政則何れのとしにや從三位に叙せられしといふ。其時政則の歌に、

弓杖つきのほるや三の位山四世にも越し道そかしこき

とよみけるといふ。應仁の亂世の事故、軍功の賞に別勅の事などありて三位ありし。然るに公卿補任等には見えず。

浦上宗助と松田と合戰の事

松田元成は文明の末に討死し、其子孫二郎元勝家督を繼て是も左近將監と稱し、其儘金川に在城し、西備前を領して、浦上家と絶えず迫合ありけるが、明應六年三月十六日、浦上近江守宗助其勢千餘騎を率して三石を出陣し、上道郡へ亂入し村々を放火し、御野川を渡し金山の麓牧石に陣を据ゑそれより兵をすゝめ大安寺村富山の城を攻む。此城には松田惣右衛門・伊木・横井等籠城して是を守る。浦上勢伊福村を放火して城をしきりに攻けるに、松田元勝金川にて是を聞き、五百計の兵を率て笹ケ瀬表へ出張して、富山の後攻をして浦上勢へ突てかゝる。城中よりも打て出て前後より戰へば浦上終に打負て敗北し、釣の渡りを越て龍口山に上り此堅固によりて陣を取り、敗軍の勢を集めて松田勢をふせぎ居たり。松田元勝は牧石に陣を取りて龍口を攻め、伊賀左衛門勝隆は赤坂郡より出て牟佐の高倉山に陣を取る。松田惣左衛門は富山を出て敵を追ひ、和意田湯迫の上の山に陣を取て浦上が三石への通路を塞ぐ。はじめは龍口の山を攻て戰ひけれども、其後は敢て攻戰はず遠卷にして浦上勢を疲らしける。浦上宗助糧道を絶れて甚難儀に及ぶ事三石に聞えて、宇喜多和泉守能家兵を助て松田惣右衛門が兵を追崩さんと計りけれども、松田用心きびしくて討べき隙なく日を送りけ

るが、松田が備少し油斷有りけるを伺ひ、能家が家士六十餘人を土民の體に出立せ、農具等を擔がせ暮に及で脇田矢津の邊に伏置き、三更に及ぶころ所々の在家に火を付て燒立けるを、松田勢は思ひがけず民家の失火なりと思ひ、人を出し火を消さんとせし所へ、宇喜多が兵手を分て所々にて鬨を作り切てかゝりければ、松田勢大に狼狽して亂れはしる。龍口山の浦上宗助兼て相圖の事なれば火のもえ上るやいなや、惣軍を一手になして山傳ひに脇田村へ出で、宇喜多と共に松田を追へば、一さゝへもせず西の方川を越えて引退く。かくて宗助は宇喜多に對面して引連て引取ける。松田勢少々は三石勢の跡をしたひけれども、宇喜多殿して東川を越て宗助を守護して歸陣しけり。

赤松臣兩浦上權を爭ひ合戰の事

明應八年浦上美作守則宗と浦上因幡守村國と權を爭ひて合戰に及ぶ。此時赤松才松丸いまだ幼年なれは、老臣みな己が威を強うし國政を恣にする所より事起りて、村國は播州己が領地の兵を集めて則宗を討たんと謀る。則宗も三石の兵七百餘人を率して村國を攻む。されども勝敗も分れず合戰牛[五]角なりしが、或時則宗打負け日山の陣を退て白旗の城に入て難をのがる。村國が兵しきりに攻て危ふかりければ、從兵ども志を變じ親族までも皆落支度をなしける時に、宇喜多和泉守聲を怒らし衆を勵まして曰、人生僅の間に義に背き命ををしみ、爰をのがれて何の益かある。萬人は落行くとも能家に於ては身命を捨て此城に骸をさらすべし。臆病者は落ば落よと大に呼はりければ、諸卒みな此一言に愧ぢて金鐵の思ひをなし、則宗に力を合て戰ひければ村國が兵も引退く。こゝに於て則宗小鹽に至り主君才松丸を誘ひ播州鹽屋の城に籠る。しかあれば赤松の臣みな〳〵是に從ひ行き楯籠れば、村國も攻破る事を得ず數日を經けるうちに、京都細川右京大夫政元より兩陣へ使を立て、今主君才松丸幼年の處、老臣互に權を爭ひ合戰に及ぶ事公儀を不ㇾ憚の至也。向後合戰を相止め忠心

ければ、両浦上和平して各々兵を入て小鹽も無異になりにけり。

を存し、幼主を守立て互に和平すべし。若是に違犯あらば、御征伐可ㇾ有公方の仰をうけて下知あり

宇喜多能家矢津牧石勇戰の事

松田元勝近頃は雲州尼子を頼み、又備後の山名に組して浦上と戰ふこと度々也。文龜二年の冬三石より兵を出す。先福岡に勢揃し宇喜多和泉守將となり、三百餘騎を引卒し東川を越えて兵を進む。松田元勝是を聞て家臣横井・大村・伊賀・佐藤等を將として兵をさしむけ、宍甘村の上に陣を取り矢津の峠を塞ぎて防禦の謀をなす。宇喜多勢本道より押寄せ足輕を進め攻あひ、能家兵を下知しみづから眞先に進て戰ひ、松田の臣有松右京進を組付にして首をとる。有松が從兵二人切てかゝりたるを是をも突伏せ首をとる。大將の働きかくのごとくなれば諸士の働高名する者多し。終に松田勢打負引退く。能家打取たる三つの首をこり付て勝鬨をあげて福岡まで歸陣あり。明る文龜三年正月にも、亦宇喜多能家浦上勢を助て上道郡へ打出で陣を張る。松田元勝御野郡笠井山に陣す。牧石の川原へ兵を進めて日々せり合あり。或日浦上勢より足輕をかけ、先手を進め川を渡して牧石河原に戰ひけるが、松田勢數多山上より下り重りて浦上勢を取巻き、一も人不ㇾ殘討取んとす。宇喜多能家是を見て、士卒に下知し惣勢河を渡し味方討すなとて松田勢に討てかゝる。元勝も笠井山より下りて戰ふ。能家士卒を下知して竪さま横さま切て廻れば、矢を三筋甲に射たてられ內兜をも鑓にてつかれけれ共、是をことゝもせず戰て終に松田に打勝ち、元勝は伊福の鄕へ引取り富山の城に入りければ能家勝鬨をあげ川より東へ引取りける。其後も宇喜多と松田と迫合絕ゆることなし。

浦上則宗病死、同村宗赤松に叛く事

永正九年春、浦上美作守則宗三石城にて病死、嫡子近江守宗助は是より先に早世せしかば、二男掃部助村宗家を繼ぎ三石城を守り、又小鹽の家にありて父のごとく赤松家の仕置をなしける。同十五年の夏小鹽の家にありし時、政村の寵臣に久米十郎左衞門近氏といふもの、政村の申付けられしことを村宗へ傳ふる事ありて、白子町の村宗が家へ行きて逢ふべきと言ひしに、三度まで出會はざることありて其不禮を怒りけれ共色にも出さず、いつぞは此うらみを報ずべしと思ひて日を經ける。其頃京都より小蝶といふ女を政村よび下し、十郎左衞門がもとに預け置かれしを幸と思ひ、或日掃部助を十郎左衞門が家へ招き饗應し、かの小蝶を酌に出しければ、掃部助甚興に入て此小蝶を所望したり。十郎左衞門即ち許容し、易き事にて候。夜に入てひそかに迎を越されよと約束をなして、其夜十郎左衞門は態と登城して留守なるに、小蝶を迎ひ人に渡し夜ふけて歸り、此よしを聞き驚き體に登城し、今夕留守の中に誰人か小蝶を盜取て歸り候と大きに驚いて政村へ申ければ、政村も大きに驚きひそかに行衞を聞出せと十郎左衞門に申付らる。さて二三日過て十郎左衞門ひそかに政村へ申けるは、小蝶を盜みしは掃部助が所爲にて候。白子町の家にたしかに隱し置よし承り候と申ければ、政村常々浦上が奢を惡まれける所へ此事出來たればいよ〳〵惱り強く、よし〳〵近年の內掃部助を成敗すべしと怒を押へて數日を經けるに、誰言ともなけれど浦上滅亡近きにありとさゝやきける。掃部助是を聞て、此君を養子として當家を繼せ申せし事も父則宗がはからひ也。其上某國家の仕置も正直にとり行て世も治りしづかなるに、政道に邪惡あり奢をなすなと宣ふ事甚ゆゑなし。しかも誅罰有べきとは何の罰を稱せらるゝ事にや。其義ならば是非に及ばず。三石に歸り兵を催し一戰に勝敗を試み運を天にまかすべしと、一族家臣相集め其勢二千六百人白子町の宿所を打立ち三石をさして引取ければ、小鹽の騷動不ㇾ斜、町人百姓までも上を下へと返しける。かくて掃部助は七月十一日に三石の城に歸りて猶兵を集め、船坂山をさし塞ぎ籠城の用意しきりなり。政村は掃

部助が人數を集め、小鹽を出けるを打とめんと議せられしかども、不意の事にて集りたる勢もなければ、老臣等是を強てとゞめける故、齒がみをなして止まりけれ共、つゞきて三石の城を攻んとて軍勢をあつめ、軍議をなすこと專らなり。

三石城攻の事

永正十五年九月二十四日、上總介政村みづから兵を帥ゐて小鹽を打立、先浦上が一族の楯籠たる松山向岡大磯等の城々を攻落し、彌高山に掃部助が從弟甲斐太郎が籠りたるをも攻落しければ、太郎は三石へぞ入にける。三石の城には二千餘人の兵卒集りて居たりしが、小鹽勢所々の城を攻落し勢ひ強きを聞てかたへにて評議せしは、今度の軍大守へ敵せし事なれば、終には此三石をも攻破らるべし。其上我等も同じく大守に敵し汚名を骸の上に殘さんも心うし。今大守に降參せんこと本意なりと、一夜の程に七十餘人落ぢければ、兵氣一ならず籠城も如何と危かりし所に、此度も宇喜多和泉守義をとなへて諸卒をいさめ勵しける言葉に感じて皆ふみとゞまりける。和泉守仁厚なる性質故僅の一言にも人みな感伏（服）しける。かくて十一月十二日上總介政村三石の城へ攻寄、先陣秋津宮内秀國・同弟十靜坊等進みて先船坂をさしふさぎたる勢を攻破り、三石の町口に押寄せ鬨を揚れば城中よりも人數を出し、浦上七郎兵衞・吉田杢左衞門眞先に槍を入て火花をちらし攻戰ひ兩陣相引に退きしが、城中より河原又八郎・佐田荒平治と名乘て唯二人打出る。寄手よりも二人太刀打振て渡りあふ。又八其敵一人を打取て猶敵に向ひて戰ふ。荒平治が相手は三上主馬といふ。是も主馬を打取る。主馬が兄三上右京弟の敵遁さじと長刀を以て渡りあふ。荒平治少もひるまず戰ふ。右京長刀を切折られ已に危く見えしが、陶山彌四郎生年十六歲、右京を助けて打て掛れば、荒平治が甥佐田喜三郎又落合て右京と切むすぶ。敵も二人味方も二人命限りと戰ひけるが、吉田杢左衞門味方討たすな者ど

もとて討てかゝる。寄手よりも刀禰・檜崎・神田等攻寄て戰ひけるに、城中より矢を射出して寄手を射れば、寄手少し色めき引色に見えたるに力を得て、吉田・浦上士卒に下知して切かゝる。寄手二町程なびき立つ。其時先陣たりし秋津宮内少輔兵を休めて三柏の旗を押し立ひかへたるが、城兵の味方を追て進む所へ横槍を入てかゝれば城兵忽切崩さる。浦上村宗高櫓より是を見てあれ助けよと下知すれば、島村修理亮・菅生彌兵衛三十餘騎にて馳出て吉田浦上を助け戰ひ、追つ返しつ終日戰くらして其日の軍はやみにけり。明れば十三日伊豆孫次郎寄手の先登なりとて攻口に押寄れば、城中より眞木越前今日の先陣を承りたりとて、手勢三十人計遙に城を出て備を立て、兼て物かげに伏兵を置て敵かゝれと寄手を誘ふ。伊豆孫次郎伏兵あるとは知らず備を進めて打てかゝる。一戰して眞木が勢たちまち打負引退けば、伊豆競ひ懸て二町計も追立行き坂中計へ攻上る時、時分はよしと物陰より伏兵起りて伊豆が旗本を目にかけ突崩す。孫次郎切くづされて引退く。眞木も取て歸して伏兵と共に追まくり一二町追討ちたれども、寄手大勢なればかろく城へ引取ける。それよりは城よりも兵を出さず、寄手も攻めずして兩陣しづまりてひかへけるが、政村怒に堪へずして十五日の朝より惣勢城に押寄て一時に乘とらんと、先巽の出し塀へ押寄せ埋草を以て堀をうめ乘越々々蟻附して攻入らんとす。城には此時迄も靜り返て寄手を近く引付て、所々の高櫓塀うらより差詰引詰射出しければ、あだ矢はなくて塀下に付たる寄手はら〳〵と射落されしばしたゞよひたる所へ、大手の門よりは宇野丹波・東條兵衞・浦上七郎兵衞、搦手の內よりは眞木越前・仁保清十郎・佐鋪右衞門・菊野小隼人突て出て打てかゝれば、寄手の先陣忽に切崩され坂より下に引退く。其中に松田三左衞門武任と名乘て返し合する。城兵東條兵衞鑑を合せ戰つて即時に松田を討取れば、いよ〳〵競かゝりて寄手を追ふ。時に宍粟作十郎範高・同弟神村作五郎範景士卒を下知して備を進め、味方の崩るゝを脇にして靜々とおし掛れば、城兵仁保清十郎備を進めて宍粟と渡合ひ戰ひけるが、仁保はや戰勞れたれば

忽に切くづされて引退く。清十郎は蹈みとゞまり、きたなし者共返せ〳〵と下知をなす所へ宍粟眞先にすゝみて朱柄の鎗を以て仁保に突いてかゝれば、仁保鎗を合せけれども終に宍粟に討ちとられける。東條順格城中より是を見て、大長刀を振て其勢百計にて突て出ければ、寄手も是にためらひて猶豫しけるうちに、城兵悉く引取て城戸をかためければ、寄手も攻口を引取りける。是よりは政村も本陣を船坂峠の池の上に移して近邊の山上に備を立て、旌旗を山風にひるがへしてぞひかへける。

赤松の陣へ夜討の事

浦上村宗、股肱の臣とたのみたる仁保清十郎を討取られ大に憤り、此弔合戰をなすべくと、近來抱へたる忍の者戸畑忠二郎・鴨山勝五郎といふ者を商人に出立たせ、福浦より舟にて上方へ遣し、兵具品々買求めて京都より商人の下りし體にて、兩人船坂山の陣に行ければ、上下悉く取はやし冑槍刀等を買求ける故、思の儘に陣中を見廻り密に三石へ內通し、又村宗此頃重病をうけて有るよしなど民間より言ひふらしぬ。赤松方是を實と思ひ油斷して有けるをよく〳〵見すまし、菅生彌兵衞を大將とし、夜討には人數の多きはあしければ勇士七十人を選び出して是に附て、十一月十九日の戌の刻風はげしきに、菅生が七十人山傳に船坂山の陣に到りしづかに忍び居けるに、船坂の陣香西五郎が小屋へ忍の戸畑・鴨山火を付たり。西風烈しき時西の端なる小屋に火を放せし故、忽陣々に火うつりてもえ上る。菅生彌兵衞此相圖の火を見るより鬨を作りて切り入り四方八方へ働ければ、赤松勢途十方にくれ戰ふべき義勢もなく皆吾先にと逃て行く。菅生が七十人思ふ儘に切まはり、大將を討取らんとねらひけれども、宍粟作十郞・秋津宮內・牛窓源六などいふ者返し合せ〳〵防戰して、大將政村は其隙に漸逃のびて宇根の宿までひかれける。城兵宇野丹波守景泰も百五十騎の勢にて城を出て、

船坂の南の山に備てひかへけるが、秋津十静坊が引取を見て追立けるに、従兵はみなちり〴〵に逃失せける。十静坊思がけなき所より敵の攻かゝりしかば、せん方なくいづくとは分からねども家來龜井彌八を連て山中にふかく隱れ居て、翌日敵散じて後やう〳〵八木山へたどり出で、灘村より舟に乘り赤穂まで落ちたりける。名倉玄蕃は其夜沈醉して陣に臥居けるに、俄に火は燃え上り夜討は入りければ、長子次郎三郎父玄蕃を舁負ひて逃げゝるに、敵急に追かけゝる故父をばあたりの岩陰にかくし置き、追くる敵に渡り合終にそこにて打死をしてけり。其弟の名倉三郎四郎は切拔て父が隱れし岩かげに行き引立退かんとしけるに、玄蕃大臆病者なりければ三郎四郎を敵ぞと思ひ逃けるに、敵にては候はず三郎四郎也と言ひつゝ追行きけるに、聞もいれず迯廻りけるを、敵見付て三郎四郎も討死す。玄蕃難なく逃て山かげにかくれ、曉方に放れ馬の有けるを幸に打乘て落行きける。三石の村宗も備を出して船坂を打越し、赤松勢の散々になりて逃行くを梨子が原まで追討し首數多取て、明れば二十日の朝追行し人數をまとめて三石へ引取ける。赤松勢は山中所々にかくれ居て浦邊に出、磯づたひして赤穂奈波の邊まで引取る者多かりける。

卷第一終

卷第二

浦上宗久小壚へ内通、附八塔寺炎上の事

永正十六年正月村宗三石城に楯籠り居たれ共、去年小鹽勢敗軍の後は政村再び攻寄るべき勢もなく、いたづらに日を送りけるが、村宗が弟浦上宗久和氣郡香々登の城にありて西方の防禦せしが、小鹽より潜に使を立て宗久をかたらひ、味方が來らば村宗の知行を殘らず宗久に宛行ふべしと言やりけるに、宗久慾心ふかき者なれば、早速領掌して、隙を窺ひ小鹽とはかり合て三石を可ㇾ討とは思ひながら、顏色に出さずしてありしに、香々登の城の二郭を守て居ける宇喜多和泉守、此密事を聞出して二郭を彌堅固に持て本丸の方を嚴しく用心し、三石へ使を立て宗久密謀ある事を委しく告やりしかば、早速加勢來て本丸を攻べき手立をせしかば、宗久叶がたく夜に紛れて城を忍び出て備中へ落行ける。其の跡の本丸には三石より來りし加勢の兵を籠めて守らせける。宇喜多能家は謀にて事なく城を取り固め、宗久が跡を能家かはりて城を守りける。其年の夏四月小鹽より兵を出し、老臣浦上因幡守は梨子ヶ原に出張り、宍粟作十郎は八塔寺の山に陣取て、是は三石城の北より押寄て攻めんとせしに。三石にても是を聞き眞木越前守に人數をそへて、兵をひそかに八塔寺の邊の民屋に出しかくし置きける。同月二十九日雨ふりて暗夜なるを幸にひし〳〵と出立ち、先八塔寺の山門に火を付けるに、山風つよく火をふき付て本堂も燃上れば、暗夜も晝のごとく小鹽勢の陣をてらしければ、越前が兵此あかりにて所々より敵陣へ思ふまゝに討入切まはりければ、小鹽勢一さゝへ

もなく追立られ、宍粟が兵上月の城まで引取ける。越前は敵の首二十一討取り、勝鬨をあげて三石城へ歸りける。

赤松政村再三石城を攻る事

同年冬又政村三石を攻んとて、此度は諸事謀を浦上因幡守村國にまかせて宍粟・秋津等とは軍の相談なかりければ以ての外に憤りて、秋津は病と稱して己が領知へ引入る。宍粟は當夏夜討にせられし後も猶八塔寺に陣取てありしかども、さのみ勵み戰ふべきとも見えざりし。其根元は去年小鹽勢敗軍の時二首の狂歌を言ふらしける。

赤松の千とせの數を違しと逃て命をつかれけるかな

久馬十郎左衞門も大將より先に逭く逃しかば、

大將の側近氏も逃うせて久馬のさら山吏に甲斐なし

此哥どもを久米近氏聞て思ふ樣、是は宍粟・清水・秋津等退日に功ありし故、此如大將並久米が身の上をもあざけると大に腹立して、ありもあらぬことゞも樣々にいひて宍粟・秋津を讒言す。是によりて政村是等の老臣をうとみ、此度の軍奉行を浦上村國一人にまかせらる。十二月二十一日浦上因幡守村國を先陣として、赤松上總介政村小鹽を軍立し三石の城へ再び責寄らる。城中は靜りかへつて寄手を待つ。寄手の先陣浦上村國五百餘人持楯を被ぎつれ、三石の城の東に押寄せ鬨を作る。政村の旗本もつゞきて押寄、先陣崩るれば入替りて攻んと備を進む。先陣村國已に城に付て攻るをみて村宗みづから兵を下知して大石をまろばし水をきりながし防ぎければ、寄手少し漂ひて見えし所を城中より浦上七郎兵衞城戸を開て兵をすゝめ、先陣村國が備を駈立れば寄手ひらきなびく。政村旗本を進め去年の負軍の辱をいつの時にか雪ぐべき、一足も退ず皆打死せよと聲をあげ兵を勵して打

てかゝれば、七郎兵衛も進みかね色めき立所を、城中櫓の上より村宗是を見て、松の字の旗を立たるは大將政村と見ゆるぞ、あれ討取れと下知すれば、宇野丹波・東條入道順格・佐鋪右衛門・菊野小隼人等七郎兵衛をたすけて打て出る。七郎兵衛是に力を得て爰をせんどゝ戰ふ。寄手も今を最期と攻戰て何れ勝負も見えざる所に、弱手の城戸より眞木越前守貞邦並び菅野・花房等打て出て赤松勢の横を討ちければ、終に寄手戰ひ負て引退く。大將政村ふみ留りて戰しを近氏勸めて引退かしめければ諸卒誰かこらゆべき、我先にと逃て行く。三穗田新右衛門只一騎取て返しければ、是を見て必死を期したる者共十四五騎返し合て追くる敵を支ければ城兵等進み得ず。三穗田四面に當りて戰ひ終に討死したりける。其ひまに政村もやう／＼引取人數をまとめ備をなす。城兵宇野・東條も諸卒をまとめ早く城に引入ける。其後は播州勢も攻んともせず三石の四方に陣を取て唯遠攻にして居たりけるが、香々登の城の宇喜多和泉守同月二十八日和氣郡新田庄安養寺に勢揃をして其勢二千餘騎、已に播州勢の後を討んと控たりといふこと寄手の小鹽勢に聞えたれば、大將政村是を聞て宇喜多大勢にて後攻をせば迚も勝利有べからず。一先退て來陽進發して浦上を退治すべしと諸手へふれて、同二十九日船坂梨ヶ原の陣を引て小鹽へ歸陣也。三石よりも跡を追て足輕をかけたれども、浦上因幡守よく後殿して引取ければ、さのみ三石勢も追はずして兵を入れける。

小寺と宇喜多作州合戰の事

明れば永正十七年正月、政村小鹽の城にて軍評定して、三石に屬したる城ともを攻めらる。先宇根の城　浦上因幡守を置て三石を押へて、松山の城に村宗が一族小寺長門守村氏籠たるを攻めさせけるに、五月に及で落城し長門守は爰を落て三石に入る。又作州の壘に中村五郎が村宗に屬して在けるを、小寺加賀守範職をやりて是を攻むれば、三石より是をすくはんとて宇喜多和泉守に二千餘騎を

附て七月三日に三石を出て、同八日作州飯岡原に至り小寺加賀守と戰ひ、和泉守小寺を追ふて河水に追込み數十人を討取り河を隔て陣を張る。小鹽も亦是を聞き大勢を集めて作州へ出張て小寺を助て宇喜多を討んとす。三石も亦是を聞て浦上村宗みづから二千五百人を帥ゐて作州へ出て、岩山の南に陣をとり播州勢と對陣す。宇喜多も村宗の陣と一手になりて陣しけるが、播州勢日を追て大勢かさみけり。是を見て見恐やしたりけん、三石勢一夜の中に落失て纔に七十餘人殘り留りける。時に宇喜多和泉守是を敵に見透されては叶ひがたし、其うちに戰へども翌日早朝に殘り留たる七十餘人の勢を以て數千の播州勢に一文字に打て懸り、忽に追崩し勝鬨を上て引取ければ、其勢を見て落散たる兵卒一日がうちに一千餘騎又集りて對陣す。村宗計略をめぐらし敵陣小寺が家人野澤主計介といふものをかたらひ反忠をさせ、小寺範職を討つ相圖の火を上げれば、村宗一千餘騎を三隊として小寺等が播州勢へ討てかゝりければ、忽小寺打負散亂して落行ければ、三石勢思ふ儘に追ちらし追討して首三百餘級を得て、勝鬨を作り三石の城へぞ歸りける。其時政村小鹽を出て作州へ越えんとて白旗城に至て勢揃せし所へ、小寺敗軍せしことを聞てむなしく政村小鹽へ引かへされける。

赤松政村入道して小鹽退去の事

政村度々の軍に打負け其上老臣淸水甲斐守政國・秋津宮內少輔秀國・宍粟作十郎範高等を久米十郎左衞門が讒言せし故、君臣不和になりて淸水・秋津引籠り宍粟も手疵を痛むよしを稱して出仕せず。其外赤松黨三十六家といふ者も多く主人を見限りて相そむく者多くして、重ねて兵を催し三石を攻べき手段もなりがたく日を送りける。中には浦上村宗へ心をよせ內通する者も亦多かりければ、小鹽上下一和せざる事具に三石へ聞え、村宗も是を聞き時至りぬと思ひて潛に小鹽へ使を立て、古政則の後室へ申遣しけるは、浦上村宗事赤松累代の長臣にて尤代々忠功を盡し候所、今佞人の爲に讒

せられ止事を得ずして三石に一旦籠城仕候へども、全く以て屋形の義疎略には存奉らず候。主人は一代家は末代にて候へば、當屋形世を退て隱居ましまさば若君を家督とし、以前のごとく輔佐の臣となりて赤松家長久の謀を廻し可」申と、言葉を盡して言やりければ、室家兼て夫婦の間不和なれば母堂と共に村宗に同心の返答に及び、又老臣秋津・清水・宍粟等に此旨を言聞せけるに、皆同心して政村を押へて隱居とし小鹽の別館に蟄居せしむ。政村も心ならざれども力及ばず、薙髮して常印と稱し、永正十七年十一月赤松政村の嫡男才松丸當年七歳なりしを播備作の國主と稱し、浦上村宗も三石より小鹽へ出仕し政事を思ふ儘にとり行ひければ、久米十郎左衛門も難の至らんことを恐れ、其外にも小鹽家中退去する者多く、小鹽城下靜ならざれば、幼主才松丸、並政則晴元女後室政村の室ともに小鹽を出て皆三石城へぞ移られける。是故に小鹽の赤松の老臣を始め皆三石へぞ出仕して、殘る者とては常印に身近く從ひつかへけるもの計僅に殘りければ、常印も小鹽の住居もしがたく、同十二月二十六日の夜忍び出て舟に取のり、明石へ至り榛石といふ所に着き、衣笠五郎左衛門を賴みて再び望を達せんと、近臣を分け遣して譜代の臣を相催されければ、弘岡左京・別所孫二郎則定・宇野勘解由村範・大石民部丞・香西少五郎・秋津孫四郎國苑（モト）・同十靜坊・久米十郎左衛門等の浦上村宗に背けるものども集りて百五十餘人、衣笠が家を警固しける。明れば大永元年、赤松幼主才松丸後室等三石の城にて越年して居られけるが、常印去冬小鹽の館を出て兵を催し又三石へ寄らると風聞有しかば、再合戰出來りぬと三石の城中城下も周章する事限なし。浦上村宗是を聞き、何とぞ合戰に及ばずして靜謐ならんことを計り、大濱の妙覺寺の日興といふ僧を呼かたらひ賴みけるは、弘岡左京は和僧の從弟也。弘岡此度常印の催に應じて此表へ發向の事を謀ると聞ゆ。和僧榛石へ行て密に左京をかたらひ味方に引入よ、若成らば恩賞は望に任すべし。尤左京にも只今迄取り來る本知に倍して所知を行ふべしとありしかば、日興則領掌し三石を出で榛石へ行き、左京に其よしを言かたらひしに

左京忽心を反して浦上方になり、其手の者皆左京に相したがふ。又別所孫二郎は此度の先陣を承りて加子川迄出張居たりけるが、是も相背くと風聞す。衣笠申けるは、別所と浦上常に不和なれば一味の事はあるべからず。三石より謀にははする事ならん。常印驚給ふなといひけるが、久米十郎左衛門來て弘岡左京こそ村宗に組(與)し、其手の者みな敵になりぬと聞ゆ。かくてあらば、いか成變も計りがたし。急ぎ陣を替へ給へと告ければ、常印大きに驚き、さらば爰を去て暫く山林に隱れ時節の至るを待つべしと、衣笠が家を忍びて出られければ、隨從せし兵士みな思々に散亂す。左京が手の者どもはその逃ちる者を追掛て十餘人討取り、是を此度の左京が高名にして三石城に行きければ、今迄の領知の上に赤坂郡にて加增の所知を與へしとぞ。

義晴將軍播州より上洛並常印小鹽へ歸り弑せらるゝ事

先の義澄將軍の二男義晴は、播州に下り小鹽に居給ひしが、常印小鹽を出られし時ともに爰を出給ひ、常印と一所に書寫山の奥にかくれおはします。しかるに去年細川澄元卒して當將軍勢衰へ戰利あらず。ことし大永元年三月二十五日に當義植(稙)將軍都を落て阿波國へ迁り給ふ(後年に阿波國にて薨給ふ故に島の公方といふ。)其跡には細川高國京都に在て權をとりしかども將軍なければ、是を迎んために高國より三石の浦上村宗へ使を下して、故將軍の御二男義晴播州にかくれ居給ふ。今度將軍になし奉るべし御供申て急ぎ上洛あれとぞいひ遣しければ、村宗大きに悦び我家の起るしるしやと思ひ、仰承りぬと返答しけれども、去年よりは常印とは敵味方となりければ、卒爾に義晴の御供して上洛せん事叶はず。之に依て又常印入道へ三石より使を立て申しけるは、公方の若君今尊公の御もとに御座候よし承る。此若君を渡し給はゞ向後和睦をなし、以前のごとく君臣の禮をなし奉らんとありければ、常印今はあるかなきかの體にて山林に身を隱し忍び居たりしかば、即同心有て若君をともなひ出て村宗と和議

*二、原本註一　得平記曰、菅野花房拼入常印を討果、岩井彌六左の手を切られ手首より落。隱れなきことにて隨分御働候へども不ゞ叶御果候。

*三、原本註一　得平記には政村は晴政のはじめとす。

とゝのひ、小鹽へ再び常印を迎へ、室家・母堂・才松丸も皆三石を出て小鹽に歸り住はれければ、上下安堵の思ひをなしける。かくて村宗は同年六月朔日、將軍の幼君義晴を供奉して三石を發足して京都に趣く。其行裝の花麗いふ計なし。同月六日申刻幼君上京まします。やがて左馬頭に任ぜられ十二月二十四日元服、加冠は細川武藏守高國奉りて義晴と申、明日二十五日征夷大將軍の宣下あり高國管領に任ぜらる。將軍時に十一歲とぞ聞えける。浦上掃部助村宗將軍の供奉して上京せしかば大に威を振ひ在京して、明る大永二年の春三石に歸り小鹽に至りても其威勢いよ／＼强大にして、主人常印入道をもゝのかずともせず、老臣以下の面々をば臣下のごとくにあしらひければ、常印をはじめ赤松の舊臣ども掃部助を惡む事甚し。村宗是を傳へ聞て、とても君臣一和せんこと叶ひがたし。災の身に及ばざる以前に常印をばうしなふにはしかじと思ひ、其身は三石へ歸りて後に浦上が臣岩井小平治・花房・菅野三人を九月十七日の夜常印のもとへ遣し、內談の事ありとて近習の人を拂ひ密談に及ぶゝりをなし、たちまち*二常印入道を弑して早く出ければ、三人共事故なく三石へ歸りける。是によりて小鹽又大きに騷ぎ出て居城なりがたく、浦上因幡守村國・宍粟作十郎範高・小寺藤兵衞職隆・伊豆孫二郎等幼主才松丸を守護して小鹽を落ち、小舟に取乘り淡路に落行ける。浦上村宗は己が思ふまゝに其跡を治め、播州も西半國を取治め、備前も吉井川より東はもとより己が領知とし、其はじめ松田と備前を爭ひけれども、浦上が勢ひ追〻日强くなりしかば松田は尼子が旗下となり、又備後の山名を賴みて西備前の地を奪れざる計略のみにて、浦上と戰ふ事もなかりける。かくて常印をば書寫山に葬りて、祥光院了堂性因と法號をおくりける。

一說に、常印を弑せしは播州室津にての事といふ。此時常印二十八歲と註せしものあれども、明應二年家督の時七歲といふを以てかぞふれば、實に今年三十五歲なれば此說も叶はず。又重編應仁記に義村を父とし*三政村を子とす。此說も不審し。政村を初は義村といふ則常印の事也。其子は

晴政なり。是も初は政祐といふ。政村は左京大夫といひ又兵部少輔と書きたるものもあり。初は上總介といひしといふ。二代共に幼名を才松丸といふ。親のおさな名をうけて名付けしにや。

赤松左京大夫政祐小鹽へ歸り住する事

浦上因播守村國・宍粟作十郎景範・伊豆孫次郎則定等、才松丸を守護して淡路にありしが、此幼主もはや十一歳なれば元服をなし、左京大夫政祐と號して、同年十一月兵船を催し播州へ押渡り福泊に着岸し、大貫山に陣を張り村宗領分へ燒働して戰ふ。此由三石へ聞えしかば、村宗も勢を催し宇喜多和泉守能家を先陣として三千餘人大貫山へ押寄せ村國・景範・則定に對陣す。しかるに但馬國山名次郎政豐此虚に乘じて播州を切取らんと、永良表より小林・大田垣等を先陣として亂入す。三石勢も此兩方の敵に周章して有けるを見て、浦上村國より使を立て村宗へ言やりけるは、今同姓の親族を背て對陣に及ぶ事も、全く赤松の家を起すべき爲にして私の儀にあらず。然るに山名に國を奪れんこと後日に臍をかむとも甲斐なからん。和睦をなし幼主を立て相ともに山名の勢を退くべしと言やりければ、村宗も早速同心して互に誓紙を取かはし、三石よりも再び赤松政祐を播備の太守と仰ぎて山名が勢に打向ひ對陣すれば、山名も利を失て軍を入れければ、左京大夫政祐又小鹽へ歸り住して、兩浦上是を守護してしばし戰もやみにける。

宇喜多能家父子播州にて勇戰の事

かくありて小鹽も靜になりしかども、始終一和すべき村宗とも見えざれば、浦上村國又三石を可討のはかりごとをなし、小寺藤兵衛は五着の城にありて村國と共にはかり、先政祐を守護して時を待けるに、三石に其趣もれ聞えて、さあらば此方より先じて兵を進め、村國又小寺等を打亡すべ

しとて、大永三年の春村宗三石を打立ち宇喜多四郎（能家が二男也）を先陣として播州へ發向す。村國も是を聞て三百人を卒して是を防ぐ。其時餌兵をかけて敵を誘ふ。先陣の宇喜多四郎未若年なれば其謀をも辨せず軍を進め頻に是を追ふ。村國よき場に伏兵を置て四郎を前後より取巻たちまち討取ける。父能家は四郎を討せて悲情に堪へず、自ら先に進み敵陣へ馳入しかば、從主を討せじと一同に村國が備へ打入り爰を最期と戰ければ、村國が兵忽敗軍して東をさして引退く。能家みづから敵を討つ事八人、其餘首級百計を得て引取ける。其後も猶迫合絶えざりけるが、村宗思ふに主人に對して戰をなす故にはかぐ\しき勝利を得ざると思ひ、赤松寒松軒といふ一族丹波にかくれ有しを三石に招きて大將に取立、度々播州へ軍を出し戰ひしかどもさらに勝敗わからず。寒松軒も野間といふ所にて討死ありけり。偖て宇喜多和泉守勇戰のすぐれたる事を細川高國遠く聞て大に歎賞して、河原林某といふものをして名馬一疋に名ある釜を送りける。されども愛子におくれ又老衰もしければ、其のち能家おのが居城邑久郡砥石城に引込み、薙髮し常玖と號して老を養ひて居ける。

播州依藤ケ城を攻並柳本彈正被ㇾ殺事

享祿三年三木釜山城主別所加賀守就治・柳本彈正等播州依藤ケ城を攻たりしが、六月晦日の夜に入て柳本が家僕主人彈正を殺しける。それ故別所が陣迄も騷ぎ立ける。是を依藤ケ城より見及で兵を出して寄手を討ければ、一さゝへもせず敗軍す。城兵は是を追討にして首百餘級を討取り引取ける。かくのごとく播州物騷なりければ、浦上村宗其虚に乘じて三石より打出、小寺の城三木の別所城有田の城等と攻戰ひて、打取る首一千餘級を得て三石へ開陣す。又備前赤坂郡上道郡にては、松田左近將監と迫合どもありて月日を送りける。

浦上村宗攝州出陣並討死の事

しかるに細川武藏守高國入道道永は、去る大永七年桂川敗軍の後伊勢國司村親公は道永の聟なりければ是をたのみ、其後亦山田の神主山田大路が家に蟄居し　常桓と號を改め居られしが、何とぞして今一度義晴公を將軍に備へ執權して天下を掌握せんと、山田を立出で江州佐々木を賴み、越前へ越えては淺倉をかたらひ、叉雲州に至て尼子を催促しけれども皆是に應せざれば、爲方なくて備前へめぐり三石に來りて浦上村宗を賴みける。是は先年義晴公を供奉して播州より上洛せし後、推擧に預りし事多かりしかば一議にも不レ及同心し、叉村宗所望しけるは、文明の頃武衛家の臣たりし朝倉太郎左衞門敏景に越前國を賜り、守護大名の數に列せられ忽倍臣を離れ、諸侯國主の身となり其後孝景に及ぶまで御相伴衆たり。此例を以て某村宗も此功をとげなば播州の守護をゆるされ、將軍直參の大名の數に入られなんやと望ければ、常桓聞て今度勝利を得ば此條仔細あらじとかたく契約ありければ、村宗大きに悅び軈て播備作の兵を集め、享祿三年八月村宗其勢三千餘騎にて三石城を發し攝州に出陣ある。細川常桓は先達て三石を出て諸浪人等を驅促し、兩家同月二十七日に攝州神咒寺に陣取、細川晴元一味の城々ども攻んとす。伊丹城に高畠甚九郎、池田の城に池田筑前守、富松城に藥師寺三郎左衞門等栖籠り、常桓の勢寄來らば引請け一戰せんと相待ける。九月二十一日に先富松へ朝懸して一時攻にして攻落し、藥師寺が者ども二十餘人討取、軍神の血祭よしといさみ進みける。三郎左衞門は爰を落行き是を晴元へ注進しければ、山中遠江守に和泉國人を附て加勢とし尼崎大物浦を守らせ、堺にありし軍勢を以て久々知酒部に陣を張けるが、十月十九日常桓伊丹表にて相戰へば、伊丹勢打負け井上新八郎を始三十餘人討死しける。十一月六日には大物へ取懸ければ藥師寺は降參し山中遠江守・河原林左衞門尉は討死をとげ、其外五十餘人討れ、殘る者共は中島へ落

行けり。常桓は爰にて越年して、明る四年二月下旬伊丹の城を攻、あつかひになりて城主高畠甚九郎城を出て池田へ退く。是につゞきて三月六日に池田へ取かけ攻けるに、阿州の侍有持等二百餘人討死して落城す。東條又四郎・波多野孫四郎は一旦城中を切拔出けれども、敵しきりに跡を追ければ山田といふ所にて自害せり。此勢にては常桓・浦上村宗もつゞきて堺を追落し、都へも切て上るべしとぞ見えける。三月十日諸軍を帥て淀川尻を打渡り、先陣は住吉古妻に屯し、常桓は中島に陣をうつし居たり。堺にては此大敵を引うけとても防戰叶がたしと評議して、一先四國へ落行べしと其支度せし所へ、兼て催し置ける三好筑前守元長四國勢一萬餘人を引卒して堺津へ着陣すれば、晴元を始諸勢大に力を得て此勢をあはせ陣しける。其中より早雄の若者どもは足輕をかけて迫合けるが、いかさま一戰して勝負をこゝろみんとて、先陣の者播州勢の手先へ討てかゝり戰ひしが、忽打勝て谷福島などいふ先手の兵を討取、其外八十餘人の首を取て引取ければ、住吉に屯しける浦上が先手たまりかねて天王寺今宮木津へ引退て陣を取る。されども常桓は浦井に陣取、浦上は野田福島に陣取て兩家二萬に餘る勢なれば、近日堺へ押寄んとはかりける所に、又三月二十五日細川讃岐守政之八千餘騎にて堺浦へ着舟す。其上畠山が家老木澤左京亮長政常桓の味方に來り隨一とたのみし者なりしに、忽心替りして晴元へ降參し堺津へ來り加る。かゝりければたやすく堺へも寄がたく、對陣してしばらく合戰もなかりける。しかるに堺津にて今は此大軍になりたれば、最早敵を待こと有べからじ、いざ押寄戰んとて、五月十三日細川典厩は筑島へ打出陣を取り、三好元長は住吉遠里小野に屯す。三好山城守は吾孫子刈田に陣取り其勢併せて五千餘騎、細川讃岐守の八千餘騎は堺に其儘陣取て晴元を守護して、毎日天王寺の敵陣へ足輕をかけて矢軍あり。こゝに赤松政祐今は左京大夫晴政と稱して浦上政國等守護してありけれども、勢衰へて播州小鹽の居住もなしがたく、近年は美作國久米郡原田村の新庄山に城を築きてありしが、此度兩細川攝州の合戰にて浦上村宗も出陣せしこ

とを聞、晴政よき時節到來す今の微勢にてはとても父常印の敵村宗を討事叶がたし。此時出陣し晴元に一味し、其力をかりて浦上村宗を討て仇を報ぜんと、播州作州の舊臣を集めて晴元へ内通し、六月二日先神咒寺迄出張て陣取る。此事村宗が陣へ聞えければ、一旦浦上へ従ひ居たる赤松舊好の侍吾も／＼と神咒寺の赤松の陣へ加りければ、浦上が勢日を逐て減少す。常桓是を聞き天王寺の陣人數少くては不叶と自らも天王寺近く陣替して、勢は衰へたれども敵よせば有無の一戰をなすべしとひかへたり。六月四日三好勢先陣として天王寺木津今宮へ押寄て攻戰ふ。浦上村宗先を驅け常桓禪門後陣を詰て必死を究て渡り合し故、三好勢も攻あぐみて有し所に、晴元の舅江州佐々木より加勢として八千餘騎二手になして阿部野の方より攻來れば、天王寺にももはや防戰に力盡き、浦上村宗眞先に進んで討死しければ、浦上に屬從ける兵卒三百餘人討取られ、殘る者ども右往左往へ迯行を、野里川に追込まれ水に溺れて死ける浦上勢も五千餘人とぞ言傳ふ。常桓の第一宗と頼まれし細川和泉守護元有・伊丹勢兵庫助國扶・川原林日向守・藥師寺三郎左衞門・波々加部兵庫助・南條肥□（不明）守・香西越後守等枕をならべ討死し、其外は野里川を越えて落行所を、こゝかしこにて討取らるゝ者も二千餘人に及ぶ。其隙に常桓禪門ははるかに落行く。尼崎の町家の京やといふ者の所に隱れけるを、三好山城守聞出し、探しとらへて境へ注進し、同八日遂に大物の廣德寺にて切腹ある。浦上とゝもに天王寺にて討死せし備前侍のなかにも、江藤平六兵衞盛久といふもの、當陣云がひなく切崩されし事を無念に思ひ、其所を引もさらず天王寺の塔の七層へ上り切腹し、太刀を咥へ眞逆さまに落て失にけり。島村彈正左衞門貴則も、村宗をはじめ備前勢數を盡して被討しを口惜く思ひ、齒がみをなして立たる所へ、佐田岡平治・吉村十郎といふ敵二人討てかゝるを飛かゝり、取て引寄左右の脇にかい挾て、汝迷途の供せよと言て野里川へ飛込死にけり。此島村貴則が亡靈化して蟹となりしといふ。げにも其時より其所に人面のごとき蟹出來ける。今に其攝州野里川にて島村蟹といふて有

るは是なり。

赤松晴政歸陣幷浦上村宗が子二人の事

赤松晴政は尼が崎の方へ兵を進めて、浦上村宗が兵の敗軍して落行を猶討取り、父の仇村宗が討死をよろこび、歸陣して又播州小鹽へ歸り住す。又浦上村宗が討死の死骸を三石へとり返れば、嫡子與四郎政宗・次男與二郎宗景是をとりおさめ和氣郡木谷村に葬り、書寫山にて追善どもなしける。今も其塚殘れり。法名は桃岳祐林といふなり。此兄弟の時になりては、いかなる故か三石城には人數をこめて守らせ、播州室津の城に兄弟ともに移りけるが、程なく兄弟の中不和になりて、與二郎宗景は大田原與三左衛門・日笠二郎兵衛・延原彈正・明石飛騨・岡本太郎右衛門・服部備前六人を連て室津を立退き、和氣郡田土村天神山の城に移りける。其後は東備前又作州も二郡ばかりはみな宗景にしたがひ、和氣郡本庄の小中山の森源七郎・森村の森中務・平松村の恒次五郎左衛門・同藤兵衛・會根城の明石大和守景行等皆城を築て天神山を守護す。戸田松の浦上近江守國秀又三石城もみな政宗をそむきて宗景にしたがひければ、室津の浦上掃部助政宗は弟の與二郎宗景を討べき爲に、享祿五年天文元年なり。其勢二千餘騎を催して備前に向ひ、二手に分れて嫡男小次郎淸宗は舟五十餘艘に取のり、海上より押寄せ三石を攻む。此城は此頃まで皆住居せし所なれば案內をよく知りて即時に責破り、夫より片上に至り土田松の城を攻けるに、浦上近江守降參せしかば、政宗すぐに其土田松の城を本陣として其東の山々に陣を取る。天神山よりも宗景人數を出し片上の葛坂を隔て度々せり合あれども、更に勝負もなく日を送りけるが、宗景も退屈して先天神山へ陣を引取る。政宗の兵跡をしたふべしと思ひ宗景伏兵を置たれども、あとをも追ざれば事ゆゑなく宗景天神山へ歸りける。政宗も土田松三石に兵をこめて室へ歸りける。

宇喜多常玖を島村殺す幷宇喜多家の事

邑久郡砥石城主宇喜多和泉入道常玖。同郡高取山の城主島村彈正左衞門貴則は浦上が家にて股肱の臣なりけるが、宇喜多常玖は老衰して砥石の城に引籠り、島村貴則は攝州にて討死す。常玖が子興家といひて家は繼たれども愚昧にして用に立たず。島村貴則が子島村豐後守計殘りて浦上の家の仕置を獨してはからひけるが、天文三年六月晦日に先君の遺命なりとて島村豐後守俄に砥石の城を襲て宇喜多を討けるに、折節城中無勢其上不意の事なれば忽城を乘とられぬ。常玖は老病に犯され行歩も叶はざれば詮方なく自殺す。興家は愚なる上に臆病にして是を防ぎ戰ふべくともせず城を迯出でける。興家の嫡子八郎は當年四歳なれば、乳母抱てやう／＼迯出て福岡へ落行ぬ（宇喜多記に八郎は享祿二年出生といへば、此とき六歳なるべし。）　能家入道常玖の死骸は城のつゞきなる大鹿島の山に納めける（能家入道の塚今にあり。所の者はあやまりて宇喜多直家の塚と云ふ。）常玖存生の中我像を畫かしめ、南禪寺の僧參兩宗成を賴み其像の上に行狀を書もらひて、邑久鄕の向岸寺に納め置ぬ（向岸寺は、今廢して其畫像今は邑久鄕の民間に傳へたり。）其文曰、

智勇兼備、功名遂全、本貫爲百濟王、兄弟曾來兒島、中古立三宅姓、雲仍洞酌和泉、恭而安、溫而厲、行無邪、言無偏、進思盡、退思補、管仲匡齊桓、有封邑於十餘世、攻必取、戰必勝、韓信附漢祖、延炎運乎四百年、一鄕懷寬和之德、闔國伏雄略權。屬赤松軍挫松田兵、出下略用上略、依則宗命祖宗助左、有一天無二天、荊樹風吹厚同株好、蘭蓀露湛餘繁花妍、君君臣臣、南山可移節義勿易、父父子子、東海雖竭忠烈豈遷、規摹遠遠、瓜瓞綿綿、殺活縱橫、著著揮金剛劒摧魔群隊、與奪自在、念念張禪那、弓鳴神通弦、

看看禎祥家給椿齡永、奕葉春秋兩八千、

竊案和泉之前司能家之牒、上世居乎百濟國、甫兒時兄弟三人泛舶來于備前一島、始居新第、旗幟

皆書兒字爲紋矣、仍其所曰兒島焉、中年立姓稱三宅、而有武名、諸孫瓜葛乎備之縣鄕邑、而號字喜多、地利乎人和乎、烏乎命乎、昔文治之比丁源平騷亂之日、與佐佐木三郎戰藤戸浦矣、比年歸紀氏、代爲股肱、近頃明應六年江州前司紀宗助略地于備之伊福鄕、軍不利退禦嶮、松田之兵圍之四面、能家獨身入宗助壘、身被堅執鋭、相戰四十一日、勝鹿田軍、群敵解圍而去矣、宗助梟十餘人之首、凱歌而旋焉、八年紀則宗美作前司、禍起蕭墻、與播之東軍戰、退日山陣入白旗城、親族群臣首鼠不爲者夥矣、能家切齒勵聲曰、人生一世之間、焉能央央有二乎、乃歸則宗、衆皆愧能家言而屬則宗、則宗於爰與幼主而入下野前司源政秀之播之鹽屋壘、力戰數矣、據相府臺命、細川故右京兆政元差中使求東西和議、三國離心頓休矣、文龜二年戰于備之矢津、能家一身單力而斬有松洎其徒二人之首焉、三年於備之牧石原屢戰、蒙疵斃强敵有功矣、永正十五年紀村宗以事入三石壘群下有 聽氷不決一焉、能家寧爲牛後卒不作他方臣、誓歸乎村宗、細川今京兆高國投書感忠義至誠矣、十六年村宗舍弟宗久在香香登壘、與阿兄絶矣、能家在彼乃通書告諭乎村宗而曰、臣若出壘則必有事矣、一夕脱而往備西縣矣、同年十二月能家將精兵二千餘陣乎新田安養寺、侵掠圍三石播軍之後、而勠力乎村宗焉、播軍忽解圍而退矣、十七年七月八日戰勝于作之飯岡原、敵軍溺死河水者數十輩、斬首有級矣、十月三日村宗入作陽陣乎岩山南、能家將二千餘從焉、敵軍如雲其勢難當士卒皆散、纔殘者七十八、同四日能家一戰而勝、同七日敵軍瓜潰矣、村宗斬數百人首歸于三石、大永二年播東軍紀村國以下、從淡入播壘于大貫山、村宗則圍其左右者數重矣、于時但之守山名次郎乘間入播之永良、東西軍互計而請成焉、蓋捐吾邪讐而與他山名之軍決戰也、既而和議就矣、翌年村國變約挑戰、能家據嶮半日程、小男四郎先倡而戰死矣、能家直欲入軍中決殊死、敵軍忽潰斬數十百人首歸村宗軍焉、細川家臣河原林等視而聞之、高國乃以書感其功、于後從村宗至高則賜湛盧之精泛駕之騎、能家長跪受焉、寔衰花之榮也、以至則宗宗助村宗遺數箇書而固傳家不可遺之盟

（篋イ）匣而秘之、僉曰軍中一韓也矣、山野出入紀氏之門者五十年餘、以故衆臣皆有耐久之故意、能家法諱常玖、予字之曰玄仲寄斯像求賞辭不勝固辭、書拙語以條理數件功勳于右云爾、

時大永四年歲在甲申秋八月吉辰

前南禪金剛幢下參兩叟九峰宗成

此宇喜多和泉守三宅能家、本其先百濟の王子（コキシ）より出で此百濟の王子なと、日本紀姓氏錄等には新羅の王子と記せり。三宅を以て姓とす。此三宅といふは備前國兒島の地名なり兒島にても東の地廿一村を三宅鄕といふ順和名抄には三宅を三家と書たり。其王子天日槍の後胤、邑久郡和田といふ所に住して、和田備後守範長、元弘建武の亂に南帝の御味方に參りて忠戰をなすこと數度に及ぶ。しかるに建武三年五月に和田備後守範長、播州阿彌陀宿にて討死し其一族も多く爰に死たりし。其時三郎高德はあとの四月備前の國熊山の戰にふか手負て旅行叶ひがたく、播州坂越の邊の僧房に殘り居ける故生殘りてありしが、其後に伊勢の國にうつり又三河國加茂郡に行て住みける按に北畠准后親房卿の三男伊勢國司顯能卿にしたがひて征東將軍宗良親王につき奉りて伊勢三河等の國に高德もうつり行けるにや。爰にて男子三人をまうく。嫡子兒島太郎高秀●二男兒島二郎高久●三男三宅三郎高貞といふ。此太郎高秀則宇喜多の鼻祖なりといふ也此高德の三郎なる三宅高貞は、今の三宅備後守康之の先祖なりとぞ。すべて此高德の三河國にて三子をまうけて太郎高秀宇喜多の祖といふ事、則三宅康之の家につたふる所の說なりし此高秀より和泉守能家迄何代を經て名も何といふ事所見なく、又いつより宇喜多と稱せし事も未詳按に高秀の子孫備前に來り住せしは、其父の故鄕なる故に、其親族によりて高秀再備前に來り住て、後に浦上の臣となりしなるべし。しかるに上道郡西大寺の古文書に、文明二年宇喜多修理進宗家の下知狀に、延德四年宇喜多藏人久家の寄進狀と有りしも、此修理進宗家は能家の祖父にして、藏人久家は能家の父なるべきにや合せ考べき所なし當國里俗の說に、宇喜多は後白河天皇の御宇に宇喜多の中將といふ人、當國こじまにながされ來りすみて、其子孫宇喜多と稱す。直家秀家等其末葉といふことあれ共、其據なき浮說なればこゝにとらず。和泉守能家はかゝる亂世にめづらしき性質にて、げに此人をば此國にて其頃古和泉守と稱して賢人の如く人のいひしとぞ。世にすぐれし人にや。若年の時父の前にて能家物語るに、今日蜘蛛の網に小雀のかゝりて落ちたりしといひしを、父の聞て其ことあ

るべきこと丶も覺えず。譬へありしことなりとも、かやうの虛談に似たることは語らぬがよしといましめければ、能家面目なき體にて頭をさげて居たりしに、其折其庭前の蜘蛛の網に雀のかゝりて落けるとぞ。かくの如く天に叶ひたる至孝の人なりと時の人いひし。武勇も此贄に見えし通なりけり。それ故に其時の人戰はいかゞしてかく武勇の名を得給ふぞと問けるに、さして人に變る事もなし。戰場にて懸る時は少し人に先立てかゝり、引取時は人に少しおくれて引取計也と語りし。又問に、さあるに出立の時に何とて震ひ玉ふといへば、されば壯年時より具足を肩に打かくる時、いつにても討死を思ひ極むる心よりなるべしと答けるとぞ。其外人に勝れしことも物語多き人なりし。則後の和泉守直家の祖父なり。旗の紋は兒の字なり。昔百濟の王子兒島へ來りし時、旗にみな兒といふ字をしるす。それより兒島と島をもいふ。代々の旗の紋とするよし畫像の賛にも見えし通也。又直家の像の紋には鶴龜又酢漿草(カタバミ)も見えたり。秀家卿の時は旗の紋唐太鼓なり。いつより改りしにや、今もこゝに唐太鼓の紋殘りし所あり。

按に三宅姓に說々あり。日本紀にしるせし所は、垂仁天皇三年三月新羅王子(コキシ)天日槍(アマノヒボコ)日本へ來り、播磨國宍粟邑に留り後に但馬國に住す。是三宅連の始祖なるよし見えたり。又姓氏錄には天日桙命と書て、或記には伊久米入彦命(イクメイリヒコノミコト)垂仁天皇の御事。を以て三宅連の祖とすとも記せり。宇喜多の家に傳ふる所は、百濟の王子備前國兒島三宅卿に來るといふ。是を並べ考ふるに、播磨に至りしはじめ先兒島の三宅の地に來りて後播磨へうつりしにぞ、此故に兒島の地名を以て三宅連と姓を給ひしなるべし。又河野或は稻葉の家傳には、孝靈天皇の皇子伊豫皇子に三子あり。一男は大三島諸山積明神是大宅氏の始祖也。二男は備前國兒島に住す。其地に家三戶あつて養ひ奉る故に三宅を以て姓とす。是三宅の始祖也。三男は越智親王と申、是越智姓の始祖にて、伊豫國の河野等是より出たりと言ふ。元弘の京軍の時、兒島と河野は一族なりと太平記に書しも此說によりしと見えて、古き

*中山備は、浦上氏に屬するを正しとすべし。

家の說なれども、孝靈の皇子に伊豫皇子といふは、日本紀にも紹運錄にも見えず、桓武の皇子伊豫親王あれどもはるか後の事にて此說いぶかしければ、日本紀・姓氏錄の本說等に見えしごとく、三宅の姓は天日槍より出たるといふ。まがふべからざる事にぞ。

又和田備後守範長は、姓三宅稱號は兒島ともいふ。故に兒島とも三宅とも記せしもの多く其子孫も兒島と名乘る。然るに範長を佐々木の餘流といふ說あり（武家系圖中國太平記等に）、是は大なる誤なるべし。天日槍の後、三宅の姓にて宇喜多と同姓なる事諸記に註せる事明なり。

備前國所々城主幷海賊の事

かくて島村豐後守は、砥石の邊宇喜多の領地を押領し、浦上家の事は島村ひとり仕置し威を振ひ、其身は其儘高取山に居城し薙髮して貫阿彌といふ。砥石城には浮田大和守を置て守らしむ。其外天神山の旗下の城は曾根城明石大和守景行、日笠の靑山城に日笠次郎兵衞賴房、きどうら山城日笠甚左衞門、神根のいわう山城高取備前、大中山城中山五郎左衞門、働の城明石飛驒、赤坂郡には周匝村城に笹部勘二郎、是里の山鳥城に平賀大進、佐古谷城に額田喜介、磐梨郡熊野保木城にて明石源三郎（大和弟）坂根に明石右京、肩背に岡豐前、田原城に浮田土佐、殿谷城に小野田左馬進、邑久郡虫明城に虫明藏人、西須惠城に鳥山左馬、邑久鄕城に浮田五郎左衞門、尾張城に鷲見越中等也。又金川の松田が麾下の城々は、矢坂の富山城には横井土佐を置て守らしめ、舟山の城は須々木豐前、高柳城には中島左馬頭、津高郡虎倉城伊賀伊賀守、三納谷城には高見小四郎、尾原城には新山民部、百坂山城には菱川右京、赤坂郡西谷城には松田彥二郎、伊田のうな山城には長崎四郎左衞門、殿谷城には難波八郎左衞門、高尾山城には*刈田四郎左衞門、かう〳〵山城には岡與右衞門、大鹿の瀧城には草加五郎兵衞、上道郡沼城には中山備中、平井城には平井助丞、圓山城には寺井十郎左衞門、御野郡

岡山城には金光備前等也此頃は備前國中亂れぬ所もなく、東は浦上政宗・同宗景兄弟地をあらそひ、西は松田地を治て尼子に屬して浦上と戰ひ、備中の毛利麾下と戰ふ。其餘兒島郡は讃岐國の細川家にしたがひ、胸上城小串城には高畠和泉守・高畠源太兵衛、利生の城には四宮隱岐守等守て、又西兒島は毛利家にしたがひて城を守て更に攻守の隙もなく、夫のみならず兒島の南の海上には島々多くものかげあれば、往古より海賊をなすに便よくて、往還の舟世々其難に逢ふもの多し。今亂世に乘じていよ〳〵海賊横行する事隙なし。其海賊の集りける所なかにも兒島郡日比と邑久郡犬島となり。故に其頃日比關・犬島關と唱て海路通行の難儀の所とせしが、大船に大黑丸・夷丸といふ舟ありて、是にて渡海すれば海賊妨ぐることなし。其外も此舟に屬せしよしを言て金銀米錢を出して通行せしといふ。いつの年にや、戸板の某といふ周防の國司なりし人、犬島に舟がゝりせしを、海賊是を殺して財寶を奪取りければ、此戸板某の子親の敵を討たむとて兵船を催し犬島に押寄せ、海賊のかくれ住ける岩穴の邊を取圍み、薪木を穴の口につみて悉く燒殺しけるといふ。此事は世に聞えて、謠曲にも作りて戸板といふうたひ則此事也。其外藝州の穗田備中守難風に逢て犬島に舟をかけしに、海賊の爲に殺され財寶を奪はれしといふ。又永正の頃にや藝州武田判官元信の臣温科左衛門家親といふ者、上洛して歸りに此犬島の海上を夜中に押通りけるが、例のごとく左衛門が舟へ海賊の船をひた〳〵とおし付財寶を奪取らんとせしに、この左衛門世には三十人が力あると言ひしほどの大力なれば、帆柱のけたを取、船に乘りうつらんとせし海賊を打倒し、其帆げたを取直し賊船を突ければ忽二艘をつき沈む。其勢にいかでか敵すべき。殘りの舟どもみな島かげに逃隱れければ、温科何の難もなく藝州へ歸りける一説に此時京都より千里の濱といふ名石をとりて下り、藝州可部の福王寺に納めしといへども、かの寺の記に此石を寺に納しははるかにさき崇光院の御宇の事にて、此時の事にあらずといへば、此事なれば註せず。

昔海賊のありしといふは、源氏物語の玉葛の卷に海賊の事を書きけるも此日比の海にての事也。

其ほか伶人茂光が相撲の使にて西國へ下りし時、ひかたの禪師といふ海賊に逢ひし時、篳篥の小調子をふきければ、海賊此聲に感じて茂光にかつけ物ともして退き、又門部の府生といふものは、よもぎ矢にて海賊の眼を射てしりぞけしといふ古物語ども、みな此海上の事也。此世のことにあらねば、是等の事は爰にしるさず。

宇喜多八郎直家生立、浦上宗景へ仕る事

宇喜多興家は父の仇をうつべき志もなく、流浪して其子八郎と共に備後國鞆に隱れ住せしが、後には福岡の富家に阿部善定といふ者あり。宇喜多の家臣の緣者なりけるゆかりにて、其家へ行て父子とも養はれてかくれし。又其家の娘を興家の妾として二人の男子をまうけ、後に忠家●春家といふ。直家の弟は是也。天文五年に興家も此家にて病死せり。福岡の寺に葬り法名露月光珍といふ。其後は八郎をば母の養育にあひ、笠加村に叔母の尼ありし所に行て年月を送て十歳をも越えたり。しかるに此八郎、七八歳の頃までは人並の生立に越えて賢かりしが、十をも越えては父の興家にもおとりて鈍くなりて、其邊の民家にても指さし笑ふこと多し。母是をつく／＼見て兄弟（姉妹）の尼の物語して、何ぞ八郎を守り立て再び浦上家へ奉公させ、宇喜多家を起さんと思ふに甲斐なく、愚にして用に立つべくもあらずと涙をながし悲みて、兄弟（姉妹）ともに力をうしなひてありしが、人もなき時八郎母のもとにちかく寄りて小聲にていひけるは、某近年うつけに成候事は實にあらず。必氣遣し給ふな。其故は心に一大事を思ひ立候へば、何とぞ命を全くして人となり、浦上家へ仕へて終に祖父の讐を報じ奉らんと思ひ候。されども某かしこしと見ば敵の貫阿彌よも生けては置候まじ。父の興家も愚にましませばこそ其難もまぬかれ給へ、某それを思ふ故に作りうつけになり候。必うれひ給はず時節を窺ひ、宗景公へ奉公の事を願ひ給へと語りければ、母大に驚き、扨はふかき思慮ありての

事とひそかに悦ぶ事限りなし。其母是よりさき天神山の內室につかへてありし故、八郎奉公の事を宗景へ願ひければ、天文十二年八月に八郎を呼出し側近く仕へける。其とし赤松晴政兵を出して播州にありし宗景の取出の城二三ヶ所攻破りければ、宗景是を聞て天神山を發して百々田豐前・日笠源太等を先手として播州へ打越え所々放火し、赤松の壘ども二ヶ所屠て歸陣ありける。此時宇喜多八郎十五歲にて初陣なりしが、兜首一ッ打取實驗に備へければ、宗景是を賞しける。其後も軍功どもありければ、明くる天文十三年八郎元服して宇喜多三郎左衞門直家と名乘て、邑久郡乙子村の邊にて三百貫の地を宛行はる。是其身の武勇と又能家の舊功あるを以てなり。其頃兒島郡は四國の細川家に屬し上道郡は松田に從ひて、是等より乙子の邊に人數を出し、又犬島邊の海賊までも陸に上りて民家を亂暴しなやますゆゑ、宗景より乙子村の山にとり手を築て是をふせがんとす。然るに乙子村の地敵地には隣にて、味方地は遠き所故抱がたく思ひて、宗景の足輕大將等たれ行て守るべきといふものなし。其時三郎左衞門進み出て、某未だ若輩なれども乙子村の邊にて采邑を給はれば幸に便あり、此城を某に守らしめ給へと望む。宗景是を老臣に議せらるゝに皆可ㇾ然といひければ、足輕三十人を添て三郎左衞門に乙子城を守らしむ。此時直家十六七歲の時なるべし。其大膽是にて思ふべし。誠に其後は敵乙子の邊へ出るといへども、甲斐々々しく防禦して敢て手さす事なく、後には却て此方より兵を敵地へ出して所々侵略せしかば、宗景是を賞美して猶地をまして三千石を領して城を堅固に守れり。されども直家此乙子在城の時領地は少くして兵卒は多かりし故、兵糧甚乏しくて戶川平介・長船又三郎・岡平內等をはじめ自ら耕作をなし、又時々は近郷へ出て夜盜辻切などして兵糧をつゞけし。されども不足すれば直家をはじめ家臣とも一等に、一ヶ月五度三度ばかり失食といふ事をして、一日食を絕て其米を集め、城に納置て出陣の時の兵糧とす。甚艱難なる事如ㇾ此なれども、士卒よく思ひつゞきて軍功を勵しける。其後天文二十年上道郡沼村の龜山城主中山備中に

一女子ありしを、宗景の下知にて宇喜多直家に妻あはせて備中が聟とす。一説に中山備中此時までは藤井村のもん山の城にありしともいふ。

富川平助宇喜多直家に仕る事

宇喜多直家の第一の老臣富川平右衞門秀安といふは、此時平介といひて若年より直家に仕へし人也。其父は備後國門田村に門田を氏としたる浪士なり。天文七年に平介出生しほどなく父は卒しぬ。又女子も一人あり。其母此二子の養育してありしが、其所に住がたき事起りて爲方なく二人の子をつれて其母門田村を出て、備中の内迄行きて母つく〴〵思ひけるは、此平介を取立て人となさんと思ふに、此女子をも養育しては叶がたかるべしと覺悟して、池の有けるに此二歳の女子の袖に小石を多く入て其池にしづめけり。さて平介を抱きて美作に姉の有けるもとへ漸く日を經て尋ね行きぬ。其姉の夫をば富川禪門某と言て名有る者なる故、此禪門を賴て此平介を預置きて、吾身は備前へ立越え奉公をなすべし。さて落付候はゞ又平介をも呼取に參るべしと懇に賴て、母は備前へ出で行きぬ。かくて平介を禪門養ひ置けるに、其生立尋常の子にあらねば我が爲にも可レ成と思ひ、禪門子分にして富川平介と名乘らせて養育しける。母も是を聞き悦びて備前にて奉公を望みけるに、宇喜多直家の弟忠家の乳母にぞありつきける。其翌年作州の兵亂に、富川禪門害せられ其婦も死す。其時此平介をば歸依の僧のありけるにたのみてかくし置もらひて、以後其遺言どもくはしく傳へて備前の母に平介を渡しける。其頃直家幷に弟の忠家・春家ともに乙子城にありし時にて、平介を其母が部屋にて養ひ置て成人し直に直家に奉公したり。平介は直家に五六の年おとりなりけるとぞ（按に直家は享祿二年出生也。平介は天文七年に生る。九の年おとりなるべし。）此平介母すぐれて才發なる女ゆゑ、直家の家内のまかなひ物の出し入まで獨して勤めける。其後直家のはからひにて家臣岡惣兵衞が妻に遣しける。其惣兵衞子此腹にも餘多

出來たり。平介をも惣兵衞子分にして養育したれども、是は其儘富川平介と名乘り、後に富川平右門秀安と改む。其惣兵衞妻は孫の戸川肥後守逹安備中庭瀨に在し時迄長命にて、慶長八年九十二歳にて卒し、法名を妙珠といひしとなり。

雲州の尼子作州へ出張の事

天文十三年十一月、浦上宗景に從ひける作州英田郡妙見村三星城主後藤左衞門勝元(美作守イ)(基イ)より天神山城へ注進して、尼子國久出雲國より兵を出し近日作州へ發向の聞えあり。急ぎ御加勢を越さるべしと有れば、天神山に兵を集めて作州へ軍を出すべき用意頻なる處に、又播州へ入置たる忍の者立歸りていひけるは、當城よりやがて作州へ出陣あるよし小鹽へ聞え、其留守をうかゞひ赤松晴政自らう ち向ひ、天神山を乘取べき謀のよし風聞に候と告げ來る。宗景是を聞て作州へ後詰する事も叶はず猶人數を集めて播州を禦ぐべしとて、先百々田豐前に足輕を添て三石城を守らしむ。其隙に尼子國久作州へ出張し高田・篠吹・伊王山の三城を攻落し、五百餘人を切捨思ふまゝに横行し、宗景に從ひし侍小瀨・今村・竹内・江原・大河原・草刈・市・玉串・蘆田・牧・三浦・福田等に降參させ雲州へ引取ける。三星の城の後藤のみは、よく防戰して終に尼子に降らずしてありける。播州の方は三石等に加勢をこめて守らせける故赤松勢は出ざりけり。

直家砥石城を攻幷落城の事

天文十四年、邑久郡砥石の城主浮田大和備中方へ内通の聞えありし故、宗景是を穿鑿あるに實正なれば、乙子の守喜多三郎左衞門直家に下知して浮田大和を討たしむ。直家勢を乙子より出し天神山よりの加勢をあはせて砥石の城を攻けるに、利あらずして乙子城へ引返す。其翌日却て大和乙子

城へ人數を出して是を攻んとす。直家足輕を出して是をふせぐ。大和利あらずして引退く。其時二手にわかれて一手は金岡村へ引取、一手は北地村へ引取、乙子より池田太郎三郎出て追討す。大和が兒小姓に馬場岩法師といふ者殿して退けるが、北地村の荷蓋島といふ所にて池田と槍を合せて暫し戰ひしが、何れへも勝負付かずして互に引返す。其間に大和が兵卒みな砥石へ引取て、岩法師一人諸勢に後れて引退く。今日岩法師が働きおとなにもはるか勝れりとて、大和大に賞美して則元服させ、馬場次郎四郎職家とぞ名乘らせける。又一日直家乙子より兵を出して砥石城を攻む。近藤常左衞門。星賀十郎。花房亦七郎（後號道悅）。城近く攻寄する。大和士卒を下知して是を防ぐ。馬場次郎四郎白團の腰指して一の城戸を防ぐ。近藤は馬場に詞をかけて、白團の腰指は誰ぞ。今此城を乘るがはやこゝを引くか引かぬかと呼はる。馬場答へて軍の場に出る者に其方は引くか引かぬかといふことやあると詞せり合して攻戰ふ。其時花房又七中指を番て次郎四郎を射る。其矢次郎四郎が楯を持たる指を射制る。星賀十郎も矢繼ばやに楯を二矢まで射付る。其矢みな元矧まで射込む。されども次郎四郎が身には當らず。次郎四郎こらへず楯はかたはらに投捨て切てかゝれば、是につゞきて城兵五十餘人直家の兵に切てかゝる。直家の先陣是に切崩され引色に見ゆる所を、大和再拜（采配）打振て兵を進めて寄手を追うつ。されども直家亂れたる兵を引まとめて晩景に及で乙子城へ兵を入る。其後乙子と砥石と足輕を出して絕えず迫合有けるに、天文十八年の春宇喜多直家天神山の勢と謀し合せて、兩方より人數を出し砥石の城を夜討にす。大和不意を討たれて忽城を乘とられ、備中をさして落行けるを追かけ多く追打し、首をとりて引取ける。此時大和を討取ける者はなかりしかども、後に聞けば大和も其時討死せしとは聞えし。砥石城を攻落しけるよし天神山へ注進ありしかば、此城は島村貫阿彌が居城高取山のならびなれば、島村是を預り守る。直家には今度の賞として奈良郡の地を加恩あり。奈良郡の城を預けられければ直家此城にうつり、乙子城には弟七郎兵衞忠家に岡平内を

添て守らせらる（奈良郡城といふは、上道郡楢原村の西南今は新庄山の城といふ是なりといへり。）

馬場次郎四郎宇喜多直家に仕る事

馬場次郎四郎職家若年ながら武勇名高く、直家も敵ながらも抜群なる働を見及ばれければ、大和滅亡の後に便を求め、呼寄て直家是を扶持し寄力三十人預けらる。其時次郎四郎十八歳なりし。是より前浮田大和砥石にありし時、天文十七年九月に備中勢を誅し合せ、赤坂郡鳥取庄高月城を攻けるに（高月城は高屋村の南松田方の枝城也。）城より伏勢を置て合戰の半に寄手の後より突てかゝる。大和次男●片岡次郎左衛門此伏兵を防で力戰す。馬場次郎四郎も此手にありて戰しが、膝口を箆深に射られて二三町程引退く。其時養泉坊といふ山伏來て其矢を後より拔て捨ければ彌歩行叶はず。其時大和乘替の馬に乘りて又二町程退き山の側に休息して有しに、城兵又八十人計大和が旗本を目にかけ大和を討取らんと突てかゝれば、忽に突立られて引退く。惣勢も氣を失つてともに崩れたちけるを、城中の兵伏兵も一ッにあはせて來るを追ふ事甚急なり。次郎四郎是をみて、先に討死すべきものをこゝ迄遁れ退き雜人の手にかゝらん事是非もなしと、獨り怒りて居たりし處へ傍輩の片山彦三郎（次郎四郎が妹聟なり。）が弟の彦六郎といふ者引返し我馬に次郎四郎をかき乘せて退かしむ。片山は追來る敵と渡り合ふ其隙に次郎四郎二町計乘拔けれども、猶敵したひて十文字の槍を打かけ引落さんとせしを、次郎四郎其槍を打はらひ切折て引取る。彦六郎もよく殿しければ高月の敵も引取ける故、二人とも何の難もなく砥石の城へ歸りける。若年よりかやうの手強き働どもせしもの也。此馬場が先祖は世々備前國の地士にて豐原庄に住す。其前は陸奥國の住人栗屋川二郎貞任の後胤なりしが、備前國邑久郡へ流浪し來て安部某といひて有けり。其後此邑久郡後白川院の御領になりし時、馬場某といふもの郡司となり豐原郷に來り住す。此馬場に一女子あり。是をかの安部氏が妻として一男子を生ず。馬場郡司が外孫なる故に

是を養子とす、是も亦郡司をつとめて馬場伊賀守綱職といふ。其子を馬場新左衛門といふ。是は京都に詰居て卒す。其時亂世故にや其子所領をもうけ傳へず。此次郎四郎職家は新左衛門が孫なり。天文十三年十三歳の時より、浮田大和に仕へ砥石城にあり。後直家に仕へ年を追ゝ重名あり。
按に安部姓は其先神武天皇大和國にて長髓彦（ナガスネヒコ）を御征伐なされ候時、長髓彦が兄安日命（アビノミコト）をば奥州率度濱に流さる。其子孫津輕を領す。齊明天皇の御宇に、安部比羅夫に屬して蝦夷を征する先鋒となりて功ありし故、是を奏し勅勘を免され、又比羅夫の姓をうけて安部と稱す。貞任・宗任則安日命の子孫なりといへば、此馬場が家たはぐひなき舊き家也。

飽浦加地を討幷加地兒島を退く事

兒島郡に飽浦と言ひ加地といふ地侍あり。是はともに佐々木の餘流にて、昔元暦に佐々木三郎盛綱藤戸の海を渡しける先陣の賞に兒島の地を給りしより、其子孫爰に來り住して、元弘・建武の頃、飽浦三郎左衛門尉信胤・加地源太左衛門・加地筑前守貞治の勅撰の哥人加地備前守時秀なと聞きしが末流なりしか。天文二十二年の冬飽浦加地兩家兒島にて爭論の事出來て合戰に及ぶ。終に加地戰ひ負けて舟に取乘り京都に走り、飽浦獨其跡を治めてありしが、後は宗景に屬し又宇喜多に仕へて飽浦美作と言て四千石餘の地を領してありしが、其後いかゞになりし。

一説には飽浦打負て上京し、佐々木義賢を賴みて近江國へ行しといふ。されども此後宗景天神山沒落の時、飽浦美濃といふ者を賴みてしばら〻兒島にかくれしといふこととも有り、又飽浦美作が秀家に仕へしこともあれば此説はとり難し（此一説は江源武鑑に見えしと也。此書僞書なりといへば、飽浦うちまけしといふは誤なるべし。）

浦上宗景と尼子晴久と作州合戰の事

天文二十二年三月中旬、雲州の尼子修理大夫晴久近國の兵を集め二萬八千の勢を以作州へ發向す。作州の國人共大軍に恐れて降參する者も多かりける。此よし天神山に聞えければ、浦上美作守宗景備前美作の兵を集めて天神山を出軍す。其勢一萬五千、高田表に陣をとり又其邊の城々に兵を加へて守らせしばらく對陣し、互に足輕を懸て迫合數度に及びける。かくて五月十二日、尼子の陣より眞木隱岐守・同嫡男上野介・高田彈正忠・淺山・櫻井・牛尾・多胡等三千餘騎高田の郷中に打て出で、敵かゝれとぞ招きける。浦上の先陣是を見て、作州士後藤左衛門（攝津・サイ）勝元・片山杢助久義・蘆田左近將監・三浦元兼が一族福田玄蕃勝昌・同助四郎盛昌・市又二郎・玉串監物・三星・由井・鈴木已下二千餘騎渡り合ひ攻戰けるが、已に浦上勢引色に見えければ、播州侍宇野刑部入道・魚住某等七百餘騎横合にかゝりて出雲勢を突崩す。二陣にひかへたる出雲勢卯山飛驒守・河副美作守・森脇治部大輔・三澤三郎左衛門・黑正（クロマサ）・里田・疋田等二千七百餘騎、崩るゝ味方を右に見て備をすゝめ打てかゝる。宗景是をみて敵荒手にかゝれば味方敗北すべし、後陣入替りて助けよと下知すれば、浦上四郎五郎周景・同權八郎・沼本新兵衛・同八郎・兒島入道・佐用・竹內・粟原等千四五百騎先手を助けて戰ふ。互に懸けつかゝりつ入亂れて戰へども勝負もなく、日もくれに及べば相引に引取て又對陣してありけるが、同二十二日眞木隱岐守・同上野介・同宗右衛門其外一族郎等五百餘騎先に進み、高田・淺山・櫻井・牛尾等一千餘騎二陣に備へて宗景の先陣に討てかゝる。浦上勢に小寺美濃守・黑田・眞壁等三千餘騎備を進めて攻戰ふ。眞木が一族等先日もかひ〲〵敷戰もせざりしを耻ぢて、此度は勇をはげまし戰ひける故、小寺等一戰にかけ立られて散々になりて引退き、三浦・三星・佐用・上月等の作州士二千餘騎皆きたなくも引ものかなと入替りて備をすゝむれば、出雲勢も牛尾・川副一千餘騎にて先陣にかゝり、吉田筑後守同左京亮五百餘騎にて二のめを詰て進めば、播州勢是をみて鹿子・魚住・梶原・志方の者共五千計にて鬨を作りて兵をすゝむ。出雲勢より又尼子紀伊守・嫡子同式部大輔・二男左衛門太夫・三澤・三刀屋

卯山・立木・湯本・庄・赤穴・杉原等一萬計打てかゝりて大軍入亂れ、辰の刻より未の刻迄戰しが、多勢に無勢叶はずして備前勢打負け前後一ッになりて引退く。されども浦上宗景の旗本五千餘騎は備を亂さず是を見て控へてありしに、浦上の一族に賢能齊と言ふ古入道が宗景をいさめて、今御旗本を以て助け給へ、亂れたる敵軍なれば極めて打勝給ふべしとすゝめけれども、宗景いやとよ吾旗本を以て敵の亂れて追討をするを討つは必定是を打崩すべけれ共、又我旗本の戰ひ亂れたる所を見て尼子晴久の旗本を以て討たんは必定也。其時に誰ありて吾をば助けん。さらば其時味方惣敗軍になりて生殘るものは稀なるべし。旗本を堅固に備てあれば、假令先手はみな打負るとも惣崩にはなるまじと靜りかへりて備へけり。尼子方にも是を察しけるか、晴久の旗本を以て宗景を討つべくともせず備を不亂して浦上の敗軍をさのみも追はず引取て備をなし、浦上方にも崩れたる人數をまとめ備へける。其日尼子方へ討取頸數七百五十餘級、浦上方へも三百三十餘級の頸を打取けるとぞ聞えける。かくて浦上宗景は今度味方を多く討たれ手負數しらず。又作州の城ども尼子に攻とられて耻辱とは思へども、又戰ふとも勝利あるべからずと思ひ、敵人數を引取らば又城々をば取かへすべしと思案して、境目の城どもに人數をこめ堅固に守らせ、人數を引て天神山へぞ歸陣ある。尼子は爰より播州まで押入り敵城十七ヶ所攻落し、番勢どもこめて雲州へ歸陣す。其後又天神山より作州へ兵を出して、攻とられし城どもとりかへして番兵も置ける。宗景雲州勢には打負けたれども、是は國を隔たる敵なれば戰をなす事も稀也。近き敵の播州小鹽の赤松晴政は勢ひ衰へ、宗景の兄の政宗は室津に蟄居して家臣みな宗景にしたがひたれば畏るゝ事もなく、松田西備前を治めて尼子家に屬して居れども次第に勢ひ衰へて、備前國中大抵は宗景にしたがひ敵する者すくなし。

卷第二終

中山備中島村貫阿彌を宇喜多討取事

邑久郡砥石城主島村貫阿彌。上道郡沼村龜山城主中山備中（或曰山城）敵に內通して宗景をそむく聞えあれば、宗景是を討つべき內心なれども、所々の合戰隙なくて延引あれば色にも出さずして、やうやく永祿二年の春に至り宇喜多直家申けるは、島村相反き候由則自筆の文をも取出し慥なる證據をも取て告げゝれば、宗景も兼て聞し事なりとて始て此事を謀りて、いかゞして可討とあれば、直家答へて貫阿彌が事は某が祖父の讐にて候へば被仰付候へ、早速討取可申と望む。其時宗景の曰、夫は望にまかすべし。又汝が舅中山備中も謀反の聞えあるは知りたるやとあれば、直家答へて、是も其沙汰承及びたり。舅なれども君の御爲候へば是亦御下知に候はゞ討て參らすべしとうけがふ。宗景其忠義を甚感賞ありて、中山。島村誅罰の事汝一人にまかす間、誤なく謀をめぐらし人數をも出さず外の騷にもならぬやうによくはからへとて歸しける。直家奈良部の城へ歸りて工夫をめぐらし、舅中山の方へ一入したしく懇にして、龜山の城の沼より東茶園畑といふ所に小き茶亭を作り、直家殺生野廻りの時此亭に休らひ、中山をも此所へ呼で、殺生の鳥をこゝにて料理しふる廻ける。度々如此あれば、備中此沼を廻りて遠く至るを愁て沼城より此茶亭へ假り橋をかけんといふ。直家悅びてはしをかけたり。其後は猶たび〳〵彼亭へ往て酒宴に及ぶ。直家謀しすましぬと思ひ、宗景へひそかに告て、最早近日には備中を討取ぬべく覺え候。左もあらば烽火を揚て相圖をなすべし。其時貫

阿彌方へ御使にて中山備中謀反有」之に付、某に被」仰付」御成敗ありし。貫阿彌いそぎ沼に參つて某と謀りて城を堅固に取固むべしと御下知あらば、沼へ來るべし。其時島村をも討取可」申と密々に注進せしかば、宗景人を福岡の邊に置て烽火を守らせける。二月の事なりしに、毎の如く沼村邊にて直家殺生して、暮に及んでかの茶亭に行、其夜は又直に沼城へ入り酒宴をなす。深更に及べば備中も興に乘じて、今夜は夜も更候間是に御逗留あれと言ひしを直家幸のことゝ思ひ、さあらばこゝに逗留仕るべし家來は返すべしとて供に來りし者をよび、今夜は爰に一宿すべし皆歸るべしと下知す。城中にも番の侍どもみな休足させ、女童二三人酌にありし計にてうちとけ物語して、猶夜も更て御休候へとあれば、備中寢所へ入んとする所を、直家刀を取廻す體に見せて拔打に備中を切る。切られながら脇ざしを拔かんとせしを組伏せ首を取り、式臺へ出で戸をひらき門をも內より明て直家の家來を呼ぶ。かねてはかりし事なれば、城下にしのび所々にかくれし直家の侍かけ込み切り廻る。城中の家來は思ひよらぬ事、誰を敵とも知らざれば十方にくれて迯惑ふを、此彼處にて切殺し即時に城を乘取りければ、則相圖の烽火を立つ。宗景より福岡へ出し置ける人是を見て、兼てしめし置きしごとく島村が砥石の城へ使至て、早く沼城へ到り直家に力を合すべきよしの書狀を出しければ、貫阿彌如」斯の謀ありとはしらず、有合の士七八人を連て沼城へ馳來り見れば、はや城門もさしかため靜りてあれば、島村城中へ案內して門をひらかせ本丸へ入る。直家は兼てはかり置たる事なれば貫阿彌を即時に斬殺し、供の郎等も夫々に手當あれば殘らず殺しけり。又跡より來る島村が家來ともば道々に伏を置て打捕り、さて沼城には直家の臣少々殘して守らせ、自分は直に砥石城へ取かけ攻めけるに、城中の兵は悉く沼城へ馳行て殘るものは下部とも計なれば、手にたつ者もなく、たち所に城を乘取て、是も直家の臣を置て守らせける。是等のこと悉く天神山へ注進あれば、宗景大に賞美ありて沼城をすぐに直家に給ひ、中山・島村が所領をも過半與へられければ、やがて沼の城へ

うつり奈良部乙子の城をば家臣をして守らしむ。直家は祖父の讐貫阿彌を討ち、又天神山より采地をまして給ひ城をも多くとり敷て、其勢ひならぶものなかりけり。此後は天神山の下知をもうけず自のはからひにて兵を出し、所々を取敷て直家の臣を分けて入置き守らする取出ども多し。

穝所元常を討取幷龍口城落る事

上道郡龍口の城には穝所治部元常ありて松田に屬せしかば、是を討取らんとて沼の城より浮田(宇喜多)七郎兵衞忠家を大將として、長船又三郎・延原等を出して是を攻んとす。穝所治部(此元常は、文明中福岡合戰の時赤松に屬せし穝所彈正左衛門が末孫なりといふ。)城を出て竹田河原の北に備て戰ふ。宇喜多の先手長船・延原追崩されて敗走す。治部直に忠家が旗本に陣てかゝり是をも追崩すべしと、備みだるゝ所を先手の長船・延原はやく取て返して、元常が勝ほこりたる備へ横を入れ突てかゝれば、治部是に切立られ敗北して段の原をさして引退く。宇喜多勢も其道の狹ければ長くは追はず備をまとめ引取んとする所へ、赤坂郡和田の城主和田伊織行年十九歲、容貌美にして心も剛なりしが、兼て元常と男色の親しみあれば、此合戰を聞き五十騎計にて龍口をすくはんとて出けるが、はや軍はてける所へ進み來て河原に旗を立て討てかゝる。されども浮田(宇喜多)忠家の旗本も先手も備をまとめてひかへたれば強くも戰はず、又日も暮に及びければ互に備を入て己が城々へ備へける。其後も小迫合ども有けれども人數を多く出して合戰するに不レ及其上此龍口の城といふは、北西は險崖にして屏風を立てたるがごとく山下に大河めぐりながれ、南は谷ふかく東計脇田の山につゞきて甚堅固なる城なれば、力攻にしたりとも兵士の損する計にて、攻取ことはかたければ謀を以て攻取んにはしかじと、長船又三郎諫めて直家へ申しけるは、御普(譜)代の子供の中容貌もよく又心ざしもすくやか成るものを撰び給ひて、敵の城中へ入て討給ふ事然るべし。治部は武略よけれども男色にふける者なれば、如レ斯あらば十にして七八は討取事あるべしと言て、

岡清三郎が直家の傍に居たりしを見やりて申ければ、直家も心得うちうなづきて答にも不及座を立られける。夫より一二月も立て岡清三郎事不義の密契有り、其艶書はとりたれども其相手は誰ともしらず拷問して聞極め成敗せんと捕て押こまれぬ。此事誰しりたる事もあらねば、清三郎更にかゝる事有べからずと、家老ともさまぐいひて直家の心をなだめけれども更に聞入れず奥に入ぬ。又三郎より外の家老此密計を實に知らざるか知たるか眥眉をひそめて退たるに、岡平内に來れと有ても のかけにてさゝやきて直家申されけるは、汝清三郎をひそかに圍をぬけさせこゝを落て何とぞ龍口の城へ入しめよ、謀は清三郎に此間よくいひ聞せ置きたりとあれば、平内畏ってひそかに清三郎を圍を出して落しける。其明る日清三郎を城外へ出して誅せよとて牢を明れば清三郎見えず。番の者あきれてかくと申ければ、直家大に怒りて卽時に其牢番をば成敗ありける。扨平内は盜み出せし清三郎を龍口の城の川向牧石原に平内が遠き緣りの僧の草庵を結て住ける者ありければ、是を幸と賴みて其庵に隱し置て、便宜を求て龍口へ奉公せんことを伺ひける。或時治部城下の川に網をひかせて是を見てありしを能き時節と、淸三郎其川岸近き藪陰にて尺八を吹てしばし步みける。治部も又常に尺八を好みければ是を聞て人を遣し見せけるに、其人歸りて申しけるは、年のほど十五六の美少人の尺八をふくにて候とあれば、治部さらば行て見んとて己が劍術の師加藤十藏●見性早川左門●水野織之介かれこれ六七人、小舟を川向の岸につけて其藪かげに行て見れば、清三郎其儘尺八を吹居たり。白き帷子に刀脇指をさし其容顏美麗いはんかたなし。皆々驚き殊に治部は男色を好めばこの清三郎が傍に步みよりける。清三郎驚たる振にてかの草庵へ歸り入らんとするを、治部詞をかけてひきとゞめ、御邊はいかなる人ぞ。かゝる方に有べき方とも思はれず。それのみならず尺八のしらべ耳を驚しぬ。某は龍口の城主也といへば、清三郎驚き手をつき、治部公にてましますにや、某は宇喜多直家に此頃まで仕へたりし岡清三郎と申者なるが、好曲の者にさゝへられて無實の罪をうけ己に

成敗に逢ぬべきを、家老共不便を加へひそかに落し候てあやふき命は助り候へども、よる方なくやう〳〵此草庵に身をかくし置候て、近き中遠き國へも參べく候。もとより敵中より參候ものなれば御不審も候べし。さらばいか樣にも御はからひ候てなき跡をたのみ奉ると、うちしほれて泪ぐみたるさまいとあはれなり。治部男色を好むうへ清三郎がさまの哀なれば、爰に捨置てはいかなる難にか逢べき、又此美童を人にまかせんもいと殘多し。かた〴〵城につれかへらんとおもひきはめて、供にありし加藤十藏をかたへにまねきて、かくやんごとなき少人こゝに捨置なんも、いと殘多くもまた不便にもあれば城につれ歸らん。敵中よりも參りしものといへど野心などあるべき程の年にもあらずと言へば、十藏答て敵中のものに候へば幼年たりとも如何御了簡あれかしと諫むれども更に聞いれず、もし野心有やうもあらば其時手に懸て成敗せんに何のかたき事あるべし。殊にかれにつきて敵中へ謀をなす媒ともなりなんなど、非を理にまげていへば十藏も力及ばず。さて治部近く立寄り清三郎にみづからいひしは其身の難をかくまふべし。我に從て城中へ來るべしとありければ、御情のほど身に餘り辱く覺え候へば、いかでいなとは申奉らん仰にしたがひ參らせん。しかし一まづ庵主へも其よし語り聞せ暇乞をもなし度候と申せば、しばしのこと何かくるしかるべきとて、供にありし郎等一人さしそへて遣し、やがて立歸りければ則引つれてはじめの船にともにうち乘り、城に歸りて身ちかく愛せんと思へども、敵中の者其少年の言葉計にてはうたがはしく、臣下も是をいさめければさすがに身近くもなさゞりしが、沼の城下へ間者を入て事の樣を聞しに、清三郎の物語せしに少しも違もなかりければ、今は疑もとけて身近く寵愛し水野・早川兩人の愛もやゝうとくなりて、唯清三郎と酒をもりて醉臥ぬる事たび〳〵なれば、皆あやふき事に思ひて老臣とも是を諫め、又加藤十藏を和田の城へやりて老臣伊織をたのみ異見を加ふといへども更に聞入れず。清三郎が心底を試みるに更に野心など有ものにはあらずと言ひはなちて是を愛しける。その上此事のはじめ沼

城にて言語もならぬ程に老ぼれたる乞食を、清三郎養ひて己が母と唱へ置てありしを沼城より盜み出し龍口の城に養ひ置、清三郎母と稱して朝夕いと念頃につかへける。たれか是を謀とは知るべき。是等の事には老臣等も疑を少し散じければ其後は强ても諫めざれば、彌ゝ治部は打とけて清三郎のみを相手として酒宴の隙なし。清三郎も情のあつきになれて心命をもなげうちつかへけるさまに見すれば、治部かくこそあるべしと露心おく事もなく、其外もこの奉公のやうを見て今は疑心も何となく解て月日も經ければ、今はみな心置さまもなきを清三郎見すまし、永祿四年六月半の頃暑さを避て城の北の流にのぞみたる凉み所にて河水を見おろし、清三郎とともに尺八をふき數盃をくみて沈醉し、清三郎が膝を枕になし時をうつして眠りける。其外はあたりに人もなければ今こそよき時節なりと思ひ、治部が脇指側にありしを引よせて心もとをさし首打落し、袴をぬぎて首をつゝみ河の上にそばだちたる嶮岨のつゞら折を下りて、いつもつなぎ置てある治部が川遊びする小舟の有を引よせ、首を先投入れつゞきて乘らんとする所へ、早川左門此音を聞つけて凉所へ行てみれば主人朱になりて首なし。是は清三郎が所爲なるべしと、清三郎が殿を切りたると二三聲呼りすてゝ先追かけて出て見れば、北の嶮岨を下るものかげ見えしをつゞきて追行、其舟のきはにて追付き討てかゝるを清三郎ふりかへりて切付れば、左門が髮のはづれより左の肩先を切さげたり。清三郎が肩先を切さきはづれに切けれども、うす手なれば二の太刀にて左門が眉間を切付たゝみ重て切捨ける。左門は時に十五歲なりしとぞ。其首をばとらず清三郎は急ぎ件の舟に打乘、棹さして川を下り打あかり迯行く。城兵ども舟を求めて跡を追へども、時ものびければ尋得ずして清三郎は事故なく沼の城へぞ歸りける。先清三郎は岡平内方へ行きければ則是をつれて直家の前に出て治部が首を出しければ、直家大きに驚き幼年にて此謀を仕負せんことかたきことなれば、終には殺されやせましと不便に思ひけるに、よくも討取たりと且歡び且感じて賞功淺からず。其明の日則前髮をとらせて岡剛

介とぞ名乘らせける。龍口の城には老臣山口與市衆を集めて、主人の生害今はくやむとも是非に不及、此讐を報し吊ひをなさんことを衆議して論ずるに、沼の城へ押よせ無二の一戰して討死せんといふ者も有り、又和田の城主伊織を招きて大將として籠城せんともいへど、吾城を捨て龍口城に籠らん事もなりがたしといへば、さらば此山口與一を大將として楯籠るべしと衆議定て、一先穝所が家臣籠りける。沼よりも此虛に乘じて龍口の城を攻む。今は主人なければ兵氣一ならずして防戰も叶はず又落行もの多ければ、山口與一も籠城するに力なく、されども老臣の身なれば士卒と共に落行ことも面目なく覺えて、せん方なく三曲輪にて腹切て失ければ、誰城を守るものなくちり〳〵に落うせて、宇喜多勢入かはり所々に火を放ち一時に燒はらひ、直に和田の城をも攻取ければ和田伊織は城を落て金川の城へぞ立退きける。

一說には、岡清三郎一旦龍口城の川向舟山城主須々木豐前に奉公して後、穝所が方へ行しと、其時いつはりて母とせし乞食女を牧石河原にて切殺し獄門にかけられしともいふ。又一說には治部を討ちしは岡本權之丞といふ。又龍口の城主穝所治部を修理ともいふ。されども本文に記せる所實說なるがごとし。岡剛介此後も武功をかさね大身となりて、後には岡信濃といふ。或曰、穝所治部が小兒姓早川左門龍口の城下北の川端にて清三郎に討れけるを、其所に葬り其塚今にありといふ。尋ぬべし。

浦上政宗父子生害幷淸宗殺さるゝ事

浦上宗景の兄掃部助政宗は、播州室の城に有けれども其性愚にありければ、宗景にせばめられて居たりける。其政宗の嫡子を小次郎といふ（一に云與四郎）姬路の城主黑田官兵衞娘を此小次郎妻として永祿七年正月十一日婚禮ありしに、其夜のさわぎに小鹽の赤松晴政より忍びを入て政宗も小次郎も父子と

も殺害さすれども、小次郎弟三郎九郎清宗といふ者有ければ、其臣江見河原源五郎等取立て室の城をとり治めける政宗の法名は實巖祐眞といふ。小二郎の法名は壽盛といふ。其黒田の娘をば弟の三郎九郎の妻として男子一人出生す。是を久松といふ。しかるに江見江原を天神山の宗景よりかたらひて、三郎九郎を討取て出しなば所領を與ふべしとありければ、是に組して永祿十年五月十八日月待の夜、三郎九郎を弑して源五郎は天神山へぞ逃行ける。源五郎が母をば室に殘し置たりしを串ざしにして殺されける。其時の狂歌に、源五郎かねて鼓の上手にてありければ、

三拍子そろひてけりな江見河原主うち親うち鼓さへうつ

三郎九郎清宗法名江月惠觀といふ。其子久松幼年にて、室にも住がたくて小鹽に行て居けるが、九歳の時に宇喜多直家備前岡山へむかへとりけるとぞ。

宇喜多と松田和睦并三村家親備前へ働く事

松田左近將監元成、文明の始赤松をそむき西備前を治めしより後は、代々浦上と合戰に及び宇喜多と戰ふこと隙なくて尼子へ屬して有しが、近年尼子家衰へぬれば松田亦勢ひ失ひけるを見て、直家より和議の事を言やりければ、則領掌して是よりは宗景の先鋒となり、則松田當左近將監天神山へ出仕して、直家の娘二人ありしを宗景の下知にて一人は此左近將監に嫁し、一人をば作州三星城主後藤攝津守勝元妻となさしむ。又備中國成羽城主三村紀伊守家親、年來毛利元就の麾下に成て伯州不動が嶽或は法性寺の城にありて尼子と合戰ひまなし。故に自國の迫合なかりければ、松田等備中に出て土地をおかす事多し。今は尼子衰へて雲州富田一城になりければ、三村もしばらく本國に歸り領分をも治め、松田をも討ばやと毛利家に乞ければ、元就聞て尤也望にまかすべしとて備中へ三村を歸されける。さて三村備中へ歸てきけば、松田は宇喜多と和睦し浦上へ屬し備中へ働らくべ

しと聞えければ、先三村備前へ働出て岡山の城を攻め、舟山の城を攻て金光與二郎・須々木豐前等に降參させて備中へ歸りける。

三村家親作州へ働幷馬場高名の事

三村紀伊守、永祿八年五月には又作州に出陣して後藤攝津守勝元（基イ）が三星の城を攻む。勝元は天神山の麾下にて又直家の婿なれば、加勢として直家より馬場次郎四郎に足輕をそへて遣す。敵城を攻むれば城中よりも兵を出して日々迫合あり。五月二十四日、次郎四郎愛宕精進の爲に城の前の川に出て沐浴しけるに、敵出づるを見て立歸り具足を着して出けるに、城兵一人先達て敵と槍を合す。又外に敵二人弓にて槍脇を詰る。次郎四郎是をみて其弓を持たる二人の敵へ突てかゝる。餘りに間の近ければ敵矢を放つに不ㇾ及刀を拔て切て掛れば、槍を以て次郎四郎是を強く突立れば、不ㇾ叶して逃て行く。又敵一人槍を以てかゝれば是と槍を合せしが、始め槍を合せたる敵味方も物別れして、次郎四郎が槍を合せてある後より突てかゝる。前後の敵を一方へ引請んと少し退て二人と戰ふ。よきすき間をみて二本の槍を一所に手取にしてはなさぬ故、二人ながら槍を突放て退くを追かけ行き、一人の敵跪き倒れければ直に押へふせ首をとる。其所へ敵二三人來て馬場が兜を取て引倒さんとする所を切拂ひ又切てかゝれば、馬場が勇に恐れて近付くものなし。其場はゝや敵陣に近く又敵十四五人計槍にてひかへて見え、また續く味方の勢もなければ次郎四郎も引退く。敵少々追來れども切拂々て三星城へ歸りける。其後も小迫合はありけれども強て合戰もなし。或日狂歌を書て矢文を城中へ射る。

　井樓を上て攻るぞ三星を天神そへて周匝くひ物

城中より額田與二右衞門返歌を書て射かへす。

天神の祈のつよき三星をなりはすまひぞ家ちかに居れなどいふ事ありて、三村も强てもせめず備中へ歸りける。馬場次郞四郞が此度の槍天神山へ聞えければ、早々宗景より感狀を出されける。

今度於三星山下及合戰徑槍令粉骨之段無比類候。恩賞必追而可相計候。恐惶謹言。

五月二十八日　宗景在判

馬場次郞四郞殿

三村再作州働き幷家親うたるゝ事

としも明け永祿九年の春になりて、重ねて三村家親作州へ働き出、備前へも打入べきよし聞えければ、宇喜多安からず思ひ、何とぞ謀を以て三村を打取べしと工夫ありて、津高郡加茂に居住せし浪人侍に遠藤又次郞、同喜三郞といふ兄弟の者あり。初めは成羽に久敷ありて家親をもよく見知り家中にも知音もあり。又作州境に今居れば土地の案内もよく知りたれば、よき間者と思ひて兄弟を呼寄て何とぞ家親が陣所へ忍入て謀を以て殺すべき樣やあると、ひそかに賴まれければ、又次郞承り、仰畏り候。され共一大事の御賴にて候へば、三村は大名にて人數も多く候へば、某が身にて打取らんこと甚かたき事に候。され共某を御見立御賴被成候事生前の面目にて候へば、身命を捨てゝ謀をなし可申候。されども功をとげずして打とられ命をうしなひ候はゞ、妻子をばよきに賴み奉るといひて請がひければ、直家大に悅び、功をとげば賞は望に任すべしとありて、遠藤兄弟作州へ立越て、彼方此方と忍びける。三村家親此度は穗村の興禪寺を本陣として其邊に皆々軍兵ども陣取ける。常に其寺の便宜案内はよく知りたれば、敵陣の間を忍び入て兄弟申合せ、鐵砲にてねらひ搏殺さんとぞ謀りける。二月五日の夜の事なれば月も入り、夜廻りの者に紛れて客殿の庭へ忍び入りうかゞ

へば、本堂の方に家親が聲聞ゆれば、椽へ上り唾にて障子の紙を濕し押破り見れば、家人を集めて家親は佛檀の前に寄添て軍評定をせしと聞ゆ。又次郎かくし持たりし短き鐵砲に二ツ玉込たるにて是をうたんと、かの障子の破よりねらひけるに火繩立消して玉出でず。則鐵砲を引きその筒を椽の下へかくし置き、又夜廻りの番所へ行て篝火によりて寒き夜のうさなど物語り、しづかにして羽織の裾を火の中へ入る。番人物燒け臭しといふ。喜三郎龍末にて某が羽織を燒たりとて、もみ消すふりにて其所をさりげなく立さり、小陰にて其火を火繩にうつし付て又次郎に渡す。又次郎是をとりて又元の椽に上りてのぞき見れば、今度は家親はじめの佛檀にもたれかゝり眠り居たるを幸とて、ねらひ澄し搏たれば胸を打貫きぬと見ゆ。兄弟ども是をよく見極めて堂の後の藪に隱れて居たるに、寺中大きに騷ぎけるが程なく靜りぬ。さらば忍び出んとせしに、最前の鐵砲椽の上に其儘置たり。是を落し置なば以後に隱したりといはれんと思ひ、再び立歸りみればもとの所に鐵砲の其まゝありけるを提げ、藪をくゞりて忍び出て事故なく備前へかへり、沼の城に至り其夜の次第を細々と語ければ、直家大方ならず悅び、猶其實否を極めんため作州へ忍びをやりて聞しに、家親死たるといふ沙汰もなくて今日は備前へ打入るとて、みな兵粮などつかひて軍立ある體を聞て歸りければ、直家も不審しけるが又聞えしは、三村の軍勢途中より俄に備前へはむかはず備中へむけて歸陣したり。是家臣三村孫兵衞諸軍を鎭めん爲に家親の死去をかくして、事靜に成羽へ軍を入けるにて有けり。扨歸り着て後家親の死去を披露ありければ、家臣誠に暗夜に燈をうしなひしがごとく、あきれてぞ居たりける。其後興禪寺にて家親打殺されし事世にかくれなければ、其賞として遠藤又次郎に千石の地をあて行はれける。それより多く武功をかさねて浮田の號をゆるされ領知も加へられて、後には浮田河内と名乘り四千五百石の地を領しける。弟の喜三郎も同じく賞を行はれ、是も後に遠藤修理といひける。

一說に、家親を遠藤が鐵砲にて搏しは作州弓削寺といひ、又佛經寺にての事ともいふ。共に誤也。
久米郡穗村の興禪寺に、後迄佛檀の腰板に其鐵砲の玉あとありしと、見し人語りし。

三村五郎兵衞紀伊守の弔合戰討死の事

かくて備中國成羽には、三村紀伊守家親を葬り佛事などなし、忌中も過ぎて老臣等打寄り弔合戰をせん事を論じけるに、三村五郎兵衞進出て言けるは、先君あへなく宇喜多が爲に命を失給ふ事、其憤骨髓に融つて無念なれば弔合戰日を延がたし。其上おめ〳〵としてあらん事當家の恥辱申に不及、一日も早く軍を出し先君の讐宇喜多を（脫あるか）其首を手向奉らん外なし。若、運つきて戰負け討死せば先君の死に從へるなりと、無二の覺悟に言出しければ、三村孫兵衞親成答て、五郎兵衞論ずる處一理あれども、今此怒にまかせて戰ふは味方の兵を多く損じて戰勝利あるべからず。其上又敵に勝を付て後度の戰なるべからじ。暫く時を待ち元親・實親（家親の二男三男也）の兩君を守り立て、成長の上是を大將として一戰を遂げんこそ全き忠義なるべしといひければ、一族郎黨時に當り打死せん命の惜さにや、皆孫兵衞が旨に同意して此謀尤なりと是に決定しける。されども五郎兵衞は是に同心せず。皆孫兵衞が遠き慮に同意して、家中一統に存命して若君を守り立奉り忠義をなせば御跡危き事なし。此五郎兵衞に於ては愚昧にして、命ながらへたりとも君をたすけ奉る才力ある身にあらねば、吾一人は敵に向ひ弔合戰をなし、討死して君恩に命を奉る外の存念なしとて其座を立てば、其一族若黨五十餘人ひし〳〵と出立、其外家親に厚恩を蒙りたる士六七輩是に同じて皆一途に討死を定て禪院に不殘立入り、松峰和尙といふ禪僧に末期の一喝をうけ、面々法名を過去帳に記し燒香して直に出陣し、永祿九年四月備前境より沼城の直家へ使を立て、三村五郎兵衞今度主君三村家親の弔合戰に罷向ひたりと言送り、上道郡へ打入ける。其勢僅七八十、百にも不足勢を二手に分て、一手は五郎兵衞將と

なりて釣の渡より南に向ふ。一手は矢津越より沼城へ押寄る。直家是を聞て七郎兵衛忠家・戸川・岡長船・小原等に二千餘人を添て三村勢に出向ふ。宇喜多勢も三備に分て一手は南の勢にむかひ、一手は矢津越より來る敵に向ふ。一手は遊軍となす。是は此度の戰は最前の憤をふかく思ひつめたる弔合戰なれば、小勢ながらも必死の敵にて味方危き故、此遊軍にて弱きを援けんとて控たるが、五郎兵衛が備五十餘騎一手にして思ひ切たる事なれば、弓鐵砲を射放つと均しく突て懸る。長船が備是をうけて暫く迫合たゝかひしが長船切立らる。二の目に備たる岡是をうけて渡り合ひ切結ぶ。是もあやうく見えければ、七郎兵衛忠家横槍を入れて突崩す。必死を極めたる三村勢なれば引も退ず、三村五郎兵衛が郎黨三田權兵衛・山縣作助・兒島十郎太郎枕をならべて討死す。五郎兵衛も四方八方切て廻り終に其所にて討死す。大將被レ討ければ此手は是にて散じける。扨矢津へ向ひたる勢には戸川平右衛門馳せ向ふ。是も同じく必死の兵なれば、鋒先甚鋭して戸川勢打負け引退く。其時十田の上盤の目といふ所にて三村が侍五人槍先を揃へて突てかゝる。馬場重助（次郎四郎名を改め重助といふ。）爰にむかつて先弓を以て敵一人を射伏たり。殘る兵と槍を合て突合けるが、續く味方もなく戸川が備も引取ると見えければ、突拂ひ／＼て山の腰を傳ひて退く所に、味方一人敵と渡り合ふ。手を負て既に討たるべく見えければ、敵を突はらひ其の味方の手負を助けて引退く。其時味方の備よりも取て返し來て切合たゝかふ。敵必死を極めてつよしといへども、小勢なれば終に味方の大勢に戰ひまけて、三村勢悉く討死して果にける。されども五郎兵衛をはじめ七十餘人、命を君恩に報じ名を千載に殘しける。宇喜多方にも小原藤内・高月十郎太郎・矢島源六・宇佐美兵藏等四十七人討死し、手負百餘人に及びける。今度は馬場重助へ直家より感狀を出しける。

去十日盤月被レ及二合戰一於二槍脇一敵一人被二射伏一剰引退刻、後陣輩合戰之體被二見掛一被レ返候由、志之程神妙候。必可レ有二褒美一者也。狀如レ件。

五月十五日　　直家 在判

馬場重助殿

宇喜多と毛利家和睦の事

宇喜多直家永祿九年迄は毛利元就にも尼子晴久にも敵して、作州鷹巢城を攻落させて花房助兵衞職之城主江見次郎を討取て歸りける。又備中にては日幡八郎左衞門毛利勢の圍をうけて籠城しけるが沼城へ援兵を乞ければ、又花房助兵衞に足輕を添てさし遣し、是を助けて籠城し終に毛利勢を追退けぬ。しかるに此頃天神山の浦上宗景より毛利輝元へ使を立て、近年家臣宇喜多直家逆威を振ひ候。是を誅罰せんと存候。援兵を賴入よしを申遣す。又備中の三村家よりは、父の家親を宇喜多に討たれ此讐を報ぜんと存候。あはれ御加勢を被下候へ。此恨を散せんが爲に備前を切從へ國をば進上申べしと言やりける。此事共直家傳へ聞て、今毛利と中違して近國の敵に力を添られては叶はじと思ひ、小早川隆景へ角南隼人入道如慶を使に遣して安國寺を以て深く賴み、浦上・三村を捨て加勢を某に給はり候はゞ、備前半國をば可進と有ければ、其節は元就は老衰して吉川元春・小早川隆景がはからひなれば、兄弟雲州の陣所にて評議して、上方へ手遣をなさんにはとく宇喜多直家に力を加へ、備前を味方に屬けて働んに利ありとて、宇喜多と和をなして合力すべしとの答にて、角南如慶歸りければ、浦上・三村とは毛利家手切に及びける。宇喜多が武威いよ／＼盛になりにける。

澤田村明禪寺城落城の事

三村家親殺されし後、二男同修理亮元親・三男孫二郎實親・家親の弟同宮內少輔等相謀て備中の城々に兵を籠め、備前にても岡山城主金光與次郎・舟山城主須々木豐前・中島の城主中島大炊等を味方

にして宇喜多勢を防ぎ守りければ、直家も容易に備中へ人數を出す事もならず、却て三村總て備中國中の兵をかり集め、大軍を以て備前へ働き出て宇喜多と合戰し、敵の仇を報せんと用意する事しきりなり。宇喜多直家是を聞て沼城の防戰の爲に、永祿九年秋上道郡澤田村の明禪寺山に城を築て番勢を置きけるに、備中より兵を出し所々にて小攻合ありて、明禪寺の城へ敵取かけ攻ける。城中よりも兵を出して防ぎ戰ふ。馬場重助山の麓に下りて防ぐ。其中に大溝あり、重介飛越ると向の岸をふみ崩し轉ぶ所を敵鑓にて突く。重助起きあがる勢に、敵槍を突はづし行きあまる。重助即ち刀を拔て切伏たり。其所へ敵又一人來りて重介に討てかゝる。是をも打取り首二ツ提げて城に入て其日の迫合は果にけり。明る永祿十年春、御野郡へ備中勢出張て風雨烈しき夜明禪寺の城へ夜打をかけ、澤田村を燒て城へ攻入る。城中も不意を討れて大きに周章す。此火の光に松明もたてず備中勢所々より攻入ければ、前後も辨へず敵味方も分りかねければ、防ぎかねて終に一の木戶を乘とられ多勢込入ぬれば、城兵せんかたなく南の山越に中川へ出て、漸々沼の城へ引取ける。討たるゝ者も五六十人に及びける。其跡へは備中勢入替り、根矢與七郞・藥師寺彌七郞に人數百五十餘人を添て明禪寺の城を守らせける。

按ずるに、澤田村妙禪寺山の城を近世に記せるものに皆妙善寺山と書く。是は御野郡津島村に妙善寺あるに混じて誤れるにや。寂室語錄に明禪寺にて作る所の詩一章あり。文明中に註せる首書に明禪寺者備前國澤田村に在りと書きたり。則其寺の廢せし跡の山なるべし。

明禪寺合戰備中勢の敗軍

宇喜多直家より備中方へ屬せし諸士へ賄し謀を廻して內通せしめ、ことに岡山城主金光與次郞・中島の中島大炊等は、備中の味方は遠く沼城の直家は近き故、內々宇喜多へ通じける。又船山の須々木

豐前も同意しければ、明禪寺山の根矢・藥師寺方へも沼より通じて、岡山・中島・舟山等も皆味方へ可ㇾ參よしなり。其城敵中に在て始終守りつめ難し。降參あらば所知をあて行ふべし。左なくば兵を出して其城乘崩すべしと言やりければ、根矢・藥師寺評議して、舟山・岡山等の味方沼へ可ㇾ參といふは直家の僞なるべし。其上根矢・藥師寺とも妻子を備中に置きたれば宇喜多に通ずることなるべからじ。されども此城無勢なれば直家大軍にて攻んときは防禦の術なしがたし。早く備中へ此由を告げて援兵をうくべしと飛脚を立て加勢を乞ひ、沼へは手切の返答に及びける。直家これに依て考るに、明禪寺の城を攻めば備中勢必後詰あるべし。左あらば敵を味方地へ引出して討んに利有るべし幸の事と工夫ありて、金光與二郎へ直家より賴にて、近日明禪寺城を攻ば其時三村後詰あるべし。左あらば有無の一戰をして三村を討取べき間、必備中勢後詰有べき樣に誘出すべしと言やれば、金光領掌して石川左衛門尉久智（三村元親の姉聟也）へ使を以て云やりけるは、近日直家出陣して明禪寺城を攻むべき聞えあり。其時早々御出陣ありて城中と牒し合て御討あらば御勝利疑あるべからじ。此事三村家へ牒し合さるべしと言やりければ早速成羽へ注進あり。又明禪寺の根矢・藥師寺よりも飛脚にて言やること同じければ、旁三村一族相談ありて、直家は不倶戴天の讎なり。此度直家明禪寺の城を攻むるこそ幸なれ。天のあたふる所なれば大軍を以て馳むかひ、一擧に直家を討取り其勢に浦上をも打亡し、備前を皆取敷べし。殊に此節毛利家出雲へ働て留守なれば加勢の氣遣もなし。能き時節到來出陣を急ぐべしと、備中にて三村等勢をかり催しける。惣大將は三村修理亮元親・石川左衛門尉久智・植木下總守秀長・庄式部少輔元祐等、其勢合て一萬餘騎の着到を待つて、すでに備前へ發向す。宇喜多直家は今日沼城を打立て五千餘人を五段に備ふ。本陣は古津の山はなに備へ惣勢は目黑村邊までに控へたり。直家の先手を進めて明禪寺の城へ押寄、先一戰して暫く息を繼ぎたる所へ斥候者馳歸り、後攻の備中勢三手に分れて押向ひ候。一手は富山の城の南に付て押出し、一手は首村より上伊福村通

り中道へ來り、又一手は山に附津島御野村へ通り、釣の渡へかゝると見え候と告る。直家是を聞くと等しく、兜の緒をしめ馬に打乘り再拜打振て、唯今明禪寺城を乘りとらずば三村が虜となるべし。又今此城を攻居り、取て返して備中勢を切崩さん事は竈上の塵を拂ふが如し。はや攻落せものどもとて田畠の中を一文字に乘切て明禪寺山の城下に付く。大將かくのごとくなれば諸勢蟻附して揉立ければ、城中身命を捨てゝ防げども、寄手の勢に忽ち城を乘取られて櫓々に火を放ち寄手切て廻れば、根矢も藥師寺も力盡て南の山傳ひに瓶井山へ引退き、引殘りたるものどもは度を失て所々に逃惑ふを追詰追詰打殺す。扨城中不ㇾ殘燒あがれば、後詰の備中勢遙かに城中の火の手を見て、兼て牒し合て前後より可ㇾ討といふ謀も相違して、揉にもんで馳來れども行程十餘町を隔たれば爲方なし。直家は城を攻落し不ㇾ殘燒いて其山上に旗本の備を立て、靜り返つて相待ける。かくて備中勢備前へ打入り辛川表にて手配し、先陣庄元祐七十餘人金光與次郎宗高を案內者として、富山の南の野中を斜に押て春日社の前なる川瀨を越て、瓶井山に側て明禪寺山の城へ入らんとす。中の手は石川左衞門尉久智五千餘人、上居福村の中道より岡山の城の北なる瀨を渡り原尾島村へ押出る。是は明禪寺城を攻る直家の後陣へ切かゝらんとす。惣大將三村元親は中島大炊を案內者として八千餘人、釣の渡を越て湯迫村より北の山へ側て四御神村を經て、矢津越に沼城へ寄せて留守を乘取らんと謀る。先陣まづ春日の宮の前の川を越て三掉山をさして備を進むる所に、明禪寺山の城兵どもの落來るものに行逢て是はいかにと言程もなく、宇喜多の先手明石・戶川・長船・浮田忠家等段々に備を進め、繰かへ〳〵鐵炮を搏かけ、三棹山の高みより鋒先を揃て突てかゝれば、備中勢思の外に城を乘取られおくれ心の付たる所へ、宇喜多勢は勝軍せし勢にて眞驀に成て突かゝれば、庄元祐の備忽打負て崩立ち引退くを、元祐再拜打振り、きたなし者共、爰を去て後日恥辱遁るべからじと兵をいさむれ共、聞もいれず右往左往に引て行き、又ふみ留り戰つて討たるゝ者も數をしらず。されども元祐は家臣有岡某

と二人旗本に五十人計備へてありしが、今は爲方なし是迄なり。討死せんと、延原土佐が備へ討てかゝり火を散らして戰へば、延原切立られ色めく所へ、二陣につゞきたる浮田忠家横合に突てかゝる。朱の四半に兇の字を書たる印なれば、元祐是は直家の一族と見えたり。進んで打てや者どもと大聲に呼りて爰を最期と戰ふ。浮田は又一人ももらさず討取れと下知すれば、元祐の兵三十餘人枕をならべて討れける。元祐も手を負たるを家臣助けて引取らんとする所を、大將と見えければ能勢修理しきりに追て德興寺の東一町計にて元祐を打取りける。大將討死すれば、まづ此下の手惣敗軍にぞなりにけり。隱德記には、元祐此後備中にて討死といへども是は誤なり。此時此所にて備中の兵士討ち殺し其骸を穴をほりうづめ塚をつきしといふ。今は塚はなし。玉峰院の門内に今大松あり。則塚のありし所といふ。中の手の石川左衞門尉久智は直家の明禪寺の城を攻に、後を打んと原尾島の西迄進みたれども、はや城は落ちしと覺えて火の手揚りたれば、案に相違して先備をこゝに踏とめ控たる處に、下へ廻りたる元祐が勢も大崩と見えて引[illegible]ば、石川久智もあきれて中島加賀といふ老功の侍をよびて、兼ての謀大に違たれば只今になり直家の備へ懸りて戰ふとも勝利あるべからず。上の手の元親の備と一所になりて直家と一戰をなさんはいかにとあれば、加賀答へて仰御尤に候。某が存ずる所は敵の近づかぬ間に川をあなたへ退き、西の岸に備を立て直家川を渡してかゝらん所を半途を討ち給はんに利可有か、其外にはかくのごとく謀相違したる上はせんかたなしといふ。又石川が老臣等敢て是に從はず面々に軍策を演ける間に、浮田與太郎元家按に此時與太郎は甚幼年なるべし。浮田氏の別人を與太郎と記し誤しなるべし。河本對馬・花房助兵衞三手に備て石川が備へ近々と進みかゝる。石川久智止む事を得ず原尾島村の中道に備を立て待かけたり。浮田先陣に進んで討てかゝり相戰ふ。河本花房は左右より靜に備を進めて、戰ひ半ばに兩方より鑓を入て突かゝれば、石川勢馳立られ中島加賀をはじめとして多く討死して、石川もあやふく見えけるを、伊勢新左衞門石川を諫て竹田村の東迄引取らせ、爰にて敗軍を集めて備へける。浮田勢は逃る敵を八幡村の邊迄追行くを、石川やうやく備を立直し、浮田勢の亂れて追を待うけ又引返し戰

ければ、浮田戰ひまけ討るゝものも多く已に危く見えけるが、やう〳〵小町村迄引退く。石川勢も前の敗軍の跡なれば强ても追はず引取りける。さて上の手の惣大將三村修理亮元親は今朝巳刻釣の渡を越ゆ。若、松田金川より舟にて下る事もあらんと、須々木豐前をば其押の爲に舟山に殘し、中島の中島大炊を案內者として土田矢津越をして、沼城の宇喜多が留主へ切入て城を乘取らんと進み行けるが、四御神村の邊を過る時明禪寺の城の火の手見えければ、はや落城せしと見る所に又南の二手段々敗軍せしと見ゆれば、元親の備惣兵さわぎ立て色めき後陣より引返す。其上此方には所々小川多くて足場あしければさわぎて引取り、人馬溝川に落入る者多くて彌〻みだれ崩れける。されども元親の旗本は備を亂さず。後陣の亂るゝを見ながら沼へは越えず南へ向て備をすゝめ、明禪寺の西の小丸山に直家の備へしを見かけ是と一戰せんとおし向ふ。直家も元親のかゝり來るを見て備を山より下し、高屋村に備へて明石飛彈・岡剛介を前備として待かけし所へ、元親は親の讐のことなれば、溝をも疇をも構はず眞一文字にかゝり來り、明石・岡が備へ命をもをしまず切てかゝる。其勢に明石も岡も切立られて崩立ち、三村爰をせんどゝ追詰て直に直家の旗本へ切かゝらんとする所へ、最前に國富村にて備中勢下の手に切勝たる戶川・長船・浮田・延原引取て後陣に控たるに、直家の先手切立らるゝを見て靜々と備を進め、元親の旗本へ横合より討てかゝる。此勢に明石も岡も取て返して戰ひ直家の旗本も又すゝみて三方より三村の旗本を討ければ、元親も狼狽し忽敗軍す。元親怒つて今は討死すべき時なりと馬引返し進む所を、家人馬の口に取付て西に引向引退けば、此手も亦惣敗軍になりて竹田村の北まで引て行き、宇喜多勢追付して三村が兵を討取事數をしらず。され共直家みづから長追を制し軍をまとめて引取ければ、三村も石川も釣の渡を越て漸く備中へ引退ける。此日備中上中下三ヶ所の手にて戰死せし兵士惣兵あげて記すにいとまあらず。是を永祿十年の明禪寺崩といひて、其頃にて備前の大合戰、直家の第一の勝軍なり。

金光須々木中島等宇喜多へ降參の事

此度直家備中の大軍に打勝ち三村等敗軍ありければ、兼て内通せし備中に隨ひし西備前の城主共皆々沼の城へ降りける。先岡山の城主金光與次郎宗高、則、沼の城へ出仕して直家の麾下に屬しければ、岡山の城を其儘守らしむ。船山城主須々木豐前は嫡子四郎兵衞を以て、直家へ此たびの勝利の嘉儀を演て御味方に可レ參といひける。直家是を聞き豐前兼て味方へ内通せし者なれば、今度備中勢の退口に追討して首の一ツにても持參すべきに、元親が下知をうけて金川の押へをして今更降參表裏の侍なり。されども降人を殺すべきにもあらずとて、戸川平右衞門に下知して須々木父子が領知を取あげられ、豐前は隱居させ剃髮して行連と改め茶領をあたへ、四郎兵衞は直家に仕へて所知少し賜ひて、舟山釣の兩城も破却せられける。中島の中島大炊は三村が矢津へ向ふ案内者はしたれども、敗軍の時引殘りて石川が勢の退くを追討して首一ツ打取、沼へ持參して降參す。しかるに大炊一族備中にありし中島新左衞門といふ者、大炊が直家へ降り備中勢を追討せし事を惡みて、中島に殘り居て中島の城の邊に榎の大木ありし其うつろなる所に立隱れて、大炊が沼より歸るを待居て何心なく歸る處を切殺して備中に歸りける。此新左衞門をも後に又大炊といふ。其切殺されし大炊が子源三郎と言て直家の臣となる。今に其子孫中島村にありて、其所に新左衞門が隱れし榎の古木も今にのこれり。

一説に中島の中島大炊討れしは、是より前永祿四年龍口山落城の時、和田の城をも中島の城をも宇喜多より攻落す。其時城主大炊城を落て榎のうつろに隱れ居しを搜し出して討しとも云ひ、又備中の中島新左衞門後に大炊といひしは同名なれども、是は本の稱號二階堂にて一族にてはなしといふ。其頃當國の中島大炊、備前國の中島大炊、筑前國高橋紹運が臣者中島左馬介が子に中島大

*庄元資墓は國富なる今第六高等學校寄宿舎の裏にあり。

炊とて、西國に同名三人ありてまぎらはしき事ありといふ。

宇喜多備中國へ働の事

直家は三村元親に戰勝て後、毛利家へ使を立て彌御手に屬すべしと言やる。又三村は阿州の三好家を賴むよし聞えて毛利家とは彌手切になれば、近々毛利家出軍あり三村を討つべし。直家にも備中へ發向あれとの返答也。直家大きに悅び備中表へ人數を出し所々の城を攻らる。まづ永祿十年五月に撫川の郷内芝場の城を攻取べしとて、戸川平右衞門一手を以て攻けるが、小城なれども地形堅固にて、前には川有り沼廻りて、南に庭瀨城あり、北に日畑城あり、皆敵地なれば押の兵を置て芝場の城戸近く攻寄せ、井樓を組上げ鐵砲を放ちかけ、明日は乘取るべしといふ所へ、直家思慮あつて花房助兵衞を使として戸川にはやく引取よとの事也。されども早攻落すべく見えし程なれば、助兵衞心得てはやく乘とれとの御使なりと言傳へて、助兵衞一番に乘込み戸川が兵續て攻入り、城中の兵をことごとく追ひ拂ひ火をかけて城を燒はらひてぞ歸りける。同き秋八月中旬、備中國へ直家働き諸城を攻落せよと下知して、浮田七郎兵衞を大將とし、長船又右衞門・沼本新右衞門・明石飛驒・角南隼人等九千餘騎にて亂入す。才田城主植木下總守秀長・猿懸城主穗田實親・三村元親等所々にて防戰ありけれども、日外の負軍に勢を失ひければ、忽浮田勢に破られてみな己が居城に引入て楯籠る。續て是を攻んとて先翌日才田の城を攻めければ、城主下總守防ぎかねて降人となる。此城をば則下總守に宇喜多勢を加へ是を守らせ、近郷を燒働しけるに、人民恐怖して指さすものなく、直家の麾下に屬するもの多し。

一說に、庄*式部少輔元祐此時討死といへども、明禪寺崩の時備前國國富德興寺にて討死せし事實說なり。

宇喜多又尼子に組する事

去る永祿九年、雲州富田月山の城落て尼子家臣どもちり〴〵になりけるが、家老山中鹿之介京都にて尼子家再興の事を謀りて、尼子孫四郎勝久を大將として吉田三郎左衛門といふ者を中國へ差下し味方を催し、備前作州兩國に到りて直家を賴みかたらひ、尼子に一味ありて國を興さば、早速備中一國を切從へて、宇喜多に渡すべしといふ山中幸盛が狀を出して子細を演說しければ、直家これを聞き家臣等に談じて即一味の返答に及んで毛利家に背きけれども、先時節を窺ひ毛利家に敵する色をば出さで有しが、明る永祿十一年浦上宗景是を聞て毛利家へ使を立て、宇喜多直家尼子が舊臣山中鹿之介が催に應じ候也。表裏の直家これを誅し給はゞ、御先手仕候半と告やりて、宗景毛利と和談し直家を討取るべしと謀りける。

宇喜多松田を討ち金川落城の事

津高郡金川の城主松田左近將監、去る永祿五年に浦上宗景と和談し、直家の聟となりて宇喜多とも親くなりたれども、直家は猶ひまを窺ひ松田を討たんとおもひけるに、松田近年日蓮宗を甚以て信仰して、吾領內の寺々を其宗に改めさせ、したがはざる寺を燒はらひける（金山觀音寺吉備津宮など放火せし此時なり。）*金川城中にも日蓮宗の道場を建立しければ、家中の兵士も領內の百姓も左近將監をうとみ退去するもの多し。直家是を幸の時なりとはかり討たんと思へども、老臣に横井土佐・橋本某・宇垣市郎兵衛・其弟與右衛門なといふよきものありて、家をとり治めける故亡しがたし。この横井土佐は醫術をよくして此藥をのめば病も則平癒するやうにいひふらしける。其上正直仁愛の生れつきにて、敵といへども藥をあたへ療治しける。又宇垣兄弟も謀などよくせしものなりし。直家ある時沼より金川に到りて

*城中に建てたる道場は後にこれを済林寺と云ふ。

鹿狩を所望して城主と共に狩をしける。其時鹿をうつとて誤りて宇垣與右衛門を討殺す。誰うちしともしれず。實は直家の臣に搏たせし事なりしとぞ。其後兄の市郎兵衞も退去して、松田が家治らずさだち（本ノママ）けるを幸と、永祿十一年七月直家より津高郡虎倉城主伊賀左衛門久隆（是も直家の聟なり）同與二郎（明石掃部が聟なり）を招きていひけるは、松田左近將監われらに反心あると聞きぬ。よりて討果すべく思ふ。いかゞ謀るべきとあれば、其頃近隣迄もみな松田をうとみて伊賀父子とも不和なりし故、伊賀答へて此節松田を討給はんことやすかるべし。御先手仕るべしと手にとる樣に請合ひける。直家大きに悦びて其謀ども伊賀父子とよく牒し合せて相圖を定め、伊賀は虎倉へ歸りにける。さて七月五日約束の日限なれば、直家百騎計の人數にて赤坂郡矢原村に至り陣を取る。伊賀はかねて忍を付置き內通せし事なれば、五日の夜金川城內道林寺丸へ人數を忍て入れ時（鬨）の聲を揚げたり。折ふし左近將監は城外に出て留主（守）なり。家老横井又七郎取合せ手配し門々をさし堅む。伊賀父子鐵砲を打かけて本丸を攻む。左近將監は是を聞て急ぎ馳歸り搦手より城に入る。橫井も人數を出して是を迎へ入て、こゝを專と弓鐵砲にて是をふせぐ。左近將監櫓に上りて伊賀に向て、何の故を以てはからず城を攻るやと、しばらく言葉戰する所を、伊賀が兵士ねらひすましゝ是を搏つ。左近はこゝに討れにけり。息孫次郎是に換りて士卒を下知して防戰す。松村修理も伊賀が兵を入たてじと戰て打死す。直家の兵矢原より城中へ入り、伊賀が勢と一所に合せて本城の四面を取卷き、平攻に六日一日是を攻むれども、堅固の地なれば容易に乘取がたく夜に入ける。城兵も寄手も討死する者多し。されども寄手は多勢になりて是を攻め、城は本城計なればとても守り詰がたく、七日の曉孫次郎幷次男左門潜に城を忍び出で、楢村某といふものをつれて備中へたちのく。大將落ければ士卒も多く落行ける。伊賀父子是を見てしきりに兵をすゝめて、一二の城戸を攻破り本城に切入れば、殘り留りし松田が普代の郎等みな討死して城は落にけり。松田兄弟は家人少々つれて西の方山傳ひに下田村まで落行しが、虎倉

の城より伏兵を此邊にも置きければ、孫次郎を目にかけて切てかゝる。今はのがれぬ所とおもひ、前後左右切まはり孫次郎は爰にて討れにけり。次男左門盛明は雑人と共に紛れて漸々備中へ落行きける。

宗景勢ご直家勢と片上せり合の事

去年永祿十一年より宗景は毛利家に屬し、宇喜多は尼子再興の合力せしかば、天神山と沼とはいよ〳〵矛盾になり、人數を出し足輕をかけて迫合事度々なり。今年永祿十二年の春、天神山より伊部に城を築いて日笠源太を置きて守らす。沼より花房助兵衞を將として攻させて終に攻落し、城主日笠をも攻取て宇喜多より兵を入て守らせける。又片上の戸田松の城に天神山より浦上河内景行を置ければ、此伊部の城と時々せり合ありける。馬場重介此伊部に來り居りしとき、戸田松の兵と葛坂にてせり合ありて、重介其外槍四五本にて敵を追て、葛坂の下の堂まで追つ追はれつ五六度もせり合て引取ける。敵猶跡をしたふ。重介等敵を追はらひ追はらひて槍をさかさまにとり、鋒先を跡にしてぞ伊部の城へ引取りける。

宇喜多直家備中齊田城後攻の事

宇喜多直家約を變じ尼子家へ合力し、毛利家に背ける事をにくみて、永祿十二年四月毛利六郎左衞門元清一萬餘の勢を卒して備中に出陣し、宇喜多方の城を攻めむとす。三村修理亮元親・同弟上田實親等是を幸と毛利家の先手に加りて、先植木下總守秀長が籠りたる齊田の城へ取かけて是をせめ、植木孫左衞門・福井孫六左衞門其外宇喜多よりの加勢の人數等かたく守りて防戰す。尤も此城堅固の地なれば、寄手是を攻て命を殞すもの多くて俄には攻落されじとて、元淸下知して戰を止て遠攻に

して四面を遠く圍む。城中糧乏しければ長く籠城叶がたく覺えて、城よりひそかに峰本與一兵衞を出し備前へ遣し直家へ後詰を乞ふ。直家是を聞き此城捨置きては味方へ屬したる諸方の城志を失ひ、賴なく思ふべければ其事心得ぬ。早速人數を出し後攻すべしと返答して峰本をば返し、早々兵を集め其勢一萬計引率して沼城を打立、齊田の此方一里計東に陣取て、城を圍みし毛利勢の後へ人數をかけて戰ふ。城中大きに力を得て切て出で前後より揉立て戰ふ。されども毛利の軍にも加勢として來りし熊谷信直・桂元隆を兼てより後攻の押へに備置き、この前後の敵に手を分け戰て宇喜多勢百三十餘人討取られければ、直家も少し猶豫してかたく備へて控へける。扨城中糧乏しければ何とぞ兵粮入んと手段をなしけれども、難叶して日を經ける處に、石川・福井・工藤等宇喜多に馳加りければ、是に力を得て是を先手として又戰ふ。花房助兵衞職之と穗田與四郎一番に鎗を合せて入亂れ攻戰ふ。城中より是を見て、唯二三日の糧有て、籠城しても迚も死なん命、いざ打て出で討死せんと、門を開きて突て出で又前後より攻戰ふ。今度は後攻の勢もまし城兵も必死になつて戰へば、毛利勢崩色付て見えける所を、直家の旗本を進めて、爰をうてものどもと大聲に下知して突立れば、毛利勢叶はず惣崩になり逃て行く。三村元親・上田實親返し合て戰ひしが、元親は深手負て家人の肩に懸りて引退く。實親は終に討死し宇喜多の兵に首をとられける。大將元淸もふみ留り返せ〳〵と下知しければ、敗軍の勢も是にはげまされて取て返し。其勢一千二三百人集りければ即備をおし立て控へければ、直家も是を見て人數をまとめ、勝鬨をあげて早々兵を引上ける。其日宇喜多方へ討取首數六百八十餘級とぞしるしける。直家も味方の城々に兵を加へ守らせ、兵粮をこめて備前へ歸陣あれば、毛利も兵を引て入にける。

尼子勢と毛利勢と作州合戰宇喜多勢加勢の事

かくて尼子勝久は、永祿十二年の夏出雲伯耆の味方を集め、隱岐國へもおし渡り出雲へ入國、やがて作州へも出陣あるべき催し有ければ、以前尼子方なりし美作國の三浦・牧・玉串・市・芦田等發起し高田の城を攻破り、毛利家より籠りたる津川土佐・壇上與太郎・山名權平等を取討て其跡に籠りけるを、又毛利家の杉原播磨守是を攻落して、己が兵卒牛尾・足立・國衛等を置て守らせけるが、此度尼子勝久本國へ歸入りし事を聞て、三浦等力を得て又高田の城を攻む。依之毛利家よりも加勢として香川左衞門光景・嫡子少輔五郎廣景・次男兵部少輔春繼五百餘騎高田の城に入にける。三浦・芦田・玉串・牧等是をみて、とても小勢にては攻取がたく思ひて備前の宇喜多へ加勢を乞ひければ、則長船又右衞門・岡剛介・沼本新左衞門に四千餘騎を附てさし遣す。三浦・牧・玉串等此備前勢を合て是を攻けれ共、城兵大勢にて防戰すれば落べき樣なし。しかるに城中に熊野彌七郎・佐伯七郎次郎とて、もと尼子の臣なりければ、是を語らひ内通して、熊野は兵糧藏に火をかけて城を出て寄手に加る。佐伯は隱謀あらはれて殺されぬ。かゝる騷ぎども城中に在ければ、其虛に乘て玉串・牧等一千餘騎、十月五日高田の山中へ押寄せ放火す。城よりも出て防戰す。城兵の乃美修理・村間源左衞門・香川宗右衞門などいふ者を討ち取て引取ける。其夜玉串・牧・芦田等備前の加勢長船岡等に城を攻る手段をはかり合せ、いざ明日は伏兵を置き小勢を以て餌兵として、敵を引出して討べしと謀し合せ、明れば七月六日備前勢三千餘人を久瀨といふ處に三手に作りて三ヶ所に伏兵として置、久瀨山に相圖の旗を上させ、玉串豐前臨則・牧勘兵衞清冬兩勢を餌兵と定て城下へ押むかふ。しかるに城中よりも今日は伏兵を置て働き出て寄手を討取らんと、牛尾太郎左衞門・足立十兵衞・品川市右衞門・門田彌四郎・香川右衞門・同石見・芥川・江戶・村岡等五百餘騎、是も三手に分て城下に伏置きけるが、何として寄手に聞えけるか、是を知て玉串・牧等其伏を置きたる眞中へ鐵砲を揃へて打かけ、續て鑓を入突てかゝれば、牛尾・足立等思ひがけなく不意を討れ、伏勢小勢にてあり立足もなく打負て引退く。玉串・牧勝に乘て

追行く。又城兵兼て儲置し兵卒切て出て玉串・牧と戰ふ。兼て謀りし事なれば、玉串・牧打負て弱々と引て行く。敵は利を得たりと追掛て不レ覺小坂一ッを追越ける所を、時分よしと山上より相圖の旗を出せば、長船・岡・沼本の伏兵三手に分て鼓を打、鬨を作て切てかゝれば、高田城兵一合もせず崩れ立、伏兵の人數は多し、頻に追て是を討つ。香川右衞門勝雄かくて引取らば不レ殘討とらるべし。吾こゝにて討死せん。そのひまにみな引取れと下知して取て返し切合つて討死す。門田彌四郎繼久・錢櫃佐介も是につゞきて戰つて討死し、其外殘りすくなに討なされて城へ引取りける。此時既に寄手城へ付入にして乘取べく見えし所に、城に殘りたりし香川左衞門光景・嫡子廣景・次男兵部少輔春繼・宗像三郎左衞門・原田又右衞門・芥川七郎・村間新左衞門・塚脇十太夫・江戸三郎五郎以下二十餘人突て出て是をふせぐ。小勢なれば備前勢引包て是を討けるに大半討たれ、殘る者は麓なる柵の中へ入りけるを、其柵木二十計引破て討てかゝる。討殘されし六騎又四騎破レ討、今は香川兵部少輔・宗像三郎左衞門と二人計になりにけるが、しばし息をつがんと薄の一村枯立けるかげに休らひける。備前勢も戰つかれて控へたる所へ、玉串監物かけ來り、一丈計の槍を提げ郎等二人したがへて突てかゝれば、一村薄のかげより香川兵部少輔春繼と名乘て突て出づ。吾は玉串監物脇則と名乘合て槍を合せ暫し戰ひけるが、玉串が草摺をかけて細腰へ槍を突込めば、玉串小膝を折て倒るゝ所を香川押へて頸を取る。監物が郎等一人は宗像三郎左衞門突伏せ、今一人は猿渡壹岐守おくればせに來りて突伏せ、首を取て城に入にけり。又牧勘兵衞が手へは香川佐渡・同石見返し合せ戰て香川兵部少輔と共に城に引入ける。玉串監物が兵卒も大將討れければ散亂し、牧も備前勢の長船・岡・沼本も皆引取て其日の軍は果にけり。此時玉串と槍を合せたる所を、一町四方作毛もせずして香川が鑓場とて今に殘れる。其後も備前勢長船又右衞門・岡平内・富川平右衞門等作州に在陣して城を攻め、合戰迫合止む時なし。明る元龜元年備中へ直家出陣あれば、是等の人數を引取て花房助兵衞職之に兵をつけて

祝山の城に籠め毛利勢を押へける。

此時直家より富平・岡平・長又と書たる三人へ連名の下知狀、戸川家に今に傳て數通ありといふ。

其頃氏と名を一字宛狀に書くこと諸家にはやりし事也。

出雲國秋上綱平備中働并毛利勢働出る事

出雲國より秋上三郎左衛門綱平二千餘騎を率して出陣し、尼子勝久より直宗をたのみ來りければ、是も元龜元年正月中旬備中に出陣、直家と秋上綱平と一つに成て所々放火し高山の城を取圍てしきりに攻ければ城主石川降參す。其勢にて石賀・安達等も皆降りける。是等の降人の士を先鋒として皆部の城をせむ。皆部久之丞といふ精兵の射手よく防ぐ。一矢に二人三人射殺ければ城も即時に落されけり。直家兵を分けて天王山の城を乘とらんと下知すれば、皆部よりも人數を出して爰をも助て防戰し、しばし籠城したれども終には守り得ずして是も降參すれば、此城には大加駿河守を籠め置き其國中の事ども下知し、降人の人質ども取て直家も秋上綱平も開陣す。扨松山の城主庄高資・其子兵部大輔勝資・同右京を植木下總守秀資・津々加賀守・福井孫六左衛門等、尼子に屬して三千五百餘騎國中に打出、鴨形の細川をはじめ二三ヶ所の城を攻落し、是より竹の庄を攻めんとす。此由ども藝州へ注進ありければ、元淸八千餘騎を率して備中國に出陣、三村元親を先陣として先松山城の庄高資を一時攻に攻め落し、男女百餘人を切捨て、國中此間敵に降りける者を一々に攻とらんと擬しければ、降參する者多く、植木・庄が類みな雲州へ落行ける。なかに齋田城の植木資留計り城を守て有けるをも、方便以て討果し、元淸猿懸城に在て備中を治て、又國中毛利家に屬しけり。

宇喜多金光與次郎宗高を殺す事

御野郡岡山の城主金光與次郎宗高近年直家の麾下に在けるが、此頃直家に叛くよし風聞ありし處に、金光が家來に後藤某といふ者あり。此者をかねて直家懇にして沼の城へも度々よびて碁の相手とす。しかる處に此後藤罪ありて金光殺害す。直家是を聞て大に怒て、先年明禪寺軍の後は直家に敵しがたくて味方に屬すといへども、內々には叛心を懷くゆゑに後藤が直家に懇なるを惡て罪なきに殺害す。其儘捨置なばあしかりなんとて、元龜元年の夏宗高を沼の城へ呼て切腹を言付らる。宗高是を陳謝すれども更に直家許容なく、さて宗高最期に及で直家下知して死後子供に所領を與ふべし。左あれば城を異議なく渡すべしといふ事認め置べきなりとあり。是亦異議に及びがたく書狀を書て後切腹したり。則岡山の城請取を富川平右衞門に申付られしに、富川が與力訴訟して、金光が家人若相背きなば、富川與力六十人計にてはふみしづめがたし。殊に敵地に近き所なれば如何といふ。馬場十介是を聞き岡山は成程危き場なり。餘人は心もとなし某にまかせられよ。與力召連れ罷越し城を請取候て直に城をも持かたむべしと望みければ、直家是を聞き富川・馬場兩人をさし向けらる。與力百二十人連て岡山へ往て、宗高が書置たる狀を家來に見せ、直家に降り仕へなば本地相違なく宛行ふべしとありければ、一族家臣異議なく同心して城を渡しければ、富川馬場直に城に在番して守りける。

按に、此金光與次郎宗高は實は能勢修理が弟にて法名を友讃といふ。其時迄は宗高が菩提寺岡山に在りて、金光山岡山寺といふ。今磨屋町にある觀音坊則是なり。其與次郎が子宇喜多に仕へて金光文右衞門といふ。宇喜多の家亡びて後古松村の民間に隱れしといふ。

巻第三終

巻第四

浦上宗景上洛の事

天神山の浦上遠江守宗景、播州にては赤松又は別所と戰ひ、備前にては宇喜多と地を爭ひて合戰絕ゆる事なし。しかるに宇喜多直家は毛利に背き尼子に屬しけるより、宗景は毛利の味方になり上方の織田家へも使者を立て旗下に屬せんと約す。信長公下知して赤松別所と和睦させしかば、播州通行障る事なくなれば、元龜二年春宗景上洛し信長公へ出仕す。此時備前美作幷播州の內も所領すべしと信長公の朱印を給りければ、宗景大きに歡び天神山へ歸りけれども、それは名計にて其勢ひ衰へたれば、日を逐うて武威を失ひける。

兒島本太城合戰五流山伏の事

其頃兒島郡南表は多く四國に通じ、西の方は備中に一統し、或は毛利家に屬し、或時は宇喜多に降りなどし、城を守るもの多し。しかるに日比村に住せし四宮隱岐守より、讃岐國香西駿河入道宗心をかたらひ、今度通生の本太の城を攻落し、其功を以て毛利家へ降參し、其威をかりて兒島郡をしたがへ取敷くべしと申合せて、元龜二年の春香西宗心讃州より渡海す。是に從ふ者どもは、羽床伊豆守・瀧宮豐後守・同彌十郎・福家七郎・新名五郎・香川民部・小早川三郎左衞門・新居大隅守・久利三郎四郎・飯田右衞門・同備中・筑城淸左衞門・宮腰兵庫・同彈正・楠川太郎左衞門・居石五郎兵衞、香西が郎等には香西備前・植松備後・唐人彈正・片山志摩・秋山太郎左衞門・松浦淸左衞門・山地孫左衞門・藤井太郎右衞門・中飛騨・香西兵庫・諏訪又右衞門・佐藤內藏介・乃生孫兵衞・葛西太郎兵衞・本津右近

等馬上四百五十騎雜兵三千餘人出船し、日比・澁川・下津井三ヶ所へ押渡り三方に手合して島中に打出る。香西宗心は下津井に着船し、本太の城へおし向ふ。城中よりも吉田右衛門尉三百餘人を率して、稗田村に打出て相戰ふ。香西が兵の中を百計分けて敵の打出し後の山へ廻して、合戰なかばに後より切かゝりて、吉田が三百人を中に取こめ戰ひければ、城へ引にも引かれず爰を最期と戰ひけるが、吉田右衛門尉香西加藤兵衛と馬上より引組み落重り、加藤兵衛下になりける所を、郎等馳來り右衛門尉を討取ける。其外城兵多く討れて討もらされたるものゝ少々本太城に入にける。香西宗心此勝軍に競ひ、すぐに城へ付入にせんと猶兵をすゝめ城近く攻寄せしが、雨降出て日も暮に及で東西暗くなる。又此本太城は三方海岸にして巖石數十丈、東の方計山の尾につゞきたる所をも掘きり塀樓を構へたれば、容易に攻入るべきやうもなし。其上雨しきりにふり出、俄に霧下りて前後を分たず、前を討つとも後にしらず、後をうてども前にしらず、寄手引取かねてたゞよふ所を、城中の兵は案内よく知たれば討て出、宗心が旗本へ突てかゝる。前後の備には是をしらず。旗本の兵も戰ふ術をうしなひて皆戰死すれば、宗心は床机に居ながら敵をうけて太刀も拔かずして、大將なるぞよく討てとて討れにけり。大將討死なれば惣軍みだれて右往左往に崩れ立ち、下津井さしてやう〳〵引取ける。城兵も逃るを追ひけれども人數すくなければ輕く追討して引取ける。讃州勢船もとへ至れども、夜には入り雨はふり、足もとも分がたく十方を失ひ、やうやく舟にとり乘て歸りける。香西宗心が首をば實檢して首桶に入れ本太より讃州へ送り遣しける。

按に、此城攻幷香西宗心討死のことは、宗心が末葉香西成資といふものゝ讃州に住して記せし所にて、此國には記し傳ふることもなく、兒島郡の民間の口碑にものこらざるゆゑ、其時の城主誰といふとこをしらず。しかるに能勢修理といふもの此城主にて、則修理が墓本太城の東なる山の麓に今もあれば、其時の城主も此修理にて、後に宇喜多家へ臣從せしなるべし。又能勢修理大夫賴吉

といふ者墓岡山府下妙勝寺にあり。是は本太の城主の修理が子にて、宇喜多の臣となりしなるべし。此能勢といふは多田滿仲朝臣の末流多田入道賴貞といふ者此國にありて、建武の亂に宮方にありて始終心を不變して、足利家の爲に自害せしとこゝに言傳ふ。太平記にも八幡合戰に其名見えたり。此入道の墓は濱野村松壽寺にあり。其子多田太郎賴仲（一には吉仲）家號を改めて能勢と稱して武家にしたがふといふ。此賴貞はたゞ多田入道といひ傳へて呼名等しれず。此修理も此入道の末孫なるべし。

この合戰のとき俄に雨ふり霧下りけることは、兒島の林權現の五流山伏の中、顯德院其下の山伏を大勢つれて本太の城中に入りて、壇をかまへ怨敵降伏の法を行ひ、肝膽を碎き祈りける。其しるしなりとて、其所にいひあへり。其怨敵降伏の行法せし林の五流山伏といふは、文武天皇三年役行者を伊豆國大島へ配流せられし時、其門弟義學・義眞・義玄・壽玄・芳玄といふ行者、其害をさけん爲に、紀州熊野本宮の神輿を船にて海上にうかめて兒島の地にいたり、福岡の邑に鎭座ある（福岡といふ今林村なり）其後天平寶字五年に木見村に、新宮をうつし諸興寺といひ、山村に那智山を移して瑜伽寺といふ。林の本宮を合せて是を新熊野三山と稱し、其五人の行者の末流則今の五流也。後鳥羽院の御時、三井寺長吏覺仁親王（櫻井宮と稱す）を初て新熊野山檢校に補せられて、後今に至て聖護院宮代々其職に居給ふ。櫻井宮此處の檢校にてまします故、承久の亂をさけて兒島に下り給ひ、尊瀧院に居給ふ。其兄の宮賴仁親王（冷泉宮と稱す）も此地へ流されさせ給ひ、一ッ所に居給ひける。冷泉宮は寶治元年四月十二日薨じ給ひ櫻井宮は弘長三年三月二十八日薨し給ふ。（冷泉宮の御墓は木見村に在櫻井宮の御墓は林權現の境內にあり）此冷泉宮の御子道乘僧正、櫻井宮の弟子になり給ふ。其御子五流の家々の主となりて法を嗣ぎ給ふより、其子孫他姓をまじへずして皇胤と稱す。然るに應仁の亂の時五流の内覺玉院圓海、細川勝元の所緣により其權威をかり一山を恣にす。衆徒是をにくみ覺玉院を亡さんとす。是により覺玉院此山を退き備中西阿知へ行き兵を

催し、林村へ亂入し伽藍僧坊一宇も不ㇾ殘燒拂ふ。是より互にいどみ戰ふこと度々也。其後備中高松城攻の時秀吉より加勢を乞はる。されども兼て毛利家に一身せし故同心せず。是によりて豐臣家天下を治め給ふ時に至て、當山領沒收せられける。如ㇾ此修驗道にては諸國の貫長なるものにて、兒島にては是を信仰して行法をたのみければ、其驗もありしなるべし。

作州皿山佐加山の城落つる事

元龜二年花房助兵衞職之、作州荒神山の城に在て毛利家の城々と攻合ひけるが、人數すくなくて守りかねければ、直家より加勢の人數來りける。此勢を以て同國皿山の城を攻む。毛利家より置かれし肥田左馬助・高橋四郎兵衞是を防ぎけれども、度々攻めて終に肥田高橋も討死して落城す。同三年佐加山の城をも攻落し、城兵悉く切捨て、兩城ともに花房が兵を分て守りける。

宇喜多直家岡山城へ移る事

近年四國にて長曾我部元親威をふるひ、土佐國を打したがへ阿波讃岐へも可ㇾ打入ㇾの處、三好香川等より宇喜多をかたらひなば難義なるべしと思ひて、天正元年の春直家へ長曾我部より使を立て、近々に阿波讃岐へ可相働候。其時三好香川より加勢を乞ふとも許容無之様にと賴み來り、此後は申合せ四國平均可ㇾ有との事也。直家家臣を集め是を談じ、長曾我部一味同心の返答に及びける。かくのごとく直家も年々に手も廣がり、沼の城下に兵卒又足輕等まで多勢になるに隨て、城内も城下も所狹く屋敷を割付るにことたらず、始終爰に居城なしがたし。然るに岡山の城は山下殊の外廣大にして、東の大川海に通じ運送よく、以來繁昌すべき土地なれば此城へうつるべくとありけれども、是も今まで金光が居たる城にて家居も狹く、家中の屋敷もすくなくて居住なりがたければ、城中を

ひろくおし廣げ郭をも作りそへて、繩張を仕直し土居堀等築き改めらる。是によりて其地にありし寺社を外へうつさる。天正元年の春より岡平内奉行をして門・櫓・塀・柵等造營ありて、堅固大概出來せしかば、同年の秋直家沼の城より岡山城へ移徙あれば、家中も家屋敷を作りて爰にうつり、商賣人も兒島西大寺其外國中又近國よりも富家の町人來り、すべて城下賑ひける。又山陽道の驛路上道郡御野郡の北の山下を通ひけるをも、今度宍甘の山はなより野中へ出、岡山の城下を通ひ、萬成村の小山を越えて辛川へ出る道を作り、諸方への働きの手づかひよく往還自由なる様になりける。もとより岡山の地勝れたる城地にて、諸國へ通路運送自由なれば、年々に廣大になり繁昌して今に至れり。

按に、今村宮今の社地へ鎮座あり。蓮昌寺上道郡森下村へうつり（今御堂屋敷といふ所なり。）岡山寺山科町へ岡山の地よりうつされし事、皆此時なり。

津高郡虎倉城合戰の事

天正二年の春の末、毛利輝元・小早川隆景備中國へ出陣し、直家の領地を侵し、備前へも切入るべしとて備中竹の庄に陣取て、藤澤村又福山城に居たる宇喜多よりの番勢を追落して、是に人數をこめ、備前國の虎倉の城の近邊まで燒働す。伊賀左衛門久隆は虎倉の城に楯籠りて、毛利勢働きゝたらば一戰に及び討果さんと待かけし所に、四月十二日毛利家の馬廻の士兒玉小次郎元兼・粟屋與十郎神田宗四郎等、宗徒の大將として大勢藤澤村を打立て働き出けるに、近郷には敵一人もなければ備前國津高郡上加茂に至りけれども、敵猶見えず夜はほのぼのと明む。さらば虎倉の城へ押寄せんとこゝに勢を揃て人數を進む。城中にも毛利勢加茂へ押込み、やがて爰に寄ると聞て、城の近邊の嶺すぢに弓鐵炮三百挺計物かげに備置きて、靜り返りて待かけし所へ、粟屋與十郎・大田垣某等攻寄せけ

るを、思ふ程に引請て山上より弓鐵炮を打懸ければ、寄手一攻もせず色めき立ちける處に、伊賀が家人城中より切て出で突かゝりければ、毛利勢一度に崩れて逃げて行く。栗屋與十郎備を立直さんと返し合ひ〳〵戰ふ所を、伊賀が家人片山與七郎川越に鐵炮にて栗屋を搏落す。片山が中間川を越て首を取り、大田垣も續いて討死す。大將討死すれば殘黨立もなほさず逃て行き、伊賀が勢すき間もなく追かけ追討す。兒玉與七郎・名護屋與十郎・井上源右衛門・中島瀨兵衛・小寺右衛（原ノマヽ）・轉藤右衛門等、上加茂のうすい谷といふ所にて返し合せて戰ひしが、終に皆討死す。神田宗四郎は四ヶ所疵を蒙りてすでに討たるべき所を、栗屋孫次郎吾馬に抱き乘せて、栗屋は殿して退きぬ。兒玉小次郎元兼といふ剛の武者、追くる敵をたび〳〵突拂ひ〳〵引取ければ、疵は多く蒙りける。されども是をことゝも思はず小高き處へ馬を乘り上げ、高聲に名のりて返せ〳〵と衆をはげましける。其時熊谷玄蕃・岡宗左衛門殿して引取り、井上七郎兵衛は弓の上手にて射はらひ〳〵引取てみなこゝに集る。其外敗軍の兵共兒玉にはげまされて又こゝにとゞまり、百騎計になりければ是をまとめてをき坂迄（をき坂は下加茂より備中へ下る所をいふ也、）引取ける。猶城兵したひけるを、此まとめたる兵の中より三澤攝津守・同郎等野尻藏人取て返し暫し支へける。其隙に毛利勢引とる。城兵も亦備をまとめ引取ける所に、伊賀が家人土井某といふものゝ馬俄に駈出で、ひけども〳〵とまらず敵中へかけ入けるに、河原六郎左衛門土井を見知て駈寄て討取ける。此河原六郎左衛門は元來伊賀が家人なりしが、故ありて追出されて毛利家へ仕へければ、今度備前の案內者に選ばれ此陣に有ける故、此敗軍を己一人が耻辱と思ひ殿して戰ひけるに、はからず土井に駈合せ是を討て、やう〳〵手をふさげゝる。又此寄手に山縣三郎兵衛も有ける。山縣かねて栗屋與十郎と斷金の契ふかゝりけるが、今日敵に押隔てられて福山迄引退きける所に、栗屋は虎倉の城下にて討たれたるを聞て、常々死する事あらば一所にとこそ契りしに、栗屋が討死をしらず引取て生殘りぬるこそ面目なけれ、黃泉にめぐり逢て何とか申譯すべきと

即取て返し虎倉の城下へ唯一人攻上り大音上げ、山縣三郎兵衛といふ大剛の者也。思ふ仔細ありて打死せんとこゝに返し來りたり。出逢ひ給へと名乘ければ、城中に是を聞き、あはれ剛者と、在討取らんと十人計も打出て戰ふ。元より山縣は死を極めたる事なれば、散々に戰て終に討死してけり。此日毛利家に討死せし者百三十餘人、手負數をしらず。虎倉の城兵は土井某馬に驅出され討れし外、戰死せし者更になかりける。伊賀左衛門大に悦び岡山へ注進しければ、直家も大に是を賞して又加勢をも可加と返答ありけるが、輝元評議して、此陣は敵方へ差出たる山にて此方よりは渡り場あしく、川も阻たれば其便不宜と引取り、川よりあなた勝山といふに城を築きて桂源左衛門・赤川二郎左衛門・岡宗左衛門、幷に三村家人竹井宗左衛門等を相副へ守らせ、同五日に輝元隆景は松山城に打入りける。

元祿の頃回國の修行者一人、御野郡津島村に行斃れたることあり。何方の者といふことをしらず。しかるに負たる笈の中に、山縣家系圖と古文書ども多くありし。是は今に御野法界院に藏してあり。其古文書に山縣備後守に當たる元就輝元等の感狀、又山縣平右衛門に當たる隆景元春感狀秀吉感狀等ありて、三郎兵衛といふ名は系圖にも古文書にも不見。又此天正の始山縣等に討死せしといふ者もなし。不審しきことなり。

堤棚奥宿の砦攻落さるゝ事

虎倉の城より奥に堤棚奥宿といふ所あり。是に砦を築て伊賀が家人河原源左衛門・河田七郎に、足輕五十人を添へて置きける。同年備中より毛利家の穗井田元淸來て是をせむ。虎倉へ加勢を乞ひけるに、延引せし中に穗井田終に城をのり取り、河田七郎は討取られ、河原源左衛門は深手負て城の東なる瀧の邊に隱れ居たるを、敵是を見て谷を越えて二人馳來る。源左衛門がいふ、某深手負たり。

閒によりて首をとれといひて脇ざし刀をぬきて投出す。敵今は心易し首討ちとらんと二人左右より寄けるを、源左衛門其敵を左右の脇に引挾みて、瀧の落つる壑へ飛落て死にけり。城中に討殘されたるもの虎倉へ歸りて、源左衛門が最期のやうをかたりけるとぞ。

宇喜多毛利和睦備中働幷三村元親切腹の事

天正二年、義昭將軍は織田家に打負け西國に下向あり。備後鞆に着岸、毛利輝元を賴み再歸洛の事を謀り、直家をも同じく賴み給ふ。故に毛利家と直家と再和睦ありて此謀をなせば、直家織田家へも尼子へも亦手切になりにけり。是によりて同年の冬、直家より角南隼人入道如慶を使として小早川隆景へ申送りけるは、備中の三村兄弟阿州三好家を賴て毛利家に背き候。御油斷不ㇾ可ㇾ有と告やりしのみならず、十一月に三村元親が家老の三村孫兵衛親成主人元親と不和になり、備中を立退き隆景のもとに行て語りけるは、近來は元親阿州の三好に加勢を乞ひ、毛利家を打つべき手段候に付某等是を諫むといへども用ひず。其上某をもうち果すべき沙汰あれば、難をさけ立退き御幕下に參り候よしをいへば、三村が謀反宇喜多より申越せしのみならず、家臣さへかくいへば相違あらず。早く三村退治すべしとあり。輝元・元春は强て同心なかりけれども、小早川隆景は直家とはかり合せて、出軍をいそぎ、同じき十二月小早川隆景出陣あれば、直家も同二十三日岡山を出陣あり。隆景と申合せ兩勢を以て三村持の城々を攻落り、先十二月二十九日川上郡手の庄の國吉城に三村右京栖籠りしを、三村孫兵衛を案内者とし、其嫡子孫太郎先登して晦日に城を攻落す。右京松山の城につぼむ。其威に鶴頸の城も明渡す。直家も隆景もこゝに越年し、明れば天正三年正月二日、哲多郡新見の城の元親弟三村宮内元範を討亡し、夫より山田村に陣を据ゑ、三村阿西入道を虜にし、美袋城を攻たれば、城主結城民部忠秀降參す。此兩人をば兒島へながし遣す。幸山城の石川源左衛門久

式は城を捨て松山へ入り、同二十三日には鬼身の城を攻む。城主上田入道、養子の孫次郎實親に腹をきらせて降人に出でぬ。子を殺して命を乞ひける上田入道が事、爪彈して惡まぬ者もなかりける。扨宇喜多小早川兵を休めて夏に至り、四月七日より松山の城に取詰め、晝夜を分たず攻め戰ひけれども、三村修理亮元親手配よくして防戰せしかば城落がたし。しかるに河原六郎左衞門といふ者、もと備前加茂の者にて伊賀左衞門に仕へしが、後に小早川家に行きてありし。隣國なれば備中の案内をも知り、又三村家に親しき者も有ける故間者となりて此城に入て居りしが、石川左衞門と一所に天神の丸にありて左衞門本丸へ行て留守の隙を窺ひ、河原相圖をなして備前安藝の人數を引入れ、又かねてかたらひ置きし大槻源内直賀・小林又三郎などいふ者案内して、忽天神丸を乘取りければ、備前藝州の軍勢急に押寄て城を攻落す。修理亮今は叶はず此城にて切腹せんといふを、家臣さまざまいさめ、四國へ落さんといへども承引せず。それゆゑ先元親の子勝法師・石川久式をば、四國を心ざして落しける。其後元親の切腹を家人どもとゞめて、難なく引立て城を出で、後の山傳ひに元親を助けて落行けるに、あやまりて元親谷へ轉び落ちて氣絕しける。是を介抱しける中にみな散々に落失せぬ。漸々息付ければ、殘たる家臣二人助けて爰も落行く處に、又刀鞘走りて元親足を切りて、歩行なりがたくて落行く事叶はず、今は詮かたなく賴久寺の邊、松連寺といふ寺に入りて切腹す。元親常に和歌を好みければ、其友なるかたへ歌をよみ書置きける。又辭世に

思しれ行歸るべき道もなし本のまことを其儘にして

人といふ名を假るなとや末の露消てそかへるもとの雫に

と書てうせにける。先に落ちたりし勝法師も、途中にて伊賀左衞門に行逢ひ生捕れぬ。當年八歲なりけるが、すぐれて聰明なる生付にて、しばし暑をしのぐ爲に伊賀久隆扇を勝法師に與へけるに、此扇に

夢の世に幻の身の生れきて露に宿かる宵の稲妻

といふ古歌の書てありけるをよみて泪をながし、我れ城中にて自害すべき身の、ながらへて憂目をみすると悔み、又三村が臣の降りきしが今は見ぬ顔をなす。畜生にも劣れりなど番にありし侍に物語するさま、人となりしものにも勝れりと番の面々みな驚きて、八歳にてかくのごとき事、尋常の兒にあらずと隆景へ告ければ、やがて井山の寶福寺にて首を刎られけるに、其時も少も騒がず潔き最期なりけるとぞ。三村等の城ども皆かくのごとく攻落しければ、宇喜多直家は岡山へ歸城ありける。

兒島常山落城の事

三村修理亮元親生害あれば、備中國中皆小早川に降參しけるに、備前國兒島の常山城主上月肥前守隆德は三村修理亮の妹聟にて、無二の三村方也ければ降參せず、四國へ援兵を乞ひける。されども三村が一族多く亡びて何を憑みて是に與するものなければ、四國其外よりも加勢する者一人もなし。是によりて上月が家人肥前守を諫て、此城一ッに小早川の大勢を引うけ、其上外よりの加勢もなし。後詰の賴もなくていかで此一城守り詰めらるべき。一先四國の方へ退き給て、重て大軍を催し軍して城をとり返し給へと諫む。肥前守打聞て、いやとよ我多年毛利家に對して恨ある故、元親をもすゝめて今度毛利家へ背き軍せしも、我其張本なるに、此春元親父子生害し、其外一族多く討死し、三村家打亡されたるに、吾何の面目ありてこゝを落ち存命して人に面を向ふべき。其上阿州へは實子を人質に遣し置きたりしに、援兵の一人もさし越ざれば、假令行てたのみたりともいかで其甲斐かあるべき。所詮當城を枕として討死の外他事あるべからず。汝等命惜くば何方へも落行くべし少も恨なしとあれば、家臣もとかくの答もなく、皆討死を極めて籠城の手配をなしける。六月四日

小早川隆景備中より直に兒島へ發向ある。案内者は三村孫兵衛親成・同孫太郎親亮（實）父子先陣して、彦崎迫川に陣を取り、隆景の旗本は千餘騎にて山村に陣取、其先手浦兵部は宇藤木に陣取て、同六日辰の刻大手の木戸近く押詰て攻かゝる。猶城中には靜まりかへりて人なきがごとく、若舟にとり乘り四國へや落ちたりしと、先麓の茂曾路の人家に火をかけて其勢ひに責入らんとする所に、城中には敵を城近く引つけて討つべきと待かけし事なれば、今こそ防げと下知をなして、肥前守具足を固め廣椽より飛て下り、自ら鐵炮を取て隙間もなく打出す。嫡子源五郎高秀、常は弓を好しが是も鐵炮を打出す。隆德が弟小七郎高重、弓を取て隙間なく射出す。其外城兵爰を專どゝ防ぎける。寄手間近く攻寄たれば、更にあだ矢なくて、手負死人數をしらず。大きに責あぐみて攻口を退きひかへて、再び寄せ兼たるうちに、六日の日も暮れにけり。明る七日の曉城中最後の別れにや、女の聲もして酒宴の聲聞えける。夜も明くれば又城をせむ。城よりもきのふのごとく弓鐵炮を打出し、今日は城戸口をひらき、小七郎高重槍をとりて眞先に進みて、肥前守も源五郎高秀も、其外城兵とも滿丸になり突て出て、寄手の先手浦兵部が備を突くづし、兵卒十五六人つき斃して引取けるが、肥前守が妻こと今年三十三歲（三村家親が娘元親が妹なり）なるが、寄手は兄の敵なれば、是を討たずしてやみ〳〵と自害せんは口惜き事なりとて、甲冑を着し二尺九寸國平が作の太刀を帶し、長刀を提て打出でんとす。召仕へける女是をとゞむれども聞入れず振切て打て出れば、其女共も續て打て出、土倉兵庫・池田新兵衛・近藤杢・横井意仙等八十三人眞先に進みて、浦兵部が備へ又切て懸り、皆死を極めたる者なれば面をふらず竪横に切り廻りければ、討るゝもの數をしらず。されども寄手は大勢なれば城兵八十三人殘りすくなくなりにけり。肥前守妻は兵部を目にかけ進みよるを、浦が兵卒押隔て戰ふ所に妻女聲をかけ、從兵も多く討れ身にもかず〳〵手負たれば、最早是迄なり。此太刀も入用なし。是は國平が作にて三村重代のもの也。兵部殿へまゐらす也。後世弔ひ給はれと言終り、太刀をそこになげ

出し城中へ引入ける。兵部をはじめ寄手のものども目を驚かし、感ぜぬものはなかりける。扨城戸をとざして、皆よく防げ、靜に自害するぞとて、妻女内に入り、刀をくはへ打伏になりて死す。肥前守の繼母五十七歳なるが自害すれば、肥前守首を打落す。嫡子源五郎高秀十五歳なるが父にむかひ、御跡に殘らば御心に懸るべしとて續て切腹すれば、是も同じく首を打落す。肥前守が妹十六歳なるは母が乃につらぬかれて死に、其外幼き子供をば肥前守さし殺して、最早心にかゝる事なしとて、肥前守隆德本城にある大石の上に上りて腹かき切れば、弟小七郎介錯して其身も腹切て伏にけり。かゝりければ城内の者ども自害し、又山傳ひに落失せて守る者なければ、寄手城中へのり込みて城は落にけり。かくて隆景城を取繕ひて山本四郎左衞門・渡邊伊豆を城番として歸陣有れば、直家の加勢も岡山に歸りける。其後常山の城を毛利家より直家へ渡されければ、富川平右衞門を置て是を守らせける（常山の城跡に隆德が腹切石とて大石今も殘れり。）

按に常山の城主の名、一には三村上野介高德と記せしもの多し。誤なるべし。備中國根屋氏へ援兵を乞ふ事をいひやりし古文書、其國の民間に今も殘るを見しに、上月肥前守高德と書たり。又林權現の社記に、明應の頃上野土佐守・上野肥前守西兒島十七ケ村を押領すとあり。是は文明の福岡合戰に、上野土佐・上野豐前・上野肥前といふ人有り。同人なるべし。さらば是等兒島の地士にて、肥前守高德迄代々常山の城主なりしにや。上月と上野とは唱へ同じければ記し誤りしにぞ。又林村に兒島三郎高德が宅地の跡といふ所あり。されども兒島三郎は邑久郡和田に住せし人にて兒島に住せし事を聞かず。兒島といふは其先よりの家の稱號なり。もし此林村にて兒島三郎高德の宅地の跡といふも、上月高德の宅地の跡といふを誤たるもしるべからぬにや。

按に兒島麥飯山の城に、明石源三郎を宇喜多家より置きしを、天正三年毛利家より攻落し、源三郎討死すといふ事、中國太平記に見えたれども、其餘此事を記せしものなし。此天正三年は上に

記せしごとく常山落城の年にて、毛利と宇喜多と和平の時なれば、毛利家より宇喜多持の城を攻むる事あるべからず。又明石源三郎を後に飛驒といふ。則掃部が父なりと宇喜多記にも見えたり。此飛驒何れのとし死て掃部家督せし事はしらざれども、飛驒が名は秀家卿の代迄も見えたれば、此時源三郎討死といふも誤まれり。かくのごとく麥飯山落城の一事不審多ければ、爰に載せず。

和氣郡天神山落城の事

天神山の浦上宗景と宇喜多直家と、一まづ和平あり。宗景の嫡子松之丞（一に曰與次郎）を直家の聟とす。宗景は之をも悦ばざれども、直家の武威强ければせんかたなし。かくのごとく親みをなしながら、宗景は織田家へ通して直家を討たんとおもひ、直家は宗景を亡して備前國中を合せ領せんと企てけれども、現在の主君を弑せんこと外の聞えもうとましく、人の心のそむかん事をも憚りて年月を經けるが、播州小鹽に浦上清宗の子の久松といふ、天正のはじめ九歳にてありし方へ、中村七郎右衛門といふ者を使としていひやりけるは、天神山の美作守殿は御叔父の筋目にては候へども、正しく先君清宗を殺し奉り御領分を押領し給ふ父の御讐にて候へば、御誅伐可被成候御事に候。思召立れ候はゞ御先手可仕候間、當地岡山へ御移りなされ候へかしと、懇に言ひやりければ、今は久松父の領分をかすめられ、いと幽なる體にて蟄居し、譜代の家臣少々養育して小鹽の城下に居たる事なれば、其家臣ども幸の事と悦び、則同心の返答有ければ、迎として岡山より大船三艘を催し、譜代の家臣ども一所に取のり、浦上久松岡山へ移れるを、直家さまざま馳走あり主君の如く尊び、扨天正五年二月上旬人數を催し、久松の名をかり播州勢と稱して岡山を打立ち、和氣郡天神山の城へ押寄せ攻めけれども、堅固の地なれば力攻に及びがたくて、宗景の家臣明石某をかたらひ内通して反忠をさせ、寄手を引入れ城に火をかけて攻ければ、宗景防ぐべき術つきて二月五日の夜、家臣七八人

連れて城を出て和氣村へ山傳ひに落行、新福寺の僧貳意といふをたのみて案內者として、播州場芝山へ立退けるに、供にありし者共又散々になりて、日笠彈正といふ者のみ附從ひける。其後播州にかくれ住み老衰しけるが、黑田甲斐守是をいざなひ筑前へ下り、八十餘歲にて病死ありしといふ。（宗景の終り說々あり後に註すならべみるべし。）宗景播州へ落ちし時、帶びたる太刀を僧の貳意に與へける。是を賣て金銀を多く得て還俗し、曾根村の百姓となるといへり。又其時着せし腹卷民間に殘りて、今上道郡中野村の百姓傳へて持ちたり。かくて天神山の城をば燒きはらひ、又宗景の行衞をきくに、片上へ落行き戶田松の城にかくるゝよし聞えければ、城主浦上河內景行へ直家より使を立てゝ、宗景供に後藤數馬を連れて其城に入りたまふと聞えぬ。速に出さるべしとありければ、景行返答に、宗景當城へ御入はなく候といひて、其使を打擲して返しける。直家怒つて、直に戶田松の城をせむ。景行下知して防戰すといへども、百にも不足小勢なれば終に攻破られ、浦上河內。後藤數馬等皆播州江島へ落行ける。戶田松の城をも亦燒きすてゝ、直家は岡山へ歸陣ありけり。

按に、天神山落城宗景亡びし事說々多し。天正七年八月と云ひ、天正五年七月と云ひ又八月と云ふ。其外直家より赤松刑部少輔則房をかたらひ攻めしとも、或は吉川元春小早川隆景是を攻落せしともいふ（後太平記殘太平記中國太平記等に）されども皆誤まれるがごとし。又宗景播州へ落し後、鹽飽島へ渡り妹尾某をたのみ、又飽浦美作守をたのみて新に兒島に城を築きて籠り、猶直家と戰ひて某年三月十五日、宗景終に直家に殺さるといふ。宗景の終り何れが正說なるか未詳。

浦上宗景先祖並赤松家滅亡の事

浦上美作守紀宗景は代々赤松家の老臣にて、浦上小寺と太平記にも多く並べしるせり。殊に文和四年に赤松則祐に備前國の守護職を賜ひし時、浦上を當國の守護代とし、三石に代々在城せし也。猶

それより先を考るに、舊き播州の地士なりしにや。桓武天皇の御宇、播磨國夷（エビス）第二等去返公島子（ユキカヘリキミシマコ）に浦上の姓を賜ひし事、類聚國史に見えたれば、此浦上の家は其子孫なるべし（按に、さらば浦上には臣姓なるに、宗景の古文書に無姓を以て稱す。いかなる故かいぶかし。）かくふるき家なるに、此時に滅亡して子孫ながく斷絶したり。又主人の赤松の家も世々に衰へ行きて、終に秀吉公の時に播州の赤松上總介則房（一曰刑部少輔範房）といふは阿州へうつされ、赤松左兵衞廣範といふは但馬の竹田へ移さる。共に一二萬石の地を領せしにや。其後慶長五年の亂に二人とも石田三成に組せし故に、則房は其年十月朔日大阪にて切腹し、廣範は十一月二十九日に因州鳥取にて切腹ありし。廣範に一男一女の子ありしが、男子は出家して高野山赤松院の住持になり、女子は黑田家の臣に嫁せしといふ。又小寺も播州御着の城に在しが、秀吉播州へ討入り給ひしころ御着を落て藝州へ行しといふ。其末いかにかなりし。皆主從の家亡び果にけり。

宇喜多播州働の事

かくて直家は宗景の領地を押領し、備前國中を治めけれども、猶宗景に屬せしものども備前作州に籠城して有ける。されども是をばさし置て先小鹽の赤松下野守を亡し、其所領をも合して領せんとて、同春岡山を出陣し片上に宿陣し、其翌日は三石に陣取り、其翌朝播州へ攻入り、花房助兵衞職之鷺山等に合戰す。赤松勢所々防戰せしかど叶はざれば、備前勢所々の壘を攻落し人數を籠め、岡平內は宇根の城を守り、上月城にも人數を入れ、佐用赤穗の二郡を奪て岡山へ歸陣ある。

羽柴秀吉と宇喜多播州合戰の事

天正五年十月、羽柴筑前守秀吉信長公より播州を給はり、西國征伐の事を承り其國に下向、先書寫山に陣取りければ、國中降參する者多し。其中に御着の城主小寺藤兵衞政職は、毛利家に通じ荒

木に人質を出し置き、秀吉へ表裡の事有れば、御着の城に居がたく藝州へ落行ける。其臣なる姫路の黒田美濃入道宗圓（本は備前國福岡の人也）は、引はなれ秀吉へ參り先鋒となりて、己が居城姫路を秀吉へ參らせければ、城普請ありて後こゝに移り給ふ。扨上方勢直家の領地を侵し城々を攻めければ、上月の城より岡山へ加勢を乞ひける故、長船又右衛門・岡剛介に三千の人數を付けて上月の後詰をなす。秀吉の先鋒黒田官兵衛孝高後詰の勢と戰ふ。つゞきて堀尾茂介・宮田喜八郎二の目より進みて備前勢の横を討ち、岡山勢の二陣より又進て戰へば、秀吉の先立追手てられ、宮田喜八郎は討死し、堀尾茂介も深手負ひけるを、郎黨松山小右衛門馬に昇乘せ退く。秀吉是をみて堀尾討すなと下知して、旗本を進め切かゝれば、終に岡山勢打負け敗走して、上月の城も落ちにけり。此事岡山に聞えければ、直家みづから八千餘騎を率ゐて岡山を出陣して、先播州姫路の端城別府の阿閉の城をせむ。其夜官兵衛五百騎を率し姫路を出、阿閉の城に入て下知しけるは、此城要害あさまなれば敵見あなどりて攻むべし。其時味方靜りかへりて敵を近く引付て鐵砲を打出べし。さて敵色めくを見て太鼓を打て切て出づべきぞと、しめし合せて待居たり。それをばしらず宇喜多勢只一揉にと楯をついて攻めかゝり、石垣下に付く所を弓鐵砲を以て散々に打出す。寄手多く撃れて少しためらひて見えける所を、相圖の太鼓を打ち城戸を開いて三百人許討てかゝれば、寄手の先陣一溜りもなく崩て引退くを、追討にせられて多く打取られける。此の勢に宇喜多の侍梶原平三兵衛明石左近等は、黒田の陣に降りける。直家敗軍の兵を集めて爰をば引取、直に上月の城へ押寄、後詰のなき內にとて一時攻に攻落して、眞壁彥九郎に兵を添へて守らせ、岡山へ歸陣ある。扨て尼子勝久、近年は京都に上り信長公に屬し、惟任が麾下にありけるが、此度秀吉播州下向に屬して出陣し、再び旗を上ぐべしと謀けるが、上月城を攻めとらんと秀吉へのぞみて勝久二千餘騎にて押寄せけるに、眞壁彥九郎元來臆病者の上に、先日味方敗北せしに恐れて、敵の未だ取卷かざる先に城を捨て岡山へ歸りければ、尼子入

替り上月の城を守りける。眞壁が弟に次郎四郎とて岡山に在けるが、兄の彥九郎上月の城にて一防もせず逃歸りける事を無念至極に思ひければ、直家に訴へて上月へ押寄せ城を取返し度と望みける。直家よくも申たりとて人數三千つけて次郎四郎を上月へ向けらる。兄の恥辱をすゝがんと死を極め妻子に暇乞し、日蓮のはね題目を笠印に書きつけ、天正六年正月の末岡山を打立ち、其翌日上月の城下六十餘町此方に一夜陣を張て、明日こそ城を攻めんと馬の鞍を下し具足脫ぎて休みける。山中鹿之助是を聞き。眞壁次郎四郎兄が恥を雪がんとて向ひたれば、手痛き合戰すべし。いざ此方より逆寄に夜討にせんと、よき兵八百餘人を勝つて相印相詞を定て打立ちぬ。外に加藤彥四郎に三百人附けて十餘町手前に備へさせ、神西三郎左衛門に五百人附けて五町計に備を張りて、若討損ずる事あらば入代て討てと約束して、鹿之介は眞壁が陣近く押寄、其邊の所々に火を懸け鬨を作て切て入る。餘寒の時なればみな身を縮めて伏居ける所へ、不意に討入ければ太刀をも取り敢ず、吾先にと逃散けるを追詰々々討取ける。眞壁は猶も逃行く味方を制しとゞめ、何とぞ一戰せんと床几に腰をかけて下知しける所へ、素膚の步武者の敵一人はしり來り眞壁を討んとす。眞壁立あがり拔打に切ければ、眞向より二ッになる。續て安達治兵衛切て掛るを、是も亦一打にと切けるが切損じけるに、安達兩膝をかけて薙ぐ。眞壁ながれて倒るゝ所を、安達押へて首を取にける。安達は數度の武勇あるものなれば、弟の安達慶松つゞきて働けるに其首を與へて、勝久へは慶松が討ちたるとぞ披露しける。其外其夜討るゝ備前勢七十餘人なりし。其餘敗軍し打もらされたるものども岡山へ逃歸りて其由を言ひければ、直家是を聞き再應の負軍腹立大かたならず、此度は自ら出陣して城を攻落さんと兵を集む。此よし尼子が忍のもの岡山にて見及び、上月へ立かへり告けゝれば、勝久・鹿之介・立原源太兵衛等評議して、此城へ直家の大軍をうけては始終防ぐ事なりがたし。其上長く籠城せんには兵糧乏しく叶難しとて、天正六年二月勝久上月の城を去て攝州へぞ引取りける。此事又岡山へ聞え

ければ、敵より兵を入れざる先にとて、急ぎ直家の臣上月十郞・矢島某に人數を添へて守らせける。其由又姬路に聞えければ、秀吉、尼子勢言ひ甲斐なく城を去て敵を入れぬ。今度は自發向して足をためさせず追落すべしとて、二萬計の人數にて押寄せ段々に取卷き是を攻けるに、上月・矢島も命を限と防ぎ戰ひけれども、大勢の寄手なれば防ぎ得べくもあらず。士卒爲方なくや思ひけん、上月・矢島を討て出すべく候。諸卒の一命を助け給へと降を乞けれど、秀吉其事許容なく、押て城中の兵を搦めとり、上月十郞には腹をきらせ、其首をとりて江州安土の城へぞ參らせける。殘る宇喜多が侍どもには上總踊といふことをさせて見せんとて、不殘に簑笠を着せて張付にのぼせ、其下に燒草をつみて火を付けて悉く燒殺しける。大勢のくるしむ體目も當てられぬありさまなりける。それより其所を張付谷と名付けゝるとぞ。

按に、この天正五年の十一月に、秀吉の先鋒黑田官兵衞・竹中半兵衞福岡の城をせむ。岡山より後攻す。秀吉出て戰ひて直家敗走せしといふ事を、本朝通記に書きしは太閤記に見えしを採りたるなるべし。されども其頃は福岡には城もなく、城なければ、岡山士の福岡を守りしといふ事も、福岡の邊にて秀吉と直家合戰ありしといふことも、當國には語り傳へもなし。上月城等の防戰を傳へ誤れる事なるべし。

毛利宇喜多上月城幷羽柴秀吉其外上方勢後攻の事

尼子勝久、當二月上月の城を明けて引退しこと、世の嘲りとゞめがたし。此度の落城こそ幸なれ、再びこゝにむかひ籠城し防戰せんと、勝久家臣を集めて評議せしに、立原源太兵衞進み出て言けるは、此こと然るべからず。世の嘲はさる事なれども、此上月城元來不堅固にて守り詰むる事かたし。其上此度は秀吉の加勢あれば、宇喜多も毛利・小早川へ加勢を賴みて定て大軍にて攻むべし。しから

ば運を此城にてひらかんこと如何あるべし。當家運を開くべき謀は、當時はたゞなみ〳〵の働をなしてしかるべし。以來を考ふるに、毛利三家織田家へ敵して今秀吉と戰ふとも、天下を治むる兵權には及ばずして、終に毛利和議して織田家に從ふべし。其時當家も天下を掌握する織田家の威をかりて本國に打入りなんは、何の難き事あらん。夫までは時節を見合せて、危き戰をなさん事を謹み給ひて可ㇾ然といひければ、山中鹿之介が曰、此度上月城に籠りて、毛利小早川又宇喜多迄も引出して是と戰んこと幸の時節といふべし。しばし上月に籠城して防戰ある中、秀吉も餘處に見て後詰せでや可ㇾ有。扨秀吉後攻ありても猶危くば、信長公出張し給ふべし。其大軍を以て毛利等を討たばいかで討勝てずあるべき、今ぞ時の至りて運の開くる也といひければ、勝久を始め皆此議に同じて、勝久上月の城に再び籠りて防戰すべしと望たれば、秀吉も是を尤也とゆるされて、勝久は其臣鹿之介・源太兵衛・龜井新十郎・吉田三郎左衛門等二千三百騎を率して上月城に楯籠る。宇喜多直家是を聞き則兵を出して攻めけれども、秀吉大勢にて播磨國中に控て後攻すべければ、卒爾に上月へ取かけがたしと思ひ、毛利家をかたらはん爲に小早川隆景へ言送けるは、尼子左衛門尉勝久二千餘騎を率ゐて播州上月城に籠るも、某是を討たむには易く候へども、羽柴筑前守後詰を致すべく候。其上に上方勢相增候間、此戰大事の時と存ぜられ候。早く御出馬可ㇾ有、先陣は仕るべしとあれば、隆景則許容あり。輝元元春等を催して天正六年三月十二日、藝州吉田を出陣あり。同二十六日に備前國一宮に宿陣す此時隆景より出せる制札今に殘て一宮にあり。此陣へ宇喜多直家より使ありて、病氣甚敷出陣なりがたく候故、人數計差出せとの事にて、長船又右衛門・岡平內・富川平右衛門・明石三郎左衛門・浮田七郎兵衛・花房助兵衛・岡剛介・沼本新右衛門・中村三郎左衛門・足立太郎左衛門・高取備中・伊賀左衛門・富山半右衛門・市五郎兵衛・芦田五郎太郎・延原內藏允・浮田河內・小原孫次郎入道親明・楢原監物・江原兵庫等、其勢一萬五千餘騎、岡山を打立て毛利勢の先陣にぞ押行きける。かくて寄手の惣勢六萬五千餘騎陣取りて、

上月の城を取卷くと幾重といふ事なし。扨二宮佐渡守鬨をして、惣軍鬨を合せて仕寄を付け攻にける。秀吉は四月晦日後詰として、四萬餘騎にて上月表へ打出、高倉山に陣を取り、此後詰の押として高倉山の尾續に備前勢陣取りたり。先陣は中村三郎左衛門、二陣は浮田七郎兵衛•富川平右衛門、其次に明石•長船•岡已下一萬五千騎備へたり。隆景は山上に備へ、元春は上月の城の山下平地に下て備ふ。其頃南蠻より渡り來りし臺無の大筒にて、五月十四日杉原常陸が手より水の手矢倉を打崩し、又吉田三郎左衛門も是に打れて死ける。或夜城中より忍の者を出し、其鐵砲を取んとしたれども重き物なれば力叶はずして、城下の谷へまろばし捨てたり。是を寄手取返さんとて夜中に士も雑兵も出たるを、寺本市之允勝重と名乘て矢倉より射出ける。夜ながら矢に當て射殺さるゝもの多し。かゝることもありし計にて、此ごろ京都より信長公の二男北畠信雄三男神戸三七を大將として、八萬に餘る大軍加勢として下向あり。また信忠卿も五月七日三萬騎にて出陣あり、攝州に控へらるゝと聞えければ、後攻の勢に向て戰ふ事もなりがたく、卒爾に城も攻められず。上方勢も亦中國勢と始ての手合なれば、秀吉さすがの勇將なれども戰を好まず。互ににらみ合て對陣ある。京都にても殊の外此合戰大事に信長公も思はれけるにや、加勢の人數も追々相まし、秀吉よりも聖護院の宮へ祈禱の連歌を賴み奉りて、五月十八日京都において興行ある發句に、

常盤木もかつ色みする若葉かな　宮

ゆふかけふかき夏山の露　秀吉代句

村雨の音しをとせぬ月出て　紹巴

百韻成就して懐帋に御酒をそへて、高倉山の陣へ送り給ひけるとぞ聞えし。かくまで秀吉も大事に思はれければ、大軍ながら對陣のみにて五月も過ぎ、六月も末になりにける。しかるに高倉山の秀吉の陣所の麓に熊見川といふ流あり。暑の時なれば此川へ朝夕水を遣ひに出、又馬の足を冷すこと

多かりける。此所の先鋒、宇喜多士中村三郎左衛門備へたりしが、此川端へ出づる兵を討んとて、其側にある柳原竹村の陰に伏兵を置て待けるが、六月二十八日如例高倉山より人數多く河邊へ出でけるを、藪かげより鐵砲にて三人打倒し、つゞいて中村が兵討てかゝれば、敵も取合せて備を出し戰ふ。中村小勢にて危ければ、備前勢追々進で戰ひける。夫より敵味方段々出でかさなり大勢になりて戰ひ、其外にも上月の鄕內へ敵二萬計にて出づれば、毛利勢も一萬餘り出迎て三ヶ所に分れ迫合あり、敵味方手負死人多く、尤手柄高名せしものもありて、互に引取て其日の戰は止にけり。其後秀吉は、中國勢との合戰始終の勝利無〻覺束〻や思ひ給ひけん。さしもの大軍を引取て書寫山へ歸陣ある。上月の城中より是を見て力を失ふ事いはん方なし。此上は最早籠城叶ひがたしとて、毛利の陣へ使を立て、大將生害して士卒の命を助んことを乞て、七月三日尼子左衛門尉勝久、同助四郎氏久、幷神西三郎左衛門、加藤彥四郎政貞自害し、立原源太兵衛が城を出で、山中鹿之介幸盛は藝州へ下りて上月城は落にけり。鹿之介は作州路を經て藝州に赴くとて、備中國河部川阿井の渡にて、天野紀伊守が臣河村新左衛門、福間彥右衛門が爲に討れにけり。年三十九歲なりとす。今其墓阿井の渡にありて、名は千載に殘りける。

毛利勢播州より歸陣の事

宇喜多直家は、今度上方勢と毛利家との合戰大かた毛利勢敗軍なるべしと思ひて、虛病を構へ家臣計出し、其身は出陣なく、其上角南隼人入道如慶を使者として、織田信忠卿播州鋳摩津に在陣の所へ遣し、向後御味方申べしとありければ、信忠卿も許容の返事なりし所、思のほか上方勢打負け上月の後詰の大軍引取りければ、案にちがひて、隆景元春とも上月落城の後しばし黑澤山に陣取てありし所へ、直家病平癒のよしにて參陣し、隆景元春へ對面、今度勝利の賀儀を申て岡山へ歸りぬ。

毛利の陣へも直家上方へ内通の事略ゝ聞えければ、杉原盛重は直家を討ちとらんなどいへども、隆景許容なくてやみぬ。直家より重ねて又使を立て隆景元春の陣へ申遣しけるは、今度上方へ直に御出陣候はゞ、御先手仕べしと合戰をすゝめけるも、内心は何れにても勝利ある方へしたがふべしとのつもりなり。若直に御歸陣候はゞ、領内御通行の事饗應申べきよしなど慇に言遣しける。是も許容ありて立寄る事あらば、元春隆景を討取べき謀なりけるとぞ。しかるに中村三郎左衞門兼て毛利家へ通じける故、此等の密計を黑澤山の陣へ内通して、其身は作州の居城へ何となく歸りける。直家又中村が内通せし事を聞いて、岡山より人數をやりて八月二日の曉中村を誅す。此事黑澤山へ聞えければ、直家の密計ある事いよ〳〵うたがひなしとて、隆景元春藝州への歸路に備前通行をとゞめて、八月三日黑澤山を立て、隆景は播州奈波坂越より乘船して海上を歸陣、元春は作州路を引取て岡山へは使を以て藝州より急に歸陣候樣に申來るに付、殘念ながら今度は御饗應をうけず能歸候、重て立寄べしとありける。直家は此度隆景元春を饗應して仕手を言付討取り、其首を織田家へ働のしるしに獻じ。其威に備中備後迄取敷べしと謀られけるに、其謀大きに相違したり。されどもさらぬ體にて毛利家へも親みける。

宇喜多上方と和睦幷小西彌九郎が事

直家は其後上方と毛利家との勝負を見はからひ、病氣と稱して出陣なく、かれへも不附是へも不附してありけるが、家の老臣をあつめて何れへか從べきと異見をとはるゝに、富川平右衞門申けるは、當時一度二度の勝敗何れに有とも夫をば論ずべからず。信長公の威光、且秀吉の合戰の形勢賞罰の分明等を以て以來を考ふるに、天下は必ず是に歸すべし。當家始終の御爲には、少も早く秀吉によつて信長公に附かせ給へと諫めければ皆是に同じ、直家も尤なりとて信長公へ和睦を望むとい

へども許容なし。秀吉に便つて再三申入るべく思へども、兼て毛利家へ戸川が二男孫六を人質に出し置たり。是をば如何せんと思案あれば、平右衛門申しけるは、孫六が事少しもくるしからず。御家の大事に私の倅いかで替へ申べし。是は天運にまかすべしと有ければ、直家大に感じ又悦で、左あらば彌ゝ上方一味に極むべし。孫六を取返す手段も又可ㇾ有とて、先播州の秀吉のもとへ足立太郎左衛門を使として遣し、進物品々取揃へ遣しける。しかるに和睦の事信長公許容なきを、強て秀吉へたのみ遣す事なれば、いと大事なる使なり。されば秀吉へ入懇なる者を添へて遣はさずば然るべからずと、是を尋らるゝ所に、岡山の町人に小西屋彌九郎といふもの有り。もとは泉州堺の者にて、秀吉をいまだ猿と人の呼し時竹馬の友にて、今も秀吉目をかけられし者也。是を呼出し差添へて遣しければ、秀吉許容有て、以後は何かに付申合べきよしの返答也。依ㇾ之其後は直家よりも秀吉へ加勢の爲とて、花房彌左衛門正成に士足輕をそへて姫路に遣し置ける。其明年天正七年の秋秀吉安土へ參りて、信長公へ直家事味方へ參候よしを申されけるに、伺もなく申合候事不ㇾ宜とて、猶も信長公免しなかりしを、さまぐ〵に申乞て十月晦日に免許有て、味方へ參べき由相濟み、其段岡山へ聞えければ、浮田與太郎基家を信忠卿の攝州昆陽野の陣所へさし遣し、其禮謝あり。又播州の秀吉のもとへは直家みづから行て對面有りて、其禮をのべられける。此時信長公執奏ありて直家從五位下に叙爵ありけるとぞ。扨富川孫六を人質に藝州へ遣し置たるをば、其頃藝州安國寺の惠瓊上京ありて、下向に岡山旅行せしを、申合する事ありとて岡山の城中へ呼て捕へ置、藝州へ言遣しけるは、富川孫六を返し給はるべし。左あらば惠瓊を返し進ずべしとありければ、毛利家同心有り。約束を極め備中阿部川にて人質替にし、孫六虎口をのがれて岡山へ歸りける。又此度秀吉への使に添へて遣しける小西屋彌九郎といふ者、本は堺の町人小西壽德といふ者の次男なり。又以前直家幼少の時たのみて居られし阿部善定といふ福岡なる富家の手代に、源六といふ者ありしが、直家岡山の城を

取立て國中の商賣人を城下へ呼寄せられし時、此善定が手代源六岡山下之町へ出て吳服商をして魚屋九郎右衛門といひしが、實子なくてかの小西壽德が子の彌九郎を養子としたり。秀吉若年の時大坂・堺などへ上り給ふ時此壽德がもとに居て、この彌九郎と友達なりしよりの馴染なりしゆゑ、此度の使にもそひて行きしが、是より一入懇になりし。其上此彌九郎利根發明なる者にて、町人ながらも秀吉より諸方へ内々の使などに行き、間者のやうなる事どもせしが、程なく呼出され侍に取立小西彌九郎と名乘り、段々立身して後に五奉行の一人となり、小西攝津守といふは則此人なり。今堺にも岡山にも小西屋といふものは、皆此類葉なりといふ。

虎倉の城主伊賀久隆を毒害の事

伊賀左衛門久隆は虎倉の城主にて、無二の宇喜多方なり。又直家の臣に難波半次郎といふもの有り。密に毛利家に通じて、何とぞ伊賀左衛門を謀を以て殺し、毛利家への功とせんと思ひ、天正六年九月計に半次郎讒言して、伊賀左衛門毛利家へ内通あるよしをいふ。直家是を讒言とは思はず、何の穿鑿もなく伊賀を殺さんと企てらる。左衛門は兼て岡山城下にも屋敷をこしらへ、虎倉の城をも守り岡山にもありて、父子交代せしが、左衛門岡山にありける時直家より料理をふる舞べしとありて、家來迄もよびて饗ありて、此時左衛門へ毒を入れて與へらる。扨下城ありしが、直家の料理人伊賀が家來に所縁あるものありて、今日の料理に毒あり。いそぎ毒を解すべき藥用ひられよと密に告げける。左衛門是を聞き、今毒を解きて難を免るゝとも迚も生けては置かれまじ。終に死なん命、城に籠て打死するこそ本望なれとて、急ぎ岡山を打立て馬を早めて虎倉の城に歸り、子刻に城に入り家人を集め籠城の手配し、門々をさしかためて岡山の討手を待つ。左衛門嫡子與二郎は急ぎ解毒の藥を調へ父に與へけれども、早延引せし故にや、曉に到て左衛門は終に死にけり。直家は左

衞門が岡山を去し事を聞て、浮田源五兵衞を虎倉へ遣し仔細を問はしむ。足輕五十人連て虎倉へ至れば、はや城門さし堅め用心きびしく見えければ、わざと源五兵衞一人城戸近く至り、直家の使のよしをいへども答ふる者なければ、爲方なく岡山に歸り、伊賀籠城のよしを申しけれども、城をも攻められず其分にて過ぎにける。嫡子與二郎は城に籠り、毛利家へ使を立て左衞門尉毒害に逢しことを言ひやり、以來御味方申べし。御人數を出されば御先手申すべしとて父の仇を報ぜんと謀りける。其後しばし城に有けれども、與二郎が舅明石飛驒より内々しらせて、其儘あらば惡かるべしとすゝめければ、正月下旬虎倉の城を落ちて、藝州勢の備中へ働出たると一所に退きける。其跡の城をば長船越中に守らせらる。越中は其時播州駒山の城にありける故、其弟の源五郞・石原新太郎（越中が妹聟なり。）有年・大田原等を入て守らせける。

一說には、伊賀左衞門が家臣川原四郞左衞門といふ者を直家かたらひて、左衞門を毒害せしとも、亦河原はかり合して殺させしともいふ。

備中忍山落城並金川城夜討の事

天正六年十一月中旬毛利輝元・吉川元春・小早川隆景三萬計の勢にて出陣、備中備後の諸士を先鋒として備中に打出、高田村忍山の城に浮田信濃・岡剛介が籠りたるを圍む。吉川民部大輔經言は忍山の東に陣取、伊賀與二郞に毛利勢を加へて七百計、共に津高郡勝尾山に陣どりて、岡山勢の後攻せん押として控へたり。毛利勢精兵を勝りて晝夜を分ず攻けれ共、城中少も不騷弓鐵砲を放て防戰す。されども信濃も剛介も小勢なれば岡山へ加勢を乞ひ、直家は猶病中なれば加勢として岡平內・長船又三郞片山惣兵衞等大勢を率して出陣し、忍山の丑寅に當たる鎌倉山に着陣す。吉川經言一千餘人を二備として岡山の加勢に向て相戰ふ。岡山勢打負色めく所を藝州勢勇を奮て切崩す。城中より是を

みて浮田信濃みづから打て出戰ふ。吉川が先手打負て二陣入替り戰ふ所へ、城中より岡剛介討て出で戰ふを、又小早川勢横を入て戰へば、浮田も岡も人數をまとめ引揚て城に入、門々をさし堅めて防ぎけるに、毛利勢も攻めかねて備を引取り控たり。年も明くれば天正七年正月上旬、城内に内通の者有りて城に火を放つ。折ふし風つようして火の粉飛ちりて、城中の小屋一同にもえあがる。寄手兼て相圖の事なれば此火を見て四方の壁に一度に付て攻入けるに、城兵防ぐに術つきせんかたなく敗走す。浮田信濃・同孫四郎は猶も防ぎけるが、終に腹切て炎の中へ飛入て死にけり。殘兵逃散りけるも多く討れて、寄手は城兵五百三十餘人を討取て城は落にけり。伊賀與二郎は去年より勝尾山に陣取つて、岡山の後詰を待ちて一戰して遺恨を散ぜんと思ひけれども、直家は近年の内秀吉をかたらひ、上方勢と一所に毛利を潰さんと謀りければ、忍山城の後詰もさのみ心を用ふるに不及して、此度は强て人數をも出さゞれば、伊賀手を空うしけり。されども此度此まゝに歸る事を殘念におもひ、兼て虎倉の邊の案内は知りたれば、吾兵を引分て金川の城へ夜討をかけたるに、宇喜多春家守りけるが、よく防戰して利なければ翌曉引取ける。伊賀是にては遺恨散せず。又或夜城中の油斷を見はかり、夜討して鐵砲打かけ攻入けるに、城中皆寢入居たる所へ不意を討れ、城兵さんざんに防ぎ戰て五十餘人枕をならべ討死す。されども、かく防ぐ隙に手を合せ門をとぢ、狹間に弓鐵砲を配りて防ぎければ、乘取に及ばずして伊賀も引取ける。漸く此五十餘級の首を取たるに少し恨を散じて是を毛利の陣へ送り、虎倉を出て備後の三原に行き、小早川に屬して居たりける。

周匝城幷作州飯岡鷹巢等落城の事

去々年天神山落城の後、北備前又作州の城々宗景に屬せし者ども、直家に降らずして楯籠もの多し。されども毛利家との取合絶えずして是等を攻むべき隙もなかりける。今年天正七年二月花房助兵

衛職之・延原彈正等を以て是を討しむ。先赤坂郡周匝の城に佐々部勘齋籠城し、天神山の浪人ども一つに籠り居けるを攻落し城兵不ㇾ殘討取て、勘齋も周匝の一ノ谷といふ所にて討死す勘齋が墓今なを殘れり。それより作州飯岡の城に保志賀藤内籠城するを攻む。此城は鷲山とて嶮岨の要害なれば容易に攻られず。鮎取卷て日を經にける。されども外よりの助もなければ、終に防戰かなはずして家臣秋山重左衛門・鮎矢亦七・大澤重左衛門等十七八枕を並べて討死し、藤内も二の丸にて自殺して落城す。是をはき捨て岡山勢海田村へ兵を進めて陣を取る。其村の鷹巢山の城に倉敷村の江見市之丞・同次郎楯籠る。宿家より使を立て是を招けども、宗景の仇なりとて更に從がはず。江見に同意の浪人百姓どもを集めて籠城す。花房・延原是を攻けるに、江見よく防戰して攻惱ます。然るに延原彈正兼て八名の百姓をかたらひ置ける。是に反忠させて城に火をかけて寄手を引入れければ、城兵どもを下知して江見兄弟爰をかぎりと防ぎ戰ふ。其なかに清水帶刀といふもの岡山侍の池土佐と渡り合けるが、清水打負て土佐押へて清水が首をとる。清水が家人廣田七兵衛かけ來り、主の敵逃さじと池に打て懸り、暫く戰て終に池土佐を討取て廣田は其首を取り、主人の首と一ッに是を提げ海田の村へ引取る。其外城兵討死し江見市之丞も討れ、次郎は花房助兵衛是を討取りて、城落たれば跡を殘らず燒拂ひ、岡山勢は引取ける。廣田七兵衛は主人清水が首を葬て墓を築き、其傍に土佐が首をも埋置きて播州へぞ落行ける。其墓今も殘るか、しらず。江見兄弟が墓はつどば崎といふ所に今にありといふ。可ㇾ尋。

一說に、周匝城にて討死せしは保志賀藤内、飯岡城にて討死せしは江見二郎といふ。されども是は誤なるにや、笹部勘齋が墓周匝に殘りたるにて知るべし。其所にては勘齋が子仙千代が墓といへり。

作州三星城攻幷落城後藤勝元自害の事

*山下六郎左衛門は三星軍傳記には六右衛門に作り古城跡には下山市左衛門に作る又水島久作古城跡には久助に作り龍門又市郎は三星軍傳記には龍川又市郎古城跡には瀧又市郎に作る

花房助兵衛•延原彈正は、同年四月上旬倉敷村の南なる倉掛山に陣を取て、三星城へ取掛け攻し。是は宗景の老臣後藤左衛門勝元籠城す。相從ふ軍勢には、宗景の舊臣後藤河内久元•小堀備前吉秋•奥山源六友永•下山半内正氏•奥田•青山•福田•丸尾•西田•石田•芦田等十一人、其勢百四十二人、後藤勝元が家臣には後藤左近•*山下六郎左衛門•山本權内•同彥右衛門•福田作內•林軍右衛門其勢百十一人本丸を堅む。*水島久作•後河將監•*龍門又市郎其勢八十一人西の丸を堅む。安東相馬•難波利介•柳澤太郎兵衛其勢百三十九人東の郭を堅む。坂田織部•同惣左衛門•有元•戸坂•榎本等其勢五十人は北の郭を守る（坂田は江見市之丞亡びし後此にこもる。）油津里•難波三郎左衛門其外、足輕原田•赤松•江田•島田其勢三十餘人南の郭を守りて、都合五百餘人栖籠る。しかるに城中の後藤河內•小堀•下山•難波等言合せ、兵を引連れ城を出て、荒木田村の山に入て靜に兵をかくし備へて、延原等が兵を進めば其後を討んと巧みける。延原は此謀をば不ㇾ知倉掛山より先手を進め、段々に押出し三海田村に進む。時に荒木田の山中に隱れたる後藤河內等延原が旗本の後より討てかゝれば、思ひもよらぬ不意を討れ延原が旗本忽敗北して散亂す。後藤河內久元眞先に討てかゝり、延原彈正と渡り合ひたゝかふ。久元覺ある勇士なれば、延原景光に手を負せて既に討たるべく見えけるに、延原が家臣二人助け來りて押隔て、やう〱延原が旗本を位田島奥山まで引退く。後藤•小堀•下山等が兵追討して首十八打取て勝鬨を作りて引取ける。此ついでに倉掛山の延原等が陣屋を燒拂て三星の城を見やれば、延原が先陣の者共は旗本の崩るゝをも構はず城を攻めて、只一揉に乘取らんと戰て城兵どもを多く打取、兒島某•三保某みづからよき首取競ひ進む所へ、後藤河內•小堀•下山•難波等又引返して、延原が先陣の兒島•三保が城を攻る後より、鬨を作て討て懸る。是に城兵力を得、防戰して前後より取はさみ戰へば、寄手敗軍し湯鄕村まで引退く。兒島は難波利介と戰ひ終に兒島討れぬ。其、寄手討死疵を蒙る者夥し。後藤河內叟にても亦勝鬨作りて兵を引て城に入る。夫よりは城をも攻ず。延原も位田島奥山に陣城

を築き勝間の城と號し、是に居りて岡山へ加勢を乞ふ。直家是を聞き、浮田左京詮家を大將として人數大勢さし向けらる。依て更に軍議をなして城中の案内を聞かん爲に、湯鄉村の長光寺住僧をかたらふ。其僧彈正に語りけるは、三星の城中に安東相馬・難波利介・柳澤太郞兵衞といふ勇士あり。是等あらん程は落城かたかるべし。謀を以て是等味方に屬せば必落城すべしといふ。依之密に長光寺をたのみてかの三士へ使を言含め、味方へ來らば恩賞は望にまかすべしといひやる。長光寺城中に入て潛にかの使の趣を三人へ申けるに、安東は是を請入る。難波と柳澤は許容せず。かくて四五日を經けるに安東が變心を人も察してけるにや、何となく城中さわぎたちて各疑心をなし、互に心を置き合ひければ、大將勝元、迚も士卒一和せず。是にては籠城叶ひがたし。城中の男女の命を助けて勝元一人生害して、城を渡さんとわが妻にいふ。此妻是を聞きて、越後といふ女ありしをかたらひて勝元を諫めけるは、君の覺悟甚不宜。さあらんは誠に不益の生害といふべし。急に反忠する棟梁を聞極め、是を殺して城中の士卒をおし靜めて、堅固に籠城せんこと何の難きことあるべし。其反忠の者を討たんも亦易かるべし。吾にまかせ給へとて、安東が反心をよく聞極めて、一夕頭分の侍へ料理をふる舞ふべしとて、安東・相馬・難波・柳澤幷長光寺をも呼て廣間にて料理を出し圍碁などして有ける所へ、奧方よりかの越後といふ女菓子を持出て、奧樣より下され候とて相馬へ相渡す。相馬座を退きて是を戴く所を、勝元の妻物かげよりつと出て、相馬が首を一刀に打落されけれども、是をば外へもらさず潛に取かくし置きければ、城中外に知るものなし。其翌朝相馬が首を大手の門外に掛て曝しければ、城內反忠せんと思ふもの是に恐怖して反心をも亦飜しける。夫故又備前勢押寄せて攻戰ひけるを、倉敷まで追返してよく籠城しけるに、反忠の者のせし事か、あやまりて火出しか、本丸より燒出て十方に火粉飛ちり、所々の陣小屋一度に燃あがりければ、寄手其虛に乘じて急に攻寄て乘入ければ、城兵防禦のわざつきて荒木田村をさして落行けるが、延原が勢にとりまか

れ城兵多く討取られ、柳澤太郎兵衛も討死す。難波利介は蓮花寺まで落延ける。西の丸へも寄手乘入けるを爰をせんどゝ防ぎける。されども今朝辰の刻より未の時迄、息も不ㇾ繼戰ひければみな戰つかれ、其所にて二十四五人枕を並て討死せしかば、城中今は防戰叶はず。皆火に飛入死にける。宇根太郎兵衛年八十三なりしが、夫迄も若武者と同じく戰て靜かに具足脫ぎすて、腹切て炎の中に飛入死にけり。城主勝元城の一方を打破り遁れ出、家士二十八騎引連れ入田原の山境まで退きしが、備前士急に追詰ければ家臣悉く所々にて討死しける。其隙に勝元只一騎長田村迄退けるが、猶延原が兵追かけゝれば今は遁れぬ所なりとて、隱れ坂といふ所にて自害して失せにける。其首をば延原が侍打取りて、延原が實檢にぞ入ける。今もかくれ坂に後藤勝元が墓ありといふ。此三星をば宇喜多より明石四郎兵衛を置て守らせらる。此城の兵士直家へ降參する者多し。其なかに下山半內正氏は此城をのがれ出で、花房五郎右衛門に所緣ありて是をたのみ、久米の皿山に入り、夫より中河內村寶藏院が山林に引籠り、一生他へも仕へずして終りぬ。此半內が祖父は北條越後守氏吉と言て、勝田南郡菜喰村の井內城に代々住せしが、氏吉が嫡子下山源五郎氏晴は伯州大山にて鈴木新之丞と喧嘩して死す。是をば此所に祭りて下山明神といふ。二男筑後守淸氏。三男大膳久氏二人とも尼子が爲に殺さる。其久氏が子半內正氏なり。浦上宗景に仕へて比類なき勇士なりしが、終に二君に仕へず民間に終りける。此外作州表宗景に仕へし者ども、或は討取或は降參せしかば、所々番勢ども置て岡山勢歸陣せり。

巻第四終

巻第五

作州所々城攻の事

天正七年直家下知して、作州の取出（砦）どもの堅固を言付て兵を籠めらる。先づ大寺畑城には江原兵庫助（直家の舅也。）小寺畑には芦田太郎、篠葺の城には市三郎兵衛・同五郎兵衛・玉串與十郎、其外岩屋城宮山城砥石城等を守て毛利勢の押とす。毛利勢より當二月兵を出して小寺畑の城をせむ。芦田切て出で防戰し、寄手の大將今田玄蕃に手を負せ朝枝源四郎を討取て、寄手を突崩し引取守りけれども、寄手大勢にて入替々々攻ければ、防戰力つきて二月十二日芦田太郎一方を切抜て大寺畑に入けるに、同十六日より大寺畑へ押寄て攻うごかす。城中に楢崎彈正といふものあり。敵より此者に内通して城に火をかけ、敵を引入て二の郭の切岸まで攻寄けるに、城兵防ぎかねて門を開き突て出で一方を破て落行けるに、富山半右衛門岡山より使に來て居たりしが、城に殘りし者共をいさめ勵して、狹間より弓鐵砲を放ち寄手を防ぎとめて城を持固めければ、寄手も進みかね暫く兵を引てためらひけるを、最前城より落たりしもの共是をみて、三十人計又取て返し城へかへり入て防戰す。其中に引き後れたる者もありて寄手にまじり、其上辰の上剋の事にて朝霧ふかくして見分がたければ、矢留をして霧の晴るゝを待て城下をみれば、塀下に寄手ひし〳〵と並び居たり。是を幸と狹間を開きてよき兵とみゆるを選び擣にしければ、寄手の松岡安右衛門・兒玉市之介・少阿彌などいふよき侍多くうたれけるほどに、先攻口を引取ける。其翌日再び押寄せてきびしく攻懸りければ、江原もふせぎかねて終に一二の郭を乘取られ、爲方なく圍を切抜て篠葺の城に入る。其後吉川元春出陣して、此篠葺も岩屋砥石の城も攻破られければ、備前勢みな宮山城祝山城に入て是を守る。吉川つゞきて宮

＊重助十介重〃原本統一を失へども今は其儘とせり

山城を圍て攻むる事數日に及ける。或時寄手の陣より村里の浴室に行く者多かりしを、城中より見すまして城より兵をひそかに出して、其浴室の邊にて是をうつ。其時寄手の陣より助けて大勢になり、暫し迫合てやう〳〵物別れして引取る、又或日は城より兵を出して民間の籔陰を楯に取て伏置、外に又兵を出て寄手を招てかゝれ〳〵といふ。吉川元春是を見て自ら兵を進めて切てかゝる所を、籔陰の伏兵出て横を討、是に切立られて井下左馬允・森脇彌五郎・小笠原二郎右衛門等大勢、或は討れ或は深手負て引返せば、吉川散々に切立らる。城兵勝に乘じ追討す。元春も爲方なく鐵砲を段々に備へて追くる敵を搏せて、漸々繰引にして引入ける。扨祝山の城を攻取て藝州へ歸陣あれば、同三月直家又岡山を打立金川に宿陣し、翌日作州高田表へ發向して藝州勢引取たる跡の城々を攻らる。舛形の城に吉田肥前・森脇市郎右衛門が籠りたるをば其儘捨置て、荒神山に陣取て祝山の城を取返さんと謀を評議ありて、此城には熊谷信直が四男三須兵部・鹽谷豐後・同左介・猪股平六楯籠りけるを、直家より間者を城中へ入て猪股に内通して、味方を近日に城中に引入べしと平六に約束しけるに、其事顯れて平六を城中より追出して、城を堅固に守りければ、直家爰をも捨置て夫より三宮城を攻らる。是には村上勘兵衛楯籠る、或日勘兵衛自ら侍六十人計率して討て出、戰ひて引取けるを、味方是を追ふ。其中敵五人鎗四本長刀一振にて打拂々々引退を、＊馬場重介鎗一本にて城の木戸近く追込む。餘りにきびしく追ける故にや、鎗三本は投突にして五人共城へ入にける。重助は敵の捨たる鎗を取て引返しける。其夜直家は足輕大將浮田修理・浮田太郎左衛門・池田八右衛門・足立太郎兵衛を呼て、明日は必城を乘取り城主村上を討取べしとて、城を攻むべき謀を申聞けらる。次の間にて岡平内是を聞き進出て言けるは、君弓矢をとり始め給ふより以來、斯樣の大事の謀を富川・長船我等三人に先仰なきことなし。しかるに若き者どもと謀給ふこと甚覺束なし。某明日城に入て村上が首を取て御目にかくべし。其首を得ずば再び歸らじと言切て己が陣に歸り、戸川・長船にも是を語合せ、平

内は城主村上を討取らずば討死と思へば、明日の出立手輕になくては利を得がたしと、甲冑六具まで撰びあつめけるに、臑當の重かりければ家臣半井原某を呼て、汝が臑當と刺脚絆をかせよ、某が鐵臑當を汝かけよ、明日は大事なりとあれば半井原合點せず。君は城中迄も馬上にて乘込給へば鐵臑當何の御構なし。私は歩立なれば鐵臑當行歩不自由にて難儀に候。是は御免なされよと座を立て歸りければ、平内も爲方なく其儘鐵臑當にて打立ぬ。さて前夜言しこともあれば、富川も長船も岡と同じく先を爭ひて三宮へ攻入けるに、富川平右衛門が弟岡與八郎當年十九歳（是は平右衛門が異父弟也岡惣兵衛か子也。）力量人に勝れたれば年若なれども數度の高名有り。上羽蝶のさし物に斧・熊手・鋤・鍬・大鋸等を負て一番に城へ乘込、續く花房正成乘込む所へ、與八郎が膝の先を篦深に射られて進退ならず。矢は拔きたれども矢尻拔けず。是を無理に拔たれば骨くだけて、氣絶して岸より下へ落たり。津島善右衛門爰にありて、與八郎が首を揚て其家來に渡して戻す。平内は村上を心がけて進む所へ、村上打て出ければ岡押並で組て取て押へ首を掻く。時に村上が妹長刀を以て岡が足を薙ぐ。されどもかの鐵臑當なれば少しも不切。半井原駈付て彼女を切拂ふ。平内は村上が首を取て則直家の實檢に備ふ。大將討るれば其餘は散々に落行き城は落にけり。其外毛利家の持の城々は秀吉の加勢を合して攻べしとて、所々に番勢を置く。同四月二日直家は岡山へ歸陣あり。花房助兵衛荒神山の城に殘り居て、毛利方の城と度々迫合有ける。五月中旬の事なるに祝山の城にありける鹽屋佐介、城を出て近村に浴室のありけるに浴に行く。仲間に十文字の鎗を持せたり。是を荒神山の忍び見て助兵衛に告ければ、潜に兵を出し　其浴屋を取圍ませぬ。佐介は其浴屋の屋根に上り十文字の鎗を取て、助兵衛が勢の群りたる中へ飛込み突廻り、大勢に手を負せて其場を切拔け引退くを、弓を以て遠矢に多く射かけゝれば、佐介鎗をば捨て刀を拔き又討てかゝれば、助兵衛が勢數十人中に取籠めて終に突伏られ、首をば難波六右衛門打取て荒神山へ引取ける。敵ながらも佐介が働き比類なきを感賞して、其旨

を父鹽屋豐後方へ言やり、死骸首ともに祝山へ送りける。

按に、猪股平六此後宇喜多に臣從して備前にて終に死たるにぞ、此平六が墓津高郡下牧村にあり。

辛川合戰小早川勢敗軍の事

同年八月藝州より小早川隆景を大將として其勢一萬五千、備中國へ出陣して備前へ打入、岡山をも攻べきよし聞えける。され共直家は病中にて出陣なく、浮田忠家等人數大勢を引率して岡山を打出で、富山を打越え矢坂村を後に當て、一宮の此方迄備を七段に立て敵を待つ。戸川助七郎達安（平右衛門子後に肥後守と云ふ。）が一手をば引分て、辛川村の邊の陰に隱して伏置、相圖にまかせて打出んと約し置く。かくて隆景大勢にて兵を進め、辛川村を過て備前勢に討てかゝる。先陣駈合せ戰ひけるが、兼て敵を誘なはんとする餌兵なれば、百人餘りの先陣弱々と打負け引退く。小早川の先手競ひかゝつて是を追ふ。夫につゞきて後陣も備をすゝめて辛川を打過る時、戸川助七郎が伏勢山陰より起て、小早川勢の後より討てかゝる。助七郎今度初陣なれば眞先に進みて戰ふ。其時七段に備へたる岡山勢しづ〳〵と押出し討てかゝる。流石大勢の小早川勢も前後の敵に切立られ色めき立て見えけるを、岡山勢隆景の旗本を目にかけ切かゝる。隆景采配を打振り下知をなす所に、又近邊の山上にも弓鐵砲を配り置けるが、鬨を作りて矢玉を打かけぬ。本備よりはしきりに追かけ戰へば、小早川勢惣崩になり西をさして敗軍し、一返しも返さず備中へ引退く。岡山勢も小早川大軍なれば、からく辛川村迄追討して人數を引揚げける。今日敵を討取る事大勢にて數をしらず。岡山士高名多し。殊、富川助七郎、十三歳の初陣にて采配持たる敵を討取り、楢原彦右衛門も十八歳、よき首取て勝鬨あげて兵を打入ける。天正七年の辛川崩といふ是也。

小早川隆景兒島へ出張の事

天正八年三月〔一に曰七年八月なりと〕小早川隆景兒島に出張す。最前辛川表にて敗軍の事を憤り、兒島を切取らんとし、又其序に岡山をも攻べき謀とぞ聞えし。其頃兒島常山城に富川平右衞門在城して兒島を守護す。小早川一萬餘、常山より西所々に陣取り、近々常山城を攻んとす。富川が組頭中島左近・廣戸與右衞門是を注進して岡山へ援兵を乞ふ。依之岡山には兵船五十艘川口に浮べ加勢の人數を催す。しかるに組頭兩人よりは注進したれ共、平右衞門よりは一度も注進せず。援兵も乞はず。いかなる仔細にやと不審なれば、しばし出船をとゞめて是を問はんと思ふ所に、翌朝平右衞門より飛船を以て申來るは、小早川兵を出して當城を攻ると見え候。然るに敵の謀を察するに、去年辛川へ軍を出し岡山を攻んと存る所に思はざる敗軍せし故、今度常山に攻掛候體をなして、岡山より加勢至らば其跡の海上を取切りて通路を絶ち、岡山不勢なる所へ人數を集め、再び岡山を攻て乘取らんとの手段と存せられ候間、御加勢御無用に候。當城をば御捨候事可然候。此城攻落され候共御構に少もならず候。岡山を堅固に御持候へとぞ申越ける。直家是を聞き、平右衞門が遠慮尤至極せり。さらば川口に兵船を揃へし計にて、加勢をば渡すべからずと下知ある。隆景も其謀なりし故にや、急に常山の城をも攻ざりし所に、直家より秀吉へ援兵を乞て、近日兒島へ加勢として淺野彌兵衞兵船二百艘にて押渡るといふこと、小早川家の忍の者播州より歸りて告ければ、隆景も思慮ありて城をも攻めず兒島を引拂ひ、備中高山の城まで粟屋雅樂之助を殿として引取けるを、常山よりも兵を出して追討して、敵多く討取て引返しける。

一說に、此時加勢として直家渡海、八濱二子山に陣し、秀吉も出陣して南山八幡城に陣取給ふといへども、秀吉兒島に渡り給ふ事終になく、又直家は此時病中なれば、此說は誤なる事明かなり。

宇喜多直家卒去の事

宇喜多和泉守直家、近年腫物を煩ひ出陣も叶がたく、浮田與太郎基家・浮田七郎兵衛忠家名代として所々出陣ありしが、病氣重りて天正九年二月十四日行年五十三にて卒去なり。法名は涼雲星友といふ。嫡子は龜松とて有しが早世し、二男八郎とて當年九歳なりしを家督とす。しかれども戰國の事なれば是をふかく隱して、其儘病中と稱して外へは葬らず、岡山の城につゞきたる東の山に（今の本城の地なり）埋め置て、（後に平福院に葬りて堂を建木像を安置して今にあり。）浮田與太郎事をはからひ、隣國への交りも以前のごとくありしが、自然と外へも死去の事風聞せしといふ。其明年天正十年正月九日卒去と披露して秀吉をたのみ、正月十六日八郎幼年なれば名代として岡平内を使者とし、信長公へ直家の遺物吉光の脇指黄金千兩を進上す。同月二十一日秀吉岡を召連れて江州安土に至り、此由言上し遺物を奉りければ、跡式八郎へ、親直家の時のごとく領地すべしと下知し給ひ、使者の岡平内に馬を賜りて岡山へ歸されける。

或說に、直家の腫物は尻はすといふものにて、膿血出ることおびたゞし。是をひたし取、衣類を城下の川に流し捨るを、川下の額か瀬にて乞食ども度々拾ひけるに、二月中旬より此穢れたる衣類ながれざるより、直家はや死去ありしといふ事を、外にて推量して皆是を沙汰しけるとぞ。

作州岩屋の城を攻落事

作州久米北條郡坪井村岩屋の城主大河原大和守は、無二の毛利一味也。いかなる仔細やありけん、其家臣茅田備後守主人大和を招て饗應して是を弑す。同家來加藤伊與（豫カ）守は、主人大和守茅田が爲に討れし事を無念に思へども、病身進退心にまかせぬ程なれば爲方なく、鬱憤の餘り岩屋の本堂に出

て腹十文字に切て失にけり。此事岡山に聞えければ、天正九年三月下旬戸川•長船•沼本等出陣して城を攻め、茅田備後を討取り岩屋の城を取て、直家の伯母聟濱口某を入置て此城を守らせけるに、毛利家の中村大炊介頼宗、苫西郡山城村葛下の城にありけるが、岩屋を又攻取んとて兵を集て同六月二十六日打立ち兵を二ッに分、一手は櫻井越中守を大將として、大藏•片山•林屋•金屋幷中村が家僕木村勘兵衛等二百人計、岩屋の大手に向ふ。一手は大原主計•加藤兵部を大將として、立石孫市•武元又三郎•大林久介•片山右馬允等に若者三十二人を撰てさし添て、搦手の難所を岩根傳ひによぢのぼりて、塀を越て忍入り、屋上へあがり火を放ちて閧を作る。大手も是を相圖に攻入ければ、濱口一さゝへもせず攻落され、其身は討死し城兵は吾先にと落去り、城は落にければ、葛下城より兵を分て岩屋の城を守らせける。其後花房助兵衛出て攻けれども、實に直家死去なれば強ても是を攻めず其儘さし置けるが、高松陣以後秀吉下知し給ひて双方和解して、中村大炊介も藝州へ歸りける。

兒島八濱合戰幷七本鎗の事

天正九年四月の頃、秀吉より宇喜多直家へ使ありて、近年に毛利家征伐有べし。これによりて兒島を堅固に取り治め、備中をも追々取敷べきよし申來る。直家は實死去なれどもさらぬ體にて病中と稱し、浮田與太郎基家•浮田七郎兵衛忠家應對ありて、備中を討取事等言かたらひ、其謀ども得心のよし返答に及びける。藝州の忍の者此事を聞て歸り告たりければ、毛利三家評定ありて穗田伊與守元清を大將として、有地美作守•古志淸左衛門•村上八郎右衛門•植木出雲守•同下總守•同孫左衛門福井孫六左衛門•津々加賀守等を兒島へ渡し、蜂濱より西四十町計に陣取、麥飯山を築て砦として、先達て兒島を取敷治めんと謀ける。此毛利勢兒島に出ける事を常山より岡山へ注進あれば、宇喜多勢與太郎基家を大將として、富川平右衛門岡平内其外諸大勢渡海して八濱の此方に陣を取りて、兩陣

より足輕共出て迫合ありけるに、八月二十二日（一に曰廿四日）の朝岡山勢より麥飯山の城近く馬の草刈に出にける。敵少々出て其草刈を追ふ。味方の若者五六輩馳行、草刈を助く。敵より又十人計出て渡り合、味方も是を見て又二十人計馳出、それより双方段々に出重り、大勢になりて大崎村の柳畑といふ海邊にて戰ふ（今も其古戰場の白骨劍刀類ほり出すことありといへり。一曰宮の森といふ所なりと。）毛利勢の村上八郎右衛門三百計にて舟に取のり、磯邊によせて横を討んと控たり。古志淸左衛門・檜崎十兵衛・有地美作守も鎗を取て味方の勢に突て懸る。味方大將浮田與太郎も馬に打乘り、味方を制し止むれども不留故、馬場重助が傍に居たるを呼び、汝は爰にありて跡より來る味方を止めよ。吾は先へ行て同勢を引上べしと、馬を馳て見れば追々に出たる侍ども毛利勢に喰留られて引取かぬるを、與太郎釆配を振て味方を引取んと、馬を輪乘して下知しける所に、何くより撃たる鐵砲にや流玉來て基家の內兜に中り、則馬より落て即死也。（一說には胸板に中るといふ。此玉は味方より撃たる鐵砲にやともいふ。）大將討死と見て敵喚てかゝる。與太郎の乳母子何の三五兵衛といふ者敵を切はらひ基家に抱つきて討死す。中村宗介父子も爰に打死しける。大將如此なれば味方惣敗軍になりて引退く。重助は跡勢を留るといへども止まらざれば、跡より又馳行けるに、早敗軍になりて味方崩れ來りたれば力なく、其上馬にも乘らざれば殿して引取所へ、十介を討取んとて敵三騎追來る。先は青毛の馬、次は月毛の馬、三番は芦毛の馬に乘たる敵なりけり。重介是を突拂ひ〳〵て鎗の穗先を跡にして脇にかひこみ、馬にて乘かけられぬやうにして引退く所に、戶川平右衛門も與太郎に續きて出たるに、はや敗軍になれば力なく引退んとするに、與太郎討死を聞て、大將討死なれば士卒もみな追討になるべし。しかるに我一人生て甲斐なし。馬引返し打死せんと駈出すを、能勢又五郎馬の口を捕へて某も御供可仕、されども先づ若き者ども御先を働かせ申べしと、馬を引留る所へ馬場重助・岸本惣次郎・小森三郎右衛門・粟井三郎兵衛追來て敵を支へける。國富源右衛門・宍甘太郎兵衛二人は外の山に居けるが、はるかに是を見て谷峰ともいはず走り來り、國富眞先へ進て追來る

敵と鑓を合て、敵を突倒し首を取る。纔で宍甘太郎兵衛能き鎧武者と鑓を合せけるが、是は山を走りたるに草臥て敵と勝負果てず。國富は宍甘と從弟なりけるが是を見て、吾分は濟みたり。太郎兵衛助くるぞと聲をかけ鎗を持て向ふ。敵此聲を掛しを聞て國富が方を見ける時、太郎兵衛鑓を突入、國富も亦鎗を取て其敵を突倒す。太郎兵衛がいふ、源右衛門其首とりて給へ、我は大に勞れ倦たりといふ。馬場十介は敵の首取て上の岸に腰かけて見物せしが、太郎兵衛よ、斯樣の時は喰付ても首を取物ぞといふ。老功の者のいふ事なれば、聞と等しく太郎兵衛乘りかゝり首を取る。七人の者ども何れも手を合せて、さしも競ひ懸りし毛利勢をこゝにて防ぎ留ければ、敗軍せし諸手、こゝかしこの谷峰より一同に引返し敵をさゝへければ、却て追くる敵又逃散りけるを、又追討にして、敵あまた討取て引取ける。さて重介を追ける敵三人の名を後に聞きければ、先の青毛の馬に乘たるは三村孫太郎、次の月毛の馬は三村孫兵衛、三番の芦毛の馬は石川左衛門にて有けるとぞ（はるか年經て三村孫太郎姫路へ來りし時、重助が二男に作助孫太郎に逢て其馬の毛色を以て其名を尋けるに、又同事に答けるとなり。）

此殿（シンガリ）の鑓を、後世に八濱七本鑓といふ。所謂能勢又五郎・國富源右衛門・宍甘太郎兵衛・馬場十介・岸本惣次郎・小森三郎右衛門・粟井三郎兵衛なり。此物語は平右衛門子の戸川肥後守達安、家光將軍へも申上られし事也。爰に記す所は、備前宰相忠雄卿を備中庭瀨の肥後守の家へ招請ありし時の物語を書留しと、馬場十介が覺書とをあはせ記す所也。此時備前宰相、則國富源右衛門を呼出し逢たまひしとぞ（是を因思へには、源右衛門は宇喜多亡て後に戸川家に仕へけるにや。可レ尋。）一には此鎗七人、戸川平右衛門を加へて粟井を除きたる有り。是を按に達安物語に我父の事故、是を除かれしなるか又粟井が事は分明ならぬか。此事を書とめしにも、外六人を書て、今一人失念と記せしに、後人聞傳ふる事ありてや。此失念といふ一人は粟井三郎兵衛なるべしと書添へたるによりて、こゝに記し加へしや。又浮田與太郎基家の墓は兒島の大崎村にあり。

此戰すみて戸川平右衞門、常山城にて其時もり返しせし場に在し者を集め饗し、高名手柄を穿鑿有ける時、重助申せしは、其槍をせし場まで後殿せしは某一人なり。戸川馬を立し所にてふみ留り敵を討取しといふ。時に寺尾孫四郎がいふ、此崩れ口にて重助が後殿せしを不」見とあれば、重助答て、御邊は何くに居たるや、敵三騎追來るを突拂て引取、其馬の毛色を見覺たるかといふに、孫四郎答ふる事なし。十介荒言をして、崩れ口を早く逃たる者は、追來る敵は見ざるもの也といひて止ぬ。又重助が言、其時もり返して鑓をせし時、鎗脇を射たる者あり。黒糸の具足に朱にて筈をぬりし弓を持たり。闇敷て顏をば不」見といふ時に、鷹見傳兵衞進出て、それは某也。只今まで證據なき故に是を言はずといひし故、傳兵衞も恩賞に預る。小森三郎右衞門は働き少し物陰なるにや、さのみ人賞せずして高名帳に載らざりしに、後に毛利家より其時もり返せし中に小森が働き拔群なりしと稱美せしかば、是を證據として小森七人の中になりしとぞ。此常山にての饗應に、平右衞門盃を持出て其時の手柄の次第に盃をさす。一番に能勢又五郎、二番に國富、三番に宍甘、四番に重助、其次段々にさしけるとぞ。

宇喜多八郎家督の事

天正十年正月、宇喜多和泉守の家督備前國美作國播州佐用赤穗二郡（一に宍粟とも三郡と云ふ）備中の中をも、以前のごとく八郎に賜る由、信長公の朱印を江州安土にて岡平内にたまひければ、是を岡山へ取り歸り八郎に渡しければ、諸士安堵の思ひをなしける。其謝禮として八郎の名代長船又三郎、二月上旬に安土へ又罷上りける。播州姫路へは浮田七郎兵衞忠家行て秀吉へ禮を述べ、又幼年なれば萬事の後見賴入よしを申て歸り、岡山にては浮田七郎兵衞後見し、戸川平右衞門・岡平内・長船又三郎仕置して國を治めける。

備中高松城攻并同國所々城攻の事

同春毛利家征伐の事、信長公の仰をうけたまはり、羽柴筑前守秀吉備中國へ進發せんとて、三月十五日姫路を出陣あり。備前國三石へ着、其翌日福岡に宿陣し、爰を十九日に發足ありて沼村に晝休みありけるに、沼城の南の山の側に岡山より新敷假屋を造て種々饗應ある。宇喜多八郎は幼年故に、花房彌右衞門正成を名代として爰に出し奉行す。秀吉甚悅て爰を立て岡山を過て行軍す。于時八郎の名代として宇喜多七郎兵衞忠家・岡平内・戶川助七郎・長船又三郎等惣勢二萬餘騎、加勢として先陣に進む。秀吉の本陣をば龍王山に居ゑ、惣軍八萬餘騎は備前備中の境なる山上山下に陣取て、高松の城を攻んとひかへたり。備前勢は四月上旬備中宮路山に乃美少輔七郎元信が居たるを攻んために、宮路山の上澁柿山に押上り陣取て、急に是を攻ければ、城兵防ぎ得ずして降參しければ、命を助て追拂ふ。備前勢それより冠の城に、淸水長左衞門宗治が一黨にて林三郎左衞門・鳥越左兵衞・松田左衞門等籠居けるを攻ける。同月二十五日の卯の刻より浮田忠家諸軍に下知してしきりに是をせむ。小城なれば二萬の勢にて只一揉にと攻けれども、城中よく防ぎければ死傷多く出來ける故、先引退てひかへければ、城中にてもしばし息繼て休みける所に、城中の鐵炮の火柴垣にうつりしを人不ㇾ知。やがてもえ上り葉屋に付く。夏の事なれば乾たる屋の上に燃付て城中不ㇾ殘燒上りければ、城兵十方を失ひ騷ぎける所へ、秀吉の本陣より此陣へ來り居りし加藤虎之介淸正一番に乘込、美野邊十郎・山下九藏も同じく乘入、備前勢おくれず一同に攻入て、敵を討高名する者多し。今は城兵も防ぐに術つきて、林も鳥越も松田も一つになりて一方を切拔て高松城に入にける。此松田左衞門盛明は松田左近將監が二男なるが、去る永祿十年父兄ともに宇喜多の爲に討死し、領地居城までも奪れて今は毛利家に扶持せられて成長しけるに、親兄の敵なれば宇喜多勢を受て戰ふ事本望として、分

外の勇を奮ひけるに落城しければ、怒をふくみて退ける。それより庿山の東南に日幡城あり。日幡六郎兵衞に毛利家の加勢上原右衞門元祐籠城するを攻む。しかるに上原元祐秀吉に内通して、城主六郎兵衞を殺して備前勢を招きければ、則兵を進め乘取て花房・長船・市・福田等、并秀吉よりの檢使木村隼人を籠らせけるに、小早川勢より楢崎彈正忠元を大將として攻る事きびしく、城も亦堅固ならざれば防戰に便なくて、備前勢城を明て引取ける。次に岩崎の東加茂岡崎の城を攻む。此城には毛利家の桂民部を置き、東丸には生石中務・西の丸には上山兵庫在番せるに、此生石中務秀吉へ内通して、敵を引入んと備前勢へ約束したり。中務さらぬ體にて或夜本城へ行けるに、民部折節夜廻りして門番を呼ひ、門の守り無沙汰なりとてとがめける。中務門外にて是を聞き、さては我内通洩けるにやと思ひ、急に東の丸へ歸り、本丸へ向て塀柵を付て鐵砲を打懸る。民部は藏の米俵を出して塀うらに積ませ玉をふせぎ、用心きびしくせしに、中務備前勢を招て二の丸へ乘入らしむ。され共本丸をば夜中堅固にかゝへて、夜明て見れば備前勢大勢城に攻寄る。又夫につゞきては毛利勢も後につめたれば、民部も是に力を得て東の丸へ向ひ弓鐵砲を打込み、又そこに藁屋ありしを目當に火矢を放てや是をく。中務が家人其屋根に上り防ぐ處を、矢間より狙打にして大勢を打斃す。又民部は門を開き突て出れば、寄手の中務も備前勢も是を幸に此敵を討取り、すぐに本丸へ付入に乘込んと戰ふ。然るに民部四百人計を一手にして眞黑になりてこゝをせんどとよく戰へば、民部が家人も多く討死しけれども、寄手亦多く討れ、沼本新五郎・楢村五太夫・上田十右衞門・福田十郎・芦田十左衞門・牧大八等枕をならべ討死し、遂に打負城外へ引取ければ、民部東の丸をも取敷て難なく城を持堅めける。それよりは備前勢城をば攻ず。浮田七郎兵衞・戸川助七郎は先陣に備へ、其餘大勢陣をなし毛利小早川の大軍を押へて、秀吉は高松の城を攻らるゝ謀のみ也。斯て秀吉の惣軍八萬餘騎龍王山に本陣を居ゑ、諸軍は高松乾なる大崎より、東南の山々立田山鼓山吉中村三手村板倉村迄陣取たり。

高松の城は小高き山なれども、四邊深田にて容易く攻寄がたき地也ければ、水攻するにはしかじとて猶龍王山の本陣を進め、東の山の尾崎蛙が鼻といふ所へ移されて、五月七日より堤を築かすること凡一里計、東は蛙が鼻より西は赤濱山の麓迄石を疊み上、しがらみして山々の流をせき入けるに、五月雨の降つゞきし頃ゆゑ、程なく水かさまして城中も水に浸り、屋の軒にも及ぶ程になりければ、最早籠城叶はず。六月二日に城主清水長左衞門宗治より舟を渡し使を秀吉の陣へ立て、城中の頭分切腹有べし。諸卒の命を助け給はれと申來りければ、秀吉許容あり。殊に清水が志を感じ酒肴を送り、城主生害の用意次第に、檢使を遣すべしとありければ、同四日の朝檢使を乞けるに、堀尾茂介を遣されければ、清水長左衞門・同兄月清入道幷加勢に籠たる難波傳兵衞・近松左衞門四人船にて出で、堀尾に對面して潔く切腹せしかば、城兵は免されて悉く退散したりける。然る所に、昨三日の夜子刻京都長谷川宗仁より早飛脚來り、朔日に明智日向守謀反し信長公信忠卿を弑し奉る事を告たり。秀吉はさらぬ體にて、四日の朝も常のごとく馬驗を持せて陣廻りども有ける。又昨夜京都より注進ありけると即時に、西國往還筋へ忍を出し置かれけるが、明智方より毛利家へ信長御生害の事を言送りける飛脚を庭瀨にて見付、是を捕へ其書狀を奪ひて、ともに秀吉の本陣へぞ出しける。すべて西國への通路の人を留ければ、毛利家へ京都の變も聞えざりける故、毛利三家より使として安國寺惠瓊來て、高松の城も落ち清水も自害候上は、和睦をなし信長公の御味方に屬し、備中備後伯耆三國を進上申べし。此旨宜く信長公に御執成賴入との事也。秀吉是より返答あるべしとて安國寺をば返され、翌日返答に、彌ゝ和睦致べく候。然る所に京都に於て信長公明智が爲に弑せられ給ひぬ。此上にても和睦有べきやと言送らる。毛利三家評議區々なりけれども、小早川隆景、一旦和睦を申遣して違變する事本意に非ず。其儘最初申遣し通り可ㇾ然とあるにより、毛利三家よりの返答に、最初申候通り和議相違有べからずと申來ければ、秀吉大に悦て又申遣しけるは、三ヶ國を送らる

ゝといへども是は申請るに及ばず候。されども今度和睦ありししるしに、備中河邊川より東をば申請べしとありて盟約とりかはし、毛利家より人質として毛利藤四郎元綱元就八男桂民部を出されける。

さて六月六日早朝に先備前勢岡山へ歸陣ある。次に同日未刻秀吉陣ばらひし、辛川村に至り爰にて人數を分け、惣軍をば半田山の前の古道より釣の渡を越して、先陣より次第に押通し、秀吉は旗本の人數計りを殘し矢坂をこし岡山へ赴かれぬ。宇喜多八郎は明石飛驒さし添て町口まで迎に出られしを、懇の挨拶ありて岡山の城へ入て、しばし八郎に秀吉對面ある。家臣浮田七郎兵衛・浮田左京・明石飛驒・戶川助七郎・長船又右衛門・花房彌左衛門等も次の間にあり此時戶川平右衛門は關東の草津に入湯して留守なり。秀吉挨拶に、此度備中表の勝利は偏に宇喜多家の武功によれり。是によつて毛利家より差出す所の河邊川より東を直に八郎殿へ參らす也、知行あるべし。是より上京して明智を退治して本意を達しなば、八郎殿を我が聟とすべしと約束して、岡山の城を出て其夜は沼村に宿陣ある。秀吉の先手の惣軍釣の渡をすぐる時、渡し守の加子を神子田半右衛門切殺す。其事岡山へ聞えければ、他國の者を心にまかせ殺すこと甚狼藉なり。堪忍ならずとて岡平内家來を集め、具足を堅め乘り出す。此事半右衛門も聞て、强三人に勝れたる者なれば、我髮をぶる〳〵とさばき手の者を集て是を待つ所に、蜂須賀彥右衛門・黑田官兵衛才覺にて、或宿のうらの方をみるに、役中間と見えて日に向て虫を尋て居る者有り、あの首うてとて打せて、此首を岡山へ持たせ遣し、加子を殺せし中間を成敗せしとて佗言を言やりける。平内は出石迄はや出る所へ、其首持來り且佗言せしを聞て、引返して事なく濟けるとなり。秀吉は其翌七日沼を立て播州宇根に着あり、姬路へ歸陣也。岡山よりも人質として、富川平右衛門が娘と明石掃部を出さる。是等の人質を姬路にこめ置て上方へ出陣ありし。其時毛利家よりも宇喜田家よりも、秀吉へ加勢の人數を出しける。

一說に、此時秀吉辛川村にて病氣以ての外なりと披露し、こゝに猶豫の體をなして秀吉手廻の人

計にて雜兵に紛れ、釣の渡を渡して馬に打乘り播州へ馳通られける。炎天の時にて馬を途中に乘斃し、室士の馬を取て乘り宇根迄引取り、岡山へは使を以て、今日立寄べき所さし急ぐ事出來て立寄事叶がたく、直に罷過候。重て申通べしと言やりけるといへり。され共是は虚說なり。此時秀吉岡山の城に入て目見えせしといふ事、則戶川助七郎覺書に見えたれば是にて知べし。又一說には、七日に吉井川をこさるべき所に、大風雨にて川水增し越がたくて、八日に沼を發足ありともいふ。

秀家諸國出陣并朝鮮征伐の總大將の事

秀吉姬路を打立、山州山崎合戰に打勝ち明智光秀を殺して後、年々月々に權威廣大になりて、終に天下を治め給ひし後は中國無異になりて、備前備中美作等の國には兵亂も起らず靜かなれども、豐臣關白關西關東を征伐あり、三韓までも兵を出し給ふこと度々にて、其時は必備前よりも軍を出さずといふ事なく、或は惣大將を奉りて出陣ありし事共絕えず。先此度山崎陣に加勢を出し、明る天正十一年春より夏に至て、賤ヶ嶽合戰に加勢ありて六月に歸陣す。天正十二年春尾州小牧合戰に岡●長船●花房等一萬五千人を率して加勢、冬に至て歸陣す。天正十三年春紀州根來を討るゝ時、加勢として戶川●岡等出陣、同年五月又四國陣に戶川●長船出陣七月に歸陣、同十五年九州島津退治ありし時は、宇喜多秀家卿御陣にて二月朔日岡山出陣、一萬三千の人數にて兵具等甚美麗に出立たれける。征戰の後終に島津降參ありて、秀家卿も六月中旬岡山へ歸陣ある。同十八年關東小田原攻、又奥州陣にも秀家卿四月に出陣、九月に至て開陣ある。天正十九年三月豐臣太閤命じて秀家を朝鮮征伐の總大將とす。よりて新に五十艘の大舟を作られ、明年二月に備前國川口表に是をうかゞへ初ありて、同月二十五日先手の總勢浮田安心（此時秀家十九歳なり。故に此安心後見として出陣也。）を將として出陣し、秀家卿は三月朔

日出船して朝鮮へ渡海ある。文祿二年十二月歸朝ありしに、又慶長二年三月朔日朝鮮へ再び出船征伐ありける所に、明る三年八月太閤薨去ありければ、同十月に歸朝ありし。是等の軍役に秀家卿戰功あり。諸士高名手柄どもありし事は、隣國の事にあらず。或は異國の事なればこゝに略して記さず。部將士卒の勝れたる手柄高名ども有し事をば、他に附錄す。

秀家卿元服幷昇進の事

宇喜多八郎は天正十年父の家督を繼て、備中高松の城攻の時は十歲なりし故人數計を出し、其外の所々軍役ゟ名代なりしが、天正十三年三月十一歲にて元服あり。秀吉公の一字を賜りて秀家と名乘、從五位下に叙し侍從に任せらる。それより段々昇進あり。同十四年七月に從四位下に叙し左少將に任せらる。同十二月左中將にうつり同十五年八月八日參議從三位に昇進あり。同十六年四月十四日關白の聚樂亭へ行幸ありて和歌御會ありし時、寄松祝といふことを、

　松か枝のしけりあひたる庭の面につゝなる袖も萬代や經ん

同八月十五日夜同じ亭にて和歌ありし時も

　所から猶も光や增るらんこゝろにあさき秋のよの月

かゝる詠歌どもありし。同十七年の春前田筑前守利家卿の三女を關白の養女として、秀家卿の大阪中の島の屋敷へ入輿あり。是は以前岡山の城にて聟とせんと關白の約束し給ひけれども、女子あらざりし故利家の娘を養女として婚禮ありける。其後文祿三年に朝鮮の軍功を賞して、五月二十日權中納言に任せられ、慶長元年には又新に五大老といふ事出來て、秀家卿も其一人に補せられて、吾領國のみならず一天下の政事までも執行ありける。

岡山城改て築添る事

かくて天下無異に治りければ、秀家卿の居城造營の事あり。もと此岡山の地は大島といふ島山なりし。後世地かたとなりて岡山といひて、正平の始南朝に仕へし上神太郎兵衛門高直といふ者居たりし。其後はるか世を經て大永の頃にや、金光備前といふ者居城たり。其時迄は狹少にて西の方計なりし。其子金光與次郎宗高續きて居りしが、宇喜多直家に殺されて、天正元年直家沼の城よりこゝにうつり、普請ありて本城を東の方の山にうつし、郭ども多く築添て廣くなり、天正十年に及で其工ども終りけれども、其時迄は隣國の合戰手遣ふ隙なかりし故、其經營全からず。往還の大河にもやう／＼借橋をかけ置れけるに、朝鮮の役も終り、國中近國に兵災もなく靜謐になりけるより、又城を改め築かれ、近年安土の城に初て出來し天守といふことを、爰にもあげ造られ、矢倉廣間出仕所等造營ある。其奉行は中村二郎兵衛といふ者勤めける。此二郎兵衛は近頃秀家の室家につきて前田家より來りし者なれども、才ありし者故此事を是にまかせらる。此時に本城を以前より猶東なる岡山の高みに移し、石垣をつきあげ大川を引て其本城の下をめぐらし、天守を造り櫓を仕添ける。又往還の借橋も改て、以前よりは三町計下に、小島の河中に二つあるにたよりて三ツの大橋を作りかけ、洪水の時も旅人のわづらひなく通行なさしむ。以前かけ橋のありし所は今古京町といふ。是古京橋町の略語なり。又此天守を造らるゝ虹梁は、和氣郡吉田村龍王山の一社頭にありし大木を切とり用ひたりしといふ。其大木の株猶朽殘りて今に殘れりといふ。此造營慶長のはじめ迄に成就せしかども、殘りしことどもありて其後猶造り終りしといへり。

秀家卿長臣幷家中騷動の事

秀家卿の長臣どもは、直家の時より戸川平右衛門秀安政事をとりて勉ける。此秀安は直家小身にて成立の時、幼年より直家に仕へ、五歳の年おとり也。勇才も忠義も双なき人にてありしが、秀家卿の世になりて病身になり、天正十年兒島の常山の麓に隱居し友林と號し、慶長三年八月六日六十（九イ）三歳にて死す今常山の麓に墓あり。按に友林天文七年生と戸川記に在ば此時實に六十一歳歟。其子助七郎達安は友林隱居の時年若なりし故、長船又右衛門國政をなしける。斯て天正十二年冬老臣ども叙爵して、戸川助七郎達安は肥後守、浮田七郎兵衛忠家は出羽守一説に忠家は左京といふ。叙爵して左京亮になる。六郎兵衛といふは忠家弟春家の事といふ。何れが正説なる未詳忠家無程隱居して安心といふ。長船又右衛門は越中守、岡平内利勝は豐前守、明石三郎左衛門景親は飛驒守になる。同十六年に花房彌左衛門正成も叙爵して志摩守になる。是は以前秀吉と直家と和睦の時使を勤めし時より、關白の馴染にて心に應じける故也。天正十六年閏正月五日、長船越中守虎倉城にて石原新太郎が爲に殺されしより、岡豐前守國政を執行、殊に關白の心に應じ懇意なりし故權威ありける所に、文祿元年八月朝鮮の陣中にて病死す。其後は戸川肥後守國政を執しに、文祿三年伏見の城普請の時長船越中守が子紀伊守、岡山より登りて秀家卿の手の普請奉行せしが、關白の心に應じければ、戸川が仕置を改て此紀伊守勤ける。此紀伊守は邪智あるものにて、岡豐前朝鮮にて病死せし末期にも、秀家卿へ遺言して、以後は紀伊守御家の仕置をなすべし、さあらば御家は危かるべしと諫置しほどの者なり。其上浮田太郎右衛門・中村次郎兵衛も仕置に加る。みな邪智ありし者なり。其上國中靜謐になりしに從ひて、秀家卿奢り相まして鷹狩猿樂を好み、鷹幷鷹匠猿樂の役者多く養ひかゝへられ、其遊興に金銀の費おびたゞし。是によりて備前作州播磨備中迄領國殘らず新に檢地を入て、家中の領分を過半取あげ、又寺社領多く止められて二十餘萬石を打出しける。家中其外國中難儀いはんかたなく、此事につきて老臣以下不平の事出來、已に弓矢になるべき事などありし程也。又秀家卿室家の病を日蓮宗の僧の祈禱せしに、其驗なしとて秀家卿怒て、家中の日蓮宗改宗すべしと觸られける。其頭明石掃部・長船紀伊守・中村

二郎兵衛・浮田太郎右衛門等切支丹を信仰せし折ゆゑ、此觸を幸にして士民に至るまで切支丹になる者多し。又戸川肥後守・浮田左京・岡越前守・花房志摩守などは其儘にて日蓮宗を改めざる者も亦多し。此からき仕置にくるしみ、家中みな長船・浮田・中村をにくむ事甚し。花房助兵衛は此事を諫もし又此仕置を譏もせしとて、秀家卿甚腹立し、岡山下町の屋敷に閉門させ腹を切らせんとあれども、朝鮮にて軍功ありしを關白にも御感ありし者なれば、石田を以て此事を伺はれければ、朝鮮にて功有しものなれば伏見へ登すべし。關白預り給ふべしとあれば、助兵衛父子三人を伏見へのぼせければ、三人共に佐竹義宣に召預けられ常州に下りける。是より家中二つになりてさわがしかりけれども、慶長元年秀家卿五大老に補せられ、再び朝鮮陣ありし故、強て事も起らざりしが、慶長三年太閤薨去ありて朝鮮より秀家卿も歸朝ありける故、岡山の家中又靜ならず。かくては宇喜多家の存亡も覺束なくありければ、紀伊守を其儘置がたしとて、戸川・浮田・岡・花房相談して毒をあたへければ、ほどなく慶長三年死ける。依之戸川肥後守再び仕置を勉めける故、四民みな悦びてしばし靜なりしかども、なほ中村二郎兵衛浮田太郎右衛門を用ゐられて苛き仕置はゆるまらざれば、家中一統に怒て、長船紀伊守が仕置の事は太閤の御指圖なれば是非に不及。次郎兵衛等は其義に不及事なれば、此仕置を打破らんとて老臣へ申立、紀伊守二郎兵衛取立し用人寺内道作といふ者を、山田兵左衛門といふをして切殺させぬ。戸川肥後・浮田左京・花房志摩・岡越前・楢村監物・中吉與兵衛以上六人大阪へ登り、秀家卿へ訟て中村が私曲を書記して成敗すべしといへども、秀家卿其事を甚怒り、次郎兵衛も罪なきよしをいひ分し、奥方にかくされて夜に入り女乘物に乘せ、忍びて加賀へ落されぬ。秀家卿とかく肥後守を惡みて、大谷刑部家へ呼寄仕手を言付切殺すべしとて、肥後守を呼ぶ。肥後は何心なく夜五ッ時大谷が家へ行く。此事を或人聞て浮田左京に告ければ、左京長刀を提て大谷が家へ馳行き戸川を引立連て歸り、玉造の屋敷に取籠る。其人々には戸川肥後守・浮田左京亮・岡越

前守・花房志摩守・同彌左衛門・戸川玄蕃・同又左衛門・角南隼人・楢村監物・中吉與兵衛等其勢二百五十餘人、雜兵までは夥しく、玉造の表裏の門を堅め討手を待ち、皆髮を切て討死を極む。大谷刑部榊原式部大輔扱に入て一先靜りて、扨明る慶長五年正月東照宮御下知にて、戸川肥後守父子・花房志摩守・中吉與兵衛は東照宮預り給ひ、戸川は常州へ蟄居、花房は增田右衛門尉預り和州郡山に蟄居、浮田と岡・戸川玄蕃・角南・楢村は備前へ歸さる。岡山の仕置は明石掃部今迄客方にて有しに言付られて、秀家卿も二月中旬岡山へ歸城なり。

關ヶ原合戰秀家卿敗北の事

慶長五年、奥州の上杉景勝卿を追討し給ふとて東照宮御進發、岡山よりも浮田左京亮に人數を付て差出され、六月十九日左京伏見を立て關東に下りける。其後大阪にて石田治部少輔三成諸大名と謀し合せ、東照宮を討亡し奉らん事を謀て、秀家卿をもかたらふ。兼て東照宮と不和なりければ、則石田に同心し岡山を出陣あり。七月二日大阪着、其勢一萬五千人。同二十五日大阪を出陣、伏見の城を攻て八月朔日落城す。其後秀家卿總大將にて、總勢五萬三千六百人大阪を發して、同月十三日大垣に着陣、九月十四日未刻杭瀨川にて小競合あり。其時討取し首ども舍那院の前にて秀家卿實檢ありて大垣へ歸る。十五日の朝關ヶ原の北の野に、秀家卿の人數騎馬千五百雜兵一萬五千、辰巳に向て備らる。東軍是に渡合ひ戰ふ。岡山勢力戰し、浮田源三兵衛・廣戸與右衛門等多く討死して戰ふに、東軍色めきなびきけるが、福島右衛門大夫正則八百挺の鐵砲を放ちかけ討てかゝるに、岡山勢切立られ敗軍し、大垣さして引返す。又金吾中納言秀秋卿松尾山より裏切して、大谷が備へ切て掛られければ、西軍總敗軍になりけるに、秀家卿敗軍をまとめ引取にも不及、家臣進藤三左衛門・黑田勘十郎只二人を連て、旗本を拔出て伊吹山へ落行かれける。それより道もなき方へ山深く迷ひ行き、

其夜は美濃國柏川の谷の岩陰に、勘十郎が膝を枕にして曉迄まどろみ、明る九月十六日白樫村五郎右衛門といふ者、落人を討んと鎗を提げ出て行逢へば、則突てかかる。秀家卿三人とても遁ぬ所と身構あるを、五郎右衛門つく〴〵見て鎗を横たへ平伏して申けるは、唯人とは見えさせ給はず。痛はしくこそ候へ、何方へなりとも御供可ㇾ仕、名乘らせ給へとあれば、秀家卿はつゝみもあへず我名をなのり、今は容易に國へ歸る事もなりがたし。何方へなりとも山深き方に忍ぶ外なしとあれば、五郎右衛門承はつて、某が家見苦しくは候へども、人遠なる山中に候間、一先御忍候へとて主從三人を誘ひ、三里計の山中を分行き、秀家卿をば五郎右衛門が下部九藏といふものかき負て、白樫村へ急ぎけるに、其間にて鄕人餘多追かけけるを、五郎衛門さま〴〵にことはりを申ければ、さらば腰のものを給はれと乞ければ、主人の爲なれば今は力なく、三左衛門も勘十郎もこしの物をぬきて其鄕人に得させて、漸く白樫村へ行き着、五郎右衛門方にかくれ住て數日を經ける中に、秀家卿かくぞ詠ぜらる。

山の端の月はむかしにかはらねとわかみの程は面影もなし
泪のみなかれて末はくゐせ川水の泡とや消むとすらん

かくて秀家卿は薩摩がた迄落行たく思はれければ、五郎右衛門才覺にて里民の有馬湯治するとて、秀家卿を其體にして乘物にのせ、大阪に出て天王寺の內に秀家卿の相知ける僧の有しをたのみて、こゝに先落付き、それより船をもとめて大隅國へ落行、島津を賴み隱れられけるとぞ聞えける。

秀家卿父子遠流幷岡山侍分散の事

秀家卿出陣ありて、備前にも人數を殘されけれども、去年當春家中事出來て靜ならず。戶川肥後守父子・花房志摩守・花房助兵衛・中吉與兵衛等の類他家へ預けられ、浮田左京亮は東照宮に從ひ奉り

て關東に下る。是に依て今度の出陣には明石掃部を先手として向はる。岡越前・戸川玄蕃・角南隼人楢村監物等を留守に殘されけるに、去冬の變ありし故、今度の供もせず殘けるを憤りて、岡山を立退き南都に蟄居して、其跡に殘りし者とては浮田官兵衞・宍甘太郎兵衞・同太郎右衞門・富松多兵衞等のみ殘りて、はか〴〵敷老臣等の一人もあらざるに、關ヶ原戰に西軍敗北し秀家卿の行衞も不ㇾ知といふ事聞えければ、備前國中の士民の騷動いはんかたなし。されども事をとりて其騷ぎを取治むべき老臣の一人もなければ、留守に殘ける諸士の妻子を皆便にまかせて、所々へ遣し退散せしほどに、城中の兵粮大豆并雜具等迄亂取の如くなりし。明石掃部は戰場を引取り大阪へ出て舟に打乘、飾磨津へ舟を着て聞きければ、岡山の留守一昨日明退けるといふ日にて、岡山へも歸られず。備中足守邊に親き禪僧のありしを賴て隱れ、其所に明年三月頃まで居たりしとぞ。其外關ヶ原を敗軍せし岡山侍從引取歸りし者も多かりしかども、留守の妻子ちり〴〵になりて行衞しれざるを、やうやうもとめたづねて備中作州等の民間にみなかくれけるとなり。扨岡山の城は東照宮御下知あり、堅固に取治むべしとて、戸川肥後守・浮田左京亮・花房助兵衞・花房志摩守四人を備前國へ下されければ、九月下旬岡山に至り城を請取る。城代の浮田官兵衞・宍甘太郎兵衞・同太郎左衞門兄弟・富松多兵衞已に主人行衞知ざる上は、誰が爲に城を守べき樣もなく、則右四使に城を相渡して妻子從類民家に隱れ近國へ落行ける有樣は、目も不ㇾ被ㇾ當こと共なりける。兼て四人へ東照宮御下知在ければ、岡山城下の侍屋敷町屋迄も悉く燒拂ひける。浮田左京亮・花房志摩守城を守り、戸川肥後守・花房助兵衞は備中濱村に宿陣して、別條なく岡山の城請取候よし東照宮へ注進申上たり。大阪の秀家卿屋敷はみな闕所となる。其室家は前田利家卿の女なれば、免許ありて加賀へ引取らる。娘一人有けるも母にしたがひ行て、成人ありて後に前田修理が子内藏介が妻となりしと聞えし。白欅村より天王寺へ秀家卿出られし時、ひそかに忍びてもとの家に内室の居られけるに行て對面ありし。其時にかの五郎右衞

門へ、秀家卿の室家より黃金十枚小袖五を給ひて歸されけるとぞ。秀家卿舟にて薩州へ下向の時、黑田勘十郎は供して下り、進藤三左衞門は主人の行衞をふかく隱すべき爲に大阪に殘り、今此時迄帶せられし取替國次の家重代の太刀を申乞て、計略の爲に是を本多中務のもとへ持行て言上しけるは、秀家事關ヶ原敗軍の後主從三人にて、北國の方へ山傳ひに落行候て隱れ候所、石田小西以下捕はれ面縛せられしと相聞ければ、今は遁れがたき身と覺悟いたし、何と申所とはしらず候へども、人家遠き山中にて自害いたし候を煙となし、其白骨をとりて黑田勘十郎と申候者と某茲まで罷歸り其白骨は勘十郎首にかけ高野山へ上り候。拙某爰に出で言上申候子細は、秀家が行衞知れず候はゞ內府公御心にもかゝり、其妻子定て召込らるべし。何とぞ幼息八郎が一命を助けられ候事を願ひ奉り候。又此取替國次の太刀は宇喜多重代の物にて、生害の節迄帶し候。是を今下劣の者の手に渡さん事の口惜く覺候故差上候。偏に八郎が助命の事願ひ奉り候。此旨ども內府公の御前宜敷賴候よし、落淚して訟けるさまいとあはれなりければ、三左衞門をも懇にもてなし、其太刀を請取て中務は其始末を委く東照宮へ言上ありければ、三左衞門が主人をよく見屆たる心中を不便に思召されて、進藤をば中務がもとにしばし預り置けとぞ仰ける。又明石掃部が郎等に澤原某といふ者あり。めしとられて掃部が行衞を問れけるに、知らずと言しを猶せめて問れける時、澤原申けるは、合戰の勝敗は計りがたき物に候。若此度東軍敗北したまはむに。內府公我が主人のごとく御行衞知れざる時皆々捕はれとなり給ふことありて是を尋ね申に、其御行衞を明に仰あるべきか、其御覺悟を承り候上にてこそ、仰にもしたがひ主人の行衞をも申べきにこそと申ければ、何もとかくの返答なくて此とらはれを免されける。其時澤原、今恩免を蒙りし事の辱く候へば、其謝禮に主人の行衞を某承及候所を申べく候。掃部事は西國へ落行、夫より便船にて朝鮮國へ渡海いたし候と申、かの國御尋させ可有と申て退出しければ、この澤原が嗚呼なるをみな入感じける。其後細川家へ行て仕へけるとい

ふ（一說に此事は大阪落城の時に明石掃部が行衛を尋らるゝときのことなりとぞ）其後は進藤が申せしごとく、秀家卿は北國にて生害と人も思ひたりしに、一兩年過ていまだ存生にて薩摩に隱れ居らるゝ風聞ありければ、終にはかくし得られじと、慶長七年十二月二十八日島津忠恒伏見へ參上して申さるゝは、宇喜多中納言事薩摩へ逃下りて、領分にしばしかくれ居て、近頃某を賴み何方になりともさし置養ひくれ候樣にとの事に候。其體粧不便なる樣子に相見え候よし、家來ども申候。格別の科人に候へども御恩免の事相願よし、種々訴訟ありけれども御取上なくて、何れにもあれ薩州より呼のぼせられよと有て、秀家罷り登られけるに、此度總大將にて罪も重し。されども忠恒の願も餘儀なければ、父子ともに一命をば助けられて八丈島へ遠流ある。此時秀家も薙髮して休福と號す。嫡子八郎（于時侍從）次男某家臣眞田七郎右衛門以下五人相從ひて、八丈が島へぞ到りける。さて進藤三左衛門に再び尋ねられしは、秀家存生にありけるが、北國にて生害のよしは僞りなり如何と仰ありければ、とかくの返答にも不及、此罪のがれがたし。早く首をはねられ候へと申上けるとぞ。東照宮聞召て、進藤が忠義尤なりと感じ給ひて千石の地を被下、御家人となる。黑田勘十郎は島津家へ申請て、薩州へ下り其家に仕ふ。此進藤はもと秀家の鷹を好まれし時、鳥見の役をせしものなりしを、とり立てられて侍となりしといふ（宇喜多士帳に進藤三左衛門六百石と見えたり。黑田眞田等の名は見えず。）

一說には、秀家卿大阪へ出て內室に對面ありし事を、肥前守利長卿聞て是を言上し、尤聟なれば父子の命を乞請て遠流せられしともいへど、薩州へ下向といふ事正說なり。或は曰、彼年に八丈島へ流されし人の江戶へ歸りける者ありしに、花房志摩守此者をよびて休福の事を尋ねきゝしうちに、日本の米の飯を今一度こゝろよく喰たきとの給ひしとありし事を、志摩守聞て落るいに及び、何とぞかの島へ米を渡し休福へまゐらせ度おもひて、土井大炊頭のもとへ參り此ことを物語あり。何とぞ米を遣し度と內々願有ければ、召聞に達し其望にまかせられ、年々伊豆國御代官所へ

志摩守より頼にて米二十俵づゝ渡されけりといふ。又備前國西大寺村の賣船難風にて八丈島に漂着せしに、休福にあひて料紙扇等に詩歌を書て其船子に賜ひしを、取り歸りて今に其所に持傳へたるものもあり。備前美作兩國の主にて中納言たりし人故、其島にても尊み敬ひけるとぞ。長壽にて寬永中八十餘歲にて病死ありし。其子孫今も猶島にありといへり。

金吾中納言秀秋卿へ備前美作を賜ふ事

宇喜多亡びて後慶長五年十月五日、備前國美作國、此度の軍功の賞に筑前國名島中納言秀秋卿へたまひける。秀秋卿今度東軍へ味方ありし始は、黑田如水入道近國の親みありける故、秀秋の臣平岡石見へ使者を以て、秀秋卿此度內府へ御味方あらば、御家の爲可然と存候。又恩賞の御望あらば御取持申べしといひ遣しければ、平岡早速稻葉內匠●杉原紀伊守へ內談すれば、何も如水の申さるゝ通可然と有りける故、秀秋卿へ達しければ、是も同意にて候故返答に、仰被下通內府公の御味方へ可參、軍功も候はゞ宇喜多領國を御恩賞に預りたく候と、內意を申遣しけるとぞ。されども秀秋卿は大阪に上り、表向は西軍に加り大津の城をも攻落されける。しかるに大老奉行其外諸將大阪に集りし時、此度軍、利運になりて恩賞あらん時の國々の割付など有りしに、秀秋卿の名は闕てなかりしより怒りて、いよ〳〵關東方と心中に思ひ極められしといふ。されども猶家臣の諫をも問れしに、一統に東軍の御味方可然と申ける。其時秀秋返答に不及座を立て入られける故、其內心關東方なりといふ事、一統に察しけるとなり。扨關ヶ原へ出陣松尾山に陣して、其時に關東方の色を立て、大谷刑部が備へ鐵砲を打かけ切崩して、東照宮の御陣へ參り謁し奉り、夫より江州佐和山の城乘取る等の功によりて、兼て所望の趣にまかせ備前の國を可給よし聞えければ、秀秋卿是を聞、宇喜多領悉くとこそ思ひしに、備前計なれば名島領に高相同じかるべしと憤られける。これを東照宮聞召て、若き

人の心得違ども有るべし。さらば美作を添て兩國を參らすべしとて、備前美作を賜はりければ、十月二十四日に秀秋卿の老臣平岡石見岡山に到り、戸川肥後守・浮田左京亮に出會て城を請取り、翌年慶長六年の春中納言にも入國ありける。宇喜多領は備中國數郡播州三郡も加りけれども、是は此度おのづから減じて外へ給りける（一說に播州の佐用宍粟赤穗三郡も秀秋卿に賜といふ一說もあれども是は誤也。播州一國は不殘輝政卿に賜ふ事明也。）中納言秀秋卿入國の後國の仕置は稻葉內匠頭・杉原紀伊守勤めける。領分備前美作兩國の田地の境界を改定め、悉く檢地あり。高を打出し寺領社領は改て寄附狀を出して、以前より其高減少せし所多し。此時將軍家より御下知ありて、國中の城砦ども多く破却させ給ひ、沼城富山の城等掃捨られ、たゞ金川城常山城虎倉城のみ殘されし（按に金川虎倉の兩城も慶長八年に掃捨られ、常山の城も下津井に移し造られしが、元和元年に又下津井の城も割り捨られたり。）又岡山城も未だ造り殘りし所經營あれば、沼富山等の櫓門など移し造られけるも有り。或は城外に外堀をほるべきよし東照宮へ言上ありて、北は伊勢宮、西は中山下の外、下は天瀨町の外迄凡十五町餘の堀をほり廻し、所々橋を渡し、門を作らる。此事二十日の中に出來し故、二十日堀といふ。其頃播州姬路にも堀出來、其外國々に如此總堀を作りし所多し。是は以前相州小田原の城攻に總堀ありて、是にて寄手を防ける故落城に手間どりしといふことより、所々總堀をせし所多しといへり。

秀秋卿杉原紀伊守を誅らる幷家中騷動の事

金吾中納言入國以後、ほどなく政道亂れがましく、只放鷹殺生のみを好み、或は罪なき者を殺さるゝことゞもありしを、稻葉內匠頭・杉原紀伊守是を諫めける。ことに杉原強く諫言せしを甚怒て、村山越中を仕手に言付て紀伊守を討たしむ。先其當時杉原に登城すべしと有れば、則出て秀秋卿の前に參る。其退出の時に出會て斬るべしと、本丸と二の丸との廊下に越中は控て待居たり。しかるに紀伊守よく申なだめければ、秀秋卿の心とけて、杉原を斬に不ㇾ及と村山に言へとて小姓をやられ

しに、村山に行逢はず。玄蕃迄もとめけれど見えず。其中に紀伊守退出して廊下を通りける所へ、越中つと出て言葉をかけて切殺しぬ。小姓通りし時さし留らるゝ事と越中も略察したれども、常に紀伊守と間不宜ゆゑ、此事を幸に思ひて物陰に潜みかくれて小姓をやり通し、其跡に出て終に杉原を誅したり。紀伊守が子加賀も切腹言付られて失にける。杉原父子如斯なりしかば、稲葉内匠頭其儘居がたく、又禍の至らんことも遠からじと、夜中に妻子家來不殘引連て岡山を退去し、兼て戸川肥後守懇意なれば是を頼みて備中庭瀬へ引取る。其頃は戸川方に宇喜多浪人多く居ければ、四五十人集めて堀切をなし柵を付て、岡山より追手來らば防ぐべき用意し、池田市左衛門・小森三郎左衛門兩人に足輕五十人付て白石橋迄迎に出し、稲葉を引包みて庭瀬に至る。されども岡山より追手もなければ、内匠頭も閑に肥後守に禮謝をのべて直に兒島の下津井に行き、夫より舟にて大阪へ趣ける。仕置せし兩人如斯なれば、家中大に騷ぎ松野主馬（後入道して道圓といふ）も立退、主馬組の鐵砲頭蟹江彦右衛門は虎倉城に居けるが、是も松野にしたがひ城を捨て退去す。瀧川出雲も退去の沙汰あれば、是を押留よとて鐵砲頭足輕を連て出で其門を堅めけるに、出雲はそれより以前に女乗物に乘りて忍びて落ける。未だ家來は殘り居けるを、出雲いまだ在りと思ひ鐵砲頭門外に守り居けるが、出雲はや落延たりと思ふ時分、家來何某門を開き出て其鐵砲頭に申けるは、出雲事は最前にはや退去いたし候。家來計殘り居候。何も隙なく御出し下さるべし。されども出雲家來不殘逃去しと申候事、外聞も快からず候間、某は此屋敷に殘り切腹いたすべく候。其元にも無手に御引取候事も如何に候間、某が首を御取候て御引取可然と言捨て、門内へ又走り入り松樹のありし下にて腹切て死ければ、其外家來は退散したり。其鐵砲頭は出雲が家臣某が首取て歸りける。其外にも退去せしもの多かりしとぞ。其後は平岡石見守のみ老臣にてありしといふ。

按に、羅山文集擧白集等金吾中納言の家頽顛の後に内匠は浪人のよし見えたれば、此退去の後に

歸參して再び仕へしなるべし。又松野が退去は、秀秋卿其年伏見へ登られし時供にて行き牧方より退去して後に駿河の忠吉卿に仕へるといふ。或は云、杉原紀伊守を越中が斬し所は、今二ノ丸の臺所の上にて本丸へ通る廊下なりし。後迄塀に血の飛かゝりし跡ありしを、一年の作事に此廊下はこぼち取られしとぞ。又曰、稻葉退去せし家は伊木長門家也。瀧川出雲退去せし家は池田造酒家也。或は云、杉原紀伊守殺されし後、其靈魂殘りけるといふ事ありて、夜中には度々紀伊守が形あらはれ見えて、秀秋卿も病氣となりけるが、村山越中登城して居れば其形顯れざりしとぞ。日を經て病氣重りけるに、さま〴〵祈禱ありける中に、蓮昌寺の住僧祈禱したれば、杉原が形顯るゝ事止て病氣も全快ありけるより、日蓮宗を甚尊び、其時迄は森下村にありし蓮昌寺を城の西新堀の外に移し、佛殿廣大に建立し、國中無双の大寺となりしは此時也。

秀秋卿薨ぜらるゝ事

慶長六年の冬秀秋卿牧石の方へ鷹狩に出で、歸りに龍口山を見やれば、すぐれたる大蛇大松を纏てあり。誰かあの蛇を斬らんとあれば、歩行者一人承り候とて大川を泳ぎ渡り、かの蛇の居たる松によぢ登る。蛇彼歩行者を松と一つに押まとふ。其時拔たる刀の刄を外へ向て身に添て持しが、蛇のまとふにしたがひ其刀を外へ張出せば、蛇寸々になりて死す。歩行者は又川を泳で歸る。秀秋卿大きに賛美ありしとぞ。其後秀秋卿折々狂氣のごとく不レ常事多し。或時放鷹のありしに、俄に雨ふり出けるに民家に入、雨やどりしに兒小姓爐にて火を起しけるに、火早く燃ざるとて脇指をぬき首を爐中へ切落し、又或時は民屋に入て鴨居にて頭を打ち、大に怒て此家を作りし大工を呼で成敗せんとありしに、殺生の仕合宜かりければ、召捕へ來りし大工入用はなし、ゆるせ〳〵といひてかへされし事など、さま〴〵常ならぬ事多かりし。されども老臣其外も或は殺され、或は退去し、殘りし

者もなか〳〵諫など言出すべき樣もなければ、たゞ其儘にて過行きいよ〳〵みだれがましき所行月日をかさねて相增けるに、慶長七年十月十八日俄に薨ぜられし。是は橫死なりしといふ。されども是をかくしたれば其事一定せず。一說には、鷹狩の時一人の百姓を斬らんとあれば、其愁傷するを秀秋卿笑ひて、刀を拔て所々疵付けて是を弄ばれしに、其百姓起て陰囊を蹴あげたれば、秀秋卿即死ありしといふ。一說には山伏の訟事のありしを呼出し、理非を斷ぜず兩手を切られしに、其山伏怒て飛かゝり、秀秋卿を蹴倒し踏殺すともいふ。又一說には兒小姓を手討にせんとして、かへり討にあはれしともいふ。又一說には、西大寺の堂の下の河にては昔より殺生を堅く禁ぜし所なるに、此卿網して鯉鮒を得て、其歸りに廣谷の橋の上にて落馬し薨ぜられしともいふ。されども世上へは是等の事をふかくかくして、疱瘡にて身まかりしと披露あれば、今も其橫死の實說を傳へ知るものなし。于時年二十三歲、嗣子なき故家斷絕す。御野郡出石鄉伊勢宮の邊に葬る。其墓の前に本行院といふ日蓮宗の寺を建て是を守る。法名を隨雲院秀巖日詮といふ。其位牌木像等は京都東山高臺寺の中、隨雲院にあり。

秀秋卿先祖の事

金吾中納言秀秋卿の其先祖は、桓武天皇より十二代後胤、土肥次郞實平より出たり。實平安藝備後の守護職を承りて下向し、此國にて卒す。其子土肥彌太郞遠平相州小早川に住せしより、小早川と稱す。是も亦父の跡の守護職にて下向し、藝州沼田郡沼田の高山城に住せし以來代々此城にありて、實平より十六代連續して小早川繁平に至る（備後國眞鶴山米山寺に實平以來代々墳墓ありて今に歷然たり。）此繁平に實子なくて、毛利元就の三男を養子として小早川左衛門隆景と稱す。豐臣關白の時に伊豫に封ぜられ、又筑前國名島に移られけるが、是にも亦嗣子なくて木下肥後守家定の子を養子とす。是則秀秋卿也。隆景卿筑前

國名島をば養子秀秋にゆづりて、古都なれば備後の三原に移り住みて年々昇進し、三原中納言と稱す。慶長二年六月十二日三原にて薨ず。秀秋卿も左衛門頭の中納言に昇進ありしゆゑ、金吾中納言と世に稱しけるが、早世ありて嗣子なく、土肥小早川の嫡家こゝに於て永く斷絕して、備前美作の兩國もあがりにけり。

備前國を池田家に賜ひ岡山在城の事

慶長八年二月六日に、備前國を池田家に賜ひしよりこのかた、代々岡山の城にましまし、もとより四神相應せし勝地に殿作して國を治めたまひ、理世撫民の仁政下に行はれしかば、年月にそひて國榮え城下繁昌して、逆亂の起る事もあらず、書記すべき兵災もたえて、笠日の山かぜ枝をならさず、兒じまの波もしづかにして、國中の四つの民も皷腹しつゝ、此みの里につどひ集り萬歲をとなへ、つきせぬ御代とぞなりにける。

卷第五終

備前軍記附錄

備前侍のなり立、働・武功・高名等の拔群なる事ども、本書にしるし餘せることをこゝにならべ抄す。

▲黑田美濃守職隆といふ人、邑久郡福岡出生の人也。年若なる時より播州へ立越、御着の城主小寺藤兵衞の所に奉公し、其時は只一僕の體なりしが、生付正直にて武道の心がけ人に勝れ、其名高かりければ、次第にとり立られ、頓て小寺の家の老となり、其子官兵衞孝高又不双の勇士にて、父子ならびて勉め、やがて同國姬路の城主となり、後は小寺より宛行ひし所知の外、隣郷を切とり大身になりて、御着の小寺を守護してありしが、後には小寺愚にて黑田をしりぞけ、主從不和になりける。美濃守年老い隱居し、剃髮して宗圓と號しける。其子官兵衞家督を續ぎ、其子松千代丸といひしは十二のとし上方の信長公へ小寺より人質に奉り、又官兵衞孝高をば有岡の荒木攝津守が方へ小寺が人質としてうばはれ、父子とも存命あやふかりしが、不思議に難をのがれて秀吉の播州征伐の時、官兵衞孝高最初に味方に參り、其後年を追て軍功莫大にして大名となり、是も剃髮して如水と稱し、松千代丸は筑前守長政と名乘り筑前國を一圓に給り、今に至り子孫さかえ、筑前の太宰府の邊に城を築き是を福岡と名付居城あるも、美濃入道宗圓の出生せし所の作名をとられしといふ。

▲戶川平右衞門秀安の事は、本書に所々是を註す。其子肥後守逹安十三歲にて、備前國辛川にて初陣す、高名ありしより以來働多し。たけ高く大の男にて、力量も人には越え勇氣ありける。朝鮮征伐の時、文祿元年五月都への道筋わたりの城を、肥後守も一城守りてありしに、肥後が組頭なりし

中島杢介城外へ働き出たるに、朝鮮人是を取こめて討取ける。是を肥後守無念に思ひ、杢介が弔合戰すべしとて其翌日みづから兵を率して城を出で、城門の向なる小山の峰にとり登り備ふ。朝鮮の兵數萬、其下の廣野に押出して充滿して備ふ。其時老功の組頭新免伊賀・岡市之丞申て曰、此大勢には當るべからず。早く城へ引取て防ぐべしといふ。肥後守（干時二十六歳）がいふ、老功の申事なれ共、今此大勢を恐れ臆病心付て爰を引取らば、悉く追討に討るべし。敵多勢なりといふとも、眞一文字に打入てかけ破り戰て引取らば、死地に入て却て生に逢ふべし。こゝをば我に任すべしとて、肥後が備へし小山より上に在る松山へ旗さし物小荷駄人夫を登せて、同勢の跡に續くやうに見せ、戰兵のみ備へて小山の高みより圓石を谷に轉する如く、一度に噇と突てかゝりて戰へば、朝鮮人の跡勢より崩れて敗北するを追討にす。其逃る方に川有しに敵を追込、數百人の首を取て城に入り、其首を秀家卿の陣へ遣し實檢に入る。是朝鮮人と手始の戰也。其外朝鮮にて肥後守戰功多し。されども此戰には自身手をおろせし働はせざりしとぞ。關ヶ原の時は備前を浪人して關東に在ければ、出陣も小勢なれば自身の働多し。郷戸呂久の渡りにて早く川を渡して戰ひ、敵を追て討取ける。其時の一番首也。續て又鑓を合す時に田中吉政（兵部少輔）の兵來て、御助け申と言て鑓にてかたはらより進み來る。其敵は十文字を持ち少し高き所に居て、此方二本の鑓を搦み突合事手間かゝりしが、田中が足輕是をみて鐵砲にて可ㇾ撃といふ。田中が侍怒て、汝鐵砲を撃べからず。是を打たば汝を先突殺すべしといふ。時に敵の耳の下へ肥後守鑓を突込てつき倒す。田中が侍早速乘かゝりて此首被ㇾ下べしといひ、肥後守も可ㇾ遣と答て田中が侍其首を取る（初に肥後守取たる首は石田が内の袖原某といふ者なり）其時戸川又左衞門・岸本與右衞門も、首はとらざれども能く鑓をし、湯原治右衞門も能く働て手を負たり。近藤勘十郎（後に勘右衞門又助之丞とも云。）十六歳にて組討す。七ヶ所まで手を負て首を取て前に抱へ伏し居たり。肥後守が兒小姓にて黑田甲州も見知られし者なりけるを、甲州こゝに來り合せて、勘十郎無ㇾ比類手柄せしとて藥をとり出して與へ、

且かやうの首は人に奪るゝもの也。若年の事心もとなしとて、甲州の家來を付て引とらせられしとぞ。岸本與右衛門は此戰の後、佐和山の城攻の時に兜首を取て、其兜を後迄家に傳へ持しといふ。此戰終り、肥後守には宇喜多家にての所知の地、高二萬五千石を備中庭瀬にて賜りて御家人となり、寛永四年肥後守六十一歳にて卒す。其子土佐守正安、其子玄蕃安宣、其子縫殿延寶七年に卒す。幼年なる故其家斷絕す。されども土佐守弟戸川內藏助、其弟戸川平右衛門等の家將軍家に奉仕す。

▲浮田左京亮忠家は、直家の弟にて福岡出生の人也。富山の城主、後に隱居して安心と號して大阪に居たりしに、朝鮮征伐の時、秀家卿十九歳にて總大將を承はり渡海ありしに、安心後見すべきよし豐臣太閤命ぜられし故、秀家卿に添へて安心渡海し、其後ほどなく大阪にて死す（其墓邑久郷村に今にあり。）其子左京亮詮家は上杉景勝御征伐の時に、秀家卿の名代として奥州に赴き、直に東軍にしたがひ軍功あれば、石見國津和野の城主となり、三萬石の地を給ひ、浮田を改て坂崎出羽守といふ。其後元和元年大阪落城の時、天壽院殿を（秀忠公御娘秀頼公の室家後に本多忠刻の室。）城中より奪取奉りて參りける。是等の功によりて又一萬石御加增にて四萬石を領す。しかるに奪取て參りし時、此姫君を出羽守に下さるべしと仰ありしに、是を本多中務大輔へ御緣組ありける。出羽守是を聞て大に怒りて、婚禮の時御輿を奪んとするよし聞えければ、出羽守が家臣へ內通ありて、出羽守を討て出しける。是にて事濟む。出羽守は亂氣のよしにて其家斷絕す。其討て出せし者の不忠を又惡ませ給ひて、是も御成敗ありしとぞ。出羽守弟邑久郡大鹿島の住僧にて感應院といひて、寬永の末までありしといふ。

或曰、天壽院殿大阪落城の日城中御出候事は、秀頼公淀殿の助命を御願候爲といふ。御側女中の外に大野修理が郎等、米村權右衛門付添奉る。其所へ大和組の內堀內主水といふ者參かゝり、御供に參る。しかる所へ坂崎出羽守出會奉り御供仕り、本多佐渡守陣屋へ御落付被成、其段出羽守より東照宮へ言上申候よし也。さて秀頼淀殿御生害をば天壽院の御聞に達せず、關東下向したま

ふといへり。

▲岡豐前守利勝。武勇人に勝れし者なり。或時兒島常山の麓に戸川友林隱居してありしもとへたづね行とて、京橋の邊より舟に乘りて出ける。又常々懇なる侍を同道す。是も又武功多き者なりしが川口を出る時分よりたがひに軍物語をする。かの侍豐前へ申は、分限の相劣たる事は申に不及事也。されども手柄高名の場數に於てはなか〳〵我には增さり給ふまじとあらそひて語りあひける。凡三里程の海上を行く程にて、始終軍咄し計にて舟着し、其物語を聞し人かぞへしに、双方とも四五十程の場數なりしといふ。其咄相手の侍の名は語り傳へず按に此侍岡富源右衛門馬場重介が類なるべし。其名傳はらざる遺恨の事也。此豐前守、文祿元年八月に朝鮮の陣中にて病死せしが、遠き慮もありし者也。豐前その末期に、秀家卿其小屋に至り病を尋らる。其時豐前に、何にても言置くべき事あらば申置けとありしに、豐前答て、申置たき事は候へども、とても御用ひ有まじければ無益なる事と申せば、秀家卿更に、其事は忘却あるまじ、思ふ所包まず申べしとあれば、然らば愚意を申上べし。某此度相果候はゞ、御仕置は定て紀伊守承りて一人事をはかり申べし。左あらば御爲にあしかるべし。殘る老臣に紀伊守を思召かへ給ふなと申ければ、秀家も、其方申處尤也。向後申候所愼べしとあれば、豐前安堵の思ひをなして其翌日空しくなりけるが、其後果して紀伊守一人仕置して家中爭論起り、終に是より宇喜多家ほろぶる事になりにけり。其子岡越前守といふ。朝鮮陣中にて家督を續ぎ、二萬三千石を其儘知行せしが、慶長五年五月□日南都に蟄居しありて、關ヶ原の合戰治りて後、戸川を以て關東へ仕へ度き事を願ひける故、御家人に列し、備中江野にて七千石を賜る。しかるに越前が嫡子平內、明石掃部が聟にて大阪に籠城す。元和元年落城の後關東より御穿鑿あるに、越前守申は、平內儀掃部が聟、其上に切支丹を信じ候故義絕仕り、浪人の後樣子不存よしを言上す。東照宮聞し召、汝は明石掃部が聟なり。平內は又同人が聟なり。近年平內浪人して大阪に籠るといふ事疑はしき所也。左あらば急ぎ平內を

尋出せよと御下知ありしに、平内備中の家士伊賀四郎兵衛所にかくれ居けるが、父越前身體危しと聞て、同年六月末に京都へ出けるを戸川肥後守に御預け。越前も申分立がたくて、父子とゝ妙國寺にて七月に切腹ある。平内は切支丹故梟て首を討たる。次男忠兵衛も江戸にて切腹して家斷絶す。

▲長船越中守は、津高郡虎倉の城主なり。されど岡山に居て、組頭役の石原新太郎かはりて城を守る。此新太郎は越中が妹聟なりし。天正十六年閏正月朔日に、越中守へ新太郎より使を越して來る。四日年始の賀儀として、料理をまゐらすべきよしを言送りける。悦て謝禮をまつ返答に申やりて、四日の朝越中守幷弟源五郎家來寺田喜右衛門を連れて岡山を出て行き、其外に組侍金光宗廻・河原甚右衛門をも相伴に同道して、晝過る頃虎倉に到着す。新太郎出迎へさまざま饗應し、夜に入まで酒盛し、深更に及で各自が宿所に歸り、越中守も寢所に入り、翌五日の朝四ツ過に、越中守末子幷源五郎子供など寄集り碁をうち、越中守見物し居たる處を、新太郎櫓に上り矢間より鐵炮を以て越中守が眉間を後へ搏通す。座中の面々周章し、鐵砲の音したる方へ走るもあり、又越中守を介抱するも有る所へ、新太郎が嫡子新介當年十八歳になりけるが、其座へ出て源五郎を一刀に斬倒す。左右に居たる者即座に新介を斬殺す。新太郎妻は長刀を持出て越中守が止をさし、奥へかけ込て幼少の子供を悉くさし殺し、直に新太郎が籠居たる櫓に取込る。兩家の家人共何の意趣ともしらず、互に拔合て所々に切りむすぶ。金光宗廻・河原甚右衛門・市村某等下知をなし、何も主人の意趣も不レ知して切合死する事詮なきこと也。思ふに新太郎亂心なるべし。みな靜まれと制しとどめ、岡山へ此よしを告たるに、暫くありて新太郎夫婦自害やしたりけん、其矢倉より火燃出て、折節西風烈しく櫓塀に付て燒上る。新太郎家來石原相馬といふ者は虎倉村の寺へ行て自害す。岡山へ此事の注進聞えければ、越中が嫡子紀伊守裸背馬に乘て驅出す。家來も是にしたがひ追々大勢驅行けるに、やうやく暮時に虎倉城へ行つて見れば、城郭悉く焦土となる。紀伊守も爲方なく、宗廻・甚右衛門其外生殘り

し家來に其樣子を尋ねきゝて、越中守并源五郎が死骸を取納めて岡山へ歸る。此度紀伊守をも招きけれ共、兼て不和なりし故虛病を構て行かず其難をのがれたり。新太郎一家不殘死せし故、其意趣を知る者なし。扨越中が家督をば前のごとく紀伊守に言付られしが、是は邪智あるものにて國中是を惡むこと甚し。よりて毒をあたへて殺す。其子を長船吉兵衛といひしが、其末いかゞなりし終しらず。

▲花房志摩守正成。父をば花房又左衛門といふ。剃髮して道悅といふ。志摩守關ヶ原の戰の時、大和國に蟄居して有しが、其戰過て御家人に列し、備中國にて七千石を賜ふ（宇喜多家にては一萬四千石を領す。）其子の彌左衛門幸次、朝鮮陣南門の城乘取りし時よき働きあり。後には台德院將軍の御使番を勉めける。元和九年六十九歲にて死す。幸次の弟花房右馬介正榮、其弟花房勘右衛門正盛、みな東照宮に奉仕す。

▲花房助兵衛職之。もとは美作人也。其戰功本書に記す。文祿三年岡山を退去し常州に蟄居、慶長五年より東照宮に奉仕し、備中にて七千石を賜り御使番を勉む。元和三年六十九歲にて死す。其子花房五郎左衛門職則、文祿三年父と共に常州に蟄居、後父の家督を續ぎ元和六年死す。二男花房左衛門職直、東照宮に奉仕す。後に榊原飛驒守といふ。慶安元年死す。職則の子を大膳といふ。

▲明石飛驒守。初は源三郎といふ。もとは浦上宗景の臣なり。宗景滅亡の後宇喜多の臣となりたりといふ。然るに宗景滅亡以前に、直家所々合戰の先手に明石飛驒守の名見えたる事すくなからず。按に宗景の臣ながらも、宇喜多に隨ひて合戰のたび〳〵其麾下に加りしものにて、其後天神山落城宗景亡びしかば、宇喜多の臣となりしなり。故に飛驒が子掃部の時まで家老の列に入らず、客分のあしらいにて組士もなかりし。尤四萬石にて宇喜多家にて第一の大身なり。是も浦上の時より持來りし高なるべし。▲嫡子明石掃部景親、家督を續て親の時の如くよきあしらひにて、仕置には構はでありしが、慶長四年宇喜多の老臣みな他へ預られ又退去して、仕置すべき者なかしかば、掃部頭

仕置をして關ヶ原の合戰にも秀家の先手を只一人勉けるに、關ヶ原敗軍後浪人し備中播州などに隱れ住み、切支丹を信じ其宗旨を弘め計る。しかるに慶長十九年大阪の亂出來し時、城中に入て一萬計の大將となり、兩度の籠城をせしが、落城の後行衞しれずなりぬ。世の浮說に南蠻へ渡りしといふ。掃部が子二人ありしが是も行衞しれず。數年の後尋ね出されて殺されしといへり（景親初は三郎左衞門といふ叙爵して飛驒守となり後に掃部頭といふ。）

▲明石右近宣行といふは、明石大和守景行に子なくて弟を養子にす。即此右近也。大和は和氣の曾根の城主にて、浦上宗景の臣なりし。右近は直家に仕へ、其儘曾根の邊にて四千五百石を領し曾根村に住居す。朝鮮陣に赴て文祿二年正月深手を負けるが、一兩日過て死す。其幼男久藏に右近が祿を其まゝ賜る。其事を明石久兵衞（祿二千石）小瀨中務（祿千石）より備前の留守へ言送りける時、右近が伯父明石宗納より返答せし文、今も殘れり。其宗納は和氣郡働村に隱居して爰に死す。（宗納が屋敷地の跡墓も働村に殘れり）右近が子久藏も後右近といふ。宇喜多亡びて後浪人し、是も大阪に籠城せしが、落城の後行衞しれず。

▲高取備中。是も浦上の臣にて戶川平右衞門が舅也。後に直家に仕へ三千石を領す。其子も高取備中といひしが、秀家卿の母大方殿といふに內緣ありて、後に浮田喜八といふ。戶川肥後守備前を去りし時一所に退去せしが、後に歸參し、關ヶ原の戰に討死せしといふ。

▲延原土佐。宇喜多家の古老の臣也といふ。其子を內藏丞といふ。六千石を領す。關ヶ原敗北の後に、丹波の別所豐後守を賴みて居たり。切支丹の宗旨を信じて蟄居したりしなり。

▲江原兵庫は、直家の時作州大庭郡三﨑村の篠向の城に在て一萬石を領す。秀家卿の時死す。其子も亦やがて早世して家斷絕す。

▲岡本權之丞。三千二百石也。文祿二年六月二十四日に朝鮮晋州の城を攻め、黑田如水の臣後藤又兵衞、其時龜甲と言ふ器を製して是に乘り、石垣の石を刎崩しける時、權之丞一番に乘入、二番に

戸川肥後守乘入て、城兵をこと〴〵く討取、たま〳〵逃げ惑ふ者も谷に陷り川水に溺れて、死傷する者二萬餘人に及ぶ。城主牧使徐元禮は藪の中に隱れ居たるを、岡本權之丞討取たり。其首を降人に見せければ、疑もなき牧使が首也といひければ、鹽漬にして名古屋へ奉りければ太閤大に悅び給ひ、岡本に感狀に羽織を添て賜はり、歸朝して後又太刀を賜ひけり。

▲國富源右衞門は、八百石にて鐵砲頭なり。浮田侍にて双びなき勇士なり。其手柄高名本書所々に是を記す。文祿二年正月二十三日、朝鮮にて大明軍五六十萬騎にて出たるを、是を防戰する事評定區々なりしに、秀家卿は金の笠の馬幟を押立傍に立てあり、後見の浮田安心入道南蠻頭巾の兜に黑具足を着て、茶色の羽織を其上に打着て控たるが、とても長僉議を聞て無益なり。人はともあれ、宇喜多が勢はかゝれ〳〵と秀家下知あれば、戸川・長船・明石等眞先に進んで駈出れば、吉川廣家が備は宇喜多より先にあれば、是を見て廣家馬を進めて備を繰かくる。宇喜多勢は一足も先へ出んとして、吉川が備の脇田畠の中を押出す。總軍是を見て四萬六千餘騎總がゝりして一度に懸て戰ひ、大明の大軍は味方の勢を中にとりこめ討取らんとす。秀家の備の前に小山有り。此山を廻りて先へ出なば、大明勢の後陣近く出べき所とつもりて、戸川肥後守此山を廻りて見れば、案のごとく大明勢の後也。戸川則大明の後軍より切て入れば、思ひもよらざる事なれば大明勢敗北す。又小早川隆景と立花勢とは横を入て追崩して、總がゝりに追ちらせば、大明勢總敗軍になりて逃て行を、追討にして首を取る事夥し。其中に軍吏と見えたる兵、馬を引兼ね居るを、國富源右衞門追つきて拔打に二打三打切付れども、鎧よければ切れず。其儘飛掛り組付きける、國富もとより大男にて、力も普通の者にははるか越たりけるが、其敵は國富も猶見上る程の大兵にて、力量も又强ければ、源右衞門を取て抑へける。是を刎かへさんと思へども、其敵の身の重き事大盤石を横たへたるが如し。せんかたなく脇指を拔きて下より突けるに、何をか着たりけんさらにとほらず。されども此脇指を突張

てありし所へ、源右衛門が若黨來りて敵を引倒す。重具足を着たれば、早く起る事ならぬ所を押しければ、源右衛門起上りて首を打取ける。後に降人にとへば漢南八の將なり。國富も此時は危き事にてありし。

▲馬場重介織家も、鐵砲頭なり。岩法師といひて十三歳の時初陣せしより、所々の働の事本書に見えたり。天正十五年筑紫陣の時、日向と豐後の境なる高城に三原彈正・山田新介籠たるを、大和大納言秀長卿毛利宇喜多等是を攻む。宇喜多は南口より攻寄れば、敵も城より出て戸川肥後守と攻たゝかふ。其時重介は谷の方の討手として、谷の間へ行たり。敵を待てども來らざる事數刻に及びける故、退屈して嶺に登る時に、敵出合がしらに行合、城兵鐵砲を五段に備ふ。重介足輕を下知し與力の士を進めて、鐵砲迫合して一つ二つ込替へ打拂ふと、其儘重介鑓を入れ無二無三に突て掛り、敵を三段迄突破る。四段目の備より搏つ鐵炮重介が右の股に當る。敵仕たりと聲をかくるを、重介手を揚げ足をふみ中らずと言て味方を勵し、四段目の備をも追崩す。五段めの備より鐵炮を放つ。重介心は猛く進めども股を打貫れ、血流れて進がたく、崩土手の有けるを楯にとりて兜のしころを傾け、具足の袖をかざし、敵近付かば打死せんと待つ所に、向の谷の柴折懸たる陰より鐵炮を放つ。重介が背割具足の右肩具柄背の内より臂まで搏通さる。竹を以て袋を突通したる樣に覺えて、目もくらみ心も亂れて、世上朝顏の花の色に見えたるを、きつと心をとりなほし目を開けば、田中藤介谷より登り來り、重介如何と言ふ。重介是に氣を助けて、われ大事の手を負たり。退くともとても追討に逢べし。こゝにて腹を切んといへば、藤介聞て夫は無益の生害某隨分敵を防ぐべし。早く引取れといふ。重介重ていふは、此所甚だ危し。なか／＼防事成るまじ、其方こゝ引取て重ての御用に立よと問答す。藤介甚怒て、某爰を一足も引まじ。さある程ならば堅固に防がん事安かるべしといふ所へ、重介若黨共追々來る故、重介を肩にかけて退ける。藤介は足輕を猶進め、崩土手を前

に當て待つ所へ、五段目の備すゝみ來るを、近々と引うけ土手陰より鐵炮を放ち搏立れば、敵猶豫す。其所へ藤介等鎗を入て終に城兵を追込て引取ける。重介此手疵も平癒したれども、手足不叶にて力戰ならず。此後は邑久郡北地村に引込、長命にて七十七歳にて病死す。其病中に子供に遺言しけるは、臆病はすまじきもの也。某戰場にて淺手深手負ふこと度々にて、討死すべきものが運よければ此年まで長らへて、今病死するにて思ひしるべしといひしとぞ。▲其子馬場與平次實職、後の朝鮮陣に秀家卿の供に行き、慶長二年八月十五夜漢南の城を秀家卿攻らる。戶川肥後守東の方を攻て鐵炮をうちかけ、埋草を以てから堀を埋んと、粟井三郎兵衞・國富源右衞門・岡八右衞門是を下知す。與平治は肥後守の許へ行たるに人不見。扨はみな城へ乘たりと思ひて、から堀に燒とがりを植たる上に栭を打渡して行に、向の岸へ一間計とゞかざるを飛び越し、直に壁を乘こし西向に飛入りそれより刀を拔肩にかけて東に向て行き、南門に入ども敵味方ともに不見してためろふ中に、敵三騎はせ來るを、中の敵を切付る。されども鎧の上なれば切れず。敵は壁へ轉びかゝる處を、又振上げ切る。時に後より味方ぞ／＼と呼る故刀を引て退く。其中に三騎共に逃たり。跡にて考ふれば其詞をかけたるは外の味方の事也。宍甘太郎兵衞と本丸へ乘込たれども敵に逢はず。しかるに敵四騎馳過ぐるを討んとするに、はや味方の者駈合て討取、爲方なく蓬の高くしげりたる中にかくれ居たるに、戶川肥後が弟玄蕃、手を負ひて肥後が家來は居ざるかと呼ぶを聞き、與平治蓬の中より走り出ければ、玄蕃が手を負ひたり賴むぞといふ。肩にかけて肥後が陣へ伴ひ行んとする所に、敵六十騎計群り二の丸より逃出づ、玄蕃が長刀を持ちたるを取て、敵の中へ斫り入りけるに、敵は落武者なれば皆十方へ逃げ失せたり。夫より玄蕃を助け南門の方へ行けば、秀家卿の旗本に戶川が家來杉山四郎兵衞本鄉虎八ありし故、玄蕃を渡し又引返し、敵を心掛たれども、其日は手に逢はざりし。されども朝鮮陣中にて首をとり鼻をかきたる數、男女老少ともに與平治が得たる所八十餘人に及け

るとぞ。扨慶長五年關ヶ原にて宇喜多敗軍の時は、與平治は大垣に殘り居て負軍になりしを聞き、漸く引退て近江加茂郡布施村といふ所の百姓を賴み、二十餘日を過て七右衛門といふ百姓大阪迄送りくれ候て、備前へ歸りて隱れ居たるが、後に池田家へ出つかへて其子孫今にあり。

▲中吉與兵衛も、祿千石にて鐵炮頭なり。小田原城攻の時秀家卿の攻口は湯本の北、尾首山といふ出崎の山也。戶川肥後守先手にて備けるに、此山の尾をのり越ゆれば城甚近くして出でがたく、又出づれば城へ鐵炮を打かくべきやうなし。されども諸手の攻口隙なく鐵炮を打かくれば、玉音なくば油斷して攻ざることもあれば、與兵衛下知して、用には立たざれども城の方へむけて空さまに百挺の鐵炮を不ㇾ絕打出しければ、太閤の本陣へも聞えて、油斷なく城を攻て骨折候とて、酒樽肴ども給はり、其時與兵衛巧者なることをせしといひける。

▲安東少七も、六百石餘りの祿にて、手柄高名の場數もありて、小田原攻の時戶川が手に在て尾首山より攻るに、井樓を組み城中へ大筒を打掛け、又金掘を備て城中へ穴を掘て入らんとす。城中よりも是を知り、是にむかへて穴を掘て出るに、穴の中にて鎗を合せ、安東少七敵の鎗を切折り、吾鎗も折れて引取ける。文祿二年朝鮮陣、アンサン郡にて戶川が手より國富源右衛門・屋守四郎兵衛・小野田與九郎一組、大澤半太夫・長尾惣左衛門・吉村八右衛門・安東少七一組にて張番に出けるに、敵寄來り攻合、又味方亂妨に出たる者敵に追はれ難儀に及ぶ所、鐵炮を打立て敵を打取、少七もふみ留り殿して引取りける。又チンシュ落城の時、敵引退しを少七追かけ候所、其先に秀家卿の旗本備られし故に、敵も爲方なく引返し、少七へ向ひ弓にて懸かるを鎗にて渡り合、手を負ながら槍にて突けるに、敵脇へ飛びける勢に少七鎗を突折る。秀家卿の目前の事故、持鎗の片鎌なるを給ひける。後の朝鮮陣、漢南の城八月十五夜落城の時、戶川肥後守手一番に城へ乘入、矢倉に敵取籠り有り。されども肥後守が勢、方々へ働きて人すくなかりければ、少七只一人矢倉へ切入りけるに、肥後守

も織て切入て數人討取ける。其外朝鮮にて場數ありといふ。慶長五年の伏見城攻に、松丸一番乘は少七なりし。宇喜多家亡びて後池田家へ仕へて、今に子孫あり。

▲小瀨中務も、祿千石にて心ばせもありしといふ。宇喜多家亡びて浪人し、剃髮して甫庵といふ。信長記太閤記を記せし者也。惺窩先生の門人なりしといふ。惺窩も秀家卿秀秋卿の時、岡山へしばし下り居られしとぞ。

▲稻葉內匠頭は、小早川家の家臣にて、秀秋卿の時は第一の老臣なりしが、本書にも記しゝごとく內匠頭岡山を退去ありし時、是をとゞめんとて兵を出してさゝへられん事をおそる。其中にも騎士の將なる笹地兵庫勇氣なるものにて、輿士にも亦剛强なる者多し。其上稻葉と年頃睦しからざる故內匠も是に敵しては身の害あらんと思ひ、其時兵庫を呼で、今度岡山を退んと思ふ。然るに若足下出て吾をさゝへば退べき方なし。されば某が存亡は足下の所存にありとたのみければ、笹地是を承諾しけると也。其外內匠に力を合して一所に退く者も、其家に來りて見送るものも多くて、何の難もなく庭瀨まで退しといふ。一に曰此後歸參ありて秀秋卿の家亡びし後に浪人といふ。後には關東の御家人となり、大名となられたり。

內匠頭妻は明智が臣齋藤內藏介が娘也。其母は稻葉一徹の娘にて、明智亡び內藏介討死の後、其娘をつれて一族の方へ歸りける。其娘を內匠頭よびとりて男子出生す。是丹後守正勝也。此內匠の妻勝れて嫉妬ふかし。しかるに內匠妾を京都より呼寄せて是にも子出生す。されども是を妻にはかくして別の屋敷に置けるが、是を妻聞出して內匠へ申けるは、妾別の屋敷にありと聞く。それにては外聞も宜からず。此屋敷へ呼取給へ、少しもくるしからず。又男子も有りと聞きし。是亦此方にて養育すべしと、いと懇にいひし故、よくも申されしとて內匠もよろこび、別屋敷より呼寄て內匠妻へ目見して、又懇に申されければ、妾も安心してありしが、一日內匠の留主なりし時、其妾を間近くよび、刀を拔て衣裝の內にかくし持つて只一打に切殺し、兼て用意ありて乘物にのり裏門より

出、上方へ登り里に歸りける。其後此妻江戸の御內所へ出て勉めけるが、慶長八年御誕生ありし竹千代君(家光公の御事なり)御傅になりけり。後に春日局といひし則此人也。夫よりほどなく內匠頭も召出され御家人となりけるに、竹千代君に御家人ども御目見申候時、春日局抱き奉る。內匠頭も出ける時、東照宮仰に、此女は內匠は知りたるものなるべしとありければ、只平伏してありしに、是をば吾に得させよ。其方には相應の妻を世話すべしと仰ありける故、內匠も難有と御請申て退きけるとぞ。其後山內對馬守娘を緣組せさせられき。扨竹千代君未御幼年の時、御弟の駿河忠長卿を將軍家御寵愛重くして、御世をも此御弟に讓らせ給ふべき程に見えければ、春日局大に是をなげきて、熱海に湯治するとて御いとまを願ひ、ひそかに駿府の御城に參りて此事を大御所へ委しく訴へ申ければ、聞召とゞけられて重て江戸へ成らせられ候時、竹千代君を重くもてなし給ひ、殊の外御奔走あり。御弟の忠長卿をば遙かに隔て、うと／＼しく御言葉もかけられざる程にせさせ給へば、是よりは將軍の御あしらひもかはり、其外つき奉りし人々も竹千代君を重んじ奉る事大方なく、終に將軍に備はらせ給ふ。かゝることを家光將軍聞し召て、吾將軍になり世を知ることも、此春日局がよくはからひしによれることゝ思召て、此局をいと懇に召遣れけるより、內外もわかず諸家より此春日局をかしづき重んずること、此御時にならぶものもなき勢なりければ、其子聟なりける稻葉も堀田も、兩家ながら高祿を給ひ重き家となりけり。其春日局の、はじめ內匠の妻を切殺せしは岡山の城內目安橋の屋敷にての事也(今の伊木長門家也)。

▲堀田勘左衞門正利は、備前國津高郡堀田加茂出生の人といふ。其はじめ稻葉內匠頭に仕へ五百石を領せり。此勘左衞門に內匠の妾腹の娘を妻に遣す。腹違なれども春日局の聟分なる故、將軍家の御家人となり四百石を給りけるが、御書院番に入られ水野隼人正忠清の組にて、大阪役に高名ありし故に、三百石の地を加へられ七百石を領せし。其子堀田加賀守正盛、段々御取立にて十五萬石の

地を領し、其子筑前守正俊、又御取立にて御大老の職まで勉めらるゝ事、類すくなき立身なり。曽其はじめは春日局の筋目なり。

▲平岡石見守重定は、金吾秀秋卿へ豊臣太閤より附けられたる家老にて、三萬石を領す。それ故に始終秀秋卿を諌めて其家を治めたり。其家騒動し老臣等みな退去せし時も、其家を動かず。秀秋卿薨じ家斷絶の時迄ありて浪人したる其忠義を、東照宮感じ給ひて召出され、濃州德野といふ所にて一萬石の地を給りけるが、其子石見守の代に亂心し、法外の事どもありければ領地沒收せられて、其子市十郎に二千石の地をあらたに給りける。

▲上田土佐は、秀秋卿の鐵炮頭なり。稲葉內匠頭退去を催し居けるとき、かゝることありともしらず其家に尋問しけるに、あるじの內匠に同意の者ども多く集り居て、土佐が來りしを大きに悦び、あるじと浮沈をともにせんとてこそ來り給ひし、其姓名を此一統の中に記しつけんといふ。土佐是を聞て、是はたゞ常さまの音信にてこそあれ、さらに其心にあらず。尤傍輩の親しみにて合力する事もよのつねのならはしなれども、是は其類にあらず。今君にそむきて國を退んとする人に心を合して、君へ忠をかくべきことわりなし。內匠此座にあらばさしちがへて死すべきものをとて其座を立ち、內匠へ荷擔せし諸士なみ居けるを、にらみまはして立歸りけるとぞ。

▲村山越中は、金吾中納言に仕へ、老臣杉原紀伊守を城中にて成敗の時仕手をせし者也。其後間もなく岡山を退去す。舟にとり乘大阪へ退くとて、なへが浦岡山の邊になへが浦といふを聞ず。しるし誤れるにや。といふ處に舟を引付置、追手の來るを待て挾箱にこしかけて、其所の町に火をかけて追手を待うけ、弓射る者を脇に置て射拂ひ射殺して、船に打乘りてのきにける。其後又備前宰相の御家に仕へて、大阪の役にも手柄どもありしが、せめ馬の歸にて口論を仕出して相手を殺して退去し、加賀の前田家に出て五千石をとりてありしが、此越中手強なる計にて、何の分別もなく大口者なりし。人の事を惡口する事など

多し。又備前宰相の侍に臼井十太夫といふ者有り。大の男にて長六尺に餘り、力も十人を合せたるといふ程なりし。加賀にて此臼井を譽めたる者ありけるに、村山聞て是を妬みて臼井を大に誹謗す。此事を臼井傳へ聞き憤ける折ふし、加賀の黄門の供して村山伏見に上り、臼井も亦此に行逢ければよろこびて、其事を文にて村山方へ言やりけるに、夫は僞なるよし臼井へ返答して事濟む。もとより以前傍輩にて馴染なれば、互に贈ものどもとりかはし、出會物語などして双方國に歸けるに、又村山加賀にて傍輩に語りけるは、臼井還恨がましく文を如此書て越したるに、此方より手強なる返答に及ければ、とかく言ふこともなく、音信などして追從せしなど又惡口せし事ありし。是を臼井聞て、今は堪忍ならずと思ひ居ける所に、越中又加賀を浪人して出けるに、以前より池田備中守懇意にてありし故、備中松山へ行ける。是を臼井聞て、其歸る時を待て打果さんと心かけ居て、其歸る日を聞定め宍甘の山際に出て待うけ、使を立てかくと言やるに、其家來聞て、是は越中にてはなし。御聞ちがひなるべし。病人なりといひて通らんとするを、臼井言葉をかけ、越中臆したるかと言て乘物かきし者を拳をあげて打ければ、大力にうたれて目くるめき倒るれば、乘物を地におとしける。其時越中の乘物の戶をひらき出る所を、又詞をかけて斬殺しける。此騷ぎを聞て其邊の百姓ども多く出ければ、村山が家來みなちり〳〵に逃行て事濟たり。村山が妻後に江戶御城中に召仕はれ、此事をなげき訟へけれども事もなく、又其子其時は幼年なりしといふ。後までも仇をうつ事もなく、臼井終に何の難もなかりけり。

一說に、龍口にて金吾中納言の蛇を切らせたりし步行の者といふは、此越中が未だ步行の者なりし時の事といへども、杉原紀伊守を殺されし時、此越中仕手をせしが此龍口の事はそれより後の事なればいぶかし。又一には、越中は備前宰相の步行の者より取立られしと書しものもあれど、是は猶誤なり。

▲河田八助も、金吾中納言に仕ふ。是は備中國加茂潟の細川家より出でし者なり。すぐれたる大力なりし。天正十八年豐臣太閤相州小田原攻の時に、三月二十九日沼津の宿にて太閤諸手の人數押を見給ふ。しかるに小早川勢の中に大指物さしたる者一人、十八端の母衣かけたる者一人あり。使番を遣され其名を問しむ。御大將の仰のよしを唱て其名をとふに、返答に不ㇾ及して押通る。使番詮かたなく歸て其段を言上す。太閤仰に、馬上ながら其名を問ひしならん。如此大さし物をさし大母衣をかけては、いか樣の能士にても馬のこらへぬ故に必ず立なる者なり。さやうなる侍に下馬せずして名乘れといはんに、いかでかなのるべし、禮をしらずとて餘人を遣さる。此度は下馬して其名を問ひければ、大さし物は河田八助、大母衣は檜崎十兵衞とぞ名乘ける。此八介秀秋卿の家斷絶の後に浪人して、備前宰相の家に仕へ、大阪の城攻に鐵の楯を城中より大筒にて打たふしけるを、八助出て唯一人其楯を引負ひて取り歸りける。敵も味方も八助が勇力を見て目を驚しける。

或曰、宇喜多直家病重くなりて、侍臣を呼て殉死すべきや否を尋ねらるゝに、皆君恩の重く是を報ぜんに、黃泉の御供申べしと答へければ、直家悅び其約をせししるしにとて皆盃をさし、其姓名をしるして、我死たる時棺中に入よといはれける。戸川肥後守達安、其時は年若にて助七郎と申けるが、始終とかくの答もせでありし故、直家申されしは、みな殉死せんとあるに、汝は如何と問れければ、某いまだ若輩に候へども、君の御先を奉りて堅を破り鋭を摧く事は其職にて候へば可ㇾ仕候。此座に候面々皆是に相同じ事にて、此時臣等が命を奉る時にて候へば、殉死の事は某なかなか存も寄らざる事故、とかくを申上ず候。是を求め給はむには、黃泉の界をよく扱候僧の引導するには、たれかまさり申べき。常に信仰ましします日蓮宗の僧こそ、一番に殉死して御用にも可ㇾ立と申ければ、直家、此事は我あやまりなり。汝がいふ所尤よしとて、殉死を強らるゝ事止にけりといふ。此こと極めていぶかし。直家病死ありてよき家臣どもを是にしたがひ、皆自害して

失せなば、十歳にも及ばざる八郎をば誰ありて是をたすけ、國をも治め敵をもふせぐべきや、此若辨へなき直家にあらず。されば絶命の後、外へは死を深くかくすべしと言置れし程の事にてはありけり。もし臣の殉死をとゞむべき爲に、兼て助七郎に此ことをしめし合せ、かく言出せしはかりごとなるにや。又考るに、直家の墓も位牌も皆天台寺の平福院にありて、日蓮宗を信ぜられし事を聞かず。秀家卿も日蓮宗をば惡みて、家中へも害宗を改むべしと言付られし程の事也。金吾中納言は日蓮宗を信じて、蓮昌寺を再興せし人なれば、もし此人の事を傳へ誤れるか。且このみにかぎらず、宇喜多と小早川と兩氏の事を混じ、誤り傳へし事ありて、稻葉内匠頭を宇喜多の臣としるせし類多し。

或曰、小田原攻の時、宇喜多秀家卿の攻口をば、岩槻の城主北條十郎氏房是を守る。一日城中へ矢留を乞て、使者を以て南都の酒樽三荷鯛十尾を送て、城を守る勞を慰め給へといひやりければ、城中よりも伊豆の江川酒を送りてしば〲使を通じ、其後は秀家卿氏房に對面ありて、懇に物語どもあり。和議の事を催され、秀家卿申されしは、和議も調候はゞ、ともに甲冑をときて好會をなすべきものをと、色々いひかたらひて漸々和議調ける。小田原の和睦は、それ故此秀家卿の謀計に起るといへることあり。按に此卿此時年僅十六歳なるが、此和議をはかりて氏房へ言解かるべきとしにあらず。いぶかし。若し其臣岡・長船・花房等が類城中へ入て、氏房に言かたらひし事のありしか（此時戸川逵安も助七郎といひて年若なり。）又關東國の大名に北條家へはしたしみ有る人多かるべきに、遠國の馴染もなき秀家卿をして、此策を太閤の命じなさしめし事も不審なきにあらず。故に此二條爰にしるして、後考に備ふのみ

備前軍記附錄 終

中國兵亂記

中國兵亂記目錄

第一卷

第二卷

第三卷

第四卷

第五卷

第六卷

中國兵亂記 一

著者　中島昌行

將軍義植公所々御合戰幷御上洛の事

于レ茲人皇百五代帝後柏原院御宇、從二足利尊氏公一十代後胤、征夷大將軍權大納言從三位源*義植公爲二武將一。然るに明應二年武臣細川武藏守政元・畠山彈正忠義豐企二逆心一、天下大に亂れて將軍義植公於二所々一被レ遂二御合戰一、河内國正覺寺の御合戰に討負給ひ、西國へ御下向故天下成二無主代一。此時諸國に兵亂起て國主郡主其爭無二止時一。義植公周防國へ御下向、大内權助義興御賴暫御在國被レ成候。此時中國西國の武士悉隨順仕り、逆心之輩楯二籠城々一御追討仕り給ふ。將軍御武威廣大也。此折節細川武藏守政元被レ害二家僕一天下興亡有二此時一。義植公大内權助を御賴此節遂二上洛一、達二本意一度由被二仰出一、山陽道西海道の國主へ有二御回文一。不レ移二時日一、馳來る國々の軍勢十二萬三千餘。永正五年正月二十日、周防國吉敷郷より出二兵船七千餘艘一義植公御上洛。京都義澄朝臣へ致二注進一事如レ引二櫛齒一。義澄卿權職細川右京大夫澄元・三好筑前入道長元兩大將に被レ添二三萬餘騎一、爲二防戰一攝津國兵庫西の宮・尼崎・難波邊出張、大内權助義興は能島・來島・因島を海上爲二先陣一、二月二日兵庫西の宮・尼崎海上に二行作二船筏一楯突並べ相戰ふ。細川三好の軍勢一戰に懸負け、防戰不二相叶一旨義澄朝臣へ遂二注進一ば、京都へ引上げ構二要害一可二相戰一と有二軍使一。京都にても防戰不二相叶一丹波國へ落下り給ふ。義植公は、西國攝津所々御合戰に被レ得二御勝利一六月八日御上洛。則再任二征夷大將軍一治世靜謐也。大内權助義興依二軍功莫大一、被レ任二左京大夫從三位一被レ居二管領職一、歌二天下賀祥一唱二國民萬歲安樂一。

*義植は義稙の誤なり。

*問は弔ふの意

義植公中國御政道幷二階堂政行備中在國の事

永正六年六月源義植卿被レ召ニ天下國主ニ、年來之被レ揚ニ軍忠ニ被レ行ニ忠賞ニ累年の軍勢被レ致ニ休息ニ、向後者國之(まま)に被ニ居置ニ、探題國主之仕置、地頭の行跡可レ被レ達ニ上聞ニと有ニ評定ニ。其節備中國は雲州の鹽治尼子の旗下も有り、四國細川三好の幕下も有り、播州赤松旗下も有る故に國亂す。御近侍ニ二階堂大藏少輔政行・上野民部大輔・伊勢左京亮備中へ被ニ指越ニ、國侍を御身方に引入候樣にとの上意にて、上野民部大輔は下道郡下原郷鬼邑山に在城、伊勢左京亮貞信は小田郡江原村高越山に在城、二階堂大藏少輔政行は淺口郡片島に在城。近郷地頭爲ニ冠職ニ在城、國中に立ニ制札ニ禁レ貪ニ民財ニ而扶ニ助貧者ニ愛ニ憐孤獨ニ。是故に國民親附する事如ニ父母ニ。義植公御治世の內、山陽道順見廻國の節、二階堂政行己を正し政道爲ニ明白ニ之由、達ニ高聽ニ御感悅不レ少。依ニ詮意ニ同國窪屋郡高山城主石川左衞門尉久次上房郡松山城主高橋備中守と緣結し、國中平均故備中國探題に可レ被レ居仁也。殊に先祖は藤原氏祖大中臣內大臣大織冠鎌足十代の後胤、二階堂元祖遠江權守爲憲より八代、山城守行政より五代、名家の勇士と被レ出レ撰備中賀陽郡刑部郷經山へ取替被ニ仰付ニ、嫡男孫七郎を御近士に被ニ召出ニ、被レ任ニ從五位下近江守ニ候節、播州赤松下野前司軍勢備中へ相働、遂ニ防戰ニ得ニ勝利ニ候節、被レ抽ニ忠心ニ無ニ比類ニ由御感悅の趣、將軍義植公より二階堂近江守に御感狀を被レ下。親二階堂政行は被レ侵ニ重病ニ、大永五乙酉暦二月十六日に卒去。廟所在ニ井山寶福寺ニ、報恩院德岩良雄大居士。佛事を懇に*問ふ。

大內義興管領職御宥免幷備中國御仕置の事

大內左京大夫義興は、十二年管領職相勤むる內、私領の以ニ財寶ニ天下の諸民を扶持する故、領內の諸民及ニ飢渴ニ。依レ之權職蒙ニ宥免ニ周防に在國、自今管領職細川左京大夫澄元・同武藏守高國に被ニ定

置一處に、家督論一家の遺恨無二止事一、天下の有二テ權職一公儀を輕んじ、諸國に起二大亂一、廢二仁義道一忠臣之志無二一點一、或諍二一家之所領一、立ろに別れて射二不義弓一放二不仁矢一諸國無レ所レ不レ亂。賞罰猥に行ひ給ふ故也。凡そ天下の治は有二人心之正一。人心之正者有二冠職之正一也。速に可レ被レ遂二政道之要一有二議定一。時に將軍義稙公仰には、仁義之道不レ用、惡世之政道不レ任二思慮一、大永元年三月有レ退二出京師一。淡路邊鄙に成二茅茨之居住一給ふ不定の浮世也。義稙公京都退出の後、天下無主の世と成る。依レ之請二源義晴朝臣一備二武將一有二將軍御宣下一。此時國々諸侯有二上京一、國政の諸式等有二告報一。得レ暇令二在國一畢。二階堂近江守居城へ赤松方の軍勢相働く時もあり、尼子方出陣遂二防戰一時もあり、細川下野守・三好筑前守軍兵渡海の時もあり。國中の郡主度々有二變心一、二階堂氏無二二心一順二敬公方一、大内家隨二幕下一、毎々任二廻文一諸國へ遂二出陣一抽二軍忠一故、將軍義晴公より二階堂氏行へ掟意に、備中は諸方境目なれば國民邪智盛にして、下民も長き脇指をはいて拳を握る事常々也。不道非法にして不忠不孝の者あり。近江守令二在國一郡主郷司士民に至る迄平治の事常々心懸、正道正理忠孝不レ理樣に賞罰明に國を治め、仁義を專にして國民をなづけ候樣にと被二仰付一。上仁義を行ふ時國家亂るゝ事なし。

尼子晴久より三吉備後を攻事幷中國侍大將三吉へ加勢の事

天文九年八月雲州大守尼子右衛門督晴久は、「備後國三吉備後入道嫡男新兵衛は大内幕下にて、尼子方周防國へ相働く通路を妨げ、雲州勢兵粮及二難儀一。彼三吉を討隨へ軍勢の通路を可レ開。」と、尼子下野守・同名刑部少輔・同式部大輔爲二先陣一五萬六千餘騎相隨へ、備後國比叡尾城へ押寄せ、府野山崎邊に陣取給ふ。三吉備後入道・同新兵衛以二小勢一遂二防戰一、數月相抱へ、大内家へ後詰を乞ひければ、大内幕下の國々へ有二廻國一、不レ移二時日一備後國三吉が居城へ遂二後詰一。備中にて大内幕下侍大將一手は石川左衛門尉・細川備中守・高橋玄蕃・伊勢左京亮・小田小太郎・笠岡掃部・村上彈正都合六千、兵船三百

艘、宮の浦、連島、笠岡の浦より漕出し、備後國鞆津に著レ船。一手は三村修理亮・二階堂近江守・野山宮内少輔・赤木藏人・上野民部・同伊豆・上田右衞門・宍田伊賀六千餘、備後東條雲州横田大坂峠に構ニ要害ー難所にて敵を待つ。南備中勢八月晦日に備後國山崎に著、城内へ案内を通じ相圖を待居ける處に、九月二日深更に城兵夜討に可レ出城内の貝に隨ひ、諸國の後詰勢も尼子晴久の旗本へ突掛り、以ニ合言葉ー相働き深く切入り、淺く引取り、敵の首をば討捨て取間敷と相定め、丑の刻に尼子陣へ押寄せ鬨を作る。諸陣寢耳に是を聞き騷動仕ける處へ、矢を射掛突掛りければ、尼子晴久は旗幕を打捨て落散けるを數多討捕ける。東條横田境目に待居ける備中勢、晴久の旗本へ切掛れば、尼子勢騷動して無レ道山峯へ登り、谷底へ雪崩れ落ち、我が太刀に貫かれ數輩失にける。尼子家の侍大將を數多討捕り、義隆卿御本陣へ送りければ、譽感の書二階堂近江守に給はる。

尼子晴久安藝國へ發向の節、備中侍大將毛利元就へ加勢の事

天文十年七月、尼子晴久者山陰道七箇國軍勢七萬餘騎相隨へ、藝州へ發向仕り、毛利元就居城吉田郡山城を取卷責戰ひ、從ニ大内義隆卿ー加勢の大將深野平左衞門・宍戸左衞門尉・宮川甲斐守城内と相圖の任ニ鼓具（貝）ー、城外よりも取卷相戰ふ。尼子勢度々軍には討負けれども、三軍の大將なればいつ可レ果軍と不レ見處に、備中國にて大内幕下の侍大將義隆卿へ以ニ飛脚ー申上ぐるは、藝州郡山城へ致ニ後詰ー毛利元就へ可レ致ニ合力ーと伺ひければ、從ニ義隆卿ー御返答に、尼子晴久以ニ大軍ー其國を押通り候へば、銘々要害堅固に相守り、海道の難所に關番を居置き、雲州勢陣所へ兵粮不レ來樣に妨げ候へと、任レ仰石川左衞門尉・二階堂近江守・高橋玄蕃・上田右衞門・清水備後は穗田庄太夫居城猿掛山城石田要害へ楯籠り、關ガ鼻を切塞ぎ兵粮通路を留る。三村修理亮・赤木藏人・野山宮内少輔・秋庭大膳・鈴木孫右衞門は東條へ出張り、雲州横田村大坂峠要害にて兵粮の通路を押へ尼子勢の往來を留る。尼子晴久者

藝州吉田庄にて數月の戰に失二勝利一退散、郡山城内の軍兵萬死を保ち喜悦の門を開きける。元就備中の侍大將へ有二厚禮一。

大內義隆尼子晴久を責事并播州赤松備中へ出陣の事

大內家と尼子氏近年は備後安藝兩國を論じ、當家を犯し掠め候。我も雲州へ相働き、積欝の旗を發せんと、毛利元就は杉原盛重・二階堂氏行を周防國山口へ被二召寄一雲州へ出張の有二評議一。何れも御發向可レ宜と申し、出雲國以二繪圖一合戰場所を定め、勝負の損益を考へ、天文十二年三月四日、大內太宰大貳兵部卿義隆は、筑前・肥前・周防・長門・石見・安藝・備後・備中軍勢十二萬餘騎相隨へ、雲州富田城へ有二發向一。同國赤穴城主赤穴左京亮三千餘騎にて通路の難所に控へて遂二防戰一。備後備中の軍勢三村修理亮・二階堂近江守・伊達宮內少輔・赤木藏人・杉原播磨守・有地民部・檜崎十兵衞魁仕り相戰ひ、赤穴左京亮は居城へ迯籠る。軍神の血祭にせんと備後備中の軍勢城の四方を取包み、責口を定め相戰ふ。赤穴左京亮も弓矢馴れたる者なれば、四方に射手を配り石弓を刎ね防戰し、手負死亡多し。二階堂近江守一手へ首六十七討捕り義隆卿の備二實檢一。雲州陣一番首にて義隆卿譽感仕り給ふ。于レ玆播州白旗城主赤松晴政は、備中を責取らんと浦上宗景・宇喜多興家兩大將を備中へ相働き、雲州陣立の留守城々を責め隨へ候由有二注進一。二階堂氏行在城には、嫡男新左衞門尉・刑部卿經山城へ妻子親類八百餘楯籠り、一筋の道三箇所の難所に大木を切横たへて、所々に石を重置き、敵寄來らば押落さんと手配り、持口を定め相守る。小寺村要害に中島左京・同與助・同彥十郎・湯淺九郎兵衞・頓宮次郎惣・眞壁藤兵衞・橋本權七・那須與六・橋本市助・鷲見十兵衞・近藤新助・國府與三兵衞三十騎、農民三百人差添へ籠置き、三方の橋を引落し、城門必死と戸指し、矢倉役所を相守る。從二將軍義晴公一晴政に急ぎ致二上洛一細川次郎・三好長慶を致二退治一候樣にと就二御奉書一、赤松が軍勢刑部卿を引退く

時二階堂新左衞門追慕ひ、赤松方の後殿岡本權之丞・浮田內藏・中吉平兵衞二十騎計り、諸上村畠道にて小返して相戰ひ、中吉平兵衞を二階堂新左衞門討捕る。清水備後は二十騎計にて王地原へ出張しければ、浦上右衞門太夫二三十騎にて指向ふ時、將棋備を用ゐ相戰ひ、清水が手より荒木下兵衞・片山助作・土師孫十郎・藤井與助突掛れば、浦上衞門大夫は赤松同勢へ掛入逃延びける。新左衞門先手へ軍使を立て、急ぎ引入れよ逃ぐるは敵に有レ術、追ふは非二武義一と制して、新左衞門居城へ引取る。籠城の軍兵萬死を出で一生を保つて、喜悅の門を開き謠二萬歲樂一。

毛利元就大內義長陶五郎退治の事

弘治元年十月、毛利右馬頭元就は逆臣大內義長・陶五郎隆房が栖籠りたる若山城取圍み責め給ふ節、備中侍大將三村修理亮・石川左衞門尉・二階堂近江守・上野伊豆守・清水備後守・細川兵部、都合一萬餘相隨へ、爲二加勢一石見國へ下着。元就卿・隆元卿掛二御目一候。是迄の下向令二感悅一○乍レ去在國は赤松方・尼子勢・細川・三好の者共手遣の境目に候故難二明置一候。急ぎ被レ致二歸陣一堅固に被二相守一樣にと被レ申候に付、備中の諸士申すは、任レ仰度候得共義興卿以來御厚恩難二芳謝一候。御吊合戰致二御供一逆臣殘黨へ矢一筋射掛度存候。被レ加二先陣一ば可レ爲二大望一候。在國の城々は手配り能申付、無二御覺束一儀無レ之段申候得者、宍戶善左衞門尉合備に被二仰付一、周防長門兩國の內若山城、松崎右田嶽の城、勝山城責、氷上繩手合戰に大內義長陶五郎隆房を討隨へ給ふ節、元就卿備中侍大將へ、此度の軍功無類の儀公儀へ可レ被レ達二上聞一と、銘々へ被レ行二戰功之賞一、二階堂近江守へ被二申渡一は、嫡男新左衞門尉當府可レ爲二在國一候間、豐田郡の內船木村・萩路村・眞良村・佛道寺村爲二飼領一令二扶持一候。向後彌忠節賴入と名馬を給はり令二歸國一候。一家の僕從迄戰功の賞に誇りける。

宇喜多和泉守備中へ働の事

永祿二年九月備前國沼城主浮田和泉守直家は、備中にて毛利元就卿幕下の城主九州へ陣立の窺ニ留守ー備前虎倉城主伊賀左衛門久隆を備中へ働の爲ニ大將ー、竹庄吉川村中津井村近里を犯し掠め、亂取り苅田の働仕る故、爲レ押備中境目藤澤に築レ砦、中島加賀守爲ニ城主ー家臣中島世兵衛・同與助・野山清右衛門・荻野源左衛門・小寺衛門・小倉四兵衛・中村掃部・高橋善七・福光九兵衛百五十騎、從ニ藝州ー爲ニ加勢ー井上源右衛門・兒玉與七郎・轉藤右衛門百騎、都合千三百餘被ニ籠置ー候。伊賀左衛門より河田又左衛門・守田帶刀・伊賀與次兵衛・片山彌左衛門籠置き度々有ニ迫合ー。三村元祐・石川左衛門尉・中島加賀守・野山宮内少輔・鞁田の構を責けれども、片山彌左衛門・河田又左衛門・河原源左衛門堅く守て防戰す。備中勢虎倉城爲ニ斥候ー尾崎の木陰へ行きければ、虎倉勢山の險路森木陰に爲ニ伏勢ー三百騎、峯谷より擧ニ相圖之鬨ー鑓先揃へ突掛る。備中勢眞前に進みたる中島世兵衛・小寺衛門・井上源左衛門・兒玉與七郎討れ、三浦兵庫・小田小太郎手負ひ、雜兵七八十騎計討たれける。中島加賀守・渡部石見守・宍戸善左衛門、千五百餘騎懸合、伊賀方の勢百餘騎討捕りければ、殘兵山の尾の上へ引擧ぐる。伊賀左衛門も會川邊へ出張相戰ひ、城內より追々に突出で、うす谷・かわや谷にて相戰ふ。伊賀が家來片山與七郎・土井惣馬・河原四郎兵衛弓にて數多射落しける。萩坂にて土井惣馬を中島彌兵衛討捕り、首毛利元淸へ差上る。中島加賀守一手、西の尾崎より鞁田城を乘捕り城中へ火を放ちければ、伊賀方の軍勢虎倉城へ迯込みける。從ニ毛利家ー上山兵庫・鳥越左兵衛・根矢與七郎に三百騎指添、爲ニ城番ー被ニ籠置ー近鄉有ニ御仕置ー。

毛利元就雲州へ働の事

＊一品は毛利家の紋章、四目結は尼子氏の紋章、尼子氏は宇多源氏佐々木の出なり故に四目結を用ふ。

永祿三年備中侍大將石川左衛門尉・高橋玄蕃・伊勢左京亮・小田孫兵衛・細川兵部・中島加賀守・雲州赤穴に在城仕る節、小早川隆景は尼子方白鹿城へ働き給ふ節、先陣の兵士白鹿城蘭洞尾崎を請取り、晝夜穴道を掘り仕寄を付け切岸に着く。此城は山高くして峯より大石を落し掛け矢を射掛る事如ニ雨之降一、難レ登嶮山なれども、責むるに勝る無ニ難所一守に越えたる無ニ平易一。此城尋常の術にては難レ登とて、金掘數百人に左右三間の穴道を掘らせける。城内よりも横穴掘つて可ニ働出一と、内外より掘掛け途中にて鑓を合せ、城兵難レ防、中島加賀守先陣にて二の郭を乘取り、城主松田藏人助を生捕る。則陸奥守元就卿へ達しければ、仁義の弓を曳(引)く者は非レ可レ殺とて、松田藏人助一族八十三人、洗合崎より船に乘合せ隱岐國へ被レ送ける。義久白鹿城被ニ攻落一不レ安思ひ、今は以ニ一戰一馬瀉原へ出張り有無の可レ遂ニ合戰 と毛利元就卿へ軍使を立つる。元就卿は、敵來て軍を好に非ニ達(可戰カ)變一と、八幡山星上より人數を繰下し備を定め、左備吉川駿河守・河野兵部少輔・宍戸善左衛門・熊谷伊豆守・兒玉三郎右衛門尉・宇津宮遠江守・楢崎三河守・木原兵部・杉森出羽守、右備小早川左衛門佐・毛利治部大夫・宍戸安藝守・吉見大藏大輔・益田全辨入道・內藤下野守・三村修理亮・石川左衛門尉・中島加賀守・細川兵部都合三萬三千餘騎を三分し、備ニ二十四組一、洗合崎城より押出し馬瀉原を見れば、尼子義久・倫久今日を限りと討出で、左備山中鹿之助・三澤兵部少輔・熊谷兵庫助・村井越中守・三刀屋藏人助・日野孫左衛門・池田宗六郎・同藤兵衛尉・加藤彥四郎、右備龜井新十郎・立原源太兵衛尉・同備前守・本多豐前守・津森宇兵衛尉・秋宅庵助・馬木彥右衛門尉・川添美作守・宇山善四郎・森脇市正、一陣に分て先鋒矢を列レ伍、後陣は乙矢に備へ討出たり。毛利元就卿は鶴翼に備へ、虎韜を開き請て得レ窺ニ其虛隙一可ニ必已(マヽ)一と可レ有折、時も未下刻合戰始まる。累年の遺恨以ニ此一戰一可レ決と、鬮を三度作り鞁具七五三と調合、＊一品の赤旗と、四目結の白旗入亂合ひ、七度迄相戰ひ揉合ける時、尼子方の侍大將馬木彥右衛門・川添美作守三百騎計、小早川の魁楢崎三河守・長大藏左衛門備へ突掛り、隆景先陣三町

*清和之苗裔とあるは誤なるべし尼子氏は宇多源氏なり。

迄引退く時、備中國住人三村修理亮・石川左衛門尉・中島加賀守・清水備後守一手に成、横鑓に突掛り入亂れ相戰ひ追崩し、備中勢首二百六十七討捕り、同所野畔に暫く休み、兵粮を遣ふを見掛け、立原源太兵衞・牛尾信濃守・秋宅庵助一手に成り突掛る。三村・石川・中島・清水相掛り戰ふ。此時隆景の旗本大返して相戰ひ、尼子勢を追崩し散亂仕ける。尼子の勇士山中鹿之助二百騎計相隨へ戰場を不レ退、追來る敵を四度追返し、自分も首五つ計捕り、芝居を不レ去敗軍の身方を集め、八幡山へ靜々引上る。大强の侍大將と稱美しけり。

尼子義久毛利家へ降參の事

大江元就卿は、島根郡洗合崎城へ吉川駿河守・吉見大藏大輔率二一萬五千騎一、伊藤府倉山に在城仕り敵の糧道を斷つ。宍戸安藝守・杉原播磨守は美保關に在城、丹後但馬の船を斷つ。諸城兵粮及二難儀一城守明退き富田城に籠りける。藝州勢近城を持堅めければ、尼子譜代の軍勢落散り、今は可レ遂二防戰一術盡き、山中鹿之助・立原源太兵衞其外老中差集り、如レ此鉾折れ矢種盡き候へば、毛利家へ御降參御坐し衆命を助け、近き愆を免れ遠き謀を廻し有二後戰一は、素懷の旗を御發可レ有と諫めければ、義久兩眼に浮レ涙、毛利の幕下に降り家僕と成て天下の指笑に落ん事可二口惜一、腹を切て*清和之苗裔子孫之面を可レ清と宣へば、山中鹿之助泪を鎧の袖に受け、御思慮義に有り候得共、正を變じて奇と成す事兵家の慣、難に當て詭道を用ふるは覇者の術也。世俗の諺に淋を甞ても遂二本意一よと言へり。義久卿一旦の恥辱を凌ぎ給はゞ、幸盛命の内に義兵を發し當家を興隆可レ仕と申上ければ、義久諫得して、痛敷哉尼子義久は剃髪染衣の姿に成り、天山瑞閑と法名付け、益田玄蕃頭・吉見大藏太夫（輔）陣門へ被レ出、則元就卿へ達しければ、洗合崎へ送り陸奥守有二對面一。慇懃に饗喰、上坐に請二珍膳一献レ盃良久。元就卿は義久平伏の體を見給ひ泪を促し、弓箭取身の慣とは乍レ云、昨日迄山陰道七州の大守、

懸分野痛敷存候。我仁義の弓箭を心掛くる故降敵を不レ殺、剃髪の姿に成給へば、一入慈義深く存候。在國へ下り給へ、一歩の地を可ニ進置一と宣ひ藝州へ被レ送ける。今日は山陰の雲に立別れ、玉粧金鋪の臺を捨て、身を漂泊の旅に寄せ、女姓少人々もうかれ出給ふ哀れさ。北の方硯を乞ひ筆を染め狂歌一首を被レ詠。

行末は郷の川霧せき留て何三好野の道や開けん

と詠み泪を袂に請けて臥し給ふ。義久入道瑞閑大に怒つて、武士は盛者必衰安危興亡の身なれば、不レ限ニ吾獨一、身を捨て名を惜むを道とす。斯る憂目に逢ふ事も、妻や子供の故いやしと筆を取る、

三好川霧閉込る瀬々に來て世を渡らんと名をは流しつ

と被レ詠。天野中務大夫三百餘騎を召連れ路次の警固承り、霜月七日に安藝國吉田郷へ參著仕りければ、饗喰様々にて猿樂能興し、同九日同國長田庄延命寺に被レ移、内藤下野守・桂五郎爲ニ守警一遂馳走一。尼子義久入道も今は身の富樂に心解け、累年の遺恨己が罪に被レ歸ける。大江羽林元就卿山陰道八箇國を討治し、累年雲州在番諸大將軍功の武士粉骨の軍勢へ、饗喰様々の上にて猿樂能興し、戰勞を可レ休と中丸へ御下り、左棧敷吉川駿河守元春・河野兵部少輔・宇津宮遠江守・吉見大藏大輔・益田全辨入道・同玄蕃・大庭加賀・佐波常陸助・福原出羽守・粟屋右京太夫・福岡彦右衛門尉、右棧敷小早川左衛門佐隆景・毛利治部大夫元清・宍戸安藝守・同備前守・上原右衛門太夫・口羽下野守・小笠原彈正少弼・桂左衛門・三村修理亮・石川左衛門尉・中島加賀守・同新左衛門尉・清水備後守・同長左衛門尉・細川兵部・伊勢左京助・小田孫兵衛太刀佩跪き、式三番終て食籠名酒佳肴種々珍菓を給つて、島目三千疋猿樂に給はり、感能耳目を淸うす。能七番終て饗喰様々の上にて、軍功の賞を被レ行數々の名物を被レ下。中島加賀守へ此度山陰道靜謐速に成功を立つる事、各累年無ニ二心一尼子方諸城被レ押。軍功無ニ比類一故也。嫡男新左衛門當國可ニ殘置一、爲ニ飼領一仁多郡竹崎村・坂根村・原田村加恩に被レ下候。

*兄弟の内なり共の意か

向後彌忠義を心懸可レ給と從二元就卿一感狀を中島加賀守に被レ下。

備中侍大將備前龍口城へ籠城の事

永祿四年五月、備前國御野郡平瀨村の船山砦へ、備中國服部鄕主禰屋七郎兵衛一手の内、須々木豐前・鳥越若狹・佐野因幡を爲二番大將一被二籠置一。備前國主浦上宗景は沼城へ出張、浮田が一手最庄治部・有松治郎左衛門・靑江次右衛門・宍甘四郎左衛門・中島平藏加勢に被レ籠、近日此要害へ取掛申風聞御座候。加勢を被レ下候樣にと申越候趣、三村修理亮・石川左衛門尉へ申達しければ、宗景『家老の者共、不禮の言下に手を束ね罷有る事心外也。此度有無の可レ遂二合戰一』と、備中一身中へ有二廻文一。然る處に最庄治部申越すは、年來背二本意一候段御赦免被レ爲レ成候はゞ、自今御身方可レ仕候間、近日御人數被レ下候はゞ、殘る物頭共を當城へ楯出し、御人數を正八幡丸へ可二引入一と中島加賀守へ密通仕る。返答に誓紙調べ、*兄弟仲成共人質に指越候はゞ可二取持一と申遣候得ば、弟坊主魔谷院に誓紙を持せ爲二人質一差越候故、右の趣石川久智へ遂二內談一、人質をば酒津城主高橋右馬允に被二預置一、龍口城へ爲二加勢一最庄治部へ取懸る日時相圖を定遣し、加勢大將禰屋與七郎・藥師寺彌五郎百五十騎召連れ籠城仕、最庄治部へ令二合力一候。矢津要害寢木屋へ備前勢を楯出し、備中勢八幡を相守る。最庄治部禰屋與七郎へ申は、御身方に隨身仕る上は、近鄉御手に入候樣に心懸候。國留・澤田の要害へ御働被レ成候はゞ、御案內可レ仕由申候へば、志賴母敷候。當城を堅固に相抱、此後近鄉へ働の案內可二賴入一由申、當所嶮岨の山城に脫道可レ有レ之。案內あれと申節、高橋右馬允に預置く人質魔谷院、缺落仕るとの飛脚從二備中一到來の趣、身方の物頭へ密通仕、梶屋八兵衛に術を含め城外巡見に出る。弱手は川瀧岩石峙ち、正八幡丸巖石峨々として鳥の通も絕えたり。不レ能レ防レ勢 南方に大山橫たへ、後詰の敵勢峯に備へたり。四の御神要害に宍甘太郎右衛門・角南隼人楯籠る。龍口西の出崎丸にて、梶屋八兵

＊生石中務重復本のまゝ

衞に手指候へば、最庄と引組川瀧へ落入、郎黨金萬彌助禰屋に切て懸る。與七郎大太刀の達者なれば、彌助を川へ切落し持口の丸へ立歸、所々矢倉役所に手配仕る。其後最庄丸へ使を立て、治部殿金萬彌助自分の郎黨梶屋八兵衞は城外搦手へ見廻り、巖石訛落給ふ見届候へと申遣しければ、治部が一手有松次郎左衞門・金萬又次郎・祇園忠左衞門・同與九郎・菁江次右衞門・岡富源左衞門・同長光尋來る内に、一二の丸へ備中勢手賦仕、最庄が一手へ申は、治部殿仕合、兩家の郎黨不レ及二是非一働也。殘る旁藝州方へ無二別心一可レ被レ抽二忠儀一由ハ、誓紙を被二調給一別儀有間敷と申聞、船山城守鈴木豐前・鳥越若狹・佐野因幡より、龍口麓へ須々木四郎兵衞其外郎黨を舟に乘せ、城の麓へ指下し死骸を取上げ見れば、最庄治部・金萬彌助命不レ絕を指殺し、梶屋八兵衞・牧野次郎兵衞を備中へ返し、暫時の計略にて龍口城主を討捕こと近國に無レ隱。浦上宗景は鬱憤不レ淺、重て備前美作軍勢六千餘を相隨へ、五月二日に龍口近邊へ押寄せ、峯に構二陣城一對陣す。城兵矢倉狹間に防兵を配り雁行の陣を用て、備前勢に矢倉要害を守らせ、龍口へは備中軍兵を手配仕り相守る。敵勢は湯廻村四之御神村谷合より、二騎三騎宛忍寄り矢を放ち高名す。城中より石を刎落しければ、敵方に死亡手負日々あれども城内には無二越度も一。去れ共敵方より遠巻仕り兵粮の絕二通路一、今十日の下行あれば備中へ加勢を乞ひける。後詰爲二大將一石川左衞門尉・中島加賀守・上野近江守・高橋右馬允・清水備後守・生石中務・日幡六郎兵衞・＊生石中務四千餘、御野郡妙現宮山迄押著、芦高川を打渡り腸田村へ馳上る。石川左衞門尉・上野近江守・清水備後守備五千餘は祇園村へ馳上る。船山城守鳥越若狹・佐野因幡二百餘中原河原を打渡り、段之原南の尾崎へ取上る。石川左衞門尉・中島加賀守、田道を四之御神村へ押著、山の麓より二備龍口城守禰屋與七郎三百餘騎一手に成り、矢津谷へ出張鬨を揚る。石川久智・中島輝行備同音に鬨を合せ、要害へ責懸る。岡平内・同權右衞門・宍甘四郎左衞門・同太郎兵衞要害より突て出、坂中にて迫合敵を數多討捕り身方も討れ、追ひつ返しつ相戰ふ節、山の岡より花房彌左

衞門・岡平內横鑓に突懸る。備中勢危き處に、爾屋與七郎・佐野因幡峯より見及、眞下りに突懸り、花房彌左衞門跡(後)備を突崩し、數多討取り山峯へ駈上る處を、岡平內・同權右衞門踏留り相戰ふ節、爾屋が二男同彥右衞門・同孫市郎・鳥越左兵衞三十騎計要害へ乘込、木屋に火を付くる故、岡平內・同權右衞門・宍甘四郎左衞門・同太郎兵衞三掉山へ引退き、海邊へ落行く。石川久智・高橋行友・中島輝行は擧ニ勝鬨一銘々の旗を燒跡に押立、身方の軍勢を集むる。爾屋與七郎龍口城へ引入を、岡平內・宍甘太郎兵衞・角南隼人慕ひ付入にす。爾屋弱々と應答ければ、敵競懸る時に與七郎小返して相戰ふ。岡將監・平井庄七・中吉與兵次・宍甘與左衞門・青江次右衞門五十騎計討捕、其身も薄手を負ひ、龍口城へ引籠り、城內の普請して兵粮を取籠め、搦共堅く申付備中へ歸陣仕る。龍口籠城の軍勢萬死を出て一生を保ち、喜悅の門を開きける。此時從ニ藝州一中島加賀守へ譽感の御書被ㇾ下ける。

備前野田大炊助備中侍大將へ計略の事

備前國御野郡野田城守野田大炊助は、從ニ浦上遠江守一蒙ㇾ疑在國難ㇾ叶由にて、備中國服部鄕へ退來り爾屋七郎兵衞尉を賴、當國に在國を被ㇾ免候はゞ、備前へ御働の節加ニ御先陣一忠節可ㇾ仕由申に付、石川左衞門尉へ相達候へば、上野近江守に被ㇾ預山田村に住所有ㇾ之。備前國津高郡賀茂虎倉城主伊賀左衞門久隆老中河原六郎右衞門は、野山宮內少輔へ申通じけるは、伊賀左衞門小人の讒口を用ひ仁義暗く、某に欵を掛候。備中に在國相叶候樣に賴入候由申通に付、石川左衞門尉へ相達候へば、對ニ當家一疎意無ㇾ之趣誓紙を申付、下道郡秦村に住所被ㇾ免、川面三郎左衞門に被ニ預置一。武略の心懸深き剛者也。

備前龍口城へ備中侍大將加勢附討死の事

永祿七年七月十二日、備中國加陽郡服部郷主禰屋七郎兵衛嫡男與七郎は、藥師寺彌五郎・七屋四郎左衛門・鳥越若狹・生石藤四郎千二百餘を相隨へ、備前龍口城相守る節、近郷遠里へ相働き、麥を薙ぎ植田を覆しければ、澤田城守岡將監・中村次郎太夫・寺尾久五も龍口へ相隨ひ、近城へ相働候節者先陣を承る。浦上宗景爲ニ下知一、浮田和泉守直家・同與太郎・明石源三郎・岡平内・長船又右衛門・花房又左衛門・高島市正・中吉與三兵衛・戸川平右衛門・江原兵庫・備前美作の軍勢以ニ一萬餘騎一、馬屋村・牟佐村・宍甘村・土田村・尾町村・八幡村・河原村取卷き、龍口城内へ兵粮の絶ニ通路一四之御神村・湯廻村山より攻寄する。龍口城三方嶮岨にして、段の原より矢津谷の峠に構レ砦、龍口より相守る。敵急ぎ攻むるの術絶えけれども、城内の兵粮今十日を限りければ、備中へ加勢を乞ふ。三村修理進・石川左衛門尉・上野近江守・穗田庄太夫・中島加賀守・小田小太郎・細川兵部大夫・野山宮内少輔・高橋玄蕃・伊勢兵庫、同國高松城へ會合し、軍勢を配分して勝負の損益を評定す。一手は三村修理進・野山宮内少輔・赤木藏人・石蟹(イシガ)衛門七千餘を相隨へ、大井河原にて馬揃仕り、鳴谷川より菅野村・横井村・東原村より笠井谷へ出張り、一手は石川左衛門尉・上野近江守・中島加賀守・清水備後守・上山兵庫・生石中務・日幡六郎兵衛八千餘を相隨へ、辛川村より今岡村・山崎村・猶津村・高部村河原にて、備を定め諸方の相圖を待ち、一手は穗田庄太夫・細川兵部大輔・伊勢兵庫・小田孫兵衛・村上彈正・笠岡掃部七千餘を相隨へ、花尻村・尾上村・白石村・今村より春日宮社内に備を立て、*芦高川を打渡る兵もあり。小船に打乘り三掉山へ取上り、身方の相圖を待居ける。石川左衛門尉手より爲ニ斥候一江口源助・友野彌右衛門申越は、敵方に無レ術、川に水も無レ之候間、御急ぎ候へと有ニ軍使一。中島加賀守備の斥候湯淺新藏・國府惣右衛門申は、津島七衛門要害に多勢籠城、林の木陰に伏兵も有レ之と見及候。夜明備を繰出し可レ然由申時、三方の身方相圖の狼烟(ノロシ)を上る。福輪寺要害に籠め置ける野田大炊助・生石中務は、身方の働に不レ構無ニ油斷一相押へと申付、先陣禰屋七郎兵衛・土師平十郎・鈴木孫右衛門・妙見宮

*妙善寺合戰記芦高川を井川に作る孰か是なるを知らず。又此川今の朝日川を指せること疑なし。

*三村修理進家とあるは修理亮元親の誤なり。

*穂田庄大夫は元親の弟にして、妙善寺合戦記庄元祐と同人なり。

山へ押登り、一手の銘々御野村・北方村・中村より川を渡さんと待居ける。中島加賀守・上野近江守・清水備後守は、富山岡山兩城を氣遣ひ、井福村日燒鼻を押行く節、三村修理進家親一手は平瀨村に出張、穂田庄太夫一手は芦高川を打渡り、瓶井山三掉山の峰にて擧ニ鞍具ニ、石川左衞門尉旗本妙善寺砦を行過ぐる節、押への大將野田大炊助・津島七右衞門・山崎孫之丞兵不レ殘一手に成、石川久智旗本へ切懸り相戰、福島羽武之山尾崎へ敵兵立並び弓射懸る。笹瀨山城兵今田右門(本ノママ)・同清次郎・金光文左衞門・横井牛之助、石川久智の跡(後)備へ突懸り前後の敵と相戰ふ節、石川久智妻手野田大炊助乘寄せ脇坪を突通す。久智も拔合せ野田が小鬢を切下る時、中島新左衞門野田を鑓付、湯淺新藏首を取る。中島加賀守より彌屋七郎兵衞方へ軍使を立、福輪寺押への身方に謀在の久智を討捕候間、跡(後)備へ御心被レ添候へと軍使あれば、得ニ其意ニ一手を繰引にする。祇園忠兵衞・靑江庄左衞門・津島孫兵衞・金萬又次郎・有松次郎左衞門、山の尾崎松の木陰に立並射ける。備中勢的に成て備四度路に成騷動す。中島新左衞門相備は此時也、我が再拜(ママ)に相働候へと、殘兵を前後に立相戰ひ、備前勢を八十餘討捕る。彌屋七郎兵衞は、敵陣より雨の降るごとく射けれども繰引にす。敵の射懸る矢に當り、數人被レ討。七郎兵衞内甲被ニ射通ニ馬より落、相果る。弟彌屋孫市郎一手を相隨へ、今田右門備へ突懸り四十六人討捕る。備前勢は羽武山の峯の要害へ引籠る。中島新左衞門父子の備一手にして横鑓に突懸り、祇園十兵衞・津島孫兵衞・靑江庄左衞門を初め、十餘討捕り相引にす。中島輝行は三十騎計相隨へ、河邊村堤にて休足し兵粮を遣ふ時、長船又左衞門・糠田與次兵衞・弓削平兵衞・中吉與兵衞進み來り相戰、敵二百騎計に被ニ取籠ニ數刻相戰、加賀守は敵二人討捕り、中吉與兵衞と駈合引組、老武者なれば被レ討時、郎黨中島與助・同彦十郎・近藤新九郎突懸り、中吉與兵衞を石井新右衞門討留、輝行の首を取返し、隨兵も枕を並べ討死す。嫡男中島新左衞門三十騎計相隨、津島村山の岨に身方を集居ける處に、父加賀守被レ討ける由告來る。同所にて討死せんと、今田右門河本對馬備へ駈込、數刻相

戰ひ、首十三討取り身方を見れば殘兵十四五騎被レ討、殘る郎黨を相隨へ又敵陣へ駈込む節、國府與三右衞門・吉招重右衞門馬の口を控へ、後戰の種に成給へと、是非猶津村へ引退き、山の峰に龜甲に二引兩の旗を押立、一日一夜隨兵を集むる。淸水六郎兵衞も所々より馳來り二百騎計に成り、中島加賀守死骸を取持せ備中へ引退き、加陽郡刑部鄉小寺村於二報恩寺一佛事作善を執行、一堆靑塚の主となす。法名は相談院前賀州大守見外宗悟大居士。此時藝州より御者使到來、中島新左衞門戰功を被レ擧數箇所恩賞を給り、號二中島大炊助元行一。

再龍口城へ加勢小田小太郎討死の事

龍口城後詰石川久智・中島輝行・禰屋輝秀は、野田大炊助術に乘り討死、雜兵七千餘被レ討。彼の戰場を浮田直家千騎谷と名付る。禰屋與七郎・藥師寺彌五郎相圖相違して、敵の軍勢二三の丸迄責入る。城內より矢を射出し石を刎落し遂二防戰一敵方に手負死亡多けれども城兵に無二越度一。去れども城兵の兵粮少く、今二日の下行あれば備前へ密使を越し、龍口を取卷き敵の備へ切懸り給はゞ、城中よりも同事に突て出相戰ふ中に、兵粮を取込か城に火を懸切退か可レ仕由告來る。八月九日、三村修理進元親・野山宮內少輔・赤木藏人一手は、穗田庄太夫・細川兵部勝久・伊勢兵庫・小田小太郎・高橋右馬允一手に成り、瓶井山澤田より忍寄る。一手は中原河原を押渡り、九日丑の刻に狼煙を上る。城內より相圖合せ、段の原峠を窺見る處に、岡平內・花房彌左衞門・弓削平兵衞・宍甘太郎兵衞・陣屋に火を付切て入る。諸陣寢耳に是を聞驚き、物具よ太刀よ馬よと騷動す。城兵は駈入駈拔交り合、彼處に顯れ是處に隱れ、火を散して戰ける。折節暗き夜なれば、敵身方分兼たり。此時三村家親・野山宮內少輔、脇田村へ横鑓に突懸る。細川兵部・小田小太郎は、四之御神村の敵に切て懸り相戰ひ、備中勢三方同事に突懸れば、宍甘村海面村へ備中勢は引退く。小田小太郎は角南隼人に內甲を被レ突ける時、

弓削太郎右衛門首を捕る。暗き夜なれば、小田討れるも身方は不レ知。敵兵飽浦三郎兵衛・和氣次郎兵衛・弓削太郎右衛門・宇柿太郎兵衛其外百二十餘備中方へ討捕らる。此騷動に龍口城內へ兵粮を取込、上山兵庫・日幡八郎左衛門加勢に籠め、船山要害へ須々木四郎兵衛・鳥越若狹・佐野因幡を籠置き、殘兵は備中の在所々々へ歸家す。

宇喜多和泉守備中より働の侍死骸を送る事

同十一日浮田(宇喜)和泉守より、備中國幸山城主石川源左衛門久式へ有二使僧一。今度は國人不意に及二合戰一隔二胡(呉)越一をなし非二本意一候。龍口城邊福輪寺にて討死之死骸送進候。雜兵之死骸福輪寺山に葬禮仕由を申越す。石川久式、御懇情の段令二感入一由有二返答一。脇田村にて討死の小田太郎死骸は、郎黨名越修理・有岡右京來り、福輪寺山の峰に葬禮を仕、墓所を築き一堆の印塔立置、討死の軍兵四百二十九人、同所の峰に三つの塚に取收め、福輪寺の首塚と申習はし候。戰場は津島村千騎谷と、浮田直家より申傳候。浦上宗景大悅の由、備中の諸士備前の郡主へ絕二通路一ければ、討死の子孫二月七月八月彼岸に、以二代僧一墓所へ火を燈し水を回向す。浮田和泉守毛利家隨二幕下一給ひし後、直家より鄉民に申付墓所に石塔を立、七月十三四日に脇田村湯廻村四之御神村山の峰々に數萬の火を燈し、討死の子孫士農工商舊功の恩を思出し、酒菓を備へ供養す。一戰の及に滅し主從、成佛得脫の蓮臺に至らざらんや、難レ有事共也。浮田直家被レ申は、敵と成り身方と成るも前因後果の報也。仇も善にて報ずるは義士の道と宣ふ。古士の曰、直家は計略の得レ謀、毛利家の威を借り、家を可レ發仁とさゝやきける。

中國兵亂記一終

中國兵亂記 二

備前國金川城宇喜多直家より攻事

元龜元年、備中國窪屋郡幸山城主石川源左衞門尉・同國松山城主三村修理進・同國刑部郷經山城主中島大炊助へ宇柿市郎兵衞を差越し、浦上遠江守宗景と年來境を爭候所に、浮田和泉守は某緣者を爲二謀之使一近月可二働來一用意に候。自今は藝州の隨二幕下一度候。自然の時は御加勢被レ成樣に御取持賴入候。則爲二人質一宇柿市郎兵衞を貴所に被二留置一候樣に通達せらる。浦上遠江守右の趣を聞傳へ、離別の遺恨深重なり。宗景は浮田直家に仰せて松田一類退治せん事を謀る。妹聟虎倉城主伊賀左衞門へ密通仕り、同年七月四日夜金川城南北へ押寄せ、擧レ関峯谷合より攻上る。城中に有二內通之者一、伊賀方の軍勢を二の郭道林寺丸へ引入れ、御堂丸へも攻入る。暗き夜なれば城內の騷動無レ限。浮田も矢原村に本陣(堀イ)を備へ、居城近き山の峯々谷合河原より攻寄る。松田家臣横井又右衞門・檜村修理・同長左衞門・宇柿惣右衞門・同次郎左衞門・同平次郎橋本馬之助・同牛之助・千原善左右衞門・高田作右衞門・橋本久右衞門、本丸より二丸坂眞前に進み相戰ひ、敵を城外へ追出し、四方の持口を定め手配して持堅め、四日五日兩日晝夜に八度鑓を合せ相戰ひけれ共、五十騎に不レ足小勢にて、三千餘の大軍と相戰ひ數多被レ討ける。横井又右衞門爲二先手一左近將監は二十騎計相隨へ、伊賀左衞門一備を下田村迄追拂ひける時、敵の伏兵林の木陰より松田左近を鐵炮にて打落す。片山與七郎首を取る。横井も敵を打捕り、其後敵の備へ駈込み切死に仕りける。松田嫡男孫次郎・次男左門へ猶(檜)村修理申上るは、宇柿惣右衞門・同次郎左衞門を召連れ備中へ落給へ

*榎木は植木の誤。

と諫めければ、一類滅亡の場を不レ可レ去、此場にて切腹可レ申の所に敵數百人突掛る。孫次郎は敵二人切捨討死仕ける。猶村左門へ申すは、是非御立退後戰の種に成給はゞ、御先祖之旁可二悦給一と申し、是非村境へ御供仕り備中山上村へ立退き、中島大炊助へ可二頼入一と軍使を立れば、毛利治部大輔元清へ得二內意一、同國齋田の城下へ引込み、從二藝州家一御扶持を被レ下、身方の一將にも可レ作仁かと度々御尋の由。天正十年織田信長卿より同國高松城御攻被レ成時、松田左門五十騎の大將に御取立、同所冠山砦守禰屋七郎兵衞一手に被二仰付一、籠城仕り遂二忠戰一候。松田諸人へ申すは、我金川城中立退時、藝州家以二御情一一將に御取立不レ淺儀、御譜代の旁同意に勵二忠戰一んと語りけるは、隆景卿正兵の弓矢を取給ふ故と諸人感音仕ける。

尼子晴久備中へ働き所々城を攻事

元龜二年二月、備中國侍大將九州へ陣立の窺二留主一、雲州尼子伊豫守晴久爲二下知一、尼子吏部・同刑部・大賀駿河守爲二大將一六千餘騎作州へ相働き、草苅黒岩等を攻隨へ備中へ發向。庄伊豆守高資・同兵部大夫・*槇木下總守・津々加賀守尼子方へ降參し、爲二案內者一加二先陣一、國中の侍大將留主の在所在所を攻隨へ、淺口郡杉山城主細川下野守へ使者を立申は、尼子家の幕下筋に無レ紛、屬二當家一被レ致二忠節一以二武勇一備後國をも被二斬取一候へと申越す。細川下野守返答に、藝州家の御懇意不レ淺に付、今更違變を不レ存御身方難レ成候。殊に當國の侍大將九州へ出陣、我等五三人へ備中被二預置一候と申切り、使者の首を刎ね、則時に百五十騎雜兵二千餘を相隨へ、片島へ討出で要害を構レ後遂二防戰一、津々加賀守・福井孫左衞門をも討捕れども、雲州勢七千餘の大軍と、身方二百騎に不レ足小勢にて懸負、殘兵は同國山手西郡村幸山城へ蓄みける。雲州勢武威廣大に成り、尼子譜代の侍大將に降參の備中侍を差添へ、所々の要害を攻隨へ、同國酒津村高橋が城取卷ける。城主高橋玄蕃は九州へ出陣、

西郡村幸山城へ荅みける。

弟高橋右馬允・庄九郎・家臣石井抔を相隨へ、三十騎にて楯籠候へども防戰不ㇾ相叶ㇾ、酒津城明去り

尼子勢石川左衛門尉留主幸山城を攻事

雲州の侍大將尼子吏部・同刑部大夫・大賀駿河守を爲ㇾ先陣ㇾ、庄伊豆守・槇木下總守一萬餘山手村幸山城へ押寄せ軍使を立て、當城は尼子幕下也。如ㇾ先年ㇾ被ㇾ遂ㇾ忠戰ㇾば、領地相違無ㇾ之と被ㇾ申越ㇾ候。城主石川左衛門尉は九州立花へ出陣、留主也。城代禰屋七郎兵衛・友野石見・日幡六郎兵衛・生石中務・上山兵庫・拼和助右衛門也。日幡六郎兵衛・拼和和泉・生石中務は、一手百五十騎に農民五百隨身、福山古城へ出張、淺原峠を切塞ぎ相守り、友野石見・鳥越左兵衛・舟木藤左衛門は、一手百五十騎、農民四百餘隨身、幸山城西へ流るゝ谷を前に當て、輕部村より取上る敵を相押ゆる。雲州勢は淺原峠より攻登り、二夜三日に七度攻戰ふ。尼子方の軍兵百五十騎討捕り、身方も三十七人討るゝ。禰屋七郎兵衛は三ヶ所手負申に付、庄兵部大夫へ申達するは、城主久式は九州へ陣立、某爲ㇾ城代ㇾ罷在る故遂ㇾ一戰ㇾ候。弓矢の禮義是迄に候。毛利家の家老奢多く、對ㇾ當家ㇾ不禮に候。石川久式も貴家幕下に隨はんと內存に候。我々領知無ㇾ相違ㇾ被ㇾ下ば、御身方に罷成可ㇾ遂ㇾ忠戰ㇾと申達候へば、尼子方致ㇾ納得ㇾ誓紙を双方へ取遣す。籠城の諸人不慮の命を助かり喜悅の門を開き、其後は幸山の西の谷川・北の小山に木屋を作り、番兵替々居相守る。

尼子勢經山城主中島元行攻事幷尼子勢敗軍之事

雲州の大將尼子吏部・大賀駿河守・庄伊豆守・槇木下總守は一萬餘騎を相隨へ、賀陽郡刑部鄉經山城主中島大炊助へ使者を立て、當城は尼子幕下に候。如ㇾ先年ㇾ隨ㇾ身方ㇾば、備中は不ㇾ及ㇾ申備前迄も

*手を束ねこと口惜く候

被二斬取一候へと申越す。中島元行は從類を召集め遂二軍談一。各申は雲州の大軍と遂二防戰一給ふとも、此小勢にては不レ可レ有二勝利一。先尼子方に可レ有二隨身一と御返答可レ宜由を申す。元行申すは、先祖二階堂爲憲より我等迄、忠孝を心懸道に違ふ事なし。勝負は大將の依二時之運一事也。今又大軍に恐れ尼子方へ某降參仕ると、世上の人口耻辱也。死を善道に守り可レ遂二防戰一候。我と枕を可レ並銘々は籠城候へ、存レ命身を立て世を渡らんと存ずる方は立退候へと申切り、尼子刑部大賀駿河守へ返答に、被二仰越一趣承届候。當城は從二大内義隆●毛利元就一數年隨二身方一候故、預二恩賞一候。剩へ毛利の家老驕り多く、不禮の言下に手束*口惜く候。尼子家被レ加二御幕下一候はゞ可レ勵二忠功一と、上野中務大夫へ遂二密通一置候。此度當城へ御手掛有二御延引一、進二人質一加二先陣一可レ致二忠節一と、返答を軍使へ申歸す。大賀駿河守聞届け軍勢引退ける。以レ謀暫時の難儀を遁る。扨九州小早川隆景へ飛脚を遣り、雲州勢當國へ相働き、國中尼子方に相隨ひ、當城へ押寄候へども、以二籌策一敵を退け要害の普譜仕調候。出來の節可レ遂二防戰一と一心相定候處に、尼子勢一萬餘の大軍、當城は二百騎にも不レ足小勢故不レ可レ有二勝利一。當國勢歸陣有て可レ被レ遂二後詰一候。私切腹仕候はゞ、備中の者尼子方の支配に可レ成候趣注進申遣し、在所の要害普譜を調ふ。刑部郷經山城は、三方の谷深く如レ爲レ立二屏風一巖石窟にて、道一筋に二曲の難所に大木を切横たへ置候へば不レ及二防兵一、窟蛇穴毘沙門堂の地續き寺屋鋪に伏レ兵、爲二大將一頓宮次郎左衞門●中島與兵衞●同孫右衞門●平田與三兵衞●近藤與九郎●鷲見九郎次郎●白賀平太夫、弓五十農民二百餘籠置き、鬼が城構に伏レ兵、爲二大將一阿部左衞門次郎●中島彌兵衞●國府與五郎●間野德兵衞●鷲見五兵衞弓五十農民二百籠置き、經山城へ敵攻近かば、城内の貝に隨ひ、敵の横合より突掛り候へと合圖を定置き、經山林間に紙旗數百押立、偶人數百立並べ城を飾り、中島右京●荒木新兵衞●小川八左衞門●林三五郎●平田利右衞門●石井新兵衞●大森声郎兵衞●堀新五郎●和田仁右衞門、雜兵三百騎にて楯籠り、寺屋鋪へ北の出崎より通路を拵へ、升形に番兵替々相守り、片山より

妙現宮山續き掘切り構二升形一、射手五十人、中島刑部・同與助・同四郎左衛門・萩野新藏・龜山三右衛門田邊三平・秋山善藏・三田六藏・水子市右衛門・吉留又兵衛・守安源藏・土師平藏・垪和助六・池上與兵衛・佐野五右衛門三十騎農民三百籠め置き、持口の壁裏を守り、木陰に偽人數多立並べ、近所の竹木を切拂ひ、敵攻來るを見下し手配を下知す。小寺村要害南北へ三町、東西へ四町、四方二重の水堀に水滿々たり。二の曲輪に數塹を作り、三方の矢倉門道橋を引落し、道筋に落穴を掘り其上を平にし、印を立置き身方の心得にす。道筋に蒺藜を播き、堀の內へは枳殻を切り入れ浮し、亂杭と仕り、三方の門を閉し壁書を張付置き、籠城の者出入を改め、中島大炊助は、家臣同名九右衛門・同助右衛門・湯淺九郎次郎・頓宮彌助・河原四郎右衛門・庄野三右衛門・堀又兵衛・中島彥十郎・石井新右衛門に、農民三百指添へ、城內矢倉狹間持口を定め相守り、一類の足弱共經山城へ取籠置く。國中の親類一身の城主へ以二密使一申觸るは、對二毛利家一旗を押立て遂二防戰一候間、急き後詰あれと廻文す。四月十八日吉日なれば、龜甲の內に二引兩の赤旗押立、同紋の赤幕張廻し、惣狹間に牛の革の釣楯仕相守る。此由庄伊豆守・槇木下總守より尼子刑部大夫・大賀駿河守へ有二注進一は、中島大炊助背二當家一國中の小城主共誘引居城に楯籠候間、討捕り身方の見懲に可レ仕と、尼子刑部・同吏部・大賀駿河守は、一萬餘を隨へ陣二手に成り、南門へ押寄せ弓を射込、鬨を擧げ乘取らんとす。城中よりは鬨をも不レ合れば、城內に人はなきぞ乘取れと、惣攻に仕、城門へ敵兵押込め、中島大炊助は、時分は能きぞ突て出よと下知す。正騎百七十騎前後に隨へ懸出る時、馬の尾に松明を結付け五十餘敵陣へ追掛れば、敵備騷動無レ限節、鬨を擧げ雜兵二千三百餘突て出れば、敵兵驚き所々の落穴へ落入騷ぎける節、清水備後守千百餘隨へ、總社宮より尼子勢の後へ突て掛れば、雲州勢前後の敵に取卷かれ百二十餘討死す。殘兵は三輪山輕部村の要害へ取籠る。城兵も三十六人討る。其後可二攻寄一無レ術、庄兵部大輔・槇木下總守・津々加賀守先陣にて深入し、城兵喰留難二引取一、井山村へ立退き宍粟村古城へ引籠る。

幸山城代禰屋七郎兵衛、友野石見と鍋坂迄出張、尼子方押の爲め數日對陣す。此時、大賀駿河守・尼子式部大輔は、經山城を取卷ける。經山城主中島九右衛門は坂口へ出張遂ニ防戰ニ中島加賀守後室は着籠の上に羽織を着、小寺片山の要害を氣遣ひ、晝夜廻る時は太刀長刀を持ち、同事拵の女中二十計召連れ、大炊助居城を相守る時は母儀片山構を守り、大炊助片山へ廻る時は母儀居城を守る。人の夢を結ぶ時は飯と酒を持せ役所役所へ配り、大炊助若年に候間賴入由陣所へ申斷り、籠城堅固也。雲州勢は遠卷にして兵粮攻にせんと告來る。一身の城々へ元行申通は、如レ此敵を近里に請け及ニ對陣ニ事、智勇武備の不レ足所也。此雨風を便に一夜討仕、敵方の甲乙をも見、味方の通路を開度候。有ニ加勢ニと申ければ何れも同心なり。中島大炊助、居城に番士を堅く申付、一手の侍五十騎は清水田兵衛を將とし、五十騎は禰屋孫市郎を將として、二手總社大明神の馬場へ進來り、夜討の袖驗合言葉を定め、功者を十八に三人づゝ頭として輕部村二ヶ所の要害へ忍寄せ、尼子式部・大賀駿河守・庄右京進、陣屋の木戸を引破り相圖を待つ。中島大炊助は、從兵百三十歩立にて、尼子刑部・庄伊豆守・津々加賀守陣屋へ忍入り、小屋に火を付け切て廻る。城兵寢耳に是を聞き、馬よ鎧よと騷動しける時、所々にて凱歌を擧げ身方へ下知するは、可レ死所は爰成ぞとて前に敵有ともせず討て掛る。元行制して、我に百倍の敵しかも堅陣へ駈入、十に一も利を可レ得か。我が下知を守り候へ手段有りと云ひて、餌兵引レ敵備を心得、弱々と引取を敵追來る時、小谷村の谷合より清水田兵衛禰屋孫市郎敵の跡備へ突掛り相戰ふ。中島元行大返して數刻相戰、敵の物頭若林・隅野其外數多討捕ける。彌々元行利に乘り遂レ北は只今ぞや、勇み掛れと下知をなす。弟中島右京・甥阿部左衛門次郎、各浮斬の功を爭ひ、手々に首を提げ、鐙に血の滴ぬ者はなし。中島元行は、多兵に返され不覺取るなと下知を仕ける。尼子方の軍勢鍋坂より湛井川へ雪積落ち死者數を不レ知。長蛇橫備心得則勝鬨を擧ぐ。清水・禰屋兩手へ首百七十六討捕り、中島元行は敵二百餘討捕る。身方を集め前に立て、中島右京・同左兵衛、殿して居城

へ引取る。此時尼子方の首三百七十六討捕る。雲州勢は同國富田城へ引退候時、從二藝州一毛利元清●宍戸備前守備中へ爲二加勢一着陣、猿掛へ入城、從二毛利輝元卿一中島大炊助へ被二申越一、此度雲州の大軍居城へ取掛り候節數日遂二防戰一、尼子大將分の者數多討捕り、首三百七十六到來、日記令二披見一忠節無二比類一候。爲二忠賞一庄伊豆●植木下總跡知令二扶持一候と、隆景卿より譽感の御書被レ下。

備前虎倉城主伊賀左衞門久隆を宇喜多直家攻事

元龜三年七月、備前虎倉城主伊賀左衞門久隆は、毛利家幕下に可レ成内通にて、家臣河原六郎右衞門を勘當仕ると世間へ申成し、備中加陽郡主中島大炊助城下へ來る。毛利元清●石川左衞門尉へ遂二内訴一候へば、人質を取堅め下道郡秦村荒平城主河西三郎左右衞門に被二預置一候。好事不レ出レ門、惡事千里を行とやらん。浮田直家聞レ之。伊賀與三郎、沼城に勤仕有を可二討果一支度と推量仕り、沼城を馳落仕り、裸馬にて津高郡虎倉へ立退く。直家より爲二討手一浮田善八郎親見(新カ)伊賀追掛く。與三郎は虎倉城へ馳込み、城門を閉し番士を付る。親久隆は重病にて琴の緒の絶え涙痕止めざれど、防戰の用意仕り、居城へ兵粮を取込籠城仕り持口を定め相守り、備中へ加勢を乞ひ小早川隆景へ遂二注進一、當家へ與する幕下急難を不二救給一ば、後日當家へ隨身の身方不レ可レ有と、不レ移二時日一御分國へ軍勢有二催促一。小早川左衞門佐隆景●毛利治部大夫元清●宍戸備前守一萬餘騎にて出陣、小早川隆景は宮路山へ入城、毛利元清は冠山へ入城、宍戸備前守は信倉山に在陣、清水備後は鎌倉山に在陣、中島大炊助は茶臼山砦に在陣。浮田直家も一萬餘騎隨陣にて十二本木迄出張。直家旗本より戸川平右衞門●花房又左衞門諸手へ迫合を仕掛け、軍勢手配、手に入たる儀と譽めけり。伊賀與三郎は虎倉城門押開き、勝尾山日王寺へ出張隆景卿へ申上るは、年來浮田和泉守は私家を滅亡させんと常々心掛候へども、親久隆老功故無二違變一虎倉に在城仕候。以二御威光一如レ此に自由仕儀、生々世々難レ有事

※鹿花寺は鹿苑寺の誤金閣寺のことなり。

に候。御國境にても御座候間、備中國高田村忍城を御攻取被レ爲レ成候はゞ、浮田勢は私以二一備一相押可レ申由言上仕る。隆景卿の仰に、此度は御歸陣被レ成、重て御出陣の節、忍、金川、浮田持の城々御仕置可レ被二仰付一由にて、藝州衆歸陣被二仰付一候。然る處に忍城守鈴木孫右衛門を、浮田直家爲二下知一備前國兒島へ所替申付、忍城へは浮田譜代の侍岡信濃・同郷助城守に申付候。虎倉城主伊賀與三郎義、前知無二相違一被レ任二左衛門一、爲二加番一桂民部大夫・上山兵庫に三百餘騎被二指添一候。伊賀左衛門は、金川城へ夜討を掛け、城兵五十七人討捕、首を隆景卿へ指上候へば、向後も忠節心懸候樣にと御懇意に被レ仰、土倉城守も御身方仕候樣になづけ候へと御内意の由。

義輝公將軍宣下并御討死、義昭朝臣都落織田信長頼給事

前將軍義晴公の御嫡男義輝朝臣は、尊氏公十三代の御代を繼給ひ、天下の奉レ仰二武將一。其節の執權三好修理大夫・同筑前守企二逆心一、永祿八年五月十九日に、三好が一族御所を取卷き義輝公を奉レ討。御舍弟有二二人一。御二男は南都一乘院門主、三男は北山鹿花寺※御弟子周日高は平田和泉守を討手申付、翌日二十日惠比須川へ御供奉レ討。覺慶へも討手を申付る由、從二長岡兵部大夫一密通仕れば、米田壹岐守に計略被二仰付一寺内を御忍御出院。宗資一人御供仕る所へ長岡兵部大夫駈着け、主從四人五月二十三日晴夜を落ち、路の便に近江路へ越給ひ、木々の梢を分登り、葛の蔓に取付、山の峯によぢ上り給ひ、御悦哀樂一時に來り、山路に踏迷はせ給ひ、東西難レ分木蔭に立徊ひ給ふ折節、春日大明神へ祈を掛け給へば、靈驗新に鹿一疋御前に出る。覺慶御覽じ、鹿は春日宮の御使と覺レ之案内せよと被レ仰ば、御鹿先立本路に出る。山の端に月出で近里の鷄時を告る。公は若敵跡を慕ひ來らんやと宣て、

　郭公鳴や五月の山中におのか古巣の名殘惜みて

*立正寺は今立政寺と書す。

山路を過給ひ近江國甲賀郡に御着、和田和泉守宅所々御忍、同國矢島へ御移、爰にて御還俗ニ御座し御名をば左馬頭義昭と自官仕給ふ。足利譜代の郎徒、爰彼處より馳來り無レ程三百餘に御成、軍談有ニ評議ニて、佐々木義賢を御賴被レ成候へども御請不レ申、三好と一同仕り、義昭朝臣を奉レ討と評す。賴む木蔭に雨漏れば若狹國へ御越被レ成、武田大膳大夫義統を有ニ御賴ニば、我館へ奉レ移けれども、分内狹き所なれば御本意も難レ被レ遂、織田上總介信長へ長岡兵部大夫・上野中務大夫を被レ遣、天下草創の事委細に御賴被ニ仰遣ニば、御請申上則美濃國立正寺*へ御移り被レ成候節、織田上總介も遂ニ出仕ニ御禮を申上る。光源院殿爲ニ三好ニ御生害故に、義昭朝臣御獨身流行の御分野にて、御敵御追討の御計略故是迄御下向、信長を御賴被レ成事我家の面目累代の名譽難レ有。以ニ君之御威光ニ御敵追討の軍慮可レ廻と、永祿十一年九月七日、織田上總介平信長軍兵隨ニ四萬餘騎ニ濃州岐阜を討立ち、近江國へ攻入れば、同國の住人淺井備前守五千餘を召連れ、御身方に馳參ず。則被レ加ニ先陣ニ箕作城　和田山觀音寺都合十五ヶ城攻落し、一同御退治。織田上總介より御注進被ニ申上ニ故、軍勢二萬餘供奉仕り、足利左馬頭源義昭朝臣は、九月二十一日に美濃を御立御上洛被レ成、同二十三日に京都御着陣、清水寺に御移り。織田信長は東福寺に宿陣仕給ひ、四國の逆心三好が一黨松永彈正、我國々へ逃落る。義昭朝臣は織田上總介に有ニ厚禮ニ御祝儀の御酒宴始り、八敵退治嘉象千秋萬歲樂と唱ふ。

義昭公へ將軍宣下并織田信長と御中絶之事

同年十月十八日義昭朝臣任ニ參議左近衛中將ニ叙ニ從四位下ニ征夷大將軍の宣下を賜り、天下の武將に備り給ひ、本國寺に權に御安座被レ成、織田信長は岐阜へ有ニ歸國ニ。天下泰平萬歲と賀し、將軍義昭公は天下の政道執行はる。逆心の殘黨三好日向守・細川六郎・三好山城守・同下野守・松永彈正少弼・岩成主稅助、五千餘騎相隨へ家原へ押寄せ、城守雀部治兵衛・寺町左近將監討捕り、京都へ攻上る由

有ニ注進一六條本國寺には近里の郡主へ被ニ相觸一る所に、三好が一黨本國寺へ押寄ける。寺內より細川右馬頭・二階堂駿河守・中島豐後守宗徒の兵七百餘騎相隨ヘ遂ニ防戰一三好大軍故城兵危き節、伊丹兵庫・池田八郎三郎・荒木攝津守御身方に馳參り、三好後陣に攻掛り相戰へば、三好が一類忽に討負け嵯峨鞍馬山の奧へ落忍ぶ。上仁義に暗き時は、下に奸讒威を立て同氣相求む。道直に仁義正しき大將には、必賢智仁義の勇者集る。不仁不義の家へは奸讒佞媚の臣下集る。當年不慮に將軍義昭公と織田信長卿と中絕の義出來、是天下大亂の基可レ成。君臣の道は有レ信則ハ合道し。織田信長忠烈は譽末代に可レ汚、讒口を用ひ及ニ確執一給ふ事、御家運不レ可レ久前表也と、義昭公譜代の老徒指集り、上逆威を強うし、邪に重慾を行ひ人望にそむけば、上を恨み下憤り、世の中可レ亂儀近月世と悔まざる忠臣はなし。信長の忠貞を御忘れ退治の御謀、愚將也。其比の武將武田信玄・上杉謙信御賴被レ遣に、御請申て不ニ上洛一誰か不義の愚將に可レ隨やと、政道に吐哺を纍し閉口仕り、累代の御家人も退レ身。織田信長は不レ知レ是。御內存十ケ條諫書を指上れば、還て今は斬レ身御謀叛の由信長聞給ひ、大に驚き御和談の諫不レ怠。從ニ義昭公一も和を乞給ふ使者を被レ下れば、信長は大に喜び、將軍御憤を被レ捨上は無ニ子細一と和睦を喜悅して、四月二十七日に岐阜へ下向。信長の軍慮不レ淺、身方少功をも過分の所領を與へ餌にて如レ釣レ魚、能武士集て命を不レ顧戰功を盡す。義昭公の御軍勢百萬騎御指向被レ成共、信長の鉾先には叶間敷と世上に如レ申、智略の不足こそ淺間敷けれ。

將軍御謀叛幷宇治槇島御籠城附西國落之事

將軍義昭公、同年五月二十五日の夜京都を落させ給ひ、宇治槇島に御籠城被レ成。織田信長卿右の注進聞給ひ、六月六日岐阜を打立ち六萬餘騎を相隨へ、五箇庄柳山に陣取り、槇島を取巻き給ふ。稻葉伊豫守・村井長門守・佐久間右衛門尉・木下藤吉郎・丹羽五郎左衛門宇治川へ打向ひ、梶川彌三郎

先陣に渡し平等院に打上れば、將軍家の軍勢川を渡させじと川岸に打臨み、上野中務大夫・館治部大輔・仁木伊賀守相戰ふ最中に、城兵に內通の者あり。所々の木屋に火を放て四角八方へ吹散し、城兵度を失ひ今は大樹も御自害可レ被レ遊と、大草治部に介錯被二仰付一れば、大草申は、爲レ將法は千騎が一騎に被二討成一て後、必死可レ被レ成儀に候。急ぎ御立退被レ遊、御廻文の御身方馳來り次第に可レ遂二御合戰一候樣にと御諫申上、夜に紛れ河內國若江城へ落着せ給ひ、色々御評議ありて中國へ御下り被レ遊、毛利家・小早川を御賴み可レ遂二後戰一と西國へ赴き給ふ。槇島にては、將軍義昭公沒落に付織田信長卿上洛仕給ひ、洛中洛外の御政道村井長門守に申渡し洛陽の守警に被二殘置一、平信長公は岐阜へ六月六日に歸陣仕給ふ。義昭公眞木島御合戰に御討負け、中國へ御下向の節大阪へ赴給ふ。此節中島城主門跡顯如上人以二使僧一言上仕給ふは、近年御敵に罷成候儀大樹に全く非二楯突一。織田信長吾宗を可レ企レ滅故に一揆を相催候。今は織田上總介逆心仕候故、御流落の御分野御痛敷候。自今は御身方に相隨ひ忠節可レ仕由申上る。御感悅不レ淺御身方に可レ被レ賴由御懇の上意にて、一兩日御逗留被レ成候。從レ是中國へ御志、難波湊より御船を漕出す。順風に帆を打て、尼崎・西宮・兵庫の浦を過ぎ行き、須磨浦に纜掛り仕給ふ。內裏の舊跡、一谷城跡、敦盛の塚印を御覽有て、昔の言葉共被二仰出一哀を催す計也。無レ程備前國牛窓に御着あれば、俄に惡風吹て御船不レ安及二御難儀一給ひ、爲二御祈念一一首取あへず、

　言語道斷舟路の族は牛窓の月の夜鹽に袖濕るゝとは

如レ此御詠じ八大龍王へ手向給へば、風直り順風に帆を打て、備中國水島にて横谷猿掛山城、所の船人に御尋に付申上る。並有二古宮一、是は星尾妙現、神體荻原大明神。十萬の有二眷族一。八萬金剛童子垂跡、和光の以二方便一今の難儀を救給へと御祈有て、同國笠岡浦を過給ひ、備後國鞆津に御着。從レ是柳澤監物・上野中務大夫以二兩使一、同列三原城主小早川左衛門佐へ諸事御賴被レ成由被二仰遣一候へば、御請

申上、翌日米三千石大鷹五連駿馬十疋進上す。左衛門佐も致二參上一義昭公へ致二御禮一候。將軍も隆景へ御平伏の體を拜見し泪を催し、昨日迄腹心合體の織田信長、今日は御敵に罷成り尼子氏族近年討手に被レ下候。毛利家は今日より御身方に御頼被二思召一、是迄御下向當家の面目、代々蒙二御優恕一候へば可レ盡二忠節一候。少輔太郎若歳故父陸奥守私に家督預置候。急ぎ吉田へ申聞せ、御安座被レ遊候樣に可レ仕と申上、鞆城普請申付將軍義昭公を奉レ移。吉見大藏大夫・杉次郎左衛門・杉原播磨守・中島大炊助に、其國の軍兵を指添へ五百餘騎鞆城番仕り、村上彈正・笠岡掃部は中國の海賊を相隨へ、備中國水島笠岡沖に番船を浮べ、將軍義昭公を守護仕給ふ。中國四國の軍勢渇仰不レ怠。義昭公今は御安堵の席に御安座被レ成、相隨ふ御家人も喜悅の門に入り給ふ。中國侍大將思々に參禮す。

將軍備後國へ御下向毛利家御頼鞆津に御在城幷三村石川逆心之事

將軍左馬頭源義昭公備後國に御下向、毛利家小早川左衛門佐を御頼鞆津に有二御在城一。中國四國九州の武士悉隨二御下知一大樹武威廣大に御成、近日攻上り給ふ由、織田信長卿へ所々の御身方有二注進一ば、信長卿驚き給ひ諸國の國主郡主へ有二間諜一。爰に備中國上房郡松山城主三村修理進元親へ密使を立て、今度背二將軍義昭公一信長の加二身方一、將軍の御上洛毛利家より上方へ働を防ぎ給はゞ、備中備前兩國可二宛行一と計策不レ怠。三村修理進悅び一族從類を集め、願ふ所の幸也。我浮田に遺恨不レ淺。父家親は遠藤河內に忍討れ、兄元祐も浮田與太郎に討れ、二代の怨敵欝憤不レ淺。時を待つ處に信長より一身の誓使、時を爲レ得レ待喜悅不レ淺候。微運の大樹を討捕り、信長卿へ盡二忠節一、以二助力一浮田一族を討平げ欝憤の意趣可レ開と議す。元親家臣同國川上郡成羽城主三村孫兵衛親成・嫡男孫太郎は、時悔二不レ到事一元親へ不レ與。信長卿虎狼の隨レ謀一家不義の逆心と成ん事非二本意一候。不仁の信長卿に頼を掛て不レ可レ有レ益と諫議す。元親一族此諫を惡み、是を爲二題目一家中の譏者割二君臣之間一、三村孫

兵衛親子を誅戮せんと必定す。親成は大きに驚き、天正二年十月七日の夜松山を退去、賀陽郡領主中島大炊助在城へ落着く。元行鞆津へ遂ニ參上ニ三村元親謀叛の趣訴ふれば、大樹驚き給ひ隆景も承屆ば、逆罪の者急ぎ可レ有ニ誅罰ニと、山陰道山陽道四國西海道の國主郡主へ將軍御內書に、隆景廻文狀を差添る。諸國の軍勢十一月十日以前、備中國笠岡浦へ致ニ着陣ニ候樣に被ニ相觸ニ備中松山城主三村修理進元親は一族從類を集め、將軍義昭公爲ニ御下知ニ毛利右馬頭輝元・小早川左衛門佐隆景・毛利治部大夫元淸率ニ數萬騎ニ國中へ攻來る由、身方にも軍兵を配分仕遂ニ防戰ニんと軍談評議有て、松山城に石を搨低め塡レ芝、上堺を塗り擧ニ矢倉ニ狹間を切換へ、勢隣を動かし木を結び帆莚引張り、砦二十一丸、地は犬も可レ潜無レ樣、天は鳥も難レ通體に拵濟し城を飾り、三村兵部允は同名庄太夫と、人數を三百餘騎相隨へ穗田猿掛城へ楯籠る。三村右京亮・大月源內に、三百餘騎相添へ手庄國吉の城を相守る。三村左馬允は二百餘騎を相隨へ鶴首の城を相守り、三村宮內少輔は三千餘騎にて新見城に楯籠り、元親の舍弟上田孫次郎に、三千餘騎を指添へ山田村鬼見城に楯籠り、川西三郎左右衛門は三百餘騎を相隨へ秦村荒平山城を相守り、三村民部に三百餘騎を相添へ美袋山城相守り、中村掃部助百餘騎其外鄕民を相隨へ矢藏畦城相守り、多氣庄少田山城へも軍兵を配分仕り加勢を籠て相守り、野山城は伊達宮內少輔三百餘騎にて相守り、藝州へ志有と聞えける。同國幸山城主石川孫左衛門久式は、三村家親聟故從類を集め申は、我浦上宗景宇喜多和泉守と累年境を爭ひ、備前半國を切隨ふる處に、宇喜多和泉守以ニ武略ニ遠藤河內三村家親旅陣へ忍寄り討捕り、其後於ニ備前妙善寺ニ合戰父久智も討死仕、當家累代の敵欝憤不レ淺。宇喜多一類を討亡し兩父の孝養に備んと存立つ處に、一身の國侍背ニ當家ニ毛利家の加ニ先陣ニ、松山城攻手の案內となる上は、我も元親と一城に籠り軍談評議仕、可レ遂ニ防戰と、妻子從類千七百餘相隨へ松山へ籠城す。幸山城には友野石見・禰屋七郎兵衛・江口左京有合ふ郎黨五十騎農民七百餘指添へ、爲ニ留守居ニ楯籠り城門閉し相守り、所々矢倉持口を定め、寄來る敵を待

居ける。

備中國松山城主三村一類御退治之事

作州月田山城主楢崎彈正忠元兼は、三村家親聟にて一身の堅約也。今度三村元親は對二將軍義昭公一企二逆心一毛利家へ御敵仕故、某儀元親一身とて非二猶豫一前に藝州へ御身方仕爲二手切一。毛利家幕下備前國主宇喜多和泉守、軍兵を居城へ引込、中島大炊助方へ申通ずるは、御境目御押への被レ加二御人數一候樣に御取成賴入由、使者着越趣、於二猿掛城一遂二披露一候。同國宍田城主赤木藏人・同丹後も無二別心一三百餘騎を相隨へ、笠岡迄御迎に罷出候へば、隆景卿被レ加二先陣一候。將軍家の侍大將小早川隆景は笠岡へ入城、出羽十郎・宍戶備前は走出村の要害へ入城、其外周防・長門・安藝・備後・備中・備前・美作・因幡・伯耆・出雲・隱岐の軍勢八萬餘騎南備中へ着陣、野山平等に陣宿す。福原出羽守・熊谷豐前・天野五郎右衞門・桂民部大輔・兒玉周防守・同三郎右衞門・粟屋右京大夫・浦兵部少輔・坂新五左衞門・井上又右衞門・鵜飼新右衞門・淸水長左衞門・中島大炊助・三村孫兵衞被二召出一、御合戰の上勝負の御損益を御評定有り。軍勢を配分仕城々を可レ被レ攻と相定る時、中島大炊助申上候は、端城は被二捨置一松山を被二攻落一ば、端城は不レ被レ攻共御身方可レ仕由申上候へば、隆景卿被レ申は、軍林に讀たるは、研强以レ及則及返二研抽一雨滴微弱なるも簷下の消レ石と見えたり。强て松山に取掛り軍兵を殺して無レ詮。弱き端城を松山と心得擒にせば、可レ有二勝利一と被レ仰候へば、一同に感聲する。兩殿、淸水長左衞門・中島大炊助に仰に、三村元親は累年細川眞之・三好修理大夫と密通、織田信長卿へ身方有レ之ば、從二上方一四國可レ有二加勢一と、南海の城々へ加勢を被二仰付一、爲レ押淸水長左衞門尉・笠岡掃部に、南備中を相守り候樣に被二仰付一候。

同國三村持の城々明退事

同年極月二十三日、宍戸備前守・中島大炊助は、爲ニ案内者ニ三村兵部・同與七郎栖籠たる猿掛城へ押寄ければ、同夜城を明去り松山へ逃込む故、毛利治部大夫猿掛城主として入城、三村孫兵衞を案内者として、齋田の城へ押寄すれば、城主三村左京城を明去り松山城へ逃込む。三村孫太郎を爲ニ案内者二萬餘騎を相隨へ、手の庄國吉城を取卷く。城守三村左馬允・新山玄蕃城を持堅め、弓鐵炮を賦り持口を定め打出す。攻道具を持せ竹束を並べ仕寄ければ、同夜城を明退き松山へ逃込む。宍戸備前守・中島大炊助合備にて、二萬餘騎を相隨へ鶴首の城を取卷く。城主三村右京亮政親、武道功者の勇士なれば、城を持堅め持口より如ニ雨降ニ弓鐵炮を打出す。如レ法持口を定め相守る。寄手に死亡手負多ければ、此城急に攻落さば手負數多可レ有と評議して、揚ニ西樓ニ攻口を定め仕寄せ、七日卯刻に三村右京亮・同内藏介・同七郎右衞門・宮野藏太夫・丹下與兵衞三百騎を三手に作り、宍戸備前守攻口へ突て出る。宍戸が旗本より横山角阿彌と名乘て、丹下與兵衞と切合、其後無手と引組指違ける時、宍戸が郎黨三上平内丹下が首を取り引退く處を、宮野藏太夫丹下を助けんと駈け戻る。中島大炊助十三束取て番ひ放ちければ、藏太夫が兩股を射貫く。中島元行郎黨近藤新九郎掛合首を取る。其後入亂れ相戰ひ城兵所々にて討れ、殘る兵百三十騎計り城中へ引取る。藝州方にも手負討死二百餘人有レ之。二十八日には城の三方に揚ニ西樓ニ大筒を打込故籠城難レ叶、三村右京亮城を明去り松山へ落行ける。多氣庄矢倉畦に籠たる田中掃部介も、要害を明去り松山へ逃込む。庄田山四ケ所也要害、大軍の威風に恐れ松山へ逃入る。正月五日には、新見城へ押寄す。城主三村宮内少輔元範は、元親舍弟、讓葉名城なれば落城不ニ思寄ニ所に、譜代の郎黨富屋大炊介・曾禰内藏・八田主馬へ中島元行より逆戰を進むれば、中島大炊助方へ通達するは、籠勢の諸勢御助本知無ニ相違ニ宛行ひ給はゞ、元範に腹

を切らせんと申す。可ㇾ被ㇾ任二其意一由有二返答一ば、宍戸備前守一手の兵を讓葉甲の丸へ引入れ、元範譜代の郎黨七十騎計り突出て、坂中にて相戰ひ敵身方數多討る。元範は伊勢掃部入道其外八騎を召連れ、石指山へ取登る所に、多治部雅樂駈付くれども、岩崎宍に閉籠れば、急に攻落す事難ㇾ成所に、元範の郎黨三村左助と名乘り尖り矢を射掛くれば、石州住人太田源八が、太股を射通しながら掛合、左助と指違へ果ける。伊勢入道進出申すは、元範爰元に罷有る所に、中津井・石蟹口へ心指落延給はん內、我等殘留り防戰仕ると申す。斯く各なればとて可ㇾ遁にあらずとて、中島大炊助郎黨國府三郎兵衛・安原彥左衛門先陣に進み相戰ふ。伊勢入道を安原彥左衛門討捕れば、元範は進出で、爰に有るぞよれや〳〵と申す所に、宍戶備前守旗本の若者二十騎計り切て掛る。元範は長刀の達者なれば、二人切伏せ腹を切らんと見廻る所を、中島元行郎黨左京亮が射ける尖り矢にて、咽輪の外れ玉掛骨に射立ければ、太刀を小腹に押當て伏けるを、宍戶武者東鄕平內首を取る。千兵求め安し、難ㇾ求は一將なりと、不ㇾ惜はなし。元範の首を舍弟上野孫次郎居城へ被ㇾ送。悲歎想像由に候へ共、奧意は實親に力を落させん策也。元範の首鬼身山城下迄到來の由實親聞て大に怒り、元範存生の時は、世に勝れ盡二孝行一候へども、轉ㇾ生ては弔に過る事なしと、花光寺の會下へ追返し葬禮を取行ひける。

同國荒平山城主川西三郎左右衛門事

天正三年正月十六日に、藝州の諸大將南河西へ陣所を被ㇾ替、上野孫次郎實親居城、山田村鬼身城を遠卷す。小早川隆景は下原鄕伊世部山の構へ入城、毛利元淸は鬼邑山へ入城仕り給ふ。宍戶備前守は羽入道山に構二陣城一、其外先手は新本村・水內村・藤原村・大野原・御崎・山邊鄕・野山手等に陣宿す。箕腰山の砦を備後勢攻むれば、本城へ畬みける。同十七日には御本陣の無二御下知一、近城なれば秦村荒平山へ押寄す。城主川西三郎左右衛門之秀は三村元親親類也。中島大炊助も一族故、將軍に御勤

仕候へと取扱申内に、藝州勢山根迄燒働きける。此山東北川を帶にし、南も嶮岨にて麓に大川卷き無双の要害也。山の峰に構ㇾ砦石木を落掛け、東西の坂口へ突て出づれば、數百人川へ追はしめ討捕ければ藝州勢跡を見ず逃げゝる。誰が褒美もなきに數輩討れける。隆景此由を聞給ひ、數ならぬ山といへ共非ㇾ可ㇾ侮と中島元行に被㆓仰付㆒、居城領地無㆓相違㆒可ㇾ被ㇾ遣候間、藝州方仕候樣に取扱けれども、數代三村親類なれば御身方仕候事非㆓本意㆒候。籠城の諸勢御助候はゞ、四國へ罷退べくと御約束にて、鄕民に被㆓仰付㆒備前國兒島へ被ㇾ送ければ、讃州の由佐左京方へ落行き、三村親類軍慮の程を談じける。

同國鬼身山城沒落幷上田實親切腹之事

鬼身山城詰込鹿落丸を、備中備後安藝周防長門の軍勢、中島元行・三村親成爲㆓案內者㆒十四日攻ける。嶮岨の山城なれば、峰より石を刎落し、大木を切落し候へば、寄陣に手負死亡不ㇾ知ㇾ數。城內雖ㇾ爲㆓小勢㆒山の案內を知り自由を得候故、藝州方足を亂し候。從㆓隆景卿㆒中島大炊助に一計略仕れと仰に付、安部清明が末孫越後守結城秋氏と申す博士を、上野近江守に遣し、中島元行より操けるは、急ぎ藝州家へ御方仕候はゞ、本地に一倍の加恩可ㇾ被㆓宛行㆒候間、一類を申合せ下城仕候樣にと、近江守へ進候へと申遣候。結城越後守常々心安く出入仕候に付、御內意申聞候はゞ可㆓忝存㆒由御請申右の趣上野近江守へ申聞候へば、近江守より中島元行へ以㆓隱使㆒通ずるは、某儀對㆓藝州家㆒遺恨無㆓御座㆒所に、實親を致㆓家督㆒候へば、三村家企㆓逆心㆒故に當家も御敵に罷成候。某一類籠城の諸人御助有らば、實親に腹を切せんと申越す。齡八十に及び命助り、孫の若き實親を討出す所存の程無道憫き事なれども、敵方數城有ㇾ之は御弓矢の爲果行(ハカユキ)なれば、可ㇾ任ㇾ望由返答あれば、上野近江守家臣明石與次郞、同心の者甲の丸へ取退く。實親見聞き、扨は制止難ㇾ抱。時移らば明石同心の者數多可㆓

出來ー。我一命を捨て、籠城の諸勢を可ニ助置ーと思ひ、隆景へ使者を立‧申は、實親切腹仕らば籠城の軍兵可レ被ニ助置ーや、於レ無ニ詐僞ーは檢使を申請切腹可レ仕と申す。隆景聞給ひ、殊勝の勇士也。外に望者は被ニ申越ー候へと撲首座を被レ遣ければ、實親は、君子は二言有間敷ければ、軍兵以下心安く存候へ。松山より爲ニ加勢ー被ニ籠置ー譜代共、我を見捨たる樣に元親可レ被レ存候。老母元親へ暇乞の文を認め進上可レ申候。正月二十九日辰の刻に切腹可レ仕間、檢使被レ下候樣に申候へば、永井右衞門太夫●野美四郎を被レ遣。實親向ニ檢使ー此度の意趣對ニ毛利家ー別心不レ存候。宇喜多和泉守へ鬱憤深候故、織田信長任ニ廻文ー細川眞之●三好左京大夫何もの以ニ助力ー可レ達ニ本意ーと存ずる所に、天道無レ惠如レ是成行候趣、隆景卿へ御傳へ賴入由を檢使に語り一禮仕り、西に向ひ高聲に念佛數返唱へ、腹十文字に切る。郎等荒木右京亮介錯仕り死骸に取付、髻を切て修行者と成にける。實親十五歲の春鍜冶屋山へ後詰を働き、信(延カ)原內藏允●花房又左右衞門と迫合の武勇、諸人へ厚禮能き大將也と譽感す。其年二十歲の春、莟ながらの落花こそ敵身方共に惜ぬ人はなし。千兵得安く一將は難レ求と、人皆袖を濡しける。同年三月五日には、三村民部少輔が栖籠る賀陽郡美袋山城を取卷き給ひ、三萬餘騎の大軍にて一時に攻め可レ被レ成と相定候所に、中島元行城中へ申遣候は、二百に不レ足小勢を以て此大軍を引請給ふ御心指、諸大將感入申事に候。此上は御下知に隨ひ被レ加ニ先陣ー候へ、左樣も無レ之候はゞ荒平同事に城を被レ渡ば、四國へ可レ被レ送由申け　ば、茱儀三村一類なれば難レ隨ニ御下知ー候。籠城の諸人御助被レ成候はゞ、四國へ可ニ罷退ー由申に付被レ任ニ其意ー讚州を志し備前兒島へ被レ送ける。

中國兵亂記 二 終

中國兵亂記　三

藝州勢成羽へ陣替 幷松山城兵働の事

天正三年三年七日に藝州の諸大將成羽へ御陣替の節、先勢廣瀨を押行く節要害より突て出て、安國寺備へ切て懸り、摸首座を始め數輩討捕る故諸將驚き去り往く。此要害を打破れと鐵炮を打掛け乘込候故、松山城へ逃入る。松山よりも玉村の渡し四條・原・魚梁場三口へ人數出し相支ふ。藝州方より足輕千人三口へ働き相戰へば、城兵引入る。鷄足山に備居る城兵七百餘、坂の半へ下り數刻相戰ふ内に、八幡山の上に陣取る宍戸が一手、高陣の後を廻り近々と押寄せ、賴久寺の上より廻り城兵へ弓射掛け、鐵炮打掛け突て懸り、數刻相戰ふ。藝州衆數百討れ立足もなく麓へ被二追下一。鷄足山の出崎より中島大炊助・三村孫兵衛四五百騎相隨へ、橫鑓に突掛れば、城兵引上る節、眞先に進む元親の譜代石川久式の郎等二百三十騎討捕れば、隆景譽感不レ淺。藝州勢も六百三十枕を並べ討死す。宍戸備前守は一萬餘相隨へ大離の砦へ押寄れば、城兵敵の大勢成故か、同日午刻に要害より不レ殘突出て、數刻相戰ひ多勢討れ散々に成り、殘兵周章候や、要害を自放火して側なる嶮岨に取上り、敵を外目になして相戰ふ。藝州方雖レ爲二猛勢一郷里山谷無案内故、城兵以二小勢一每度得二勝利一候は、山の案内鹿道迄能く知り掛引自由成る故、同日申刻に藝州方足を亂しければ、城兵追慕ひ候故引取事難レ成時、中島大炊助三百餘を召連れ、鹿道より城兵の備の後へ駈登り、鬨聲を擧げ城兵の備と城の間を切取り相戰ふ時、宍戸備前守・杉原播磨守・浦兵部少輔・梨羽中務大輔大返し、前後より取包み相戰ふ。双

方に手負死人無レ限。其戰の間に藝州勢繰引仕ける。城兵山の出崎へ出張鐵炮打掛け、藝州後勢を追散し、旗幕指物を城内へ奪取る。籠城の老若勇めども、※元親は氣遣不レ淺。可レ開レ運間身行を定るは、夜に入れ共帶を不レ可レ解と軍勢へ觸れ渡る。裡（程カ）無レ之時は酒を用ひ間敷、自身用ゐる時は小樽にても役所の頭々へ送る。元親の眞實を感じ小盞の時も數盃に醉ひける。隆景中島大炊助・三村孫兵衞に被二申渡一るは、近國爲二見懲一當城被レ成二御退治一候へ共、數年藝州へ忠節の三村なれば、後々は家をも可レ被レ立間、身命無レ恙立退候樣に御内意の趣を、刑部報恩寺淸水法印へ申含め籠城させ、隆景御内意を達すれば、千死一生と思極候。元親一類譜代共二心出來、中島元行・三村親成へ頼み藝州へ内通多く出來、本丸へ手切れ矢射懸け、妻子を散々に引退る。

*以下數句不明。但し備中集成志には「元親氣遣ひ共心闌然として固屋に入りても帶をも解かず興あれども酒をも飲まず軍旗の外なしとぞ見えにけり軍士へ酒を給り候へば士卒愈々情に感ず」とあり

備中松山攻給ふ事

藝州方へ城内より數度夜討を掛け、日々遂二防戰一注進、諸方より毎日如レ引二櫛齒一、首五十七十松山へ不レ來日はなし。惣門に柵を結び、掛並ぶる首三千百十八也。藝州小勢ならば可レ爲二難儀一所に、御本陣へは身方討るゝ無二通路一募二武威一給ふ事、廣大なる御大將と成レ恐。城内譜代の者共申すは、非レ可レ背レ君勵レ義より無レ外ば、兵粮も鹽も來春迄は可レ堪と云ひ合ひける所に、家親代今以て厚恩を請る竹井宗左衞門・河原六郎右衞門へ、從二隆景卿一御懇志不レ淺を元親聞傳へ疑掛る故、石川久式を頼み無二別心一旨を誓紙を調へ申上げんは本心と心得、井山雄西堂有二同道一小松山へ上り、元親へ侘言被レ申所に、六月二十日朝天神丸へ野菜を下部に爲レ持上る。門番衆とは不レ知。扉を開き入る後を押立つれば、只今歸る、其儘と斷る故、相待つ間に、藝州へ内通の大月源内・小林又三郎、城中へ馳入り、久式の女中息女を人質に取る。續きて土居・工藤・田中・蜂屋・肥田・土師者共數百人、天神丸へ押込み鬨聲を擧ぐ。石川久式は天神丸持口と云ひ、妻子の成行無二覺束一思ひ、物具を着し馳向ひけれ

ば、元親被ㇾ申は、催ニ諸勢一只今可ㇾ挫、同勢を待給へと久式へ被ㇾ申ける内に、大松山守三村左馬允、佐内丸守三村兵部丞、三本松守日名助左衛門・徳重六郎左衛門・河上孫九郎何も討死可ㇾ仕事塵芥共不ㇾ思、有ニ持口違一某只粉骨の程不ㇾ掛ニ御目一事殘念と申しければ、元親賴母敷思ひ、古老の者共申は天神丸にて切勝敵討捕共、今日の生涯三日に可ㇾ延か、魚梁庭の後へ隆景卿の御旗見ゆるぞ、天神丸の逆心は同意に命を可ㇾ扶と耳語きければ、身命の扶言に不ㇾ欣無き者皆尤と同心し、銘々人質を三村孫兵衛方へ連來り、本丸の敵に成り手切の矢本丸へ射込む。吉良常陸は、足弱共を引連れ本丸にて取籠る。敵身方譽感仕りける。不ㇾ知ニ仁義一背ニ武道一者、樂々尾・杉・諏訪・南江・升原・佐藤・神崎・山本・布施・林・渡部・山川・神原何れも元親譜代也。淺ましき心中と惜まぬ者はなし。元親・久式は諸方の相圖を待居る所、難ㇾ賴は當世の郎等、反つて本丸へ手切の矢を射込む。元親申すは、譜代の奴原敵の備へ加り候へば、敵方には競を傳候。當丸の者忘却に見及候。宗徒の者共討たるれば、當城可ㇾ及ニ急難一と申す。馬醉木丸守新山玄蕃助申すは、兼ての調談に如ㇾ是成行候時は、相畑にて可ㇾ曝ㇾ屍と御定候。明日にも成候はゞ敵方彌可ㇾ增ニ人數一候。時節能候。いざ一働と申す時、田中藤兵衛申すは、左樣の談議は無事成る時、今日の軍をば某に御任せ候へと申す。元親損ニ氣色一傍若無人の申樣哉、乍ㇾ去文士は隨ニ賤敎一國主は恥ニ民口一、と曲留に仕り一働と申候へば、譜代の侍三百騎相隨ひ元親・久式二手に成り障子瀧迄出張る。三村與七郎・梶屋織部・田井又十郎・上田加介、相畑構へ城戸逆木を引破り家々に掛ㇾ火、元親の罰は端的ぞ思ひ知れと申し、相畑逆心の者危き命を扶かり天神丸へ逃込む。二十日暮に及び、本城宗徒の者五六十騎取退く。敵は彌近陣に寄來れ共、本丸堅固に相抱ふ。隆景卿被ㇾ申は、此城急に挫かば人數數多可ㇾ損。只今迄爲ㇾ屆侍共者、元親に可ㇾ並ㇾ枕譜代可ㇾ成ぞ。以ニ方便一人數不ㇾ損樣にと、中島元行城内へ樣々探りければ、千死と究りたる腹心、爪牙の勇士と被ㇾ賴たる郎等、敵方へ人質を連れ掛る。殘り留り忠義を守る人々は、石川久式・三村右京亮・同

左馬允・同兵部・同大藏・同與七郎・井山雄西堂・日名助左衛門・吉良常陸・梶屋織部・上田・木村・吉井、山口・門田・升彌助・同甚六・兒阿彌、侍五十騎小座敷に集り、爲ニ金打一申は、今生の事は不ㇾ及ㇾ申、死出の山路三途の川御供申さんと何れも申合ければ、元親・久式向ㇾ顔合ㇾ笑。元親の取立て給ふ甫城檢校は、松山籠城の由及ㇾ聞京都より下り、籠城仕り御最後の御供可ㇾ仕と望候へば、是非下城候へと進め、下部を附け城の麓迄下し候へば、衣類財寶剝取らんと檢校を討果す。不便成る次第、中村善右衛門と申牢人一列に下る處に、是を見て狼籍の棟梁日名源次郎が細首を討落せば、調者有ぞとて數十人立向ひ切伏す。元親は一類老從へ爲ニ暇乞一盃を出し、數刻及ニ酒盛一所に、馬酔木出鼻丸へ中島大炊助攻口より火矢を射掛れば、風呂屋に燃付き大矢倉へ火渡り、麓二三里の間如ㇾ晝。元親は敵不ㇾ近付ニ先に切腹せんと申けるを、石川久式申すは、一先爰を落給へ。天神高山兩所の身方堅固に候へば、落着 身方程近に候。織田信長卿の御契約、從ニ豐後一大友の御約束の誓紙をも御守候へ、細川眞之・三好左京大夫數萬騎を相隨へ、近日可ㇾ有ニ渡海一と申來り候へば、此度は被ㇾ恃ニ御身一候へと諫めければ、元親嗤ひ、今夜當城を落忍び明日日本の國殿に成候共、流石淸和源氏を穢し先祖の名を下し可ㇾ申哉。信長の契約大友宗鱗・細川眞之・三好家の加勢不ㇾ可ㇾ待。神も當家を捨給はゞ、於ニ弓矢之道一は神未來歳無ㇾ賴ぞ。各の御諫め更に難ニ心得一とて、彌切腹に被ㇾ極、妻子從類を鹿の拔道より玉村へ送りけり。

松山城沒落幷三村元親切腹之事

同年六月二十一日本丸に殘り留る城兵、石川久式・井山雄西堂郎徒三十騎に過ぎず。各元親へ申上候は、御切腹候て御名を發ニ日本一給ふ共、屍の鬱憤は散じ申間敷、爲ニ後戰一御立退候へと申す。元親は久式へ被ㇾ申は、貴所は一先阿波讃岐方へ忍ばせ給へ、四國因幡丹後の身方へ被ニ申合一重て遂

二本意一給へ。草の陰にて可レ爲二感悦一。久式申は、元親の御身體に可レ連覺悟にて當城へ罷籠候。兩家を斷絶させん事如何とあれば、一類是非々々立退き給へと元親を進て、妻子一門三十餘人座敷を立ち、兩大將一所に成て麓へ下る。升彌助・兒阿彌は、元親落行き給ふを不レ知體にて大手に向ひ鐵炮戰仕る。各落延び給はん時跡より追付、主人の手を引き阿部山へ忍び入る。藝州の侍大將は松山城へ入替り、門々に警固を置き、落人あらば注進あれと觸廻す。元親、升彌助に申すは、國の者達拜仕けれども、今は卑怯の先掛を仕る。汝一人是迄の屆神妙也と泪を流す。彌助申すは、某他國者に候へども、從二家親公一被レ掛二御目一不レ淺に付、御臨終迄御供仕らんと存入候。御具足を致二拜領一度候某松山城の門へ登り、乍レ恐元親と名乘て切腹仕候はゞ、敵他國衆なれば私の屍を見知間敷候。左候はゞ諸口の番士共窺候へば、中津井口を被レ掛二御心一、高田の方へ御急ぎ被レ爲レ成候樣に申上候へば、昔漢の高祖が城を楚の項羽攻る時、高祖の臣下に紀信と云ふ者僞圖り誅レ君降レ城事、汝が諌是に過たりと感じ給ふ。暫時も非レ可二存命一、急ぎ松山へ登り、元親切腹仕る間檢使を給はらんと、敵將へ申達候へ、飢死して無レ詮。老母へ此形見を指上げ供佛施僧の營み賴入る由申候へ、君生害に敵の迎に參る事、非二武義一と申せば、元親於レ背二此趣一は今迄の屆け無レ詮と申候へば、敬は遵と承候と泪を流し御暇を申し、阿部山を立出て、形見の品々を持ち母上に指上げ、其後君生害の便は難二心得一と獨言云ひ、松山の城の門へ掛込み、三村家の近習に升彌助と名乘り掛け、河村新助を切倒し五三人に手を負せし時に、敵大勢掛合ひ討捕らる。敵身方惜みける。元親は檢使の敵來らんと、側なる山に上り見れば、松山程近に見ゆる。此城にて不レ果事今生の後悔後生の障に成り候。麓へ立出て城内へ遂二案内一可二切腹一と思ひ定め、六月朔日松蓮寺の大道へ行見れば、在所の者に行合ひ、元親爰に罷在り切腹仕る間、檢使を被レ下候樣に城内へ申達候へと、在所の者に申含め待居ける。松山城門へ上り右の趣を御注進申上れば、爲二檢使一兒玉長門守粟屋與惣右衛門、爲二警固一桂民部大輔天野五郎右

衛門を被ニ仰付一申。元親向ニ檢使ニ爲ニ亡父孝養ニ浮田和泉守を可ニ討取一と存る所に、濁世とは乍レ申天道も無レ悪候。人盛なる時は天曲て退くと只今存當り候。不レ入儀に候へ共隆景卿へ細書一通認置候。

大庭加賀守殿は輝元公へ歌道師範なれば、　元親

殘し置く言の葉草の陰迄も哀を掛て君を問へき

細川兵部大夫へ呈一通

一度は都の月と思ひしに我待夏の雲にかくるゝ　同

竹田法印は親類なれば

言の葉の傳のみ聞て徒に此世の夢にゐはて覺ぬる　同

老母へは自筆

思ひ知は行歸へき道もなし本の直を其の儘にして　同

辭世

人といふ名を借程や末の露消てそ歸る本の雫に　同

前匠作一瞬源樹居士

鑼頭爐炭清涼殿　劍樹刀山遊戯城

と書留め、天正三年六月二十二日生害仕り、介錯は尾助四郎（石尾イ）元親の首は備後國鞆津へ被レ遣、將軍義昭公奉レ備ニ實檢一。千兵易レ得一將は難レ求と、皆不レ惜人は無かり鳧。

石川勝法士三村一族被レ誅事

石川久式の子勝法士其外妻子、備前國天神山城へ忍落んと心懸落行を、同國賀茂虎倉城主伊賀左衛門路次にて生捕り御本陣へ渡す。勝法士親族十八餘中島大炊助に御預候故、勝法士を出家に御作し

被レ下樣にと申上ぐ。御評定半に勝法士番侍に語るは、久隆より我等を被レ送節、從二御當家一爲レ迎歷々被レ遣候節、某、古家來共に路次にて行逢ひければ乘打仕候。失二君臣禮儀一候其段は、被レ非禮の爲二主君一と申は還て恥なれども、歷々の方へも乘打仕候馬鹿者にて候。番侍是を聞き扨レ否候　勝法士丸を久隆より御本陣へ送る時、扇子に歌を書せ遣ける。

夢の世にまほろしの身の生れ來て露に宿借る宵の稲妻

と在るを勝法士丸披見仕り、我等も御本陣へ行きなば被レ殺事必定也。脇指を不レ被レ奪ば　切腹すべき物をと申し、泪流しける趣隆景卿へ申上れば、扶置きなば後戰の種子に可レ成者也と、於二井山谷一被レ果ける。三村一類石川久式一族追々に尋出し、不レ殘於二井山一殺害。一椎ノ塚に納置き一家滅亡到來。三村右京亮政親父子三人、因幡丹後の內に忍びける。

備中國平均從二毛利輝元卿一軍將へ被レ行二忠賞一事

備中國平均仕り城々の御仕置被二仰出一、松山城は天野五郎右衛門●桂民部大輔城代に被二仰付一。小田郡猿掛山城は毛利治部大輔元清御居城に被レ成故、石田の要害一攝に御普請被二仰付一候。手の庄國吉城は吉川駿河守に給れば、今田山城守城番。窪屋郡幸山城は小早川左衛門佐に被レ下、城代は中島大炊助御旗本より加番を被二指加一候。下道郡鬼身山城は宍戸備前守に給る。同善左衛門在城。上房郡野山城領共伊達宮內少輔に被レ下、川上郡穴田城領共に赤木丹後に被レ下る。同國成羽城領共に三村孫兵衛に被レ下、被レ任二越前守一候。下原鄉伊世部山城領共に明石與次郎に被レ下、被レ任二兵部少輔一。其外境目の城々へ御加勢被二籠置一殘る城々破却被二仰付一候。

備前兒島常山城沒落幷上野隆式一類自害の事

*姿には隆式に作り後には隆則に作る。備中兵亂記には隆德に作る。

同年七月四日に小早川隆景卿戚羽を御發足、備前國兒島へ押渡り給ふ。浮田直家爲二案內者一郡村八幡山城へ隆景入城、島尾城へ元清在陣、*麒麟城に宍戸備前守在城、麥飯山へ藝州諸大將陣城を取り、常山城を遠卷仕給ふ。城主上野豐前守隆式は、栂尾丸へ軍勢を呼集め申すは、年來對二毛利家一憤不レ淺故、元親久式を某進め候所に、三村石川無レ事も可二討果一事口惜き次第也。二百騎に不二足當城へ十萬餘の大軍を引請防戰可レ叶とは不レ思。牛臥丸を捨て此栂尾丸へ蓄み、沼を前に構へ遂二合戰一其上にて切腹可レ申と被レ申時、敵身方共に諫けるは、阿波讃岐の御身方へ渡海あれかしと申す。阿波讃岐の身方無レ賴ぞ。累年細川掃部頭眞之卿へ密通仕り、爲二人質一嫡子源五郎を進置候へども、御加勢もなし。盡未來際於二武道一は無レ賴ぞ。各は降參し給へ。某一類は敵免間敷ければ、藝州大將衆を引請け此丸にて切腹可レ仕と申候へば、敵陣へ降參する者も有り、他島へ漕ぎ退く者も有り。七月六日に藝州軍勢牛臥丸迄押寄せ擧二凱歌一。隆式不レ動、明日辰刻には切腹仕り、名を後代に留んと申し戰を止む。寄衆、敵僞て他島へ渡海か、水練に入て退候はゞ攻口の油斷に可レ成。只攻崩せと逆木を引退亂入れば、隆則怒て二玉を込め無レ隙放ちける。嫡子源五郎・二男高橋小七郎・飽浦三郎城兵數十人働出る。栂尾丸と牛臥丸と間の池沼へ藝州勢被二追込一數十人討れ、城兵取て返し敵近寄ば防矢射させ、暇乞の酒盛を始る。明る七日の朝諸陣へ觸るは、今日限りの一類只今切腹仕り名を後代に殘す。檢使給はれと呼はる。隆則繼母五十七歲、隆則藝州へ述懷を申儀氣毒成しに、今切腹の爲體を見ば目暮れ自害の事無二覺束一、刀を椽の柱に卷付け行掛貫る。隆則走寄り五逆の罪恐れ多しと作レ言首を討落す。嫡子源五郎隆秀隆則に申すは、御介錯中度候へども、若輩の某自害の首尾無二覺束一被二思召一候へば如何と、脇指を拔待てば、隆則申すは、今度諸方の相圖調ひ、一方へ汝を差向け隆則掛る程ならば可レ達二本意一の所、諸方の相圖相違して一家滅亡無二是非一と申せば、隆則を押退け腹十文字に切れば、其弟八歲に成るをも膽の把を差通す。十六歲になりける隆則の妹は、鼻高山へ退候へ

と進むれども、老母と一所に果給ふ。隆則内室は三村家親の妹也。織田具足を肩に掛け上に經帷子を着け、二尺七寸國平の太刀を指し鉢卷仕、隆則側に居るを、女性に不二似合一太刀とつぶやくを聞き、三村家に傳へたる重代也。家親に副申すと存不レ放レ身候へども、死後に隆景卿へ言上仕り、爲二供佛施僧一仕給へと敵勢へ切て掛り、末美十郎左衛門を切伏せ、本太五郎兵衛・三宅勘介に手を負せ、其後浦兵部宗勝が一備を追崩し立歸り、隆式と連座して、南無西方敎主之如來、今日離二三途苦一者共、并元親・久式・元範・實親同蓮臺に安住し給へ、南無阿彌陀佛と高聲に念佛唱へ指違へ果けるを、舍弟高橋小七郎介錯仕り、其身も腹十文字に掻切、隆式死骸に寄掛り同枕に伏にける。見る人聞く人不レ濡レ袖と云ことなし。

將軍家の武將毛利輝元・小早川左衛門佐、備前備中兩國御手に入れ、軍功の諸大將粉骨の軍勢へ有二厚禮一、何も御暇被レ下。隆景元淸は備中國高松幸山經山城猿掛山城へ御立寄、諸境目の御仕置、淸水長左衛門尉・中島大炊助被二仰渡一候所に、作州住草苅三郎左衛門景繼一類左馬助・黑岩土佐守企二逆心一、信長御身方に成申由注進有レ之に付、作州へ御出張也。

從二義昭公一戰功の將へ興二猿樂能一備中國境目御仕置の事

將軍源義昭公より浮田和泉守直家・同左京亮・嫡子與太郎・伊賀左衛門・淸水長左衛門・中島大炊助・三村越前・笠岡掃部・村上彈正・同八郎左衛門鞆津へ被レ召、今度三村一類企二逆心一處に、各以二粉骨一令二追罰一御感悦不レ淺と帽に宣る。爲レ將者は治二敵國一則分レ肉裂レ地賞功不レ踰レ時、軍政を行ふと云ども、吾信長が爲に身を西海に蟄居す故、士卒の功を難レ謝と宣へば、群下皆感應式代す。今日は幸白日晴天なれば、猿樂能を興し戰勞を可レ休と、北の丸へ御下り棧敷に御移り、功名の武士を被レ召、左は毛利右馬頭輝元・吉川駿河守元春・河野兵部少輔通直・吉見大藏大輔廣頼・福原出羽守貞俊、右は小

早川左衛門佐隆景・毛利治部大輔元清・宍戸安藝守隆家・浮田和泉守直家・同左京亮春家・子與太郎基家・伊賀左衛門・清水長左衛門尉宗治・中島大炊助元行・笠岡掃部・村上彈正・小田孫兵衛・禰屋七郎兵衛・三村越前、其外軍功の侍大將皆太刀佩て座に着く。式三番終って食籠名酒佳肴種々の珍菓を賜り、見物の大小名金銀青銅木の枝に灑けて舞臺に積重ぬ。感能人の心を碎き耳目を清くす。能七番終て饗應色々被ニ仰付一上にて、宍戸備前守を被レ召、今度於ニ備前備中一忠戰無ニ比類一候。鬼身に在城被ニ仰付一候間、國侍と逐ニ相談一敵方を相鎭め候へと被ニ仰渡一、鹿毛御馬致ニ拜領一候。清水長左衛門を被レ召累年の忠節今度於ニ南海一信長細川眞之三好が軍勢を相押に付、兩國被レ任ニ存分一候。高松城領石川跡式被ニ仰付一候。彌抽ニ忠勤一樣にと被ニ仰渡一候。中島大炊助被レ召、年來の被レ揚ニ軍忠一侍大將十人餘一手に被ニ仰付一、國中の諸仕置清水長左衛門同意に任ニ心底一、自分にて難レ計儀は元清・隆家へ逐ニ相談一候へ。刑部鄕經山城には弟同名九右衛門を殘置き、不意の儀有レ之ば馳合候へ。幸山城代從ニ藝州一國司壹岐守被ニ仰付一候。中島大炊助加番相勤め境目の諸式公事等、任ニ心底一候樣に被ニ仰付一候。禰屋七郎兵衛を被レ召、數年の忠節不レ淺由にて、服部鄕八幡山城に嫡男與七郎に弟同名孫市郎を殘置き、不意の事有レ之時は馳合相救候へ。自分は冠山城領共に被ニ仰付一候間、宇喜多方上方境目を相守候樣に被ニ仰渡一、何れも御暇被レ下令ニ歸國一、在城の普請等申付候。

中島元行戰死の者共爲ニ供養一千部を執行事

中島大炊助は賀陽郡刑部鄕經山城領共に、幸山城加番を被ニ仰付一候に付、知行二千貫御加增、爲ニ戰功賞一庄兵部植木下總跡地拜領。外に一手の侍大將數輩與力數十人被ニ仰付一御懇意不レ淺候。今度反逆の三村・石川・上野・上田殘黨を鄕村に隱置く情を感悅す。諸城にて戰死の武士於ニ井山一殺害、侍大將可ニ弔慰一無ニ親類一元行は累代の恩を思ひ、於ニ井山寶福寺一雄西堂を爲ニ導師一一宗の僧侶を集め、

天正四年七月十日より同十六日迄執行、法華千部の作善、自國は不ㇾ及ㇾ申近國の士農工商日々參詣。逆心の一族合戰の及に亡びし所從へ思々に回向す。經王書寫供養の功德によつて、怨修羅の苦患を遁れ蓮臺に至らんと。難ㇾ有かりし事ども也。

難波船軍附 大阪城へ粮被ㇾ籠事

天正九年征夷大將軍足利左馬頭源義昭公は、毛利輝元卿・小早川左衛門佐を御賴み、備後國鞆津に御在城の內、天正二年七月に、攝津國大阪城主門跡顯如上人より以ㇾ使僧ㇾ被ㇾ申越ㇾは、織田上總介信長六萬餘騎を相隨へ當城を遠卷仕り絕ㇾ兵粮通路ㇾ候。毛利輝元卿より兵粮御助成有らば、當城開運五畿內の軍將御身方にㇾ一心仕、義昭公御歸洛之可ㇾ廻ㇾ計略ㇾと歎訴急也。輝元卿へ隆景有ㇾ御評定ㇾ、御身方に隨身の侍大將を不ㇾ被ㇾ助置ㇾば、重て隨ㇾ御身方ㇾ參者不ㇾ可ㇾ有とて、則海賊の大將能島・來島・因島へ有ㇾ御下知ㇾ。討立つ海賊には、來島刑部・村上彈正・同八郎左衛門・笠岡掃部・浦兵部少輔・兒玉內藏允其外數輩、警固武士に粟屋右京亮・桂上野介・福間彥右衛門・飯田讃岐守・虫上彌左衛門・井上又右衛門・中島大炊助、軍勢七千兵粮三萬俵船底に積み、七月十四日淡路岩屋着船。自ㇾ是難波川口へ物見の船を遣し見れば、敵海賊の大將九鬼右馬允・間鍋主馬・沼野伊賀守・宮崎鎌太夫・寺田又左衛門・杉原兵部少輔・小畠鹿目介・野口・尼崎・花熊五畿內の海賊、難波川口より住吉の岸迄船軍の備を決す。身方の軍船五百艘風上へ漕廻し、汐に隨ひ敵船へ押寄す。大國・火矢・焙鏃箭・飛鎗・火鞠・火桶・拋鍵・拋鉾・拋焰硝・拋刺手・武黎次第に備へたり。風上より敵船へ數多の炮碌を拋て相働、沼野伊賀守・同三五兵衛・小畑鹿目介・野口が舟を燒崩す。此時中島大炊助・生石中務・賀屋東市助一手の船五十艘の警固を承、龍粧に進て火燒栫を積上げ、炮碌火矢を打掛け、鞍具を調へ惣船の列を勝て急攻を爭ひ、小畑鹿目介が船腹に自分の船を敷せたれば、利を得たりと數多の炮碌拋て働け共、官柵

の船なれば海中へ飛入己が船に取、零浪の煙と燒立る。中島大炊助は小畑鹿目介一手の海賊五十一人討捕る。歸陣の節從二義昭公一御劒被レ下、早島三島を爲二軍功賞一輝元卿より給る。五畿內の海賊沼野伊賀守・同三五兵衞・同傳內・野口を始め千二百人藝州方へ討捕る。笠岡八郎左衞門・中島大炊助若年にて船軍の始なれば、皆々無二覺束一思ひしに、中國にて他船造能（ママ）く下知して無類の功を立たり。藝州方の海賊船軍に得二勝利一難波川口へ中國船を漕入る時、佐久間右衞門尉備を出し、川の於二左右一遂二防戰一節、鎧の上に篠掛仕たる武者眞先に進み、是は根來大將岩室淸祜鐵炮千挺召連、將軍の御身方仕ると高聲に名乘り、三備に作り鯨貝を立て佐久間が陣へ鐵炮を討掛突掛る。佐久間が一手天王寺を指て逃退く。岩室淸祜は得二勝利一相隨鐵炮を川岸に備並べ、兵粮船守護し城の東北に押着れば、及二飢渴一僧俗男女悅ぶ事限なし。淸祜は可レ勝軍には身方仕ると申傳へ候へば、根來淸祜の加勢は身方の吉祥也と、諸人大悅して中國へ歸陣す。攝州難波川口船軍無類の戰功と、擧二後世一也。

攝州伊丹城へ從二毛利家一加勢被レ籠事

攝州伊丹城主荒木攝津守村重は、織田信長卿に恨有て企二謀叛一候。將軍義昭公御上洛被レ遊候節は、可レ致二先陣一候間、毛利小早川より、當城へ加勢を被二差越一候樣に御下知奉レ願由、中西新八郎を以て申上る。從二義昭公一輝元卿・小早川左衞門佐へ被二仰聞一るは、隆景・輝元卿へ申達は、當家へ隨二幕下一身方救不レ給は、重て賴を掛る不レ可レ有二身方一候間、御加勢を可レ被レ遣と決定す。則攝州伊丹荒木方へ從二藝州一桂因幡守八百餘騎、雜賀三緘入道三百餘騎にて楯籠り、同國花隈城守荒木志摩守へ從二藝州一杉次郎左衞門千餘騎、鈴木孫市爲二加勢一楯籠、同國田中に將軍爲二御上洛一築二一城一、從二藝州一粟屋內藏允二千餘騎にて被二籠置一門跡の加勢とす。淡路岩屋城も勢微成りとて從二藝州一長屋左近大夫五百餘騎にて楯籠り、播州高砂別府へも加勢を被二籠置一。然る所に、播州別府小三郎長治は

織田信長卿へ恨有て遂二防戰一由、自今隨二御幕下一將軍義昭公御上洛の節御先陣可レ仕候間、戰二毛利家一御不禮申上候段御赦免被レ下候樣にと、淡河彈正を以て小早川隆景へ申達す。當家へ賴を掛る幕下救不レ給ば、諸方の御幕下無二覺束一可レ存間不レ可レ有二疎意一、向後御懇志可レ被レ成由にて、將軍義昭公より御劒を被レ下、輝元卿より鹿毛名馬金子三百兩、小早川隆景より白銀千枚、淡河彈正に被レ遣御暇被レ下、彈正歸國の節藝州の御懇意を承り、別所一族大悅不二大方一候。

別所長治毛利家へ降參の事

天正五年秋播磨國住人別所小三郎長治は、三好御追罰の節織田信長へ志を深く通じ、西國へ御働の時は可レ成二龍雲水魚思一、領地は依レ功可レ任レ望と被レ語ければ、長治不レ及レ辭、隨レ仰同國城主人質を取堅め、播州國人無二異儀一候間、御大將御一人長治居城へ被二下候はゞ、長治先鋒可レ仕由以二使者一信長に達す。依レ之羽柴筑前守秀吉に西國退治の大將被レ命、天正六年三月軍勢七千五百餘騎を相隨へ、播州に來り糟谷が館を本陣に定む。翌日國中の諸士秀吉に謁し、門前に馬蹄を置くに無レ所、別所山城守賀相、三宅肥前守治定、爲二軍評定一秀吉の館にて有二對面一、長治連々懇意不レ淺、西國依レ爲二御導一乍二不祥（肖）一信長の爲二代官一某罷下候。武門の面目也。各の異見を承らんと語る。兩人申すは世間の小迫合と事變り、輝元も數十ヶ國を領仕る名將の有レ聞大家なれば、五度も十度も九死一生の可レ有二大合戰一と軍談委細申しければ、秀吉被レ申は、各は先鋒なれば堅を破り强を摧くを專一と思はれよ、勝負の進退は大將に可レ被レ任とあれば、賀相治定聞レ之口を閉て退出す。別所の一族老臣指集評議す。別所山城守申すは、秀吉今度當國に下つて當家抔を如二僕從一侮る。國中の諸士頭を擧げさせず候。信長の可レ成二智略一有二表（映）裏一大將なれば、長治に爲レ致二先鋒一兩國靜謐の後秀吉に播州を給はり、當家滅亡させせん事鏡に如レ移。信長兼て長治と兄弟の好を結び、西國退治の事を思と兼々の密通所存

*同彈正忠は淡河彈正忠の意

ならば、今度信忠か信雄か一人差下し給はらんと相待つ所に、秀吉を大將に被レ命諸將へ慮外の次第、向後は信長と絕二和親一秀吉と一合戰仕り、安否を爰に可レ極と諸人の異見を問へば、其時別所小八郎治定十七歲、席に進で貴殿の言葉一々可レ然覺候。兵法には無レ備を討つを善とす。長僉議して戰に非レ利。我に人數五百被レ付ば、一夜討して秀吉を國中ヨリ可二追拂一と申す。別所甚太夫申すは、若年の御言葉には似合しく候へども、乍レ恐愚意を述るに唯一偏の義と存候。國郡の主互に彼を討ち我に併せんとするに、彼我地を侵して深入をせば、身方の兵を數十ヶ國を切取て、今は天下の主たり。一旦の勝利を思ひ給はず後戰の利を御分別あれと申し、先祖赤松圓心自二若縄城一起て達二本意一候元弘の吉例にまかせ、帝都に攻登り可レ建レ旗をと、賀相を始め末座の從類迄、一等して有二守拒之支度仕一。偖信長へ使者を上せ申すは、秀吉を西國爲二成敗一被二下向一候。最長治中國の爲二案內者一先陣を可レ仕候。毛利元就より輝元迄大國を數十ヶ國領し、兵多く將恩を荷ひ義を守る故、討平げん事早速には難レ叶。先士卒の後楯、人馬の休所、兵粮を蓄ふるの地、器械を見るの便に居城を修繕し、我根本を堅して後、敵を可二討平一と云ひ遣しければ、信長被レ任二其意一。於レ是長治一類志方城は櫛橋右京亮、神吉は神吉民部少輔、淡河は同彈正忠*、高砂は梶原平三兵衞、野口は長井四郎左衞門、端谷は衣笠豐前守皆鳥銃の玉を鑄、箭の鋌を磨て守備を計る。別所治定・同彥之進友之・同山城守賀相・三宅治忠、及、上月・中村・高橋・服部・後藤・長谷川・神澤・大村・光枝・上原・魚住・賀古・糟谷・來野・垂井・飯尾・藤田等は其城を引拂て總て七千五百餘騎、三木城道筋に落し穴を掘り柵を付、思々の智略を成して楯籠る。

別所重棟羽柴秀吉へ一身附長治へ異見の事

羽柴秀吉は、別所の一等逆心、何の宿意を狹んで如レ此候哉、偏に若氣の所レ致也。無智無謀の賀相の所爲ならん迚、別所孫右衛門重棟を呼て、小寺・明石は元來志を我爲にす。長治雖レ誘レ之從はじ。賀

和と爲二同胞一定二可レ爲二一身一と問ければ、重棟大に驚き、彼等逆意ありとは神明の有二照覽一努々不レ存所也。上も告知せざる事はあらじと疑はれ奉らん事恐入て候。小寺・明石は無二の御身方御實察に不レ可レ違と申ければ、然れば重棟に命じ以レ書長治を喩さる。其意趣は今度西國發向の事は、長治同盟たるに由て也。且信長も於二西國一軍旅の指揮長治に可二相議一とここそ命ぜられ候へ、俄に何成怨言有て、半に變て異心をか懷かれ候やと、秀吉同じければ、長治返答にも不レ及。使三度に至て多年輝元に恃まれし上は、又信長に可レ從無レ義。當城を葬地にて兄弟三人鬪死し、首、洛に入て信長に見參と思極むる所也。秀吉、我義既に盡せり。此上には長治を梟首せざらん限りは、再播州を不レ可レ出と自誓て三木城を被レ圍ける。抑々此三木城と申すは、前には巨川洋々とし、後には高山峨々たり。岩峙て道狹し。殊に累世の武將別所の一族は十三騎、雜兵八千餘騎心鐵石として要害を守る。然る所に、別所左近將監と光枝小太郞と先懸を論じて、既に鬪圖に及ばんとす。賀相中に隔りて、陣中に第一の憂は同祿と爭論との二也。若武者ども無二思慮一爭論を起すとも、制止せらるべき人々に非ずや。一朝の怒りに大義を忘るゝは、不忠の至也。敵に逢て社捨るは可レ捨命なれと、理を盡して諫めければ、其言に服して和解す。是ぞ別所滅亡の前兆可レ成。秀吉小寺を召て、陣所何れの所が可ならんと問はる。小寺申すは、書寫山は地形宜くして粮粟多し。諸方へ御手遣も可レ宜と申す。依レ之秀吉書寫山に營陣定め給ふ。

羽柴秀吉播州上月城攻給事

同年の秋、織田信長卿播州を爲二討隨一、羽柴筑前守播州へ差向給ひ、佐用郡上月城を取卷き攻給ふ。毛利家爲二御下知一備前國主浮田和泉守・備中國住人清水長左衞門尉・中島大炊助、爲二加勢一上月へ出張、城内に逆臣有て上月十郞を討て出す故、織田信長卿爲二御下知一、尼子孫四郞勝久・弟助四郞通久

に、山中鹿之助・龜井新十郎・池田東市介・立原源太兵衞其外數輩の侍大將指添へ、七千餘騎にて上月に被レ籠、中國より三木への絶ニ通路ー押置き、秀吉は岐阜へ歸陣仕り給ふ。

毛利輝元播州へ發向附尼子勝久攻給ふ事

天正六年四月、毛利輝元卿爲ニ御下知ー、吉川駿河守・小早川左衞門佐・毛利治部大輔爲ニ大將ー、中國の軍勢率ニ五萬餘騎ー播州へ出張、浮田和泉守・同與太郎は備前美作の勢を相隨へ、清水長左衞門・中島大炊介、備中勢八千召連れ致ニ先陣ー候。藝州の軍勢播州佐用郡へ着城、城の近山に構ニ陣城ー上月城の居體を見給へば、山高く雲を貫き、急攻の術絶えければ、諸大將へ有ニ軍談ー、勝負の損益を評し、銘々へ攻口を被レ渡鐵炮迫合有レ之。清水宗治・中島元行持口は、南方の尾崎谷合城外第一の難所なれば、可ニ働登ー事爲レ絶難地なれば、宗治・元行、隆景へ陣訴仕は、備中勢番手の惣攻赦免あらば、攻口より仕寄を付度由申上候へば、可レ任ニ其意ー由。長左衞門は、大炊助召連れ候金掘數十人に穴道を掘らせ、矢倉下迄掘寄る。宗治・元行は秀吉後詰の働を氣遣ひ、高倉山へ差向ひ備を立、待居る籠城の諸侍心苦に見えける。大炊助兩將へ申上るは、上方勢後詰働不レ成樣に堅固に御押被ニ仰付ーば、落城日數有間敷由申上ければ、譽感不レ淺候。羽柴秀吉・同小市郎秀長城内の急難を爲レ救、淺野彌兵衞・蜂須賀彦右衞門・山内猪右衞門・小寺官兵衞一萬餘隨身、高倉山に指向ひ軍の用意急也。宍戸安藝守・同善左衞門谷合より尾崎へ石劍の仕寄を付け陣屋を並べ居たり。雀部美作・河内左衞門に、七千餘騎を付て城中を押へ、自身は一萬餘騎を隨へ高倉山へ打て登れば、上方の大將本陣へ引退く。若者共追懸退後れたる敵二百餘討捕り、中島元行の搆置きし掘切落穴へ數輩落入り討捕る。宍戸安藝守勝鬨を作り惣掛りを用ひ、弓鐵炮百々放に仕ければ、織田信忠卿・佐久間右衞門尉・瀧川左近書寫山迄逃退き給ふ。此時宍戸安藝守・中島大炊助は、神吉城を爲レ介ケン備を寄す上方の軍勢へ矢を射掛け、鐵炮打懸くる間

に、神吉城へ兵粮を取納め、宍戸善左衛門に三百騎差添へ爲ニ加勢ニ被ニ籠置ー、上月の持口へ引入ける。

清水宗治へ禰屋一手鈴木・秋山逆心並尼子勝久切腹附山中鹿之助僞て毛利家へ降參の事

備中國高松城主清水長左衛門宗治は、播州へ出陣の留守を勤むる清水月清入道・中島九右衛門・林三郎左衛門より、上月へ注進するは、禰屋七郎兵衛一手の鈴木孫右衛門、禰屋が郎等秋山運右衛門、信長卿身方に成り、清水才太郎を人質に取り外の番侍に申は、信長卿御身方に被レ頼候。同意の方は人質を出し候へと申間、御歸陣御延引候はゞ、大事可ニ出來ーと告來る。是は長左衛門・大炊助上月城へ仕寄を付け、水道を掘切り城中及ニ難儀ー、上月城へ秀吉色々手遣あれ共、宗治・元行兼て得德の事なれば、秀吉ノ計略に不ニ落入ー候。小寺官兵衛は禰屋七郎兵衛と縁者にて、鈴木・秋山兼々通路仕りけり。秀吉の計略に、官兵衛を以て、禰屋が一手の家來身方に仕り給はゞ、清水男子を奪取り播州へ來れば、清水・中島も信長卿御方に可レ參、無レ左共上月城攻口を引去らば、落城有間敷候。清水・中島信長卿於ニ御方參ーは、鈴木・秋山へ兩郡可レ被レ下と秀吉誓紙被レ遣れば、兩人大きに悅び、才太郎を懷け取り船にて播州へ連れ可レ登支度也。中島九右衛門・清水右衛門申すは、才太郎懷け取候共、城外へ出るならば兩人才太郎共に可ニ討果ーと申し、高松本城へ押込め、番侍を付置く由上月へ注進仕る。宗治・元行承り不レ驚、我等大事の攻口を承り、妻子の難儀を非レ可レ存。弓取の習に、軍に出る日切に忘ニ其妻子ー、境を越ては離ニ其親ー武士の道、才太郎共に鈴木・秋山を急ぎ討果せよと申付け、郎等林三郎左衛門を戻し、上月城中へ晝夜仕寄を掘寄せければ、水の手の矢倉を掘崩しけり。上月籠城の諸大將心苦仕り難ニ抱叶ー由織田信長卿へ從ニ羽柴秀吉ー陣訴有ける由。信長卿驚き給ひ、城之介信忠卿に瀧川左近將監・佐久間右衛門尉・池田紀伊守、其外三萬餘騎を被ニ指添ー發向仕り給ふ。高倉山の峰々野原

に陣取り馬蹄を休め給ふ。隆景・元清五畿內の大勢隨身、上月へ發向の由義昭公へ有ニ陣訴一ば、輝元卿爲ニ先陣一吉川駿河守二萬餘騎にて上月へ着陣、數日御對陣白眼合ひ給ふ。輝元卿、淸水長左衞門・中島大炊助を被レ召、今度於ニ高松一禰屋が與力家臣、不思議の企ニ反逆一由無ニ覺束一候。當所攻口に中島大炊助殘置き、急ぎ高松城へ歸り、嫡子才太郎を取返し、境目の城々仕置申付候樣に御內意の趣、中島大炊助へ逐ニ相談一難レ辭、大炊助へ備中勢攻口を相渡し、宗治は成羽越前を召連れ高松へ歸城。鈴木・秋山へ申達するは、才太郎を可レ返、自今前世の通に忠節あらば本知相違有間敷候。及ニ異儀一ば乍ニ不便一才太郎共に鈴木・秋山を可ニ討果一とあれば、林三郎左衞門は秋山と親類故、種々に取扱ひ才太郎を返し、鈴木・秋山より人質を取り備中無事に仕り、宗治又上月へ參陣、攻口を相守候處に、織田信忠卿・羽柴筑前守・同小一郎は、五月二十一日未横雲の不レ引に、瀧川左近將監・佐久間右衞門尉・小寺官兵衞・淺野彌兵衞・峰須賀彥右衞門・山內猪右衞門、魚鱗形に三備軍鼓を調へ押し來る。吉川元長・吉見大藏大輔・福原出羽守は、織田信忠卿の先陣へ切掛る。宍戸安藝守・上原右衞門大夫・中島大炊助先手にて、猨が谷岨より城之介信忠卿の旗本へ突掛る。小早川藤四郞・立花左近・來島刑部は、高倉山の尾崎より信忠卿の跡備へ弓を射掛け、鐵砲を打掛け攻上る。信忠卿の先備數百宍戸安藝守へ討捕り、中島大炊助掘切置候落し穴へ落入り、信忠卿の御旗本四度路に成り浮立候節、吉川元長山陽道の勢二萬餘騎高倉山へ上り、鐵炮打掛け擧ニ凱歌一入亂れ相戰ふ。織田信忠卿・羽柴筑前守・同小一郎旗本より、諸手へ以ニ軍便一引退候樣に相觸る。藝州家の諸勢追慕ふ。上方勢は書寫山へ引退給ふ。後陣の者共二千餘吉川元長の手へ討捕り擧ニ勝鬨一。上月籠城の軍勢後詰の身方敗軍を見及び、城卒力を落し大半落失せければ、尼子孫四郞勝久・弟助四郞通久、防戰の軍慮盡き果て、天正六年五月二十九日自害し、名を滅亡の跡に殘しける。山中鹿之助は城外林間に偏人を立並べ防戰の用意を備へ、其後天野五郞右衞門攻口へ、芝橋大力之助爲ニ使者一申越は、尼子兄弟弓折れ矢種盡き自害を仕候。鹿

之助儀一命を御助候はゞ、藝州家先陣に加り忠節可レ仕候。一命安堵仕樣の御取持奉レ願候。若於レ不二相叶一は一族百餘人元明の御陣へ駈込討死可レ仕と申越候。隆景へ申上れば三將御評議の上にて、鹿之助事主君を再三取立發二天下一名譽の勇士也。一命無二相違一候間、向後對二當家一可レ被レ抽二忠節一の由、先知なれば周防德地の庄にて五千貫可レ被二宛行一の間、急ぎ可レ致二下城一の旨御下知也。鹿之助申すは、難レ有仕合其上過分の領地を被二仰付一事、忝と御禮を申上候へども、心掛りに相見候。從類を扶持仕り置き、向後は忠節を可レ存由、天野五郎右衞門へ懇に申上げ、親和の體に成候。武者振り器量無類の勇士也。

中國兵亂記三終

中國兵亂記 四

神吉民部を信忠卿攻給事

織田城之助信忠卿・羽柴筑前守は、同國別所小三郎從類神吉民部少輔居城を取卷き攻給へども、從二毛利家一有二加勢一數日持抱へ遂二防戰一、從二藝州一加勢の大將宍戸善左衛門・禰屋七郎兵衛・日幡六郎兵衛、手賦能く持堅め候。信忠卿秀吉の軍勢度々打負け、籠城の諸勢振二武威一成レ恐所に、民部伯父に神吉藤太夫と申家僕秀吉へ内通申上るは、城主民部儀は某可二討捕一、私親子に當城を被レ下籠城の諸人を被二助置一ば、忠節を可レ仕由申に付、從二信忠卿一可レ被レ任レ望之由有二御返答一。城主民部が首を切て秀吉の軍門に降る。其親を云へば甥也。其義を云へば主君也。暫時の命を繼がんと思へる藤太夫が所爲、城兵は論ずるに不レ及、信忠卿・秀吉も心中には是を乍レ惡、敵を來格せしめん爲なれば先是を被二捨置一ぬ。有レ志士は語つて口を噤ぎ、聞ては可二耳洗一。城内大將被レ討たりと寄手の軍勢聲々に呼はり、役所々へ亂入り、宍戸善左衛門・中島左兵衛は戸田が備を突崩し繰引にす。毛利家の軍勢は、宍戸善左衛門が備を助に來り危き備を引退く節、別所山城守・中村彌平次秀吉の旗本へ突掛れば、少の間相戰ひ書寫山へ繰引に仕り給ふ。

山中鹿之助被レ誅事

同年六月、毛利三將より將軍義昭公へ言上仕り給ひ、播州上月御合戰將軍被レ任二御利運一、尼子兄弟切腹仕り城卒致二退散一候。就レ其尼子家臣山中鹿之助一命安堵被二仰出一ば、加二御先陣一忠戰可レ仕と、天野五郎右衛門責口へ降人に罷出候趣御注進あれば、大樹の掟意に、鹿之助事、永祿の初に我祖父の

戚を借り毛利家を雖レ攻不レ叶。今又背レ我信長に隨身して失二勝利一、身の無二置所一故降參の事非二仁義之勇士一。後戰の種に可レ成者也。藝州へ下る道にて可二討果一と被二仰付一、天野五郎右衛門を討手に御定、爲二檢使一福間彦右衛門に跡を慕ひ參り、備中國高橋川邊にて可二討果一由、道筋の郡司へ先達て被二相觸一、山中鹿之助に浮田和泉守家臣戶川平右衛門・岡平內相添へ備前一宮へ送る。鹿之助爰にて神社を伏拜み心中に祈念し、備中國高松城主淸水長左衛門尉より、爲二馳走一難波傳兵衛・國府市正酒肴を持參す。板倉鄕轟橋を右へ行けば、うた子となる。鼓山蛙が鼻を過行けば、高松城大門虎口へ、林三郎左衛門・荒木三河參り向ふ。鹿之助は宗治へ懇に申置き、名は高松を行過ぎ、稻荷山を右に見て馬揃へ行著ける。服部鄕主禰屋七郎兵衛より家臣岡與左衛門・秋山運右衛門酒肴を持參す。大井川を上り刑部鄕鬼塚・松鼻を行過ぎ、經山麓に著ければ、鄕主中島大炊助より家臣中島與助・湯淺新藏酒肴持參す。鹿之助暫休息仕る。先年此邊へ大賀駿河守・尼子式部出陣の時、此新山迄人數指遣し候由。昔攝津國勝尾山二階堂にて、善導大師を法然上人夢中に有二對面一。然る時備中國新山へ善導大師を勸請仕り、千軒の寺を建立仕り、鄕民に佛道を勸め給ふ時、朝夕粥を支度する鍋今に有り。岩屋の大蛇佛法を聽聞仕り、毘沙門と現し給ふ事、殊勝の品々、山王權現を經山鎭守と崇め、新嵜千軒佛經讀誦の經塚あれば、經山と名付、無双の城地也。此所にて戰死の武士は、佛道之場に入ると同事なりと、懇に語り給ふ。峠坂を越え月羽鄕になれば、右を見れば宍粟村白木城、左の川向を見れば荒平白瀧川西氏が在城、昔に聞し名城也。月羽村になれば、天野五郎右衛門より爲二馳走一川村新左衛門・田中藤五郎、其外數輩酒肴を持參仕り暫及二酒宴一。阿惠川渡場に著ば、幸盛一番の船に乘渡り、石に腰をかけ休息して待居ける。般押戾れば幸盛が妻子家人共川中へ押出し、兼て相圖なれば船のノミを拔き水を入れ、妻子共周章を見て、幸盛は立上り悶こがれる處を、堤の內に隱置く天野が郎黨數人掛出で、河村新左衛門幸盛が右の腕を討落す。幸盛も左手にて拔合せ、散々に切合川村が肩先に切付

＊陰德記轉右衛門尉に作る

る。堤の内に隱置く侍數輩出合ひ戰ふ内に、福間彥右衛門・三上淡路・轉＊衛門組伏せ首を捕る時、内に願し西方安養極樂往生の素懷正念分明にして、萬德の洪名を唱去、此不遠の旨を能く悟り、唯心の淨土己が身の彌陀今現前すと覺悟せり。天野五郎右衛門幸盛が首を捕る。討手の内に死亡三人、手負四人有り。扨も手利の幸盛と譽感仕りける。船に乘後れじと芝橋大力之助其外郎黨船を月羽村迄乘流し取上る處を、野山宮内少輔・成羽越前・天野五郎右衛門が郎黨取卷き相戰ひ、夜に入れば郎黨は切拔け見失ひける。不便に存じ落したるとも申す也。幸盛一生の身を不レ離不動國行の太刀、大海の茶入、福間彥右衛門請取る。幸盛が首・妻・息女備後國鞆津へ召連ければ、將軍掟意にて鹿之助が首を西濱に掛られ、妻息女輝元卿爲二御下知一藝州草津の城主兒玉周防に預けられ、息女成人の後草津の長者方へ妻に遣はされける。不動國行の太刀輝元卿へ被二召上一供レ佛、施僧の便りに成とやらん。山中鹿之助事武勇達人と天下に無レ隱けれども、天命を不レ免其年三十九歳にて被二討亡一、名を後天に殘し不レ惜者はなし。

備中境目城々御仕置攝州荒木持の城々へ加勢を被レ籠事

同年七月播州上月御合戰、毛利家被レ得二勝利一御歸陣の節、小早川左衛門佐、備中國爲二御仕置一高松・幸山・經山三箇城へ被二立寄一、清水長左衛門・中島大炊助へ被二申渡一は、累年の軍功今度の軍忠無二比類一由、年來之被レ揚二忠烈一、長左衛門に感狀、并、鹿毛名馬を給る。國中不意の事有レ之時は、月清入道子息清水右衛門尉駈合相救候樣に被二仰渡一候。大炊助に感狀、并、駿名馬被レ下、刑部郷經山城に弟九右衛門殘し置き、不意の事有レ之節は駈合ひ候樣に被二仰渡一候。向後國中の諸式公事等兩人に可レ被レ任二進退一、自分にて難レ叶義有ば、毛利元清へも被レ請二評判一、可レ及二其沙汰一と被二仰渡一候。宗治・元行爲二思惟一人質の心に、宗治嫡男才太郎元行二男勘十郎を、三原城迄可二進置一由申上候へば、被

レ任二其意一兩人備後國に逗留仕候。中國の軍勢備州勤津に致二歸陣一。大樹感悦不レ淺、軍忠の侍大將粉骨の軍勢を御城に被レ召、爲レ將者治二敵國一則は忠賞雖レ不レ踰レ時、我國中に爲二蟄居一士卒の功を難レ謝と宣へば、皆感應式代す。今日は晴天なれば、軍勢に猿樂能を興し、戰勢を休し可二饗喰一と被レ仰。高名の侍大將粉骨の武士を棧敷へ被レ召、食籠酒佳肴種々の珍菓を賜り、感應人の心を碎きける節、備州別處小三郎長治は、羽柴筑前守と日々の迫合以二日記一御注進仕り、近日御加勢被レ爲レ下候樣にし二隆景卿へ申越候。攝州國主荒木攝津守村重も、織田上總介信長卿へ有レ恨て企二逆心一、義昭公御上洛被レ遊節は先陣を可レ仕候。毛利家へ被レ加二御下知一御加勢被レ下候樣にと御注進申上る。輝元卿隆景へ有二御評議一は、當家へ與する身方急難を不二救給一ば、後日に當家へ隨身の御身方不レ可レ有。急ぎ御加勢を可レ被レ上に決定し、御幕下の城々へ御加勢を被二籠置一、攝津伊丹城へ、桂因幡守・備中冠山城主禰屋與七郎・紀州住的場源七郎爲二大將一五百騎、尼崎城へ長屋右衛門大夫・松田左門・紀州住岡崎三郎太夫爲二大將一四百騎、花熊城守荒木志摩守・野口與一兵衛、從二藝州一爲二加勢一杉次郎左右衛門・紀州住雜賀三緘入道・鈴木孫市爲二大將一四百騎被二籠置一。藝州の大將中着岸の後者、藝州勢を指添へ、兵庫築島に在陣、乃美兵部少輔・兒玉內藏大輔・杉原播磨守は陸の爲二大將一播磨へ出陣、吉川元春・小早川隆景は軍船三百餘艘海上を漕連ね、高砂二見浦明石へ著船、海岸に構二要害一船兵を湊に引著け備を立て、羽柴秀吉は海邊三十餘箇所砦を築き、三木城へ通路を取切り對陣す。別所長治は爲レ試に秀吉の要害へ相働き、古田吉左衛門・神子田半左衛門出城へ不意に突掛り、古田を射落し討捕り隨兵多數討捕る。竹中半兵衛も鐵炮手を負ふ。長治隨兵を三木城へ引入る。藝州家より後詰に來り、空く日を送る事非二本意一、九月十日に秀吉南陣へ可二突掛一、城兵を出合せ可レ被二相戰一と有二密使一ば、長治返答に、仰可レ然候へども當城に兵粮無レ之候。九月夜丑刻に城兵を案內に可レ出、隨二其將一米穀を被二運納一ば何よりの可レ爲二御助一と返答あれば、約束の日になれば、城內より爲二案內者一二百人、明れば

十日の夜丑の刻に、毛利家將中島九右衞門・生石中務・頓宮次郎左衞門兵粮の人夫を相隨へ、平田要害谷大膳助陣屋に火を掛、擧レ鬨鐵炮を打掛れば、平田城兵寢耳に是を聞き、騷動無レ限、門を開き十七八人突て出づるを、中島九右衞門以二一手一討捕る。其後谷大膳助も二十騎計相隨へ以二長刀一相働き、八人に手を負はせ三人斬伏る時、阿部左衞門次郎・湯淺新藏・中島彥十郎掛り合せ、大膳助を突伏せ首を得たり。其間に三木城へ加勢に被二籠置一候毛利家の侍、手島東市助・江口左京・生石中務人夫三千人に兵粮を持せ、下知して三木城へ入納め、夜明方に平田の要害を踏散し引取る時、秀吉の近士旗本千騎計り谷大膳が急難を救はんと駈來り、中村と三木との通路を取切り笠坂へ上り、擧レ鬨鐵炮打掛け相戰ふ。別所の隨兵二千騎計り圓備に作り、大村の前にて秀吉と相戰ふ內に、毛利家より三木城へ兵粮を籠る加勢の侍大將軍勢無レ恙、明石・大久保・長池・志水・福里・二見・藤江・高砂、毛利家の陣所へ引取る。

攝州花熊城を池田信輝攻取給事

攝州花熊城と播州三木城と通路して互に助合ひ、別所長治日々に募二武威一。去れども花熊城遠路にして難所なれば、淡河一城にては便に難レ成思ひ、攝州第一の嶮難丹生寺に砦を拵へ、近邊の農武士を一揆の爲ニ大將ニ五百餘籠置き、備中國住人中島左京・禰屋與七郎・日幡八郎左衞門・生石中務三百騎相隨へ、爲二檢使一籠城。花熊城より丹生山要害へ米穀を運び三木城へ取込む故に、別所長治は度々軍に得二勝利一。依レ之池田勝三郎信輝子息紀伊守に、花熊攻手の大將を被レ命、丹生山の要害と花熊城と間を取切り、諏訪が峯に池田信輝二男古新在陣。三木有馬より海邊へ出る爲レ絕二通路一、生田森池田紀伊守在陣。北野村城が口村より花熊城中へ出入を爲レ押、兵庫築島藝州勢。雜賀者ども爲レ押、池田家臣伊木淸兵衞・森寺政右衞門金剛寺山に在陣。三木有馬より海邊へ絕二通路一池田の軍勢、丹生山麓

迄物見に働き、花熊の西上郡村石井村にて迫合有レ之節、丹生山城兵小平野村の山の出崎より石を剱落し、池田の軍兵を討捕る。秀吉は丹生山要害に楯籠り、近郷農民籠城の留守、妻子を搦捕り、丹生山要害の門前に搦置き、我夫一類へ城中に火を付燒落せと、銘々より通路せよ。左有らば命を助け褒美は可レ任レ望と通達すれば、丹生山城内へ通じければ、籠城の農民、妻子を被ニ生捕一ければ、從ニ本陣一夜討の大將を被レ下ば持口を可ニ燒拂一と返答す。秀吉は中西彌五作・神吉藤太夫を爲ニ大將一、夜討に馴たる者三百餘、雨風の烈しき暗き夜を待居ければ、無レ程雨風仕ける夜、一身の者云合せ丹生山へ忍寄り鬨を擧れば、城中寢耳に是を聞き鎧よ弓よと騷動仕ける内に、城中の小屋の三方より出火あれば、麓迄如レ晝。從ニ毛利家一加勢の軍士は、國中の一揆有ニ反逆一を兼て知り、拔道を拵置き前後を定め繰引に仕り、無ニ越度一毛利家の陣所へ引入。花熊城より三木城へ絶ニ通路一、別所小三郎及ニ飢渇一共、籠城堅固に相勤め、晝夜遂ニ防戰一所々軍功無ニ比類一。爰に備前國主浮田、去暮より小西彌十郎・小寺官兵衞を頼み、秀吉へ懇望仕り織田信長卿へ御身方仕る故、明石の大久保邊に於て可レ働圖をはづし候へば、藝州の三將評議の上、清水長左衞門・中島大炊助に、歸國仕て備前境目備中國城々普代等申付候樣にと隆景御内意有て、備中へ歸陣仕り備前國境を巡見仕り、城々に櫓を上げ土居を築き屏を上げ、所々掘切り弓矢鐵炮玉藥を増す。城々は備前加茂虎倉山、備中冠山城、忍山、宮路山、鍛冶屋山、生石、鴨庄、日幡城、松島、庭瀨、龜山、常山城を普請仕り、軍勢を配分仕り加勢を籠て相守る。

宇喜多和泉守逆心の事

天正八年備前國主浮田和泉守病氣を申立て、播州より令ニ歸陣一爲ニ養生一軍役不勤、浪人を集め信長卿へ内通の由及レ承、清水長左衞門・中島大炊助より藝州へ遂ニ注進一。直家は家老を集め、於ニ播州一秀吉毛利家を手強く會釋はるゝ樣子は、一兩年の内に中國を手に被レ入事無レ疑。當家も信長卿加ニ先陣一

可レ遂ニ忠節一と存候へども、藝州に遣置く人質同名左京儀如何と存由被レ仰時、家臣岡越前申は、可レ然功者の侍大將一兩人被レ遣、以ニ御術一御歸國被レ遊候樣に被ニ御遣一可レ然候。何れを可レ被レ遣と御評定の上にて、浮田織部・中桐與兵衛可レ然と同音に申上れば、其意に相定まり、織部親類二十人餘、若黨足輕に作り立て、與兵衛も同意に用意仕り、藝州へ下る。備中近國なれば清水宗治・中島元行より、先達て藝州へ遂ニ注進一於ニ藝州一御評議の上、浮田左京居宅へ番士を增し相待つ處に、浮田織部・中桐與兵衛見廻の體にて有ニ下著一、左京居宅へ不レ入町屋に致ニ旅宿一候。從ニ輝元卿一井上又右衛門・鵜飼新右衛門爲ニ兩使一左京居宅へ被レ遣、左京拜伏對面す。輝元卿御口上に、和泉儀秀吉を賴み信長へ致ニ降參一之趣被レ及ニ聞召一たり。就レ夫左京爲レ迎浮田・中桐致ニ當着一候。浮田は天下に無レ隱表裏の侍、播州に在陣の砌秀吉へ內通の聞えあり。侍は渡り者、信長以ニ威光一家を被レ立事尤也。當家は正兵仁義の以ニ弓矢一敵を令ニ退治一也。左京儀は一方の大將に可レ被レ成者也。命を助け歸國申付由にて、左京に名劍名馬を被レ下御暇被レ遣候。浮田左京は感泣を流し、難レ有段不レ被ニ申上一候。御前可レ然樣に御兩使へ奉レ願候。浮田織部・中桐與兵衛へ、今度左京爲レ迎當着苦勞に候と被レ仰、銀子百枚宛兩人へ被レ爲レ下御暇を被レ下候。浮田・中桐申上るは、聖賢の君へ直家志天道に可レ盡者也と、御返答申上罷立候。浦兵部・坂新左衛門二百騎召連れ、浮田左京を慕ひ送る。直家は自國の船を宮の浦、笠岡、鞆津島々へ乘廻し、陸地にて左京及ニ難儀一ば、何れの浦よりも船にて可レ爲ニ着船一術也。備中高橋川迄歸路の節、村上彈正・笠岡掃部・小田猿掛の者共左京を可ニ討留一と追懸る。浦兵部無用の違亂と挨拶の內に、早島邊より船に乘り、備前へ着船。輝元卿其外の諸將、天下無双の賢將と其節の沙汰也。

備前兒島蜂濱合戰幷宇喜多忠家討死の事

同年八月備前守護浮田和泉守直家は、對ニ毛利家一企ニ逆心一織田信長卿御身方に成り、備前兒島蜂濱

二子山の要害に、弟同名與太郎基家を爲ニ大將ト五百餘騎籠置く。此由淸水長左衞門・中島大炊助より藝州へ注進あれば、小早川左衞門佐隆景、三萬餘騎を引率出張。隨身の武士河野兵部大夫通直・毛利治部大夫元淸・同少輔七郎元康・天野六郞元政・出羽十郎元秋・內藤下野守隆春・宍戸安藝守隆家・上原右衞門大夫元祐・梨羽中務大夫・杉原播磨守・古志兵部少輔・有地民部大夫・粟原左衞門尉・小田孫兵衞備へより、羽柴秀吉の魁、蜂須賀彥右衞門・小寺官兵衞備へより拔駈して眞先に進み、楢崎景忠堆を登て木陰より不意に突懸り候節、有地元盛は堆を廻て鑓を合せ、一番鑓と呼り其場を去て一二を爭ひ、鑓場の有ニ口論ー。堆の木陰は伏勢ありと敵猶豫して、手綱を控て不レ進る其間に、身方の勢前後の備を決定す。小早川魁浦宗勝射手の達者を五百餘騎、楯を築並べ矢を放掛る。其間に関を作て駈出る。忠家が隨兵五百餘騎追駈け、與太郎其場を不レ去采配を取て返せ〳〵と云へ共不レ返。忠家其日の裝束には、紺糸縅の鎧に四尺八寸の太刀を帶び、赤根染の羽織を著て、一戰に討負けたれば、勇士の名をば穢し間敷と駒を引返す時、備後國住人古志兵部少輔能き敵と見なし、我が備を取卷き馳寄て組落ち首を捕る。忠家が郎黨牛之助勇士の名を顯し、主を討せて無ニ生甲斐ーと、有地民部少輔五十餘騎控たる中へ面も不レ振蒐入、馬上より組落て首を搔被レ落る。羽柴秀吉は三萬餘騎荒手を入替亂れ戰へども、折節西風砂をはげしく吹立て、敵身方眼を閉て相引にす。秀吉の馬の三頭を毛利治部大夫元淸の近習突きければ、馬騷立て身方の陣へ駈込み、平野に横はり馬蹄の障と成る。今は秀吉、一騎も不レ殘邑久郡正木へ取退き、家中へ討捕る首實檢仕給ふ。浮田直家は佐々木美作守在城の蜂濱八幡山楠が峯より出で、西大寺へ人數を引入給ひ、見苦しかりし分野也。小早川隆景卿より、兒島には浦兵部少輔宗勝・同小輔四郎元信を殘置き、備中高松へ歸陣也。

宇喜多直家備中へ働附從ニ毛利家ー城の加勢を被レ籠事

同年九月浮田和泉守は、藝州方境目備中國冠山城へ數千騎にて相働、持楯龜甲を突寄せ関を擧げ、鐵炮を打懸塀際迄付く。冠山城守禰屋七郎兵衛水の手へ出張り遂㆓防戰㆒、敵弱々と會釋ふ。七郎兵衛申すは、敵の弱き振は方便成ぞ。身方を引入よと成㆓下知㆒、城兵引入ば敵大勢慕ひ來る。●木戸口にて七郎兵衛●同 孫市郎●鳥越左兵衛●武井大膳●林三郎左衛門●同 與九郎●佐野和泉●岩田内膳●庄九郎、禰屋が一手小返して相戰ふ。浮田方の大將長賴七郎を討捕る。今田右衛門●松原久右衛門●國富源左衛門●柿次郎左衛門●津島七右衛門●寺尾作右衛門守返し、一手に成て進み來る。禰屋七郎兵衛は二の曲輪の門外へ出で、多勢成夜討にしたるぞ。不㆑働物ぞ引取れと下知す。城兵引入らんと仕ける時敵慕ひ付入る。禰屋與七郎小返して相戰、敵二十騎計討捕る。城内相圖の狼煙を揚ぐれば、所々の身方駈付る。中島大炊助矢喰の宮提へ出張る時、一手の組侍江口左京亮●岡安藝●友野石見●明石兵部●土屋四郎左衛門二百騎計冠山城へ志し來る時、船木藤左衛門より有㆓軍使㆒。備前勢大軍に候。御物見被㆑遣可㆑然と申す。家臣中島孫兵衛●同左京進を遣す。立歸り申すは、大將は岡平内●信原内藏允●戸川平右衛門●今田右衛門、土田村日反寺山峰所々に備を立控へたり。中島大炊助は、弟九右衛門に湯淺九郎兵衛●同八兵衛●國府與三右衛門●近藤新九郎●中島四郎左衛門●同與兵衛●同孫右衛門を指添へ、福崎村の土手に伏居り、此方より取合を始むれば、日反寺山峰の敵に鐵炮を打懸、東阿曾村の堤より閧を擧げて冠山城へ駈付れば、敵兵朱福寺山へ引上る。中島九右衛門一手士師平藏●拼和助右衛門鐵炮を打懸れば、信原内藏允●岡平内●今田左衛門備四度路に成ける時、中島九右衛門より鑓を入る。備前の國富源藏と名乘て懸る。國府與三衛門鑓突き首を討捕る。浮田四郎兵衛と名乘懸け中島孫兵衛と組み、四郎兵衛が首を取り、金光文右衛門と名乘り湯淺新藏討捕り、林三郎兵衛を備前の寺尾孫四郎討捕る。檜村長左衛門●浮田久七二人、中島彦十郎に切て懸るを、暫相戰ひ二人ともに討捕る。中島與助鐵炮手を負ひ落馬仕けるを、敵三騎にて取卷き可㆓討捕㆒と見ける時、中島大炊助主從七騎に

て馬を乘寄せ、與助討すなと下知すれば、隨兵二十騎計突懸る。三騎ともに討捕り、與助を近藤新九郎肩に引懸け、身方の陣へ引入る。敵方の大將信原内藏允・岡平内は、身方所々にて討れければ鍛冶屋山城へ引上る。備中勢も勝鬨を作り冠山城へ引入る。長船又右衞門は三十騎計隨へ、朱福寺山に人數を立て、諸勢を集め金床山へ引登る、武者振見事也。身方の侍大將も、冠山城内へ引入門戸を指、討捕首於二城内一改に、中島大炊助手へ首五十七討捕る。清水長左衞門一手へ首七十一討捕る。禰屋七郎兵衞・同孫一郎一手へ八十六討捕趣、明る十八日に御本陣へ御注進申上れば、不意の合戰に所々よりも早速出合、大軍を追崩し數輩討捕段、御感悦の趣、隆景卿より中島大炊助に感狀を給はる。同十月二十日の夜、浮田方より備中庄庭瀨松島日幡城へ備前勢相働き、備中の侍大將馳合數多討捕候趣、御注進申上候へば、御感悦不レ淺由、將軍義昭公御滿悅被レ爲レ成、輝元卿・小早川左衞門佐御感悦の御書を給はる。藝州と信長卿と、備中境目の城々を普請被レ成、武道具を增し候へと被レ仰付、備前國城々へ加勢を被二仰付一、高松城へ御加勢爲二大將一粟屋信濃守・末及左右衞門に二千騎を被レ指添一。中島大炊助は、高松番丘の丸持口なれば清水と致二軍談一、籠城の諸將へ指引致二異見一候樣にと被二仰付一。冠山城守禰屋七郎兵衞加勢に、松田左門・三村孫太郎を爲二大將一三百騎被二籠置一。宮路山城守乃美四郎元信・船木藤左衞門に四百騎被二指添一被二籠置一。岩崎城守赤濱新之丞に、兒玉三郎右衞門加勢爲二大將一百騎被二籠置一。鴨庄城守上山兵庫加番に生石中務、二の丸へ御旗本より加勢の爲二大將一桂民部少輔三百騎にて楯籠る。日幡城守日幡六郎兵衞爲二加勢一、上原右衞門太夫に四百騎被二籠置一。其外河野兵部少輔・增田玄蕃・立花左近將監・福原出羽守・吉見大藏大輔・大庭加賀守・三好備後守・南三河守・天野六郎・熊谷豐前守は長州藪堀を前に構へ、日幡山々通路の難所に在陣、上方勢を可レ被二討取一御術決定す。及二合戰一時は輝元卿は小田郡猿掛山へ御出張、其外御一門の御大將衆、幸山作山天神山岩崎に御在陣也。

織田信長卿淸水宗治中島元行へ御方仕樣にと御書參事

天正九年二月二十四日、從二織田信長卿一爲二使僧一東福寺大機を被レ下。御口上御書曰、度々申遣通、又此度從二直家方一内通之儀、於レ可レ爲二納得一は本望之至、自二返答一信忠・信雄指下し可レ申候。仍而筆使如レ件。

二月二十二日　信長

中島大炊助殿

中島大炊助は使僧に對面して、信長卿御使札、家の面目御請申上度儀に候へども、從二先祖一正兵仁義の弓矢を心懸、道に違ふ事不レ存候。元就・輝元に至て一塵も恨無二御座一候。不祥の我々に、天下御爭の境目を自二輝元一被レ賴事、生前の面目、死後の名譽に候へば、背二毛利家一信長卿加二御陣所一申事不二存寄一儀也。此旨宜可レ預二御聞達一候ト使僧に申達し候趣、三原へ御注進申上候へば、無二之忠義不レ淺由被二仰下一候。中國殘侍大將へも、信長卿御計略狀遂二披見一させ候。

備中國高松城其外要害へ從二藝州一加勢を被レ籠事

天正九年十月下旬將軍義昭公と織田信長と矛盾の節、備中國境を守る淸水長左衛門・中島大炊助を、從二隆景卿一備後國三原城へ被二呼寄一、將軍義昭公掟意毛利輝元卿御内意被二仰渡一、其上にて織田上總介信長當家領國へ働の企有レ之、織田御次丸・羽柴筑前守を爲二大將一諸國の軍勢數萬騎、來初夏の頃令二進發一備前表へ發向の由上方より有二注進一。定て浮田家臣共可レ爲二案内者一先境目各守所の城々へ取詰可二責戰一(畧法)。其内以二計策一和談術品々可レ有、其時信長へ内通を志す方も有レ之由、從來其例有レ之ば、當家より比與に不レ存候。左樣の志有らん人々は信長へ隨ひ、立レ身起レ家給へと也。其時兩人、

*清水長左衛門平宗治山来覺書には末及左衛門を末近七左衛門に作る

案外成仰哉。左樣無ニ御心許一被ニ思召一、我々に大事の境目城々守護被ニ仰付ニ者か、左樣の心底努々不レ可レ有。一筋に屬ニ御身方一、捨ニ一命一城々守護可レ仕由一同に申せば、隆景卿、各の志致ニ感悦一候。左有れば勝負の損益を評定せんと、高松城へ清水長左衛門宗治、同所池下丸へ兄月清入道・嫡子右衛門尉、同所二の丸に中島大炊助元行、番丘丸へ嫡子又十郎、一手の侍大將共に、大炊助は長左衛門甥聟也。二手の軍勢一萬餘騎、從ニ御旗本一加勢の大將末及左衛門*爲ニ御目代一粟屋信濃守雜兵二千餘を被ニ指添一、都合一萬二千餘籠城也。中島大炊助は一手與力共七百餘相隨へ、幸山城加番相勤候へども、今度は輝元卿御出張幸山へ御入城の由に付、國司壹岐守を殘置き、京山城小寺要害には、弟中島九郎右衛門に相守らせ、大炊助は高松二の丸・番丘丸へ楯籠、清水と軍談諸物頭へ指引異見仕樣に被レ仰渡、二男勘十郎を清水右衛尉養子に被ニ相定一候。三男彥三郎を同國下原鄉伊世（伊世部山）山城主明石兵部少輔家督被ニ仰付一候。城内領分和合して、忠義を相守候へとの儀也。

小早川隆景卿より清水宗治中島元行へ神文給事

高松砦冠山城守清水一手侍大將禰屋七郎兵衛久秀は、中島大炊助姉聟也。爲ニ加勢一三村孫太郎・松田左門（先年備前半國主金川城主松田左近將監二男也。）百三十騎被ニ指添一、都合三百騎雜兵三千六百餘籠城也。日幡城主日幡六郎兵衛・同八郎左衛門一族百三十騎、從ニ御旗本一爲ニ加勢一上原右衛門大夫元祐百七十騎、雜兵三千八百餘籠城也。上原は前の大守元就公御聟也。日幡は中島元行妹聟也。高松城助けの砦なれば、城内武略して爲レ令ニ通達一一族を被ニ籠置一の由。長州藪楯山に來島刑部三千餘にて陣取る。鴨庄城主上山兵庫、加番生石中務・同惣右衛門兩家百四十騎、從ニ藝州一加勢の大將桂民部大夫・同右衛門大夫百五十騎、雜兵三千二百餘籠城也。天神山峯に小田孫兵衛・細川兵部・杉原播磨守控へたり。岩崎城主赤濱新之丞二十騎、從ニ藝州一加勢の大將兒玉三郎右衛門四十騎、雜兵九百餘籠城也。岩崎

山に檜崎十兵衞・木原兵部・井上伯耆守控へたり。

隆景卿被二申渡一は、秀吉高松城へ責懸り候はゞ、岩崎城へ元淸入城申間、兩人は旗本の先手に罷有、諸勢へ致二案內一候樣にと被二仰渡一候。

隆景卿へ長左衞門・大炊助申上るは、宮路山城は鍛冶山城へ押の城地に御座候。御旗本より大身衆被二仰付一可レ然由申達候へば、被レ得二其意一、浦兵部二男乃美四郎元信百五十騎、爲二案內者一、船木藤左衞門に五十騎被二指添一、穢多が要害に楯籠る。乃美四郎本丸に籠り、船木は穢多が丸に楯籠る。西國無双の宗勝が男子なれば、賴母敷思ひける。城の勤番加勢被二仰付一、饗應樣々の上にて、淸水長左衞門に御盃を被レ下上に、僧定秀御腰物國俊脇指、中島大炊助に御盃の上に、光弘刀左脇指致二頂戴一候。隆景卿淸水月淸に御盃を被レ下上に貞次御腰物、禰屋七郎兵衞に、御盃の上に國光御腰物、日幡六郎兵衞に貞次御腰物、上山兵庫に秋廣御腰物被レ下候。各申上るは、御利運上重而目出度御祝を可レ致二拜領一と申上げ御腰物頂戴仕候時、淸水長左衞門申は、各御請難二心得一候。羽柴秀吉數百の諸將を相隨へ數萬騎にて押下る聞え有レ之ば、境目の小城面々持口にて防留め、始終得二勝利一事は難レ有。唯及二防戰一不レ叶時は各城を爲レ枕切腹可レ被二相究一、爲レ其に御腰物頂戴仕候。重而目出度御祝可レ被レ下と私不レ存と申て御前を罷立候。其言葉無二相違一數日遂二防戰一、其後籠城の勢命に替り切腹仕、天下太平の和談調候。

此時從二隆景卿一淸水長左衞門・中島大炊助へ同文章の御神文に曰、

御方事累年對二當家一忠節他に無類之儀也。向後爲レ何變化雖レ有レ之見放申間敷候。若此趣於レ僞者可レ蒙二日本國中大小神祇八幡菩薩殊に嚴島大明神天滿大自在天神御罰一者也。仍誓紙如レ件。

十一月朔日　　隆景判

中島大炊助殿

將軍義昭公へ淸水宗治中島元行致二參上一事

隆景卿被レ申は、淸水長左衞門・中島大炊助は自レ是鞆津へ致二參上一、將軍義昭公へ懸二御目一急令二歸國一境目の城々普請等申付候樣に被二申渡一御暇を被レ下候。兩人は鞆津へ致二參上一、以二上野中務大夫・柳澤監物一達二上聞一候へば、北の丸へ御下り兩人を近く召して將軍掟意に、近年於二諸國一被レ勵二武功一粉骨之段不レ可二勝計一候。箇樣の時は雖レ行二忠賞一我爲二信長一西國に身を蟄す。來春は信長以二大軍一中州へ押下る聞え有レ之、各於二在城一信長勢相押へ可レ被レ遂二忠戰一候。尤西國勢を遣し可レ遂二後詰一と被二仰出一候。長左衞門大炊助御請申上る。貴賤仁義の道に暗く、五倫の道廢れ、將軍背二掟意一をも如レ此の御住居恐歎敷奉レ存候。君有レ仁則臣以レ義報ずるは武士の道、私共存命の内は信長勢備中へ入申間敷候。三家へ被レ加二御下知一、早速被レ遂二御利運一、御上洛の御先陣兩人可レ仕と申上れば、御感悅の上淸水長左衞門に直次の御腰物、中島大炊助に家助の御腰物致二拜領一御暇を被レ下令二歸國一、幕下の城々令二巡見一要害の普請等仕置を申渡候。

宇喜多直家病死の事

備前國主宇喜多和泉守直家は、近年持病日々重り、天正九年冬より以の外血下り、持病重り候由風聞あれども、其實正難レ知處に、同年極月御野郡濱野村の飢人、毎朝絹に大血の付たる物をひろひたる由にて賣買に出す。備中侍大將不審に存じ、宇喜多直家持病の下血重り候物と心付、彌心付候へば、同十年正月九日朝より右の大血の付たる物不レ流。備中國より付置候目付の者ども、直家被二相果一候由に付、備中より一宗の僧侶を遣し聞屆候へば、天正十年正月九日に被二相果一、法名凉雲星友居士、穩密にて於二平福院一被レ遂二法事一候由承屆、中島大炊助より、右の趣吉田へ御注進申上候。

從₌信長₋卿備中高松城攻幷淸水宗治中島元行へ神文給事

天正十年三月十二日、織田上總介信長卿爲₌先陣₋、織田御次丸・羽柴筑前守秀吉率₌數萬之軍兵₋、中國二十州太守毛利家爲₌退治₋備前表へ有₌下著₋。宇喜多家臣ども爲₌案內者₋、翌日備中國宮內迄兩使蜂須賀彥右衞門尉・黑田官兵衞尉被₌指越₋、信長卿再往御書幷御誓紙を、同國吉備津宮神主堀家掃部高松城內へ持參仕、御口上の趣數々。御誓紙に曰、

今度兩國爲₌成敗₋同性(姓)次丸・柴羽筑前守を指下候。淸水長左衞門・中島大炊助正兵仁義の勇士と多年及₋聞たり。此度備中備後兩人へ可₌宛行₋。背₋毛利家₋筑前守と申談、西國の可₋爲₋導。委細は筑前守可₌申談₋也。前書の通於₋僞は、可₋蒙₌日本國中大小之神祇殊宇佐八幡大神宮天滿大自在天神御罰₋者也。如₋件。

三月八日　　　信　長　御判

淸水長左衞門殿

中島大炊助殿

其時兩人御請に、信長卿任₌御意₋度儀なれども、數年毛利家に隨ひ、天下境目の守護を被₋賴懇志不₋淺候。背₌毛利家₋西國の御先手仕らん事屍の上の恥辱也。兩國を給り雖₋誇₌榮花₋何の有₌面目₋世間に樂あらん。此旨宜₋預₌御聞達₋と書留て、堀家掃部に渡せば、兩使も口を緘んで秀吉卿御陣所に歸る。秀吉卿是を御聞、再往以₌兩使₋被₌仰越₋は、此度信長卿爲₌代官₋不肖の某中國へ罷下は、御兩人と申談西國退治の先鋒賴入候樣にとの儀也。此度屬₌信長₋給とも、屍の上の恥辱とは難₋申、領知一郡二郡の御兩人へ兩國被₌宛行₋國主と成給ふ事武德顯處也。去れば語曰、不₋取₌天與₋ば返(却)て受₌其咎₋、時至而不₋行逢₌其殃₋と云へり。是非御身方被₋申ば信長可₋爲₌感悅₋とあれば、又長左衞門・大炊

助は、自ニ最前ー申上通、輝元・隆景累年の懇意不レ淺候。毛利家も數ケ國を領す大家なれば、大臣賢臣數多有レ之處に、義昭公と信長卿御爭の天下境目の守護を、不肖の我々式に被レ賴儀、家の面目死後の名譽也。貞女不レ見ニ兩夫ー、賢臣不レ仕ニ二君ーと承る。忠功こそ難レ成とも、信長卿御方に以レ不レ參、將軍義昭公へ御忠節、輝元方へ志に仕候。此旨宜レ預ニ聞達ーと申切て、信長卿御誓紙、秀吉副狀籠城の物頭へ披見させ、其後隆景卿へ委細注進すれば、無二の忠義不レ淺の由、兩人が眞實御感悅。上下感聲不ニ大形ー。武將たらん者はかくありたけれ。忠義の名は世に不レ朽と秀吉卿宣ふ由。

織田御次丸羽柴秀吉備中宮路山城攻之事

同年三月十五日、織田御次丸・羽柴筑前守秀吉は備前一の宮に在陣、同左衞門秀長、板倉郷鞍山近く峰々平等に軍勢充滿仕たり。同十六日に鍛冶屋山城へ御次丸秀吉入城。同日より乃美四郎元信が守上足守リ村宮路山城を攻んと、藝州陣所の通路をば、以ニ數萬騎ー近山峰谷を取切絕ニ通路ー、一時に攻落さんと惣攻にす。城內の矢倉狹間より弓鐵炮を射出し、堅固に相抱、遂ニ防戰ー處に、秀吉より宇喜多家臣信原內藏允を以て、城內へ和談の術樣々有レ之、穢多が曲輪の大將船木藤左衞門遂ニ密通ー、扱の品々取成し、宮路山城を宇喜多方へ相渡し、乃美四郎は備後國居城へ引籠る。藤左衞門は宇喜多備へ駈込み、殘る城々を攻給ふ。案內者仕ける穢多が要害一番に降參仕れば、秀吉武威廣大に成給ふ。淸水中島申すは、失ニ武威ー乃美四郎は浦兵部宗勝が男子なれば、晴々敷可レ遂ニ防戰ーと賴母敷存ずる處に、親に不レ似未練の働也。暫時の命を惜みて勇士の道を失ふ、淺間敷所存也と。

秀吉卿備中冠山城攻附城主禰屋七郎兵衞働の事

同年三月十七日、織田御次丸は龍王山へ構ニ陣城ー入城、羽柴秀吉は四塚門前妙現山の峰々に構ニ陣

城ニ、金床山に家々の旗を立並べ冠山城を遠巻仕、信長卿より爲ニ兩使ト、杉原七郎左衞門•仙石權兵衞を被レ遣、口上を、神主堀家掃部城內へ被ニ著越ー候。城主禰屋七郎兵衞事、武勇達人と被レ及ニ聞召ーたり。今度屬ニ信長ー次丸秀吉と申談、西國の先鋒御賴被レ成由被ニ仰下ー候。七郎兵衞御請に、信長卿任ニ御意ー度儀なれども、數年隨ニ毛利家ー信長卿と御境目に在城仕、輝元•隆景懇意不レ淺處に、今度背ニ毛利家ー御身方仕候へば、失ニ忠義ー候間、毛利家に罷有遂ニ防戰ー、其上にて切腹可レ仕由御返答申上候へば、三月二十日寅の刻未横雲の不レ引に、三井谷南のうね日指山の峰に築ニ陣城ー、北の平•扇子谷山の峰、一國山の峰、朱福寺山へ人數を備へ、寺坂口、反山筒坂口へ押寄、三方より責懸り、三方の柵に付、乾堀へ飛入り、塀櫓を引破らんとす。城內も待向ふ敵なれば少も不レ痰、將軍義昭公御旗輝元卿の赤旗城中に押立、矢倉狹間より鐵炮を打懸る事如ニ雨降ー、上方勢あぐみ漂ふ間に、死亡手負數を不レ知。朱福寺口は、秀吉卿御旗本杉原七郎左衞門先手にて、稠敷責給ふ。城兵も手賦り能く、禰屋與七郎•同孫市郎•佐野和泉•庄九郎•守屋新之丞遂ニ防戰ー、籠城堅固に相抱處に、三月二十四日夜、伊賀忍者城中へ火を付くれば、鐵炮の藥藏に火移り騷動なし、寺口の塀を乘越、秀吉卿軍勢城內へ亂入る時、加藤虎之助は城兵武井將監と相戰ひ、將監を討捕、杉原七郎左衞門•內山九藏•美濃部與藤次、城兵秋山新四郎と迫合ひ、秋山を討捕り、上勢城內へ入亂るゝ。伊賀•甲賀の者所々に火を付候時、禰屋七郎兵衞申すは、敵以ニ數萬騎ー口々を相押候へば、不レ遁時到來也。各某と不レ離一手に退給はゞ、秀吉卿の旗本へ切入、敵の大將不ニ討捕ーは我々可ニ枕並ーと堅約し、巢喰山迄切退ける。此所に荒木平太夫•堀尾茂助有レ備、城兵を取卷討んとす。禰屋七郎兵衞•松田左門•三村孫太郎大勢切て入相戰ふ。城大將禰屋七郎兵衞父子•同孫市郎•鳥越左兵衞•林三郎左衞門•岩田內膳、巢喰山に扇の內に劍菱の赤旗押立て、身方を待居けるに、首二つ三つ不ニ持參ーはなし。禰屋父子其外も五ヶ所七ヶ所手負ひ、働自由不レ成に付、禰屋孫市郎を御本陣へ遣し、御注進申上候。禰屋孫市郎•佐野和泉•鳥越左兵

*別本には戸川平右衞門が弟同名助七郎に扱の品々云々

衞は、高松へ籠城仕候へば、後日に御感狀被レ下る。秀吉卿より武井將監儀無類の兵也と、爲二供養一金子五十兩を給り、乍二敵將一も情の程感悅仕り、宮内賀夜坊にて遂二法事一。

秀吉卿同國日幡城攻附上原元祐逆心の事

同年四月十一日、羽柴秀吉卿は辻村の內石井山へ御陣替、軍勢は辰田村山の峯に築二陣城一給ふ時、日幡城主同六郎兵衞從二藝州一加勢ノ大將上原右衞門大夫元祐は、都宇郡矢部村長州藪栖築山に陣取相守勵二忠義一處に、秀吉卿より花房助兵衞戸川平右衞門*に扱の品あり。上原元祐は企二逆心一、日幡六郎兵衞にも同意に、秀吉卿御身方仕候樣にと進むれども同心せず。六郎兵衞申すは、御方(おんかた)儀大分の蒙二御恩賞一御緣者迄に被二仰付一候處に、只今起二逆意一給事天罰にて、先祖の名を穢し子孫に耻辱を與へ給事、口惜き次第と諫むれども、依レ無二承引一可レ計果一處存にて本丸へ罷越趣、弟八郎左衞門家臣大森藏人上原へ先達て密通仕、上原家來數十人待請、日幡六郎兵衞を討んと取卷、二人切伏三人に手を負せ候時、元祐鍵にて日幡を突伏討捕る。義士は戰死の面を淸うす、無類の勇士と褒美仕ける。上原は備後國の侍也。元就公備後へ御働の時大事の御用に立たる仁の子なれば、御息女被レ遣肝要の時は御用に可レ被レ立(うたて)と被二思召一候處に、親に不レ似未練の働仕ける。世の中に命を惜み武家の瑕瑾に及、子孫の面を汚穢ぞ方見けれ。武士ならん身は覺悟を能して忠義を可レ守。一旦の利を貪る事是武士の本意ならんや。

同國鴨庄城攻桂上山働附生石逆心の事

鴨庄城主上山兵庫、東の丸に加勢生石中務・同藤四郎、西の丸に從二藝州一加勢大將桂民部大輔・同右衞門大夫、雜兵三千二百餘籠城也。高松城助の要害なれば、一防は可レ仕と賴母敷存處に、從二羽柴秀吉

卿ニ被ニ仰越一は、信長へ隨身仕らば莫大の御恩賞可レ被ニ宛行一間、御身方仕候にと宇喜多家臣戸川平右衞門樣に操りければ、四月十六日の夜中に、秀吉卿軍勢宇喜多家臣生石が丸へ引込、桂が丸へ以ニ使者一申すは、近年隨ニ毛利家一遂ニ忠義一候へども御心入にも不レ預處に、從ニ秀吉卿一御懇意有レ之に付、御身方仕候。近年申談候驗に、桂殿・上山殿御一命無レ恙岩崎の御陣へ送り可レ申候。西の丸御渡候へ。無ニ御心元一候はゞ人質を可レ進と申越候故、桂右衞門大夫返答申すは、生石中務被ニ申越一所存承屆候。宇喜多を賴み秀吉へ懇望有レ之儀、兼而令ニ承知一今更無ニ仰天一候。民部一手御本陣へ可レ被ニ送歸一由珍敷承事候。人により捨ニ君恩一耽ニ利欲一、忠義を不レ知侍は左樣も可レ有儀か。於ニ此民部一は本意に不レ存候故洗レ耳候。此丸を攻取手柄を秀吉卿へ被レ致ニ土產一候樣にと、申す言葉の下より生石が丸へ火矢を射掛け鐵炮を打掛る事、如ニ雨降一。敵方にも相防ぎけれども、火矢陣屋に燃付候を上りはしにて火消候者を、民部が二男桂孫次郎鐵炮にて五七人打落す。是に仰天して重ねて火消候者もなし。陣屋に燃付堪忍不レ成取退けるを、民部が家來村上七郎左衞門・內藤新五左衞門追駈、數十人討捕る。長船又右衞門・生石藤四郎・鈴木四郎兵衞・土師平藏・大森杢、白晝に逃落ち見苦敷次第也。藝州方岩崎要害天神山砦より身方の軍勢駈付候へども、細道にて左右の大沼なれば何の働も不レ成候。秀吉卿宇喜多勢を五十七人討捕り、身方に一人も無ニ越度一奇特に運を開き申すは、火矢を用意候故也。從ニ隆景卿元淸一被ニ仰下一は、心懸深き故火矢を嗜置故、雖レ拘城を相踏へ、敵兵數十人討捕り身方に越度無レ之莫大の忠義、御本陣へ申上候間、重而忠賞可レ被ニ仰出一との儀也。生石が逆心武士の捨者、臆病の至、子孫の面を穢しけり。

中國兵亂記 四 終

中國兵亂記　五

從輝元卿御次丸秀吉の御陣へ御働の御評議附安國寺妨の事

織田御次丸・羽柴秀吉卿は、高松城砦四ヶ所の要害手に入り、武威大也。今は高松一城にて支へたり。宇喜多家臣の銘々也。秀吉卿御下知仕給ふは、高松へ籠城の諸士信長卿へ御身方於レ申は、本知の外に一倍の地を可レ被二宛行一、依二忠功一國主郡主に可レ成と城中へ計策不レ怠。籠城の物頭は清水・中島一族譜代の士なれば不レ應、某高松城を魚鱗形に遠巻き、逆心上原右衛門大夫・生石中務爲二案内者一晝夜仕寄を附け給ふ。清水宗治・中島元行以二密使一隆景卿・元清陣所へ申上ぐるは、此度籠城の一族非二利運一ば枕を並べんと、於二當國吉備津宮神前一神水を給る上は、武名を穢し申儀は不レ仕候。天下兩口の御合戰、御家の安否と存候。御謀も被レ成二御座一ば籠城堅固に可二持抱一候。御武略も被レ成二御座一御出陣於二御延引一は、城中より突て出で御次丸・秀吉旗本へ突懸り、御大將於二眼前一長左衛門・大炊助・月清・右衛門尉枕を並べ討死を仕り、命は奉二大守一名聞は爲二子孫一面を可レ淸と申上候へば、隆景卿・元清兩人心實忠義令二感入一候。太守爲二後詰一御出陣被レ成御術有レ之間、籠城堅固に可二持抱一旨被二仰下一候。四月二十日輝元卿猿掛山城へ御出馬、先陣は都宇郡釋迦が峰、不動嶽、庇山、黒住大神山、岩崎へ出張、近郷野山平等に陣取給ふ。御方の旗數百、峰の嵐に吹靡かすは龍田の紅葉に不レ異。高松籠城の老若男女悦ぶ事限なし。日々の軍評定にて御働も御延引の節、宍戸備前守御諫申上るは、信長の御人數被二指越一に付降參の侍大將有レ之候。以二御旗本一一御合戰被レ遊候樣にと申上候。被レ得二其意一御働の損益を評し御備定あり。左一手は毛利治部大夫元清・河野兵部大輔・出羽十郎・秋月三郎・梨羽中務・楢崎十兵衛・三浦兵庫・小泉左衛門・有地民部少輔、爲二案内者一日幡九郎左衛門・細川兵部、是

は板倉村より忍寄り、辰田村羽柴陣へ働き候樣にとの定也。一手は小早川藤四郎・吉見大藏・立花左近將監・神村豐後守・三吉佐渡守・三好備後守、國士に笠岡掃部・小田孫兵衛・赤木藏人・成羽越前は、生石村妙現山より織田御次丸御本陣龍王山へ、鞁貝を相圖にして、城兵も辻村持寶院谷より羽柴陣へ可ニ相働一と諸方の相圖通達する處に、安國寺輝元卿へ囁き申上るは、織田信長卿の御武略は中國西國にて御身方申國主郡司へ、恩賞莫大に可レ被ニ宛行一と計策不レ怠。當方の侍大將此節は御心を被レ置、敵方へ御仕懸は御延引被レ成可レ宜と申上る。御旗本の御備厚く被ニ仰付一敵方變化を御覽被レ成、其上にて被レ遂ニ御一戰一可レ然と申すに付、二十二日の御合戰御延引の趣城内へ被ニ仰下一候。清水長左衛門・中島大炊助此由を承り、物頭を本丸へ呼集め申すは、輝元卿二十ケ國を相隨へ給ひ天下無双の大家也。義昭公を織田信長攻下給ふ軍勢を押へ候樣にと、義昭公の御諚意輝元卿の御下知也。賢將勇將多き中に、天下境目の守護不肖の我等式に被ニ仰付一儀、生前の面目死後の名譽也。義を重じ名を惜み死を善道に可レ守、徒に及ニ對陣一は智勇武備の不レ達嘲を可レ請。一夜討して敵身方の眠を覺し、敵方の剛臆を見ばやと申ければ、同音に感聲して、當月二十五日の夜にぞ定めける。

御次丸秀吉の御陣所へ高松城内より夜討の事

夜討の大將中島大炊助・清水右衛門尉、武功の侍江口左京・明石兵部少輔・赤木丹波・禰屋孫市郎・三村孫太郎・高橋右馬允・野山三郎左衛門・片山助兵衛・白井與三左衛門・荒木三河・陶山藤九郎・河原六郎左衛門・植木惣兵衛・小宮山孫次郎何も步行武者十人ニ一人宛夜討に爲レ馴者小將に定め、赤き袖無し羽織を著し、忠と言へば中と荅へよと合言葉を定め、大炊助一手三百人、內先手三十人鐵炮を持せ百々放に打せ、敵の騷動を討捕樣にと示合候。右衛門尉三百人、內先手三十人に鐵炮同斷。粟屋信濃は鐵炮の上手五十人相隨へ、搦手の門外平山口に待居候。大炊助・右衛門尉引取る時、敵慕ひ來らばく

ひ可レ留術也。中島元行雑兵三百五十徒立、清水宗重三百人、今夜子の刻に城門を出で、辰田村と平山の間西善寺星友寺の藪の木影にて、手配して羽柴陣へ指向ひけれども、堀尾茂助・木村小隼人の、辰田村御崎山峰に段々に備へ居る茂助備へ、鐵炮を打懸ける。敵寢耳に是を聞き騷動無レ限。南無將軍地藏菩薩今日の夜討に得レ利させ給へと心中に祈念仕り、淺野彌兵衛・杉原七郎左衛門の陣屋に火を付、鯨波を擧げ鐵炮を打懸れば、敵陣騷動限なし。壓馬（つなぎ）に乘り物具よ鎧よと諸陣騷動しける。城兵驅入り驅抜け交り合ひ、彼に顯れ此に隱れ火を散して戰ける。折節闇き夜なれば敵身方分り兼たり。城兵羽織合言葉を印にして働きければ、中島右京進※一・同彦十郎・阿部左衛門次郎・藥師寺次郎兵衛・秋山久衛門・林與惣・小倉小右衛門・眞壁次郎左衛門・陶山藤兵衛・赤穴雅樂・石井彦左衛門高名を仕る。中島左京進は淺野彌兵衛家來と引組で、上に成り下に成り二三度仕けるが、左京進終に被ニ組伏一て、身方は無きか助けよと呼ばりけるを、禰屋勝五郎聲を聞知り、禰屋爰に有るぞ、左京は上か下かと問ふ。左京下に有りと云ふ。禰屋則上成る敵を刺殺して左京に首を捕らせける。勝五郎今夜高名の印は無りけれども、首尾勝れて能く働也。河田八兵衛・佐野七左衛門・陶山次郎兵衛・眞壁三郎兵衛・高木新兵・眞野市郎左衛門・片山仁左衛門首を捕り、何れも品々高名仕ける。庄野九郎は首二つ若黨に持せ城中へ返し、我身は殘り留り數度相戰ひ、無ニ比類一働にて討死を仕けり。高松落城の後、於ニ猿掛城一隆景卿へ大炊助申上候へば、庄野三次郎甥にて代々名譽の働有る者也。五歳の男子に本地の外に一倍の加增を被レ下、兼光の太刀を拜領す。禰屋勝五郎も無ニ比類一働仕ると、家光の太刀を頂戴す。城兵小宮山次郎・荒木與兵衛・川西五助・木村市太夫・三田六藏・小村半之丞・芳賀市右衛門・小川九兵衛・荻野彦助・平田四郎兵衛・大崎六兵衛※二段々相戰ひ、敵二騎三騎宛討捕り其後戰死仕る。秀吉の諸將も陣々より出合ひ、大勢に成て城兵を取卷き、赤の羽織著たる者敵兵成ぞ討捕れと呼はる。大炊助一手所々にて討ちつ討れつ、浮田秀家裏切と聲々に呼る。城中へ引入る時、片山助兵衛猩々緋の羽織を著て、

※一 右京進左京進何れか

※二 別本此外、吉田市郎右衛門・平安喜兵衛・高杉多右衛門・難波喜兵衛・安原彦六・中島九兵衛・大村政右衛門・神田與四郎・垣見安右衛門・江口善介・岩田茂右衛門・三宅五部右衛門・中尾久介を入る

諸勢に遅れ引退くを能敵とや思ひけん、加藤孫六と名乗り追懸け跡より鑓突る。助兵衛申は、身方成ぞ、過すなと云ければ鑓を引取る。助兵衛は無レ難城中へ引入るを見て、敵兵成るに殘念と笑ふ。城兵引取る時、淺野彌兵衛・堀尾茂助陣屋の旗差物奪取り、上方勢も和井本村迄附來るを、粟屋信濃守待向ひ、敵なれば釣(砲カ)打百々放に敵の備へ打懸て、數十人打落す。秀吉本陣より使番來り、永追せぞ、深入して敵の虜と成るなと、使番觸廻り人數を上る。清水宗治池下丸門外に人數を立、引取身方を待居る。大炊助・右衛門尉は、軍勢を悉く城中へ引込み、其後門を戸指、升形にて打捕る首を篝を燒て改め、明る二十六日には、城中働の場所を繪圖にし、委細書付御本陣へ注進仕、以二小勢一大軍に夜討懸、可レ然敵數多討捕、手前に無二越度一引入段、都鄙の名譽無二比類一由、御感悅不二大方一候。

藝州勢清水中島在城へ狼藉の事

中島大炊助在城守る弟中島九右衛門、高松へ注進するは、藝州勢御旗本の軍兵近郷の地頭高松籠城の留主へ押込み、財寳を掠め取り米穀家財を奪取り、妻子沽却(本ノマヽ)仕り庶民の往來を妨げ、爲レ薪二堂社一佛閣を覆し亂妨し、　宗治氏宮惣社大明神、　氏寺清水山惣寺院、　中島元行在所の社明現宮、　氏寺寳福寺、　墓所報恩寺にて無二狼藉一樣にと制禁しけれど、軍勢不二聞入一由、宗治・元行軍勢狼藉の品々隆景卿へ言上仕ければ、御評定の上、當國高松籠城の諸士於二在中一軍勢無二狼藉一樣に、　御制札を一村々々に被レ下候へば、騷動止み諸民安堵の床に安住仕る。　此度御利運有て藝州家替らぬ御代こそ目出度けれ。

四月廿七日高松大合戰の事

城中より敵の備々へ遣置く密使御注進中は、當二十七日に當城を一時に可二攻落一と、敵方評定まち

〳〵の山注進す。清水宗治・同月清入道・中島元行一手の侍大將を召集め、上方勢寄來る聞え有り、城兵も勝負の損益を評せんと、各思惟を廻し異見を承はらんと申す。月清入道申は、上方の軍將城邊へ寄せ來とも、城内は鎮り閉も不レ合臆病の爲體に仕有ば、秀吉の軍勢短氣成若者城邊へ寄來らば、彌〻僞り引寄せ鐵炮にて可二討捕一。敵の模樣により有無の可レ遂二一戰一と申候へば、諸將尤と同意仕る時、中島元行申は、各被レ申所尤也。乍レ去敵を近付可二討捕一儀敵方にも有レ術。近付不レ寄時は無レ詮。假令五騎三騎討捕共軍に蓋不レ參。及二對陣一日數重り候へば兵粮も無二心元一候。從二城内一突て出で、遂二合戰一討死仕らば後聞可レ宜と申せば、衆口一同に感聲す。左有ば勝負の損益を評仕り可二相働一と、中島大炊助一手江口左京進・明石兵部少輔・赤木丹後守・藥師寺主水・頓宮次郎左衛門・土屋四郎左衛門・土師平十郎・湯淺九郎兵衛・同新藏・中島與助、鐵炮頭中島孫兵衛・同右京進・同彥十郎・鈴木四郎次郞・塀和源太郎・橫田次郎吉・河部左衛門次郎・近藤新九郎・和田三郎兵衛・中島藤藏・小宮山孫次郎・中島平藏・難波半次郎・福光又兵衛・同十郎右衛門・田邊孫次郎、雜兵二千五百餘、同二十六日夜子の刻に城門を出で、平山星友寺に勢を伏せ待居ける。是は秀吉の旗本搦手城門へ押寄せ給ふ時、不二思寄一自二後備一可二突掛一との術也。清水右衛門尉は高橋右馬允・笠岡掃部・鳥越五兵衛・新山兵庫・野山三郎左衛門・難波傳兵衛・禰屋孫市郎・土師九郎兵衛・三村孫太郎・通生又七郎・土倉三郎兵衛・林與惣・同與九郎鐵炮頭片山助兵衛・土居神三郎・清水兵部・同與右衛門・吉田肥後・平田次兵衛・同與兵衛・國府市正・同三郎兵衛・福竹次郎助・佐野因幡・荒木三河・內田五兵衛・河原六郎兵衛・池上雅樂・安原彥左衛門・上野豐助・福田三郎次郎・千原市郎兵衛・臼井與三左衛門・植木惣兵衛、雜兵二千餘相隨へ、今夜子の刻城門を出で平山谷々に人數を伏居ける。是は秀吉の旗本城門へ寄來る時、橫鑓に可二突懸一との術也。粟屋信濃は相野主水・田代雅樂・兒玉藤七・手島彌兵衛鐵炮の上手二百餘を召連れ、平山の谷川に筒先を幷べ待居ける。是は城内より拵置く落し穴へ敵落入らば、可二討捕一との術也。秀吉卿の旗本へ鐵炮を打

懸る。此時敵の騷動を見計らひ、元行宗重敵不意の所へ可ニ突懸一との遊軍也。清水月清・末及左衞門は大手馬揃口を相守り、蛙が鼻口は清水豐後・中島左京・日幡九郎左衞門相守り、池下口は清水田兵衞・横尾大膳相守り、清水宗治は近習四五十騎にて城中を廻り、手薄き方へ加勢を籠めんと下知をなす。難波田右衞門・松重次郎右衞門・阿曾沼四郎次郎・福光五右衞門・大坪新右衞門・松尾彥兵衞・長瀨七郎五郎・大津依與三右衞門・長山彌兵衞・長延五郎兵衞・龜山三郎兵衞・川西又右衞門・安原太兵衞・乃美孫左衞門・荒木太郎右衞門・德田右衞門、雜兵三千餘相隨へ八幡山麓の堤へ出張り、赤き撓に金を以て惣社大明神と書きたる大馬印、赤地に巴の紋付たる大旗押立。四月二十七日辰の刻に、信長卿の軍勢三方の山より押下し魚鱗形に遠卷き、羽柴左衞門督・木下備中守・花房助兵衞は辰田村より蛙が鼻へ押寄せ、蜂須賀彥右衞門・山内猪右衞門・戶川平右衞門は馬揃口へ押寄す。織田御次丸は小山村の宮山に本陣を居ゑ給ふ。羽柴秀吉卿は辻村の內のかき上を號ニ羽柴陣一て、諸陣を見下し下知をなす。鐵炮を百々放に打懸る城中よりは鬨も合せず候節、羽柴秀吉の本陣より猩々皮の羽織を著、金の半月の前立物指たる武者、又黑き羽織に頭成の冑を著たる武者二騎、淺黃羽織を著せたる者二十人計馬の廻りに召連れ、和井本村砂場へ來ッ並ビ三輪乘を仕りける。清水宗治申は、能武者ぞ若者共討捕れと申す。林與九郎・荒木新四郎・渡部市助穴道より仕寄せ、筒先を揃へ同時に打懸れば、黑き羽織著たる武者妻手へ討落しける。此時城兵鬨を擧げ鐵炮を打懸けゝる。中島又十郎駈寄り若黨に首を捕せける。城中へ討捕る一番首也。清水長左衞門が馬印を目懸け、諸方より押せ來て鐵炮迫合を初めける。城兵は計略あれば態と不レ進鐵炮打出す計り也。身方打散り備へ居けるを、宗治自下知して旗本小印の者共を遣し備を厚し、堤に人數立並べ、手々に鑓取て敵近づかば戰ひ突崩さんと鋒矢に備へ待懸けたり。此時粟屋信濃、谷々より大筒小筒を百々放に打懸る。上方勢四度路に成ける時、中島元行・清水宗重横合より鐵炮を打懸け、赤地の吹貫、金を以て妙現神體書きたる前立物指し、黑き羽織に

大紋付けたるを著、烏黑の馬に梨地の鞍置いて打乘り、從二將軍義昭公一當城へ加勢の大將二階堂近江守嫡孫中島大炊助元行、幷、清水右衞門尉宗重と名乘る。上方勢、すはや敵成ぞと我先に鑓取て突懸る。城兵も相懸りに入亂れ相戰ひ、秀吉の軍兵落穴へ數百人落入り騷動し、敵の備四度路に相見ゆる節、清水宗治も秀吉の御陣へ突て懸り入亂れ相戰ふ。中島元行身方を諫め、引な進めよ、勇は先祖の面を發し、義は戰死の骸を淸むと、敵の備多少立配り以二此心一今日可レ遂二高名一と也。是を聞て懸亂さんとすれども不レ亂、破りて通る敵をば切て落す。首捕るもあり被レ捕もあり。少も不レ疾元行隨軍猪の勢子を如レ破、眞蕩に駈入て須臾に變化して、十文字に當り巴の字に廻りければ、秀吉の從軍已に開き靡かんとす。淸水・中島が軍勢盡二粉骨一高名をす。宗治・元行捨二身命一戰ひければ、上方の軍勢所不案内場狹き所に、城内より落穴を掘らせ上を如レ道に仕り、左右は沼なれば究竟の兵落入り數百人被レ討ける。殘る軍勢秀吉へ申上るは、軍は今日に限る間敷ぞ。術御替へ重ねて可レ被レ遂二御合戰一と申捨て、大窪、辛川、菅野、横井村へ引退きける。津田與左衞門・生駒甚助・池田久左衞門は、御次丸を先立て鍛冶屋山の城へ引入り給ふ。上勢麾を持ち前後に二十騎計隨へたる將、平山を越え長野村へ引越す時、白井與三左衞門・中島又十郎を先立て追懸れば、上方の將も小返して相戰ひ、金の梨打烏帽子を著、旗を持たる將を、中島又十郎突伏せければ、片山助兵衞駈合せ、又十郎に首を取らせける。金の半月指したる武者と、白井與三左衞門暫戰ひけるが、白井が妻手の股を突詰め可レ被レ討と見えし時、中島大炊助駈合せ、金の半月指たる武者を討ち、郎等彌兵衞に首を取せける。白井を助くれば上方勢は平山長野村へ退きけるを、數多追討に仕り、辰田村山の峰に龜甲の内に二ツ引兩付たる赤旗を押立て、駈散したる味方を集めける。淸水長左衞門は平山の峰に巴の旗を押立て、以二使番一諸手へ觸ければ、小勢の堅は大軍の虜と成るぞ引取れと、擧二勝鬨一て諸勢を城中へ引入れ城門を戸指、今日卯の刻より午の刻迄の合戰に、敵の首四百二十六城內へ討捕ける。城兵も九

十七人被レ討ける。三の丸の馬場にて首相改め、同二十八日に、昨二十七日敵大軍を以て押寄せ候。城内よりも出張り相戰ひ、敵討捕ける首共家名品々遂ニ注進一ければ、大軍取詰め候處に遂ニ防戰一、物頭數多雜兵四百二十餘被ニ討捕一候段、廣大の働無ニ比類一思召と、御感悦不ニ大方一候。

宇喜多責口仕寄付事幷城主働の事

四月二十七日の大合戰の後、城内矢倉狹間に大筒小筒を配り敵陣へ打出しければ、手負死亡不ニ數知一。秀吉卿は家臣の輩從軍の銘々召連れ、山の峰へ取登り城内を見下し、五月二日の夜宇喜多が軍勢、和井元口外の惣門ニ二町外に道筋を掘切り、其内に柵を付け土俵を重ね、土手を築上げ大筒矢鐵炮を賦り、數千の番兵を付置き、城兵の出入を留めたり。城内の貴賤身方への通路を被レ留及ニ難儀一候。打破れと評議仕り、「中島又十郎・清水右衞門尉爲ニ大將一、明石兵部少輔・頓宮次郎左衞門・禰屋孫市郎・三村孫太郎・赤木丹後・友野彌右衞門・片山助兵衞・鳥越五兵衞・村與九郎・國府市正相隨へ、中島又十郎は金と銀と一枚雜り小實の鎧、星冑に鍬形打ちたるを著、烏黑の馬に打乘り、清水右衞門尉は唐綾縅の鎧に、白星の冑に鍬形打たるを猪首に著なし、栗毛の馬に打乘り、赤地に龜甲の大旗、赤地に巴の大旗二流指揚げ、疊楯廣きを立並べ、二千餘を二手に作り先手にて鐵炮迫合を仕る。扨惣勢は柵を踏破らんと働き候へども、敵將より柵の内に數千挺の鐵炮を配り、如ニ雨降一に打懸れば、先手の者共打すくめられ、人を楯に取不レ得レ進。敵陣は山のかさより見下し、大筒種ケ島を打懸ければ、城兵の備浮立ち、兩大將の下知をも不ニ聞入一時、清水右衞門尉、爲レ義に捨レ命柵を引破れと下知すれども、出張る身方はなし。中島又十郎は堀切りの底へ飛で下り、先陣の者よりも出張り下知をなせば、敵兵數多の鐵炮打懸け危く見ゆる時、片山助兵衞申すは、大將は軍勢同所にて輕き働仕り給はぬ物ぞと申して、是非引退ければ、堀の端に馬印を押立て、今朝卯の刻より午刻迄虎口を不レ去戰ふ。城兵に

痛手負ふ者不二數知一。敵方は三重に構たる柵の內より鐵炮を打出し、弓を射ければ、身方に手負もなく荒手に入替り戰ふ。城兵の死亡多ければ、中島又十郞に是非引取れと元行より數度の有二軍使一ば、敵の柵を不二引破一ば虎口を去まじきと申す。淸水右衞門尉は頰先を被レ射手負ひ、馬より落ちけるを、難波田兵衞引立て是非城中へ引入れける。中島又十郞は、運は天に有り、柵を踏不レ破ば引取間敷と申居けるを、額より妻手の小鬢へ打ちぬかれ、胄に當りはけ戾る。中島大炊助は危き働不レ仕物ぞ引取れよと、石井新七郞を遣し、諸勢一同に是非城中へ引入る。大炊助は池下口の堤に人數を立て、敵の寡來るを待けれども不二付入一。明る三日に和井元口へ働の𠮷々を書付、敵兵二十五討捕る。城兵は八十二騎被レ討ける趣御本陣へ注進申ければ、敵方山に構二要害一相戰ひ身方に討死多き由、自今以後輕き働き仕間敷候。日限を御定以二御旗本一可レ被レ遂二御合戰一由被二仰下一候。

高松城內持口を定事

五月五日の夜、池下口外の門より二町外和井元口を掘切り、柵を付け土圍を築き、城內を見下し鐵炮を打懸る。城兵も池下に矢防の土手を拵へ、皮楯を張廻し、穴道を掘寄せ相働きければ、出張敵を討捕り、敵陣に死亡手負不二數知一。大手二口は大沼に幅三間の道なれば、城內より働出る時は大軍難二押出一、敵寡來る時は難二引入一有二損地一。敵方より忍の者杯來る時は敵の便りに可レ成と、二箇所の橋を引落し、繼橋を用意仕り城兵相守り、通路の三口被レ留可二働出一術は絕えたり。抑高松城と申すは、小山を臺にして二重の大矢倉に構二數塹一、三つ星に一の字の御旗を押立て、赤地に巴の旗を立并べ、役所には家々の紋付たる幕を張廻し、御次丸と對陣す。二の丸は四方を掘廻し石垣を取り、數々矢倉を揭げて八幡山池下口へ指向け浮田が勢と相戰ひ、三の丸番丘の出崎には亂杭打ち馬の皮の釣楯仕り、白地に二ッ引兩の御旗押立て、赤地に龜甲の內に二ッ引兩の旗を立并べ、役所々々には家の紋付た

＊別本「此口より和井本口八幡山迄は地續き」云々

る幕を張廻し、中島大炊助元行持口なれば、一類普代の家臣相守る。清水宗治中島元行軍談して、銘々持口を定め相守る。原小才村口は羽柴左衛門督・山内猪右衛門・伊藤掃部・花房助兵衛責口なれば、此門中島與助・難波田兵衛・三村孫太郎相堅め、御崎山口出崎は栢植與八・佐久間忠兵衛・黒田官兵衛責口なれば、此矢倉は中島彥十郎・阿部左衛門次郎・高橋右馬允相堅め、石井山口は池田久左衛門・糟谷助右衛門・伊藤七藏・岡平内責口なれば、此口は粟屋信濃・清水與右衛門・土屋四郎左衛門・中島孫兵衛相守る。辰田村出崎は荒木平太夫・木下將監・副田甚兵衛・花房彌左衛門責口なれば、此口は中島左京・手島東之介・土師平十郎・眞壁次郎左衛門控へたり。三泥山出崎は仙石權兵衛・淺野彌兵衛・佐藤主計・宇喜多左京筒先を並べ打掛けゝれば、此矢倉には中島右京・鳥越五兵衛・植木惣兵衛・國府與三右衛門控へたり。秀吉卿御本陣石井山出崎には、蜂須賀彥右衛門・堀尾茂介・木村隼人（小の字脱カ）・加藤孫六控へければ、此番丘の矢倉には、中島又十郎・清水右衛門尉・江口左京進・赤木丹後相堅む。八幡山出崎は宇喜多責口なれば、家臣銘々控へたり。此矢倉は中島四郎左衛門・林與惣・國府三郎兵衛相守る。大崎山麓は御次丸御陣前津田與左衛門・生駒市左衛門・牧村長兵衛・蜂谷五郎助責めければ、此矢倉は清水豐後・禰屋孫市郎・平田與兵衛・湯淺九郎兵衛相守る。門前山口出崎は宇喜多一家責口なれば、高畠市正・延原内藏允・中桐與兵衛・弓削次郎兵衛・國留源左衛門・杉原七郎左衛門・加藤虎之助相加り、大筒小筒如ニ雨降一打懸る。＊此和井元（本）口は八幡山へ地續き大事の持口なれば、清水宗治中島元行相堅む。隨軍は松田左門・荒木三河・國府市正・難波傳兵衛・片山助兵衛・林三郎左衛門・同與九郎晝夜に替り相守る。

御次丸秀吉卿高松城水攻術の事

五月七日信長卿の軍勢、蛙が鼻口より門前村迄三十町餘に軍勢を立並べ、備の後に柵を付け其跡

に根置九間高四間の堤を築廻しけれども、城内よりは見物して居たり。八幡山御崎山の出崎へ出張敵あれば、鐵炮を打懸け五騎三騎宛討捕る。五月十三日には堤を築立て、土手上に數々の砦を構へ、門前村より大井川を關懸る。備前國長野村より谷水を堰懸け、備中國鳴谷川へ掘貫き、諸方の洪水を堰留る。五月雨の頃なれば、數日降續き洪水晝夜に增し、波蕩々として如ニ蒼海一、籠城及ニ難儀一時は、逆意を指挾輩有て、敵を城中へ引入る事有レ之ば、宗治元行相談して、替々毎夜矢倉役所へ酒肴を持參し、諸勢を慰め、勤番無ニ油斷一樣に催促仕りけり。尤密使の者を敵の陣々へ遣し置き、敵方の術を聞届け城内にも變化す。晝夜水重增けれぱ、小船二十三艘作り城中の用事を達す。敵方には數十艘の船を堤の内へ入置き、船に井樓を揚げ、船端に疊楯を立并べ、城邊へ漕寄せ城内へ火矢を射懸れば、城中には家の上へ登橋を掛、打消す用心仕りけり。矢倉狹間より弓鐵炮を打懸れば、間近く寄る船はなし。上方勢の鐵炮の音は如ニ電神一。宗治元行は毎夜密使の者を召連れ城中を廻り、銘々持口にて無ニ油斷一樣に催促仕ける處に、二十日の夜、柏木の出崎へ宗治廻ける節、水中に八形に似たる物見えける。依て待居ければ、大男頭に脇指と帷子を結付け石垣へ上る所へ、密使の者遣し生捕り、誰某の御陣より來るぞと尋ぬれば、身方の御大將より御使に、轉小四郎と申者也。御書是に有りと竹筒を指出す。御書二通有レ之本丸へ召連れ歸る。二十一日に籠城の軍勢を呼集め、從ニ御大將一の御書讀上る。上方の大軍備厚く强大なれば、御合戰の初終御評議の内に、新堤出來、數日降續き水重增り、城中難儀無ニ覺束一思召、諸大將忠戰諸軍勢被レ盡ニ粉骨一段、不レ可ニ勝計一數月相抱被レ遂ニ忠戰一無ニ比類一思召候。以ニ御旗本一近日被レ遂ニ御合戰一、新堤被ニ斬落一、諸勢可レ被ニ相救一の由、宗治元行より諸物頭へ可ニ申聞一由被ニ仰下一候。軍勢一同に感悅仕る。今一通は御黑印の密書也。宗治元行へ御内意被ニ仰下一は、上方の軍勢强大にして後詰の用心稠しければ、城中可レ被ニ相救一術も難レ計候。一先信長へ降參可レ仕、左有時僞て兩人の男子於ニ我在所一可レ令ニ籠居一。其時秀吉拵置き候要害を離るれば、有無

之可レ遂二合戰一。雨八も時節を見合、秀吉の旗本を被二切崩一ば可レ有二勝利一。後戰勝利の術なれば、信長へ降參を申せと御內意被二仰下一候。宗治・元行・月清御請に、一日も逆身と世上に呼ばれん事恥辱なれば、信長卿へ降參の事不レ存寄一所也。無二是非一御意の次第也。被レ遂二御防戰一御武略に相成儀に候はゞ、籠城の諸勢を助け我々は城を枕に可レ仕と書留て轉に渡せば、小四郎請取て御本陣へ歸りける。輝元卿は淸水中島御返答を將軍へ被レ達二上聞一候へば、御感悅不二大方一候。

信長卿軍勢備中へ先達て陣觸の事

鞆の將軍義昭公、備中國笠岡湊、村上八郎左衞門在城へ御入城被レ成、軍勢は杉山城、走出村折敷山構、小田村岩屋城・猿掛城・同國淺原福山峰々へ陣取る。淸水長左衞門中島大炊助方へ、御奉書被二成下一候。柳澤監物・仁木伊賀守へ御請申上る。後詰の先勢岩崎城、天神山の出崎、庇山、楯山の峰々に馳集り軍談評議不レ怠。高松城邊は洪水日々水重増り、湖水漫々とす。敵方には水責に得レ利不レ好レ戰構二陣城一對陣す。織田信長卿も藝州の大勢備中高松城邊へ後詰の注進被二聞召一、高松城へ可レ有二御下向一由にて、五畿內の御勢五萬餘騎被二相觸一、先達て池田紀伊守父子・長岡與市郎・明智日向守・高山右近・鹽川吉太夫先立て被二仰付一。信長卿も頓て御出陣被レ遊の由、上方より申參由敵方へ遣二置密使一城內へ有二注進一。去れども城外一偏の江湖と成て、城兵より敵方へ可二働出一術は絕えたり。五月二十五日、淸水長左衞門尉より秀吉卿御陣へ以二使札一申し達するは、去る四月二十七日和井元ロへ御發向の節、勝負を決せんと存ずる處に、早く御人數被レ入候。重て被レ遂二御合戰一ば、不レ叶迄も遂二一戰一討死可レ仕の處、水責に逢ぬる事案外の次第也。拙者一人切腹可レ仕候。城內の諸勢を御助け毛利家へ歸陣被二仰付一ば本望也。御返答により日限を定め、切腹可レ仕旨申遣し候へば、秀吉卿感聞仕り給ひ、古今無二の忠士武士の可レ爲二明鑑一と譽感し、扱被二申越一通、諸事可レ任レ望と有二御返答一。

*矢走川は八橋川なり。

天下を泰平に仕り、主君へ盡二忠義一事幸甚たり。

秀吉卿陣所へ安國寺御越候樣にと輝元卿へ使者參事

同二十七日、輝元卿御本陣へ從二秀吉卿一使者を被レ立、安國寺を有二御越一ば、和談の稠儀有度由被二仰越一候。三將評議の上惠瓊和尚を被レ遣る。秀吉大悅仕り給ひ、饗應樣々の上にて秀吉卿安國寺へ被レ仰は、信長卿より秀吉を中國へ指向給ふ遺恨は、義昭公を中國へ呼迎へ、義昭公の威を借り輝元日本國殿と成り給ふ望有レ之故也。自今伯州は矢走川*を境に、備中國は高橋川限に、中國一圓毛利家可レ有二御支配一、扨又信長卿と和談の驗には、淸水長左衞門城中の軍勢の命に替り切腹の有レ望、被レ任二其意一長左衞門に切腹被二仰付一ば、秀吉是を一働に仕り上洛可レ申と語り給ふ。安國寺委細承り輝元卿へ右の趣を申上れば、輝元卿御返答に、國分の事は不レ及二兎角一、當家へ忠義を守る長左衞門に切腹せさせん事不二思議一處也と、及二兩度一て無二御合點一故、蜂須賀彥右衞門淺野彌兵衞、安國寺へ內證申すは、御兄弟同事の上原右衞門大夫殿も頓に信長御方に被レ參候。其外中國の國主郡司信長へ懇望有レ之證據是也と、秀吉卿へ諸方より來る誓紙取出し安國寺に見せ、此度は利を曲て秀吉と和談可レ宜と、隆景へ能々被二申達一候へと兩人種々申し、安國寺へ金銀重寶を給はる。惠瓊和尚申すは、右の趣幾度申聞すとも隆景承引仕る間敷候。愚僧高松へ參り淸水中島に右の趣可二申聞一と語る。秀吉卿御陣前より船に乘り、安國寺は高松城內へ來り、淸水宗治に對面仕り右の趣を語る。宗治一類淚を流し、君有レ仁則臣義を以て報ずるは臣下の度也。我百年の齡を經るにも非ず。今天下泰平の洪基は唯此一事に有り、宗治急ぎ腹切て和談を調和可レ仕と云ふ。中島大炊助淸水月淸入道是を聞て、義に當て報レ恩致レ死事は臣の道也。御當家の安否を被二捨置一、不肖の我々を救ひ給ふ事生々世々忝し。かゝる時節に一命を捨てんこそ佳名を末代に殘す。是武士の本意願ふ所也。存命して何かせん。縱太守の背二

意趣一とも、急ぎ切腹を可レ仕由安國寺に語れば、船に乗り羽柴陣へ往き、清水中島所存有レ之儘申上れば、殊勝の勇士也と譽感仕り給ふ。

高松城主より秀吉卿へ可レ致二切腹一ご案内の事

同年六月朔日、從二清水長左衛門中島大炊助一爲二兩使一、家臣荒木三河・近藤新九郎を秀吉卿御陣所へ差遣し、清水宗治中島元行首御望の段、輝元方へ被二御遣一候故、御和平破れ候と承る。我々が志を以て天下大亂を治むる事幸甚たり。小船一艘被レ下ば、來る四日に切腹可レ仕。自今輝元隆景へ被レ遂二御入魂一高松籠城の貴賤、毛利家陣所へ被二助返一ば、死後の大望不レ過レ之と申上る。秀吉卿宣ふは、無二の忠士也。無二比類一と感悦不レ淺。何事も可レ被レ任レ望と有二御返答一れば、以二一心一悴名を後代に殘し、諸勢を下城さする事本望也。銘々持口を掃除仕り、禰屋孫市郎中島孫兵衛に銘々居所に注文を張り付、可レ被二相渡一と觸廻す。

從二秀吉卿一高松城内へ御音信被レ遣事

淺野彌兵衛堀尾茂助より、秀吉卿任レ仰、六月二日爲二音信一、永々籠城辛苦察入候。暫時の慰に上林の極上名酒珍肴饋進候。宗治元行御禮申上、切腹は彌四日に相定むと及二御返答一、宗治元行城中の諸物頭へ觸廻す。從二秀吉卿一爲二音信一上林極上酒肴を給る　今生の名殘の一會仕り籠城の苦勞を晴さん、本丸へ來給へと觸ければ、吉田、沼田、三原よりの籠城衆、旗本の物頭本丸に來る時に、宗治兒姪に鬚を抜せて居たり。各中は不相應（本ノマヽ）の儀也と申せば、宗治笑ひ、某が首は頓て信長卿の可レ懸二御目一、鬚を其儘置ならば、籠城忘却故と誠れん事の口惜く存に付、男を作り申也。各中は、御切腹明日に相究ると承る。此間如二申上一、今度御供不レ申在所々々へ歸なば、諸人の可レ有レ嘲。一同に切腹仕死

出三途の川御供申さんと望めば、宗治申は、尤也。乍レ去一騎當千の時節なれば、各は在所へ歸給へ。於二當城一某一人切腹申候へば相濟也。末及左衞門殿は從二藝州一御加勢大將なれば同心可レ申。中島大炊助へ宗治申は、御邊は某と同意の覺悟に相見え候事非二本意一候。於二當城一某に相押へ候樣に、御邊は幸山城を相守候樣に兼ての御仕置也。今度上方の大軍押下る聞え有レ之ば、無二覺束一思召當城へ御加勢に被レ下、二三の丸番丘丸へ被二相籠一諸物頭へ指引異見被レ申、拙者も致二軍談一候樣に被仰渡二候へば、當所にては拙者切腹申候得ば相濟也。弓取の習に命を一時に捨つる事は安し。義を萬代に留る事は難し。存命して義を立る事末代の面目也。不測轉變の出來る浮世なれば、暫く待給へ。御大將御和平なれば、城内の掃除を申付城相渡され、籠城の物頭諸軍勢の甲乙被レ盡二粉骨一、品々言上仕、一類の妻子無事に下城仕らせ、於二猿掛城一三殿の任レ仰懸命ノ地を給らば、一族從類を扶持仕置、悴源三郎を取立後戰の御用に立給へと、大炊助切腹の段を申留、妻子の行末を中島大炊助清水右衞門尉に賴置、爲二暇乞一一献を初め、銘々へ盃を取替す。

清水宗治嫡子源三郎へ書置幷白井忠死の事

宗治元行銘々へ申渡すは、城中掃除仕り、武具を銘々持口に飾り、注文張付置き、禰屋孫市郎中島孫兵衞に可二相渡一。宗治嫡子清水源三郎・孫中島吉十郎、三原城へ遣置き當城に有合ざれば、末期の三首を殘置、成人の後此心を悟り、可レ抽二忠勤一と書記す。其歌に曰、

恩をしり慈悲正直にねかひなく辛勞氣つくし天にまかせよ
朝起や上意算用武具普請人をつかひて事をつゝしめ
談合や公事と書狀と威儀法度酒と女に心みたすな

六月三日　　　　清水長左衞門尉宗治

清水源三郎殿参

清水宗治が郎等に白井與三左衞門と云强者あり。今度籠城に池下丸持口なれば勤番無₂懈怠₁、去る四月二十七日の合戰に、左の股を打せけれども堅固に居り、晝夜武略の志深き者也。六月三日大手矢倉より本丸へ使者を立、直に申上度樣子有ㇾ之と申に付、宗治下れば白井大きに悦び、今度君命に替程成忠戰不ㇾ仕、殘念也。御切腹明日に相究ると承る。定て從₂秀吉卿₁可ㇾ有₂檢使₁。某は先達て御供を仕、死出三途の川瀬踏を仕らんと、腹卷を引上切腹す。宗治見て、汝が忠勤常々他に異也。妻子に付置んと思ひしに、案外殘念也と落淚仕、大森助兵衞に介錯申付、清水山法印葬禮仕り、樫鼻に埋め一堆の印塔に成る。人皆忠臣とをしみける。

清水宗治切腹并檢使堀尾茂助音信の事

六月四日、清水宗治は佛前にて念佛を唱へ、其後一類に最後の暇乞仕、已の刻になれば、高松城大門虎口より船に乘浮べば、清水月淸入道・小早川援兵末及左衞門、宗治が郎等難波田兵衞・清水田右衞門・國府市正一つ流に棹刺せば、中島大炊助清水右衞門尉も船に乘んとせしが、宗治堅く留て中島大炊助へ、御邊は一族と云ひ二階堂近江守氏行、我家を取立給へば、一家の惣領と仰ぎ、今又御邊幼稚の子供を取立、後戰一方の御用に立給はば、草の陰苔の下迄も如何程か可ㇾ嬉と申、弘誓の船に棹刺て、生死の海を漕別る。一乘の法の船、煩惱の筏をば、生死無常の風吹分くれば、西は身方の御大將輝元公隆景卿、東は敵の大將御次丸羽柴秀吉卿、宗治が乘たる船蛙が鼻へ漕着る。其時從₂秀吉卿₁爲₂檢使₁堀尾茂助小船に乘來り、宗治に對面仕る。筑前守申は、此間申談通、是迄の御出殊勝譽感不ㇾ淺候。永々籠城の御苦勞致₂推察₁候。偖堀尾茂助心有侍にて、美酒嘉肴持參仕る。宗治甚悅び一禮仕、筑前守殿に宜しく御禮、茂介殿へ賴申とて盃を廻し、宗治一曲を唄出せば、兄月

清入道・末及左衛門・難波田兵衛・清水田右衛門・國府市正緩々と唄ひ、秀吉卿御陣前へ船を漕着る。

天正十丙午歳六月四日、

世の間の惜るゝ時散てこそ花も花なれ色も有けれ　宗治

浮世をば今こそ渡れ武士の名を高松の苔に殘して　月清

朗詠して宗治切腹す。國府市正介錯、首を桶に納候。月清入道も切腹す。介錯荒木三河、首は桶に納む。何れも有二武功一普代の侍、思ひ〳〵に致二切腹一候を、小人頭大森助兵衛、滝上與右衛門致二介錯一、假名實名相答、首を堀尾茂介に相渡す。右六人の死骸を荒木三河取歸る。抑武士の道、忠義の二字に留て名を後天に揚るを本意とす。清水一族骸は堤防の水に沈めども、名は高松に留る名譽の勇士、五十六歳にして遂二義死一未だ半白の歳を失ひ、泉下の客と成るを惜まぬ人はなし。備中國清水氏中島家は、雲州尼子家幕下の時、諸侯列坐上下の遺恨あり。毛利元就卿と一身の堅約仕、大内義隆卿の隨二幕下一候。中國の諸侯、或時は尼子に隨ひ、又大内に隨ひ、或時は細川三好に隨ふ。此節は信長卿に隨ひ、仁義の薄き侍は死を爲レ免、幾度も變じ道違ふ事多し。清水中島、不レ叶迄も勇士の道を兼て、忠功を心懸、死を善道に守處に如レ此成行き、御當家御弓矢の勢可レ劣萠と、身方の諸將愁けり。毛利三殿へ、安國寺委細申上れば、此度の爲體不二申聞一段案外成儀と、御機嫌を損じ候得共不レ及二是非一、清水無二の忠儀不レ淺由、御落涙被レ爲レ成御惜候事限なし。御和平の御神文、安國寺双方へ取替し、明る六月五日に、輝元卿より秀吉卿へ御加勢の物頭軍勢を被二仰付一、秀吉卿御上洛、藝州の御大將、岩崎天神山、釋迦峰、不動が嶽の御備、横谷村猿掛城へ御歸陣の節、從二上方一飛脚到來。明智日向守發二逆意一、六月二日京都於二本能寺一信長卿御切腹、二條御館にて城之助殿も御生害の由、米原平内左衛門より御注進申上候。秀吉卿へは六月三日の暮、京都より飛脚到來を即時に御手討に被レ成、毛利家と御和睦を急ぎ御調へ御上洛被レ成候。神明の加護か、不思議の大將と申け

り。宗治が首於二羽柴山一被レ遂二實檢一、名譽の勇士也。武士たらん者は斯有度也。從二信長卿一數箇所を被レ下、御方申樣にと被二仰遣一候得ども、不レ隨二其意一命を限りに一方を押へ、天下の和平を調へ、諸人を助くる事廣大の忠義也。古今武士の可レ爲二明鑑一者也と、不二大形一褒美仕給ひ、持寶院山内に築二一堆一石塔を被二建置一、近士武將に回向被二仰付一、以來忠義の譽爲二不朽一也。御情の程を感じ、一族たる者致二落涙一候。

中島元行清水宗重猿掛城へ被二召寄一事

清水長左衛門切腹の後、城内貴賤從二藝州一加勢の侍歸陣。清水中島兩家の郎等、戰死の殘人纔に二百騎計、妻子引連れ在所々々へ引退候。從二輝元卿隆景卿一、中島大炊助に高松籠城の一族加番の侍大將召連れ、猿掛山城へ可レ致二登城一と仰付、中島一族清水右衛門尉加番の銘々召連、致二登城一候。中島大炊助を被レ召、今度高松籠城の爲體、委細に申上候樣に仰に付、委細言上す。各無二の忠義不レ可二勝計一。輝元公大炊助に仰に、敵將和井元口へ取詰候節、御方以二武略一得二勝利一敵數多討捕段、清水長左衛門其外目代共より遂二注進一候。古今の武勇無二比類一候。殊に安國寺長左衛門へ申達通、御方存命候て、當國境目の始末被二相調一候事忠義不レ淺由にて、兼光御腰物致二拜領一候。隆景卿被二申聞一は、大炊助高松籠城の內、數度の武略忠戰無二比類一候。先年三村逆意の節、御方以二武略一備中備前御存分に御退治、其故當家御弓矢の色直り、次第に御利運の儀に候。數度の忠義不レ淺由にて、三原正家の御腰物被レ下候。御感狀居城等は重て可レ被二仰出一候。其外籠城の一類加番の侍大將銘々被二召出一。永々籠城の苦勞、於二諸手一被レ抽二忠戰一の段、御感悅被レ成と御腰物金銀を被レ遣、向後彌可レ抽二忠義一の由被二仰渡一候。境目の御仕置、中島大炊助清水右衛門尉に被二仰付一候。

中國兵亂記 五 終

中國兵亂記　六

清水源三郎へ忠賞并中島元行へ備中御仕置被ニ仰付ー事

天正十年六月二十三日、中島大炊助・清水源三郎・中島吉十郎に致ニ登城ー候へと任レ仰、致ニ參城ー候へば、輝元公源三郎を被ニ召出ー親長左衞門儀累年當家へ忠節他に無類に思召候。今度於ニ高松籠城ー類口相抱、其後令ニ切腹ー諸人を助置候段、敵御方共に驚ニ耳目ー候。古今の武勇當家の面目無ニ比類ー候。其方家人共扶持仕置、勵ニ武勇ー候樣に御意にて、來國俊の御腰物致ニ拜領ー候。知行居城等隆景より可ニ申渡ーの由。其後、中島吉十郎を被ニ召出ー、於ニ三原ー永々神妙に相勤候由被レ及ニ聞召ー候。祖父長左衞門親大炊助に不ニ相替ー武勇を心掛候樣に御意にて、家次の御腰物致ニ拜領ー候。中島大炊助多年抽ニ忠義ー之段無ニ比類ー思召候。上方筋亂國に付、備中諸仕置當家へ可レ被レ任ニ心體と、秀吉卿被ニ仰越ー候。長左衞門存命の時相改候境目城普請等、元清並宍戶備前と以ニ相談ー可レ被ニ申付ー候。

輝元卿小早川隆景より中島元行へ感狀を給事

同年七月三日、從ニ輝元公ー爲ニ御使者ー鵜飼新右衞門を被レ下、高松陣其外累年の忠節無ニ比類ー由御感狀被レ下候。

今度羽柴筑前守押下節、御方備中於ニ高松ー籠城、數度の戰功無二の忠節、無ニ比類ー覺悟候。一手之者共併の段聞届、誠心擧の至に候。長左衞門不レ居候間、境目の趣無レ緩可レ被ニ申付ー候。謹言。

七月四日　輝元　判

中島大炊助殿

同年八月、從二隆景卿一爲二御使者一井上又右衛門を被レ下、同國高松籠城の節、於二所々一遂二防戰一忠節無二比類一由の御感狀、幷、刑部鄕不二相殘一御加增被レ下候。

今度上勢就二罷下一、高松城へ淸水同前に被二相籠一、數度被レ遂二防戰一數多被二討捕一、其上自分の構兄弟同名九右衛門被二殘置一、堅固に被二相抱一無二之忠義無二比類一候。向後彌忠節賴存候。就レ夫賀陽郡の內刑部鄕不二相殘一令二扶持一候。猶委細井上又右衛門可レ申候。恐々謹言。

八月十三日　　小早川隆景判

中島大炊助殿

蜂須賀彥右衛門尉黑田官兵衛尉備中へ分地請取に被レ參に付、高橋川切に宍戶隆家中島元行改相渡事

同年十月上方筋兵亂相靜まり候に付、安國寺申定候通、備中國高橋川切に、蜂須賀彥右衛門尉黑田官兵衛へ、宍戶備前中島大炊助より相渡し候故、淸水中島兩家の在城宇喜多秀家へ被レ遣候に付、戰死の殘人召連住馴し古鄕を立退き、同國川部村に暫時罷在る內、吉川治部少輔歸國の時、備中の御仕置可レ被レ賴由にて、從二秀吉卿一黑田官兵衛を被二指添一候節、秀吉卿爲二掟意一中島大炊助淸水源三郞被二召出一、先知可レ被レ下候間、罷登り候樣にと被二申渡一候。中島大炊助淸水源三郞御請に、難レ有上意に御座候へ共、數代毛利家に相隨懇意不レ淺故、從二信長公一備中備後可レ被レ下不レ任二掟意一候。自今毛利家に罷有度奉レ存間、秀吉卿へ御免被レ爲レ成樣に、官兵衛殿へ宜御取成奉レ賴と申上不二罷出一候。其後安國寺上京申時、輝元卿より被二仰下一は、中島大炊助淸水源三郞儀秀吉公へ被二召出一候處に、御請不二申上一其恐有大炊助に二百人扶持、淸水源三郞に二百人扶持被レ下、川部村に罷在候。

*昔陶山とあるは太平記笠置山攻の條に見えし陶山藤三を指すなり。

猿掛山城寺造營附北條家幷能島來島因島の事

中島大炊助清水源三郎は、高松城より川部郷中へ從類引退く。三千餘の人數なれば、近村も騷動仕ける。一族譜代の內山田村鬼身山城主宍戸備前へ被二召出一、石田村横谷山の麓に普請被二仰付一、石田城所々に揚二矢倉一番士を籠置給ふ。妹村關が鼻を過行けば、草壁郷中東三成茶磨山二方を振廻し、所々に揚二矢倉一一二三の丸作り、江木牛四郎城主たり。抑横谷猿掛山と申は、昔より依レ爲二名城一、庄民（氏カ）高橋家詩來候を、永祿年中に右馬頭元就公備中へ御出陣、所々の城主此時御退治、御四男毛利治部大輔元清卿を城主に被二定置一、御普請被二仰付一候。北に當て大川を帶にして、嶮岨成嶺に要害を立給ひ、草壁郷中里山田城燒山の要害、中村の砦、雨乞山構、伽藍山の城四十八丸に番士を被二籠置一、猿掛山城南の尾崎に、星尾妙現神體、同社に不動像三體、藥師像二體、毘沙門像三體、多々良濱より勸請仕り給ふ。同村萩原大明神兩社共に御造營被二仰付一、毛利元丸（清カ）卿幷秀元卿御氏神御信仰不レ淺。秀元卿御成長被レ成朝鮮御陣の時、明石與次兵衞を御仕置に被二仰付一候節、秀吉公御滿悅被レ成候て被レ任二正四位宰相一。天下無双の名大將と秀吉公御意被レ爲レ成候。同村に安德天皇御勅號船木山洞松寺、開山恕仲天誾禪師より、及二二百五十代一佛法之靈地たり。永祿年中茂林芝繁禪師當住之時、毛利治部大輔元清卿御菩提寺に被レ成、神儒佛共繁昌也。東三成山本城には江木の者共相守、小林神子山城主武井宗圓・同左馬允、小林山城に同又三郎、小田岩屋城には小田孫兵衞政清、淺海村瀧山城一族譜代を以て相守り、走出村折敷山城に有二岡右京・名越修理一。猿掛山南表笠岡には同掃部、西濱には村上彈正相守る。昔陶山*の構へし名城也。此所に代々菩提寺偏照院に有二墓所一。能島・來島・因島三家共に有二此兩城一。日本船警固也。家々船軍の戰功は此家より出る。横谷村猿掛城舟路の關所也。閑井村古城主伊勢新左衞門貞春先祖は、小松內大臣平重盛十七代の後胤伊勢駿河守、

備中國園井村へ來り、以二戰功一六百貫を知行して、後月郡江原高越山に築二居城一禪宗を信仰、長谷山法泉寺造營仕給ふ。伊勢新九郎長氏兒童の時、勵二武藝一家を起し、父母の名を後代に顯さん事を工夫仕り、同國吉備津大明神に願を掛け、三七日參籠滿する夜、夢想に自レ是東國へ起給へ、御劍を可レ遣とあれば難レ有思ひ、下向之節華表の邊にて旅人に行逢候。彼の中は、我等路銀無レ之及二難儀一候。此刀を被レ召代を給はれと云ふ。長氏夢想の御劍是成と心中に祈念仕り、刀を買取り三度頂戴仕る。自レ夫武者修行を思立ち、近郷にて名家の兒童内藤・笠原・二階堂・清水・大道寺・松田・井上・平井、勇士三十八伊勢長氏同道して諸國へ武者修行に出る。數度有二戰功一。其後今川五郎氏親妻は長氏伯母なれば、駿河國へ下り太守に申斷請二扶持一。長氏儀大氣者と被レ及レ見、伊豆爲レ押興國寺城番大將と成る。延德年中に堀越城主足利茶々丸殿を責捕り城主と成る。其後相模國小田原城を乘取り、姓名を改二北條早雲瑞公一、關八州之太守と成り給ふ。此時駿河國の摺袈裟奇特多を被レ及レ聞、重寶に可レ成物とて、古鄕なれば備中國菩提寺長谷山法泉寺へ有二寄進一。早雲兒童の時、備中木の子村泉山を居城に築かんと繩張有二于今一。一類伊勢豐後守・同新左衞門貞春・同兵庫助貞勝、室は中島加賀守輝行娘也。此家に馬の鞍骨を打事數代名人也。諸家に是を重寶す。尼子伊豫守義久爲二退治一北國へ出陣の節、伊勢又五郎は毛利家の致二御供一於二富田城一度々相戰、遂二高名一討死仕るとも申也。後年小田原邊より僧侶來り摺袈裟を所望す時、子細を咄し申は、伊豆の北條にて藤澤上人へ夢想に、備中國西江原長谷山法泉寺摺袈裟を取寄、朝夕火焰の見える所へ納候へ。此所は曾我十郎墓所にて最期の妄念深く、今に右の通に候と、曾我五郎生替り、其所の五郎太夫蘇して申上れば、長谷山法泉寺へ地僧を遣し右の趣を尋れば、所の僧侶是を不レ知處に、其節住持へ夢想に、堂の二階に皿盆經箱是也。其奇特多レ于レ今重寶也。

備中小平井天神宮の事

＊以下の二節目次に之を缺く。

備中國後月郡西方村神島天神宮華表笠木、一方は落失せ、一方は有レ之事幾年ぞや。風吹ば動き數十年不レ落事、諸人不審に思ふ。有人詩曰、或

營レ廟長沙際、威靈如レ在レ中、潤恩神島雨、偃德鳥江風、松老年々綠、梅飛歲々紅、儼然人所レ畏、華表古今同。

＊行軍之次第

行軍の法は客戰の始、勝敗之所レ係、莫レ不レ愼。兵書曰不レ知二諸侯之謀一者不レ能二豫交一。不レ知二山林嶮岨澤之形一不レ能二行軍一。不レ用二鄕導一不レ能レ得二地利一。按ずるに、味方配之習有二遠隔一也と云ども、良將用る處符節合たるが如し。

一、出陣之日、幷、刻限究て不レ可レ變、變ずる時は兵心不レ定して失多し。雖レ然不意を用る時は各別也。

一、出門は敵を見るが如可レ仕。敵譬ば百里の外に有と云とも、聊不レ可レ有二怠慢一。六韜曰、兵勝之術疾擊二其不意一。

一、一里計斥候を遣し、段々握レ奇まで續くべし。行路嶮難にして往來煩しき時か、又は敵伏レ兵嶮に逢ば、相圖之旗狼煙何にても兼約を可レ用。

一、使レ士自己之働に拘て、注進遲滯せば、以レ注可レ禁。

一、太鼓螺二可レ止、二品組每にあり。

一、出行は寅の上刻に人馬の食を調へ、寅の中刻に武具を著し、先陣可レ討二立一、是より次第を以、二陣三陣共可二押行一。何も具て可レ約。

一、其地の到著は晝を可レ限。然らざれば小屋を掛るに遲く、人馬の休息難レ成。

一、道廣き所にては、二行に可レ押。左右を分、右を當番とす。或は橋細道有て、二行に難レ押時は、

左右交互して可ㇾ押。

一、大川を越時は、遊兵川上、先陣二陣は川下を可ㇾ越。

一、行程は大抵五六里を節とす。雖ㇾ然一定の法と難ㇾ仕。夏冬に日之長短有、嶮岨平岨之別有、進掛繰推之別有、船渡歩渉之別有、長途羊腸之別有り。兼て其土地を考へ行列を可ㇾ定。旗二行、歩士二人、鐵炮弓二行、五人に一人の有二小頭一。足輕大將、長柄、五人に一人の有二小頭一。五十本に奉行一、騎士大將の持二長柄一とも一處に押。鍬鋤之役、同奉行。但、此奉行先行する事あり。乘替馬、大馬印、歩士一人。持筒、持弓、同足輕大將。使士。挾箱、并、床机、馬印、同奉行。持鑓、并、甲冑、太鞁具、侍大將、歩士前左右に列す。後に中間、小者、同頭、使士、與力之士、同與力頭。侍大將自分之騎馬、次に乘掛小荷駄等。

一手之侍大將

高橋右馬允・伊勢兵庫助・同又五郎・鈴木孫右衞門・伊達宮内少輔・赤木丹後・土師平十郎・日幡八郎左衞門・湯淺九郎兵衞・江口左京進・明石左京進・明石兵部少輔・拼和助右衞門・頓宮次郎左衞門十二人相備、五十騎百騎之侍大將村々より在居之侍百騎與力に付。

一、中島大炊助居城、知行高。備中國賀陽郡刑部郷經山城主、小寺片山要害屋敷、城付領、新山村、黒尾村、新田村、久米村、井尻村、河武村、井山村、湛井村、井尻野村、淺尾村、門田村、小寺村。藝州吉田へ相務候時、爲二飼領一豐田郡之内、船木村、佛道寺村、萩路村、眞良村。備中にて庄伊豆守御退治之跡地、爲二戰功賞一被ㇾ下る。雲州尼子御退治之時、爲二軍功賞一仁多郡之内、竹崎村、坂根村。天正三松山城主三村元親御退治之時、爲二戰功賞一三村跡地二千貫御加増、有二感状一。

中島大炊助二階堂元行室。備中高松城主清水長左衞門尉宗治惣領娘。

嫡男中島治右衞門行義（稚名又十郎 大學）、二男中島勘十郎、清水右衞門尉養子に遣し、號二清水勘右衞門一。

三女同國服部郷主冠山城主禰屋七郎兵衛室。四男中島彥三郎、同國下道郡下原郷主伊世部山城主明石兵部少輔養子、後號二中島筑後一。五女同國日幡城主日幡六郎兵衛室。

從二秀吉公一、小早川隆景卿へ筑前筑後を被レ遣、御入國之後、中島・清水を筑前へ被二呼下一、爲二客人分一中島大炊助に二百人扶持被レ下、諸役御免、入道行秀に被レ成候。嫡男治右衛門に二千四百五十石、筑後國生葉郡之內隈上村、國吉村、同國竹野郡の內麥生村、江利村を被レ下候。清水五郎左衛門に三千石被レ下、何レも名島に住居仕り相務申候。備中より被二呼抱一候侍百人餘、清水中島與力に被二仰付一候。大炊助入道儀、折々致二登城一所々軍談申上候樣に被二仰付一、御家中の衆日々出合申候。

此中國一亂記者、備中國賀陽郡前地頭刑部郷經山城主觀臘院前大倉署蘭溪行秀居士爲二子孫後見一書而以殘二其來由一者六卷、誠後之知レ於レ今猶二今之知一於レ古、雖レ然其文拙也。若落二他人之眼目一搴二笑于千歲一者也。子孫憶レ焉矣。

于レ時元和元年　　　二階堂氏蘭溪行秀居士

朝鮮陣の時小早川隆景渡海の事

朝鮮御陣之時隆景卿御渡海被レ成候に付、淸水五郎左衛門中島治右衛門致二御供一候。於二朝鮮一從二大明一爲二加勢一李如松大將にて數十萬の兵來る。日本勢惣先手小西攝津守平壤城被レ責とも、不レ落內に大明の大軍加勢に來る。小西は以二此小勢一大明の大軍と戰はん事叶間敷と引退給ふ。大明勢續て都へ責來る。日本勢都の先手は隆景卿なり。此左の一先手粟屋四郎兵衛、右の一先手は井上五郎兵衛・淸水五郎左衛門・中島治右衛門合備也。大明の大勢責來る時、粟屋被二掛崩一引退時、井上五郎兵衛相備淸水五郎左衛門・中島治右衛門請留相戰內に、粟屋四郎兵衛も小返して相戰ふ。隆景卿旗本横鑓に突掛り數千騎討捕追崩、大に得二勝利一給ふ。小早川隆景天下無双の名將と、從二秀吉公一譽感御褒美被レ

成節、隆景卿何レもへ御感狀被レ下候に付、井上五郎兵衞・清水五郎左衞門・中島治右衞門申上るは、粟屋四郎兵衞一手は其場を退去仕候へども、我々踏留相戰候節、粟屋一備も取て返し、御旗本より横鑓に御合戰被レ成候故、被レ得二御勝利一候間、粟屋と同文の御感狀頂戴仕間敷と申上候。粟屋は一番備故御感狀可レ被レ下儀と、區々に爭申上候故、隆景卿戰功の輕重難レ分思召、御歸陣の後肥前國於二名護屋一、秀吉公へ被レ達二上聞一、御僉儀の上にて、井上五郎兵衞清水五郎左衞門へ同文の御感狀被レ下候。

去正月二十五日、大明勢都近邊へ寄來剋、爲二先手一人數差出及二合戰一候處、井上五郎兵衞尉同意以二覺悟一大明勢切崩被レ討捕一付、得二勝利一候。一手共に令二粉骨一無二比類一働、神妙之至候。仍感狀如レ件。

文祿二年六月七日　隆景判

中島治右衞門尉殿

秀俊*御家中島元行父子立退事

隆景卿累年中島大炊助父子へ御懇意不レ淺に付、筑前へ罷下り、殊に於二朝鮮一比類なき軍功有レ之、秀吉公譜にも顯れ、御秘藏に思召、御家中若き者ども、毎月三日宛大炊助入道行秀方へ參入申、軍談を承候樣にと被二仰付一候處に、隆景卿筑前國於二名島一御逝去被レ遊候節、御一類より御家督の儀被二申上一候へども不二相調一、後秀俊卿を隆景卿の御家督に被二仰付一候時、清水五郎左衞門中島治右衞門を伏見へ被レ召、秀吉公へ御目見仕、御朱印を頂戴仕候時、山口玄蕃頭稻葉内匠御守に被レ付候に付、筑前へ致二御供一候處に、中島大炊助父子へ山口玄蕃會釋不禮に御座候に付、父子共に秀俊卿御家を致二退去一、備中古郷へ引籠罷有候へば、山口玄蕃被二申渡一候は、御代替に御家を退去仕候不屆に被二

*秀俊は秀秋の誤カ

*燒山常慶は八木山常慶を指す

思召候。備中古鄉にて致二蟄居一、何方へも不二罷出一樣にと、所の農民に被二申付一候。從二秀吉公一宇喜多秀家卿へ御下知に、備中國賀陽郡主中島大炊助居城の跡地、御免地に被レ爲レ成被レ下候間、自今大炊助父子他所へ出し申儀停止と、鄉民に堅く被二仰付一候。中島治右衞門儀備前岡山へ折々罷出候儀不屆と、大炊助致二立腹一、向後義絕の由申立。治右衞門に男子二人御座候內、惣領宇右衞門を大炊助致二惣領一、毛利秀就卿へ御目見仕らせ候。二男治左衞門を治右衞門惣領に仕召連、稻葉內匠殿御取持にて越前少將殿へ被二召出一候。

備中平山村又八郎蘇りの事

備中國賀陽郡板倉鄉高松城主淸水長左衞門尉宗治は、同郡平山村笠井又八郎世悴の時分召仕掛二目を一候處に、宗治は天正十年於二高松陣一遂二切腹一、子孫も散々に罷成給へば又八郎も在所へ引込み土民と成る。常々實體成者にて、朋友の交り深く候處に、慶長十六癸巳年病死仕、二七日過蘇り墓所より大聲出し申に付、掘返し候へば如レ前にして申は、閻魔王被レ仰は、其方此節參者にては無レ之候へども、年來佛を信心申故來世を見せ候。信心堅固に佛法を願申樣にと存呼申候。本生へ歸り進二萬人講一、同郡奧里鬼城に閻魔王堂建立仕、朝夕念佛を勸候へ。此所は鄉境にて年來爭あり、戰死の傍輩數多有レ之に付、於二來世一及二難儀一體を、家の子家流の者へ申傳候へ。同郡岩屋に毘沙門堂を建、備前燒山常*慶に本尊を作らせ候樣にと蒙二夢想一候由。平山村法道寺に阿彌陀堂を建、朝夕念佛を唱へ後世願、往生仕候はゞ、末世子孫可レ爲二繁昌一と進二萬人講一、右の願望成就仕、又相果申候。

大阪御陣の時水野日向守殿御備にて中島宇右衞門働の事

大炊助嫡男中島宇右衞門儀、慶長十九年大阪冬御陣の時從二秀賴公一、爲 捉意一大阪へ籠城仕候はゞ、

備中國を可レ被レ遣と、山口左馬助●明石掃部●後藤又兵衛方より、御紋の御印船備前國牛窓小串邊迄被レ下候。宇右衛門儀、親大炊助申は、先年備中にては秀吉公依ニ御調略流浪仕、小早川隆景卿御懇意に付筑前へ御供仕處に、秀俊（秋カ）卿へ山口玄蕃無レ情御取成に付、如レ此の居體に罷成候。優曇花を得レ待たり。從類を召連罷登り、大阪御城中へ矢一筋射込候はゞ、今生に存殘ノ事無レ之と勇み悦び、赤木丹州●三村彌五右衛門●同忠兵衛●友野彌右衛門●禰屋藤兵衛●柳田金十郎●中島彥十郎●同四兵衛●中村彌三右衛門以上五十一人相隨、五月二日に古鄕を罷立、陸路を登り申處に、所々に關所多く御座候て、同四日に平野へ上著仕候節、明石掃部より上村右近右衛門に申越は、御上著候はゞ御案内可レ被ニ仰越ニ候。御籠城の御望候はゞ可ニ申上ニ候。中島宇右衛門返答に、親大炊助備中高松陣籠城の節、城相渡隨ニ御方ニ候はゞ、備中備後可レ被レ下と信長公御書有レ之、其節隨身不レ仕此居體に罷成候。此度東將軍御方にて一戰可レ勤と罷登り候と、返答仕候。去冬も從ニ秀賴公ニ上意にて、山口左馬助後藤又兵衛よりも備前小串邊迄御船を被レ爲レ下、數輩罷登候へども私儀致ニ延引ニ候。上村右近右衛門と致ニ暇乞ニ別候。五月六日には、水野日向守殿、同美作守殿、御家來廣田儀太夫●杉野數馬に參會申、御備に罷有度由申入候へば、水野御父子共に東將軍御先手被ニ仰付ニに付、御遠慮有レ之由、宇右衛門に申渡候故、同七日に八尾村邊迄罷出、天王寺邊を及レ見候へば、紺地に永樂の旗其外數輩御備有レ之、境道より南へ廻る瓜生野の敵に差向、天王寺口を心掛働給ふと見えける。斯口城兵明石掃部六千計相隨、水野日向守殿御備へ突懸り、暫入亂相戰ふ。此時中島宇右衛門一手は道明寺北に備居申處に、杉野數馬●竹本廣助●關佐次右衛門、何も手に合高名仕、松田金兵衛●廣田儀太夫同事に相働、中島宇右衛門備五十一人へ首十二討捕、則杉野數馬●竹本廣助●關佐治右衛門後日の證據に賴み申すと、言葉を通じ申節、明石掃部櫻の御門より入城、其外の城兵も入城、夫より取て返し、蒔田權佐殿御備へ參、春田五太夫に委細申談、所々の御合戰も止ける。蒔田權佐殿御宿陣へ參り候へば、熊野田へ參候へ

と被レ仰、今度の非無二比類一段、日向守殿と被二仰合一可レ被二仰上一候間、其内備中在所へ引込居申、東將軍より御仕置能々相守、大阪諸浪人領内に置不レ申樣にと、所の郷民にも申渡候樣にと被レ仰、備中へ罷下候。

水野美作守殿御家來廣田圖書・杉野數馬より、中島宇右衞門に參候樣にと、飛脚差越罷下り申候へば、宇右衞門儀美作守殿へ可レ被二召出一と申に付、其節中島宇右衞門申は、小知にても東將軍へ罷出度由、蒔田權佐殿より稻葉内匠頭殿へ被二仰入一候と申、古郷へ罷歸候。其内中島治右衞門儀、稻葉内匠頭殿以二御肝煎一、越前少將殿へ被二召出一候間、宇右衞門儀も、水野美作守殿へ罷出候へと御申候故、小知にても將軍家へ被二召出一候樣に、御取持奉レ賴由申、備中古郷に引込居申處に、毛利秀就卿御尋被レ成度子細多候間、長州萩へ罷越候樣にと、清水美作・中島筑後迎に被レ下候故、長州へ參候へば、秀就卿御逢被レ成、近年流浪の仕合苦勞に存候。大阪へ罷越水野美作守相備の樣に罷在、働の品々美作守蒔田權佐委細咄しにて令二承知一候。向後當國に安坐仕、親大炊助を慰め申樣にと御意御座候。

宍戸備前益田玄蕃より、中島宇右衞門を被二呼越一被二申渡一は、親大炊助儀當國に致二安座一候樣に被二仰付一、家中若侍共大炊助宅へ出入仕、古戰場の咄し共承候樣にと申渡候。大炊助へ重々御懇に被二仰付一候。御自分儀當家を不レ離る筋目に候。彌致二安座一、大炊助介抱仕候樣にと内意共被レ申候。宇右衞門申は、重々忝仕合に奉レ存候。清水長左衞門宗治惣領同美作姉は私母にて御座候。美作儀、結構に被二召出一候處に、私儀御用に立申者にて無二御座一候へども、清水中島從類の者共、多在所へ引込居申候間、私儀も備中へ罷歸、母へ盡二孝行一暮し、自然の儀も御座候はゞ從類を召連罷出、相應の御勤可レ仕と申、長州御奉公不二相勤一、備中へ罷歸候。在所に罷在内、讚州より松平半左衞門を、水谷伊勢守殿へ御悅使者に被レ遣候節、宇右衞門宅へ被レ尋、古今の儀ども尋、是非讚州へ被レ參候樣に

との儀にて、半左衛門罷歸候。其後小早川式部松平半左衛門より、中島宇右衛門是非參候樣にと迎を差越、宇右衛門彼地へ罷越候へば、右京大夫殿へ罷出相勤候樣にと、知行の高下被二仰聞一、御請を申處に、其節より病氣に罷成候故、備中在所へ引込居申、浪人にて相果申候。

中島昌行　機岳行禪居士

中國兵亂記　六　終

天正年中 美作國古城合戰記

天正年中 美作國古城合戰記

著者不詳

坪井村岩屋城沒落の事

天正年中作州粂北郡坪井村中北岩屋ノ城は、備前岡山城主宇喜多和泉守直家の臣大河原大和守を大將として、加藤伊豫守芦田備後守兩人を相添へ籠置れしを、藝州の國主毛利輝元の家臣養野村西浦の城主大原主計相共に、智略を以て芦田を毛利家へ引入る故、心變じて大河原加藤兩將を謀計毛利へ屬す。此故に輝元より岩屋の城を芦田備後守秀賴に預け置るゝなり。然る所に、宇喜多より粂南郡原田稻荷山の城主原田三河守定佐、同郡荒神山の城主花房助兵衞職秀、兩旗を率して不意に岩屋の城へ押寄せ、一日の內に城を乘取り芦田一族を悉責崩し、扨城に宇喜多の伯母聟浮田淡路守を爲ニ籠

*杳、或は盃、即ち最早の意なるべきか

置し所に、又其後毛利輝元の臣、苫西郡山城村葛下の城主中村大炊之助頼宗●同郡養野村西浦の城主大原主計●三好五郎左衛門尉興能●同新兵衛尉元好四大將にて、手足達者の侍二十歳より四十歳迄の者選二三十二人一、天正九辛巳六月五日風雨の夜潜に岩屋の城へ忍び入り、雜兵二百人計り一度に鯨聲を揚げ入込み、男女の差別もなく撫切にする間、城方の兵周章て騷ぎ八方へ逃散り、山嶽共不レ言落入もの其數を知らず。半時計の戰にて岩屋の城は毛利方へ乘取畢る。此節も毛利方にて原田藤七郎●立石孫市郎●西尾與五郎●片山左馬●田口、并、辻新治郎●福田盛昌此七人、一入無二比類一高名す。中にも片山●田口●辻●立石は兼て武略を勵み、軍始*ると盃一所に切て廻り、浮田家に宗徒と賴みたる濱田の一族郎等百五十八人を、僅の間の戰に討捕る也。則輝元●隆景●頼宗三人より右の者共へ感狀を給りけり。夫より毛利宇喜多兩方より軍兵を出して度々及レ戰所に、室町の昭公（義昭カ）より扱を以て双方の軍勢備をほどき、藝州備州兩國へ分り城沒落し畢ぬ。

或説に曰、花房と戰ひ其後扱になり、中村大炊之助は藝州へ歸り、備前も國へ歸る。其後城は沒落。城主無レ之。

神樂尾城沒落の事附北分諸士隨二宇喜多一事

天正七己卯歳迄は作州大半藝州毛利家へ隨ひ、是より以往備前宇喜多と戰ふ事數度、終て宇喜多も作州半國領し、津山戸川の大川を限り、南北は藝州備前家の境とする所に、永祿年中備前宇喜多より毛利領の內志戸部の出張を討取り、永禮某と言もの强力の侍を入替へ北分をも取添んと、與力同心のもの數多差添へ近鄉を夜討し、民家の財寶を掠取事狼藉也。依レ之毛利家より、田口彥兵衛尉光重大岡甚兵衛尉尙治兩將行向て是を退治す。終に志戸部の出張をば光重の手へ討取、永禮は南を差て逃行けり。尙治の手へも惡黨多く討取、尙治は變名して千波土佐守と號し、田野村神樂尾に在城也。光重は

志右衛門尉と號し、先祖の領地たるゆゑ北高田庄に住居し 近郷の悪黨を切しづめ、毛利の一族中村賴宗を以て藝州へ達す。則毛利より折紙感狀を給り、其後天正年中備前宇喜多より南部種村荒神山に城を築き、家臣花房助兵衛職秀を、領地千石に與力同心雜兵六百人計差添へ籠置く也。北分を切取らんと支度す。依之毛利方には、田野村神樂尾城に千波土佐守を大將として、三浦・大谷・宮川等を相添へ、花房と張合預け置也。其頃花房は備前六*花房と名に呼れ、近國にも知られし程の兵也。武略は不及言軍法連歌にも達しけるにや。職秀發句に、

いつあれとこと更山の初しぐれ

花房兼てより夜盗のものを抱置き、津山の戸川の市に商賣させ、諸方へ賣物賣らせしが、其後には神樂尾の城中へも商賣に入込樣に成りければ、花房金銀を多く彼商人に取らせ、諸賣物隨分下直に爲賣ければ、亂世打續き金銀不自由の節にては有り、彼商人の下直に賣を知り、有もの無もの入用の物買はざるもの無かりけり。然れば城中悉得意に成り、心易く每日出入ける。或時千波土佐守人數集め、荒神山を夜討にせんと用意しけり。隱密の事成ば、城中誰か知るもの無き所に、彼商人は常に心易く出入ければ、此事を知りて早速荒神山へ告ければ、職秀打笑ふて心易く思ひ候へ迚、早速六百餘人の勢を四つに分け、一手は城より向の山の麓に隱置き、一手は城の後に伏置き、一手は勝れたる兵三十八戸川の河原に伏置き、殘る二百人の勢にて城中を差固め、寄る敵を今や〳〵と相待しを、千波方にはかゝる用意の有る事夢にも不知、亥刻ばかりに神樂尾を打立ち、夜半時分に荒神山を取卷き鯨の聲を揚ける。*盃城中には兼て覺悟の事成ば、内外より鯨の聲を合せける。寔に山びこの音にや山嶽も崩る計に聞えしかば、流石の千波も同勢も大に仰天し、兎角する内早旗本亂れ、右往左往に敗北する。花房馬上に麾を採て、此勢に神樂尾へ押寄せ城を乘取らんと下知す。兵共得たりや〳〵と逃行く敵の跡をしとふて、打取る首數二百餘級。千波は田野村越に落行けるに、兼て花房が

*六花房は六花黨の誤なるべし六花黨とは花房花枝花岡花田花木花村を謂ふ

*盃又は孟カ

謀計にて、戸川の河原に伏置し三十人の兵者共、落行く敵に打紛れ、難無く神樂尾の城中へ込入りける。此時兵共立すぐり居すぐりと言事に心付ざる社、運の極と淺間敷。頓て城中に打散し、並ビ懸たる矢倉々々に火を掛けゝる間、内外の敵に揉立られ、城兵防ぐに術無くして終に落城し、千波は南をさして逃出しが、馬を乘放し叢成る畑にをり敷、息をつぎ居たる所を、宇喜多の侍草木某と言もの鎗にて突き首を取る。今において此所をば千波と言傳へ有之。毛利方より中村頼宗・田口光重の家嫡藤左衛門益重・福田勝昌、此敵兼て夜討を傳へ聞き、千波が血氣の勇を無心元思ひけん、五調成もの二百餘人すぐり立て、荒神山の後詰としてはせ出しが、千波勢の敗軍を見て追來敵悉搦籠、堅固に抱て、翌日東北郡吉見村岩尾村綾部村鉢臥等の一族追々はせ集る。然る所毛利家より岩浪兵庫に三百餘の勢を相添へ、加勢に差越され誠に取返すと言へ共、其後絶て居城するもの無之、自然と破壞に及び諸士宇喜多に隨ふと見えたり。斯て花房は、荒神山に在城して民を憐み士卒を撫し、或は敵の諸將を味方に取込む樣にいろ〳〵智略を廻しける。中にも北高田の益重は年來連歌の友なりければ、斯く亂れし世におよびても、互に花のあした月の夕べも向ひあひける。職秀是こそ能き便りと思ひ、さま〴〵と益重を言ひこしらへ、宇喜多へ隨ひ給はゞ北高田の鄕は申に不及、田野村庄一圓に、前々のごとく申あたへんと言送りければ、益重初の程は其返答もせざりけるが、混物使者を以て懇意に招きければ、益重も田野村一圓に給ふ事、先祖の領地と云ひ、殊に祖父薩摩守引乘寺を建立し、田口山と名付し程の由緒有る地成る故、毛利に隨ひ自餘の大郡を給はらんより、我身に取て本望と思ひ、終に花房に附して宇喜多の味方と成る。左有りければ、北分の輩多く備前へ志を通じける故、終に岩尾山も落城。鹽谷佐助は多胡基辰に討れ亡す。城をば宇喜多の臣齋藤玄蕃抱、其外安春和泉藤田の城を落し、猪股を初として今井・中島・田中の一黨悉く宇喜多へ付ければ、備前の勢日比に倍して、既に中村大炊助頼宗も葛下に堪へがたく、家臣櫻井木村と談じ、しきりに藝州へ加勢を乞へ共、此

節西國も軍眞最中成ば、終に救の勢も來らず。

高山の城沒落の事

天正己卯年夏、苫北郡山下村高山城主草苅與四郎或は三郎左衛門とも云ふ。景繼、北郡を切とらんと望て因州宇塚越に大勢を率し、長尾村迄發向して佐淵と云ふ所に本陣を取り、武者奉行絹田兵部大夫景基、新免伊賀守長重家臣新見治部左衛門と張合ひ、しばらくせり合の內、長重の息新免三郎武略を以て景基・景繼の先手の間を取切り、是によつて新見押寄せ戰ひ、絹田兵部を討取ければ、同勢大きに敗北す。草苅景繼も足弱に成て、筏津村迄引退く所を、新見父子引續て組留る間、大將草苅三郎左衛門幷一族悉引取畢ぬ。故に筏津村に景繼の墓所あり。其後大將なければ高山城沒落す。

高尾城落去の事

天正年中正月四日、室尾村高尾城主河端左近、鹿を得て則料理し、近習の小姓矢野新之丞にたべよと云ふ。新之丞云ふ、今日は大切成る愛宕精進成ば御免と願ふてたべず。左近曰、神慮と忠義は其味何れか重からん迚、鹿を終に喰せけり。ふしぎや新之丞忽亂心と成て、腰の刀を拔よりはやく左近の眉間三刀切る。左近も聞ゆる手利成ば、即座に討留といへ共、彼疵次第に痛み、後には瘧に成て二月廿五日に行年五十歲にて卒す。城兵方々へ落行き、高尾城は空虛と成也。

橫田山城落去の事

天正年中、橫野村橫田城主田中修理大夫重昌は、往古孝元天皇の末流にて、田口・櫻井抔と祖を同うせり。依之永祿の頃より、橫田を在城として毛利家に軍忠を盡し、苫田田中の鄕の內千石加增し

て、勢ひ漸く近郷に振ふ。然れ共心地勝れず、終に卒去しけり。子息光井大夫、幼少にて城を持堪へがたく、密に忍び出て乳母成ける人の許にて漸く成人しけり。妹一人あり。是を具して我生れ本城麓に便りけるに、譜代の者迚は一人もなく、其所の百姓耕作の地と成り、舊地成ば迚彼所にとゞまりけるに、昔のよしみを思ひけん、所の百姓酒肴共調て饗應致す事數日なり。其内百姓光井の妹を婦妻にせん事を乞ふといへ共、是を光井得心せず。其家の言掛りし事成れば、友達を呼集め是非と光井に責かける。光井以の外に立腹す。某、時世に至て浪客に成といへ共、正しく當所の城主重昌の嫡子也。何ぞ己匹夫の分ざいとして我妹を妻にくれよといふ、不届成るもの也と申されける。百姓共口々に言ふ様、昔はむかし今は今と存、外言して末々の家の面目、かんにんせぬとせりかけたり。光井最早堪忍成らず、即座に彼若もの切殺す。すは切るぞと大勢一度に取掛り、なげつはづしつあしらへ共、大勢なれば不レ叶とや思けん、幸ヒ庭に野馬居るを是幸と妹をかき乗せ、飛がごとくに東をさして逃行ける。跡にて百姓追々追掛行く。光井せめては運のよかりけん、高野といふ所迄落のび、知る人の有るを便り一生を送られけり。

天保二辛卯年霜月下旬寫レ之　西々條郡奥津村　石原春房　花押

美作國古城合戰記　終

備前文明亂記

*此目次及中見出とも本書底本には有之も史籍集覽に收めたる既刊本には共に無し

備前文明亂記目次

*此表本書底本には無く刊本に在り

金川城名　臥龍山

松田家代々

一、秀晢　二、秀巖　三、燈明　四、法泉　五、道林　六、源妙

七、妙善　八、妙國元成　九、皓日　十、蓮皓　十一、蓮盛於金川討死也　十二、蓮忠於下田討死也

十三、淨榮於備中須雲山討死　又俗名孫三郎。官名左近將監也。俗名官名共に代々如レ此。

金川日向山妙國寺代々住持三名

一、開山權少都日精文明十二年草創歟　二、日範　三、日悦　四、日審　五、日寶

六、日詮　七、日吏　八、日城　九、日欣　十、日航

私に曰、金川の地、今は左少將光政朝臣の臣、日置若狹知行所在居す。若狹食邑一萬六千石、

備前文明亂記

著者　*目黑祐欣

*舊刊史籍集覽本には、著者氏名なく不明とせるも本書の底本には卷末に明に附記せるを以て今此に掲出す

夫れ我朝は神代の時去て、神武天皇東征して豊葦原を掌にし玉ひしより以來、帝朝より政出て目出度かりしが、後白河院の御宇、太政大臣平清盛跋扈して宸襟を惱し奉りし故に、源頼朝に勅して彼等を追討せしめ玉ひけり。其功を賞し玉ひて頼朝を總追捕使になされしより、いつとなく關東に勢ありて、叡慮のまゝにならぬ事のみぞ後には多くなりにけり。後醍醐天皇の時、後鳥羽ノ院の舊規を興さんと欲し玉へども、御成敗に應ぜず。猶以て東夷盛なる所に、元弘建武の比尊氏將軍相模入道平ノ高時を滅し、其外新田左中將義貞の亂を治めて、天下泰平になりにけり。

夫吾朝者神代時去、從ニ神武天皇一以來、代々帝官ニ朝政一給、後白川院御宇、太政大臣平清盛入道猥奉レ惱ニ宸襟一間、蒙ニ勅命一右兵衛佐源頼朝、被ニ平氏一族悉追討一而任ニ惣追捕使一、守ニ護國一給共、有レ背ニ叡慮一、雖下後鳥羽院後醍醐天皇起ニ舊規一思食上、不レ應ニ御成敗一尚以東夷盛所、足利尊氏卿元弘建武之比、責ニ亡相模入道始北條氏族其外新田左兵衛督義貞以下逆心臣一給、一天泰平タル處ニ、

畠山右衛門佐義就擧レ兵事　附山名細川合戰

夫れ惟るに、山名伊豆守子息右衛門督、其後陸奥ノ前司氏清の謀叛の事散じて、又應仁の比より天下亂れて禁裡仙洞を始奉り、月卿雲客諸國の士民に至るまで、一日片時も安き事なし。其由來を尋ぬるに、畠山左衛門督政長。同右衛門佐義就、家督相論に依て數度相戰ふといへども、右衛門佐義就上意に背くに依て、金胎寺嶽山ノ合戰に懸負け、紀州の山林に籠居す。然りと雖、かの義就は弓箭を

取て名をあらはす兵なりければ、山名右衛門督入道宗全連々不便の事に思ひける折節、右衛門佐義就より合力を頼む由ひそかに申遣す處に、宗全たやすく領掌して、文正二年（但改元有て應仁元年也）十二月二十五日、手勢一千八百餘騎を引率して上洛し、左衛門督政長を事故なく攻落し、威勢肩をならぶる人もなし。

山名伊豆守時氏子息右衛門佐師氏、其後時氏四男山名陸奥前司氏清謀叛。又從二應仁之比一天下一亂、奉レ始二禁裏仙洞一、至二月卿雲客諸國侍民百姓一无二安事一。尋二其由來一、依二畠山左衛門督政長・同右衛門佐義就家督爭論一故也。雖二每度相戰一、依レ背二右衛門佐上意一、金胎寺嶽山合戰懸負、紀州山林籠居仕ル。然リト云ヘドモ、彼義就取二弓矢一凡テ名ヲ顯ス兵多シ。山名右衛門督持豐入道宗全（時氏四世孫也）。連々義就ガ勇武ヲ惜ミ、山林籠居ヲ不便ノコトニ思フ折節、右衛門佐義就頻リニ宗全ニ合力ノコトヲ憑ム由竊ニ申送ル。依レ此持豐入道預掌シ、文正二年十二月廿五日、手勢一千八百餘騎ヲ引率シテ上洛シ、山名入道同心シテ事故ナク政長ヲ攻落シ、山名入道ガ威勢肩ヲナラブ人ナシ。

細川左京太夫勝元は、元來政長を贔負たるにより、分國の勢を召のぼせ合戰に及ぶ事、まことに道に二虎あるが如し。然る間山名入道も勢を催す。山名同心の人々には、山名相模守・同修理太夫・同七郎・澁川治部大輔・一色修理太夫・佐々木六角・土岐美濃守・大内新助・河野伊豫守・畠山右衛門佐を始として、其外宗徒の大名一味して、猛勢にて公方の御館をかこみける。然れども上意方には先づ細川一門同意し、武衛松王・山名彈正忠・赤松兵部少輔・佐々木大膳大夫・武田大膳大夫・舍弟治部大夫、畠山左衛門督は一身にせまりたる事なれば云に不レ及、其外近習外樣の諸士、いかなる遠國波島にかくれ居たる者共まで、此働大事に馳せ參らざるはなかりける。互に洛中に城郭して、既に十餘年に及で攻戰ふほどに、主上も室町殿へ臨幸ありしかば、禁中は兵士の陣屋となる。梶井殿・三寶院・妙法院・諸門跡・五山も、或は放火し、或は城郭となる。さる程に、年中行事の御政所聖壽萬歲の御

*武衛松王武田治部太夫脱カ

祈禱も退轉し、諸社の神拜斷絕して飢饉年をかさね、災難月にます間、人々愁をいだかずと云事なし。さながら神道王法佛法ともに、破滅の世とぞ成りにける。かゝるためしは上古にも末代にも有べきやと、淺猿しかりし事ども也。

時ニ大樹ノ管領細川右京大夫勝元、元來政長最負タルニ依テ、勝元分國ノ勢ヲ召上セ、合戰ニ及ブコト度々也。實ニ趙ニ二虎アルガ如シ。然ル間山名入道同心ノ人々、先ッ山名相模守・同修理大夫・同七郎・澁川治部大輔・一色修理太夫・佐々木六角判官・土岐美濃前司・大内新助・河野伊豫守・畠山右衞門佐ヲ始トシテ、其外宗徒ノ大名一味大勢ニテ、公方ノ御營ヲ圍ミ申ス。將軍ノ御方ニハ、細川ノ一族不レ殘從ヒ*奉ル。武將山名彈正忠ヲ招キ給フ。赤松兵部少輔・佐々木大膳大夫・武田大膳大夫・畠山左衞門督、各々勝元一味タリ。畠山左衞門督政長ハ身ヨリ起リタル大事ナレバ云ニ及バズ、其外ニ近習外樣諸侍、如何ナル遠近波島ニ隱レ居タル者ドモマデ、此御大事ニ馳參ラザル者ハナカリケリ。互ニ洛中ニ城郭ヲ構ヘ、既ニ十餘年ニ及デ合戰タユル間ナシ。是ニ依テ至上モ室町殿ヘ臨幸アリシカバ、則、禁中ハ武士ノ陣屋ト成リ、梶井殿・三寶院・妙法院・諸門跡・諸五山モ、或ハ放火或ハ城郭トナル上ハ、年中行事ノ御政所聖壽萬歲御祈禱モ退轉、諸社神拜斷絕、飢饉年重、災難月勝間、人々無レ不レ懷レ愁、併佛法王法神道モ共ニ破滅ノ世ト成ニケル。懸ル有樣ハ上古ニモ聞及バズ、淺マシカリシ事共ナリ。

赤松政則本領被ニ返下一事　附山名政豐味方參り諸國大名分散の事

今度文明の亂に上意方いづれも軍忠深厚なりといへども、取分け赤松兵部少輔政則軍忠他に異なるに依て、本國播磨備前美作三ケ國を返し下さる。數十年牢浪せし諸士どもに本知行安堵せしめ、喜悅の眉を開き、彌々戰忠を致さんと勵ましける。然る處に山名入道宗全細川右京大夫勝元、兩人

ともに病氣して死去す。それより後は今の山名右衛門督政豐、祖父の先非を悔て味方に參りけり。土岐佐々木は今出川殿を相具し奉り、美濃近江に下落す。大内新助政弘は山名修理大夫河野伊豫守を伴ひ西國に下りける。畠山兩人は河内國に馳下て、國爭ときこえしかば、帝都は無爲に成にける。然といへども、東八ヶ國は重氏(代カ)上杉主從の合戰廿餘年やまず。筑紫は少貳と大内が爭ひ、北は隱岐出雲因幡伯耆、南は四國中國五畿内の合戰なれば、いつ歸安すべきとも見えざりけり。

去程ニ、赤松兵部少輔軍忠ヲ抽ルコト、他ニ異ナルニ依テ、本國播磨備前美作三ヶ國ヲ返シ被レ下、十ヶ年牢浪セシ諸士ドモ、本知行安堵シテ喜悅ノ眉ヲ開キ、彌忠戰ヲ致シケル。然ル處ニ、山名入道宗全細川右京大夫兩人、共ニ病氣ニシテ軍中ニ死去シ、兎角ノ内ニ談合共出來テ、今ノ山名右衛門督政豐、父祖ノ先非ヲ悔テ將軍家ノ御味方ニ馳參ジ、土岐佐々木ハ今出川殿ヲ相具シ奉リ、美濃近江ニ下向シ、大内新助ハ、山名修理大夫河野伊豫守ヲ伴ヒ西國ニ下、畠山兩人河内國ニ馳下、國諍トゾ成ニケル。帝都ハ無爲ニ成ニケリ。然リト云ヘドモ東八ヶ國ハ、重代上杉主從ノ合戰二十餘ヶ年也。筑紫ハ少貳ト大内ガ諍、北ハ隱岐出雲因幡伯耆、南ハ四國中國五畿内ノ合戰共、何歸伏ス可トモ見エザリケリ。

松田左近將監元成背ニ赤松政則ニ事

備前の國は今度の一亂以前は山名相模守知行し、小鴨大和守を代官として在國し、城郭を構へ居たりしを、勝元計略に依て、松田左近將監一族若黨を相催し押寄る處に、赤松郎等ども多年の遺恨を散ぜんと、彼に與力し攻落す間、本國たるに依て守護職政則知行仕る。軍功の賞として、伊福の鄕と云處一ヶ所松田將監元成にあたへ置く所に、天下亂たる時節たるに依て、松田一族ども備前の國西郡の內數ヶ所押領す。國方の本給人ども野心を含み、便宜をうかゞひ此事を訴訟し、時刻あらば

と相待つ處に、山名右衞門督政豊、三ケ國を召放し赤松に返し下さるゝを野心にふくみ、文明十一年九月上旬、上意をうかゞひ但馬國に馳下る。赤松兵部少輔も同十一月二十一日播磨國に下向し、此次でを以て、備前國松田押領の在處どもを改易すべき由風聞す。元成此由を聞て、押領の在所は忩劇の間、一旦兵粮料所として一族等抱え置處、糺返すべき條勿論の義也。伊福の郷に於ては軍の功賞たる上は、異變はあるまじき事なるに、無念至極の事也。只事を左右によせて我等を攻失ふべき企て顯然たり。其義ならば力不レ及とも一合戰して討死すべきとて、元成館金川と云處に要害をかまへける。

去程ニ、備前國ハ今度一亂以前ハ山名相模守知行シ、小鴨大和守爲二代官一在國シ城郭ヲ構ヘ居タリ。然ヲ勝元計略ニ依テ、松田左近將藍一族若黨ヲ相催シ押寄ケル所ニ、赤松家ノ侍ドモ多年ノ遺恨ヲ散ジ、與力シテ彼城ヲ責落ス間、本國タルニ依テ守護職政則知行仕リ、軍功ノ賞トシテ伊福郷ト云所ヲ一所、松田左近將監元成ニ出置所ニ、天下大亂ノ時節タルニ依テ、松田一族共備前國西郡ノ内數ケ所押領ス。是ニ依テ國中ノ本給人ドモ大ニ野心ヲ含ミ、便宜ヲ伺ヒ此事ヲ訴訟シ、時節アラバト相待處ニ、山名右衞門督政豐三ケ國ヲ召放サレ、赤松ニ返シ被レ下事ヲ怒リ野心ヲ起シ、文明十年九月上旬、上意ヲ伺ハズ但馬國ヘ馳下リ軍勢ヲ集ル間、赤松兵部少輔モ同十月二十一日播磨國ヘ下向シ、此次テヲ以テ、備前國松田將監ガ押領スル在所ドモヲ改易スベキ由風聞ス。元成此事ヲ傳ヘ聞テ、押領ノ在所ハ忩劇ノ間、一旦兵粮斷（料カ）所ノ爲ニ一族等抱置所、可二糺返一條勿論ノ義也。於二伊福郷一者軍功ノ賞タル上ハ、異變ノ段无念至極也。畢竟事ヲ左右ニ寄テ我等一族可レ責失一企現形セリ。其儀ナラバ力不レ及トモ一合戰シテ可二討死一トテ、元成ノ館金川ト云所ニ要害ヲゾ構ヘケル（私ニ云フ、金川ハ今日置若狹守在所ナリ。若狹守ハ當國主左近衞少將池田光政ノ臣ナリ。）

されば彼山は麓に大河流れ、嶺高くして雲つらなり。谷深くして磐石そびえ廻り、四方嶮岨なる

事屏風の如し。西は備中國境、北は美作につゞきたるゆゑ、百丈切たる峰の上に塀を付け櫓を上げ、中には陣屋打ならべ、國方のはたらき相待けるが、かくて猛勢を引請けん事計略なきに似たりとて、安藝の國嚴島一見と號して、歩行のよそほひにて備後國に下り、山名又次郎俊豊に申けるは、御分國ども今度一亂中、赤松に返し玉ふ事是非なき次第也。所詮思召立てたまはゞ、備前の國をば切開き進ずべき由、事もなげに申ける。望は多年の事なれば、一往の思案に不ㇾ及軍の内談ども申合せ、備前の國へぞ返りける。

サレバ、彼山ハ麓ニ大川流レ、嶺高ク雲連リ、谷深ク磐石峙チ廻リ、四方嶮岨ナル事屏風ヲ立テタル如シ。西ハ備中境、北ハ美作ニ續タル數百丈切タル岸ノ上ニ屏ヲ付ケ、櫓ヲアゲ、中ニハ陣屋ヲ打ナラベ、國方ノ働ヲ相待ケルガ、角テ猛勢ヲ引請ン事計略ナキニ似タリトテ、安藝國嚴島一見ト號シテ、歩行ノ粧ニテ備後國ニ下リ、山名又次郎俊豊ニ申シケルハ、御分國ドモ今度一亂中赤松ニ返シ給フ事無　是非ㇾ次第ニ候。所詮急度思召立御取返シアルニ於テハ、備前國ノ事ハ我等切開キ可ㇾ進ノ由、事モナゲニ申間、俊豊モ元來備前國ハ望也。一往ノ思案ニモ及バズ頓テ領掌アリ、軍ノ内談モ申合セテ松田ヲバ備前國ニゾ歸シケル。

福岡合戰の事

去程に赤松政則は、備前の國に打越え彼の在々所々を廻り、押を置き給人をつけ玉ひ畢りぬ。然る間、松田は兼て覺悟の事なれば、但馬備後へ飛脚の行き歸るほどこそあれ、文明十五年九月二十六日に、山名又次郎俊豊備後尾ノ道を打立、分國の國分寺に着陣し、分國他國の勢ども相催す間、俊豊に相從ふ兵には、先當國守護代大田垣美作入道・舍弟三河守（河内イ）・同新右衛門尉・同左京亮（右イ）・三吉太兵衛*・同和泉守・杉原三郎・木梨遠江守・本郷藤左衛門・山内新右衛門・同下野守・多賀新兵衛尉・滑良（なめら）兵庫助・同四

＊「原本註」イに太郎

郎太郎・三河内河内守・金谷山城守・花栗播磨守・湯河備中守・鍛治屋 五郎左衛門・和氣 筑前守・安田掃部亮・小越彈正左衛門・由谷加賀守・江田 新藏人佐・同 與三左衛門尉・涌喜上野守・敷名備中守・下見小三郎・栗原刑部左衛門尉・吉原藤左衛門・田房左馬助*一・上山出雲守・板倉新左衛門、安藝國には、小早河・草井和泉守・竹原・則光(*本ノマヽ)備中守・毛利太郎・赤河和泉守、出雲國には馬來惣兵衛尉、伯耆國には小鴨次郎四郎・同掃部亮、石見國には周布・福屋、其外隣國の諸士ども馳付けるほどに、都合其勢三千餘騎、十一月七日備前の國に押寄る。

案ノ如ク幾程モナク、政則備前ニ打越シ彼在々所々ヲ悉ク押置キ、給人ヲ付タリ。兼テヨリ思ヒ儲シ事ナレバ、但馬備後ノ兩國ヘ飛脚ノ往還スル程コソアレ、文明十五年九月二十六日ニ、山名又次郎俊豐備後尾道ヲ打立、同國*三ノ國分寺ニ着陣シ、分國他國ノ勢ヲ相催ス間、俊豐催促ニ隨フ輩ニハ、先當國ノ守護代太田垣美作入道・舍弟河內・同新右衛門尉・同右京亮・三吉太郎・同和泉守・杉原三郎・木梨遠江守・本鄕藤左衛門・山內新左衛門尉・同下野守・多賀 新兵衛尉・滑良 兵庫助・同四郎太郎・三河內河內守・金谷山城守・花栗播磨守・湯川備中守・鍛治屋 五郎左衛門・和氣 筑前守・安田掃部頭・小越彈正左衛門・由谷加賀守・江田新藏人・同 與三左衛門尉・涌喜 上野介・敷名備中守・下見三郎・栗原刑部左衛門尉・吉原藤左衛門尉・田尻(房)左馬亮・上之山出雲守・板倉新左衛門、安藝國ニハ小早川・草井和泉守・竹原則光、備中國*四ニハ毛利太郎・赤川和泉守、出雲國ニハ馬木惣兵衛尉、伯耆國ニハ小鴨次郎四郎・同掃部助、石見國ニハ周布・福屋、其外隣國ノ諸侍モ馳付ケル程ニ、都合其勢三千餘騎、十一月七日ニ備前國ニ押寄ル。

兼て相圖の事なれば、松田一黨には左近將監元成・子息孫次郎元勝・元成の舍弟惣右衛門・其弟花光院・宮內備前守・鹿田備前守・同掃部亮・子息次郎・同大炊助・同駿河守・子息 民部大輔・同 修理亮・同孫四郎・同參河守・同越中守・同又三郎・伊賀修理亮・佐藤式部、其外家來若黨一千八百餘騎、備中國には

*一「原本註」イに左馬允

*二此所人名猶研究を要す

*三、別本には「同國」を「分國」とす

*四、此所猶研究を要す前掲別本及び後年の書作たる備前軍記には備中守とせり

*原本註イに三方

上野土佐守・同豐前守・同三河守・同肥前守・庄ノ伊豆守・子息四郎次郎・多氣・河面・小坂・河西・高木・東條、都合其勢一千三百餘騎．松田勢一手に成て福岡西より北の山に陣を取る。備後勢同く南津坂の上火鉢が城に陣を取る。大方*味方は大山五六十丸も陣を取りつゞけ、大幕打廻したる陣の體たとへん方なし。彼の福岡の城と申は、北より東西に大河流れ、河島に小山あり。彼山を本城とし、其西に堀をほり、塀をぬり、年來調置處に、今度は敵味方猛勢たる間、要害を仕出さんと、在家一千餘家かまへの中に仕籠て、始て河水をほり流し、其中に大堀を二重三重にかまへ、塀をかけ、河瀨には亂杭逆茂木引櫓井樓あげたれば、三方は大河なり、誠に異國の漢陽宮の鐵の築地は、雁門の開きたれば鳥の通ふと聞えたり。是は雁門のひらかれざれば、飛鳥もかけりがたし。

兼テ合圖ナレバ、松田ノ一族ニハ、左近將監元成・子息孫次郎元勝・左近將監ノ舍弟宗右衞門尉、其弟花光院・宮內備前守・藤（勝カ）田備前守・同部掃助・子息次郎・同大炊助・同駿河守・子息民部大輔・同修理亮・同孫四郎・同三河守・同越中守・同又三郎・伊賀修理亮・佐藤式部丞、其外家ノ子若黨一千八百餘騎、備（中）前國ニハ上野土佐守・同豐前守・同三河守・同備（肥イ）前守・庄伊豆守・子息四郎次郎・多氣・川面・小坂・川西・高木・東條都合其勢一千三百餘騎也。松田勢一手ニ成テ、福岡ノ西ヨリ北ノ山ニ陣取リ、備後ノ勢同南津坂ノ上火鉢ガ城ニ陣取リ、大方三方大山五六十丸トモ陣取リ續ケ、大幕ヲ打廻シタル陣々ノ在樣（西カ）譬ヘン方モナシ。彼福岡ノ城ト申ハ、東西ニ大川流廻ル川島少（小カ）山アリ。彼山ヲ本城ニシテ、其面ニ堀ヲ掘リ、屏ヲ塗リ、年來調置處ニ、今度ハ敵味方猛勢タルノ要害ヲ仕出サントテ、在家一千餘ヲ構中ニ仕籠、初テ河水ヲ掘流シ、其中大堀ヲ二重三重ニ掘、屏ヲ塗、川瀨ニハ亂杭逆茂木ヲ引、櫓井樓ヲ揚グレバ、三方ハ大河也。誠ニ異國ノ咸陽宮ノ鐵築地ハ、雁門開キタレバ鳥通ナリ。是ハ雁門ノ不レ開バ、飛鳥モ難レ翔見エタリケル。

城中には守護代として浦上紀三郎・同伯耆守・子息六郎次郎・舍弟豐前守・其弟與三左衞門・同若狹

＊難波八郎次郎山田平左衞門同四郎左衞門及內藤藤左衞門脫カ

守・同次郎右衞門・同彌三郎・同八郎太郎・喜多孫左衞門・同掃部亮・櫛橋豐後守・同彌五郎・藥師寺四郎左衞門・同山城守・同次郎左衞門・舍弟延命寺・同六郎左衞門・同小六・難波掃部亮・舍弟十郎兵衞・同四郎左衞門・同八郎次郎・山田平左衞門・同四郎左衞門・有松右京進・同與七・同彥八・嚢懸伊賀守・岡本筑後守・同孫次郎・津島修理亮・同三郎左衞門・小串藤左衞門・中村次郎右衞門・大島縫殿助・沼田與市・同與五郎・延原八郎左衞門・山守八郎左衞門・兒島太郎左衞門・內藤藤左衞門・同與左衞門・市村隼人佐・足立新三郎・藤田新兵衞・志方彌六・同藤兵衞・横山助五郎・靑津九郎左衞門・矢田次郎左衞門・伏見藤左衞門・本鄕彌九郎・片岡孫左衞門・額田十郎左衞門・彌延九郎左衞門・子息新九郎・大村八郎三郎・國富太郎次郎・祿所彈正左衞門・目黑新右衞門・桑島兵庫助・中村三郎兵衞、其外備前播磨の軍兵ども都合二千餘騎にて栖籠る。彼大河上の瀨は長船右京亮・同左京進、新田、香々登の野伏を相添へ陣取る。下の瀨の津坂口は五ヶ所六ヶ鄕の野伏共堅めけり。河より東へ敵を渡さじとひしぎ支へなみ居たりしは、竹葦のごとくに見えたりける。寄手は猛勢なりと云へども、徒に幕の內に詩歌酒宴に休息し、城郭のありさまを餘所にのみ見てやみなんと、數日をこそは送りけれ。

城中ニハ、守護代浦上喜三郎・同伯耆守・子息六郎次郎・基景の舍弟豐前守・其弟與三左衞門・同若狹守・同次郎右衞門・同彌三郎・同八郎太郎・喜多野孫左衞門・同掃部助・櫛橋豐後守・同彌五郎・藥師寺四郎左衞門・同山城守・同次郎左衞門・舍弟延命寺・同六郎左衞門・同小六・難波掃部助・舍弟十郎兵衞・同四郎左衞門・有松右京亮・同與七・同彥八・嚢懸伊賀守・是本筑後守・同孫次郎・津島修理亮・同三郎左衞門・小串藤左衞門・中村次郎右衞門・大島縫殿助・沼田與市・同與一郎・延原八郎左衞門・山守八郎左衞門・兒島太郎左衞門・內藤與左衞門・市村隼人佐・足立新三郎・藤田新兵衞・志方彌六・同藤兵衞・横山助五郎・靑津九郎左衞門・矢田次郎左衞門・伏見藤左衞門・本江彌九郎・片岡孫左衞門・額田十郎左衞門・彌延九郎左衞門・子息新九郎・大工村八郎三郎・國富太郎次郎・稅所彈正左衞門・目

黒新右衛門●桑島兵庫助●中村三郎兵衛、其外備前播磨ノ軍兵都合二千餘騎ニテ楯籠ル。彼大川上瀬ハ長船右京亮●同左京進、新田、香々登、野伏ヲ相副ヘ陣取リ、下ノ瀬津坂口ヲバ五ケ庄六ケ郷ノ野伏堅メテ、河ヨリ東ヘ敵ヲ渡ラセジト支ヘケル間、寄手猛勢タリト云ヘドモ、徒ニ帷幕ノ中ニ休息シシテ徐所ニノミ見テヤヤミナン。葛城ノ山陣ニ謠歌酒宴ニ戯レテ數日ヲ送リケル。

かゝりける所に、十一月二十二日拂曉に山名の勢打出て、誰を先手としらねども、猛勢一度にどつとをめき、先陣河原に打のぞめば、後陣は福岡の原に充滿せり。幾千萬とも見えざるが上は坂屋が瀨、下は石津が瀨の間、淵とも瀨ともいはずして打いで〳〵渡しける。東向の勢ども且相戰と云へ共、雲霞のごとくの猛勢に散々に切立られ、手負死人ありしかば引退間、長船が館に發向し、近邊の民屋一宇も不レ殘燒拂ひ、頓て取て返し河より西に打歸り、津坂口の瀨を渡す。野伏ども河岸に臨み防戰せしかども、數百人討れて互に陣を引て入り、寄手は山に引あがり勝鬨あげて居たりしは、目にあまりたる大勢なれば、城中の人々も臆しつべくぞ見えにける。

懸ル所ニ、十一月二十二日拂曉ニ山名ノ勢打出ヅ。先陣ハ河原西ニ打莅ミ、後陣ハ福岡ノ原ニ充滿シタル勢ハ、幾千萬トモ見分ザリケリ。上ハ板屋ケ瀨下石津瀨ノ間、淵トモ瀨トモ不レ云打出渡シケル間、東向ノ勢モ支ヘテ且相戰ト云ヘドモ、雲霞ノ如クノ勢ニ切立ラレ、手負死人アリシカバ引退ニケリ。依レ此長船ノ館ニ發向シ、近邊ノ民屋一宇モ不レ殘燒拂ヒ、頓而取テ返シ、川ヨリ西ニ打歸リ、津坂口ノ瀨ヲ渡リ、野伏モ川岸ニ莅テ防戰セシカドモ、數百人討レ即時ニ破レニケリ。然リト云ヘドモ、河東ニ陣ヲバ取ラデ元ノ山陣ニ打登リ、凱歌ヲ揚ゲテ居タリシハ、目ニアマル大勢也。城ノ中ニモ臆スベシトゾ見エニケル。

浦上紀三郎成ニ敗井村兄弟ニ事

去る間山陣には大息ついて休みけるが、松田將監元成つら〳〵ことを思案して、一族を召あつめ、山名等に對話して神妙に申されけるは、今一攻せめたらば、味方利運になりなんは案の前の事なれども、多くの軍兵討死して何の益かあらんずらん。一人もうたせずして智謀を以て落すべしと、案をめぐらしけるやうは、元成が若黨に檜村といふ者あり。彼が兄にてありける檜村與三兵衞・同又次郎とて浦上紀三郎に奉公してありける間、此ちなみを以てしのびやかにすかしけるは、城中に火をかけ浦上を討取て降參せば、過分の恩賞行ふべしと事たゞしく云ひきかせ、金銀過分にあたへける間、則領掌して正しき厚恩の主を討たんとたくみしは、淺猿かりし心中なり。されば十一月二十三日の夜大風木を折て吹ける間、定てしのび夜討やあるべしと、宿直夜(天カ)廻りさせ番きびしく仕けるに、いづくの隙にか付けたりけん、城中の陣屋やき出たり。大風にはなつ火矢にみだれ、五町三町餘の所に猛火飛散て燒上る。つくりつゞけたる陣屋なれば、いかにして燒とゞまるべくとも見えざりける。本より相圖を定めしことなれば、山陣の勢下り立ち、手火續松は青天の星の影よりしげく、上下四五萬もあらんと思ふ軍勢堀を埋めよせ、持楯昇楯かつぎつれ、をめきさけんで身命をすてゝ攻めければ、鯨波地を動かし、狼煙天にかゝやきしは、誠に上は有頂天、下は阿鼻大城まで滅すべうぞ覺えける。されば如何なる天魔鬼神も面をむくべきやうぞなき。

然ル所ニ、浦上紀三郎ガ若黨檜村與三兵衞・同又四郎トテ、一人松田ニ奉公ス。此緣ヲ以テ檜村兄弟ヲ語ラヒ、城ニ火ヲ掛ケ浦上喜(紀カ)三郎則國ヲ打取リ降參セバ、過分ノ恩賞ヲ可レ行由申聞セ、若干ノ金銀ヲ與ヘケル。依レ之則領掌シテ正シキ厚恩ノ主人ヲ討タント覗ヒシハ、淺マシカリシ事共ナリ。然ル所ニ十一月二十三日夜大風木ヲ折リテ吹ケル間、定メテ忍ビ夜討ナンドモ可レ有トテ、宿直夜廻ヲ構ヘ番キビシクシケルニ、何ノ隙ニカ付タリケン、城中ノ陣屋燒出タリ。大風ニ放ツ火天ニ燃亂レ、五町三町餘所々猛火飛散シ燒上ル。作續ケタル陣屋ナレバ、何ニシテ燒止ルベシトモ見

エザリケル。元來ヨリ合圖ヲ定メシ事ナレバ、山陣ノ勢下立チ、手火續松ハ晴天ノ星ノ影ヨリ猶繁ク、上下四五萬人モアルラント思フ軍勢、堀ヲ埋寄セ持楯階楯カツギツレ、ヲメキ叫ンデ身命ヲ捨テ責ケレバ、鯨波地ヲ動シ狼煙天ヲ耀セシハ、誠ニ上ハ有頂天、下ハ阿鼻大城モ即時ニ破滅スルカヤトゾ覺エシ。サレバ如何ナル天魔鬼神モ、面ヲ可レ向トハ見エザリケリ。㊂

然といへ共城中の勢一騎當千の者どもなれば、少も是をことゝもせず、思ひ〳〵に備の口に相支へ防戰ひ、精兵共櫓より指詰引詰さん〴〵に射立る矢叫の聲、互に切合ふ太刀音、天地も響く計り也。松田巧をめぐらして智謀なりとは申せども、楢村が無道にて天にそむける其謂にやありけん、寄手若干手を負、引足になる所、浦上與三衛左門子息與三を始として、城戸を開て切て出て散々に追立けるほどに、みな本の山陣に引退ける。楢村心をめぐらして則國を討んとて、こゝやかしこにてねらへ共たばかり損じ、さらぬ體にて居たりしが、すでに其夜も明ければいかなる者の仕業ならんと、人々あやしみあへる所に、楢村方下人ひそかに申けるは、夜前の放火はたのみたる人の仕業なりと、巧みしことの始め終り一々次第に語りける。則國これを聞よりも、彼兄弟の者共をひた〳〵と搦捕り、思ふさまに拷問し、白狀歷然の事なれば終に誅をぞしたりける。されば因果經に欲レ知二未來果一見二其現在因一と說けり。かくのごとく、主を討んとたくみし下人にうらなはれしこと、世は澆季に及といへ共、日月は地に落ちず。いかでか臣として君をおかさんものやある。禮儀をしるべき道なるに、楢村振廻を城中の人ごとに、にくまぬものはなかりけり。

然リト云ドモ城中ノ兵ドモ一騎當千ナリケレバ、是ヲ少モ事トセズ思構ヘテ口々ヲ相支ヘ防戰シ、精兵櫓ヨリ指詰引詰散々ニ射、石弓胴切ニテ打ツ音矢叫、天地モ響クバカリナリ。是ニ依テ寄手若干手負死人射出サレ、引足ニ成ル處ヲ門ヲ開キ切テ出、散々ニ戰フ間、本ノ山陣ニ引退ク。然ル間則國ヲ討ント、爰彼ニテ覘ヒケレドモ擊損ジ、サラヌ體ニテ居タリシニ、夜モ明ケレバ如何ナル者

ノ所爲ナラント、人々アヤシミアヘリケル處ニ、楢村與三兵衛ガ下人密ニ申シケルハ、夜前ノ火事ハ頼ミタル與三兵衛ガ籌ノ由、始ヨリノ巧ノ發リドモヲ一々次第ニ告知ラセケル間、是非ナク楢村兄弟ヲ搦捕拷問スル處ニ、白狀歷然タリ。是ニヨリテ終ニ彼兄弟ヲ斬戮ス。サレバ法華ニハ、諸苦諸因貪欲爲本ト說レテ、諸ノ苦ハ貪欲ヲ本トシ、因果經ニハ欲知過去因見其現在果、欲知未來果見其現在因ト說テ、現在ノ果ヲ見テ過去未來ヲ知ルトコソ見エタレ。忽ニ如レ此重恩ノ主人ヲ討ント巧ム事、己ガ僕ニ告ラレシハ、世ハ堯季ニ及ブト云ヘドモ日月未レ落レ地、爭カ爲レ臣犯レ君乎。禮儀ヲ可レ知道トコソ見エタレ。

福井少次郎打死の事

すでに山陣の人々は、夜前大火に城落て浦上紀三郎を討すまし、楢村見參に入べしと思ひしに、案の外城中には事ともせず。楢村成敗の由聞つたへ、如何すべきと內談しけるが、庄野伊豆守申けるは、味方は山上に陣をとり城を目の下に見おろし、手の內ノ敵どもを攻落さで、徒に日を送る事の無念さよ、一合戰して雌雄を決すべきとて、十二月十三日伊豆守手の者ども、足輕野伏の體にて三百人計り、富岡といふ小山の北の陰より打出たり。浦上紀三郎が若黨ども是を見て、定て城をせめられんと此頃相待所に、今日まで甲斐々々しく合戰をもせぬことよと安からず思ひしかば、敵打て出る間、城より出合一矢射違ふる程こそあれ、切掛々々散々に戰ふ。寄手には細屋七郎右衛門白賀新兵衛討死し、城方には岸野五郎左衛門うたれて相引に引退く所に、庄右衛門四郎是を見て、手勢五百人計にて富岡山の南の端より打て出る。城中より櫛橋彌五郎・岩間孫四郎・難波十郎兵衛・沼田與市・延原八郎左衛門なんど始として、大勢切て出る。是を見て庄野伊豆守元資、法成寺掃部亮を使にて申けるは、同名右衛門四郎若武者にて楚忽の打死を仕るべし。合戰といふは味方を見繕ひ、時節をはからひ敵を亡すを

以て勇士とは云ふなれ。只討死して敵に利を付るを能とはせず、屹度伴ひ歸れと云ひければ、馳向て此由を云ふに、右衛門四郎曰く、侍が戰場に出でゝ敵に後を見するやうやある。一足も引まじい物をと罵て、栖より面に進出でゝ二間渡りの鑓を取直し、備中の國ノ住人庄ノ右衛門四郎と云ふ者ぞ。よれ手次の程を見せんと云ふ。沼田與市・岩間孫四郎・目黑次郎左衛門・弟與一左衛門渡合ひ、散々に戰ふ。目黑次郎左衛門臑當を突れ、與一左衛門弓手の肩を突れながら、右衛門四郎を打取にけり。

去程ニ寄手ノ勢城ヲ見下シ、目前ノ敵ヲ攻落サデ徒ニ日ヲ送ランハ無念ノ次第ナリ。一合戰シテ可レ決二雌雄一トテ、十二月十三日庄伊豆守手ノ者ドモ、足輕野伏ノ體ニテ三百人バカリ、富岡ト云フ小山ノ北ノ陰ヨリ打出タリ。浦上喜三郎若黨ドモ是ヲ見テ、定テ城責ラレント相待ツ處ニ、今日迄甲斐々々シキ合戰セザル事ヲ不レ安思ヒシカバ、敵打出間、城ヨリ出合一矢射違フル程コソアレ、切テ懸リ散々ニ相戰フ。寄手ニハ細矢七郎右衛門・白賀新兵衛討死シ、城方ニハ岸野五郎左衛門討レテ相曳ニ引退所ニ、庄右衛門四郎是ヲ見テ、手勢五百人計ニテ富岡ノ南ノ詰ヨリ打テ出ル。城中ヨリ櫛橋彌五郎・岩間孫四郎・難波十郎兵衛・沼田與市・延原八郎左衛門ナンドヲ始トシテ、大勢切テ出ル。是ヲ見テ庄伊豆守元資法城寺掃部助ヲ使者ニテ申ケルハ、同名右衛門四郎若武者ニテ楚忽ノ死ヲモ仕ルベシ。合戰ノ道ハ敵味方ヲ見合セ、時節ヲ計テ敵ヲ討亡ヌヲ勇士トハ申スナリ。只討死シテ敵ニ利ヲ付ルヲ古來ヨリ大將ノ心トセズ。急度伴ヒ歸ルベシト云ケレバ、掃部助急ギ馬ヲ馳テ此由ヲ云フ。右衛門四郎此旨ヲ聞テ、勇士ノナラヒ戰場ニ苟モ後ヲ見スル樣ヤアル、一足モ引ズ討死スベシト罵ツテ、栖ヨリ面ニ進ミ出テ二間渡ノ長槍ヲ取直シ、備中國住人庄右衛門四郎ト云フ者ナリ。手並ノ程ヲ見スベシト大言ス。沼田與一・岩間孫四郎・目黑次郎左衛門・弟與一左衛門渡シ合セ、散々ニ戰ヒ、目黑次郎左衛門臑當ヲ被レ突、與一左衛門右手ノ肩ヲ被レ突ナガラ右衛門ヲ討テケリ。

法成寺は右衞門四郎を呼返さんとするに、かへらで討死する間、散々に戰ひ延原に討れにけり。福屋藤次郎延原彥八と渡り合ひ、太刀をすてゝむずとくみ。福屋を取ておさへ刀を拔て內甲胸板はづれを二刀さす。さゝして福屋云ひけるは、石見の國の住人福屋藤四郎と云ふ者ぞ、一足も引ず討死したりと云ひつたへてくれよとて、終に首をぞとらせける。かやうに敵味方亂れ合ひ、追つ返しつ散々に戰ひ引退く所に、城中の若武者ども兩度合戰に逢はざるを無念にや思ひけん、城戶を押開き堀橋を渡て二千人計颯と出る所に、備後勢松田勢庄伊豆守を始として東西より眞中に取籠、一人もあまさじと切先をそろへて、えいや聲にて雲霞の如く切てかゝる間、浦上伯耆守大音聲にて申けるは、城郭をかまふるは敵を引懸利をせんための謀也。廣場に出合は勇士の短慮ぞ、構に入て敵を射よとよばはりける間、げにもとて次第々々に引退く所に、あまりに手しげく追懸るほどに取て返しさんざんに戰ひ、彌延九郎左衞門・井原孫左衞門・內藤四郎兵衞・福井少次郎、其外浦上紀三郎・同伯耆守が若黨共七十餘騎討れにけり。

延原左京進〔本ノマヽ〕ハ法成寺掃部助・右衞門四郎ヲ呼返サントスルニ、右衞門同心セズ猶深入シテ討死スル間、掃部助モ散々ニ戰ヒケルガ、延原ニ討レテケリ。福屋藤次郎ハ延原彥八ト渡シ合セ、太刀ヲ捨テ無手ト組デ福屋ヲ取テ押ヘ、刀ヲ拔テ內冑胸板外ヲ二刀指ス時、石見國住人福屋藤四郎ト云者ゾ、一足ヲ引ズ即討死シタリト云傳テクレヨト云テ、終ニ首ヲ被レ取ニケリ。ケ樣ニ、敵味方入亂レ追ツ返シツ散々ニ戰ヒ引退ク所ニ、城中ノ若武者共兩度ノ合戰ニ不レ合事ヲ無念ニ思ヒ、木戶ヲ開キ堀橋ヲ渡ツテ、二千人許颯ト出ル處ニ、備後ノ勢松田勢庄伊豆守ヲ始トシテ、東西ヨリ眞中ニ取籠一人モアマサジト鋒ヲ揃ヘ、曳々聲ヲ出シ雲霞ノ如ク切テカヽル間、浦上伯耆守大音聲ニテ申シケルハ、城郭ヲ拵フハ敵ヲ引懸テ利ヲ待ベキ謀ナリ。平出合ハ無レ勇士ノ至リ、構ニ入テ射殺セト喚リケル間、實ニモトテ次第々々ニ引退所ニ、敵手繁ク追懸ケル間、取テ返シ散々ニ戰

テ、彌延九郎左衛門・井原孫左衛門・内藤四郎兵衛・福井少次郎、其外浦上喜三郎・同伯耆守若黨ドモ七十餘人討レニケリ。

浦上彌三郎返し合ひ〳〵さん〴〵に戰ひ、數ヶ所疵を蒙り、其外淺手深手はしらず疵をおふ者何百人かありけん、記すにいとまあらず。取分あはれをとゞめしは福井少次郎なり。かれは都の者なりしが、幼少四歳の時、父源左衛門在國する程に共に下向し、當年二十一歳になる迄母不斷對面せず。今日の合戰に父と一所に出んと思ひしが、餘り手ひどく戰ふ間に父源左衛門を見失ひ、城の中にや入けんと城中に懸入て、戰散して益なし、軍は今が肝要なり出させ給へ源左衛門殿と、呼はりみれども見えざれば、又戰場にや有けんと二度大勢の中へ切て入り、福井少次郎生年二十一歳と名乘かけ、いきほひつよく見えければ、向敵も引退互に城に引けるが、數か所の疵をかふむりてつかれはてたる少次郎、伏ころび居たりけるを、父源左衛門是を見付て、いかに少次郎々々々と呼ども、淺手深手に二十六ヶ所手を負ひ、終に空しく成にけり。

浦上彌三郎返シ合セ〳〵、散々ニ戰ヒ數ヶ所疵ヲ被ル。其外深手淺手ヲ被ル者敵味方何百人カ有ケン、不レ追レ記。取分中ニモアハレナリシハ福井少次郎ナリ。彼ハ都ノ者ナリシガ、四歳ノトキ父源左衛門在國スル程ニ父ト共ニ下國シ、當年二十一歳ニナルマデ母ニ對面スルコトヲ不レ得。然ルニ此合戰出來、戰ノ最中敵味方ニ隔テラレ、父ハ先立テ城中ニ入リタリト心得、走リ入テ見ルニ父源左衛門城中ニ不レ見。是ニ於テ二度大勢ノ中ニ切テ出デ、福井少次郎生年二十一歳ト名乘リ、向フ敵ヲ追拂フ。又件ノ城ニ入テ見レバ、淺手深手二十六ヶ所マデ負ヒ遂ニ空シク成ニケリ。

たとへば元暦の昔平家一の谷の合戰に、梶原平三景時二度のかけして名を後代に殘せしは、それは子を思ふ故ぞかし。是はそれに異なりて父を思ふ故なれば、恩愛の道哀成ける事ども也。さて父源左衛門陣屋へ歸て手箱を開き見れば、文共あまた書置たり。都に殘り居給ひし親類の方へ、當陣のあ

りさまを思ひ〳〵に書送る。中にも母の方へは幼少の時より、なれまゐらせで不孝の至り無念なり。心ばかりはかよへども、互に見もせず見えもせず。夢のうき橋たえて後、なげかせ給はん御事こそ心にかゝり候へども、よしそれとてもあだし世に、のこらせ給ふ御身とて明日をも頼む道ならねば、思召分給ひ、なぐさませたまへと、こま〴〵と書送り、奥に一首の歌をぞ留ける。

うまれこしおや子のちぎりいかなれは同しよにたにへたてはつらん

と書とゞめたる有様は、兼ておもひ立し討死なりと、人みな哀におもひつゝ、涙をこそながしけれ。タトヘバ元暦ノイニシヘ、平家一ノ谷ノ合戰ニ、梶原平三景時二度ノ懸シテ名ヲ後代ニ殘セシモ、ソレハ子ヲ思ヒ、今ノ福井ハ父ヲ思フ。カレトイヒコレト云ヒ、時數百歲ヲ隔ツト云ヘドモ、何レモ恩愛ノ道ナレバ、誠ニアハレナリシ事ドモナリ。扨父ノ源左衛門陣所ニ歸テ手箱ヲ見ルニ、文餘多書置キタリ。披キテ見ルニ、都ニ殘ル親類共ノ方へ、當陣ノ有樣ヲ思ヒ〳〵ニ書送ル。中ニモ母ノ許ヘハ、幼少ヨリモ別離シ副奉ル御事モナク、心バカリハカヨヘドモ、互ニ見モシ見エモセズ。夢ノ浮橋絶テ後、ナゲカセ給ハン御事コソ心ニカヽリ侍ルヨシ、ソレトテモアダシ世ノハカナキナラヒニ侍レバ、何事モ前世ノ業因ト思召アキラメ給ヘト書テ、奥ニ一首ノ歌アリ。

生レコシ親子ノ契リイカナレハ同シ世ニタニヘタテハツラン

ト書止タルニコソ、兼テヨリ專ラ思ヒ定メシ討死ヨト、人皆哀レニ思ヒケル。是ヲ見テ跡ニ殘ル父源左衛門ガ心中、思ヒヤラレテ哀レナリシ事ドモナリ。

眞弓峠合戰の事

かくて山名又次郎俊豊は、備前國着陣の始より、但馬國親父右衛門督方へ飛脚を立らるゝことしき浪の如し。すでに敵對陣仕り日々に合戰に及ぶ。急度其國より播州へ御勢を立られ候て然るべし。

いさゝかも御延引あらば、定て播磨美作勢馳し合すべし。左あらば爰許難儀たるべき由申けれども、上意をなさゞるに依て、垣屋平右衛門雜掌にてなげき申されければ、いまだ但馬國丸山の城に控へ、播磨の國へは打入玉はず、赤松兵部少輔政則方へ備前より飛脚を遣し申けるは、一敵猛勢にて三方かこみ候。播州通路取ふさぐべく候。其以前に其國の御勢を立られ、美作勢指下され、鳥取邊中郡に打て出て通路を取ふさぎ候はゞ、敵幾程かこらへべく候はんや。謀を幄中にめぐらし、勝ことを千里の外に決するにて候はんものを」と、日の内に二度三度注進しけれども、然るべき功者なんどもなきか、又は若武者そこつの義あらんと思ひけるか、毎々政則には披露なく、只心得たると云ふばかりの返事にて、一日路二日路の間に二ケ國の大勢ひかへながら、去年六七月より思ひまふけたる合戰に、翌年正月下旬まで一騎もはせ加へ玉はぬは、是非なき次第とつぶやく人多かりけり。

斯テ山名又次郎俊豐、備前ノ國着陣ノ日ヨリ、但馬國ニオハスル親父右衛門督ノ方へ飛脚ヲ立ラル、事敷波ナリ。既ニ敵ニ對陣仕リ日々及ニ合戰ニ候。急度其國ヨリ播州へ御勢ヲ可レ被ニ指向一。御延引アラバ定テ播磨美作ノ勢馳シ合セナバ、爰元難儀タルベキ由被レ申ケレドモ、上意ナラザルニ依テ、垣屋平右衛門雜掌ニテ歎キ申サレケレドモ、未但馬丸山城ニ磐(つき)、播磨國へハ不ニ打入給一。赤松兵部少輔政則ガ方へハ、備前ヨリ敵猛勢ニテ三方圍候。定メテ播州通路可ニ取塞一候。其上阿波ノ大西、備後兩宮、近日罷立ノ由風聞候。事實ナラバ以外ノ次第ナリ。其以前ニ其國ノ御勢ヲ被レ立美作指下サレバ、鳥取邊中郡ニ打テ出デ通路ヲ取塞ギ候者、敵幾程ガ可レ堪哉。回ニ籌帷幄中ニ決ニ勝於千里外ニ候ハン者ヲト、日ノ中ニ二三度マデ注進シケレドモ、可レ然功者ナンドモナキカ、又ハ若武者楚忽ノ義アラント思ヒケル歟、毎々政則ニハ披露ナク、只心得タルト云儀ノ返事バカリニテ、一日路二日路ノ間ニ二ケ國ノ大勢控ヘナガラ、去年六七月ヨリ思儲ケタル合戰、翌年正月

下旬マデ一騎モ馳加ラザリシハ、是非ナキ次第カナトツブヤク人モ多カリケリ。

斯て如何なる者の異見にてかありけん、備前へは宇野下野守・浦上掃部亮を指下し、政則は十二月十六日に姫路の城を打立て、同十八日に同國大賀庄と云ふ所に着陣す。人皆仰天して、大敵備前に亂入の由日々に注進あるをさしおいて、いかなる事やあらんと申に、上意もなさず。俊豊備前に亂入の上は、本知行但馬國朝來(あさこの)郡打取べきと云ふ義とぞ聞えける。去程に但馬國より打入べきよし兼て聞えしかば、赤松伊達(伊豆カ)孫四郎大將にて、兩國の境に眞弓峠と云ふ所を掘切り塀をかけ調ける所、赤松前勢眞島・上月・宇野・柏原大將にて、千五百餘騎指遣し、眞弓峠に打あがりてみれば、雪枯木をうづみて谷嶺もわかたざるほどなれば、或は風がくれ、或は日あたり、或は麓の便を尋ね陣屋を打居えたる所に、十二月二十五日の比、朝雪なれたる但馬勢、案內者を先に立て垣屋越前守大將にて二千餘騎、思よらず山かさより押よせ、鬨をどつと作る間、兵ども取物もとりあへず相支へ防戰ふといへども、足だまりもなくけんそなる山に、大雪はふりつもりたり、人馬の通路もあらじと油斷しける間、長良・本郷・柏原・上原左京亮・同神兵衞・布施彈正忠・松田彈正左衞門なんど宗徒の者ども三十餘人、總て三百餘人討れて眞弓峠は敗れにけり。

斯テ如何ナル者ノ異見ニテカ有ケン、備前ヘハ宇野下野守・浦上掃部助ヲ指下シ、政則ハ十二月十六日姫路ノ城ヲ打出テ、同十八日同國大賀庄ト云フ所ニ着陣ス。人皆仰天シテ、大敵備前ニ亂入ノ由日々注進アルヲ聞テ、如何ナル事ヤラント申スニ、是ハ上意ナラズ。山名又次郎俊豊、備前ニ亂入ノ上ハ、本知行但馬國朝來郡ヲ打取ルベシト云儀ゾ聞エケル。去程ニ、但馬國ヨリ打入ルベキ由兼テ聞エシカバ、赤松伊豆孫次郎大將ニテ、西國ノ境ニ眞弓峠ト云フ所ヲ掘切リ、塀ヲ付ナンドシテ拵ヘケル處ニ、赤松前ノ勢眞島・上月・宇野・柏原大將ニテ、一千五百餘騎指遣ス間、眞弓峠ニ打上リテ見レバ、雪枯木ヲ埋テ谷モ嶺モ不レ分程也ケレバ、寒氣ヲ防ガントテ或ハ風陰日面ヤ、

或ハ麓ノ水便ヲ尋ナンドシテ陣屋ヲ打居ヱタル處ニ、十二月二十五日未明ニ、雪馴レタル但馬勢案內者ヲ先ニ立テ、垣屋越前守大將ニテ二千餘騎、思ヒヨラザル山カゲヨリ押寄セ、時ノ聲ヲ噇ト作ル間、赤松勢取ルモノモ取敢ヘズ支防ギ戰フト云ヘドモ、足ダマリモナキ嶮岨ナル山ニ大雪ハ降積リタリ、人馬ノ通路モアラジト油斷シケル間、各侍長良・本郷・柏原・上原左京亮・同神兵衛・布施彈正・松田彈正左衛門ナンド宗徒ノ者三十四人、惣ジテ三百餘人討レテ眞弓峠ハヤブレニケリ。

小倉（をぐら）少四郎諫言の事

赤松政則は眞弓峠の敗れしことを聞て、無念至極の次第なり。敵陣に向ひて油斷こそ未練の至なれ。時刻うつさず馳向ひ一合戰すべしとて、大賀の城を打立て節所の岩の掛路をつたひ、いそがせ玉ひけるほどに、具足武者の事なれば、いそぐとすれど行やらで、山路くらしつ夜に入間、とある谷底に陣を取居たる所に、小倉少四郎申けるは、此谷あひに御ひかへ候はんに、敵山かさより押來らば唯以前の二の舞なるべし。是にて御合戰しそんじなば、姬路の城も何の曲あるべき。只御引退有てこそ姬路の城に御籠りあらば、たとへ敵大勢にて勝に乘とも何の子細か候べき。其上雪なれざる者ども不案內の深山なれば、人馬の通路たやすからず。國中の廣みへ敵をそびき出し、要害に引かけて戰なば、一定打勝候はんものをと、心底をふるひ詞をつくし敎訓しければ、力およばずさらばとて、夜半計に打立て取退べしと宣へば、某先陣に打立て誰はしつはらひなんと云し者共、いとゞ先陣にはせぬけて、馬物具を捨て散々に成にければ、わづかの無勢にて姬路の城にぞ籠られける。

政則此由ヲ聞テ、無念ノ次第ナリ。敵陣ニ取向ヒ油斷スルトハ未練ノ至リナリト大ニ怒リ、時刻ヲ不移馳向一合戰スベシトテ、大賀ノ陣ヲ立テ節所ノ岩ノ懸道ヲ傳ヒ行ク程ニ、具足武者ノ事ナレバ、急ガントスレド行ヤラデ、夜ニ入リケル間、兎アル谷底ニ陣屋ヲ居ヱタル所ニ、小倉少四郎

中ケルハ、此谷合ニ御控候ハンニ、敵山ノカサヨリ寄來ラバ只以前ノ二ノ舞ナルベシ。是ニテ御合戰被ㇾ成損ジナバ、姫路ノ城モ何曲候ベキ。只御引退有テ御誘置レタル城ニ御籠アラバ、縱ヒ大勢ニテ敵勝ニ乘ジ候トモ、何ノ子細カ候ベキ。其上雪馴ザル者ドモ不ㇾ知ニ案内ㇾ深山ナレバコソ、人馬ノ通路タヤスカラズ候ヘ。國中ノ廣ミヘ敵ヲ放出シ、要害ニ引懸テ合戰シ給フニ於テハ、一定味方打勝チ候ハン者ヲト、心底ヲ盡シ叙諫シケレバ、政則モ最ト同意シ、サラバ打立ツベシトテ、夜半計ニ陣屋ヲ立可ニ取除ㇾ某ハ先陣ニ打チ、誰ハ殿セヨナンド、云付タル者、イトド先陣ニ馳拔テ、馬物具ヲ捨テ散々ニ成リケレバ、政則僅ノ無勢ニテ姫路ノ城ニゾ被ㇾ籠ケル。

されば兵に血氣仁義の二勇あり。血氣の勇者と云ふは凱軍(かちいくさ)の時は陣を破り、敵を亡すこと數ケ度なりといへ共、負軍の時は進退度を失ひ後代の名を耻ず、未練の働きをするなり。仁義の勇者と云ふは千騎か一騎になれ共さらに是を事ともせず、敵の猛勢にもおそれず逃れぬ所を知つて命を輕んずるなり。彼赤松勢は加賀南方名譽、播州猪取野(ゐかりの)、岩倉山、山崎、洛中に於て、毎度の合戰に名を揚げ、天下に比類なかりしに、今度は主を捨て親を捨て、さして强敵もなきに無手に逃げるは、以前は血氣にほこりけるかとぞ云はれける。去程に備前の加勢に指下しける宇野下野守浦上掃部亮も、片上と云ふ所まで下着してけるが、此合戰を聞て取て返し上る間城中色を失といへ共、さすが軍によわる氣色はなかりけり。然る間美作勢も後詰の爲に、小瀨彈正忠・大河原彈正左衞門大將にて一千餘騎、備前と美作の境なる大松と云ふ所に陣取る間、松田惣右衞門大將にて金川城三百餘騎にてたて籠る。新田庄の野伏引具して寄よとて、明石六郞兵衞日笠和氣の村に陣取る間、松田孫四郞・佐藤式部、並、楢原・堤上・小野田相催し、吉岡の南の山に陣取り、長船右京亮が館の古城取持て、播州通路をふさぐべきよし聞えける間、浦上豊前守熊山に陣取り、大かゞり燒て居たりけり。

サレバ血氣ノ勇者仁義ノ勇者トテ二品アリ。血氣ノ勇者ト云ハ、勝軍ノトキハ陣ヲ破テ敵ヲ亡ス

事數ケ度アリト云ヘドモ、負軍ノ時進退度ヲ失ヒ、後代ノ名ヲモ不レ恥未練ノ働キヲスル也。仁義ノ勇者ト云ハ、千騎ガ一騎ニナルト云ヘドモ更ニ事トモセズ、敵ノ猛勢ニモ不レ臆不レ遁ヲ知テ命ヲ輕ンズル也。彼赤松勢ハ、加賀南方譽、播州猪取野、岩倉山、山崎、洛中ニ於テ、毎度ノ合戰ニ名ヲ揚シ事天下ニ比類ナキニ、今度ハ主ヲ捨テ親ヲ指置テ、サシテ競ヒ掛ル敵モナキニ、無下ニ逃ケル事已前ノ武名ハ血氣ニ誇リケルカトゾ云ケル。去程ニ備前ノ加勢ニ指下ル宇野下野守・浦上播部助モ、片上ト云フ所マデ下着シケルガ、右ノ合戰ヲ聞テ急ギ片上ヨリ歸リ上ル。是ニ於テ、城中ノ兵ドモ色ヲ失ヒ力ヲ落スト云ヘドモ、サスガニ軍ニ弱リタル體ハ無カリケリ。然ル間美作ノ勢モ後詰ノ爲、小瀬彈正忠・大河原彈左衛門大將ニテ一千餘騎、備前ト美作ノ境ナル大松ト云フ所ニ陣取ル間、松田宗右衛門大將ニテ、金川城三百餘騎ニテ栖籠ル。新田庄野伏引具寄ヨトテ、明石六郎兵衛日笠和氣宿ニ陣取間、松田孫四郎・佐藤式部少輔・楢原・堤上・小野田相副ヘ、吉岡ノ南ノ山ニ陣取リ、長船右京館古城ヲ取持テ播州通路可レ塞由聞エケル間、浦上豐前守熊山ニ陣取テ、大篝ヲ燃テ居タリケル

於福岡表ニ藥師寺次郎左衛門、額田十郎左衛門、片岡孫左衛門討死中合の事

既に眞弓峠の合戰赤松方利なしと聞えければ、福岡城中の兵共氣を失ひ居たりしが、十二月二十九日山陣の勢東をさして行とみえしかば、能き時節に一戰すべしとて、赤松勢打出ける山陣より少々出合ひ矢軍しける。其まゝ攻登らば然るべき合戰もあるべきに、とかく云ひ相引に退ぬ。明れば文明十六年正月二日、軍の首祝とて大田垣三河守大將にて、酒呑て山陣より下り、一日攻て幾何かの手負死人出來、晩夕に引退く。同六日に山陣さわぐ體見えしかば、定て寄來るべし用意せよと云ふ程こ

そあれ、山陣の勢も麓に下り鯨波を作る間、城より出合ひ野伏とも矢軍して、互に漸く引退く所に、備後勢三百人計り外堀の河下にひかへたり。

去ル程ニ十二月二十九日、山陣勢河ヲ渡シ東ヲ指シテ行ト見エシ間、能キ時節ナリ一合戰スベシトテ赤松勢打テ出ケル。山陣ヨリ少々出合ヒ矢軍シケル。其マヽ、責上リナバ可レ然合戰モアルベキニ、兎角云合ヒ引退キヌ。明レバ文明十三年正月二日、軍首途祝トテ太田垣三河守大將ニテ山陣ヨリ下、一日攻テ幾バクカ手負死人被ニ射出一晩夕ニ及ビ引退。六日山陣騷グ體見エシカバ、定テ寄來ルベシ用意セヨト云程コソアレ、山勢ドモ麓ニ下リ鯨波ヲ作リケル間、城ヨリ出合フ野伏ドモ矢軍シケル。互ニ漸々引退ク所ニ、備後勢三百人許リ、外堀ノ河下ニ控エタリ。

藥師寺四郎左衞門、敵此攻口へは來らざるにより、今迄相戰はざる事無念とおもふ時節なれば、をめきさけんでかゝりける。暫くこらへて見えしが、大勢にまくり立られ堀の向に颯と引く所、和智左衞門、何國まで引くぞ只討死せよと云ふまゝに、眞先に進み出て切渡る間、我劣らじと切かゝれば、赤松勢引き退く所、藥師寺四郎左衞門貴能白柄の長刀取なほし、勇み進みて切かゝる間、山名勢引色に見えける所、大田垣美作入道・和氣筑前守・山內新左衞門何れも劣らぬ兵なるが、長刀くき短かに取て、逸足馬に乘つれ馳廻り〳〵下知しけるは、備後國を打立しよりかばねは原上の苔にさらし、名は後代に殘すべきと存ずるゆゑ、二度本國にかへるべきと思はねば、一足も引な只討死せよと呼んで、眞前に進みて切掛る間、和氣筑前守・三好和泉守互に我前にと爭ひしかば、大勢に切立られ赤松勢ひた引に引く所、藥師寺四郎左衞門大音聲にて、きたなし人々後日の名をば思ぬか、何のために命を惜むべき。貴能に於ては討死するぞ」とよばはりて、取て返し〳〵こゝを先途と戰ふを見て、藥師寺の延命寺、藥師寺の彌四郎は、貴能をうたせじと敵きびしく追かくれども、一度に取て返しあとをさへぎれば、潑とをめいて追拂ひ、津坂の山の麓より城の堀ぎはまで、二三千人の敵兵を唯十

五人にて追つ返しつ戰ひしは、誠に一騎當千とは是等の事にてあるべし。

藥師寺四郎左衞門、敵是攻口ヘ懸ケルニ寄來ラザルニ依テ、今マデ合戰セザル事無念ナリト思フ時節ナレバ、呼叫ンデ掛リケルニ且堪ヘテ見エシガ、大勢ニ捲リ立ラレ堀ノ向ニ颯ト引ク處ニ、和智左衞門、何國マデ引ゾ、只切死ニセヨト云儘ニ、眞先ニ進デ切渡ス間、我劣ラジト切掛リケレバ、赤松勢引退處ニ、藥師寺四郎左衞門貴能、白柄ノ長刀取直シ勇ミ進デ切テ懸ル間、又山名勢引色ニ見エケル所ニ、太田垣美作入道・和氣筑前守・山田新左衞門何レモ不レ劣兵ナルガ、長刀莖短ニ採リ、逸足馬ニ乘連テ馳廻々々下知シケレバ、備後國ヲ打立ショリ、屍ハ曝二原上苔一名ハ後代ニ殘サント存ズル上ハ、再ビ生テ本國ニ可レ歸ト思ハヌゾ。一足モ引ナ只切死セヨト呼デ眞前ニ進テ切掛ル間、和氣筑前守三吉和泉守互ニ我先ニ諍テ大勢掛ル間、赤松勢ヒタ引ニ引ク處ニ、藥師寺四郎左衞門大音聲ニテ、キタナシ人々、命ヲ何ノ爲ニカ惜ムベキ。夫レ命ハ義ニ依テ輕シト云ヘリ。後日名ヲバ不レ思乎。貴能ニ於テ一足モ不レ引打死スルゾト喚テ、取テカヘシ／＼爰ヲ先途ト戰ヒケル。是ヲ見テ藥師寺彌四郎貴能ヲ討セジト、敵手繁ク追懸レバ一度ニ取テ返シ、跡ヲ遮レバドツト喚テ追拂ヒ、津坂山ノ麓ヨリ城ノ堀ギハ迄、二三千人ノ敵僅四五人ニテ追ツ返シツ戰ヒシハ、誠ニ一騎當千ノ兵トゾ見エシ。

斯りける所に、福屋九郎右衞門と名乘て、黑革摺の腹卷に大鍬形打たる甲の緖をしめ、六尺計なる太刀の鍔もと迄血にそみたるを持て開ひてかゝりける。貴能太刀にて渡り合ひ散々に戰ふ所、郎等ども落合ひ福屋終にうたれにけり。少勢を見すかしけるか、勝れたる剛の者が餘り味方に進出て討死しけると見えにけるを、藥師寺次郎左衞門則能此由きつと見て、命は君ために輕く名は家の爲に重し。敵にうしろを見せたらんは末代までの不覺也。貴能深入するぞ討すな者ども、返せ／＼と呼ばゝりける間、額田十郎左衞門・片岡孫左衞門三人一所に戰ひ、同じ枕に討死す。

斯リケル所ニ、福屋九郎右衛門ト名乘テ、黑皮縅ノ腹卷ニ、大鍬形打タル冑ノ緒ヲシメ、六尺計リナル太刀ノ鍔本マデ血ニ染メルヲ持テ開テ懸ル。貴能長刀ニテ渡シ合ヒ散々ニ戰フ處ニ、貴能ノ郎等ドモ落合テ遂ニ福屋ヲ討取ケリ。少勢ヲ見スカシケル歟、自己ノ勇力ニツノリケル歟、アマリニ味方ヲ離レ進ミ出テ死シケルトゾ見エニケル。藥師寺次郎左衛門尉則能屹ト此ヲ見テ、命ハ君ノ爲ニ輕シ名ハ家ノ爲ニ重シ。敵ニ後ヲ見セタランハ末代迄ノ不覺ナリ。貴能討スナ返セ〳〵ト呼ハリケル。額田十郎左衛門片岡孫左衛門三人一所ニ戰ヒ、則能ト同ジ枕ニ討死ス。

されば此三人契約の仔細あり。とある所に寄合則能申けるやうは、つら〳〵此合戰の趣を案ずるに、味方一定打負んと覺ゆる也。其故は彼松田は當國に於ては才ある者也。將又當方と山名方とまさしく覺悟ある事なり。然る上は播磨美作勢馳加らば、卽時に栖の下にて一戰の中に勝負を決すべき所に、去年八月より當城を構へ大敵にとり籠られ、難儀の由注進するに加勢一騎も下されず、剩さへ眞弓峠の合戰にかけ負てさん〴〵に成り、わづかの勢にて姬路の城に籠らるゝ由申間、是非なき次第と思ふ也。さあらんに於ては一定討死すべき身の人々、よわり果なん有樣共を見んも物うかるべし。迚も死なん命、一番に討死して名を後代に殘し、先祖の忠功をもあらはすべし。人々いかにと云ひければ、額田十郎左衛門も片岡孫左衛門も一同に申けるは、誰しもさこそ存ずれ。相かまへて互に見はなつな見はなたじと、かたく云ひ定けるを、餘人は誰も知らざれど、今思ひ合すれば則能其所を出るとて申けるは、只今敵の手に渡るべき顏也。最後の對面せんとて鏡に向ひ、につこと笑て出し。今思ひ合すれば、誠自身の最後の見參にて有けるよな。

サレバ、彼三人兼テ契約ノ子細アリ。此度或所ニテ此輩寄合雜談シケルニ、則能申シケルハ、倩此合戰ヲ案ズルニ、味方一定打負ント覺ユルナリ。其故ハ、彼松田一家ハ當國ヲ不レ出者共ナリ。將又當國方ト山名方ト合戰正敷覺悟ナリ。然ル上ハ、播磨美作勢卽時ニ差下シ、一戰ヲ遂ゲ勝負

ヲ決スベキノ所ニ、去年八月ヨリ當城ヲ構へ、大敵ニ取籠ラレ難儀ニ及ブ由數十度注進ス。然ルニ、今ニ至ル迄加勢ノ一騎モ指下サレズ、剩サヘ眞弓峠ノ合戰ニ不覺ノ負ヲ取リ散々討ナサレ、僅ナル勢ニテ姫路城ニ被レ籠由是非ナキ次第也。彼レヲ以テ是ヲ思フニ、今ノ如クナラバ一度ハ討死スベキ身ナリ。トテモ死スベキ身ノ、弱リナン形粧ヲ人々ニ見センモ物憂カルベシ。必竟死ナン命ヲ一番ニ討死シテ名ヲ後代ニ殘シ、先祖ノ忠孝ヲモ顯ハスベシト云ケレバ、兩人ノ輩モ、誰々モサコソト存知仕ル事ニテ候へ。相構ヘテ、此度見放サジト堅ク云ヒ定テケリ。サレバ、則能其期ニ陣所ヲ出ルトテ云ケルハ、只今敵ノ手ニ渡ル饋（餞イ）也。イデ最期ノ對面セントテ、鐙ニ向テ打笑テ云ケルガ、後ニ思ヒ合ハスレバ、誠ニ是ゾ自身ノ最期ノ見參ニテゾアリケル。

額田十郎左衛門岡本筑後守に向ひ云ひけるは、又三郎一子也。我と一所にあらば必死を遂ぐべし。賴よし云て別の構に置かれける。片岡孫左衛門下人に向て云ひけるは、頸は敵にとらすべし。是をしるしに尋ねよと、紙よりにて左の二の腕を二重結ばせけるとなり。されば云ひしにかはらず三人ながら討死せり。親子兄弟さへ合戰のならひ、敵味方に隔られ前後相違ひ、心に任せざるものぞかし。況や同朋輩のさぞと云ひ合せしをちがへず、討死せし心ざし有難かりし振廻也。

額田十郎左衛門岡本筑後守ニ向テ云ケルハ、又三郎事我等一子也。一所ニアラバ愚息モ必死スベシ。父子一所ニ戰死シテ、永ク我家斷絶セン事モ本意ナシ。和君ノ賢慮ヲ賴ミ奉ルト云ケレバ、岡本諾シテ又三郎ヲバ別構ニ指置ケル。是ニ依テコソ此度死セザリケリ。片岡孫左衛門下人ニ向ッテ云ケルハ、我討死セバ頸ハ敵ニ取ラルベシ。是ヲ（印）記ニセヨト云テ、紙ヨリニテ左ノ二ノ腕ヲ二重ニ結バセケル。云シニカハラズ。（脫文アリ）死骸ヲ取サレバ、（脫文アリ）親子兄弟スラ合戰ノ習ヒニテ敵味方ニ隔ラレ、前後相違シ心ニ任セザル物ゾカシ。況ヤ同傍輩ノサゾト云ヒ合セシヲ不レ違、討死セシ志有難カリシ振舞ナリ。

*公能大日本史公義ニ作ル

*私ニ云、此薬師寺ハ彼「取レバウシトラネバ」ト詠ジテ高師直諫言シテ出家シタル、薬師寺次郎左衛門尉公能ガ後胤ナリ。代々中國ニ住シ、近キ頃ハ赤松ノ旗下トナツテ、此下知ヲ守リ播州ニ住居スト云々。

福岡合戰

同日午の刻の終計りに、いと霞たる春の日に、人馬の烟立やまず互に息をなだめけるが、江田・滑良・板倉は堀水の上を渡り中をさへぎらんと切掛る所に、櫛橋豊後守・則光伊豆守黒糸縅の腹巻同毛の五枚甲の緒をしめ、白猩熊を付て着、二間渡りの鑓を引そばめひかへたる所に、大勢にまくり立られ手の者ども一度に颯と引ける所に、則光伊豆守は一足も退かず大音聲に申ける。きたなし者ども、同朋輩と云ひながら我等は播磨の者也。當國の人々味方ながら耻入たり。其上山名勢は元來願ふ所の敵なり。本望の合戰して討死せよとよばゝりけるに、櫛橋彌五郎思はざるに引立られ少し退しが、是を聞て取て返し弓手の脇にひかへたり。かゝりける所に、三吉左京亮・滑良四郎太郎・福田九郎右衛門と名乘て、大勢の中より進み出切掛る。滑良四郎太郎と櫛橋豊後守渡り合ふ。

加樣ニ戰フ所、江田・滑良・板倉堀ノ水上ヲ渡シ、中ヲ切掛ル處ニ、櫛橋豊後守・則光伊豆守、黑革威ノ腹卷、同毛ノ五枚冑ヲ猪頸ニ着、忍ノ緒ヲ縮メ白猩熊ヲアリテ(本ノマヽ)着、二間渡ノ鎗ヲ引キソバメ控エタル處ニ、大勢ニ捲リ立ラレ、手者ドモ颯ト引ケルニ、則光伊豆守一足モ不レ退大音聲ニテ云ケルハ、キタナキ者ドモノ分野(ありさま)哉、同傍輩ト云ナガラ我等ハ播磨ノ者ナリ。當國人味方ナガラモ耻入リタリ。其上山名勢ハ元來當手望ム所ノ敵ナリ。我人本望ノ合戰ナルゾ。唯混(寔カ)ラ勇戰シ討死セヨト喚リケルニ、櫛橋彌五郎思ハズモ引立ラレテ、少シ退キシガ是ヲ聞キ取テ返シ、弓手ノ脇ニ控エタル處ニ、三吉左京亮・滑良四郎太郎・福田九郎右衛門ト名乘テ、大勢ノ中ヨリ進出テ切テ掛リ、滑良四郎太郎ト櫛橋豊後守ニ渡シ合ス。

滑良は力まさりの若武者也。大太刀にて横打に討所に、鑓にて込けるが、太刀の打はづしに左の二の腕をたてさまに切さかれ、あやうく見ゆる所に、彌五郎其外郎等共落合ひ滑良は終に討れにけり。三吉左京亮は大村彌五郎と渡合ひ、さんぐ\に戰ひ鑓を目貫もとより打をられ、甲の鉢を二太刀打たれ、すでに大村討ると見えしを、難波四郎左衛門中指にて內甲を射ければ、痛手にてひざまづき鑓を切拂ひ、終に大村に頸を取られけり。あつぱれ剛の者也と敵味方譽めあへり。福田九郎左衛門志方彌六頸を取り、かやうに爰を先途と戰ふとも、山名勢次第に跡よりつゞきて、引は一騎もなかりし間、難儀なりしと思ふ所に、浦上與三左衛門子息與三、手勢三百人ばかりにて大勢の中に切て入り、黒烟たてゝ攻戰ひ、互に勇み進みて數刻もみ合ければ、屍は原上の塚に埋み、血は大河の紅波となれり。只命を限と戰し敵味方の有様、無慙なりと云ふも中々愚なり。例令ば漢の魯陽鉾を取て、夕日を招き返し、合戰せしも、かくやと思ふ計り也。

滑良サシモノ若武者也。大太刀ヲ眞向ニサシカザシテ横打ニ打ツ所ヲ、楢橋鎗ニテ込ケルガ、太刀ノ打ハヅシニ左ノ二ノ腕ヲ竪ザマニ切ラレ、既ニ豐後守危ク見エケル所ニ、楢橋彌五郎ヲ始メ、其外郎等ドモ落合テ滑良ハ遂ニ討レニケリ。三吉左京亮ハ大村彌五郎ト渡シ合セ散々ニ戰ヒ、三吉が持所ノ鎗目貫穴ノ本ヨリ切折ラレ、冑ノ鉢ヲシタヽカニ二太刀切ラレ、スハヤ大村ニ討ル、ト見エケル處ニ、難波四郎左衛門中指取テ引キ固メテヒヤウト放ツ。其矢三吉ガ內冑ニ中ル。痛手ナレバ立テ働ク事モ叶ヒ難ク、踞テ勇猛ヲフルヒ鎗ヲ切拂フ。然レドモ、重手ナレバ遂ニ大村ニ頸ヲ取ラレニケリ。アツパレ大剛ノ兵哉ト、敵味方トモニ稱歎スト云ヘリ。福田九郎左衛門志方彌六首ヲ取ル。加様ニ爰ヲ先途ト戰ヘドモ、山名ハ彌跡ヨリ續テ引バ、殘ル味方一騎モナカリケレバ、イトヾ難儀ニ見エシ處ニ、浦上與三左衛門子息與三郎、手勢三百バカリニテ大勢ノ中ニ切テ入リ、黒煙ヲ立テ、責戰ヒ、互ヒニ勇ミ進テ數刻揉合ケレバ、組デ落首ヲトルモアリ取ラル、

モアリ、親ハ子ヲ捨テ子ハ親ヲ不レ助。手負死人ヲフミ越エ〳〵命ヲ限リニ戰ヘバ、屍ハ原上ノ塚ニ積ミ、血ハ則河トナッテ紅波漲リ落ル有樣、無慙ト云モオロソカナリ。傳聞ク保元平治ノ合戰、壽永元暦ノ戰モ、元弘建武ノ戰闘モ、此程ハゲシキ軍ハアルベカラズ。タトヘバ漢ノ魯陽鉾ヲ取テ日ヲ招キ返セシ合戰モ、斯クバカリニヤト思ヒヤラル、計ナリ。

かゝりける所に松田勢とおぼしき勢、河原面より楯のはしをたゝいて、鬨をつくりをめき叫で掛りけるを、浦上紀三郎討死するぞと云ひ捨て切て出る所に、同伯耆守むずと取付申けるは、合戰は是にかぎるべからず。粗忽の討死なりと堅く制し出さゞりければ、力およばず留りし所に、紀三郎則國が郎等に內山彌三郎●下山彈正とて精兵あり。進出て申けるは、松田惣右衛門と矢印書て最前より味方ども射られたり。只今相近づき見ゆれば一矢仕り見候はんと、兩人楯の陰より指詰引詰さん〳〵に射伏て見えける所、松田惣右衛門親秀中指にてよつ引て射、下山彈正が胸板にあたつて押付に箭先の出る程見えけるが、動と倒れて死にけり。內山彌五郎は惣右衛門が射る矢、向袖の脇引はづれへぬひさまに通りければ、二の矢にて內山を射、草摺の胴付をづばと通しければ、漸とりのけてありしが、幾程もなくて果にけり。あまりに戰つかれければ互に相引に引てける。互に勝負は見えざりしか共、城中の勢どもは殘りすくなに成行て、危くこそは覺えけれ。

掛リケル處ニ松田勢ト覺シクテ、河原面ヨリ楯ノ端ヲタ、キテ鬨ヲ作リ號叫テ懸リケル。是ヲ見テ浦上紀三郎、唯今討死シテ各ノ見參ニ入ルベシト云捨テ、無二無三ニ切テ出ル。然ル所ニ浦上伯耆守是ヲ見テ、紀三郎ガ鎧ノ袖ヲ無手ト取テ申ケルハ、合戰コレニカギルベカラズ。楚忽ノ討死豈大將ノ本意トセジ。大ニ無益ナリト堅ク制シテ出サザリケレバ、紀三郎モ力不レ及止ル處ニ、則國ガ郎等ニ內山彌五郎●下山彈正ト云テ、精兵ノ譽レヲ取シ者アリ。此二人紀三郎ガ前ニ出テ申シケルハ、松田惣右衛門尉ト矢記書テ、最前ヨリ味方ノ兵數多亡命仕候事無念ニ存候。只今相近ニ見

エ候間一矢仕テ見ントテ、內山下山二人トモニ一枚楯ノ影ヨリ指詰引詰散々ニ射、敵人多ク射伏テ弓勢ヲ顯ハセリ。懸ル處ニ、惣右衛門尉親秀此ヲ見、ニクキ奴バラガ荒言哉、イデ手並ノ程ヲ見セントテ、中指取テ打番ヒ、ヨツ引テヒヤウト放ツ。此矢アヤマタズ下山彈正ガ胸板ニグサト中リ、押付ニ矢尻ノ出ル程ニ見エケレバ、動ト斃テ一言モ吐ズ死ニケリ。內山彌五郎惣右衛門射ル弓ニテ、射向ノ袖ヲ脇引外ヘ縫樣ニ通シケレバ、二ノ矢ニテ內山ヲ射、草摺ノ胴付ヲヅバト達シケレバ、漸取除ケルガ、幾程無クゾ死シタリケリ。アマリニ合戰ニ屈シ氣ヲ疲シケレバ、相曳ニ引退キケル。

浦上美作宗則宗下向の事 附雜說

浦上一黨申されけるは、此方にては軍勢いつ散ずべきとも見えず。さらば浦上美作守所司代にていまだ在京しける間、呼下し一合戰すべしとて飛脚を以て注進しける。美作守則宗は正月中旬都を立て、東播磨に下着の由申ける程に、城中の兵共氣色をなほす所に、則宗東條と云ふ所に着て、已前眞弓峠の合戰に、無下に逃たりし者共にまで言を加へける間、程なく馳付ける。姬路の城に籠たる者共まで、赤松が一族は宇野下野守籠たる高田の城に加る。諸士は浦上に馳付て政則に從ふ者とては、宇野刑部少輔・小倉肥前守・子息少四郎・藥師寺彥四郎なんどばかりにて、隨分賴切て情をかけし者ども散り〳〵に落行ければ、廻り一里に餘たる城の中にわづかの勢にて、いづくを相抱べしとも見えざりけるに、剩へ何者か云ひ出しけん、下野も浦上も在田廣岡同心してけりと聞えければ、敵と云ひ鬮と云ひ合戰はいかで叶ふべき、先々引退き重て上意をうかゞひ、勢を付てこそ合戰あるべく候へ。只討死あつては智謀なきに似たるべしと再三異見しける間、力なく正月二十二日城を落て、攝州の方へぞしのばれける。

サラバ浦上美作守所司代職ニテ、未ダ在京ナリケルヲ呼下シ合戰スベシトテ、飛脚ヲ以テ始終ノ樣子ヲ注進シケル。美作守則宗是ヲ聞テ、正月中旬ニ都ヲ立テ東播磨へ下着ノ由申間、城中ノ兵ドモ疲氣ヲ散シ色ヲナホス。則宗東條ト云所へ着テ、最前眞弓峠ノ合戰ニ無下ニ逃走シタル者共マデニ言ヲ加ヘ、念頭ニ諸士ヲ懷ケレバ、程ナク大勢馳着ケル。姫路ノ城ニ籠リタル輩マデ、赤松一族ハ宇野下野守籠リタル高田ノ城ニ馳加ル。諸侍ハ浦上驅ニ着テ、政則ニ付副フ者トテハ、宇野刑部少輔・小倉肥前守・子息少四郎・藥師寺彥四郎ナンドバカリニテ、隨分賴切テ情ヲ懸シ者ドモ、散々ニ落失ケレバ、廻リ一里ニ餘タル城中ニ僅ノ勢ニテ、何クヲ相抱ベシトモ見エザリケル。剰へ何者カ云出シケン、下野守モ浦上モ在田・廣岡同心シテ、政則ヲ亡シナント雜說出來ケル間、扨ハ敵ト云味方ト合戰叶フベカラズ。先々此所ヲ引退キテ、重テ上意ヲ伺ヒ勢ヲ付テコソ合戰アルベク候ヘ。只討死シテ名將僅ノ城中ニ果給ハン事、智謀ナキ事ニテコソ候ヘト、何レモ口ヲ揃ヘテ再三異見シケル間、政則モ力ナク正月二十二日城ヲ落テ、播州ノ方ヘゾ被レ忍ケル。

此由備前へ告越ける間、櫛橋・藥師寺申けるは、言語同斷の次第なり。去年十一月より當城に籠り月夜の合戰に一命を輕んずるも、政則を世にあらせ申さん爲なり。況や行方しらず成給ぬる上は、向後合戰に利ありとも誰を主とか賴申べき。まづ〳〵此城をとりのいて、いかにも政則の行衞を尋ねまゐらせて義兵を起すべしとて、ひそかに落べきやうを內談す。浦上則國此由を聞て、軍の習ひ一人も勢付ば兵いさみ、少も勢透けば氣を失ふものなり。況彼兩人取除ば、我等が手の者もつれて落行べし。さらんに於ては合戰は叶まじ。只彼兩人と打達へ死より外はなしと、夜廻りと號し手の者少々引具し出ける。

此由備前へ告越スニ依テ、櫛橋・藥師寺大ニ驚テ云ケルハ、姫路ノ義言語道斷ノ次第ナリ。去年十一月ヨリ當城ニ籠リ、日夜ノ合戰ニ各一命ヲ輕ンジ忠功ヲ顯ス事モ、偏ニ政則公ヲ世ニアラセ、播

磨美作備前ノ三國ヲ全ク保チ、當家繁昌アル樣ニトノ事也。然ルニ主君行方不レ知ナリ給ヒヌル上ハ、向後誰ガ爲ニ合戰セン。タトヒ軍ニ勝利アリトモ、誰ヲ賴ミテ主君トスベキ哉。所詮此城ヲ取除テ、何ニモシテ政則公行方尋マキラセテ、再ビ義兵ヲ起スヨリ外ノ事ハアルベカラズト、密ニ可レ落ヤウヲ内談ス。則國此由ヲ聞テ、ソレ軍ノ習ヒニテ一人モ勢付時ハ兵氣勇ミ、少シモ勢減ズレバ諸卒氣ヲ失フ者也。況ヤ櫛橋・藥師寺取除クニ於テハ、我等が手勢マデモ連テ落行クベシ。左アランニ於テハ合戰ハ叶フマジ。只彼兩人ト指違ヒ死ナン。是ヨリ外ノ事ハナシト怒テ、夜回ト號シ手者少々引具シ出ケルヲ、

伯耆守基景申けるは、目の前の敵をさしおいて味方軍して死たらんは、末代までの不覺なり。且は時に取ての動轉とも云べきか。死は名を思ふが故、嘲にならん事も口惜かるべしと堅く留めける間、さらば腹を切るべし。千人萬人も落は落よ、我一人恥辱なり當城を調べし。日の始より旁々同心あらば勿論なり。しからずば一人腹を切らんと思ひ定めし覺悟、今更相違あるべからずとて、腹卷をぬぎ捨てゝすでに刀に手をかけしを、基景刀にすがり申けるは、此合戰にて事散すべくば尤傷害あるべきなれども、則宗播州に下向あつて大勢を付合戰あるべきなり。志あらん士を召具し馳加りたらんは一方の合力たるべし。其上異國本朝にも、一旦落て本意を達するためしも多し。只年寄たる者申に任せられ候へとてともなひ出ける程に、力なく正月二十四日の夜半計に城を出て、高田の城にぞ加りける。櫛橋・藥師寺は浦づたいに海士の小舟に便船し、主の行末を尋ね四國の方へぞ落行ける。いかなる名城も合戰のならひにて、攻落さるゝも多けれ共、角ばかりよしなき雜説にまよひ、味方とわかれて散々に成しは前代未聞の事どもなり。

伯耆守基景申シケルハ、目ノ前ノ敵ヲサシオイテ、味方ト軍シテ死シタランニハ、末代マデノ不覺ナリ。且ハ時ニ取テ動轉シタリトモ、人口ノ嘲リアルベキ歟。死スルハ名ヲ思フ故也。死シテ若

シ諸人ノ嘲弄ニナラン事ハ、口惜シキ事ナルベシト堅ク制シケル間、去ラバ腹ヲ切ルベシ。千萬人モ落ヨ、我一人耻辱ナリ。當城ヲ調シ最前ヨリ殘ル旁々同心アラバ勿論也。不レ然ハ我一人腹ヲ切ント思定シ覺悟、今更相違アルベカラズトテ、腹巻ヲ脱除キ既ニ腹ヲ切ントスル處ヲ、基景又刀ニスガリテ申ケルハ、此合戰ニテ事散ズベクンバ勿論生害アルベケレドモ、則宗播州ニ下向有テ大勢ヲ附ケ合戰アルベキナリ。志アラン侍共ヲ召具シ馳加リタランニハ、一方合力トナルベシ。其上異國本朝ニモ、軍ノ勝負ニ依テ一旦落テ本意ヲ達スル樣シ、古今アゲテ計フベカラズ。只年老タル我等ニ被レ任候へ。基景アシクハ計ヒ申マジト堅ク諫言シテ、紀三郎ヲ伴ヒ出ケル程ニ、老者ノ諫メ默止難クシテ、正月二十四日夜半バカリニ、浦上ノ一族城ヲ落テ高田ノ城ニゾ加リケル。櫛橋・藥師寺ハ、浦傳ヒニ海上ノ小船ニ便船シ主君政則ノ行末ヲ尋ネ、四國ノ方ヘゾ落行ケル。サレバ如何ナル名城モ、合戰ノ習ヒニテ攻落サルヽ事ハ多ケレドモ、斯バカリヨシナクモ味方ト割テ散々ニ成シハ、前代未聞ノ事ドモナリ。

（右本會に於て底本とせるものには、尙卷末に著作年月著者氏名、及裏表紙裏面に轉寫の年月を附記したり。左の如し。……編者）

永祿元年三月九日　　目黑祐欣作之

貞享三年十一月十日朝染筆及ニ戌之初刻ニ寫レ之畢

（此に引用對照したる刊本の部には、左記記事、及後人の增補したると覺しき附錄あり。左の如し。）

右作者不レ知如ニ寫本一。

時に萬治三庚子年二月下旬書レ之　　常林坊　（判ニ常林日常寶トアリ）

江田宗眞老

右寫本ヲ得テ、元祿九年子仲秋下院之日江南隱士窓下染レ筆

赤松兵部少輔政則ハ、赤松則祐律師第五世ノ孫也。則祐長男義則、義則長男ハ左京大夫滿祐入道性具ナリ。滿祐播備美ノ三州ヲ領シテ、赤松一族ノ棟梁ナリ。然ルニ嘉吉年中滿祐逆心ヲ企テ、將軍義敎公ヲ弑シ奉ル。此大罪ニ依テ滿祐其子敎祐トモニ誅セラレテ、滿祐ガ領國播州ヲ山名右衞門督持豐ニ賜リ、美作ヲ山名敎淸ニ、備前ヲ山名敎之ニ賜フ。是滿祐誅罰ニ軍忠アルヲ以テナリ。然ルニ長祿二年赤松ガ郎從石見某ト云フ者、朝廷ニ愁訴シテ赤松家ノ絕エタルコトヲ歎キ、南帝ヲ弑シ奉テ、三種ノ神器ヲ內裏ニ入奉ルベシ。此事ナルニ於テハ、赤松家ヲ再興シ賜ルベキヤト云、朝廷詮義アリ。此事武家ヘモ叡慮ノ趣ヲ達セラレテ、石見ガ訴望勅許アリ。石見喜デ間島何某ト云友ヲ語ラヒ、南朝ヘ忍ビ入テ南帝ヲ弑シ、三種ノ神寶ヲ取テ歸ル。吉野ノ鄕民頻ニ追掛ル。石見終ニマヌカレテ三種ノ神器ヲ禁裏ニサヽグ。於レ此赤松次郎政則五歲ニナルヲ召出サレテ、加賀國ヲ賜テ一家ヲ再興ス。政則父ハ義雅ト云テ滿祐ガ弟ナリ。（私ニ云、政則ハ義雅ガ孫ナリ。義雅ガ子チ性存ト云、性存ガ子政則也。）應仁元年二月勝元將軍義政公ヘ吹擧シ、赤松政則ニ播磨備前ヲ還シ給テ、政則播州ヘ赴ケリ。本國故早速兩國ヲ打從ヘ、歸洛シテ勝元ニ力ヲ合ス。此レ細川山名合戰ノ最中也。明應五年二月政則從三位ニ敘ス。同四月政則病死。歲四十二。南帝ヲ弑シ神璽ヲ取ル功ニ依テ、三品ニ敘セラル、ト云ヘリ。

山名政豐ハ右衞門督持豐ノ子ナリ。政豐ノ子又二郎俊豐、中務大輔又彈正少弼ト號ス。

松田氏ハ、關東相州ノ松田相分レテ中國ニ住シ、備前國津高郡野殿村伊福鄕ヲ知行ス。松田左近

將監元成ガ代ニ至テ、大ニ武威ヲ振ヒ備前半國ヲ領セリ。松田ハ根本藤原ノ姓ニテ、藤太秀郷ノ後胤ナリ。後ニ浮田直家起ルニ及デ、松田ガ子孫終ニ直家ノタメニ滅サルト云ヘリ。

浦上ハ其先紀貫之ヨリ出タリト云フ。赤松家ニ仕ヘタリ。播州浦上ト云所ニ住スルヲ以テ、其氏トスル由ナリ。代々播州ニ在テ箕裘ノ業ヲ事トセリ。播州ハ赤松ノ封國タル故ニ、浦上モ赤松家ノ従臣トナルモノ歟。滿祐叛逆シテ伏誅ノ後、播美備ノ三州山名氏ノ領有トナル。依レ此浦上家モ亦山名ノ幕下ニ屬シタリ。公方義政公ノ治世ニ當テ、浦上美作守則宗京都ニ上テ義政公義尙公ニ昵近ス。義政公則宗ヲ京都ノ所司代ニ補セラレ五品ノ位ヲ授ク。元此時山名細川洛陽ニ戰テ、天下ニ亂國ノ最中也。則宗ハ山名ガ幕下ナリト云ヘドモ、遂ニ自立シテ公方家ニ昵近セリ。則宗ヲ浦上ノ中興トセリ。其子ヲ近江守宗助ト云。京都ニ在テ細川右京大夫政元、同武藏守高國ニ從テ軍功アリ。其ノ子掃部助村宗、永正大永ノ大亂ニ播美備ノ内ニ於テ武威ヲ振フ。其子備前守宗景ナリ。宗景ガ代ニ至テ備前國ヲ領シ、同國和氣郡天神山ニ在城セリ。浦上ハ右ニ記ス通リ世々赤松家ノ臣タリトイヘドモ、時移リ事去テ赤松家衰ヘ、兵部少輔晴政ノ代ニ至テ、播磨ノ内ヲモ保ツ事ヲ不レ得、播州ノ内三郡、並ニ備中半國ハ浦上宗景押領ス。殘ル備前半國ハ松田左近將監領分セリ。赤松晴政ハ政則ノ孫ナリ。晴政ノ父ヲバ義範ト號セリ。浦上宗景モ後ニ宇喜田直家ノ爲ニ本國ヲ失ヒ、子孫亡ビタリ。

本書委細知レガタキ所ノミ有レ之ニ付テ、赤松・山名・松田・浦上等ノ傳記ヲ少々爰ニ加ヘ記スナリ。私ニ云、浦上ノ末流少々今備前ニ在リト云ヘリ。

備前文明亂記終

宇喜多戰記

*浦上系圖に依れば、掃部頭村宗は近江守宗助の子にして、宗助の父は美作守則宗其子なれば本書の記事は蓋し誤りなり。

宇喜多戰記

著者不詳

宇喜多直家の尋㆓先祖㆒、備前國兒島郡より出たりと。或は云、上古百濟國王子二人繼母ノ依㆓讒口㆒、乘㆑舟漂㆓泊日本地㆒、備前一島來㆓今兒島郡㆒坐居ス。此子孫號㆓四家氏㆒。三宅・喜多村・紀・宇喜多是也。

直家の祖を宇喜多八郎能家と號す。播磨備前美作の守護赤松氏が股肱の臣浦上掃部頭村宗*其子近江守宗助に奉公して、長臣となれり。其頃浦上氏は備前國和氣郡三石山の城に在て、襲㆓國中㆒、本主の赤松氏と不和にして度々及㆓合戰㆒けり。此節能家數度莫大の功あり。備前邑久郡砥石の城主となり、島村豊後（後入道號㆓貫阿彌㆒。）云士威を論じ、或時島村有處軍勢を催し、攻㆓入砥石㆒能家討死す。此時能家嫡子あり。同名八郎興家と名乘り、父に遙劣れり。生得魯鈍父が仇を可㆑報器量ならず。能家討死の後は領知も失ひ、附隨ふ譜代の家臣も離散し、漸く母方の姨尼に育はれて西大寺と云ふ所に隱れ、後福岡と云ふ村に居て、幽か成る住居にて年月送りけり。爰にて男子二人出生す。兄をば直家、弟をば春家（後治兵衛入道安心と云ふ。萬成富山の城主なり。坂崎出羽守父也。）と號す。興家中年にして死せらる。直家春家は猶彼尼公の以㆓介抱㆒長じける。直家生質も始めは興家に似て、萬事愚なる體に見えければ、尼公打歎て愛淺間し、祖父の家をも興させ、父が愚なる耻をも雪がせばやと明暮思ひ、慰みをもて養育せしが、此者又似㆑父愚に拙く見ゆれば、宇喜多家再興の時到らざる也と呟きけるを、直家熟々と聞て、密に尼に申されけるは、必ず〳〵御心惱されそ。寔に尼公の御事は父母よりも深き御厚恩何の世に可㆑奉㆑忘。我常々年程よりも愚なる事は、全く身に思ふ仔細有て也。其上祖父の怨敵島村は今威勢有る者也。彼若し我を人並の生得と傳へ聞かば、察㆓後難㆒て、探り覓めても殺さん事を思ひ、彼が心を宥め置く策に態と人

＊直家が島村貫阿彌を討ちたるは、天神山にて誘殺せしにあらず。直家が中山備中を沼城に擊ちたる時、その家臣を沼城に招致し、その虛に乘じ之を襲擊せしものなれば、本書の記事は全く誤れり。

に愚なる體を見せたり。幸に我母當時宗景に仕へ玉へば、以二此緣一歎訴せば必定被二呼出一、奉公の身とならば、島村も心に任せずして默りなん。我碎レ身ても先祖の本領に立歸り、祖父の仇を報じ、尼公の大恩をも可レ奉二報謝一也と申されけるに、初めて尼も驚きて喜ぶ事限りなし。此時直家の母は和氣郡天神山の城主浦上遠州宗景が侍女也。利根第一の女房にて、宗景侍女の司となり、威勢ある時なれば、觸レ折直家再び仕への願を歎訴せられけるに、元來宇喜多は浦上氏に忠孝の筋目有り、能家が軍功の莫大成る事は宗景も能く存知の前なれば、直家を出し小祿を與へて召仕はれける。此時直家未だ若輩成りしかど、如レ件の大志に有二器量一故、段々に宗景の寵臣と成り、度々の被レ勵二武功一し程に、追レ日立身し、始て備前邑久郡乙湖(子)の城主三千貫の領主となる。此時六十餘州の兵亂止む事なし。中にも中國は騷亂の最中也。直家爲二宗景一盡二粉骨一、諸方の取合、所々の合戰數多也。乙湖に在城の時も過分に武士を抱へ置き、昔時(ソノカミ)祖父に仕へし筋目の者共も、夫々に扶助せられし故に、我賄の領不足しければ、一月に二三度宛、失食とて食を控へて賄の助とせらる。是程に用レ心られける故に、假にも爲レ我榮耀の不レ費レ財、從者を育みける程に、家臣思付き慕二他主一心なく、皆忠勤を勵みけり。

備前上道郡に沼城とて名城あり。山中備中と云ふ勇士在城す。浦上氏の家臣なりけるが、誇二武功一讒二宗景一、謂(濫)に振舞ひければ、宗景深く惛て誅二罰山中一せんとす。沼は究竟の要害也。山中は剛の士也。輙くは難レ誅。宗景命二直家一山中を討つべき由を被レ申ければ、直家の曰く、山中雖二大敵一以レ謀討捕らん事可レ輙。爰に臣が有二大望一。島村豐後入道貫阿彌は祖父の怨讎なり。＊孩子の昔より、討レ彼散レ仇と冀へり。島村を討つ事を免じたまはゞ山中を討んと。宗景任レ望許レ之。直家大に悅んで宗景の命と號し、彼島村を天神山の城へ呼寄せける。此時貫阿彌は老體にて有りけれども、邑久郡島廣山の城主にて、猶武勇おりに振ひけるが、斯るべきとは夢にも不レ知、隨レ命天神山へ登城す。本丸の程よき所に力士を隱し置き、阿心なく來る所を取り挾んで討取り、直に貫阿彌が城へ人數を遣し

て城を追落し、島村が奪二取領地一、偖て追續て謀二山中一、沼の城へ乘込み備中を誅罰したりける。此恩賞に山中が所領不レ殘直家に給ふ。乙湖の城より沼の城に移らる。是より威勢日々に募り、宗景の兵を不レ借して自ら遠近を切隨へけり。宗景の家臣も多く降二宇喜多一。於レ玆宗景を見れば、唯直家〔衍文〕□□して國を直家に讓りたる如く也。是より宗景直家不レ睦、迭に含レ仇の志出來たり。雖レ然宇喜多は威勢日々に強く、宗景の力は微なりしかば、空しく年月を經たり。

爰に備前西郡を領しける松田左近將監は、昔時より備前御野郡伊福村の地頭なるが、去る文明年中に赤松の中興たる左京大夫政則が時に至て、松田左近將監元成（松田中興也。此元成より備前西郡を領す。）以來、領内を切隨へ威勢を振二遠近一、本主赤松に背いて不和也。備中の中備前の所々をも切靡け、津高郡金川と云ふ所に構二一城一號二玉松城一、浦上家と年々合戰止む事なし。元成が孫松田左近將監某*（松田十二代目也。實名不知。）直家妹聟にて味方に下り居られけるが、底意は迭に挾二逆意一ける程に、津高郡虎倉の城主伊賀左衛門佐久鷹〔隆〕（直家姪婿也。）を大將として、金川の城を夜討にしたり。此時直家も數千騎にて、赤坂郡矢原と云ふ所まで出馬ある。金川は無双の要害也けれども、不二思寄一時敵寄せ來り、忍入て即時に城を乘取り、左近將監を討取りたり。嫡子松田孫次郎※（後藝州恁二寄毛利家一仇を報ぜんとせしも本意を遂げず、松田左衛門と號し毛利家の家臣となる。）裂與〔本ノマヽ〕たり。又御野郡岡山には、金光宗高と云ふ者あり。初より宇喜多一味の士なりしが、後に異心出來たりしかば、彼をも謀て討ちにけり。

備前國上道郡龍ノ口山の城には、永祿の比宦所治部元常と云ふ者在城す。宇喜多和泉守直家の姪壻にて、始は二心無くて宇喜多へ隨ひけるに、中頃直家の藝州毛利家と不レ睦〔好カ〕りければ、其比、藝州の旗下なる者、稍もすれば備前を犯し掠む事度々也。此宦所をもひたすら口を通じ、備中方へ招入れ、毛利家に隨ひ宇喜多に逆意あらば恩賞莫大にして、宇喜多退治の後は御心の儘ならんと進めける。此時毛利家は山陽山陰兩道十州餘を切隨へ、勢ひ既に天下を襲ふ有レ志。宦所も後難を思ひ、宇

*二 元成の孫なれば備前文明亂記の蓮皓松田系圖の蓮華即ち元隆に相當る。但し松田十二代目は文明亂記の蓮忠、即ち系圖の元輝（備陽記元堅に作る）にして元成・世の孫に當り、又直家の妹婿なり。然れども浦上宇喜多記には蓮盛即ち元盛を十二代とし、之を直家の婿なるが如く記せり。

※松田系圖に依れば、毛利家に寄れるは孫次郎の弟右衛門元條とす。

喜多に別心を挾み鉾楯となる。此時直家沼の城に在りければ、日々小責合の合戰あり。彼の龍ノ口城の北の方は、岩石峨々として獸も難レ走難所也。西南は山嶮く谷深し。東一方は山續きなれども、道甚だ狹く輙く人數難レ寄、究竟の要害たる城なれば、急卒に責落す事不レ叶。宇喜多より龍ノ口の東の矢津と云所に要害の城を築て、兵士數百人籠置き、龍ノ口を窺せける。備中方よりは加勢として大勢龍ノ口へ馳加り、兵粮玉藥等無ニ不足一續ける故に、城中堅固にして可レ落樣更になし。直家の勇士に岡郷助と云ふ者、密に直家に云く、褱所事爲レ敵當國を妨げ、諸口御働きの故障と成候。我以ニ行術ヲ一ツ謀りて奉レ見。命を君に奉る身にし候へば、如何にもして彼を討ち忠勤と成すべき也。態と詐て御氣を蒙り、一先づ御家を離散仕候はでは不ニ相叶一行術にて候也。加樣々々に御謀り候へと申ければ、直家忠節の至を深く感じて、則郷助が云ふに任せて、或時事を左右に寄せて、岡郷助我に不忠の至有て罪科に行ふ也。急ぎ召捕へて來れ。及ニ異儀一ばゝ討て捨てよとて、近習の剛士五六人被ニ申付一たり。彼士ども任レ命郷助が宅に馳行きたれば、今朝郷助は欠落して、家は明屋としたり。捕手の士ども手を空しうして歸參し、右の趣を申ければ直家大に怒れる體にて、緩延の事にして取逃しけることの不レ易事よと議せられける。猶郷助は暫く備中邊に隱れ居て、或時備前西郡の內にて、勞れたる乞食の老女、道の邊にコモ引纏ひ點頭き居ける側へ、馴々しく立寄りて、如何に媼御、何の國に御座しけるぞと思ひしに、かゝる淺間敷御姿と成らせけるぞよ。嘸我等をば御見忘れ候覽。御方樣の爲には正しく甥にて候。伯母ながら御方は實の母の如くに思ひ參らするも、身貧きに付幼稚の時別々に罷成り、御行末も不レ知。當國邊に漂泊ありと知らする者有て社、此間尋ね參せ候に、嬉敷も尋ね逢ひ候者哉。先づ我住家に歸り玉へと云へども、乞食の媼は思ひも不レ寄事なれば、是は如何なる事を仰せ候哉。我は左樣の仰有るべき者ならず。只今の御物語の次第必定御人違ひと存候と云ひければ、重て郷助が云く、努々人違にては無レ之程に、久しく不レ奉ニ見參一とて、仰ま大恩に成

*岡郷助が寢所元常を殺せし僞計につきては備前軍記龍ノ口落城記などとその説を異にせり孰れが是なるを知らず

りたる媼御前を何しに見忘れ可レ申ぞ。早我所へ入らせ玉へ、今よりは誠に母御前と傅(かしづ)き可レ申也。必ず疑ひ玉ふべからず迚、伴ひて家にかへり、先づ暖かに衣類を拵へ着せ、我は疎食すれども、彼老女には能き食を與へ、孝心無殘所、外の見る者も感ずる計也。件の乞食媼は心中に訝き事に思ひたれども、是非誠の母ぞ伯母ぞと傅(かしづ)く故、身安堵して豐成る住居と成りければ、片時口き事ながら、おのづと實の母顏して應答しけるぞ哂(をかし)けれ。※如レ是仕濟して後、備前御野郡金山寺の谷口に船山と云ふ城あり。此に須々木豐前と云ふ者住したりけるに、緣を求めて奉公す。此豐前は已前より備中方一味の者也しかども、龍ノ口の寢所とは故有て間和順せず。これを知て郷助主と賴み寄て、名をば岡五助と改めたり。元來宇喜多の得二勘當一たりとは披露しけれども、郷助と云ふ名をば隱密にして、若し人の郷助と云はゞ紛らさん爲なるべし。須々木方に半年餘り奉公して件の媼をば母と名付け、船山の城へ引越して城中に住居したる事なれば、須々木も心を强ふし、敵中へも密事の使等申付抔して、城中にて念比の體にて召使ひけるに、或時須々木秘藏第一の、東國より牽來れる驪の御馬有りけるを牽出し、山の下へ乘り下りけり。其時城中より、如何に五助、何とて其馬には乘りたるぞといへども、耳にも更に不二聞入一、さらぬ體にて牧石川原に乘出し、東を指て馳せたりけり。須々木が兵豐前に告げゝるは、只今五助御秘藏の驪の馬に鞍置て、山の下へ乘下り東に向つて馳せ候間、何とて御馬には乘りしぞと尋ね候へども、不レ聞體にて河原へ馳出し候が、一定川の向へ可レ涉勢に相見え候。若御馬を乘逃げ仕るにては有る間敷哉と知らすれば、豐前櫓より見分して、急に追懸けて、不レ歸ば討て捨よと、大勢跡より追かけさせらる。五助は早中原の瀨を打涉りて跡をも不レ見して、龍ノ口の麓に馳せ上る。儲城中へ申けるは、我ら儀は船山の須々木が士にて御座候が、微細なる謬を以て既に罪せられんとす。此事を知らせ候者有て、今朝密に豐前が秘藏の馬を盜み出し、打乘て當城を目掛け奉レ憑、其爲に馳込み候也。御覽候へ追手の者川向に充ち／＼候。御慈悲に御隱し

置き、命を助け玉はゞ此馬を差上げ候て、當城に御奉公申上度と云ひければ、寢所委しく聞届て、士の命を助けてくれよと憑入る事なれば、可ㇾ默ならず。且は不便の至なれば隱し置て命を助けよ。乍ㇾ去敵方の謀略の程も無二覺束一、本城には上るまじきぞと、山下の内に隱し置く。

偖て船山の城には、岡五ノ助馬を取逃したり。惜き奴哉。母は如何にしたるぞと尋ねたれば、宿に殘し置きたりと申す 是社よき人質よ、河原へ引出し五ノ助に見せて、其れにて不ㇾ歸ば磔にして殺せよと、彼の媼を縛り中原の河ぶちに出て、如何に五ノ助よ、立歸らずば只今母を殺す也。馬一匹に母を捨つる大惡人よと喚はれば、五ノ助此體を見て、龍ノ口の者どもに云ひけるは、老女は我等が母分の者に御座候。此母を不便に存じ縱へ只今罷り歸り候ても、我等が命をば努々助け不ㇾ申候。母を質として我を呼戻し、則河原にて母子一緒に殺さんずる策にて如ㇾ斯仕候也。譬ば我等一人殺し母をば助け候ても、我等無二御座一候ては老母は餓死仕る也。迚も相果つる命に候間、母を見殺しに仕り鬱憤を散せんには、船山の案内は能く存じの前に候間、夜討にも晝討にも御人數を引入て、城を追落し、當城へ御奉公を可ㇾ爲也とて不ㇾ出ける程に、とかく時刻移しけれども、五ノ助は不ㇾ戻。船山の兵共は惡口吐散し、件の媼をば磔にして突殺し捨てたりける。此故に龍ノ口の者共、宇喜多の智略とは思ひよらず。寢所が方に扶持し置き、後は本城へも出入させけり。元來賢き男なれば、爲す所云ふ所皆寢所が心の如く成る程に、日に隨て寵臣と成り、次第に出頭す。此五ノ助が來りし後は、直家の方よりも龍ノ口を不ㇾ窺。諸方の敵の不遣（不寄カ）も、此五助が籌策より安堵しけりと喜悅して、丁年も不ㇾ過に一の謀臣と成て、心底不ㇾ殘談じけり。今は能き時分と思ひければ、竊に直家に告げゝるは、內々謀り候事成就仕り、可ㇾ遂二本望一時節に候。何の日暮に及び、矢津ノ城の御勢より龍ノ口の北川（カ）の向ひ迄出勢して、小船を隱し置かれ候樣にと相圖を定めける。龍ノ口の本陣北の壇には小座敷あり。此れは閑なる所故に、毎に軍談評定には此にて打寄り評しける。其夜も寢所は、彼壇の

懸け出したる欄干に寄つて、何心なく居たる所を、五助側を立廻る振にて無手と組で壇より下へ蹴落ちたりける。下は數千丈の磐石にて、大河の淵に續きたり。二人ながら引組て峨々たる岩間を轉び落て、水際にて五助寢所を一刀刺したり。五助も身を打損じたれども、さのみ死する迄はなくて命助かりける。倩て宇喜多の兵隱し置きたる小船を漕き寄せ、岡をば引揚げ、寢所をば首打て歸りけり。寢所を討し事矢津に聞えければ、龍ノ口へ押寄て急に城を攻めたりけれども、備中の諸(脫カ)堅く守て騷ぐ體も無かりければ、其夜は落城せざれども、城主討たれたる事なれば、城中の兵不レ得ニ怺事一明け退きける程に、城は宇喜多に渡りけり。

宇喜多和泉守直家は、備前ノ國上道郡沼ノ城に在り。備前國中は過半切り隨へ、威を近國に振へり。其頃美作國は、雲州の鹽谷尼子四郎晴久が手に屬したりけれども、尼子は毛利家の爲に追落され、作州に在る所々城々は毛利家に隨ひしも有り、或は宇喜多に隨ふも有りければ、其隙を窺て宇喜多所々を切隨へ、備前へ奪ひ取りければ、毛利家此由を聞て、備中の國松山の城主、三村紀伊守家親に申付られ、作州へ出勢して國中を切鎮むべき由也。紀伊守隨レ命帥ニ多勢一作州へ出勢して、宇喜多に隨ふ所々の城々を責落し、宇喜多後詰せば、(脫字)□の一の戰して打果すべき志也。備前に此由聞えければ、直家熟々思慮せられけるは、今所々の取合最中に我彼を討たんと出勢するとも、三村は大敵と云ひ、老功の大將なれば輙く難レ亡ければ、久敷く手間取る内には如何成る災か發らなん。謀を以て討取るに不レ若と思はれける。時に新參の兵に遠藤喜三郎と云ふ者有り。三村家親未だ備中成羽の城に在りし時、喜三郎は浪人にて暫く成羽に在りければ、定て家親を能く見知りたる覧と思ひ、喜三郎を近く招き、此度三村家親が大軍作州へ出勢して、我に隨ふ者共を責る由なれば、我出軍して不レ爲ニ後詰一不レ可レ有。我帥ニ多勢一出張せば、窺ニ其留守一不慮の敵襲來らんも無ニ覺束一思ふ故、此度三村をば以ニ行術一討取らんと思ふに、汝は成羽に在りし時家親を能く存知の者と云ふ。殊に勇

士の事なれば、一重に憑み思ふ間、作州へ忍び行き、窺二家親一討んやと云はれければ、遠藤申しけるは、三村此度作州へ出張す。我等一人忍入て容易く討得ん事難し。然れども斯る仰せを蒙る事は、勇士の眉目として望む所に候へば、不二相叶一迄も忍入て見候べきと、即時に作州へ打越えんとす。喜三郎弟修理と云ひける者、兄が大事の命を受けて作州に赴くを聞きて、助けの爲に伴ひける。三村は作州の穗村と云所の興禪寺と云ふ山寺を本陣として屯す。遠藤則ち夜に紛れ忍び入り、三村が宿せる寺の椽に上り、障子の紙を唾にて穴を明けて見れば、家臣を集め軍談をして居られけるを、鐵炮を差出し打たんとするに、如何したりけん火繩の火忽ち消えたり。修理急ぎ忍び出で夜廻りの中に打交り、或役所の番人篝火を燃て居たる側へ行て、今夜は寒氣甚く身凍えて難レ堪候と云て、火の邊へ近く寄り、手を暖める體にて羽織の襟に火を附て、今は身も暖り候に又打廻りて可レ來。風烈きに能く心を付られよと挨拶して立歸りけり。其體夜廻りの士に無レ紛謀りければ、心を懸る者もなく、又元の處に忍入り、喜三郎火繩を取て、又椽に忍上り指覗きたれば、如レ前軍談して居けるを、靜に鐵炮を差出し覘すまして打ければ、家親が額の眞中をば、ずんと打通し即時に死す。喜三郎鐵炮を引入て、煙靜つて能く見るに、たしかに大將家親は打殺したりと見えて、人は驚きに周章取付體也。遠藤兄弟しすましたりと思ひ、竊に逃出て後の山に登り聞二騷動一けれ共、陣中靜なれば不審ながら備前に歸り、後に聞けば家親をば彌々打殺しける。此騷動せざる事は、三村孫兵衛と云ふ老功の者家親の長臣成りければ、能々靜めて味方が軍勢にも家親が死を知らしめざりける故に、翌日大將煩しきに依て、令二歸陣一と披露して、前後の備も不レ亂備中へ歸軍しける。宇喜多は大悦して遠藤に新知一萬石宛行はれ、河内守と名を改む。後浮田の氏をも授けられ、浮田河内と號しける。弟修理にも三千石の所領を恩賞せらる。此事人更に不レ知けれども、遠藤兄弟過分の高祿を得たりける故に、人皆察レ之ける。

偖三村家親に男子二人有り。一男は備中小田郡猿懸山の城主庄ノ元祐と云ふ。是は庄の家を繼ぐ故也。次男は修理亮元親とて父が家督を繼げり。二人共父家親爲ニ宇喜多ニ討れし事欝憤甚深くして、如何にもして親の讎を報ぜんと籌策を廻らしける。然れ共當時宇喜多は猛勇にして、宛も威風凜々として萬夫一人と聞えし大丈夫也。端々には餘多の枝城有て輙く難ニ責入一、粗忽に軍を發して却て負を仕出しなば、悔ゆるとも不レ及と、反て一族共諫レ之ければ、怒を忍び窺ニ時節一待ける處に、備前上道郡澤田村の西山玉(本ノマヽ)に、妙善寺の城と號して宇喜多の出城有りけるを、或時三村屈竟の勇士を寄せて、夜に紛れ三棹山に忍入り、不慮に妙善寺の城へ入ニ夜討一。城中不ニ思寄一、周章て討るゝ者多く、殘兵迯落て城は備中方へ乘取られける間、三村家より侍大將數多、軍勢數百人籠置き城を堅固に守らせたり。直家怒て早速人數を差遣し、暫時に妙善寺の城を乘潰し、可ニ取返一旨下知せられけれども、城には多勢能く防て、輙くは不レ得レ落。直家彌々憤怒せられ、自身攻レ之、即時に取返さんと、既に出馬の爲軍勢を集めらる。三村が附置きたる忍の士馳せ歸て、松山へ告げゝれば、元親大に悦で、謀思(はかりごと)ふ壺に落入りたるぞと一族に觸れ遣はし、兼て約諾の事故に、舍兄庄ノ元祐、備中山手幸山の城主石川左衞門尉(元親姨壻)等を宗として、一類一族數を盡して思ひ〳〵に打立ち、備前辛川表へ押寄せけり。直家は沼の城を出て、古津の宿の西宍甘山に旗の手を飜し、今日の中に一つ〳〵撫で斬にせよとぞ下知せられける。三村は相口(圖カ)の日取り無ニ相違一直家出馬の由聞屆け、勇み進で曰く、直家我隨ニ籌策一今日妙善寺の城を攻る由也。彼を討つ事今日に在り。進めや者共と詔て、辛川より手分けをして押寄る。南の手は庄元祐を大將として、萬成富山の城の南を廻り、春日の宮の上より川を越て額瀨(可レ成)三棹山に打上り、妙善寺の後詰をして城中に力を合せ、寄手を追靡けよと也。中の手は石川左金吾大將にて、伊福村より東に掛りて岡山の地にて河を涉り、直家が本陣に討て掛り勝負を決せよと也。北の手は三村元親本道を押立て、福輪寺畷を過ぎ釣の渡を打越て、湯迫村脇田村よ

り北の山上に登て、嶺通りに沼の城の北へ出、直家が留主を窺ひ城を乘取り、直家を前後左右より取狹み、討レ可レ取智略也。既に三方の押手近寄りけるに、直家は妙善寺の城を攻る謀のみにして、今従ニ備中一数を盡して可レ寄とは不ニ思寄一ける處に、西方の身方より急ぎ告て曰、備中勢夥しく寄せ來り候と云ふ。直家の軍勢共聞レ之て、目前妙善寺の城强くして不レ落處に、又備中より數萬寄せ來ると沙汰して、上を下へ騷動し失レ色たり。直家斥候の士を追々走らせて、敵の樣子を聞きけるに、斥候の士馳せ歸りて、三方の寄手の次第を語りけり。直家此旨を聞て、鍪の緒をしめ馬ひき寄せ打乘て、大音に下知せられけるは、馳せよ者共、妙善寺の城を一息に攻落せよ。此城だに落城せば、今日備中勢何萬騎寄せたりとも、骸を備前に晒させんぞと、勇め〳〵馬驅出し、一文字に妙善寺の城へぞ赴かれける。於レ茲惣勢一度に打立て、大將に不レ殿とこそ馳せたりける。偖、妙善寺の先手にて城責めける者共見レ之、大將自身後陣より馳走り、此城を責めらるゝに、若後陣の者共が此城を攻落さば、我々先陣として見物して、人々殿ッて誰に面を可レ向ぞ。未だ後陣の不レ續内に攻登れ者共と、共に軍勢勇め合ひ、我先にと攀ぢ登る。城中にも爰を先途と防ぎ戰ふたり。直家の旗本も三方の嶮しき坂を責登り、息をも不レ續責めけるに、城中防ぎ兼ねたり。直家乘り廻り下知せられければ、諸勢勵みて勝鬨を作り懸け〳〵、擊てども射れども不レ厭して、即時に城を責落す。城中の兵士共殘り少に討れ、打洩らされたる者は漸く後の谷を越て、西を差て落行く。直家下知して先本城に火を掛け煙を上げさせ、勝ち誇りたる勢を帥して三棹山の嶺に打上て、敵の寄せ來る働きを見られける。先手少々妙善寺より落行く敵を追はせたり。三村勢妙善寺の落城をば夢にも不レ知。三方一度に川を渉り、北の手は湯迫村の前より北の山へ取り上り、先陣は矢津の城迄打過ぎたるに、妙善寺落城の煙天に翻漫するを見て、先陣後陣案に相違しければ、先へも不レ進後へも不レ歸及ニ踟躕一。又春日の瀨を渉る庄ノ元祐が勢、是等も妙善寺の落城をば不レ知、後詰せんために丁刻をも急ぎ馳せよとて、三

棹山に打登る處に、妙善寺の落城に追落されたる備中勢、右往左往に逃げ掛けて落來りける程に、こは如何にと躊躇て不レ得レ進處に、宇喜多の魁將戸川・長船・本延等、勝鬨を作り懸け〳〵切崩し、喚叫で責む。大將元祐返り合せ、追敵と暫く戰て討死す。大將討れし上は從軍亂れ立て敗軍し、國富村の邊にて備中勢を討取る事夥敷、中の手石川が人數も、原尾島村邊迄進みたるに、直家山上より下知して、猶子宇喜多基家・岡・花房を始として、石川の魁將友野古屋が軍へ討て懸る。今日備中勢は相圖の謀略忽ち相違しければ、石川が備も亂れ靡きて、北を指て敗軍す。三村元親遙に味方の軍勢の追立てらるゝ體を見て、續け者共、味方を助けよと、南に向て馳出す。惣軍一度に直家が旗本を目掛け無二無三に馳入り、備前勢を切崩す事數町、宇喜多の先陣、始め國富村にて庄元祐を討取りたる者共、三村勢の横合より鐵炮を打掛け〳〵、鎗を突掛けゝる程に、又三村勢崩立て討たるゝ者數を不レ知。元親大に怒て云く、口惜や、我爲レ報ニ父讎ニ適々催ニ大軍ニけるに、天運不レ到忽に謀相違せり。今は早何の時をか可レ期、直家が强陣に走入て討死し、恨を泉下に可レ報也と馬引返す。家臣立塞て諫て曰く、今日御命を捨て玉はんに、以後誰人か亡君の御讎を報じ玉はん。御合戰是に不レ可レ限と、馬を引立て落行く。漸にして三村備中に歸る。是を備前妙善寺崩と號す。直家一代諸所の合戰度々成りと雖、敵を多く亡す事此合戰に及ぶ事なし。此後三村は故有て毛利と鉾楯し、終に爲ニ毛利ニ於ニ松山城ニ討死す。宇喜多は却て毛利と和睦して、美作の國を全く領せり。今に此合戰の亡魂供養のため、毎年文月十四日十五日の夜、湯迫の里脇田村の邊山上に、萬燈燃す事無ニ懈怠ニ。是れ此の合戰に莫大の軍勢討死すに因て、直家毛利と和睦の後に、藝州より亡士追善の事を沙汰有りけり。故に被ニ申付ニ。

天正元年直家岡山に新に築ニ一城ニ移られ、終に天正六年天神山の城を襲ひ俄に攻落す。宗景爲ニ直

家二備前を落て播州に走る。同年太閤秀吉（此時羽柴筑前の守）織田信長卿より西國追討使として播州に討入、三木の別所長治等を誅罰し、毛利家に隨ふ所の城々を攻落して播州平均し、小寺孝隆（高イ）（官兵衛尉黒田甲斐守如水と號す）の居城姫路の城に移り玉ふ。於レ玆信長卿の鉾先の鋭、秀吉の大勇を見、直家忽降二信長卿味方一、西國進發の魁將成らんと約せり。天正八年直家被レ犯二難病一、行年五十三於二岡山城一卒去也。嫡子八郎秀家八歳、直家の猶子與太郎基家（河本對馬守が子直家妹の腹に出生す。直家無レ子養二基家一爲レ子。）秀家出生に依て、辭爲二後見一岡山の城を守る。從二信長卿一直家の家督全く可レ無二相違一旨也。直家卒去の事堅く隱密にせりと雖、察レ之頻に藝州より備前を窺ひける。此前宇喜多は毛利家の旗本として、播州三木の城攻等、皆爲二毛利一盡二粉骨一けるに、忽秀吉と一味し信長卿に隨はれければ、毛利家含二欝憤一備前の端々、兒島の所々犯掠せんとす。宇喜多の長臣歷々、所々の城堅固に守禦して犯させず。毛利怒て大勢備前に押寄す。岡山勢辛川表へ出張して合戰し、備前大に得二勝利一毛利勢敗軍す。秀吉は因州鳥取伯州羽衣石等の諸城を落して、天正十年備中へ進發す。備前勢御加勢忠勤を盡せり。備中宮路山冠山所々の城攻落し、高松城は水攻にせらる。六月四日落城、城主清水切腹。此中に毛利乞二秀吉一和睦し、信長卿と無事たらんとす。斯る所に六月二日、於二京都一信長爲二明智光秀一弑せらるゝを有レ告。秀吉重て毛利に曰く、信長爲二逆徒一弑せらる。和談の事變約有る哉、否、此時毛利家の大將輝元を始として、吉川元春・小早川隆景皆出陣して、高松邊釋迦が嶽不動が嶺に陣せり。此告を聞て異議區々也。隆景諫二輝元一曰く、秀吉武勇非二凡人一。此時變約せば永く爲二毛利一挾二怨讎一。見レ危變レ約は必ず勇士の恥也。輝元諾して、不二變約一と云入れたり。秀吉深く感じて、從レ是毛利家と永く和睦し、既に備中を引拂ひ上京也。是れ明智爲二誅罰一なれば、急に上り玉へども、此度宇喜多勢所々忠勤盡二粉骨一事なれば、爲二禮謝一岡山に立寄り、秀家に有二對面一しと也。惣人數は本道に懸り、釣の渡を越えたり。秀吉は萬成山より岡山に至り玉ふ。岡越前守、長船紀伊守秀家を介抱して御迎に出らる。此時に秀家十歳也。秀吉取

レ手、年の程より生長有り。此度所々加勢滿足之由被レ謝、岡山に赴て饗應。其後秀吉天下掌握し玉ふて、加州前田利家の息女を秀吉養女と被レ成嫁二秀家一。秀家の威勢追レ日盛にして、昇二進正三位中納言一、天下の五大老の其一人となる。文祿元年より太閤殿下三韓征伐の時は、毛利宇喜多は惣大將の請レ命、威勢を異國迄輝かされたるに、慶長五庚子の亂に石田の組シ二逆徒一、濃州關原の一戰に沒落し、薩州へ忍で迯げ下り身を隱されたれども、終に關東の御憎に因て、伊豆の八丈島へ息の侍從共に遠流せられ、誠に稀成る大家を失れたり。

卷末に、數行岡山城主の事を記したるも、本戰記と直接關係なくして、後人の増補と見らるゝのみならず、誤謬更に甚しきを以て今之を省略せり。……編者

宇喜多戰記 終

龍ノ口落城記

龍ノ口落城記

著者未詳

抑〻備前國上道郡龍口城主穝所修理亮元常滅亡の謂を委く尋るに、永祿元龜の比とよ。宇喜多和泉守直家未だ備前一統平治せざるの前、岡山の城主金光備前守を討て、其舊壘を造作して、勢既に浦上宗景を押す。宗景の長臣多くは直家に與して武威國中を靡かすといへども、穝所修理亮龍ノ口の城を守て敢て宇喜多に從はず。直家大に怒て猶子與太郎基家を大將として、長船紀伊守・延原土佐守に命じて是を攻めんとすれば、元常城山の麓段の原に討て出で、竹田河原の北に會戰して自身陣頭に馬を進め、手を碎きて相支へ、機に臨み變に應じて戰ひしかば、長船延原紛々と闘亂して、竹田村の東に敗走す。修理此勢に乘じて基家の旗本に突掛り、一もみに切崩さんと自馬上に槍を取て、無二無三に殺倒す。基家于ㇾ時十七歲、力量衆に超え智謀父祖に劣らず。圓形の備を箕の手に作り取籠て討んとす。元常少も猶豫せず、兵を下知して相當り、兩方の手負討死麻を亂すに異らず。長船延原取て返し横合に突掛れば、此勢に切たてられて修理が兵、後より亂れて敗北すれども、元常は只二十騎計り眞圓に成て取て返し〳〵、追敵をあしらひて段の原に引かへす。基家は急に追はず備を堅めて、靜に太鼓をうち旗本を進めらる。

爰に赤阪郡和田の城主和田伊織は、行年十九歲、容貌美にして心も剛なる男なるが、穝所と雲龍の約ありとかや。此日の軍を聞て五千騎計にて馳せつき、河原に馬印を押立て控へしが、元常が敗軍を見て急に進んで宇喜多勢を切崩す。然れども基家の旗本は早く追留りければ、和田も早々引取て穝所と一つになる。日已に暮に及びしかば、其日の軍はやみにけり。其より二三日も互に小迫合

有りけれども、樣所和田よく下知して戰ければ、中々城下までもよることあたはず、宇喜多勢も退屈して岡山へ引返す。

抑々龍口の城といふは、一峰高く聳えて城郭雲に交り、大河麓に流れて北より西に廻り帶たり。北は險岨屏風を立たるが如く、東南の尾をば掘切たれば、たやすく落る城にあらず。直家つく〴〵思はれけるは、此以後とても兵をつかはして攻めんには、人のみ損じて利有るまじ。如何せんと、老中年寄り相談有りしに、長船紀伊守密に申けるは、修理は武勇はよけれども色を好むこと甚しく候。殊に美童を愛して常に召遣候よし承候間、何とぞ御譜代の子供の内美質なるを擇み、夫によく謀を敎へ手立を以て城中に入れ、たばかり討つ事十にして五六は成間敷事にも非ず。才智かしこき兒にあらずば仕おふせがたからんと云て、頻に岡清三郎を見やりければ、直家とかうの返答もなく、外事を語て座を立給ふ。二三ケ月も有て、直家岡清三郎を捕て押こめ置き、家老共にのたまひけるは、清三郎此間不義の密契有て我前にて艶書を落したり。然れ共其相手誰と云名をしらず。拷問の上成敗せんとて甚だ怒りたまふ故、何れも口を掛けて、彼に限り左樣の義有るべき者にあらず。君艶書を越たる人有りとも、兎角云ひなして從ふまじ。左あれば艶書を越たりとて彼が科に候まじ。又拷問したりともそれを云ふべき者にも非ず。彼十二三の比より見出されて御寵愛に預り、今年十六歲、一度も御奉公のあやまちも見え不レ申と云ひたれども、直家怒り猶やまず、拷問はともかくも成敗は免すまじとて、奥に入りざまに岡豐前に來れと有ければ、豐前即奥に入る。直家のたまひけるは、汝清三郎をひそかに落し、何とぞ龍口へ入らしめよ。清三郎は此間我よくぞ聞かせたりとのたまへば、豐前かしこまつて立出る。扨明る日城外にて清三郎を誅せよとて、役人ども牢を明れば、清三郎は見えざりけり。牢番に尋ぬれば忙然として返答明かならず。是非なく申上ければ以の外怒りにて、牢番を成敗有けるとかや。豐前清三郎を盜み出し、龍の口の城の向牧石原に、豐前が遠き縁りの僧

草庵を結て居たりしに、是を賴みて其庵に隱しおきて、便宜を求て修理に奉公させんとて窺ひける。或時、修理は城下の流に小船を泛め、綱を引かせて居られしを、淸三郞是を見て能き便なりと思て、尺八を持ち小藪のかげに居て、音もあやに吹きならす。河瀨に響て縷のごとくにして、然もたえず、然るがごとく□ふがごとく心細くぞ聞えける。修理は本より尺八を好み常に弄びし人なれば、自竹の奇なるを求て是をひらき、身を放さぬほどの數奇なれば、此曲に耳を傾て不審に思ひ、人を遣して見せられしに、其人歸て申けるは、年のほど十五六の美き少人の、藪蔭にて尺八を吹き候と申す。元常殊にいぶかしくて、其邊外にあやしき者も見えざりしかと有ければ、使の云く、其も不審に存じ、僅なる民家にて候へば悉くまはり見候に、更に不審の義無レ之と申ければ、心得ぬ事かなとて、劍術の師加藤十藏小兒姓早川左門水野織之介彼是六七人、小舟に乘て川向に行き窺ひ見れども、是を知らず吹き居たり。修理先づ舟より上り其樣を見られしに、年の程十五六にして白き帷子に大小をさしたり。いかさま只人にあらずと思て、何れも近づきて見れば綠髮紅顏いはん方なく、天上の仙童爰にあま降りしか。姑射の神人のあらはれたるか。さらに此世の人とも思はれずと、そぞろに嘆きあひて、覺えず步みよりしかば、淸三郞此體を見て驚きたるようにて、尺八を收め立たんとするを、修理詞をかけて引き留め、さるにても御邊は如何なる人にて侍るぞや。かゝる處にあるべき方とは見請け候はず。又尺八の曲調もかく委くおはするぞや。某は龍口の城主也。殊に尺八を好て弄べども、いまだかゝる奇音を不レ聞と問はれければ、淸三郞手をつきて、扨は修理公にてましますかや。某は御敵直家に仕へ申し、岡淸三郞と申者にて候。奸曲の者の言葉に付て、無實の科を某に取かけ、已に誅せらるゝに極りしを、家老共不便を加へひそかに落し侍れども、猶よる方なく迷ひ居たるを、又人々の憐んで此所の草庵にかくし置き、其後、何方へも行衛をさだめよと有りしに付、四五日の間爰にしのび居候。洞簫は直家の猶子基家堪能に候間、少し曲調を覺え候也。今將公に見付られ參

らせ、恥かしき身の上をあから樣に申上ぬる上は、敵の中より迷ひ來る者なれば御哀みも候まじ。とく〳〵いか樣にも御計ひ被レ下、なき跡を頼奉ると玉眸に泪をふくむ有樣、雨を帶びたる梨花のごとし。修理は忽勇氣くじけて、哀れ此者をつれかへらんと思はれければ、十藏をかたへにまねきさゝやかれけるは、敵中の人なれどもかゝるやんごとなきお人の、さまでの事は有るまじ。若此所に捨置きなば、重ていかなる憂目にかあはん。城内につれ歸り樣子を見屆け、もし野心あるならば汝が手に掛けて失ふべく、左なくばはごくみてつかはすべしと有りければ、いかゞ有るべきや、我等は同心になく候と云ひければ、修理押かへして、吾に任せよ用心も人によるべし。直家さへ恐るゝにたらず。たとひ此者間者なり共、我又彼に付て謀をなさん。況や幼年の者いかでか吾をたばからんと、理を非にまげて云ひ消し、又、清三郎に申されけるは、汝が有さま不審なきにもあらざれど、童形の身いかでか野心有るべきと思ひ、城中につれかへる間、吾に從ひ來るべしと有りしかば、御情のほどの忝なさ申上べき樣なく候、とても此身は萍のよるべをたのむ事に候へば、仰にしたがひ參らせんと告げながら、庵主にいとま乞ひ申したし、御待被レ下べきやといへば、其段は心に任すべしとて、侍を一人さしそへ庵室にゆかしめ、右のわけをつぶさに申、いとまを乞ふて立出で、それより小舟にのせて歸城有りける。然れども此者の一言猶うたがはしければ、岡山に間者をつかはして事の樣を聞かしむるに、果して其事實なれば疑を晴して、其後は水野・早川なども寢席に近づけず。清三郎を寵愛して酒色に軍事を怠るのみならず、清三郎と只二人、城山の北の亭に上て酔臥せらるゝ事度々也。老臣諫れども更に用ひず。加藤十藏あまりに見兼て、和田に立越え伊織にまみえて、右の次第を語り、此體にては家運の末と存ずる間、御異見賴入るのよし餘儀なく訴へければ、伊織甚だ驚きて、いそぎ龍の口へ赴き修理に逢ひ申されければ、例の清三郎側に在り。伊織申されけるは、密談の仔細有て罷越候間、人を拂はれ候へと有りしかば、清三郎座を立ちぬ。伊織色を正して樣々異

見時を移すといへども、更に同心の體もなく、元常笑て申されけるは、凡古より敵味方に來り降る事、珍ら敷事に非ず。さりとて其者をうたがはゞ大功成就すべからず。いまだ若輩の御邊などの知玉ふ事にあらず。彼者野心少も無レ之候段は、某こそ能く存候へ。若某が運つきて人にたばかられ申ならば、夫は百年の壽も今日の死も更にかはる事なき也。とかく若き人々の仔細らしく物なのたまひそ。今更御異見に預るまじと、すげもなき挨拶に伊織忽然と怒て、御邊此城に運をひらく事あたはじ。近日此城に屍を訪はん。交情の捨てがたければこそかくはいへと、座敷を蹴立て立歸るに、元常は見向もせず座し居たり。伊織座を立てひそかに老臣山口與一を呼び、とかく例の持病良藥もとゞかぬと見えたり。御邊よくはからへと云て和田にかへりぬ。然るに六月半の比なれば、火雲焔々として天を燒き、山岳の翠乾て、城中紅爐の中に坐するが如くなれば、元常暑氣を避けんとて、例の如く清三郎只一人召具して、件の北樓に上り、流を見おろし盃を傾ければ、薰風洒々と袂に入て、河瀨の音耳を洗ひ、牟佐の渡頭、金山の絕頂、皆是れ吾一幅の丹靑なりとて、かはる〲尺八を弄せらる。清三郎は害心をさとられじと、心を盡して仕へたり。此日も已に數盃に醉て、覺えず清三郎が膝を枕とし、睡眠時を移しけるに、清三郎爰こそよきひまなれば、首取てのがれ去るべし。よしや仕損じて忽爰にて討たるゝとも、是ほどの暇隙は又有るまじと思へば、しきりに胸とゞろきて居たりしが、いか樣此間の深情を思へば、いかにしても此人をやみ〲と討たんこと人情に背きたり。よしや目をさまさせ、此事あからさまに告げ知せ、此人の手にかゝらんかと思ひしが、いや〲直家公の爲身を捨て此城中にたばかり入り、かくまで仕よせたる忠義を、私の恩にかへん事武士の道に非ずと思ひきはめ、修理の脇指の側に有りしを引よせて、心中に念佛して首を打落しけるこそ哀れなれ。此事更に知るべきなければ、袴をぬぎて首を包み、險阻のつゞら折を北の麓へ落行きしが、小兒姓早川左門亭の邊に來りしが、足音あらゝかに亭の階子を下る音して、清三郎が山を走り下る

後かげを見ければ、急ぎ亭に登りて見るに、主人の屍朱に染みたり。こはいかにと驚きて、清三郎め殿をきりたるぞと、二三聲呼はり捨て、清三郎が跡を付て追行きける。清三郎は一さんに麓に迯下りあたりを見廻すに、城主の常に逍遙せらるゝ小舟の有りけるを幸と思ひ、首を舟に投入て其身も乘らんとする處へ、左門走り來り、いづく迄迯るぞとて討てかゝる。清三郎ふりかへりてぬき合せ、ふみ込で打付ければ、左門が鬢のはづれより左の肩さきへ切さげたり。清三郎切先はずれに肩先を切られしかども、二ノ太刀にて左門が眉間に切付けしかば、たゝみ重て切りたをす。可レ憐左門生年十五にて、主君の爲に討れける。城中にはおくればせに聞付け〳〵追々にはせ下る内に、件の舟に棹さして向の岸に迯行きしかば、城兵は上の瀨の地藏岩の邊につなぎ置きたる二三艘の小船に取乘て、おせどもさせども大勢にて、舟の足入たれば一寸も動かず。とかくする内に清三郎は、牧石原に落行て庵主に告しらせ、岡山へやす〳〵とのがれ歸りける。さて龍口には兵ども歯をくひしばり、腹たつれども今はせん方なく、とかく此城を枕として、直家よせきたらば切死せんと云もあり。又和田へ注進して伊織殿を大將とし、さかよせに岡山へ押よせ、無二の一戰して討死せんと云も有ければ、山口與一申けるは、伊織殿を招くとも、自分の城を打すてゝ爰にて無分別の合戰あらんか、又此一戰の人數にて岡山に寄せたりとも、直家のはこさきに當る事叶ふまじ。籠城堅固に持こたへ、隨分爰にて防戰し、かなはぬ時腹きらんこそ本意ならめと云ひければ、何れも此義に同じ、先づ出陣をば相止めける。さるほどに、直家は清三郎が修理に愛せらるゝを聞き玉ひ、若輩の身として修理を計らん事、心元なきこと十が八九也。然れども生きてかへらん事、決して有るまじければ、すまじき謀を仕たりと、甚だ不便に思はれける。かゝる處に或日の夜半前、ひそかに御枕本を音づるゝ者あり。誰ぞと尋ねたまへば、岡豐前清三郎を召連れ、修理が首を持來りければ、直家大に驚き給ひ、且悅び且あやしみ、いか成る術を以てのがれ歸りしぞとのたまへば、有し事ども委く申上る。

直家のたまひけるは、若年の汝、其才覺はひとへに弓天神の我に利運を與へ玉ふ物なり。武勇、おひさき頼もしき若者なりとて、賞功淺からず。明る早朝に前髪を取らしめ岡郷助とぞ名乘らせらる。此由扨龍口の城を可レ攻由にて、長船・戸川・延原・花房・岡など各諸隊を押出し、旭川に添て押寄る。此由龍口へ聞えしかば、始め戰はんと云ひける義勢も、主人なければ誰下知する分ちもなく、兵氣紛々と離れ、とかく籠城叶ひがたく、我も〳〵と落行く者多ければ、山口與一せん方なく、家老の身として士卒とゝもに落さらんも面目なしとて、三ノ曲輪にて切腹す。義を共にする者三四人、殘る者共悉く落ち失ぬ。宇喜多勢空城に入て、矢倉に火をかけ燒拂ふ。是に氣を失て和田の城にも士卒大半落散りければ、伊織は時を待て修理が吊合戰をすべしとて、先づ城を明けて金川に立退き、松田一族と一つになりて、しばらく時節をうかゞひける。

或記に樣所修理を西條治部と云へり。又俚俗に宰相殿と云ふ。和田村の庄官何某が家に此書有り。元祿元の春此書を求て閲す。古本の文辭甚だ卑陋にして、其上字義も誤りたれば、記寫の序に潤色して此書を正す。外に段ノ原里老の傳ありといへども、疑しき事有る故に、是を除く。又或書に信濃ひそかに元常を討てのがる。城兵鎗を以て是を追ふ。信濃河に飛入り水底をくゞり牧石原に上る。直家の伏兵兼て牧石原にあり。此故に、敵を追崩し信濃を引つゝみ、岡山に歸ると云説あり。

別に龍口の城圖あり。尤堅固の山城也。今は本丸に八幡宮あり。此の麓に早川左門が墓ありと云ふ。修理并山口與一等墓所不レ知。

宇喜多與太郎基家、竹田河原合戰の時、旗本の備を崩して修理を追はんと有りしを、直家より後見として付置きたる、國富源右衛門宍甘太郎兵衛兩人、基家の馬の左右に添て備を崩さず。此故に旗本の勝を得たりと古老物語なり。

或人曰、岡郷介乞食の老女を、おのが母也とて養置き、龍口に入て後母をも呼取たき由を云て、彼老女を城中に呼入れ養ひしかば、修理彌々誠なりと思ひ、心安く思ひつかはれしと云へり。本文の如くば、郷介いまだ幼年也。是程の智術あるべき事にもあらず。若岡豐前などが計らひて得させたるか。

此本文に長船紀伊守と有るは、長船越中にて有るべきか、時代少し相違あらんか。紀伊は越中の子也與太郎基家、此合戰の時十六歳ならんかと云ふ說あり。

上道郡中島落城は、龍口落城と同日なりとぞ。直家龍口歸陣の勢を以て、中島の城を圍む。城主中島大炊無勢にて防戰叶はず、榎の大木のうつろに隱れ居たるを、さがし出して討レ之と云へり。其子孫今同所にあり。城跡平地となりて今は畠也。其時の榎今にあり。本口周り三丈計りあり。

明和元甲申年中冬寫レ之。

龍ノ口落城記終

妙善寺合戰記

*一「原本注」出家像酒折社寺平福院に有。毎年正月九日に出すよし

*二、松山城は玉松山城の誤

妙善寺合戰記（一名万燈記）

著者　不詳

備前・美作・播磨・備中數郡百餘萬石之大守浮田和泉守直家*一、備前一國手に不レ入之時、上道郡沼の城に居られける。直家元は當國和氣郡天神山浦上遠江守宗景の臣として、段々自立し、終に宗景を押隨て、備前を平均し、剩へ備前の西の方半國を押領しけり。津高郡金川松山*二の城主松田左近將監をも方便を以て討取、いきほひ既に近國を壓す。其頃美作國は雲州尼子家の國なりけれども、尼子家は藝州毛利家に押落され、作州に有所の城々も或は藝州に隨ふも有、備前の下知に應ずるも有り。其際を窮ふて浮田方々を切隨へ、備前をうばひ取ければ、此由毛利家へ聞傳へ、備中松山之城主三村紀伊守家親に被二申付一、作州へ出勢し國中を鎭むべきよしにて、紀伊守一萬餘の人數を催し作州へ出勢し、浮田に隨ふ城々をば責亡し、浮田後詰あらば無二の戰して討果すべき志也。此由備前へ聞えければ、直家思はれけるやうは、今所々の取合最中に、三村は大敵と言ひ、老功の大將にて、たやすく取ひしぎがたき敵なれば、謀を以て討とらんと思はれけるに、其節新參に遠藤喜三郎と云者あり。三村家親未だ備中成羽城主なりける時、喜三郎は浪人にて暫く成羽に居ければ、家親を能具（ヨクツブサ）に知りたる事を直家察せられ、遠藤をひそかに閑所へ招寄せ、其方は成羽に有て、家親を能々見知らん。此度三村大軍作州に出勢し、我に隨ふ者どもを責亡すよし。我たとひ後難を得るとても、後詰せずんば有べからず。然共此節所々の敵に國おだやかならず。我多くの勢を以て、彼に敵戰の爲作州に出勢せば、其留守の間を窺ひ、國中に不慮のさわひ發り、おもはぬ敵おそひ來らん事如何に

※一「原注」遠藤屋敷跡御旅所西の方ゑとりといふ所此屋敷跡といふ

※二「原注」此時大名に取立津高郡虎倉山の城主に成しよし

思へば、いかにもして三村を謀を以て討んとおもふ。汝は案内と云ひ勇士と云ひ、濃に思ふの間、作州に忍び行、能々窺て家親を討とらんやといはれければ、遠藤承り申ける様、誠に三村此度多勢にて出張の儀に候得ば、我等一人忍び入易々と討たん事、十として一つなり。然共かゝる御意を蒙は勇士の眉目として望所に候。不レ叶までも忍入計見候べし。死は近く生は堅く候得ば、死後に一子が事奉レ頼なりと申、即時に作州に立越ける。喜三郎弟に修理と申者、※一兄が大事の命を得て作州に赴を聞て助の爲に伴なひける。三村は作州穂村の興禪寺と云山寺にたむろして居けるを、遠藤聞て即夜にまぎれて忍入、彼寺の椽に揚り、障子の紙をつばにて穴を明て見ければ、家臣を集め軍談をして居られける。遠藤鐵炮を差出し打んとせしに、如何しけん火縄の火消えたりければ、喜三郎弟に申けるは、かく迄忍入しに今迄有し火の消えし事、是弓矢神に捨られしと申ければ、弟の修理申ける様、御心易かれ火を取可レ參と、居たる所を立、夜廻りの士の體にもてなし、有番所に篝を燒居る所へ行、敵の方の様に申、油斷なく被レ廻候へと申、彼篝火の側へ寄、羽織のすそに火を付、何となく立去り、元の所へ歸り、喜三郎に火を渡しければ、天のあたへと悦び、彼障子の穴より即時に討殺す。座中大きにあわてる間に、遠藤兄弟難なく逃出て備前へ歸る。直家大きに歡び、※二喜三郎に親恩の知一萬石宛行ひ、河内守と名付け、剩へ浮田を名乘せけり。弟修理には三千石加恩せられけり。此事更に知る人なかりけり。され共三村うたれ、程なく遠藤兄弟過分の高祿を得ける故に、人皆是を察しけり。扨三村が勢は主を討れさわぎけれども、家臣三村孫兵衛と云者老功の者にて、能々人數を鎭て、備中へ歸しける。家親に子息二人有り。一男は備中小田郡猿懸山の城主庄元祐と申ける。是は庄豐前守が養子となり、庄の家を繼にけり。弟は即三村の家を繼で修理亮元親と號し、家親作州にて討れける時は、二人の子供皆備中に有けるが、欝憤甚深くして如何にも親の讎なれば、備前の國へ亂入して浮田を討果し、遺恨を散せんと思ひけれども、備前は大人數、殊更端々に出城多く容

*一、別本四五百人に作る

*二、辛川の宿を打立首部にて手を分て一手は庄元祐を大將として六七千の人數云々(イ)

易〃攻難し、なまじいに軍を發し却て負を仕出しなば、悔とても甲斐あらじと、一族是を諫ければ、不レ及レ力兄弟いかりを押て時節を窺ひけるに、備前上道郡澤田村の西山の上に、妙善寺の城と號して出城有けるを、或時備中より窟竟の勇士四百人[*一]を撰びて、夜にまぎれて三棹山より忍び寄、不意に妙善寺の城へ夜討に入る。城中思ひよらず、周章て討るゝ者數を知らず。殘る兵漸〻逃落て、城は三村方へ乘とられ、即三村より勝(スグレ)たる勇士の侍大將に、數多軍勢を指添妙善寺の城を堅めさせける。浮田憤怒不レ淺、即責手の人數被レ申付レ、暫時に妙善寺の城を乘潰し、取返すべき旨下知せられけれ共、城中堅固にして、多勢の勇士ども籠居て持こしらへける故、暫落城せざりけり。直家怒て、自出馬して討ほろぼさんと有ける。此由備中より付置たる忍の士ども松山へ馳歸り告ければ、三村大きに悅び幸と一族中へ觸たりける。兼て約束堅めける舍兄庄元祐、猿懸山の城より出勢す。同國山手幸山の城主石川左衞門尉は、三村が伯母聟成けり。是を初として同國鬼身の城主植木下總守・小田・中島・伊勢坏と云窟竟の勇士、一類一族都合二萬餘の人數を催し、即時に松山を打立、備前國へ押寄、辛川表へ打入ける。かくて浮田は妙善寺の城を責させけれども、落得ざる事をいきどほり、自身亡ばさんと沼の城を打立て、古都の西なる宍甘山鼻に旗の手を靡し、今日妙善寺を責落し、籠城の敵どもを一々に撫切にせよと下知せられければ、備中より押寄ける勢、相圖如何にと心を苦しめ、辛川邊にひかへける所へ、又備前に付置たる忍の者立歸り、今日直家彌〻沼の城を出馬せられ候よし注進す。三村元親大に悅び、一陣にすゝんで諸勢を勇て云けるは、思ふ計に落て今日妙善寺の城を責るよし。然ば浮田を討取らん事案の內ぞや。某直家が首を刎て亡父の遺恨を散じ、供養にせん。沼の城を乘とらば枝城は風の前のちりのごとく、皆我下風ならんものをと、言葉すゞしく詈て、辛川[*二]の宿を打立て先手合を定めける。一手は庄元祐を大將にて、七千計の人數萬成富山の城の下を廻り、春日宮の前より朝日川を打渡り、朝日山の下より丑寅に向て三棹山に打揚り、妙善寺の城の後詰して

※一、中島加賀守以下の大將數多五千計伊福村の中道より眞一文字に今日岡山の御城の北石關町の邊より原尾島の前まで打續き云々（イ）

※二、乘取りて鐵村へ勢を出し直家を（イ）

※三、破られければ不叶、城に火を掛て後の山に過出ける。直家本城をば云々（イ）

城中に力を合せ、追手を追散せと向はせたり。一手は石川左衞門尉を大將として、小田・※一中島以下の勇士五千餘り、首部(コウベ)村よりひやけはなを廻り、上伊福村の中道より、今岡山の城の北を通りて、原尾島村へ打出て、直家の本陣に打て掛り、一時に勝負を決せよとなり。惣大將三村修理亮は一萬餘りの人數にて、津島村土生村の前を過て、釣の渡りを打わたり、上道郡國府市場より湯廻山へ打上り四之御神村の上を越て、宿村の奧觀音寺村へ越、沼の城へ亂入り、直家留守の隙に城を乘取り※二、直家を眞中に取狹て前後左右より討て可レ取謀略なり。既に三方の大將相圖の貝鉦(ドラ)打揃へ、旗の手をさつと下し、次第を亂さず打出る。斯て直家は妙善寺の城を責るの謀にて、今備中より大勢寄べきとは思ひよらず。されども妙善寺の後詰として備中より人數や來るらんと、注進のため付置たる物見の士、或は萬成富山の城より注進の者告けるは、備中勢雲霞のごとく押來り、首部村より三手に別れ寄せ來るよし申上る。直家の惣勢、前には妙善寺の城堅固にして未勝負決せず、備中勢數を盡て亂入り、今日合戰有無の二ッと片酢を呑で控へたり。偖大將の下知いかにと思ふ所に、また物見の者はせ歸り、急に三方の敵近く候。一手は川下春日宮の前を越え、妙善寺の後詰仕る體に見え申と、云もはてぬに直家立揚り、甲の緒をしめ弓づるをしめし、馬引寄せ打乘て、かゝれ者共妙善寺の城だに落なば、今日備中勢何十萬騎寄たりとも、骸は備前にさらさんぞや。いさめ／＼と噇て、一文字に田の中畑の中ともいはせず、二十餘町の道を唯一時に鳥の飛ごとく馳させ、妙善寺の城山へ打登るいきほいなり。此事妙善寺の責手に向ひしもの共は、大將自身後陣より馳來たまふて無二無三に責給ふに、若おくれて先陣の責手どもが責かねば、後陣の者に面を向べきやうもなし。未後陣の繼ざる先に責取れ者共と、諸勢一度にいさみ掛りて責登る。城中にも爰をせんどゝ防戰ひ、かくて直家の本陣も味方の嶮敷所を、はね越え、乘越え責とり、同時に息をも不レ繼攻たりける。早一二の木戸口破※三れ、城中引色に成ける。直家自身採幣(サイハイ)を取て、既に城は落ちたるぞ。今一揉ぞと大音聲を揚られけ

※一、直家本城なば先手の者共に渡して所々に殘ろ敵やあるとおさへさせ其身は云々（イ）

*二、彼是數千騎拔つれて眞一文字に國富村へ掛の落し備中の先陣を早切崩し合戰を初めける（イ）

※三、別本國富村より德吉の間にて云々

る。諸勢一度に鯨波を發し、勝に乘て責皷を打ち、討ども切どもいどはず、終に城は責落す。城中の兵殘り少なに討れ、殘る兵漸々後の谷を越て西をさして落行ける。※一直家先本城に火をかけ、煙を揚させ少々人數殘し置き、其身は勝ほこりたる勢を以て、三棹山へ打揚り、逃る敵に追すがふて、山の上より遙に敵の働を見、勝負を一時に決せんと思はれける。先陣は戸川肥後守・花房助兵衞・同志摩守其二三之左右、浮田治兵衞入道安心子息左京亮・岡越後守・長船紀伊守・河本對馬守・同源三兵衞延原土佐守・岡信濃守・同但馬守等屈竟の家臣を段々に備させ控らる。是を夢にも知らずして備中の三村勢、三方一度に朝日川を打渡り、本陣三村修理亮元親は、湯廹村の前より北の山へ取揚り、早先陣は四ノ御神村の上、矢津の鼻迄打過、我先にと沼の城へ責入り、一時に城を責落し、高名せんと勇ける處に、妙善寺の城はや落城し、煙天につらなりて見えける。三村先陣後陣の勢案に相違しければ、先へも進まず跡へもかへらず。亡然として彳みける。偖春日宮の前をわたりたる庄元祐が勢、是も妙善寺の落城を知らず、後詰のため駒に鞭打馳けるが、既に玉井宮の前を過て、先陣國富村近く押かゝる所に、妙善寺より責落されたる備中勢、右往左往に迯掛け三棹山より崩落ければ、こはいかにと云程社あれ、備へしどろに成にける。直家の先陣戸川・長船・延原・明石等※二三棹山より勝鬨を作り還り、坂中より鐵炮を打掛る。色めき立たる備中勢、人を栖にしてしどろに成ける所を、得たりやかしこしと鎗ぶすまを作り突掛りければ、早先陣の備中勢崩靡*て迯かくる。浮田の惣軍勝に乘て鬨を作り、懸れ〳〵とをめきさけんで責たりけり。亂れ立たる習ひ一陣破て殘黨全からず、備中勢ひた崩立て、※三國富村より德興寺の間にて討るゝ者數をしらず。大將庄元祐は我が人數の崩靡て逃るをもいとはずして、有岡某と云士と主從五十騎計、國富村の川原を東に向て馬の鼻を立直し、勝ほこりたる浮田が勢の延原土佐守が手へ討てかゝり、縱横追ひまくり、浮田左京亮の朱の四半に兄と云字の馬印を見て、これ直家が一族望所と小踊して掛合ひ、東西南北へ割立戰ける。元來小勢な

*一、以下數行文章矛盾原本のまゝ

*二、中の手間山の通を越て來りける（イ）

*三、「原注」元家後兒島にて打死元家の墓八濱より大崎への海邊に有り

る上、數多の敵に打合せければ、大將元祐數ヶ所の疵を蒙り、終に討死せられ、首は左京亮が手へ討取られたり。殘る兵、[*一]主の討死に氣を入れ、取て返て我おとらじと一人も殘らず討死す。大將既に討死の上は、亂れ立たる元祐が人數、西をさして落行ける。國富村より朝日川までの間にて、討るゝ者數を知らず。此戰未中半成ける時、[*二]中の手に來る石川左金吾が軍勢、漸々原尾島村の前へ來るを、浮田、山の上より見すまして、懸て軍をはじむべきよし下知せられければ、即直家の猶子與太郎[*三]元家を大將として、花房兩家河本父子前後の備を堅め、丸に兒の字の旗數十本、三棹山より北へ向て押下げ、靜に鼓をならして寄たりけり。石川左金吾が副將に友野石見・古屋何某先陣に打けるが、諸手ゝ謀相違して、妙善寺の城落ければ、軍(殿カ)は大事ならん、唯本陣の三村と云老功の勇士等と、軍評定いたしける。早浮田が先陣三棹山をおり下りければ、中々今より軍を返しては、味方負を仕出すべし。掛て軍をはじめ勝負を天運に任せよと、兩陣次第に押寄て、足輕鐵炮を打懸たり。浮田與太郎元家は若大將、殊に直家は山の上より見物せられける軍なれば、惣軍に下知して云、一足も引な進め〳〵と討て掛り、河本對馬・花房助兵衞兩手より鎗をはじめ、原尾島村を北へ追返しつゝ、暫揉合ける程に、浮田は勝ほこつたる軍勢の、しかも大將後に控て、勢倦(モノウク)ば我入替らんとするにはげまされ、備中勢は謀相違して南より廻る勢、最早負軍して追立らる有樣を見ければ、後陣あへて進得ず。戰遂に危く見えければ、伊勢新左衞門・中島加賀守以下石川をいさめて、竹田村へ引返し、軍を入給へとすゝめける。左金吾人數を留てひた引に川上へ引登りければ、浮田勢逃るを追ひ、川に添て追上る。直家も三棹山より人數を下し、高屋村近く出らるゝ。石川が勢は八幡村の邊迄追討に討れて、數軍殘少く成れ共、伊勢・中島兩人、横合に元家の旗本へ切懸り、浮田勢夥敷討れける。先手備を亂して追ひける浮田が勢の間を取切られければ、裏崩れして雄町村の東へ敗北す。爰にて無レ恙元親の手へ馳入り、殘る敗軍の士卒は川を渡り、直に備中へ歸る者も多かりけり。惣大將修理亮元

＊一、此三村退口にて譜代の家人引返し〳〵主をたすけゝる間今の八幡村の邊にて備中勢討死の數かぞふるに暇なし

＊二此合戰を第一とす直家一代の勝軍なり（イ）

親は、兩方の味方の軍勢共が、軍を初て追立らるゝ體を見るよりも、續や者共味方に力を合はせて戰へと、云もあへず南に向て、一文字に鞭を揚げて馳られければ、總軍一度に直家の旗本を目懸突てかゝり、早合戰を初む。元來元親は中國に名を得し勇士、殊更父家親を作州にて討れし恨、今日既にさんせんと期したる謀相違し、妙善寺の城あへなく討落され、二方へ相遣したる味方は、負色に見へて追立らる。遙に是を見て齒をかみ、眼を廻らして詈ていはく、口惜や我父の怨を報ぜんため、適々大軍を催し出勢せし甲斐もなく、相圖立所に相違せし事天運に違たり。何の時を俟つて恥をすゝがんや。直家が固める陣に無二無三に懸入り、撰討直家を打取か、元親が首を敵に渡すか、二ッの内を過さじ物をと、獨詈て切かゝる。直家の先陣明石飛驒・岡信濃が手を切崩しければ、三村勝に乘て諸軍を勵し、掛や進めや者ども、敵は負色成ぞ、此場を揉（モミ）立ずんば戰はあやうきものをと、鐙（アブミ）ふんばり下知し、自身手を碎き數刻相戰ふに、直家の諸軍ひらき靡（ナビキ）て、既に追立られんと見ける處に、はじめ國富村にて備中勢を追立し、戸川・長船・浮田・延原が勢、竝、原尾島邊にて戰し浮田元家の軍勢、敵を退けて漸く隙に成にけるが、三村が勢勝ほこつて旗本危く見えければ、西の方より横合に鐵炮を搏掛〳〵、鎗ぶすまを作て突かゝりける程に、さしも勇士の三村が勢、前後の敵と横より掛る敵に突立られ、ひた崩れに崩れて討るゝもの數を知らず。元親は敗軍にもかまはず、馬の鼻を取て返し〳〵せられけるを、家臣歴々謀を加へ、命を全うして重て讎を報ひたまへと諫れども、猶しも掛出で給ふを取付て、唯今討死被成なば、誰人か三村の相續して、先君の仇報じ奉る人候らんと、馬の頭を引返し釣の渡し迄の間にて、危き事多く候得ども、譜代の家臣共返し合ひ討死し、終に主をたすけゝる。＊一此合戰に備中勢討死多く、二萬餘の人數殘少なく成にける。是を備前妙善寺崩と云也。直家一代所々の合戰度々なれども、敵を多く亡しけるは＊二此合戰なり。偖（サテ）三村は是非なく備中へ歸陣して、鬱憤不散無念千萬におもひ、毛利へ訴へいかにもして浮田を討んと謀ける。直家も毛利

家へ段々手を入れ旗本に成、もし天下に御旗上られば御先手仕らんと申けり。殊更其頃三村方と毛利家と、不快の事出來してむつまじからず。折節浮田よりは、三村儀彌々御見放し被レ下ば、御旗先手仕らんと有ければ、望に任せ和談せられ、備前美作を浮田に渡し、無異になられける程に、三村彌々立腹し毛利へ恨を含み、終に松山に籠城しける。家臣三村孫兵衛諷諫(フウカン)しけれども、元親用ひざれば孫兵衛主從の間不快に成て、松山を立去、かくて毛利家大勢を松山へ遣し合戰に及び、三村討負、元親終に切腹し、其後備前と毛利家和談なり。以後毛利家より被二申越一けるは、日外三村が勢備前へ亂入時分、妙善寺の取合に多くの士卒亡ひし事、皆毛利家へ忠節の者ども、不便なり。跡吊ひ得させ度との御事なり。直家承り即ち大勢の僧を供養し、討死仕ける諸勢の亡魂を吊ひける。依レ之浮田より湯廹村邊の民に申付られ、毎年七月十四日十五日の夜、右湯廹村北後の山に萬燈として數多の火を燈し、生靈を吊給ふ。是より今にいたり不レ懈、萬燈をともし申なり。此時の首塚澤田村の城山の下、八幡村の北、湯廹村の邊に數ケ所有レ之なり。

以下別本妙善寺合戰記に依り追補す

龍ノ口の城主最上治部少輔元常は、宇喜多直家の妹聟なり。後直家に背て備中方と一つになり、安藝の毛利へ隨ひける。其時、直家より岡郷介と云者に申付、ひそかに郷介手術を以て治部方へ奉公し、後龍ノ口本城北の方の矢倉より治部と組んで落、治部を討取、夫より直家の家臣となる。其比は天正二三年の事也。

上道郡沼の城、始は中山備中守とて、天神山の浦上宗景の家臣なり。後宇喜多直家、備中守を討て沼の城に移り、其後岡山の城へ直家移りて以後は、宇喜多興太郎基家預り也。

御野郡萬成山の城は、富山の城といふ。始は松田左近將監の城也。金川玉松の城へ移りて後、家臣を指置れけるが、松田宇喜多に討れて後、宇喜多直家の弟治部入道安心在城。安心の子左京亮まで在城なり。

同金山の入江船山の城は、須々木豐前守在城也。

奥津高郡虎倉の城は、伊賀左衛門尉久鷹(隆イ)在城也。

妙善寺合戰記　終

備中兵亂記

備中兵亂記目錄

※本書原本此目次を缺く即別本及內容に依り追加訂正

〔卷之上〕

〔卷之中〕

〔卷之下〕

備中兵亂記

著者不詳

元親謀叛之事附藝州勢寄來事

夫人間の盛衰を觀ずるに、飛花落葉の風の前、電光石火の影の中、*有爲轉變の理は、今に始めぬ事ながら、俄に驚く計也。爰に源氏の末葉三村修理之進元親は、當國の守護職として松山に居城あれば、國中の諸侍松山に出仕して其機嫌を窺ひ、其下知に不レ隨と云者なし。然るに不レ圖無レ好謀叛を企て、一家斷絶有し事は、先父備中の守家親、數年備前國宇喜多と仲惡く、互に權威を爭て度々合戰有りし所に、不慮に討れ給ひしかば、其意恨忘がたく、如何にもして宇喜多に思ひしらせて、父の亡恨(魂)をも休めんと、斯は思ひ立れしと也。其濫觴を尋ぬるに、將軍義昭公は等持院殿尊氏卿より十三代の御末也。十二代目光源院義輝公は三好が爲に討れさせ給ひしかば、御一類も尋求て可レ奉レ失とする故に、密に都を忍び出て方々と浪々遊ばし、後濃州に御下向有て織田信長公を御賴み有ければ、別心なく賴まれ給ひ、頓て大軍を起し路次の敵を切崩し、難なく都へ御供して御本意を遂げさせ參せ、將軍に任じ公方と奉レ仰給ふ。其勳功莫大也と云へども、都には村井長門守を居置き、諸事の仕置を取行はせ、萬事義昭公思召の儘ならず。夫故いつとなく御仲不快に成て後は、都に御住居も不レ叶故、西國に御下向有て備後の鞆に御座して、ひたすら毛利家を御賴み有ければ、毛利の家もたやすからずとは思ひながら、代々の御家を奉レ敬て無二餘儀一賴みまゐらせ、近國を催すに誰も御下知に叛く者なく、中國悉く武命に順ひ、已に御歸洛の謀頻にこそは聞えけれ。信長公此事を傳聞

*一本以下次頁十三行迄を簡單に左の如くす。有爲轉變の理也爰に源家の末葉備中の守護松山の住三村修理之進の親先父家親の亡魂を休めんが爲よしなき謀叛を企てたる其濫觴を尋ぬるに將軍義昭すでに西國へ御下向あつて中國悉く武命に傾き御歸洛の謀急也と聞えしかば平信長驚き謀を廻し當國元親に密使を立て備後備中兩國を可充行之由計策急なり元親一族馳集り是願處の幸なり其故は父三村備中守家親累年宇喜多に遺恨を含み數々相戰といへ

ども宇喜多一族河内守備前徳良の城に在て家親を忍び討ち剰へ當國佐非田の庄に働き入り嫡子少輔元祐を打果す二代の怨敵追討の時を待處に信長一味の擬使時をこそ得たれ急ぎ徴運の大樹を攻討ち忠を盡し功を立て信長の助力を以て宇喜多一族を責滅し一家鬱憤の胸を可開と躍り上て一議す中にも同國成羽云々。い、遠藤の家親を狙撃せしは佛教寺にあらず興府寺なりろ、遠藤は宇喜多の族人にあらず家親狙撃の功に依りて浮田氏を賜はりしなり

き驚き、是は安からぬ事共也とて、頓て密に元親へ使を立、此度一味有て義昭へ不㆓隨順㆒、ひたすら西國往返の通路を指し塞ぎ、近邊を攻討て歸洛を妨げ、當家へ忠節あるにおいては、頓て信長大軍を以て出馬せしめ、中國筋追討不㆑可㆑廻㆑踵。然らば備中備後兩國の分は元親支配たるべし。其上何事に依らず望の儀末代如在有間敷と、堅く誓紙を以て賴むよし被㆓仰遣㆒ければ、元親一族馳集り、是は願ふ所の幸也。其故は家親公宇喜多と數々戰ふ内、終に勝利を失ひ、結句、作州の内此方へ歸服の侍數多有る故作州へ出馬あり。數ケ所敵の城を攻落し、威光盛に佛敎寺迄働入りしに、一戰の勝負には不㆑叶故、浮田一族遠藤河内守、備前の德良の城に有りながら家親公を忍び討ち、無念也ける事共也。剰へ其費に乘て當國佐井田の庄に働入て、又嫡子元祐を打果す。二代の怨敵恨み骨髓に徹し、宇喜多一族を討果すべき工夫に、日夜心を碎き時を相待つ所に、今度信長公の誓紙幸と覺ゆる也。將軍へ力を合せ都へ本意有とても、人並の儀にて分けて忠にも成るまじ。まして宇喜多も御催促に隨はゞ、吾身の鬱憤散ぜん事少も無㆑益理也。當家は夫れに引替て運の末成る將軍を急ぎ責討て、忠節を勵み、信長公の助力を以て宇喜多一家を責滅し、數年の本望を一時に可㆑遂と、躍上て手に取る樣に評議せり。中にも同國成羽の城主三村孫兵衞尉親成・同嫡子孫太郎親宣、曾て此儀に不㆑與。父の怨を討給はんに何ぞ他の力をからんや。凡、武士の道は忠孝に止て仁義を宗とすべし。縱へ君々たらずと云へ共、臣は臣たるべきを道とすべし。信長時の難を遁れん爲に當家をかたらふ。虎狼の謀に隨ひ將軍家へ敵對して、一家不義の逆臣とならん事口惜かるべし。信長の行跡を承るに、一度は將軍に賴れまゐらせ、御威光を假て五畿内迄伐ち隨へ、後には將軍家をかろしめ奉り、逆心を宗として、終には都を追ひ出す我儘の振舞、人たる法に非ず。斯る大將に賴をかけて何の益かあらんと、義理專に諫言を致しけれど、良藥は口に苦く、忠言耳に逆ふ習にて、元親を始め舍弟宮内少輔元範・上田孫治郎實親に至る迄、此諫を不㆓承引㆒。當家の運を開き本意を遂べき時至りぬと存ずる所

*は、今佞長不義に誇て世何ぞ可ㇾ治剩へ逆心に謀る志人たる行跡に非ず斯る不仁の大將に賴を掛て何か益あらんと義を事に誠を盡して諫議すると雖云々（イ）*に、一族此諫を惡み既に誅戮せんとせしかば親成父子驚き天正二年十一月七日の夜急ぎ鞆の津に馳參る元親の家臣相集り親成を引返し一族和睦せしめんと議すれども元親の舍弟宮內少輔元範上田孫次郎實親を初として其儀叶間敷由既に神詞を固しかば更に共甲斐なかりけり斯て親成

に、一族の身として忽に心をひるがへすは奇怪成る申様かな。縦へ利運成がたくともそは兼て覺悟の所也と、以ての外に立腹有り。已に誅戮せんずけしきに見えければ、親成父子驚きながら、恐れ入たる氣色にて、先づ其座をぞ立にける。一座に有りける諸侍、とかく親成を引返して一家和睦有て可ㇾ然御事と、色々意見申と云へ共、元親兄弟何れも合點なく、努々其儀叶ふべからずと堅く誓言有ければ、力及ばぬ次第にて心有る人々は互に目を見合せ、和睦有たき事なり、無ㇾ左ば討て捨るか、或は踏み崩すか思案肝要の所ならんに、諸方に敵有ㇾ之に又近き成羽と不和になり。毛利の家へ注進せられば悔ゆ共益有るまじと、拳を握ると云へども、大將の下知是非無ければ、誰以て憚りて申出す者もなく、事延引に及ぶ内、親成父子は虎口の難を免れて、急ぎ成羽へ逃歸り、是は不思議ノ事ども哉。吾身の浮沈は爰也。將軍へ注進して身の害を遁れんと、天正二年十一月七日の夜、急ぎ鞆の津へ馳參り、元親謀叛の趣委細に言上申けり。

義昭公驚き給ひ、我遠き歸洛の謀を廻す所に、近き足の下に敵可ㇾ有とは不ㇾ思寄。此儀如何あらんと、早速御使を以て三原へ被ㇾ仰遣ㇾたりければ、小早川左衛門尉隆景聞きも不ㇾ敢、其儘輝元吉川治部少輔元春へ使者を立、御歸洛の催しを致す所に、將軍家を蔑にし奉り、當家を輕しめ、膝の下より敵に與する無道の仁をば、事延引して不ㇾ可ㇾ叶。誅罸不ㇾ可ㇾ廻ㇾ時と、流石の隆景、早々山陰山陽四國九州迄も早馬を立て、將軍家の御内書に隆景廻文の添へ狀して、不ㇾ延ㇾ時日ㇾ鞆の津へ可ㇾ馳上ㇾ由相觸れて、則霜月八日には左衛門佐隆景・口羽・福原・宍戸・熊谷歷々馳集り、翌日には輝元公出陣にて、程なく笠岡の浦に到着ある。其外追々に諸卒馳加り、都合其勢八萬餘騎とぞ記しけり。

諸軍勢著ㇾ松山ㇾ事附手莊城沒落之事

作州月田山には、元親妹聟檜崎彈正忠元兼居城す。松山叛逆の由を聞き、頓て心を飜し、元親の

父子は納の津につき一族謀叛の由を訴へけり

*一、栖樓を組みて櫓をあげ屏を云々（イ）
*二、動木をつり石をたゝみ塀を結び天羅（もかり）をからみ亂橛を打ち柵を掛け低をうめ芝をつけ長木をゆりたて帆鎚を引き惣て二十一丸（イ）
*三、元親當家を蔑にして謀叛（イ）
*四、縦利を失ひ家を損すとも（イ）
*五、一木弱くは聞えぬぞ軍林寶鑑にも將並以[illegible]則及還て折押す雨濁の總弱なるも消ニ撮下石一き見えたり強き松山へ云々

所緣の者とて疑（猜疑せらイ）れざる先にとて、宇喜多和泉守直家の勢を引籠め、松山へ與せぬ色をぞ露しける。庄の勝負は、早山王に馳出て佐井田山を責しかば、叶はじとや思ひけん、同十八日には三村兵部之丞を初として、松山へこそは蒼みけれ。穂田猿掛の城は毎度の合戰に勝利をうれば、暫く相障へしかども、此度の加勢なかりしかば保べき樣なく、佐井田と同日に松山へこそ蒼みけれ。有漢にも一城あり。多氣の庄には、矢倉・畔・庄田山・野山の城數ケ所に（日々イ）放火すれども、松山は事共せず、*一栖樓を組み屏を塗り、左間を切り弩をはり、*二亂橛逆茂木密にして、惣て二十一丸は犬の潜るべき樣もなく拵へすまして、十二月七日（朔イ）には、四ケ村で討取る首數八十七（八十一イ）一時に持來れば、元親喜悅して惣門まで出合て、功の淺深を記し（有程の（イ））武具衣服等に至るまで思々に遣はし、さて寢所に入て感狀或は恩賞一々に宛計らひ、其晩（暁イ）まで一書を親め、明るを遲しと遣しける。祿レ賞不レ愛レ財、賞レ功不レ踰レ時、と云ふことをや思はれけん。

藝州の大將衆は、笠岡にて晝夜（三十日（イ））評議せり。爰に元親を最負には思はれざれ共、御弓矢の始終を大事に存る武士、此時若元親懇望に於ては一先づ扱にも懸らるべしやと囁ける。隆景進出て被レ申けるは、（各（イ））御思案尤にては候へ共、古人の云ひ置しも、可レ舉をあげず、可レ罪をつみせざれば、大將の僻也とこそ聞ゆれ（承り候へ（イ））今度元親*三謀叛を企る所、宥して置かば諸國の武士皆見るを見眞似に致すべし。たとひ*四人數を損じ費すとも、誅罰すべきに非ずやと宣へば、實にもと思ふも不レ思も皆一同に感じ（感ぜりイ）ける。去らば先端城を殘し置き、松山に馳向ひ、手を碎き粉骨をつくさば、落城程あるまじ。端城は不レ攻とも敗北すべくと評議すれば、輝元聞給ひ、いや〳〵松山何と聞ても左樣に*五弱くは有べからず。強て松山へ押寄て、徒に士卒を損じ何かせん。弱き端城を松山と心得責たらんには、なにかは勝利を得ざらんと、理非分明に宣へば、衆儀（議イ）一同に甘心（感イ）せり。時に三村孫兵衛親成は、三百餘騎にて馳參り、某、國の案內、城の險易、勢の多少、能存て候也。先陣の中に被レ加候はゞ、如レ形忠節を可レ

*一、手ノ庄國吉城へ押寄す（イ）

*二、一皷一聲に調合て閧を噇とぞ云々（イ）

盡と軍訴をこそは致しけれ。吉川小早川各感じて、頓て鞆の津へ飛脚を以て及二上聞一しかば、軍始めに吉祥の訴訟重疊の忠義也とて、名馬御劒を被レ下たり。然ば軍勢を配分して敵の端城を屠り捨つべしと、十二月二十三日手*一の庄の城國吉の城へ押寄す。彼城主三村右京亮政親は、元親一族にて無レ隱勇將也。兵粮乏しからざれば、輙く可レ落とは見えざりけり。親成父子案内者なれば、斯のつまり彼の難所を凌て、我先にと岸際迄攻寄すれば、内より城主の舍弟三村大藏・同七郎左衛門・宮ノ内藏大輔・丹下與兵衛以下馳出て、鎗を合する事三五度、敵味方宗徒の軍士手負死人限なし。中にも丹下與兵衛は屈强の敵二人討取て、首二つ鋒に貫きしづ〳〵と歸る所を、輝元同朋覺阿彌、生年十八歲に成りけるが、今日の合戰手負死人あまた有と云へども、未だ双方へ印を取とは不レ見るに、あの坂口に見ゆる敵、首二つ打物に貫き歸るぞ。あれ引落して今日の軍神に奉らんと、謂ひも不レ敢追懸て、やゝ暫し戰ひけるが、無手と組で双方指違て失にけり。又宮ノ内藏大輔は、三村孫太郎が家來有木平内と云者に名乘り合せ、無手と引組み平内を取て伏せ、頸かき切て捨たりけり。平内も剛の者にて下より透間なく二刀刺す。内藏大輔二町計は引退しが、是も同時に果にけり。其日の軍は、城内の戰ひ稠しければ、寄手の軍兵死する者數多也。流石の大將是程の小城一つになじかはひるむべき、翌日より仕寄せを付け大鐵炮を舁ぎ寄せ、二十九日寅刻には數千騎四方の山に打上り、思々の旗を立て、太皷*二を打て閧を噇とぞ上にけり。城内の勢少もひるまず、鐵炮矢石如レ雨放ちかくる。寄手は猛勢なれば彌々不レ屈、城際に跡を並べ、屛をきしつて持楯をつき、息をも不レ繼責寄すれば、大晦日の夜半計に落城す。去れども彼一族は恙なく取退きけり。鷄頭の城も、明れば天正三年正月朔日に松山へこそ落みけれ。其勢雷霆の響く如くなりしかば、松山勢大半色を失ひ、小屋中の人夫等皆震ひをのゝく事限なし。元親一身の覺悟故、かく成行くぞいたましき。

※一、集覽本譲葉城を杠葉城に作る。

※二、又矢落する者もあり漸く殘る云々(イ)

※三、別本石持或は石摺に作る

※四、死生は不知四人矢庭に射伏せたり(イ)

新見譲葉※一城落之事附流刑之事

明れば天正三年の元三七ケ日も打過ぐれば、去らば年始に新見の城を責て、新年の慶賀せんと押寄たり。此譲葉の城主三村元範は元親の弟也。縦へ松山は落城すと云へ共、此城は不危。其地利は天より釣たるに不異、人の登る便りなければ、無數の名城也。然るに元範、一人當千と賴み思はれける富屋大炊之助・會爾(爾カ)・八田以下忽に變て、正月八日の巳の刻ばかり、敵を諸丸に引入れ、端丸に火をかけ、一同本丸に取詰めしかば、元範少も不屈、各我に忠義を存せん者は今此時ぞと云へば、勇士七十騎ばかり物具ひしノ＼と堅めて、元範と一所に死を決する覺悟にて出立たり。元範彌々心強く思ひ、扉を開き討て出、鑓を合し突崩す事兩三度、漸く其日の戌の刻に成にけり。元範の郎徒或は手負ひ或は疲れ(戰闘イ)、大半死失せたり。中には甲を脱て降人に出る者も有り。漸く※二殘る兵十人計に討成され、元範も終日の戰ひに精力盡て息を繼て居らるゝ所に、伊勢の入道と云ふ古老の義を存する者立寄て、腹を切給ふ共、打込の人數と云ひ、夜中と云ひ、分明に人の知る事有るべからず。又夜明る迄は難堪。一先落給はゞ、定て三浦貞廣は年來の御知音なれば、此火さきを見て途中迄御迎に不出事はあらじと、氣色を背(負イ)て諫め、石指※三と云在所へ一里計引退き休らふ所に、藝州の武士多治部雅樂頭五十餘騎にて押寄たり。上は雲に聳え(前は(イ))峨々たる岩なれば、可押入様なくして、鎗長刀をひらめかし喚き叫べ共、靜り返て居ける所に、(寄手の中より(イ))太田と名乘て荒者一騎進みけるを、三村左(今イ)助は平生弓を得たれば、火急の退口なれ共、塗籠籐の弓の曲高なるに、當國に逸る國重が鍛へたる鋒(トガリ)矢五つ箙に指て持たれば、打番ひ※四(終滿始筈(イ))好曳て兵と放ち、眞先に進みたる石州の住人大田源八が太股を射通す。殘る(テイ)矢にても即時に四人射ふせたり。扨元範の前に跪き、御暇乞候とて、腹かき切て失にけり。根古屋千番(番イ)以下は切て出て、或は敵と引組て差違て死するもあり、或は太刀を打折て

*一、少しは心懸りにもあらんずらんと(イ)
*二、一本戯れ言に取成し呵々と大笑して云々

引も有り。然所に伊勢の入道は進み出、大音にて云けるは、元範此岩の中に籠り給ふと思ひ、斯く手痛くは責るか、元範は松山を心懸て疾く石盤口へ退しか共、落延び給はん間踏堪ゆべしとて(堪へんと思ひイ)我々四五人殘居て候也と云へば、各(要イ)とても可ㇾ遁か、早く參候はんと寄手我先にと差向ふ。伊勢の入道走り向ふ(寄りイ)敵の弓手の腕を切て落し、無手と組ける所に、後より安原顏(彦イ)左衛門に組伏られ、伊勢の入道は果にけり。扨、元範は太刀を拔きから〱と打笑ひ、只今伊勢入道某が事をちんじ、松山へ退くと云へ共、爰に殘て候也。吾と思はん人々は最後の働き見よやと云へば、吾先にと進み寄る。手本に進む兵を一人切伏せ、三人に手を負せ、其透間に腹切らんと見廻す所を、遠矢に射ける鋒矢、咽輪の外れ(玉懸の首の下(イ))に篦深に立て臥す所を、備後の住人東江平内首を掻落す。痛ましき哉。落城前の日中餘り覺束なく思ひ、女子童迄引集め養食を與へ、人々言ひ樣など問ひ給へ共、本より不ㇾ知事なれば、左右答へる事もなし。誠に負薪の言と、廊廟の語と、黄石公が書にも有と後にぞ思ひ合せける。翌日八日の早旦には、近習の者共に夢物語りをぞせられける。今曉の夢に、某が頸(首イ)を某實檢すと見つる事こそ不思議なれ。聖人に夢なしと云へ共、某は聖人に非ずと、*一少し心にもや懸らんと覺ゆる所に、流石洞濟兩家の禪意をも問尋あれば、*二戯れに取なして大笑ひして云く、如何樣存命の程久しかじらと、女中へも暇乞とて重代の太刀などを送り、其外近習の者共まで、馴染たる言葉の末も今日までとこそ覺ゆれとて、盃二三返巡しける。折節敵の火矢鐵炮雨の如し。去れば三日の內に、元範の首を則輝元の陣に送りける。夢の前表こそは不思議なれ。頓て、元範の首を弟實親の方へ送りける。心は、外には實親の悲歎想ひやる由にて、內意は城を弱らせ、實親に力を落させん爲也。(爲の計略なり(イ))彼の頸(首イ)鬼の身の城近く迄到來すれば、實親大に怒り、元範存生の時は孝悌の道をも盡せり。生を轉じて以後は追善にしくは有まじ。白骨に對する事思ひも不ㇾ寄とて、花光寺の會下に追返し、きらびやかに葬送したりける。藝陣は成羽に越年し、日々に吉左右告げ來れば、酒宴遊興にて正

*一、軍書にも大軍は莫レ掌(侮カ)小敵小軍は莫レ怖大敵と云へば非レ可レ侮とて扱に懸て同十九日云々(イ)

*二、運命の果なるらんと人々奇み侍りけり(イ)

*三、誠に吉語にも生而於二一期之一捕二死而不レ栄一、い如レ留二名於後世一と成議あつて臨ょゝ(イ)

月十五日を迯る。十六日の未明には惣陣を鬼の身表へ替へ、羽入道・荒手・水の内・箕腰山・鬼の身の山下五里四方は、野も山も田畑水の上迄も、尺寸の地もなく取塞ぐ。明れば十七日、必本陣よりの下知にもあらざるに、多勢なれば誰魁ともなく、一萬五千騎ばかり荒手の城へ押寄す。彼城主河西も元親一族にて、元より堅固なる城(同して好き城(イ))なれば、なじかは無體にとら(擒にせら(イ))るべき。寄手散々に追ひまくられ、士卒數多討死す。此由輝元聞き給ひ、數ならん山とは云へども*一勿侮二小敵一とて扱をかけ、同十九日夜半前に、備前の兒島へ流刑せらる。翌日二十日美袋の城主民部丞忠秀も、川西と一所に兒島へとぞ聞えける。爰に石川源左衞門尉久式は、元親妹聟なりけるが、元親備前に遺恨を含むも、亡父家親の爲なれば正き舅の敵也。如之先久智妙善寺の合戰に討果てしかば、彼と云ひ此と云ひ、鬱憤更に不淺とて、一門妻子を引つれ上下三百八計にて、高山を打捨て是も松山の城へ籠りけり。運*二の果とぞ覺えける。

山田鬼身城沒落之事

正月二十三日、藝州鬼の身の城に押寄せ、七重八重に取圍て、鹿垣を結て、晝夜四十日の間息をも不レ繼責戰ふ。斯る所に明石與次郎と云者、元親譜代の者也。鬼の身の城主(イ)實親は元親の舍弟なれば、此與次郎を添へ置きたり。此者大敵に驚くか、藝陣と心を合せぬると見ゆれば、城中の男女大に周章騒ぐ。實親混雜を靜むれども、はや女性幼き者共は、鞋をはき袂に物を入れ、此彼に奔走す。實親是を見て、扱は制するに及びがたし。其上時刻移らば猶以て明石一黨の者共出で來るべし。唯我一身を捨て、萬人の命を助くべきには不レ過と思ひ、敵將へ使者を以て申されけるは、實親一人腹切らば、籠る所の軍兵共扶け置かるべきや。某申條詐りなく分明に仰を給り候へかし。一命を捨て家僕共の恩賞に行ひ度由被レ申しかば、藝州の大將泪を流し、武の道斯こそ有るべけれ*三と感じて、則返書

*一、春花秋日を待に不異無慚なりける云々（イ）

*二、太刀半弓鎧逆首懸袋弓指鎗繪替の類云々（イ）

を認め使者を返し、諸人の命を助けらる。實親返書を見て安堵の思ひをなす。君子に二言なければ、此上は何の疑か可有。され共松山より付け置るゝ武士共、其外一家の被官見捨たる様に聞え、元親に誹せらるゝ事もや有らんと、松山へ一書を殘し置き、其外老母へ別の文、哀を催す次第也。去らばとて正月二十九日辰の刻に、自害の模様有しかば、郎徒共相集り、吾身命の拘かる事のみ悅び、主君實親の臨終を急ぐ事無*一慚也ける有樣也。城中の面々物具して三百餘騎、廣庭に居流たり。實親諸軍士に對し、今度各粉骨の働き二世迄も忘れがたく、運を開くに於ては恩賞可ニ相計一心底も今は空く成果てゝ、他家に俸祿を受られん事こそほいなけれとて、鎧小手臑當を右の脇に脱置て、女性幼き者にあやしき［なイ］目は見せじとて二の丸へ下し［りイ］、近習の者共［兵イ］を見廻し、累年の馴染今度の働き報謝しがたし。夫々に*二武具繪替の類形見に賦るべしと有けれど、早散々に奪取り一物もなければ、廣瀬引合せと云紙を取寄せ、一重宛賦りて重疊の上に座し、西に向ひ合レ手て南無西方極樂教主の如來、父の爲に切る腹なれば如來も濟度し給ふべし。唯今先父源清公と一つ蓮臺に迎へ給へと、高聲に念佛三遍唱へ、大脇指に中卷して左の脇に撞立て、右の脇に引廻し、柄も拳も碎けよと、眞中に押込み十文字に切れば、荒木右京之進と云古老の者立寄り首を打落し、其身も髻切て死骸に添へたり。實親二十の春の花、未だ初春の頃なれば、莟ながらの落花こそ哀とこそは覺えけれ。斯りける所に、生年十六歲に成ける藤若と云ふ小者一人末座に居て、さめ〴〵と落淚しけるが、御供の旁々［証］一人も見えずと云ひも不レ敢、太刀を拔き敵陣にかけ込み、宗徒の勇士二三人に手を負せ、本の所へ欠戻りて實親の死骸に倚り懸り、腹掻切て失にけり。貴賤男女に至る迄、藤若が心底を感ぜずと云ふ者なし。其後二月下旬までは、城郭を修補し、城主を差居へ、二十八日には輝元屋形に入にけり。

松山軍之事

三月朔日には、隆景を初め諸軍勢成羽へ陣を移し、諸方をさげすみける所に、松山の勢廣瀬の陣屋へ馳せ出て、藝州安國寺の僧樸首座其外數輩討果しければ、藝州の大將大に驚き、さては此時雌雄を不レ決ば、所々の蜂起眼前たるべし。去れば彼陣屋打破らんと、三月十六日卯の刻に、阿部川に打望み玉の渡・四條原・魚梁庭三口へ轡を並べ、一度に颯と打渡し、鷄足山に陣取り、士卒七八十計馳下り所々に放火しければ、廣瀬の陣屋可レ保に非ず。軍士松山を目がけて引退り。松山よりは屈強の兵共を坂の麓に八百騎ばかり馳下し、初の程は遠矢に少々射けるが、双方次第に練り寄り鎗屆にて相戰ふ。其間に八幡の上に陣取たる藝州の兵を見かけ、松山よりは高陣の後を忍出て近々と差寄れ共、藝陣は夢にも不レ知、賴久寺の上へ寄向ふ所に、後より鐵炮二百挺計不意に放ち懸くれば、敵陣肝をけし混亂して*一四角八方に颯と引く。松山よりは勝に乘て追散し追まくり、鷄足山の麓迄責寄せて鋒より火を散してぞ戰ひける。三村親成が勢初め、諸卒の手負討死する者數を不レ知。松山勢には、神原六郎左衛門尉其外士卒數多討死す。漸く薄暮に及びて双方相引に引退きけり。扨四月四日には、松山より多氣の庄大離の陣屋へ馳出づ。此陣屋每度得レ利、此時多勢を見かけ自ら放レ火四日辰の刻に灰燼と成す。藝陣は多勢也と云へ共曾て案内を不レ知、味方の勢は小勢なれ共嶮易の通路能く知れば、四日申の刻には敵陣紛々紜々として足を亂し*二ける所に、備後の國の住人楢崎顏左衛門豐景・同彈正忠元兼・木梨元恒・三村親成等取て返し防ぎ戰ふ。其間に諸卒無レ恙（渾々と（イ））して引退す。暮方に後陣より後れて通る人夫共、或は追散され或は討果され陣具多くは城内へ奪取りしかば、籠城の獅にて、少の事をも大に悦び、老若男女さゝやきければども、元親は唯默然*三として、閫に入ても帶をも不レ解、興あれ共酒をも不レ飲、軍の工夫の外他事なしとこそ見えにけれ。軍士に酒を給はれば、士卒彌々情を感ず。傳へ聞く、唐の越王勾踐伐レ吳時、醇酒一器を江の上流に注ぎ士卒をして飮ましむれば、皆其情に醉ふとかや。或時近習へ語り給ふは、正月朔日の夢に、一つ閫にて手をぞ打ちけると、亦三

*一、しどろもどろに混亂して（イ）
*二、足を亂さんとせし所に（イ）
*三、唯其心肅然として（イ）

※一、舌を震ひてぞ感じけろ（イ）
※二、合戰を混へ挑め共藝陣嘗て取合はず（イ）
※三、阿部川西の野の意
※四、又河原六郎右エ門直久と云ふ浪人あり云々（イ）
※五、以下小早川隆景は云々迄別本になし

日の曉の夢には、みかさのまして烏のかよはずと、如何樣不思議の句也と皆一同に云あへり。扨も數度の合戰に、敵味方粉骨碎身の働き、樊噲張良も消レ肝有樣也。委く記すに不レ遑。輕部治部・進藤掃部・布施左衛門太夫・同內藏助・渡部・神原・矢內以下、其外宗徒の兵討死の士卒不レ知レ數。寄手の兵には、家近十郎・神津原・梶屋・難波・大槻數多討死す。是は近里の者なれば往々に記せり。其外備藝防長の兵、此役にて果てし事不レ可二勝計一。松山通路の所は、石蟹・唐松・宍田・手の庄・稻田・中野・野山・多氣の庄・古瀨・河面に至る迄、日々夜々に相戰ひ、討取る所の首數十、十五不レ記日ゝ無かりけり。藝陣小勢ならば保つべきにあらね共※一、本陣には通路夜討の噂もなく、彌々武威盛に募るは、大軍とは云ひながら、名大將の德也と皆舌をぞ震ひける。

藝陣薙レ麥事附松山勢心替の事

四月七日には、松山の乾に當て河西の寺山と云ふ古城、北山へ惣陣を移し、古瀨東西の麥を薙ぎけり。松山城內よりは、爰彼に馳出て混ら※二合戰を懸くると云へ共、寄手嘗て取合はず。口羽・兒玉・井上三人一樣に云ひけるは、城中の形勢を考へ見るに、兵粮若自由ならば態とも崩折れたる樣に仕成すべき所に、混ら合戰を好む體は如何樣落城近かる可く、所詮引退けと下知すれば※三、城內の者共は此謀を不レ知、彌々緊く噪ぎ立ける。敵陣は白地と云ふ所へ陣を移し、阿部西野の麥殘りなく薙ぎけり。暫く在陣有て四月二十四日、藝陣不レ殘成羽へ打入る。松山には息をつき安堵する所に、拽レ地築地上げ馬場を作り、長陣の支度しければ、松山籠城の兵案の外に思ひ、打寄り二心なき樣を相語る。抑、此城は要害能く、水卓散也と太平記にも記せば、不二容易一山也。明春迄は持堪べしと勵レ義盡レ忠、死を一擧に可レ決と賴母敷見えたる所に、元親譜代の郎等に※五竹井宗左衛門尉直定、河原六郎※四左衛門尉直久と云者あり。強て比興をたくむべきにはあらざれ共、初め元親思立れ、一時も今戰國の

*一、以下五行別本には時々間牒を入れしかば、元来彼二人は志變へ易き者にて忽に謀る。元親略々察しけるにより兩人の者ども石川源左衛門久式を頼み無二心由云々」とあり
*二、別本「僧に三人」備中集成志「一僧に小者二三人」とあり
*三、以下別本「彼返り忠の者共久式守禦の天神の丸に法印の在ける所へ」云々

最中にて國の力も弱く、四方に敵滿ちて候へば、能々御思案所要に奉ㇾ存と異見申上げけれ共、其後元親父子大きに機嫌を背きければ、親成に内縁有し者どもなれば、何とやらん少は隔心にもや見ゆらん。今度籠城にも出丸の一つも必預けらるべき身なれ共、左なければ、心中には恨める心地にて居たる折節、小早川隆景は西國無双の大將にて、勇氣智謀相兼たり。親成を使りとして、若此時忠節を盡さゞれば未來に至る迄毛頭疎略無ㇾ之と、熊野の牛王に誓紙をして兩人へ密に被ㇾ申入ㇾたりければ、彼の二人元來心淺き者なれば、終に志を變じけるこそ無ㇾ是非ㇾけれ。是とても時至らぬ儀を思立れ、終に敵の足を踏入れぬ國なるに、俄に大軍に被ㇾ押入ㇾて方々の城々も忠節の甲斐もなく、籠の鳥をしむる心地して諸人心得がたく衆議一味せざる故也。去は天の時不ㇾ如ㇾ地之利ㇾ、地の利は不ㇾ如ㇾ人之和ㇾと、古人の言葉今割符の如く也。元親も兩人の色略々察し給ふにより、此者共(兩人の者イ)石川久式を頼み無ㇾ別心ㇾ由本丸へ達し給へと歎けば、久式眞と心得井山の雄西堂を伴ひ(伴てイ)小松山へぞ上りける。久式は平生無ㇾ油斷ㇾ軍將にて、本丸へ僕*二二三人召連れ上りける。頃は五月二十日巳の刻計の事なるに、手勢三十人討殘し置き用心繁くすと云へ共、誠に家國の興亡は自ら有ㇾ時とこそ覺えけれ。彼*三者共より久式守禦の天神丸を可ㇾ討との略なれば、久式留守を窺ひ天神丸に法印の有ける所へ送るとて、人夫(僕夫イ)に野菜を持せ遣す。門の警固、武略とは知ず扉を開て入れけるに、竹井が被官大槻源内・小林亦(又イ)三郎透間なく走入り、久式が妻子を捕へたり。居合しける者共二三十人、すはや遁すなと聲をかけ、或は鐔本を甘(寛)げ或は鎗薙刀(鎗長刀イ)を提げ一同に懸りけれ共、主君の妻子を人質に取らるれば、番の者共手を失ひ、椽の上に飛上り飛下り進退已に窮れり。敵方には相圖(合)の聲を聞き土井(居イ)・工藤・田中・蜂屋・肥田・土師・神原以下數百人、天神丸に押入り鬨を噇とぞ上にける。去れ共本丸には少も不ㇾ驚、元親を初め物具堅めて件の奴原心替りしたるらん、大松山三本松の者共はよも替る事は非じと云へば、石川久式は天神丸の守禦と云ひ、妻子共の行末と云ひ覺束なく思ひつゝ、鐘の上帯しめながら

相畑に馳向ふ。元親屹と見て、暫く御待候へ。大松山の勢を可ニ相催一と草摺を取て引留む。久式心はせきあへね共、勢の寄をぞ待居ける。敗軍の有様は目もあてられぬ次第也。

松山落城之事

斯て大松山の守禦三村左馬助親重●大兵衛尉親當、三本松の守禦親氏、佐内丸の守禦三村助左衛門尉親友●法重六郎左衛門●同右馬之介●河上孫九郎●渡邊左京之進一騎當千の兵へ、早使をたて申遣しけるは、天神丸へ今日可ニ押入一條、早く陣具を調へ馳出らるべし。渡邊左京之進は河上因幡が丸に放火し、一門妻子を大松山へ落ませよ。相畑へは火矢を射懸くべし。早々天神山へ可レ寄と、大松山其外渡邊平三●同藤内●平松、西は大强下原邊迄相觸れけり。各一等の返事には、主君の爲死を致す事塵芥とも不レ存、但責口違はゞ粉骨の働き御覽に及ぼしがたき也。是御暇乞にて候也と早速御返事申し、物の具かためて出立たり。然所に大松山●三本松の間に小屋五六百間有り。其中の男女俄にふためき騷ぎけり。こは如何にと見る所に、老人立出て云ひけるは、天神丸を責落す共今日の生涯明日にも不レ延、早敵數千騎甲の星を並て岸根に押寄す。魚梁庭の前後に旗三流飜るは、定て隆景にて有らん。天神丸も彌々勝にのるべし。運を開かん事難かるべし。只今猛火の中に妻子從類果つべき事眼前也。先天神丸へ相與し、數千人の命を扶くるべしと評議すれば、命を扶る助言には不レ顧（傾イ）者なかりけり。中にも心剛成る者共は本丸に籠らんと、子出づれば親引留め、親出づれば妻子悲歎す。兎角しける間に三村親成押入り、抜々に人質を取る。喚叫の聲々は、偏に罪人の獄卒の手に渡るも斯やと思ひ知られたり。天神丸よりは相畑に火をかけ、火急に責めかくれば、相畑の者共は妻や子共々行きもつれ、きたなき降參をぞしたりける。其人々には樂々尾豐後守●杉三郎兵衛尉●輙（諏訪イ）所藤介●※南江備前守●※升原内藏助●※布寄●佐藤右京之進●同右京亮●石田與市左衛門●同氏備前守●神崎豐後守●同兵衛左衛門●山本

※別本南江は南郷、升原は岬原、布寄は布施に作る。

※別本、軍書にも見ニ可レ勝兆一則退レ之見ニ不レ可レ勝之粒位一莫レ進レ之と見ゆれば危き軍は云々

左馬助、其外士卒數百人、皆本丸へ弓を引く。中にも吉良常陸守・神原與三左衞門尉、妻や子供を引具して本丸へ入れり。次に芦雪と云ふ盲目の禪門あり。是も本丸へ入る。本丸には大松山の兵を第一賴みに思ふ所に、初の返事背いて皆忽に飜れば、元親大きに驚き、已に軍の評議を替へんとせし所に、馬醉木（アセビ）の守禦新山玄蕃之助家住進み出て、時日を延しては叶ふまじ。明日にも成り候はゞ敵勢彌々可レ加。今能き時節と存ずる也と云へば、元親譜代の者どもも尤と同じける所に、元親暫く思案して、天神丸の兵は多くは勢ひ得る者也。味方は大半氣を失ふ者共なれば、仕損ぜんは必定也。※危き軍は無用たるべしと云へり。時に田中藤兵衞と云ふ者進出て、軍の法は時に隨て變化すべし。今日の軍は我等に御任せ候へと不レ憚申上ければ、元親良々有て、文士は賤敎に隨ひ、國主は民口を恥よと云へばとて、曲て其儀に同じけり。然る所に軍兵三百騎惣門に聚りけり。元親も久式も共に障子瀧まで馳出で、三村與七郎・梶屋織部・田井又十郎・上田加介を始めとして、相畑の城戸より逆茂木故々に引破り、家々に火を懸け、此頃心替りして比興を現せし奴原、主君の恩を忘れたる天罰端的にてはなきか、思ひしれと罵れば、個々天神丸へ引退く。去れども本丸の兵は、一人當千と賴にかけし大松山勢、案の外に飜れば大に氣を失ひけり。危に臨ても不レ變レ心是大丈夫と云ふぞと、互に敎訓は仕合ひけれ共、已に不レ移ニ時日一藝陣本丸へ押寄すれば、叶はじとや思ひけん、二十日の暮方に小原主計・南江馬右衞門を始として、近習の者共五十餘人引退しかば、元親廣椽に躍出て聲をかく（輪イ）れども不レ顧、只一文字に相畑指して入りにけり。敵は追々に加り、猿屋・高陣・傾城が尾・松岩・院軸の林に至るまで如ニ雲霞（霧イ）一充滿せり。去れども本丸堅固に抱へければ、藝州の兵兒玉三郎左衞門尉・井上又左衞門尉密に評定す。此城三日停滯せば軍兵多可レ損。其故は元親と双レ枕討死せんと相窮めたる者計殘りたるべし。窮鼠返て猫を嚙むと云へば、今此紛れに攻め落せとて手を盡すと云へども、彌々無ニ別條一捺へたり。馬醉木は新山家住ふまへ、勢籠ヶ檀は田井長門守・同左近丞・阿部市介・田中藤兵衞・同

*一、寄せし計なるべし（イ）
*二、色を替へ様を替へて操りければ
*三、脱レ甲城を出る淺まし云々（イ）
*四、史籍集覽本備中兵亂記には遠都を「矢部」中國兵亂記には「甫城」備中集成志には「遠城」に作る
*五、誠に山雲海月の馴染なれとて（イ）

左京進・埒和木工助・野口等を始として、屈强の兵二百騎計にて控へたり。一旦には攻落すべき様もなし。藝陣重て術を替へ、二十一日の早旦には馬酔木・勢籠が檀へ先矢文を射て、其意を見んには不レ如とて、薄箟の矢に計策の狀を付て射込めば、籠城の兵共寄り集まり、是は唯たばかりて討つなるべ*一し。只々一所に腹可レ切と決定すれども、色を替へて申送りければ*二、二十一日酉の刻に弛レ弦脱レ甲降*三人にこそは出にけれ。淺間しかりし事共なり。

甫一檢校之事

爰に遠都*四と云ふ座頭あり。元來都の者也しが平家を語る事當時無双の名を得、敷島の道にも不レ暗。一年京都の騷動故、生年十八歲の時此國へ下向し、偏に元親を賴みよる。元親仁愛厚き人なれば憐みを加へ位を勾當に進め、天正二年の秋の頃檢校迄に進めて、甫一檢校とぞ號しける。彼甫一も深恩を感じ、松山籠城の由を聞て遠路の波濤を凌ぎ、天正三年中春の頃當國に下向して、國中戰場の事な*五れば夜となく晝となく山川嶮路を不レ憚、漸く松山へ忍入る。元親對面ありて、盲人の是迄の志し誠に山海を隔てし日頃風月の馴染なれとて、愁眉を開き積情を散ぜし也。斯て急なる時節なれば何れの口へなりとも忍通り、歸洛あれと進〔勸〕むれ共、さすが名殘や惜かりけん、一日二日と相延びて落城迄ぞ留れり。已に二十一日の暮方に、甫一を馬酔木より送り出す。惡黨是を見て、いざやたばかり衣裳を剝ぎ取らんとて、相語らひ送りつれて溪路を下る。麓にて惡黨共の耳語(ささや)く聲を聞付て、すはや時節到來すと心得て、暫しとて左の手をあげて、辭世かと覺えて「都にも」と五文字を唱へける所を、只一打に頸を刎る。又中村吉右衛門尉家好と云ふ亂舞の藝者元親に隨身す。是も甫一と一列に馬酔木より下りけるが、甫一の有樣を見て不レ遁とや思ひけん、走り懸り日名源六郎と云ふ者の頸丁と打落す。しれ者こそ有れとて、數十人立向ひ即時に切伏せたり。誠に一藝に名有る者共なれば不レ惜人

はなかりけり。

元親落二阿部山一事

五月二十一日の暮方に、馬酔木勢龍ヶ權の兵籠るを聞て、渡邊市郎兵衛尉、其外南江・山川兩家の者共も、懸落する者共を留る由にて、是も同く落失にけり。殘り留る人とては、吉良常陸守・同七郎左衛門・輕部・布施・三村・大藏右京亮・石川久式・雄西堂、其外八田・木村・樂々尾・山口・内田・八木・上田・梶(尾イ)屋織部・舞の彌介・同甚六・兒阿彌、總べて勇兵五十騎計なり。中にも二十四人は一間所に集り、今生の事は申に不レ及、死出の山迄御供申すべしと誓ひしかば、元親笑を含みて、君臣の道、忠義の誠、日月未レ落レ地と喜悦の色を顯せり。扨新席幷衣裳迄寄せ、腹切らんと座敷を作り盃を廻し、如何に各辭世はなきかと宣へば、芦雪と云ふ盲人計り懷中より短冊一つ取出す。元親一覽有所に、早馬酔木より鼻の丸へ火を懸け、大手より障子ヶ瀧へ燒上り、折節辰巳より吹きける風即時に吹きかけ、麓一里四方は如レ晝成りにけり。元親は只疾く敵近づけかし、腹切らんと計云ひける所に、久式押留め、一先遠島へも落行き給へ。天神高田堅固にあれば落處の賴みも候也。先一身を保ち給ひて、信長の衆約豐後の誓紙をも御守り候へかしと強て申しければ、元親あざ笑て、遠き味方の賴みも此時節は無(無益なりイ)レ之、縱へ明日は天下の主と成るとても、流石清和の始を汚す事、返す〲も口惜しかるべしと宣へば、久式、仰尤也。乍レ去名を萬代に殘すとも(※一)、屍(骨イ)の欝憤を散じたるためしはあらじ。是より船際迄は御供申すべし。自然の時を存じ、候て(イ)飛渡りの使をも求置候へと云へば、元親聞て、左もありぬべし。乍レ去某においては其儀なし。御邊は一先讃岐の方へ忍び落ちて、阿州の役(※二)、因丹を催し、重て本懷を遂げられれば草葉の影にても憤りを散せんと、心強く辭すれども、久式色をかへて、御鶴を存る故某居城をも捨退き一所に籠城す。爲レ誰にか命を惜むべき。八幡も御照覽あれ、一足も

※一、死して名を萬世に殘すとも(イ)
※二、阿州を促し因丹を催し(イ)

引まじく候と高聲に諫むれば、元親の家人どもゝ、主君の腹切らん時見捨てんも口惜かるべし。義思へば忽ち命を失ふ。所詮一先引落し、山下に見失ひたる様にして散々に可レ成と心底に思入れ、久式と一同に口を揃て諫言す。元親倩々思案して、一人の覺悟にて數人の命を失はん事も不便也。一先久式を落し置き、岸より立歸り腹可レ切と決定して、去らばとて上下一度に座敷を立つ。中にも舜の彌介は、暫くと甲を脱て彼所に捨て、跪て申けるは、某年考い候へば遠路の御供成がたし。是迄こそと云ふまゝに、鎧の袖を押しまくり、已に脇指を拔かんとす。元親屹と見て彌介が右の腕をひしと取り、我遠路を凌がんことは期しがたし。先途(某か先途イ)は此時ぞ、しばし止れと有りければ、無二是非一仰に隨へり。久式塀に手を懸けると、元親取て返し本丸へ上らんとす。久式拔かされじと引返す。家人共は兩將の綿嚙を取て押出し、二十餘人取次になつて、五月二十二日闇を返路の幸と數百尋の岩石片時の間につく。元親は細道(徑路イ)よりすべり落て、大石に當て右の肩をつき正氣已に絕んとす。一族付慕ふ者共も、跡より敵の進み來ると心は急ぐ落路の闇に、元親は早息絕えぬと見捨て、散々にこそは成りにけれ。年頃召使ひける同朋兒阿彌・中間加介は、元親退出あれども不レ知由にて夜廻りせしが、いつの間にか追付きけん、つゝと寄て元親の手を引立て肩にかけ、兒阿彌・加介・彌介・石田・內田主從六人、高橋川を打渡り阿部山差して入りにけり。二町計を行く所に又太刀の鞘走て、右の膝の口深く切りかたけり。又素足にて有りければ、左の踵を一文字に踏切り一歩みも不レ叶。元親淚を流し、天道吾をすつるか。汝等四五人は從ひたりとて何の奇特もあるまじければ、松山へ還て各一身をも立てよとて、加介に國光の長刀を賜はる。石田が親は敵方にあり、賴寄る方も有るべしとて暇を給りぬ。扨內田は數多の妻子を打捨て、是迄の比類なき働也。降人に出て妻や子供を尋ねよと兼光の刀を遣せば、三人一同に淚に咽び御返事申さゞりしが、何となく還り行く。今は兒阿彌・彌介兩人殘り、元親の手を(右左の手をイ)取て彌深く藪中へ引入れ、膝を枕にさせまゐらせ、胸より足へ摩でさすれ共、

人の心地もなければ只さめ〴〵と泣居たり。兒阿彌つく〴〵と案ずるに、氣色正くまし〳〵て、吾等最後の働をも御覽ずるにあらざれば、犬死して何かせん。落行かばやと思ひ、二十二日の戌の刻に側なる小山にかけ上り、四方を見廻す由にて終に捨てゝぞ返りける。舞の彌介に是を見て無ㇾ便思へ共、心弱くて叶ふまじ。よし〳〵爰にて自害すべし。比興成る哉御家人等、死出の山まで付慕はんと、誓ひし事も虛ら言にて、阿部山迄も不ㇾ來と獨言して徘徊せしが、又思ふ樣、昔越後の忠太光家が木曾義仲に先達て自害せし事、詮なきやうに語り傳はれば、元親存命の間は可二付慕一と思定む。明れば二十三日辰の刻に、元親氣色少し快くなり、如何に彌介、扨兒阿彌はと御尋あれば、昨日戌の刻に欠落仕る由申す。元親心細く思ひ、我世に有ん時二世までと慕ひし者共も、却て比興の魁しける所に、汝一人殘り居たる覺悟の程こそ淺からね。彌介承り、我二代の御厚恩を蒙る事誠に以て不ㇾ輕。報謝しがたしと存ずる故、更に命を不ㇾ惜、爰に存じ出せる事の候。某は松山の岸根に上り、元親と名乘て腹切るべし。其間に中津井口を目にかけて高田の方へ忍び給へと云へば、元親聞て、昔前漢の高祖の城を楚の項羽が責し時、紀信が諫に相似たりと感喜更に不ㇾ斜。我身の疵多く露命續き難し。斯く云ふ間にも如何なる下輩の手に可ㇾ懸も不ㇾ知。汝は急ぎ松山へ上り檢使を乞へ、腹切るべしとあれば、正き主君を殺す敵を迎に行く事候まじ。たとへ罷上り候共、身命助らん爲にたばかる樣に心得、言の下に可ㇾ誅と申す。尤也。其印には袂を切り可ㇾ遣。又老母の方へは鬢の髮を可ㇾ遣。若亦不二歸來一ば供佛施僧の營を賴むぞと再三進むれども、兎角の返事も不ㇾ申。明れば二十四日の早旦に又彌介を召寄せ、只疾く登城せよ。消えかゝる露の身の置所なさに付ても、益なき日を送るぞとて、理を分けてぞ口說き給へば、彌介承り、誠に敬は隨へとこそ申候へとて、御印の物御形見の鬢の髮をとりそへ、高橋川を渡りしが、幾度思返しても君を殺害の使難二心得一。所詮敵の中へ馳入り討死すべしと志し、敵陣數百人の待懸けたる眞中へ行き向へば、即時に搦取て彼の印と鬢の髮の由來を尋ねたれ

共、本(元)より思ひ定めたる事なれば、子細に不レ及唯疾く殺せと云ひ、二十六日の辰の刻に終に空敷成にけり。松柏は彰二於歳寒一(ニ)貞臣は見二於國危一と云へば、心の操正き下﨟(郎)かなと感せぬ人は無かりけり。

元親最後之事

修理進元親は彌介が討死せしとは不レ知、檢使を請來らん今や遲しと待暮す。餘りに無二覺束一思ひつゝ小高き所に上り四方を見廻せば、松山程近く見ゆる。倩〻思へば彼の山にて自害せざる事こそ今生の後悔、後生の障りとも成るべけれ。松山に尋ね寄り城主へ案内を遂げ、腹切るべしと思ひ、六月朔日夜半計に賴久寺に入り、亡父の塔頭にて腹切らんとせしかども、亦思返し、元親最後の程も不レ知と世人の云はんも可二口惜一。又松山に上りなば名もなき者に行合て、無レ由死を致さんも詮なしと思案を廻らし、自ら羽織の裾を切り小篠にはさみ、松蓮寺の後口へ忍び行て古小塚の邊に指(挿イ)置き、明れば六月二日の曙に大道の畔に憩ふ。二日巳の刻計に、樵夫一人通り過る。元親招き寄せて城内の有樣を問へば、藝州の人々御座すと答ふ。汝は松山に上りて、元親痛手を負て山路にあり。檢使を給らば出て腹切るべしと云ひ送(者イ)れと云へば、彼男恩賞を請んと、大將小早川の陣に斯と告る。去らば檢使を遣せとて、栗屋與三左衞門尉元方を始として、兒玉・栗原・三宅以下各馳せ下る。元親栗屋を見て舊友の誼あれば介錯を可レ賴。今度城中にて腹切らざる事慚愧の至に存ずる也。檢使の旁々愚意の趣隆景へ御物語候へ。今度謀叛を企る事、亡父家親の爲め宇喜多に欝憤を存ずる事、曾て以て無レ紛、吾亡父の爲なれば天道に背くにも非じ。偏に武運の薄き事を恨むる也。扨城内にて不レ果事は久式が進め(勧)によれり。一先久式を落し置き、立歸りて腹切らんとせし所に、再三家人共に被二押立一、無二是非一麓に下る也。家僕共の心には路にて見失ひたる樣にして、逃去るべしとの事也とは、今こそ思ひ當れりと、始終段々語れば、檢使の武士皆一同に感歎す。扨重ね疊の上に座し各へ盃を指し、談笑

如レ常にて、暫く座を立ち手水をつかひ、又本の座に還て栗屋を賴み硯を乞て筆を染め、最後の一首を必屆けて給はれと念頃に契約して、隆景へ書一通諸事の子細を述させらる。次に細川兵部少輔殿へ一首、

一度は都の月と思ひしに我待つ夏の雲にかくるゝ

是は年來因深き故、今度籠城以來八雲集一部贈り寄せらる。此歌書は世に稀なるを、公家中へ賴て新に書寫し下しける心の程こそやさしけれ。又竹田法印は、元親一族にて、夷洛往來の傳て每に至情ありければ、一首、

言の葉のつてのみ聞て徒に此世の夢よあはて覺めぬる

又大庭加賀殿は、輝元へ歌道の指南あり。學業多才にして交情不レ淺ば口號とて一首、

殘し置く言の葉草の影迄もあはれをかけて君ぞ問ふべき

老母へは、形見の文に候とて自筆にて認む。扨辭世の物語りあり。去る二十一日の暮方に、腹切るべしと思ひつゝ位牌を書て、其上に、

思ひしれば行歸るべき路もなし本の眞を其儘にして

と書、八雲集の內に入置しかども、無二是非一落行きて慨き日數を送りけり。末後の一句なればとて、又一首、

人といふ名をかゝる程や末の露消てぞ歸る本の雫に　前匠作一瞬源樹居士

と書留て、腰の物を拔き栗屋に渡し、帷子の襟を押しさげ、案內申時頸打たまへと詞をかけ居なほる。栗屋西へ向ひ給へと云へば、十方佛土中何れを佛土に指べきやと拔身を持ながら合掌して、鑪湯爐炭清涼殿劍樹刀山遊戲城と唱へ終て、脇指を左の脇に突立て、右の脇に引廻し、胸の下程にて柄も拳も摧けよと押入れ、聲をかくると頸を打落す。六月二日の晚景に頸を取て桶に入れ、本陣指して送り

*一、風光雪月詩歌の會共に心を慰めて誠に榮華に送りしも（イ）
*二、以下句六字別本なし
*三、以下一句八字別本なし

けるo 見る人涙を催す計也。千兵は得易く一將は難レ求と、惜まぬ人は無かりけり。

勝法師丸被レ誅事

爰に三村元親の子息勝法師丸と、石川久式の子息をば、備前國の住人伊賀左衞門尉久隆生虜り本陣へ渡しける。久式の子息をば當國井山に送られけり。勝法師丸は生年八歳也けるが、容貌甚優にして手跡他に越えたり。誠に風華雪月に[*一]、詩歌の會に心を慰めて、榮華に日を送りしも、忽昔に成果て、今は陣屋に身をやつす。思出れば古後醍醐の皇子、八歳の宮だにも愛別離苦は御座まして[*二]、

（替らずやイ）
つく〳〵と思ひくらして入相の鐘を聞にも君ぞ戀しき

と詠じ給ひし言の葉の、過ぎし[*三]昔の哀れ迄、今こそ思ひ知られたれ。已に久隆本陣に送りける時、惣金の扇に古歌を書き、勝法師丸へ參らする。（寄せらるゝイ）勝法師丸扇を開き見れば、

夢の世に幻の身の生れ來て露に宿かる霄の稲妻

と詠じ、扨は本陣に行きなば殺さるべき事必定也。脇指今まで持つならば自害すべしと後悔あれば、人々感涙を催し、助け置き出家にもなすべしと相議する所に、又番の衆中へ語りつるは、我久隆より送られし時、路にて（途中もイ）本の家人共に行逢へり。彼等乘打して君臣の禮儀を失ふよし某申せば、背かるゝ程の主人なれば一入恥辱也。各歴々前後に有りしかば乘打するは無禮也。何れも如何にとあれば、聞く人皆感じて舌をぞ震ひける。則隆景へ斯と告ぐれば隆景聞て、それ程の口才は實しからずと思ひ、又別人へ私に尋ねしかば有のまゝに語りけり。扨は扶け置かば弓矢の種なり。事六ケ敷ぞとて誅せらる。一家滅亡の時節到來なれば、實に哀れにぞ聞えける。人生識レ事憂患之始也とは勝法師丸の事成りける。石川久式・三村・大庭・吉良常陸・同七郎左衞門・布施以下迄の死期の働き驚レ目計也。或

は組討、或は指違へ、二十六日の*一日に朝の露と消失せぬ。三村右京進政親父子三人は、作州路より因州へ忍び行くとぞ聞えける。

常山城沒落附女軍之事 備前兒島の內也

六月四日成羽には諸軍勢を催し、常山表へ陣を移す。常山の城主三村上野之介高德曰ひけるは、某多年藝州に對し欝憤ある故、元親謀叛の張本は第一某也。然るに元親無下に生害に及べば、生て何の面目かあらん。一日も早く死地に可レ赴とこそ思へとて、騷ぐ氣色もなかりけり。家の子郎等取々に、一先阿波讃岐の方へも渡海あれかしと諫むれども、阿讃の沙汰は無益也。我累年眞之を賴み、既に此度人質として實子を差渡し加勢を乞ひしかども、其甲斐なければ弓矢の賴みも盡にけり。郎等どもは是を聞て、思々に駈落する者もあり、弛レ弦降參する者もあり、或は小船に取乘り樽よ梶よと云ふ間に、敵追ひかけ討果す者もあり。早散々に成りしかば、六月六日の晩景に、小早川の魁浦野兵部丞宗勝岸根に旗を上げ、先陣の兵數千人二の丸へ責入て、太刀をひらめかし鞆(ウツボ)を鳴して、鬨を噇とぞ上げたりけり。高德少しも不レ騷、命を助からんとする者こそ鬨の聲には驚くべけれ。明日の辰の刻には大矢倉にて一類腹を切り、名を後代の記錄に留むべくとて、靜り返て居たりけり。敵陣は彌々惡口し、小船に取乘り島へ渡るか、水練に入るかせば、責口の油斷に可レ成ぞとて、逆茂木をかなぐりすてをめき叫んでかゝりける。高德立出て、*たへがたき奴原哉、いで高德が最後の働き見せんと云儘に、鐵炮おつとり廣椽に躍出て、二つ玉にて透間なく放ち懸る。嫡子源五郎高透(秀イ)平生は強弓の數寄にて、筈(ツク)打たる弓を射けるが、是も共に鐵炮を放つ。高德の舍弟小七郎は、弓を打捨て切て懸り、互に聲を合せて戰ふ。手負死人十四五騎片時の間に見ゆれば、早速其日の陣を引にけり。明れば七日の曉、城內酒宴の聲聞ゆ。多くは女性の聲にて互に別を惜む盃を指す。同日辰の刻、敵軍

*一、二十六日一同に(イ)
*二、叵耐(ホナイ)なる奴原哉(イ)

へ向て一類自害の由を告ぬれば、人々我先にと出合ひたり。高徳の繼母は五十七歲、先一番に自害せし時、我世に留りて斯るうきめを見る事も、前世の業因不ㇾ淺。高徳藝州に遺恨を含み、入道せられし事をだに世に憫く思ひしに、腹切給はんを見るならば、目もくれ心も悶ゆべし。暫時も跡に殘らんより先達て自害すべしとて、椽の柱に刀の柄を巻付け、其儘行（秀イ）掛り貫ぬきける所に、高徳走寄て五逆罪恐しくは候得共とて、御頸を討落せり。扨嫡子源五郎高透生年十五歲、父高徳の御介錯を仕度候へども、跡に殘らば少年故、未練もや仕らんと心殘りにや思ひ給はん。逆にては候へ共先腹切るべしと云へば、高徳聞て、愍息ながらも神妙也とて、扇を開きあふぎながら顏（紅顏イ）をつく／＼と見て、水の泡、草もる露となさん事、後世の障共なるべしと暫く袖をぬらしける。高透（秀イ）も脆き涙を押留め、其儘雪の肌を押はだぬき、腹十文字にかき切りうつぶしに成る所を、高徳頸を打落す。舍弟の八歲に成りけるを傍に引付、肝のたばねを二つ通して押寄せたり。（通して退けらるイ）高徳の妹に十六歲に成る姫あり。藝州鼻高山の大將は高徳の弟なれば、此姫には鼻高山へ退き給へと進むれ共、思も不ㇾ寄事也とて、老母の拔ける刀にて乳のあたりを突き貫き、是も同事に自害せり。次に高徳の女房は、修理進元親の妹にて、日頃も男子に越たる勇力あり。我女性の身なりとも、そも武士の妻や子が、最後に敵一騎も不ㇾ討してやみ／＼と自害せん事、返す／＼も口惜かるべし。況や三好修理太夫從弟叛逆の一族と云ひ、女人の身成り共一軍せでは叶ふまじと、鎧取て着、上帶しめ、大刀をはき、長なる黑髮解て颯と亂し、三枚甲の緒をしめ、紅の薄衣取て着、裳を引上（衍カ）げ腰にて結び、白柄の薙刀小脇に挾て廣庭に躍出たれば、春日の局其外青女房端下に至る迄三十四餘人、是は如何成る御所存にて候ぞや。いとゞだに女人は※五障三從の罪深く、不ㇾ得二成佛一と申候に、況や修羅の罪業爭でか免れ給ふべき。唯思留り給ひて心靜に自害をせさせ給へやと、鎧の袖を控へしかば、彼の女房打笑ひ、御身達は女性の身なれば敵強ちに害すべからず。何國へも一先忍び給ひ、若自害をせさせ給ふとも念佛能く申して、

*一、同じ嵐に倡行(イ)
*二、前掲「浦野」とあり
*三、以下四字別本無し
*四、手負ふ者若干多し(イ)
*五、以下の一句十三字別本なし

後世を助かり給ふべし。自は邪正一如と立て、斯る戰場をば西方淨土とし、修羅の苦患も極樂となし候へば、何か苦かるべしと袖引放ち出行けば、我をば扨は捨て給ふかや。迚も可ㇾ散華ならば同じ嵐に誘はれて、*一死出三途の御供仕らんと、髮かき亂し鉢卷をしめ、爰や彼所に立て置きし長柄の鎗を提げて、三十餘人蒐出れば、累年芳恩の家僕共是を見て、八十三騎死を一擧に蒐出たり。寄手此形勢を見て、敵只今妻子を先立て降人に出ぬと思ふが中に、小早川の先鋒浦*二兵部丞宗勝が七百餘騎の眞中に喚て蒐入る。宗勝屹と見て、敵女人の裝束して寄來るこそ怪しけれ。是處女の如くし脫兎が功を作す謀と、孫子が秘する所、虛は實と云へるも斯る謀をや可ㇾ謂。欺かれて不覺をとるな面々と、陣を固て控へしかば、敢て敗る事あたはず。去れども屈強の勇士死を一場に輕じて*三一面目に突立たれば、寄手足を亂し疵を被り、死を致す者百餘騎、周章騷ぐ氣にのりて高德の女房、腰より銀の采配を拔出し眞前に進て、蒐け敗れ者共と大勢に制て入る。宗勝が兵流石武勇を嗜めば女人に向ふ者はなし。勇騎直に鎗を合する所に、女性傍よりつい潛てぼかと突ば、手負ふ者數を*四不ㇾ知。暫く戰ふ其間に、寄手の大勢馳寄り〳〵責戰へば、高德の兵一騎も不ㇾ殘なりにけり。*五高德の女房浦ノ兵部丞が馬前に蒐留り、大音にて罵りけるは、如何に宗勝、御邊は西國にて勇士の名を得給ふと聞く。我女人の身と云とも一勝負仕らん。そこ引給ふな浦の殿と、喚き叫で長刀を水車にまはして蒐寄せたり。兵部丞四五間計跡にすさり、いや〳〵御邊は鬼にてもあれ女也。武士の相手には成りがたしと身をかいひけば、傍なる兵五十餘騎蒐りけるを、長刀取伸べて七騎薙伏せ、薄手を負て又大音にて、女の首取んとはしすな人々と呼はり、腰より三尺七寸の太刀を拔出し、是は我家の重代國平が作也。此太刀一度先父家親に參らせ、家親秘藏他に異なると云へども、重代のよしを聞及て返し置きし太刀なれば、父家親に副ひ奉ると思ひ、身を不ㇾ放持來りし也。死後には宗勝に進ずる也。後世弔て給へやと云ひ捨てゝ、城中に蒐入りし形勢は、唯、刀八毘沙門の喜見城を守護し給ふ時、吉祥天女諸共

※以下一本、數多の頸備後の國鞆に送りさて備中の國平均せしかば各功賞を行はれけり

に、修羅を責討つ勢も、斯やと計思ひつゝ、見る人舌を不レ卷と云者なし。斯て西に向て手を合せ、我西方十萬億土の彌陀を賴むには非ず。己心の彌陀唯心の淨土今爰に現せり。嗚呼佛も如レ露亦如レ電と說き給ふ。誠に夢の世に幻の身の影留りて、露に宿かる稻妻の、早立歸る本の道、南無阿彌陀佛と念佛し、太刀を口に含て臥したるは、例し少き事ども也。扨高德も西に向ひ、南無西方敎主の如來、今日三途の苦を離れ、元親・久式・元範・實親同じ蓮臺に迎へ給へと、念佛唱る聲の中より腹掻切れば、舍弟小七郎介借〔錯〕してその身も自害し、高德の死骸に寄かゝり同じ枕に伏にけり。見る人聞く人おのづから皆淚をぞ催しける。※頓て數多の頸共を備後の國鞆の浦に送りて、扨備中國平均せしかば、各功の淺深に隨て恩賞を行はれ、毛利家の大將達歸陣あるこそ目出たけれ。

備中兵亂記　終

兒島常山軍記

一名備前常山軍記又常山落城記

兒島常山軍記

著者不詳

抑備前國兒島郡常山落城の由來をくはしくたづねけるに、其頃の城主三村上總介高德とて、代々源家忠孝の武士なり。また備中の國松山の城主、三村修理亮元親と申て高德の従弟、妻女は元親の妹なり。此度一族謀叛を企る事いはれある事なり。元來元親の父備中守家親、備前國浮田直家と不和にして、威勢をあらそひ、度々合戰に及ぶ所、終に勝負も見えざりしに、結句作州の內家親へふゝく有故、※一家親出馬して作州數ヶ城を責落し、すでに佛敎寺まで責入りしに、浮田一族發向して家親を打とり、家親（なびけイ）の嫡子元祐さい（齋）田の城にあるをうちとる。しからば當家の大敵なり。なにとぞして浮田をうちたまひ、鬱憤をはらさんと、元親・高德日夜心をくだきける。其頃の將軍はかまくら等持院尊氏十四代、源義昭公也。御兄義輝公は三好が爲にうたれさせたまひしゆゑ、密にしのび出させたまひ、尾張の國織田信長を御たのみあるに、別心なくたのまれて、大軍を以て路次のかたきを切崩し、※二二度みやこへうつし奉るといへども、都には家老村井長門を居置き諸事仕置をさせて、萬事義昭公おぼし召の儘にならざるゆゑ、なに（いつとイ）となく御中不和にして、みやこの住居もおぼつかなき御身になりたまふゆゑ、西國御下向あつて、備後の國鞆津に御座候て、毛利家（無據）を御たのみありければ、（不イ）不審なる事とはおもひながらも、代々の御家をうやまひたてまつり、ほどなく頼まれ參らせ、近國を催しけるに、御下知をそむくものもなく、※三ことごとく武命にしたがひ、御歸洛あるよしきこえければ、信長おどろき安からぬ事どもなりとて、元親方（防げイ）へ使者を立（節イ）、密に申遣はしけるは、此度將軍へしたがはず、西國往來の通路をふさぎ、上洛をふせ當家へ忠良あるにおいては、やがて大軍にて

※一、家親父子出馬して（イ）

※二、都へ御供申御本意を加手させ奉ると信長天下に心有て云々（イ）

※三、中國悉く云々（イ）

出馬して、中國筋を追伏、本望を達し、備中備後兩國の分は元親支配たるべし。其上何事に寄らず末代までも、如在あるまじくと、かたく誓約を以て頼まれければ、元親一類あつまり、是社ねがふ所のさいはひかな。此度將軍へ力をあはせ、みやこへ本意あるとても、人並の事にてわけて忠にもなるまじく、殊さら浮田も御催（催促イ）しにしたがひなば、我身の鬱憤達せん事かなひがたし。無益の事*一とてもいそぎ當家は引かへて、運の末なる將軍を討奉り、信長へ忠良をはげみ、助勢を以て浮田を亡し、數年の無念此時に達すべしと、おの／＼評議きはまる。中にも成羽の城主三村孫兵衛ノ尉義成（親）、嫡子孫太郎義彙はかつて此義にくみせず。父の怨を報ずるになんぞ他の力を頼まんや。およそ武士の道は忠と孝とにきはまりて、仁義をもとゝせば、たとへ君不足といへども、*二臣たるべきは天地の道たるべし。信長時の難をのがれんとて、當家をかたらふ。虎狼のはかり事にしたがひ、將軍家へ敵*五對し、一家末代不義朝敵逆心（臣）の名を得ん事、口惜き次第なり。信長はじめは將軍の威勢をかりて、御畿内をしたがへ、後には將軍家を輕んじたてまつり、終にみやこを追出す。逆心のはたらき我儘なるふるまひ、人たるの法にあらず。斯樣の人にたのみをかけては無益の事にて候と、義理明に諫言す。良藥は口に苦く金言耳にさかふとかや。元親をはじめ、舍弟宮內少輔、上田孫次郎に至るまで承引せず。當家運をひらくべき時來りぬと存る所に、一族の身としてたちまちにひるがへる。奇怪成る次第かな、若利運なりがたくばかねて覺悟の所なりとて、以の外の立腹あり。親成父子は*三ちからなく、ほう／＼成羽にかへらるゝ。其座に有合す諸ざむらい兎角親成を呼返し、一家和睦あつてしかるべしと、色々意見申せども、元親（兄弟イ）一向同心せず。所詮かやうの臆病者、味方にあつては勝利なりがたし。同心せぬこそさいはひなりとぞいひければ、*四高德申樣、もつともかれらが同心せぬを其儘にて指置候はゞ、將軍家へざんそうし、逆寄にするはしれたる事、先づ信長へ訴へ加勢を乞ひ、手合せに成羽の城を責落し、義成父子に腹切らせ、それより浮田を討ほろぼし、西國往來さしふさぎ

*一、事どもなり。愈々當家は云々（イ）

*二、臣可足を道とせば天地の味方たるべし（イ）

*三、無力成羽に社は歸らるゝ（イ）

*四、上野之介高德申樣尤かれらが同心せぬ迄とて其儘に差置かば云々（イ）

*一、御味方の御受申先松山を責落すべしと頓て云々(イ)
*二、事なれども今やなれどよせ來ろべしとは思ひもよらず(イ)
*三、軍兵共七八騎半死半生云々(イ)
*四、勝どき上げて成羽の城云々(イ)
*五、宇藤木に城り岸根にはたを上げ(イ)

然るべしと申されれば、此義もつとも然るべしと、いそぎ信長へ使者を立、軍の用意ときこえしは、にが〳〵敷くこそみえにける。是は扨置、三村孫兵衛尉父子は成羽の城に立かへり、やすからぬ事とおもひながらも、一族のざんそうもなりがたく(備促イ)、捨置く時は元親高德責來るは必定なり。いかゞはせんとおもふ所へ、將軍より密かに御頼のもよふし、是天道の御惠とよろこびいさみ*一御請申、先づ松山を責落し頓て(きんカ)加勢を乞候得ば、藝州備後の兩勢都合七千三百餘騎、天正三年五月二十四日午の刻、松山へ押寄せときの聲をぞあげにける。城内にも閧を合せ、我先にと出むかひ、爰をせんどゝたゝかひける。城にも兼て期したる事なれば*二、今押よせ來るべしとはおもひながらも、よう〳〵手勢百騎ばかり、九牛が一毛にも足らざる小勢、爰かしこに討ちちらされ、舍弟宮内(宮内少輔イ)討れければ、元親は妻子もろともに夜にまぎれ、いづくともなく落失せけり。あくれば二十五日早天に、寄手*三は城にみだれ入て見れば、はや大將は行衛もしれず。のこるものとてはきのふの軍に深手を負し軍兵共、半死半生七八騎、前後をぼうじ伏し居たり。城外にはうたれし死人四五騎(四五十人イ)、此外には犬猫さへもあらざれば、城に火をかけ、成羽の城*四に歸陣あり。其後二十八日元親阿部山にあるよしきこえければ、藝州勢おしよせ、同六月四日常山へむかはるゝ。大將三村孫兵衛尉親成(しげなり)、二千餘騎にて彥崎に陣を取り、嫡子孫太郎親兼(宮)は宇野津(宇津イ)・迫川に陣を取り、一千三百餘騎にて向はるゝ。小早川伊豆守光重は山村に陣を取り、一千餘騎を二手にわけ、前備は豐岡まで責寄ける。浦野兵部尉宗勝は二千餘騎にて、用吉より宇藤木に*五旗をあげ、双方相圖の時を合せ、同六日辰の刻大手の木戸よりみだれ入り、二の丸に責寄せ閧をどつとぞあげにける。高德少しもさわがず、命を助からんとおもふ者こそ、鯨波の聲にもおどろくべけれ。明日の辰の刻には大矢倉にて、一類諸ともはらを切り、名を後代の記錄にとゞむべしと、しづまりかへつて居たりける。城中にときを合せざるは、いか樣小舟にのりて島渡り

※一、以下次行の明れば五十一字本書旅本脱落に付別本に依り補入す
※二、備中兵亂記總母に作る本書亦後段高德の妹の所にて老母と云へるを見れば此處明に誤記なるべし

などせば、責口の油斷と成べしとて、麓の茂會路に火をかけ、逆茂木をかなぐり捨て、をめきさけんで責入ける。高德立出、多年それがし藝州に對し欝憤有る故、元親謀叛の張本はそれがしなり。然所に元親無下に生害に及び、我いきて何の面目かあらん。一日も早く死地におもむくべしとこそはおもへ。いで〱最期のはたらき見せんとて、鎧なげかけ腹帶〆、きやうもんし（樣イ）のきをたゝみ鉢卷し、鐵炮追取て廣ゑんにをどり出、二ッ玉にてすき間もなく放ちかくる。嫡子源五郎高秀は平生强弓を好み、銀のつゝ打たる弓を射る。是も又鐵炮を放ち、舍弟小七郎高重は三人張に十三連（京イ）三つ伏取て引〆、差詰引詰さん〲に射る。※一斯て城内の兵共、敵人に打紛れ二十騎三十騎づゝ麓迄落行きしが、こまれ、其日の陣は引にける。明れば七日のあかつき、城内酒宴の聲きこゆ。多くゝかしこにさゝへられ、手負死人數を知らず。明れば七日のあかつき、城内酒宴の聲きこゆ。多くは女（女性イ）の聲にて、たがひにわかれをしとぞ（むとこそイ）おもはれける。同辰の刻敵陣にむかひ、一類生害の由告ければ、人々我先にと出合ければ、高德の叔※二母五十七歲なる、先づ一番に自害をせんとて、我世にとゞまりてかゝる浮目をみる事も、生々世々の業因淺からず。高德藝州に遺恨を含み入道せられし事をだにも、世にもものうくおもひしに、腹きるを見るならば、目くれ心もくらむべし。しばしも跡にのこらんより、先達て自害を遂べきと、ゑんばしらにかたなのつかをまき付、其儘行當（聲イ）り貫きける。高德走りより五逆の罪おそろしく候得どもとて、御首を打落す。嫡子生年十五歲、父上の御介錯仕度候得ども、少年ゆゑ跡にのこらば、御心が（よろこびイ）ゝりにおぼし召たまふべし。逆さまにては候得ども、御先へはら仕るといひければ、高德きこし召、扇子を開きあふぎ立、我が子ながらも神妙なりとて、顏つく〲打ながめ、さかりもまたぬ花紅葉、今朝の嵐にちりはつる。哀れはかなき世のならひと、しばし袖をぞひたさるゝ。高秀も共になみだにむせびしが、三途の先がけ仕ると、おしはだぬぎ腹十文字にかききれば、高德立つより首打落し、二男八歲になりけるを取て引よせ二刀さ

し通し押伏たり。高德の妹に十六歲になり玉ふ姬君、これは藝州鼻高山の大將は高德の弟なれば、此君一人是へ立のきたまへと申されければ、思ひ寄らざる事なりとて、老母の貫きたまふ刀にて、乳のあたりをつきつらぬき、おなじ枕にふしたまふ。高德の妻女三十三歲になり玉ふは、男に越えたる武勇也。われ武士の妻となり、最期にかたき一騎もうたずして、やみ／＼と自害せん事口惜き次第なり。既に三好が從弟叛逆の一類たる身、女たりとも一軍（いくさ）せで叶ふまじきと、鎧取て着、上帶〆、三尺七寸の太刀を帶し、たけとひとしき黑髮を*一打亂し、三枚甲の緖（居イ）をむすび、くれなゐの薄衣上は打かけ、すそ引あげ腰にてむすび、白柄の長刀小脇にかいこみ、廣ゑんにをどり出玉ふ。春日の局其外女房はしたにいたるまで、皆々つゞいて飛でおり、こはいかなる御事ぞや。さなきだに女（文人イ）はつみ深く、成佛せずと承はる。殊更修羅の業因はいかでまぬがれたまふべき。只々思ひとゞまりたまひ、心靜に御自害をとげさせたまへやと、鎧のそでにとりつけば、から／＼と打笑ひ、御身達は女性の事*二いづくへなりとも一先しのびたまへ。自は邪正同一如とくわんねんし、此戰場を西方の淨土として、修羅のくるしみも極樂のいとなみとおもへば、なにかくるしかるべきと、そで振切て出行きたまへば、とても散るべき花ならば、おなじ嵐にさそはれて、死出三途のさきがけ（御供イ）せんと、髮とき亂しはちまきし、爰やかしこにたて置し長柄（長イ）の長刀引提げて、三十四人の女房、我先にとかけ出づれば、累年厚（芳イ）恩の家僕共*三是を見て、八十三人死を一統に極め、我おとらじとかけ出る。敵此有樣を見て、城内に妻子を先立出るとて、差控へ居たる所に、小早川の先陣浦野兵部（尉イ）宗勝、七百餘騎の眞中へかけ入る、大將宗勝下知して曰、城内女人にさまをかへ、寄手をあざむくと覺たり。是處女の如くし脫兎の功を作す計略と、孫子の秘する所、あなどつて不覺（場イ）を取るな兵共と、陣を堅めて控へしかば、あへて破るゝ事もなし。されども屈究の勇士死を一統に輕んじ、一面に突立れば、寄手は足を亂し、討るゝ者數十八（百人イ）、疵を蒙る者數をしらず。此勢に乘じて高德の妻女、腰なる銀のさいは

*一、解て颯と打亂し（イ）
*二、事なれば敵あながちに害すべからず何國へとも云々（イ）
*三、先達て降人に出るとて見ゆるとて差控へ云々（イ）

*一、宗勝御へんは西國一の名を得たる勇士とかや(イ)
*二、決せんとしきたい有り其内にも(イ)
*三、幻の身の面影(イ)
*四、件の太刀なるロにくはへうつぶしに成て失給ふ(イ)
*五、本國に立歸る一族の者共迄(イ)
*六、其後川留丹後守城御預けにて居住有り後城主極り戸川云々(イ)

いとり出し、眞先にすゝんで、かけ破れやもの者共と、大勢にかけ合ひ、いきをもつかずたゝかひける。さすがの宗勝武勇をたしなめば、女に向ふ者もなく、城中の兵共、おもてもふらずたゝかへども、多勢に無勢叶はず社(こそ)、のこりすくなにうたれける。妻女も今は是迄と、大將兵部が馬のまへにかけむかひ、*一宗勝は西國にかくれなき勇士とかや。我女なれども一勝負仕らん。そこ引玉ふな浦野殿と、長刀水車のごとくふり廻し、只一文字にかゝり玉ふ。宗勝引しさり、いや〳〵御身つよきにせよ、女性なれば相手にはなりがたし。高德と勝負を決せんといふ内にも、*二横合より雜兵四五騎(四五十騎イ)かゝりけるを、長刀追取のべ七八騎なぎふせ、薄手負ひながら、そこのき玉へ人々と、腰なる刀ぬき出し、是は我が家重代の、國平が打たる名作なり。當家より父家親に參らせし秘藏、他に異なりしが、重代のよしききたまひ、返し置れし太刀なれば、父上に添ひ奉ると思ひ身を離さず持きたりしが、死後には宗勝に參らする。後世弔ひてたまはれといひすてゝ、城内にかけ入し有樣、只刀八毘沙門の喜見城を守護したまふとき、吉女(祥)天女諸共に、修羅を責討ついきほひも、かくやとばかり思はれて、見る人舌をまきにける。かくて西にむかひ手を合せ、我西方十萬億土のみだを頼むに非ず。己心の彌陀、唯心の淨土、今爰に現せり。佛も如レ露亦如レ電とゝき玉ふ、誠に夢の世に、*三あはれ身の面影つゆに宿かる稻妻の、はや立かへる本有の城、南無阿彌陀佛と念佛し、*四太刀をくはへ、うつ伏になりたまふ。ためしすくなき女性なり。高德も西にむかひ、南無西方彌陀如來(念佛イ)、今日娑婆の苦をのがれ、*五本國に立かへり、一族の者共と、おなじ蓮にむかへたまへと十念して、腹十文字にかきゝれば、舍弟小七郎介錯し、其身も自害し高德の死骸によりかゝり、おなじまくらにふしたまふ。見る人なみだをもよふしける。頓て數多の首共、備後の國鞆津へこそはおくりける。扨備中を平均して、おの〳〵功の淺深にしたがひ恩賞を行はれ、毛利家の大將たち凱陣あるこそ目出度けれ。扨常山へは藝州より城番として、山本四郎左衛門・渡邊伊豆(石沼イ)兩人を居置き、*六其後城主きはまり、戸川肥

後守知行五萬石、入道して祐林といふ。

常山高三百間。廻り四十二町。

丸數十四

表丸　土倉兵庫

二丸　池田利兵衛

三丸　津島九郎左衛門

四丸　近藤四郎左衛門

五丸　戸川助左衛門

六丸　進藤李

七丸知行千石　進藤佐吉

二ノ丸

一丸　虫上惣左衛門

二丸　飛山藤内

三丸　師子洞太郎左衛門

四丸　横井意仙

五丸　田中藤之介

六丸　國富源左衛門

七丸知行三千石　中島九郎左衛門

兒島常山軍記　終

天神山記

（一名天神山落城記）

天神山記（一名天神山落城記）

序

臣として君を弑し、主家の國を押領し、一度威をふるふ事ありといへども、子孫長く榮ゆる者なし。天理を失ふ大本成る故、天地のにくみ是より甚しきはなし。されば浦上宗景こそ武勇猛威の大將なれども、宇喜多明石延原が如き逆臣の爲に亡ぶる事あり。誠に獅子身中の虫といふべき也。その事跡正しきといへ共、世隔たりぬれば由來舊跡徒らになり行き、名のみも知る人稀ならんと、後代の事思ひ替られ甚だなげかしく、在昔承應の頃の記錄の一卷を持傳へしを祖として、實錄を記すもの也。

天明七年丁未三月下旬　（以上、原本に天神山記とせるもの丶序文）

備前和氣郡田土村に天神山あり。西より南は大河にて、さらに寄るべきやうもなし。北は山かさなりて要害最能の地也。臣として君を害し主家の國を押領し、一度威をふるふものありといへ共、天道に背く故に子孫永く榮ふるものあらず。天地の憎是より大なるはあらず。人として君臣父子夫婦兄弟朋友の道なくんば、禽獸に不レ異れば、浦上宗景こそ武勇猛威の大將なれども、宇喜多明石延原が如き、逆臣の爲に亡ぶることあり。實に獅子身中の虫といふべき臣なり。その事跡正しきといへども、世へだゝりぬれば、來由舊跡もいたづらになりゆき、名のみも知る人稀ならんと思ふまゝに、往古承應の頃記錄一卷を祖として、聊か其事實を記すのみ。

全水山人　藤　一　雲

（以上、原本天神山落城記とせるもの序）

天神山記目錄

天神山記（一名天神山落城記）

著者不詳

城主浦上宗景由緒幷天神山入城之事附片上葛坂軍之事

[※一]備前國和氣郡新田の庄田土村天神山の城主たる、浦上遠江守宗景の初まりを尋ぬるに、往昔人皇六十[※二]二代村上天皇第七（住イ）皇子具平親王の御苗裔、赤松播磨守則景十世の後胤、浦上掃部介村宗と云ふ勇士、本州三石に居城す。此時播備作の三ヶ國は、播州赤松左京大夫晴政の幕下たり。村宗武威に募り、主人赤松が下知にも不レ隨。晴政甚是を憤りおもふ折から、享祿元年三好と細川確執に及び、赤松は三好に一味し、浦上は細川に隨ひ主從隔りぬ。晴政・村宗大物の邊（内イ）にて卒す。村宗が墓は和氣郡伊（伊里イ）里村（中村イ）の内、山田原といふ所に有レ之。嫡男は浦上太郎政宗、次男は與次郎宗景[※三]とて、兄弟父の跡を繼ぎ同じく武威をふるひける。晴政の長子上總介政村、未だ若年なれ共父の恨を受繼ぎ、同國赤松釆女正と心を合せ、兵を率し浦上と戰ふ。終に赤松利を失ひ、一族家臣悉く討死し、白旗の城落城せり。是より政宗兄弟武威に募り、播州室に城郭を構へ、同國山下の（右イ）城備前片上戸田松（土イ）を端城に構へ、一門の面々發向し、其威隣國を併呑せんとしける。兄政宗の息二人あり。嫡男を與四郎政範、次男を豊松丸といふ。城中の繁昌（榮イ）比類なし。宗景殿思召やう、我兄に養はれ何の益なく光陰を送る事口惜き次第也。所詮何方へなりとも參らんと思ふ故、自然と兄弟不和に成り、家老大田原與惣（三イ）左衛門實時・日笠治郎兵衛賴房・岡本次郎左衛門龍賓は隔心なき者故、內談有りける所早速同心す。彌我儘發氣し何方へや赴かんと密談區々の所、備前國田土村天神山は三石より近境（くイ）故、嶮岨の高山にて要害無双

*一、爰に東備和氣の郡新田の庄云々（落）

*二、本州備前三石云々（落）

*三、別本落城記には後遠江守と改むと割註あり。

※一、是又早速同意す。猶々見積りの爲一味の輩密に地利な見立(落)

※二、崩し取り家中の家にせよとの上意也(落)

※三、明けわたして家中の云々(落)

※四、自ら浦上遠江守と號し、備州な押領せんと其勢ひ猛虎の如し。(落)

※五、成可申とな某云々(落)

の城地たる事兼々能存じ、天神山と一決して、夫より日笠・大田原の兩士より、明石大和・同姓飛驒共の方へ相談に及びける處、兩人も[※一]早速此儀に同意す。猶又見積の爲め一味の輩、しのび〳〵に地形を見定めて、天文二年辰四月九日夜密々室城を忍出て給ふ。供士の輩には、當城の長臣大田原與惣左衛門・服部主膳・日笠治郎兵衛・同苗彈正・後藤河內・宇喜多左京・岡本次郎左衛門等を先として、隨ふ侍下部迄百人計りにて、天神山の近郷日笠村御着あり。先達て日笠・大田原が裁許にて城郭普請最中故、同所に御止宿被ㇾ成、近郷の民屋を崩し取り[※二]可ㇾ被ㇾ申條被ㇾ仰ければ、諸人おもふ樣、宗景公一城の主とも成り給はゞ、銘々忠勤いたし置かば、追て一廉の恩賞にも可ㇾ預と思ひ、若違背に及ばゞ[※三]國司の威光後日の咎めを恐れ、銘々住宅を崩し天神山へ持運ぶも有り、又勝手よき場所は、其儘家中の屋敷と成りしも多し。右の通故早速荒增に出來して天神山へ入城あり。[※四]浦上遠江守と號し、備作兩國を押領すべき其威猛虎にひとしく、作州三星山の城主後藤安成・同國下山清氏等を初として、其外備作の諸侍皆太守と敬ひける。此度忠勤盡す輩へは、夫々恩賞を褒美の沙汰有り。遠近の庄屋莊官器量ある者共は、譜代に被二召抱一皆々祿を給りしと也。扨又播州室の城主浦上近江守政宗殿は、御舍弟宗景殿近衆の輩大勢にて出城致されしゆゑ、行衛御聞合有ける處、天神山へ趣き籠城の用意有ㇾ之事早速に御聞被ㇾ成、御立腹不ㇾ斜、早く大軍を指向けべきの所、家老の各申樣、御憤り御尤ながら今少し御延引被ㇾ成、彼城要害見合の爲一應使者を以て御呼返し、宗景卿の御所存も承届、我儘(彌々我儘イ)に相究らば其上にて御合戰可ㇾ然と申ければ、政宗暫く御工夫有て、成程實否も不ㇾ糺軍勢を遣すは無骨(麁忽イ)とも比興とも成べし。先使を遣はし否やの返答可ㇾ承と、當家の舊臣西尾定右衛門使を蒙り、天神山へ來り宗景公の御前に通り、西尾臆せる色なく、先以此間は不ㇾ奉ㇾ得二御意一御勇健の尊顏奉ㇾ見恐悅奉ㇾ存候。隨て頃日當地へ御越被ㇾ成候儀、御慰の爲め大和方に御逗留と存候處、天神山に籠城と取[※五]沙汰、政宗卿御立腹不ㇾ少、早速御歸城可ㇾ然候。若左も無二御座一候はゞ騷動の基とも成り可ㇾ申候。

※一、押切て被ㇾ仰けり（落）
※二、委細語りければ云々（落）
※三、以下の一句落城記之を缺く。

某御迎のため參上せり。御歸城被ㇾ下候はゞ、國家の爲め一家中のよろこび、某迄難ㇾ有奉ㇾ存候と頻りに進め申ける。遠江守殿委細御聞被ㇾ成御返答被ㇾ仰けるは、某當地へ趣く事慰め遊興にあらず。兼て其方も知る通り、兄弟不和に及びたる上は所詮一國一郡をも領する所存也。又兄政宗武邊の慣りにて軍勢を指向らるゝ條尤の事也。夫とてもすべきやうなき仕合、某再び室城へ歸る事相成がたく、其方遠路の使者大義千萬、暫く休息歸國の上其旨可ㇾ申達ㇾと手切の樣に御答被ㇾ仰ける。※一西尾詮方なく室城へ歸り右の一件具に言上し、天神山の要害見及候まゝ、宗景の存念家中の心底委敷申上たる處、近江守殿益御立腹堪へがたく、此上は片時も早く彼地へ馳向ひ、家來の奴原蹈殺し、宗景が首を土産にせんと、既に用意を催さる。※二去程に宗景殿は、舍兄政宗立腹の餘り近日馳向ふよし聞及ばれ、俄城の事なれば軍兵に事を闕かれ、備作の諸士へ廻文を以て人馬の催促頻り也。近郷の武士庄屋庄官、或は腕立强敵の者共、又遠國の諸浪人等櫛のはを挽く如く馳集り、扨又作州三星山の城主後藤安成・同菜喰の城主下山淸氏、其外の諸士より加勢の軍勢追々相集る。然る所益原村大樹山の借ども、弁本庄の鄕侍森中務・同九郎左衛門・恒次（龍イ）新左衛門・同藤内等をも、ひたすら味方に御賴み有りけれ共（キイ）、中々天神山へ不ㇾ隨（樣子イ）に仍て、遠江守殿甚立腹あり。是によつて追討致されける。去程に室勢片上戸田松城へ進發の由相聞えければ、宗景軍大將には明石飛驒・宇喜多左京・延原彈正・日笠（田イ）・香中・池・高原・額田・菅崎・岡本・橋本・久永・奥山・芦田等也。作州加勢の大將には、後藤安近（左京）・安藤大次郎・瀧（龍門イ）川又吉等也。惣勢都合五千餘騎、天文二年七月下旬天神山を進發し、片上葛坂の邊、伊部鯛山の方へ出張して魚鱗鶴翼に備へ、旗馬印等數百流朝の嵐に吹き靡かし、夜は猛火（かがり）天をこがし、さも凄まじく見えたりける。斯くて二十日計り相戰ふといへども、元來連枝の事也、相從ふ武士は乍ㇾ敵主人也。又立向ふ兵も竹馬の傍輩故、自然と進みがたく、終にはれやかなる勝負もなく、一先和睦して室城と天神山へ相引に曳にける。※三其後戰ひ止にけり。

宇喜多下山由緒之事附天神山家中之姓名

爰に浦上宗景の家老に、宇喜多左京直家と云ふ者有り。先祖を尋ぬるに、人皇七十五代崇德院の御宇大治二年の春とかや、百濟國王の姫宮王子を懷胎し、聊の事有りとて何國ともなく流され給ふ。當國兒島に着船し琴を彈じおはしける故、島人いたはり參らせ、此趣を帝都へ奏聞し奉りければ、則都へ召上せられ禁庭（中イ）にて御評定の上、三條中將殿の妻女に遣されしが、程なく男子を平産あり。名を三條宇喜多少將と申す也。則兒島を給はる。男子三人有り。東郷太郎・加茂次郎・西郷三郎と云ふ。是皆浮田・三宅の元祖也。都て宇喜多は、一字浮田三字宇喜多これ同姓なり。謂れある事なり。西郷三郎末孫に至て、宇喜多和泉守能家は永正のころ八濱の城主たりしが、其後邑久郡乙子の城にて卒去有り。子孫（息イ）宇喜多八郎興家は短慮不才の人なりけるが、沼の城主島村入道觀阿彌と不慮の諍論より刄傷に及び、興家横死の後、右所領赤松へ召上られ、其跡斷絶に及び、子息直家未幼稚の時より母諸共、上道郡西大寺觀音坊に內緣有て、暫く此邊に漂泊す。然る處三ッ石の城主浦上掃部介殿二男與次郎殿乳母に、右宇喜多後室召抱へられ、悴左京幼年より浦上家へ仕へ、成長して武勇智謀萬人に勝れ、天神山迄も付從ひ來り、忠勤たるに依て、宗景公賞美の上大祿を遣され、上道郡古津の庄沼村に居住す。軍旅（數イ）に秀でたるに仍て、程なく亡父興家の敵觀阿（島イ）彌を亡す事、偏に宗景の厚恩にあらずや。扨又下山牛內正氏と云ふ者天神山へ奉仕す。是は作州勝田郡南分棠喰村井の內の城主下山筑後守清氏といふ勇士有り。舍弟同苗大膳久氏同源五郎氏治とて、兄弟三人有り。播州赤松家の幕下にて代々當所の領主たりし處、末弟源五郎伯耆國大山へ、七年の間每年懈怠無く參詣致し、八年目に狗を牽かせ參り候處、備中の國水田の庄宮地村鈴木（五左衛イ）新右衛門と云ふ侍、同く狗を牽ゐて參る所、彼山にて兩人の犬喰合ひ鈴木が犬喰負て死す。新右衛門無念におもひ、下山が犬を手討に致しければ、右

*二 下山大に懐り犬の勝負勝つとも負るとも畜類の事、武士の面皮にかゝはる程の事にてもあらざれど、今足下某が犬を手討にいたされし段武士に似合ぬ仕方也某をあなどつたる振廻無禮の甚しき所也、其儘にては指置くまじとて、互に言葉を募り既に及二双傷一双方共相討に死す云々（落）

*三 天神山落城記には市村左近入る

源[*二]五郎犬を切られ武士道難二相立一思ひ、新右衛門と言合ひ言葉を募り、及傷して互に相討に果ける處、如何相成事にや源五郎一山の衆徒に恨有て、怨靈夜な〳〵顯はれ出て火を放し大に惱しける。仍て今大山に下山明神と祀られ、末世に同山祭禮戌の日に當れば風雨はげしく人失せるといふ事あり。其後茶喰の城主は、伯州の名士尼子伯耆守晴久と戰ひ利を失ひ、下山筑後守舍弟大膳とも討死しける。則隣郷に阿曾村（阿曾村の内安木イ）と云ふ所に墓所有り。右大膳子息下山半内正氏（政イ）、其時城を欠落して備州天神山へ來り、宗景卿の近習後藤數馬へ内縁有るに仍て便り申故、則數馬取持にて當城へ宮仕へいたす。則作州勝田郡の内小坂田・岩見田・城田・中河内右四ヶ村にて五十町、山林共知行に宛行候旨折紙頂戴す。但作州勝田郡茶喰村は、慶長八年森右近大夫忠政卿、信州松代城より御入國被レ成、右由來を以て下山村と替へ給ふ。

天神山家臣　（イに○印は不忠の者也 △印は忠義の者也）

△浦上將監景行　○明石大和景之　○明石飛驒景親（家老逆臣の長たりイ）　○宇喜多左京直家（逆臣の長たりイ）　○明石三郎左衛門景季（景親の長子イ）（秀イ）　△日笠治郎（治郎兵衛イ）左衛門頼房　△日笠彈正頼恒　△大田原與惣左衛門實時（與三左衛門イ）　大田原與三郎　△服部主膳　○延原彈正（逆臣の長たり左京方大將と成イ）　△日笠利左衛門　岡本豐前龍家　○同苗五郎左衛門龍晴（時イ）　額田與次兵衛　額田與次右衛門　○池土佐　同苗主殿　△後藤河内久之（次イ）　△高原六郎　下山半内正氏（政イ）　△林九郎兵衛　菅崎兵左衛門　奥山源六　○橋本四郎左衛門　久永三郎兵衛　後藤數馬　香中　頓宮　芦田　難波　小堀　福田　青山　石田　丸尾　西田　岩井　岡田　近藤　田中　木村（此等の人々不レ知一族多く當城にぞくす。）

右の外家中の武士數多有りといへども、時世はるか隔りたる事ゆゑ委しくしれず。

直家謀計を廻す事附江見河原主人を討事

永祿五年正月中旬、浦上近江守政宗の嫡男與四郎殿の御内室に、印南郡五着の城主黑田官兵衛孝

*一、去程に宇喜多左京直家は宗景に取立られ高知を領し威勢廣大に成ゆき慾心を發す。何卒して浦上家を亡し播備作三ヶ國を押領せんと奸曲を巡らし（へ落）

*二、殊に城廓堅固にして要害も好ければ中々寄易く責落し難く空しく光陰を送りし處（落）

*三、未實否も不㆓相知㆒中何樣一應も二應も御糺の上一戰可ㇾ然と言上し（落）

高殿の息女を御引請、則御婚禮有ける處、其刻龍野下野守内々政宗父子に意趣有けるが、祝言の折からを能き時節と思ひ、不意に押寄せ夜討に入り散々に責戰ふ。室城には思ひもよらず數多の待防ぎ兼る。下野守は兼ての存念六具を堅め、家來に兵具を用意させ、無二無三に切込み／＼責惱す。室の兵ども大半討たれ、政宗與四郎親子の人々終に討死致されける。室城既に危き所、次男清宗相續し　る。去※一程に宇喜多直家は宗景に厚恩を受け、高知を領し威勢廣大に成り行き、何卒して浦上家を亡し、自身備播作を押領したくと恐敷く慾心發氣しける。度々天神山へ登城し城中の樣子、又は家中の心底をも餘所々々しく窺見るに、明石飛驒延原彈正等は智謀拔群なる者なれば、直家の胸中をも推察し内々味方に加り、三人共心を合せ猶又樣子を伺へども、家中の面々忠義一途の者多く、※二殊更城郭堅固なればすべきやうなく、とかく光陰を送りける。其頃元龜二年十月中旬、直家天神山へ登城し、明石日笠を初め諸士を作ひ、宗景公の御前に參り品々評定有ける中、太守仰けるは、扨も先年軍已後は室城と不和相募り、日頃承れば清宗諸浪人を集め、當城を覆す評議致すよし、江見河原源五郎内々申越し、片時も不ㇾ安事也。近日此方より押寄せ可㆓踏落㆒の間、其旨心得可ㇾ申と被ㇾ仰ける。明石●宇喜多●延原等は御答も猶豫し居ける處、日笠大田原の兩士言葉を揃へ、仰の旨一々御尤に存候へども、※三未實否も再應も樣子御糺の上、一戰被ㇾ遊可ㇾ然候。若其内に室勢御當城へ押來り候共、何程の事かあらん。此義は暫く御延引可ㇾ然と言上す。宇喜多●延原●明石等は、兼ての所存ある事なれば、兩人が言葉を押返し、成程其義も去る事なれども、先年も及を爭ひ其後彌確執を結び、殊更右の仕合故何時も不ㇾ知大軍責來り、貴殿達の軍配にて暫く防戰可ㇾ成哉、元より軍は銘々粉骨を盡さねば勝利なし。臆病神の釆配には諸軍もすゝまず。鐵炮矢叫の音は耳に毒成物と樣々惡口しける。日笠大田原も言掛り、言葉も募り口論しける。浦上將監景行後藤河内久元さま／＼（やう／＼イ）制し止む。宗景卿も一旦被ㇾ仰し事ながら、家中の面々心中區々と思召、其儀は兎も角も今日は黄昏にも及ければ、皆々休足致し申べしと御意に

隨ひ各退出す。其夜直家明石延原談合、翌日また登城し、宗景卿へ密に言上する事暫時也。其後御暇申し退きける。何事か申上げゝん知る者更になかりけり。扨も室の城主浦上近江守政宗父子不意の横死に仍て、次男豐松清宗相續し、則※一與四郎殿後室を娶合せ、清宗未だ若年成る故、家臣江見河原源五郎を執權として國政おだやかに治りける。元來强慾邪智の者にして兼々謀叛の志有り。宇喜多左京と心を合せ室天神を責落し、備播作を掌に握る所存にて、※二前廉清宗より宗景を亡す軍評定有る事也。跡方もなき虛說皆兩人が謀計なり。頃は元龜二年霜月上旬、直家忍で源五郎宅へ至り案內しける。源五郎立出見れば左京也。急ぎ伴ひ奥に請じ色々饗應(もてなし)ける。直家申樣、兼て閑談申通り、先日の御內通にて宗景大概立腹あり。既に發亂あるべきの處、日笠大田原中々不ニ同心一故思ふに任せず。今日參るは殿の御使者也。則御狀も到來せりと取出す。源五郎受取開き見るに、其文に曰、

※三一別已來は絶ニ音信一疎遠の至に候。此度其方相賴度子細有レ之。依レ之態々使者指遣候。其趣意は甚嚴密の事故、更に不レ置ニ紙上一候。偏に厚く賴入候事。成就の上此方へ參着においては、一廉所領可ニ宛行一候。猶又委細の儀は、左京より以ニ口達一可ニ申述一候也。

十一月六日　　　　宗（遠江守イ）景　判

江見河原源五郎殿

直家申樣、一々御披見候歟。御狀にも越意は載せられずといへども、某へ相談に及ぶべき樣にと被レ仰候。貴殿御宿志の事なれば、何卒清宗を殺害し天神山へ可レ有候。其上にて謀計を廻らし天神城を攻落し、播州一國貴殿へ進可レ申と云はれければ、源五郎强慾の者なれば宇喜多に計られ恐敷事共請合、夫より樣々心を盡し窺ふといへども心に任せざるの處、頃は元龜三年二月十七日の夜、源五郎清宗の寢所に忍び入り、主君の御首水もたまらず討取ける。清宗の乳母人、寢間の方に怪敷物音聞えければ其儘駈行きみれば、衣引かつぎ臥給ふを夜着引まくり見れば、朱に染たる血汐の骸、南無三

＊一、兄與四郎殿に妻取りたる後室清宗殿にめあはせ（落）

＊二、前かど清宗より宗景を亡さん爲軍略催促ある抔と跡方もなき事を宗景に言入れし、江見河原宇喜多の譎奸謀を以て事を起し其騷動に乘じて事を計り浦上兩家を亡さんと工みしこそ恐しき次第なり。

※三、一別以來絶一段疎遠の至に候此度以ニ使者ニ申入趣意甚嚴密の事故更不置紙上候。偏に厚賴入候事成就の上、無レ滯く參着、於レ有レ之者、一廉所領可ニ宛行一者也（落）

＊二一無念骨髄に徹し一家中の者共うろたへさわげども何者のしわざ共知る人更になかりけり。諸士共漸々心をしづめ先宵より騒番の士誰々と詮議に及び、江見河原を初とし て番士六人なり。其内源五郎居らず此者の仕業かと早速門番を吟味せし處源五郎は殿の御用と僞り城門を出でしと聞く故、諸方へ追手を出しけれ共（落）＊二二江見河原拍子もともにたらひたり主討親討つゝみさへうつ（落）＊二三家中の輩内々意趣を含といへども當時盛ん

寳何物の業成るぞ君を殺し奉ると、大音揚げて泣き叫ぶにぞ、近衆遠侍追々に馳付見れば斯の仕合、無＊二一念骨髄に徹し、其夜霄より宿直番士ハ江見河原源五郎其外兒小姓六人也。嚴敷穿鑿に及びけるに、外の番士はあれども江見河原一人居らず。早速追手を方々へ遣し詮義致候處、天神山へ逃込み、宗景公抱へ被レ申上は不レ及レ力、追手の士皆々手を空うして歸りけり。彌欝憤重るといへどもすべきやうなく、せめての腹いせと源五郎が老母を召捕へ路道にさらし、一日に指一本づゝ切り、二十日に手足の指を切り責殺しける。子故に主殺の惡名を請けし事こそ不便なれ。其時落書、

江＊二二見河原三拍子こそはたらひける主討親（極樂入イ）うち小鼓も打つ

と書き辻々に建たり。天晴天命しらざる人畜生と、世の人笑ひあへり。然ながら藝は心に似ざる物か、小鼓においては中國西國に及ぶ者なし。懸る災難故室城既に斷絕にも及ぶ處、黑田官兵衛孝高の取成しにて、淸宗息子久松丸未幼少なれども所領相續しけり。

宇喜多直家與次郎殿を毒害之事附同人叛逆之事

宇喜多左京直家は、股肱の郎等花房藤内と云ふ者を以て、織田家の大老羽柴筑前守秀吉公へ申上る。其趣は、扨も浦上遠江守宗景は、威勢に誇り諸寺諸山を燒亡し、上を恐れざる我儘非道の政度々也。家老共度々諫言仕るといへ共用ひ不レ申。我々後日の咎を恐れ御注進仕候と言送る。元來浦上家は秀吉公に憎まれければ、直家が願聞届けられ、宗景に隱居致させ可レ然と被二仰聞一ける。花房は急ぎ歸國し、主人直家に秀吉の趣意を述べければ、直家悅び、夫より使者を以て浦上久松丸へ申遣す様は、宗景公は正敷貴公の爲には伯父なれども、御親父淸宗の敵也。某身不肖ながら御味方致し、宗景を亡し申べし。如何思召やと申遣ければ、久松丸行年九歳、未幼少なれば何の辨もなく、家中の＊二三輩内々意趣を含居る事なれば、是究竟の時節と早速同心し、發亂に及候て軍勢指向可レ申と返答す

の宗景卿容易にも敵しがたく心中に残念に思ふ折から直家かく味方に加る上は天神山を落さんと（落）

※一、夫より室城へ使者を遣し久松丸殿を呼寄せ其臣は不殘沼の城へぞ集めける。扨又天神山には延原明石を初め宇喜多方へ屬したる事夢にも不知、高が直家如き恐るゝにたらずと、先當城の鑓先にては一時に踏落さんと云々（落）

※二、別本猶、日笠を入る

れば、直家大に悦び、此上は計略を以て天神城を落さんと、一人の娘を兼て惣領浦上與次郎殿へ宮仕へ致させ置けるが、何の心なき體にもてなし己が居城へ招待し、暫逗留の間毒酒を用ひ、既に御病氣大切にて天神城へ御歸館。天正五年五月六日御卒去被レ成。御壽二十九歳也。杉澤山長福寺引導にて同十一日御葬送。則河本村に御墓有レ之。誠に若木の花をちらし、武勇絶倫の宗景公も御殘心不レ少。是より佛法御歸依有り。今更大樹山燒亡の事ども御後悔の御顏色見え給ひければ、當城の一家中も自然と猛氣衰へける。去程に、宇喜多直家は威勢增長の餘り、謀計頻りにして悉く仕負せ、此時本望を達せんと密に味方を集めける。遠近の諸浪人器量有る輩多く馳集る。又天神山の諸士も累代恩賞の武士は數無くして、過半集る勢の事なれば、强慾にて祿を貪る者多く、其上宇喜多・延原・明石が如き譜代の長臣なども此體なれば、彼等が辯舌にたばかられ過半內々味方にぞくす。直家悅び宗景公に御隱居被レ成候へと申越ける。遠江守殿大に驚き給ひ、家老日笠彈正・同治郎兵衞・明石飛驒・大田原與三左衞門・服部主膳・岡本五郎左衞門等を初め、番頭物頭相集り、此上は片時も早く直家を退治可レ致と評議評定まち〳〵也。兼て彈正飛驒を初め過半宇喜多方なれば、軍評定の趣一々に沼の城中へ內々申遣しける。宇喜多天神山を攻落す手筈、取々思慮を廻らし居ける所、明石延原が方より件の趣內通しければ、此上は片時も延引成がたしと、尙又※一浦上久松丸へ使者を以て、定日を約し火急に用意を催しける。天神山には、明石を初め其外の家中宇喜多方とは夢にもしらず、高の見えたる宇喜多が構へ一戰に及びなば、當城の許先にて只一時に踏落さんと、心易くおもひ居ける。頃は天正五年八月八日の、夜も既に丑の刻過る頃成るが、人馬の足音凄まじく、如何成る者の業ならんと思ふ所に、宇喜多直家大軍を率し、父井國山に出張し、提燈松明夥しく暫時が間に白晝のごとし。すはや敵こそ寄せたるぞと俄に周章夥し。天神山には明石※二・延原・大田原・岡本・服部・額田・池・高原・香中を初として、諸士下部の輩迄驚き騷ぐ。其間に夜も明方に成りけり。敵の備を見れば、國山に

*三方に積城峰なく實〻落代の良に也。敵如何程大軍な以て責むるとし落つべき便なし。とやせんかくやせんと寄手の兵共ためらふ處、城中に下知して云ふ兎角寄手の襲を伺ふべし云々。（落）

は宇喜多直家、其勢凡五六千騎竪菱の旗をひるがへし、北山には室の城主浦上久松丸より加勢の軍兵、是も同じく四五千餘騎、兩勢一萬餘の大軍天神山を挾み、鯨波の聲を揚る事數ヶ度也。城中より明石飛驒父子・延原彈正・岡本五郎左衛門龍晴一番に切て出て大音上げ、如何に如何に直家慥に聞け、莫大の高恩を忘れ主君に向て弓引く事、天道を恐れざる振廻、夫のみならず不意を伺ひ夜討同前の合戰卑怯千萬、汝ごときの人（人非人イ）畜生に敵たひ、物具を穢す事殘念至極と呼はりしは、誠に無双の勇士とや皆々感心限なし。去程に兩勢言葉戰ひ暫くして、北山より大筒火矢を嚴敷搏掛け、矢さけびの音天地を響かし、隣鄕の民屋には百萬の雷落掛るかと恐れ、みな〳〵爰の谷彼所の岩間へ逃隱れしとなり。角て嚴敷取はさみ、もみ立て〳〵責るといへ共、中々落べき城郭にあらず。西に一つの大河有り、高山嶮岨いふ計なし。岩角鐵を延べたるごとく、東一方を捕手にして其要害堅固也。*三方は續く峯なく誠に奇代の名城なれば、敵いかほど大軍にても責落べき便なし。兎角籠城して寄手の變を伺ふべし。猥りに軍卒を費べからずと一騎も打て出ず。また寄手も戰はんともせざれば、只陣取居る計り也。直家が指圖にて、明石延原が計略を待ての事也。天神山には夢にも知ず何の苦もなく日を暮しける。

天神山落城之事附作州諸所軍之事

盛なる者は衰ふる事古今其例多し。爰に天神山の城主たる浦上遠江守源朝臣宗景公あり。昔天文の頃より當城を築き、備作二ヶ國の太守として其威廣大成りける處、此程宇喜多が亂に仍て軍旅を碎く。天神山は元より堅固に楯籠り、宇喜多勢室の勢は天神山を取りはさみ、火急に責落さんとはやると雖、責寄べき方便なし。はなやかなる軍もなく其日も既に暮ければ、兩陣共に猛火天をこがし、物すさまじき有様也。天神山には猶更に、岩を漉る松の風とうとうとして物すごし。頃は八聲の鷄の

伊吹矢櫃の城とあるは市場村矢櫃の誤なるべし術矢櫃の城主は作州記古城跡其仙には岡本新三郎廣義とし江見兵庫の居城は高圓鎌倉山城とせり又皿の荒神山とあるは種村荒神山なるべし

時分俄に騷動する事有り。すはや夜討と思ひの外、當城の家老明石飛驒・同苗三郎右衞門・延原彈正・岡本五郎左衞門龍晴を初め味方大半裏返り、城郭に放火して態とうろたへ騷動す。日笠二郎（次イ）兵衞・大田原與三左衞門・服部主膳等諸勢に下知し、出火をしづめんと働けども、兼て當城の武士大半宇喜多方なれば其采配に隨はず、猶も所々に火を付て鯨波の聲を上げ散々に裏切す。後藤河內・同數馬・浦上將監・日笠治（次イ）郎兵衞・同彈正・服部主膳・林九郎・高原六郎・菅崎兵左衞門・木村・久永・靑山・芦田・香中の一族を先として其勢三百餘人、天神城を枕とし義を金石の重きにたとへ、命を敵の的にかけ大敵を不ㇾ恐不ㇾ疲、名を後代に殘さんと火花を散して防戰す。誠蟷螂が斧九牛が一毛なりといへ共、忠義の太刀先するどくして敵多く討取りけれ共、寄手は大軍荒（新）手の武士入替り〳〵もみ立て戰ふにぞ、元より無勢の城なれば詮方なく、其身金石ならざれば、深入して戰ひしが敵の首多く取り、皆々疲れて討死する。宗景今は詮方なく、太田原與三左衞門・後藤數馬・日笠の一族供して、八月十日夜の內に播磨方へ落給ふ。此時落書

ほの〳〵と明石か今朝の裏きりに身を隱し行く宗景そうし（きイ）

口惜かりける次第也。忠義一途の勇士悉く忠死を遂ぐ。天正五年丙丑八月十日天神山落城。天文年中より纔に四十七年の在城也。宇喜多直家は幼少より厚恩を蒙り、武運に秀で父の敵を討けるも宗景の恩に非ずや。乍ㇾ然前生積善の人が謀計天に不ㇾ顯、悉く勝利を得、威にほこり勢猛虎にひとしく、明石彈正・同大和・岡本五郎左衞門・池土佐・橋本太郎を初として、天神山の侍多く宇喜多に隨ふといへ共、當國鄕士赤坂郡由津里村住人難波三郎左衞門・同周匝の住佐々部勘之丞（勘次イ）父子、並作州英田郡三星山の城主後藤左衞門少輔勝元・同國飯岡の住人保志賀藤內・※井伏矢櫃の城主江見兵庫次郎（兵庫守治三郎イ）・明見村の住下山牛內正氏・皿の荒神山花房五郎左衞門等、心を合せ中々不ㇾ隨といふ。直家大に怒り戶川・岡・花房・長船・遠藤等を召集め、作州の諸士退治の手配、軍評定一決して、軍大將には延原彈正・遠藤喜三

郎●花房●花枝●花田●花木●花岡●花村（是を宇喜多の六花黨といふ。）此等を先として、其勢都合七千餘騎と着到して、進發の日限は、天正七年四月五日と相定め、難波●佐々部を手初にせんと評定しける。直家討手を指向るよし粗傳聞き、銘々要害しける處、難波三郎左衞門は、要害惡しく大軍を引請がたきに付、三（四イ）星山へ一所に籠り、互に一所に心を合せ戰はんと、城に火を掛け三星山へ立越ける。既に天正七年三月下旬、宇喜多大軍にて、周匝の住佐々部勘之丞が籠たる城を十重二十重に取卷き、鯨波の聲を上げにけり。兼て覺悟を極たる事なれば少も驚く體なく、花やかに出立て無二無三に戰ひしが、郎等散々に成り、其身金石にあらざれば佐々部父子終に討死しけり。彼山の一の谷と云ふ所に墓あり。作州飯岡鷲山の住保志賀藤内は、※一宇喜多勢の大軍を引請け利あらずとは思へども、一戰に不レ及逃んも口惜く思ひ、家老鯛矢又七●秋山十右衞門●大澤重郎左衞門など、心を合せ大敵に不レ恐戰ひしが、敵多く討取り終に討死。保志賀も詮方なく堅めの場所にて切腹しける。則二の丸に墓所有レ之。鯛矢●秋山●大澤が墓は鷲山の南麓に在り。英田郡倉敷の城主江見市之丞井伏矢櫃の城主江見次郎は、銘々城郭要害薄く、佐々部保志賀が討負しに氣を呑れしか、兩士共海田村鷹巣の城へ引籠、諸卒を相具したむろしける。延原彈正押寄せ急に取ひしがんと思（掛イ）へども、近邊に大木生茂りたる深山なれば勢の多少も知れがたく、無骨に取懸ても如何成りとて、香谷邊の百姓を賴て東西より火を掛けさせ、水の手を取切て揉立々々責勳す。家老小坂田（坂田イ）織部を初め郎等不レ殘討死す。江見の老臣清水帶刀、備前田土村の住人池土佐と戰ひしが、※二池は血氣盛の勇士、帶刀は老武者ゆゑ、池土佐討勝ち首を取て立歸る處、清水が家來廣田七兵衞主人を討たれ無念に思ひ、此上は生て甲斐なしと、只一人跡より追掛け池土佐に渡り合ひ、火花を散して戰ひしが、終に土佐を切倒しける。折節彈正方の者皆引取り外に人もなかりしが、七兵衞は無難に土佐が首を取り、主人帶刀兩人が首を其所に埋め首塚築置き、夫より三星山へも不レ行已が古郷播州三ヶ月の里へ歸りける。江見兄弟が墓は、卒都婆が崎と云ふ所に有レ之。

※一、保志賀藤内　三星軍傳記には星賀藤内兵衛基治に作る

※二、土佐血氣い勇士なりしが帶刀は老武者なれども手練の當勇なる散火花をちらして三時計の間目もふらず戰ひしに、土佐も今はあしらひかねて見えける處、帶刀あやまつて木のかぶにつまづき、うつむけにころびし處、土佐はしり寄て首討て退く處を云々（注）

*寄手の者共是を不レ知、延原弾正日和をゑらび海田村へ押寄る處、彼三人手勢を率し荒木田より鞍掛の城へくわきうに押寄せ無二無三に戦ひしを弾正此のてだてありとは夢にも不レ知防戦ふといへ共たまりかねて延原は佐々部村へにげちる處右三人の勇士追掛々々戦ふ形勢誠に天覺の荒れたる如く也延原方四五千騎ばかりなりしが大半討死す後藤河内と延原渡り合ひ秘術を盡して戦ひしが延原は肩口を切下げられ今はあやうく見えける處云々(落)

三星山落城之事附宇喜多戰功之事

去程に延原彈正が軍術にて、是迄數度の戰に勝利を得て其威猛狠の如く、近日三星へ責來る由聞えければ、後藤左衛門勝元防戰の手配り致されける。先本丸には當城の家老後藤左近・水島久佐・山下六左衛門・山本彥右衛門・同權內・福田左內等を初として都合三百餘騎也。東丸には安藤宗馬(相イ)・柳澤太郎兵衛・難波利介其外已下二百餘騎、西丸には駿河彈正・龍川(門イ)又一郎以下百五拾餘騎也。東丸と櫓には、天神山家臣後藤河內・浦上將監・下山半內・奥山源六・小堀・靑山・福田・芦田・丸尾・西田・石田、隨ふ士都合二百騎人、南櫓には戶坂梶治(次イ)・岩井伊織、幷備前難波三郎左衛門、其外赤城・島(岩イ)田・江田・濱田等六十騎にて控へたり。總勢凡一千餘騎、甲の星をかゞやかし、誠に堅固に構へたり。頃は天正七年四月上旬、延原彈正倉敷の向ひ鞍掛山に押寄せ、三星の城に對陣す。三星山の東丸を堅めたる後藤浦上等是を見て、敵は思の外大軍成るぞ、計略を以て取ひしがんと評議一決して、後藤河內久永・浦上將監景行・下山半內正氏を大將にて二百餘騎、荒木田村の山陰に隱れける。*寄手是をば夢にも知らず、延原彈正勢を分ちて海田村へ押寄ける所に、彼の伏兵頓に起て荒木田より眞一文字に鞍掛山に押寄せ短兵急に攻着けたり。延原が兵不意を討れ、なにかは以てこらゆべき、右往左往に逃て行く。延原彈正踏止り士卒を下知して戰へども、亂れ立たる習にて耳にも入れず逃退く。彈正是非なく佐瀨村へ引退く。跡より嚴敷追掛れば郎等返合ひ〳〵四五十騎討死す。後藤河內眞先に進み、如何に彈正、主君に叛し敵に屬し國家を亡す極惡不忠、遁れぬ所覺悟せよと切掛る。彈正も聞ゆる手だれなれば、得たりかしこしと渡り合ひ、秘術を盡して戰しが忠義の太刀先するどくして、肩口をしたゝかに切下げられ、既に危く見えける處、遠藤喜三郎・花房藤內馳來り彈正を押隔てければ、其間に中間二人來り彈正を負ひて、伊田の鳥(逸ヘイ)奥山迄逃延びたり。城兵彈正を追失ひ無念に思ひ、鞍掛の陣に火をかけて燒拂

*一、誠に此者共の働は古今無双の勇士と皆人々舌を巻てぞほめにけり。夫故に三星の城一端勝軍に成り宗最の恩愛に輔じ三星の城主へ忠義を盡せし事誠に比類なき才士也。（落註）

*二、人々篤き仰とも覺えず情なき御心かな、例へ軍に利なく落城に及ふとも大軍を引受け花々敷討死せんこそ武士の面目たるべし。宗高如きが一人なくとも合戰を止給ふ事後人のそしりも恥かしき事におはさずや急ぎ御用意有て一番宗高を踏みころし可レ然と

ふ。扨彈正方の兵共押寄せける處に、柳(相イ)澤太郎兵衞・難波利介・駿河彈正等を大將にて、三百餘騎後卷にして嚴敷攻戰ふ。寄手爰にても利を失ひ田原へ掛渡る。延原が家來津田・吉田・岡田・小林等討死す。彈正方兒島(三保介イ)三保之助敵七八騎討取、高言して立たる所、難波利介立向ひ手を盡して戰ひしが、冠板切落され太刀を捨て組合取結び、終に利介に討れけり。三星山より荒手の勢二百騎相加りければ、寄手是に恐れ旗を卷き湯郷村へ逃去りける。*一此者共の働き誠に比類なき事夫々恩賞有けると也。去程に延原彈正は度々敗軍し、士卒も多く討るといへども、武功の者なれば少も是を苦ともせず、伊田(伊田の誤イ)鳥奥山に數日滯陣して、此山の記錄を引て勝間と號し、寄城にして陣しけり。三星の城兵忠勤に仍て思の外手強く防戰す。延原彈正手疵を蒙りたる由直家聞傳へられ、猶又加勢として同苗治家に二千餘騎勢を添て取越されける。則勝間の城にて五六日軍評定有りける。其頃湯の郷村長光寺、彈正方へ訴へ申けるは、三星の城内に、安藤宗馬(相イ)・柳澤太郎兵衞・難波利介と云ふ强敵あり。此等の三人斯く有る内は左右な、落城有間敷と、かの者共を味方に被レ成候はゞ、攻破る事易かるべしと申上ける。治家彈正長光寺を呼出し、右三人何卒味方に招き給らば恩賞望に任すべしと被レ申ければ、長光寺畏て領掌し、三星へ參り三人の武士に語りけるは、何卒延原方へ一味被レ下候はゞ知行望(相イ)次第との事也。如何思召やと申入ける。難波・柳澤兩人は長光寺が言葉を空耳に聞き中々心變せず。宗馬(相イ)は彈正方へ隨ふべき色見えける故、安藤宗馬(相イ)反心致候由難波・柳澤兩人より城主後藤殿へ申上る。勝元大に驚き給ふ。水島久佐・後、左近・山下六左衞門・駿河彈正等を召され、宗馬(相イ)反心のよし。斯く譜代の家臣さへ二心有る位なれば迚も此城持がたし。*二及二合戰一なば多くの家來我が爲に討死せん事不便也　某自害致すべしと仰せられける。人々驚き御自害を留め片時も宗馬を捨置がたしと各用意し、安藤が屋形へ押寄せ責戰ふ。宗馬は素より强力者にて水島・山下が勢に渡り合ひ數刻戰ひしが、難なく宗馬を討取ける。此虛に乘じて宇喜多勢三星城外に寄來り散々に責懸ます。難波・柳澤を初め多くの兵獲物を引提

申しけり。夫より宗高が館に押懸攻戦ふ。宗高も強力の兵、山下の兵と渡合ひ數刻戦ふといへども、終に宗高亡びたり。扨も案ずるに慾といふものこそ萬事の妨なり。宗高如き強勇の士、慾には眼もくらみ、是迄に盡しゝ戦功も水の泡となり、不忠不義の名を残すことあさましき次第にあらずや。迚も討死せば、三ツ星の方に在て大軍を引請け忠勤をあらはさば、末世勇士の名を留むべきに云々（落）

て防ぎ戦ふ所に、寄手の勢東丸（本丸イ）に火を掛けゝれば小屋場より東丸（本イ）危し。難波利介・山本權内荒木田村へ逃げゝれば、宇喜多勢追掛け山本巳下（*い）討死し、難波は蓮花寺にて討死す。寄手西丸に押寄せ、四月二十五日朝五ツ時より九ツ時まで攻戦ふ。駿河彈正・龍川又一郎其外多く戰死す。西丸櫓高壁燒落ける。宇根田太郎兵衛・山本彦右衛門一族二十騎計り討死す。（太郎兵衛行年八十歳。）宇喜多方の勇士數多引請討死す。城兵多く討れければ、勝元今は詮方なく郎等少々召連れ入田中山の方へ退き給ふ。寄手追駈け嚴敷戰ふ。漸切拔け長田村にて自害し給ふ。隠れ坂といふ所に御墓（墓有りイ）位牌有レ之。

皿の荒神山の城主花房五郎左衛門は宇喜多に降り和睦す。其外備作の諸士悉く直家が麾下に屬す。不レ隨者は穝所修理亮元常・金光次郎宗高其外多く攻め落す。終に和泉守に補任せられ、岡山に城郭を築き威勢廣大なりけるが、終に腫物の病に犯され、行年五十三歳にて天正九年巳九月に卒去。嫡子八郎殿は實父直家の家督を繼ぎ秀吉公の大老職にて、備前美作は云ふに及ばず備中國川邊川を切て、既に三ヶ國の主たり。加州大納言菅原利家卿の息女を、秀吉公の養女として秀家公に嫁娶す。仍て殿下の甥と號し豊臣の姓を給り、菊桐の紋蒙ニ勅許一從二位中納言に昇進し、文祿元の頃朝鮮征伐の時は、都督將軍（惣大將を承りイ）の號を蒙り高麗國に威を振ふ。然るに秀家家臣の諫を不レ用石田三成に組し、關ヶ原にて福島正則に攻崩され、宇喜多家永く斷絶す。浦上遠江守宗景は天神山落城の後播州へ赴き給へ共、宇喜多家威光強きゆゑ御足も留らず。夫より九州へ赴き、豊前國小倉の城主黒田勘解由次郎（*ろ）長政公の介抱にて、年齢かたむき慶長年中に卒去し給ふ。既に七八十年の盛衰爰に顯然たり。後代の武士此意をわすれず、慾心を退け我が家を戒め忠孝を勵むべきものなり。

天神山幷郷内の舊跡

本丸　二ノ丸　三ノ丸　長屋ノ段　辛堀（落城跡の東西に在り。（東南イ））　南櫓（跡有り。）　百貫井（本丸の北手少下りて有り深し。今木の葉埋りて水藍のごとし。）

飛騨ノ丸本丸の艮に當り少し下明石景親が屋敷也。 龜甲山の姿、龜の甲に似たる故後世の人言へり。 水ノ手天神山の北本丸の東久保山水の源なり。水清冷なるゆゑ城中の人々是をのむといふ。 本鼓ノ段天神山の東高山なり。時々太鼓を打し所なり。 八升太鼓の段に並ぶ古き石垣の跡有り。 土佐屋敷上田土村に在り。土佐屋敷也。今人誤てとふさ屋敷といふ。 火ノ見上田土村に有ㇾ之。 陣屋ノ鼻田土北山の出鼻也。播州勢出陣の所也。 鐵炮ノ段北山の峰に有り。今は大筒といふ石垣有り。 幟尾鐵炮段の南下播州勢旗物印多く建し所也。 河本村天神山若殿・浦上與二郎殿御墓あり 岡本屋敷河本村に在り。田土川の南岡本豊前屋敷也。 木村坂天瀬村に有ㇾ之。木村某討死の所。

終

干ㇾ時文化六巳年水無月下旬寫ㇾ之。

皿井萬三郎

い、山本權内諸軍をはげまし、大軍に渡合ひ強戰すれども、其身金鐵にあらざれば數ケ處の疵を蒙り、兵卒散々に討なされ、終に討死をぞ遂げたりけり。難波利介なり我を討留めんと思ふ者あらば、一番二番と名乘て出で三合迄双を交へ戰ふ覺あらば所望なり。併此方より助くる者とては一人も不ㇾ可ㇾ出、臆病神にいとまよはず速に戰ふべしと呼はりしかども、誰有て、討留めんと思ふ者もなく、三時計仁王立にぞ立ちはだかり待ちけれども敵は更に出合はざりしが、爰に宇喜多方の郎黨東條七兵衛光定と名乘り、三尺許りの太刀をかざし進み出て、身不背ながら某一太刀合せんとなどりかゝるを、難波見てやさしくも出でられし者かな、先づこなたより一寸志計進ずる物有りといふ儘に、手頃成る松木一本引抜き、先づ彼の光定をなぐりければ、光定心得たりと飛びかゝり切入らんとする所を松なげ捨てゝ首すぢ引つかみ、三間計と見えし程投げられて落ちたる處を・なげ捨てし松の木にてエイと一うち打たりしが目玉飛出て死たりけり。利介も今は是迄とや思ひけん、蓮花寺に行て自害しにけり(落)*あゝ後代の武士此意を忘れず、慾心を退け我意を捨てゝ、臣としては忠より外に本意なきを常に忘れ給ふなよ。此實錄を記しゝも忠不忠の行末をしらしめ、いらざる紙つひえながらいさゝか爰にあらはす(落)

天神山記 終

類纂 虎倉物語

虎倉物語

一、虎倉物語

著者　又兵衛

*領地名虎倉聞書と相違する所多し

一、伊賀伊賀守(左衛門尉カ)様、赤坂郡鍋谷の城より津高郡虎倉の城へ御移り被レ成久敷御座候。御領地は長田一圓・建部一圓・宇甘・紙工(シトリ)・勝尾・日應寺、此外に備中の内吉川・竹之庄（八ケ村あり。）宇盤・中津井・水田、此外に作州の内加津田(鹿田又賀田)・粟原・關・石木(一色)まで御取被レ成候。

一、備中備前の境に藤澤と申城御座候。それへ毛利殿御取出被レ成候。伊賀殿御内河原六郎右衛門と申人、勘當にて浪人仕、毛利殿に居申候に付、是を案内者にて藤澤より毛利殿軍兵花やかに拵へ、虎倉の様子御覧置くとて上加茂まで御出被レ成候。其時虎倉より足輕衆參合、川越に鐵炮迫合仕候。毛利殿内靑屋殿（與十郎と云ふ。）と申能き侍一人、上加茂村の片山與七郎（後に彌左衛門と云ふ。）と申人鐵炮にて川越に搏申す。其儘仲間參候而首を取申候。其時下加茂村葛(クツ)原と申人も手柄仕られ候。それよりさんぐ\に追崩し、うす谷・かや谷にて餘多打取申由に候。十力(ジウリキ)・おぎ坂迄追ひ申候中に、加茂の侍土井と申人馬惡敷候て、おぎ坂にて河原六郎右衛門寺に居申候て土井を打取申候。伊賀殿の御内にては土井より外には打れ不レ申候。そのまゝ毛利殿も御引被レ成候由。

一、其間につゞみだ友貞かまへと申に、伊賀殿より河原源左衛門・河田七郎、是兩人を御出し置被レ成候。其節備中侍ほいだ殿つゞみだへ取懸攻申され候。虎倉より加勢もなく攻落し申候。中にも河原源左衛門手を負、東のたきへのき居申候。向の山よりその所に落人居申をよばはり、尋に參り候へ

ば、源左衞門申けるは、我は深手負候間、是へ來り首を取、名をあげ高名にせよとて則刀脇差を捨候へば、そのまゝより申候人をとらへむずと組み、二人ながら瀧へ落、微塵に成申候由。

一、伊賀殿は宇喜多直家の聟殿にて御座候。又子息伊賀與三郎殿は、明石掃部殿姉聟にて御座候。岡山に御屋形御座候て常に岡山に御座候。直家樣と伊賀殿御挨拶不レ淺候折節、金川松田殿の城御望候て、直家樣伊賀殿を御賴み被レ成、辰の年七月五日に、伊賀殿御取懸り被レ成、金川道林寺の丸と申に堂御座候。是へ夜中忍び入り鬨の聲を揚げ、本丸へ鐵炮搏申され候。折節城中に人少く候所に、横井又七殿金川籠城を御開候て、御馳入被レ成、殿守（天）を請取言葉戰被レ成、鐵炮御打せ御座候。折ふし伊賀殿方より打入候鐵炮に當り、松田大殿御死去被レ成候由。松田殿の御內に、楢原修理殿と申も打死の由申候。六日の日ゆふべ七日に御城落申候。松田若殿は御のき被レ成候由申候。直家樣は矢原の寺に御陣所の由申候。[*一]寬文元年丑の年迄九十四年に成申候。それより（金川落城以後）十二年程後に、伊賀殿俄に御煩ひ被レ成、伊賀與三郎殿岡山に御座候所に飛脚參り候。何と思召候哉馬　鞍置せ、そのまゝ御めし御急ぎ被レ成、馬取も付不レ申虎倉へ御乘込被レ成、惣門うたせ番衆御付被レ成候。其跡より追付け宇喜多源吾殿人五十程御つれ被レ成、伊賀與三郎殿を追懸惣門まで御出被レ成候。門番申樣、きびしき法度にて內へ人を入れ不レ申候間、是より御歸り候へと申候。伊賀殿は其時御死去にて御座候。但毒にて御果候由申候。それより伊賀與三郎殿と直家樣と不通に被レ成候。其間に毛利殿（智）へ樣子被レ仰候て、直家樣と手切に候。備中の中高田村と虎倉の境忍びと申城に、岡山より岡野合介殿を御置被レ成候。是へ毛利殿御出にて、虎倉の內宿ノ山に御陣御するゐ、忍びを御攻め被レ成候。其時伊賀與三郎殿は、勝尾山の上に岡山の押へに御座候。伊賀殿より金川へ夜打一兩度打せられ、首をば毛利殿へ被レ遣候。六十日程御攻候て合介殿に腹切らせ、毛利殿も御引取被レ成候。伊賀與三郎殿もそのまゝ下へ御のき被レ成候[*二]（寬文元年の丑年七十九歲に成申候。）

*一、原本註　寬文元年より九十四年前は永祿十一年に當る。十二年程後とは天正七年比に當る

*二、原本註　天正十一年に當る。

*一、京本註 寛文元年より七十一年以前は天正十九年に當る也。
*二、此氏名の左側に朱書にて左の記事あり。「如レ此又兵衛自筆名判有レ之候なうつし候。」

一、伊賀與三郎殿御のきあと、秀吉公より蜂須賀彦右衛門殿・小寺官兵衛殿御兩人御越候て、御仕置被レ成、長船越中殿へ御渡し被レ成候に付、越中殿は播磨のこま山の城より虎倉へ御移り被レ成候。本丸には弟の長船源五郎殿、其外宇禰殿・大田原殿・石原殿あまた御座候。中にも石原殿は越中殿の妹聟にて候。長船源五郎殿ためには姉聟にて御座候。

一、それより九年後の閏正月五日に、越中殿岡山より虎倉の城へ御座候。御供は寺內喜左衛門殿なり。六日の朝のふるまひ石原殿に御座候。御相伴金光宗迫・河原甚右衛門・市村、其外も御座候。越中殿御機嫌能くゆる〳〵と御座候處に、越中殿を石原新太郎殿御打被レ成候。弟の源五郎殿、市村と棊をうち候を、是も御打被レ成候。そのまゝ奥へ取込被レ申候。其內に源五郎殿子息、兄は市右衛門十三歲、弟は松熊十歲、是はをばさま、おくにて御殺被レ成候。越中殿御手淺くて引立、おもての椽に御座候處を、をいの石原三四郎殿鐵炮にて御打被レ成、やがて御死去被レ成候。弟の源五郎殿も御果被レ成候。其時長船重郎右衛門と申候人、是何事と申參候へば、石原殿奥より御見付被レ成、一矢にて射殺被レ成候。それより石原殿取籠被レ成候を、寺內喜左衛門殿下知にて、上より石をこませ候へば、たまりかね親子三人こしらへ出られ候。石原殿刀、三四郎殿刀、奥様は長刀、くゝり袴はちまきにて三人御はたらき被レ成候。手負もあまた御座候へども、死人は無二御座一候。石原殿末の子に九左衛門と申候も、其時殺され候。石原親子をば矢すくめにいたし申候。敵味方以上九人御果被レ成候。當年丑の年七十一年[*一]に成申候。

寛文元年九月二十八日　八十二歲にて書出し

虎倉村

又[*二]兵衛　花押

二、虎倉聞書

是は下土井村の庄屋土井六郎兵衛と申もの語候通書付候也。

虎倉の城主は伊賀左衛門督（輔イ尉イ）と申候。元來伊賀國服部（＊一）より出て備前國津高郡河田村（高知イ）へ被ﾚ參（此村の名光政様御代には豊岡村と名を改申候て、今は豊岡村と申候。）居住被ﾚ成候。其時の屋敷を今地頭と申候。其後近所元兼村の馬場（高イ）と申所へ御移、そのうち、虎倉の山を城に御取立御居城被ﾚ成候。其節御領分（＊二）備中大井庄・竹之庄・野山・古瀬・川面・宇甘（有漢イ）・中津井・水田、作州月田・湯原・ましま・大ば・段戸（旦土イ）・芳賀（和イ）、備前の内菅野・本明寺・奥津高（＊三）・加茂三十八村の由、凡高十五萬石程御座候由。出城は備中四つうね、作州鷹か（山イ）城相持候處に、藝州毛利より四つうねを乗取候。虎倉（從夫虎倉へ二三里許イ）より二里計西加茂市場村の内藤澤と申山は、虎倉方の者取登り居申所に、又藝州より藤澤をも乗取り、城番として青屋與十郎と申人を据置申候。其後伊賀殿と扱に仕り、右領分の物成半納づゝ藤澤と虎倉へ取入申候由。其節鷹が城を浦上宗景殿より攻申候に付、後詰として虎倉より出勢仕候。其留守に扱を破り、藤澤より虎倉へ不意に押懸け申候を、留主居ども傳聞き、城中の妻子下女はしたまで呼出し、旗刺物さゝせ、數百人城山の後廣面（ヒロモ）村と上加茂村の境高き山へ出張居申候。藤澤の者ども案の外に候へば、上加茂の坂中へ下り軍の評議仕候處に、（＊四）虎倉勢用に立程のものは下加茂へ廻り、上加茂の後十力村の山の高みへ取登り居申候。其内片山彌左衛門と申鐵炮の上手、上加茂川のへり、柳のかげにかくれ居申候て、大將青屋與十郎をねらひ打に打落申候。其時後へ廻り居申者ども、ひた〳〵と打寄鬨を揚候得ば、（＊五）敗軍仕り方々へ逃申候を追かけ大方打取申候。虎倉勢の内には土井三郎左衛門と申もの一人、長追を仕打死いたし候。大將與十郎打死、其外大勢打死仕候に付藤澤難ﾚ抱、殘る者共は藝州へ立退申候。（＊六）其後伊賀殿家老に河原六郎右衛門たて出し申候に付、作州本山（ホンサン）に七年浪人の様にて居被ﾚ申候。其後扱にして虎倉へ御返りの筈になり、豊岡村常

＊一、別本には伊賀郡より津高郡高知村へ参られ居住す其時の屋敷を地頭と云、其始元兼の高場と云所に居住す」とあり。

＊二、別本には「其所人皇百六代後奈良院御宇、大永七年に今の地に移る知行分備中」云々。

＊三、奥津高以下三十二字別本「金川奥加茂之庄不殘」云々。

＊四、原本「前名與七郎」と註あり。

＊五、敵散々に軍仕、方々へ六々（イ）

＊六、以下八行な別本には其後藤澤の城は捨り居る山又伊賀左衛門輔殿家老に河原六郎右衛門と云者伊賀

之輔殿と不合に成伊賀之補殿より六郎右衛門立出し召給所に御座候て又在付建部五ヶ庄を五百石として可玉候處にて云々。

*一、以下十八字別本には「土居左右馬虎倉へ有付今の地□意を被下」

*二別本「右の江川小四郎が子を小四郎と云、秀家公御母を連て云々」

光寺にて六郎右衛門を御振廻被レ成候。其座にて六郎右衛門と甥の河原帯刀と申者を、左衛門督殿家來小坂惣兵衛・片山彌左衛門兩人に被二申付一、右兩人を御打せ被レ成候所、少し打損じ右兩人くるひ廻り、大勢手負有て、六郎右衛門・帯刀ともに山へ取上り申候を鐵炮にて打留申候。其後虎倉に居城の處宇喜多直家より攻落して、長船越中・同新太郎を据置き被レ申候。扨、下土井村庄屋六郎兵衛が先祖土井相馬・同次郎右衛門兩人は左衛門督家來にて候處に、藝州と取合の時分致二逆心一、青屋與十郎方へ與力仕候。與十郎打死の後藝州へ立退居申候。其後左衛門督殿つぶれ候に付、備前へもどり宇喜多殿*一へ由緒御座候て有付、建部五箇の庄を五百石にて被レ下候が、又浪人し、下土井村（元飛馬場イ）へ引込百姓仕候。相馬も浪人にて下土井邊に罷在病死仕候。直家の內室は作州高田の城主三浦能登守娘か妹かのよし。高田落城の節、親類江川小四郎と申者、女性をつれ備中の內にかくれ居申を、何者やらん直家へとり遣申候。是秀家公の御母儀のよし。中納言秀家御身上つぶれ申時分、*二右の江川小四郎か、又其子の小四郎か、中納言殿の御母儀をつれ、上方へのき居申候の處、渡世なりがたきに付、女性をさしころし其身も自害仕候由。三浦は土井母方にて御座候。三浦能登は大介（助イ）より二十七代とやらん申傳候。就レ夫玉藻明神（祠カ）を尊び申候。高田に一社有レ之由、土井次郎左（右イ）衛門なども尊び申に付き、下土井に玉藻明神と申印御座候。土井は主に逆心したる其因果にて、近年殊の外不順に御座候と存に付、せめて玉藻明神を崇申候。不勝手には御座候得ども、さして不吉には相（應イ）不レ申候と申候。

*別本治良を治郎に作る

三、虎倉記

兄伊賀河内守—兵庫—┬伊勢—┬左衛門輔 若狭守養子 後に土井と改む
　　　　　　　　　│　　　└三郎兵衛—┬伊賀與三郎 左衛門輔養子
　　　　　　　　　│　　　　　　　　└伊賀五郎兵衛
　　　　　　　　　├下總
　　　　　　　　　├民部
　　　　　　　　　└越前

弟伊賀出雲守—┬備中右京 作州明善寺にて討死す 後神原と改む—市郎兵衛 作州眞島にて討死す
　　　　　　├越中 上房郡大原の城主—惣右衛門 阿部源吾を討つ
　　　　　　└刑部—刑部 吉川に改む—新右衛門

一、伊賀兵庫二男下總守は、浪人宇津宮若狭守養子と成り、宇津宮下總守と號す。其後在ニ名乘一土井と改め、若狭守藤原にて下總國に住す。公方光源院義輝公の御勘氣にて、伊賀河内守に御預り兵庫まで預る。備前へ同道也。若狭守良將殿に被レ賴度々出陣す。下總一男治良*・二男三郎治・三男源治。嫡子治良は土井となり治郎兵衛と號す。二男三郎治尾張熱田に養子に參り、三男源治は後土井三郎左衛門と號す。伊賀の家老也。

一、伊賀伊勢守弟民部、長田の庄新山に居城す。伊賀左衛門佐殿御盃の次第、一に土井下總・二に鶴旨三郎兵衛・三に神原備中・四に河原六郎右衛門・五に新山民部・六に同平内。右盃の次第如レ是也。

一、家老土井下總、同。

一、家老新山民部 河原六郎右衛門逆心に付、伊賀左衛門佐殿高知村大白山常光寺にて六郎右衛門討取なり。

一、采地。備前の内長田の庄三十八ヶ村、建部の郷宇甘郷二十ヶ村、勝尾・日應寺・菅野・栢谷・吉尾・野々口・小山・宇垣、赤阪郡の内吉田・土田・伊田・尾谷・矢原・平岡、備中の内吉川・田土・竹之庄八ヶ村・有漢郷・水田郷・中津井・宮地呰部郷。

※一、三門學園本虎倉記には岡市兵衛

※二、次頁十四行目に出る淸常山と同山なるべく淸堂山は蓋し誤なるべし

久隆責取分

作州の内上山・粟原・一色・關・大井手・鹿田・眞島・久瀬・高田・井原・月田・目木・田原・山ノ上・且土・吉村・垪和・シロノシマの邊迄不レ殘、此外處々有レ之候得共、分に覺不レ申候。慥に存面の手形覺也。

一、神原備中・石原市兵衛迄（三代大原に城あり。）出雲は老人にて、備中川上大幡山にて藝州と討死す。

一、備中は病死。

一、神原市兵衛※一（作州眞島の城にて討死す。）

一、神原右京佐（作州明善寺にて討死す。）

一、同越中守（後備中松山の城主三村修理太夫家人となり、（延）若き時度々軍大將にて高名有レ之によつて、）

一、備前の城主宇喜多直家より、備中土井の庄鍛治山城主信原土佐守へ手入有、祟（本ノマヽ）の脇差廣次の刀玉り、直家の家來と成候はゞ一萬貫可レ賜と數通の狀を給り候へ共、元親の恩賞深き殿故斷申し不レ參候。元親毛利と不和に成り、藝州より大勢押寄せ戰ふ。時に越中守子息孫十郎平藏二人無二比類一働にて討死す。三男平治十二歳、母共に落人と成る仁にして、毛利殿家人と成、元親に打負け切腹す。

安部源五と云者上下四十騎にて、毎度竹の庄曲田土邊在家へ押入亂取致候事度々なれ共、此方より出入申内には早く引取候故得不レ討。久隆以の外立腹して、神原惣右衛門・仁熊勘兵衛兩人早速忍て討取可レ申旨蒙、信心を掛ヶ或夜田土村へ出て見申處に、源五に行逢ひ仁熊勘兵衛弓にて射申候得ば、左り脇を射る。神原惣右衛門走り掛り切給ふ。勘兵衛は源五が家來を追散し、惣右衛門源五を討、首取る。勘兵衛申は我弓にて射候故なり。首は此方へ被レ渡候樣にと云ふ。其時惣右衛門手疵蒙二數ヶ所一候得ば、其方の矢は當り不レ申と論議に致し、惣右衛門高名に無レ紛、惣右衛門首を取る也。

一、備中備前の境に藤澤と云ふ山へ、藝州より毛利勢城を構へ、葛見宮内少輔・靑屋與十郎兩大將にて、人數一萬人許にて彼城を攻め罷在處に、虎倉よりも兩方見合居申所、弘治二年四月十四日の曉毛利勢打出、淸堂山※二に陣所、伊賀左衛門督殿も二十町許打、先備は土井治郎兵衛三千餘騎にて、敵

*雜兵の首カ

陣向の山に陣取、二の備は新山兵庫と河原治部、千三百餘騎上加茂八幡山ニ備へ、左は河原越中千五百騎穢多村に陣取、神原備中は旗本千二百騎、久隆後備は河田平内三百五十騎、浜(ホバマ)備へ白坂は河原六郎右衞門三千騎上野へ備へ、備中境勝田孫右衞門二千騎宿村に備へ、河原源左衞門•土井治郎右衞門•河田七郎三八三千六百騎にて備へ、惣軍の弱る處の助(タスケ)は、熱田源治•杉本四郎右衞門•坂部內藏五百備へ、各軍法を守、敵を谷へ追下し、難所に引請取卷可ㇾ討と相議して、谷へ追下しの內に、坂の半迄下る。十五日の朝は思の外霧深し。敵味方互に人數不ㇾ見。先備より片山與七郎鐵炮搏出し、葛原三之丞弓を持ち、藪に隱れ忍寄り敵を待處に、青屋與十郎ザイをふり軍勢に下知し、川端に踏留り罷在りしを、三之丞一弓を以て與十郎の胸を射る。小倉勢力を得る。三之丞與十郎の首を取敵は一戰にも不ㇾ及引取るに、一里許追討して首數百三十討取、*雜く兵の首二百三十二討取る。久隆喜悅して十五日晩小倉へ歸城有り。其後藤澤より手指不ㇾ仕。高名仕者多し。

一、神原右京殿、妻城近邊迄付込、敵と鐵炮を合、首を取り手柄を仕、則感狀を取る。神原惣右衞門足を痛め、歩行不ㇾ叶籠(旅カ)本に罷在り、御秘藏の鹿毛の馬給ふ。久隆此度の下知實に良將と諸人譽(ホメ)申也。

一、土井三郎左衞門、萩坂にて高名二度、其後討死す。久隆大切の者にて感狀給、悴迄無ニ相違ニ罷(被カ)ㇾ下候也。

一、葛原三之丞、大將青屋與十郎ヲ討取る。高名也。軍法を背き拔掛け仕候事不屆故、先づ閉門と被ニ仰出一。與十郎も同前也。

一、備中古瀨にて島田十力萩坂にて打死す。右の場にて片山與七郎•仁熊勘兵衞と首取り論仕、淸常山の岸にて與七郎敵と組み、仁熊殿を助け賴むと申候へば、仁熊心得弓にて射、首を取らんとす。與七郎申は、我に組外賴むと申也。首を取る計、其方へは取らせじと口論の處へ、神原左衞門通り懸り子細を聞、侍の賴むと云ふからは、仁熊勘忍可ㇾ有と扱、片山首を取る。

一、伊賀左衛門は宇喜多直家の聟也。是により、子息與三郎は直家の孫也。

一、直家と伊賀與三郎と不和の儀に付、父左衛門佐久隆へ直家逆心有レ之故、與三郎を岡山へ呼置、天正十五年十一月二十三日、久隆も岡山へ招請して馳走し、毒をあたへ、久隆心持悪しく與三郎宅へ立寄、酒を多分に呑申候へば、毒を吐出し、虎倉へ罷歸り候ても、亦酒被レ致別條無レ之、其年は無レ恙。久隆被レ申しは、若我頓て死抔せば、直家より與三郎を呼殺すべし。たゞ與三郎を兼て呼歸し可レ申旨、家老に內證被二申置一候。翌年三月虎倉の城廻りに狸多居申候に付、家中を集め狸狩り、十疋計り取り、則料理有レ之、家中衆相伴にて久隆も被レ給申候。去年の毒に差合申か、血を吐其儘死去仕給ふ。早馬にて與三郎を呼に遣し、被レ歸候。直家聞給ふ、宇喜多源五を討手に申付、三百餘騎にて追掛け候へば、半時計おくれ討事不レ叶。源五は見舞に取成し人數を道に殘し、七十人計り召連虎倉へ來る。右の首尾故、虎倉の口々堅め城へ入レ不レ申。久隆四日煩、病死と申歸す。

一、備中高田村備前勝尾村境の城を、忍の城と云。毛利押へに、直家より岡郷助に五百餘騎相添指置き、自然毛利勢取掛り、其儘虎倉より加勢の約束也。夫故小勢にて相詰む。然處に、與三郎直家不和の旨毛利家より聞傳へ、與三郎へ以二使者一被二申越一候は、忍の城攻取り可レ申と存候て、田地子迄來り承候得ば、直家と不和に付、近き內直家より其城へ被レ向候由。尤我等義御亡父とは敵をなし相戰候得共、數年意趣互に無レ之、御心易く可二申合一候。此度の儀に候間久敷逗留申候。於二御同心一ては乍麼忍城攻可レ申候。岡山押へに家老御出し置き賴入候と、使者參候得ば大悦不レ淺、家老中へ談合もなく、忝存候。向後旗下に罷成可レ申候。賴申候と返事有レ之。其後家老中へ聞候へば、高田大原へ參、神原一家に相談仕、追て御請可二申上一と退出仕、土井治郎右衛門・河田平內・松本四郎右衛門大原へ參、右の斷々申談合にて、神原右京同道し、虎倉へ參り申上候上、直家、久隆へ毒を與へ殺し、又大敵の毛利と御一味、近頃合點不レ參。第一毛利は先ッ公方へ不快の者、其上久隆は唯今の

公方へ御忠功有レ之、皆々無益に罷成候。若し直家此城へ御向候とも、無二是非一儀に候。毛利へ御一味御無用に候と皆々一同に申上、與三郎殿御同心無レ之故、家老并神原出仕不レ仕候。與三郎殿毛利本陣へ被レ參、岡山の通路放被レ居候故、岡山の後詰も無レ之、鄉助譯見趣き、五十日ぶりに落城切腹候。與三郎殿毛利馳走に金川邊迄、在家を虎倉へ歸城無レ之、浪人にて毛利と同道藝州へ被レ參、虎倉のはかたに被レ居痢病にて死す。小身者供仕、大身は供不レ仕皆々浪人仕候也。

一、與三郎殿立退被レ申後虎倉の在番として蜂須賀彥右衛門今阿波守様二十八萬石。小寺官兵衛今肥後守様五十萬石、兩人也。其後播州駒山城主長船越中守を被レ遣二虎倉に一、久隆采地越中守領地と在じうすと有、譯聞えがたし。家老石原新太郎と云は長船殿聟に姉にて心安く、諸事新太郎殿次第也。然る處に加茂の內二納谷村高見山に銀山有レ之由にて、家老石原新太郎被レ越、裁判にて掘らせ候處に、夥敷銀の有ル土地と申、其儘切遣ひ銀多く掘らし候て、新太郎越中守殿に隱し被レ申由風聞有レ之、越中守殿立腹にて、新太郎我儘多く、あなどり候間差殺可レ申とて、仕手を定給ふ。新太郎子息ヲ石原甚之助と申、兒小姓を致し居申、致二立聞一新太郎に此由申ければ、女房に、其方は殿の兄弟に候得ば難レ申候得共、箇様の子細也。甚之助差殺切腹仕可レ申と言ひければ、女房泪を流し、扨々久敷馴染を捨て、無二是非一仰哉。兄弟迚も敵なれば、不レ逢二犬死一。專より甚之助を以、振舞をかこつけ、方便(タバカリ)寄せて、女なり共男になどか劣るべき。親子三人諸共に越中守を討取、其後切腹死べきと云。石原實ニもと思、甚之助に申含め、明晩申請御茶を進度と申請ければ、越中殿恭の相伴人二三人色々致二馳走一ければ、扨着込白小袖(付カ)ヲ、新太郎奥より討出し、越中守殿を鑓にて突とめ、長刀にて首を討取り、敵味方も不レ辨互に切合、大勢死人有レ之。然る處に何者哉覽、城に火を懸け放し、火盛にもえ揚り、寄合候者共、石原親子三人共に切殺し、各切腹死たりけり。さしもの一城時の間に灰燼となりけり。其後城主もうち絶候と也。

＊虎倉代終、服部伊勢守より伊賀與三郎殿迄四代、次に長船越中守殿一代也。

＊岡山縣立圖書館本には「天正十六年ツブレ」と註あり。

*以下原本「勘定」とあるは總て「感狀」の意也。

一、萬治二年八月十六日、伊木長門守様爲ニ御意ニ加茂の郷浪人落、只今百姓に成澤山有レ之由。此者共の内、筋目慥成證文勘定所持致し居申候分、壹人切に吟味仕、何方牢人にて何年此方何村に罷在候段幷證文勘定の寫シ仕、指出し候樣に被レ爲ニ仰渡一、則左の人數勘定目錄書上候。

葛原・片山・菱川・河本・入澤・土井・河原・小林・鶴旨・津島・瀨尾・能瀨・楢崎。

右十三人より先祖書勘定寫し指上申候。此外莊官も有レ之候得共、慥成證文無レ之に付、書上ニ外れ申候。此節より加茂莊官拾三流と申候也。

右の内

一、入澤庄左衛門は、備中松山三村元親の弟の由。元親出生後母病死の後腹なり。禁裡より御すべり被レ成候を御呼取候て、庄左衛門は此腹にて出生の由。松山落城の節七歲にて、家來山縣新介と申者召連缺落ち、同國有漢に居留、母方が入澤にて候故則入澤と改申候。右の新介は森久村近藤と申者縁者により、近藤類庄左衛門を森久へ指越し、尾原にて百姓に罷成申候。右書上の時分も勘定は無レ之、系圖書先祖計寫書上申候。然共母方より傳申太刀掛物一ぷく有レ之候。

一、片山源兵衛は、宇喜多直家の家來にて有レ之處に、勘當の事有レ之兄弟四人浪人仕、備中古瀨に久敷居申內、直家殿伊賀殿不和ニ成、伊賀殿浪人者宇喜多殿へ御抱被レ成度、宇喜多殿浪人は伊賀殿御抱被レ成度節、片山兄弟伊賀殿より早速御抱被レ成、兄弟四人の內二男の彥右衛門は病氣に付、百姓に罷成古瀨に殘居申候。殘る三人虎倉に有附、嫡子與市兵衛三百石にて、三男彌左衛門百五十石、四男善右衛門御小姓に御抱被レ成候由。與一兵衛末は平岡村久左衛門・長左衛門・與一兵衛・傳兵衛・與一平・圓左衛門・龜之介・與一兵衛也。彌左衛門末は上加茂重兵衛也。善右衛門末は下加茂の源兵衛也。

一、楢崎六右衛門は、將軍の家來也。浪人已後虎倉の下葉に罷成候得共、伊賀殿家來に成不レ申候內、

*佐右衛門は左衛門の誤

親は河内の上光寺の取合にて打死仕、其末は三納谷村六右衛門也。右御尋の節も代々系圖書寫し指上申候。

一、鶴旨與次兵衛は、虎倉伊賀伊勢守には二男也。系圖書度々御公儀へも寫指上、慥成筋目。與次兵衛末は唯今平左衛門。九太夫也。

一、土井治郎右衛門は、伊賀河内守二男三郎左（右イ）衛門と申者の子なり。伊賀佐右衛門*殿より千石被遣、家老役被仰付節、土井と改申由。三郎左（右イ）衛門惣領治郎右衛門。二男治郎兵衛。三男角介。虎倉浪人後治郎右衛門は下土井木戸の屋敷にて病死、其子平内と申は缺落仕、三浦と改、後榊原采女殿に有付百五十石。二男治郎兵衛井原に居申處に、妻子共病死仕獨身ト成候節、神原惣右衛門娘川原の荒木と申者より後家に成、男子壹人連れ歸り居申を治郎兵衛妻に呼取、則女召連參り候子に、跡屋敷遣し重郎右衛門と申候。土井は治郎兵衛迄に切れ、荒木に罷成候樣に成申候。三男の角介末は、今下土井村六兵衛にて御座候。右御尋の節も、則先祖書角介勘定一通指上申候。

一、菱川萬五郎、河内の生也。代々伊賀の家來にて罷在候。伊賀與三郎殿御心違ひ虎倉潰れ申候節、段々御いけん仕候得共御得心無之に付、則其坐にて御暇もらひ浪人仕、惣領萬五郎は加茂市場に居住。右御尋の時分勘定一通指上申候。二男與七郎は小森に居住。又先祖書勘定有之候得共、指出不申候。

一、能勢佐右衛門は、雲州尼子の浪人。作州の内下方邊に福井と申ものに内緣有之、福井方より久々居申内、虎倉伊賀殿へ少の間奉公仕ル間モ無く、其後は細田村に居申、右御尋の時分も尼子殿證文壹通寫差上申候。

一、河原孫右衛門は、作州寺畠の城主に、（雲カ）伊賀殿より寺畠の城を切落、其節河原子六郎右衛門幷帶刀二人共虎倉の下葉に罷成、則家老役被仰付、鍋谷の城御預け置被成候得共、元來敵故兄弟共に伊賀殿御心に不入。六郎右衛門は河内村の寺にて御殺し、帶刀も其節安藝へ落行候由。其末唯今孫左

衛門にて候。右先祖書寫指上申候。

一、河原平內、是は義秋公より宇喜多へ御預人にて有之處に、伊賀殿宇喜多の聟に被成候節、右河原を宇喜多殿より御附人に被成、虎倉へ罷越、平松屋敷に平內兄弟居住。其後弟宇兵衞には長尾村を被遣、則京ぐろと申處に屋敷仕居申內、虎倉潰れ浪人仕ル。平內末は宮脇惣右衞門、卯兵衞末は大わの孫兵衞也。尤平內は後源左衞門と改、大手にて打死仕候由。右御尋の時分先祖書差上申候。

一、小林亦右衞門●九郎右衞門、先祖は雲州尼子春久公家臣小林民部少輔末葉なり。長男又三郎天正年中毛利輝元卿に居申候。松山三村修理亮元親合戰の時分も、天神の丸落兼候時、小林亦三郎一番に乘取、大功の手柄。依之八川河面の鄕被遣、則川面の城御預け、輝元公に致隨身、久敷川面の城主となり、其後關ヶ原合戰の時石田三成に致與力、其時より浪人と成。嫡子三十郎神原家へ養子に行、二男又三郎は大木村長泉寺に居住、三男平治は川面に殘り、則小林に居住す。城の麓に今亦兵衞半七郎居住す。小林系圖書勘定代々有之、元龜二年先祖又三郎自筆の式目松山兵亂記二冊、共に九郎右衞門處に有之、至極能筆也。右御公儀へ輝元公の證文寫し指上申候。

一、妹瀨尾地德は、備中笹ヶ瀨の城主、平家方也。平家亡び候時分潰れ、地德は母召連缺落、河內村に居留り、後百姓に罷成由。其節瀨尾重代の太刀一腰家の寶也。今に有之。右御尋の時分、明白に書上申候。唯今豐岡の七左衞門は、地德下しゆく腹子也。

一、津島九郎右衞門は、妹尾地德母は笹ヶ瀨より召連參り候者也。津島の者故在名を名乘申候。以後地德より土井四郎右衞門を賴、宇喜多佐兵衞殿へ四郎右衞門世話にて有付、段々立身仕、三百五十石被遣候處に、大阪落城の時分、佐兵衞殿を討候はゞ跡敷に五百石の新地を相添可被遣と、天下よりたまり狀參り、夫を誠に請け佐兵衞殿を早速殺し、首を江戶へ持參仕候處に、以の外首尾惡敷、佐兵衞殿跡潰れ、夫より缺落仕、豐岡村へ罷歸り居候得共、不吉計にて破滅仕候。尤森久村源介は

＊別本五百石になる天下より作り云々とありしき五萬石正しきまり萬石盖ったまはり狀か尙はたましなるべし狀なる

＊別本「津島とは埒明不申候」

九郎右衛門子にて候得共、一度はまじ（まづカ）寺坊主ニ罷成形を加へ、其後森久村百姓に入聟に參候故、是は＊津島と埒明申候。右御尋の時分、佐兵衛殿折紙指上申候。

一、葛原、代々伊賀殿家來也。度々手柄多候者に候得共、毛利殿へかたむき申樣に有レ之、御暇被レ遣候。奉公御構被レ成候に付、則下加茂に居住仕、百姓罷成申候。御公儀へ伊賀殿勘定寫し指上申候。此末は田地子の七左衛門也。

一、河本忠右衛門は、親は金川家來河本源五と申者、浪人仕建部宮地村に居住。其節下加茂村より下女抱、二三年も居申候。源五病死仕下加茂へ罷歸候て、男子一人出生仕、源五子と申候由。外より源五子にては無レ之と申由。然共右の女源五病死の時分、松田の手形一通取逃、所持仕居申候。御公儀へ指上申候。其後は河本と申候得共、右の通故先祖書慥成記文無レ之候。

一、土井相馬は、伊豫の國元城主土井備中守末葉の由。後安藝より切落、安藝の下葉に罷成居候得共、元敵故心能不レ存、浪人仕居申處、土井三郎左衛門取持にて虎倉へ有付、則建部五ヶ庄五百石被レ下、大田の城を預り居り申候由。右御尋の時分は、毛利殿手形二枚先祖書寫し指上申候。

一、右書上申十三流は、右の通に候。河原と土井は、筋目違二ヶ通有レ之候。然共書上申時分は、書分不レ申指上申候。十三流に成申候。

右の外

一、福島六郎右衛門は、土井治郎右衛門死後跡式受取、下土井村木戸の屋敷へ罷越則土井と改居申候。御尋の時分も別紙書付は書上不レ申候。土井一所の書上に仕候。然共此者本來笹吹の城主福島三郎兵衛二男也。藝州より笹吹を切落申時分、二男の半六は有漢の内クヱ田と申に內緣有レ之、クヱ田を賴罷越居申內、土井三郎右衛門より虎倉伊賀殿へ有付可レ申と申付、下土井村へ參り居申處に、無レ間

*「中う」は「宙」の當字「氣情」は「氣丈」の當字

虎倉潰れ候故、下土井村にて入聟仕百姓に成、半六母は三浦能登守娘故、父母先祖慥成筋目書所持仕、殊に母方の守神玉藻明神を尊信致し下土井村ニ罷在候。本名は福島にて、然共御尋の時分土井と一所の書上、福島の系圖は書上不ㇾ申候。

一、年末の四郎兵衛は黒瀨と名乘申も、相尋候に攝州尼ケ崎の浪人雲州尼子へ有付居申候處に、安藝より切落又浪人仕方々挊（カセギ）、其後虎倉を望大向村に居留り居申內、所の者共黒瀨殿と相となへ、たつとみ申由。其屋敷に今黒瀨村と申由。其子孫年末の四郎兵衛其外近邊三谷にも御座候。右御尋の節罷出、書上申者無ニ御座ㇾ候。書上に外れ申候。慥成筋目とは聞傳申候。

一、水谷に小枝と申も有ㇾ之候。承り申處奉公人にても無ㇾ之、水谷の太郎右衛門と申者鹿島も中う*にてとらへ申樣成氣情*者にて、虎倉より山守御申付被ㇾ成、夫より小枝太郎右衛門と申由。御尋の時分書上申者は無ㇾ之候。

一、江與味に富田と申義、孫介と申者小倉へ奉公に罷出湯淺と申御家中賴、則とびの組へ御入候て足輕奉公仕、其節富田孫介と申候ㇳ承候に付、何とも證據は無ニ御座ㇾ候。

一、杉谷に河原と有ㇾ之候。是は、かり山玄蕃家來にて筋目、（脫カ）尾原に河原と申者有ㇾ之、殊の外貧者にて河原を賣申由と申折節、杉谷の次郎右衛門と申者米二石に相定、加茂の莊官中へ相傳へ、唯今より私も河原と御となへ、尾原を御捨て被ㇾ下候得者買取申度と申に付、其通埒明け買取申候。孫兵衛●治郎右衛門は先（ホノマ）河原も買ニ河原子直段安くㇾ、然共證文手形系圖書は賣主渡し不ㇾ申候。夫より尾原の河原は大仙のふもとへ罷越、今に仕合能子孫居申候。

一、近藤與右衛門は、筋目慥、殊に勘定澤山に所持仕、一類の內御扶持人も御座候。如何存入有ㇾ之候哉、右兩度書上申候節、是非書上に外しくれ候樣に賴申に付、書上不ㇾ申候。夫故に今に證文勘定所持仕居申候。

寛文八年、御郡代西村源五郎樣より御觸書寫

一、加茂の内には筋目慥成者共罷在候。先年御尋の時分筋目書勘定段々證文所持仕、其寫し御公儀へ指上候由。此度右の本紙一人切に目錄致、來る二十日に指出し候樣に可レ被二申付一候段、從二御城一御用に候間、無二相違(間イ)一急度持參可レ有レ之候。已上。

申ノ三月十五日　　西　村　源　五　郎

大庄屋下加茂村　治右衛門

同　豐岡村　平右衛門

村　々　庄　屋　中

右之御書御本紙、爲二重理兵衛に有レ之候。右の通互に家々證文系圖勘定不レ殘指上候處に、其後何の樣子も相知れ不レ申に付、右の證文手形御戻し被レ下候樣に、明る酉六月二十三日連判を以相窺申處、西村源五郎樣の御返書左の通。

一、加茂百姓共去年指出候筋目書勘定證文、此度戻し呉候樣に書付指出申候。早々相窺申處に、被レ爲二仰出一候は御領分に罷在候百姓共、相勤候はゞ作方計隨分精出可レ申處に、筋目男立の仕形多く有レ之由。不屆に思召候。重ては莊官立(タチ)慮外ノ族(ヤカラ)有レ之者、急度可レ被二仰付一旨被レ爲二仰付一候。尤先頃差上候證文の內、國司の手形は御上に殘、其外は拙者預置候樣にと御意候。此旨可レ被二仰聞一候。以上。

六月二十九日　　西　村　源　五　郎

齋木四郎左衛門殿　此齋木は郡奉行也。

片山氏所藏の感狀の由來

今度金川松田方城忍取、片山八郎左衛門と渡合致二組打一被二頸打取一候事、無二比類一候。爲二褒美一自二

直家ニはちかたの內吉田村被レ遣候。即請取人を入可レ申候。仍而感狀如レ件。

九月十六日　　久隆　花押

片山與一兵衞殿

貞尙按ルニ、宇喜多和泉守直家在ニ沼城一（上道郡沼村。）招ニ伊賀左衞門久隆（松田左近將監家臣津高郡虎倉村在城直家妹婿なり。）同與三郎一（久隆の子直家家臣明石掃部介婿なり。）曰、我欲レ亡ニ松田左近將監一（金川城主なり。）汝與レ之。久隆則祖ニ直家一反ニ松田一。永祿十一年戊辰秋七月五日久隆襲ニ金川一。于レ時久隆家臣片山與一兵衞殺ニ松田之士片山八郎左衞門一。既而金川城陷、松田父子戰死。直家大悅賜ニ赤坂郡吉田村於片山與一兵衞一。感狀如レ斯。

今度佐井田城藝州衆取詰候處、爲ニ後卷一備作罷出及ニ一戰一、長井越前守詞替、一番鎗突ニ取越前守一頸打取候事、無ニ比類一候。爲ニ褒美一鞍鐙長光刀遣申候。仍感狀如レ件。

九月十六日　　久隆　判同前

片山與一兵衞殿

貞尙按ルニ、永祿十二年（或は十一年。）秋、毛利六郎左衞門元清（藝州毛利の家臣。）率ニ兵士一萬人一攻ニ備中國佐井田之城主植木下總守秀長一。屬ニ直家一故乞ニ援兵於備前一。直家率ニ備作之兵一討ニ毛利兵一。于レ時伊賀之臣片山與一兵衞擊ニ毛利兵長井越前守云者一。久隆賞ニ片山一賜ニ鐙鞍刀長光作一。如レ此。

去十日於ニ天戸口一赤木衆罷出候處、被ニ組付一（駈付イ）及ニ一戰一赤木彌十郎打取候事、無ニ比類一候。爲ニ褒美一即彌十郎跡職遣申候。仍感狀如レ件。

四月二日　　久隆　判同前

片山與一兵衞殿

未レ考侯ニ後識者一。

享保甲寅春二月二十三日余遊ニ獵于津高郡加茂郷平岡村一〇片山傳兵衛乞レ識焉。傳兵衛者所謂與一兵衛之玄孫なり。故に不レ得レ辭於レ此記す。

白賁軒主人　山脇貞尙

虎倉物語虎倉聞書者、往年大丈軒小原正義氏の筆記を借用謄寫、伊賀家略系以降は津高郡地誌編纂備考書を以卷末に附記す。寫誤最多、原文の儘謄寫畢。

于レ時明治十七年七月二十五日　本吉彥

右虎倉物語及虎倉聞書は、岡山縣立圖書館所藏の類纂虎倉物語を底本とし、故山田貞芳氏の所藏たりし三門學園本の虎倉物語、及虎倉記の二本と校合訂正したり……編者

類纂 虎倉物語 終

三星軍傳記序

爰に山陽道美作國は、北に名木山三國ヶ山檜ヶ山と云高山有て、南を開き中陽の國にして、海無と云へども大川三筋有て運送の自由を得たり。東川と申すは播磨因幡の境三國ヶ山より流出デ、備前美作の境にて東川と落合ひ備前の國西大寺湊へ落込み、西川と申すは伯州大山の麓より流出て備前の國岡山へ落る。東川奥、英田・勝田兩川の落合を倉敷といふて東美の府也。爰に林野城、川西に三星城とて兩城あつて、管領山名赤松等の連枝一族等出張して國を守り、尼子家の管領の時川副美作守久盛、林野城に在城して國政を行ふ。然りと雖三星城者後藤氏代々の居城也。時に應じて管領の一族舊臣此城へ出張する事時々有り。于レ時天正の始、城主後藤氏勝基は三德兼備の良將なれば、尼子家の武威劣りなば、川副家を退て江見・難波・安東等を隨へ英田勝田兩郡を押へ、久米苫等の内迄隨ふ者多く、武威旺成といへども、家運づたなうして浮田が爲に亡ぶとかや。夫天地ひらけ始てより、勅を受け兵を發し我威を振ふて干戈におよび、武者國郡を爭ひ鎬を削り、主親の仇を報ぜんとて劍戟を打ふり、擧て算ふるにいとまあらず。是等の軍の大小緩急は有といへども忠臣義勇に二つはなし。心ある勇士盡名を惜まざらんや。此三星軍と申すは、聊小戰たりといへども、名にあふ浮田が大軍を引請け討死を遂られし大將を始め、諸勇士の勳功少からず。然れども諸書に詳ならず。然るに後藤家の臣に菅原の姓江見幽齋と云人有て、此軍を委く日記に殘すを西播において見當り、又後藤家の正流作の府内に埋居る事を聞て尋口て問見るに、幽齋日記に少も違ふ事なし。故に今まさに正して全部五卷として、三星軍傳記と號し、富士山の一景を畫者なしとかや。我無學短才にして、書につゞる事其罪恐ありといへども、後世において諸士の英名朽果なん事をなげき、又諸靈へ追福

の爲ともなれかしと願ふて愚書を殘す。且名乘等の有無日記の儘成リ、後人必ず笑ふ事なかれ。今貞享の始乙丑仲春、於二播府の片田舍に一藤原の姓某。

三星軍傳記

三星軍傳記惣目録

*此目次原本に缺くも內容により追加す。

巻一

巻二

*此目次原本之を缺くも内容により追加す

卷　三

卷四

卷五

*観應二年より天文三年まで其の間百八十餘年を經たれば三星に在城せるものは康基にあらざることは論を俟たず

三星軍傳記　巻一

三星城主後藤氏由來の事

三星城主後藤氏は藤原の姓にして、大職冠鎌足公の嫡孫房前卿七代の後胤、鎮守府將軍利仁より六代の後孫、後藤河内守則經と號す。其子後藤内（河内カ）則明と號す。坂戸を領し坂戸判官とも云ふ。其子左衞門尉公廣、其子宮内丞實信、其子左衞門尉實基、其子太夫判官基淸は、後鳥羽院西面の四人衆の内にて、承久三年北條泰時が爲に院ともに隱州へ流され、其子後藤判官基綱は鎌倉に有て、父が命を申受けて他人の手に掛けずして殺す。此基綱鎌倉に仕へ、北條義時式目を定め給ふ時評定衆六人の内也。後に左衞門少將に任ず。基綱八代の孫を後藤日向守康基、*觀應二卯年二月二十一日、尊氏公より美作國勝田南郡の地頭職を賜り、天文（安カ）三甲午年三星に在城すと云ふ。後藤豐前の入道了貞、同下野守基貞、同筑前守基忠、同帶刀左衞門尉廣字、同掃部介廣祐、同左近太夫祐景の子嫡子攝津守基兼次男杢之助隆門也。後に肥前入道了齋と號す。基政の父也。三男を喜多夫淸門と云ふ。杢三郎淸元の父也。基兼の長男を與四郎と云ふ。左近之介勝基と號す。次男杢五郎兼基、三男守三郎兼忠と云ふ。勝基の嫡女ハ左馬之介基政の妻女也。男子は杢之進基景也。末子を勝千代と云ふ。此外末々の流々外孫等記すに暇あらず。依て略す者也。

延原花房等が讒に依て浮田後藤不和と成る事

三星城主後藤左近亮勝基は、三德兼備の良將なれども、管領尼子晴久の代官川副美作守久盛、林野城に在城して國政を取行ふに依て、彼に隨身して有けるが、尼子家滅亡しければ川副が威勢壯然

としければ、智略を以て川副を退け、難波・江見・安東等をすかし随へければ、有元・新免・大野・粟井等いつとなく隨身して英田勝田兩郡を押へ、左衞門尉四品に任ず。浮田直家の聟となり武威を振ふ事隣國迄も隱れなし。爰に眞木山長福寺の衆徒等領山の外へ手を延し押領するに依て、山外の鄕士と共に爭論止む事なし。訴訟人日毎に增しければ捨置難く辿、頃は天正五年冬後藤左近・小坂田菅兵衞・難波與三左衞門三人を將として數多の兵を率し、一山を攻惱ましければ衆徒等難義して降參す。此頃備前和氣郡に延原彈正と云ふ者智勇兼備の士たりしが、英田郡の內河井の庄へ間者を入て掠取る計義をなす條、澁谷等の族注進するに依て、右三人の者共眞木山より河井庄へ直に打おろし、延原間者を召捕らんとす。此事を聞て延原が軍勢上山城へ楯籠りけるを責惱ます。延原勢手柄の勇士共なりければ、出向ひ〳〵戰ふ。此時眞木の城主を先に立て、山我・田淵・平井等澁谷が類族馳加つて多勢成れば、備前勢打負け敗北するを追詰て散々に戰ひ、敵の首數十取て歸陣する。大將三人共感稱に預り、中にも小坂田菅兵衞・難波長介・丸尾傳內等比類なき働して感狀を賜る。此軍に延原の勇士十一人雜兵共五十餘討れ大に憤り、眞木山へ密に使を立て衆徒等をかたらひ直家へ訴訟するとへ共、勝基は直家の聟成ば容易に許容もせざりしか共、同久米郡の內へ後藤家の旗下山下與四郞・難波唯六・垂井杢左衞門等相働き、花房が領地を責掠けるに依て稻屋直原等難波に及び、花房勢を加へて戰すと雖も多く討れて漸くに引取る。依之花房助兵衞此樣子を直家へ注進して讒訴する。又爰に周匝の城主佐々部勘解由・同勘次郞、浦上家舊恩の武士成が、延原彈正と領地の境をあらそひける所に、延原勢稻卷へ働き難義におよび、鷲山の城主保志賀藤內兵衞方へ加勢を賴みければ、家老秋山大津等加勢として延原勢を追拂ひ、此軍に延原勢多く討死す。延原大に憤り岡山へ參着して、後藤勝基自國の身にあらず、周匝の城主佐々部迄を味方に付て赤坂郡掠取られ候間、捨置なば大事たるべきよし讒訴する。花房が方より久米郡の內へ後藤家の旗下のもの共相働き、難義の旨未だ御大事計

難くと訴ける。直家大に驚き、此上は是非なく軍議評定あると雖、播州上月合戰半成ば暇なくして其年は終て、翌七年の春彌〻後藤と劍げきに及ばるる條一決して、則延原を先陣の大將に命ぜらるる由。勝基の奥方は直家の嫡女秀家の姉御なれば、斯不順と成る事氣の毒に思はれ、伯父七郎兵衞忠家方御臺所へ密使到來。依て三星城にも一族老臣等打寄り軍議延引成し難し迚、旗下の城の在所住の諸士へ急に催促をぞ出されける。

勝田南北の諸士馳集る事

此度浮田大軍を率し攻登ると聞えければ、催促に隨ひ馳集る人々には、小吉野庄猪股加賀守嫡子猪股孫四郎、大町右京長男大町甚右衞門•安東源左衞門•原田與五惣、諏訪の大宮司幸村右衞門•上原水主•福本助之進•福田將監•奥田與八郎、豐田庄に有元右衞門太夫•同七郎•豐田三郎左衞門•上原惣右衞門•福本惣兵衞•安東長兵衞•植月彥太郎、梶並庄に梶並彌次郎•富坂右京•戸國駿河•右手河內•小坂孫六•皆木衞門•廣戸新之丞•竹內與市兵衞•芦田源右衞門•菅間彌次內•笠井•三宅等、其外新野庄に芦田權平次•豐田健介•植月彥之•神田彌六•浪人仁木左源吾•今井久太夫、廣野庄に廣野一等•横部•井上、川邊に難波重郎左衞門•神崎與六兵衞、高取庄に高取右近•岩松一等下山•靑井、和氣庄に山本與次郎•和氣太郎•難波唯六•垂井杢左衞門•宮山喜內、勝間田庄に植月五四郎•赤堀孫九郎•福田佐平•龍門又兵衞•福島常仲、其外下山の一族位田•平田•福田等也。其外鄕士隱士追々馳來る。

江見兄弟鷹巢城へ籠る幷に難波安東三星へ荅事

林野城江見市之丞•同次郎兄弟は、海田村鷹巢古城を取繕ひて楯籠る。是は備前勢勝に乘て三星城へ押寄なば、小原樫村邊へ打て出で跡を切らんと計る義也。一族普代三百餘人也。爰に又難波安東

兩家は、是非三星へ招き入れんと評ずる旨は、安東は一族多き者故一身の存意を企る事計難し。難波は老功にて思慮深き者なれ共、嫡子六郎は去年上月落城の後京都に有レ之由、弟傳兵衞は藝州に仕へしと聞けば、一族纔に七八人にして甚無勢なれば、迚も居城を持こらへ候事は出來がたかるべし。併、此節の人心如何の變も計難しとて、勝基自筆に御頼みの書翰を認め山下六左衞門を使者として、三月十五日の夜半早馬にて難波居城へ赴案内を乞ひければ、下人共是を聞て三星城より山下六左衞門殿御越と告ぐるに依て、難波次郎太夫出迎へ客間へ案内しける。頓て利介出向ひ、六左衞門家老中條演舌して勝基の書翰相渡しければ、會釋して是を受取り謹で披見し、良有て我等義素より縁者と云ひ、殊に近來重恩に預り聊も疎意無之候得共、悴六郎去年以來歸國致さず、次男彦六舊冬より不快にして未相勝れず、家人共も所々へ他行甚無勢に付、三男次郎太夫を籠城させ拙者事は在宿仕るべく所存に候得共、勝基の御厚志を強て御頼みの義、別て老臣中懇意の義もだし難く、何角取散しながら登城可レ仕と返翰を調へ山下に渡しければ、六左衞門大悦して暇を乞ひ、夫より安東が居城山口へ赴きけるに、未だ夜の明ざるに城内に人音さわがしくしける故、少し控へて伺ひける所に、究竟の士二人旅出立にて出るを、徒士とも門前迄送り出てあひ別れける。不審ながら何げなく案内を乞ふて山下内に入る。樣子如何と見合しか共何の取込の體も見えざりける。依て相馬に對面して使者の趣を相のべ勝基の書翰を渡す。謹で披見し終て、扨思ひ寄ざる合戰出來の由、大將を始め老臣中心配の程推察仕る。併、此上も御和談相調候はゞ可レ然存じ奉り候得共、何分御籠城の御支度第一の御事に候。併難波は何と御受候哉と問ふ。山下答けるは、難波家の事彦六殿重病に付、斷るにも及度存意の由相聞えけれども、大將の御頼みの事故無勢ながら登城仕るべき由返答致されしと云ふ。相馬申樣、我等迚も其通、聊野心無レ之上は早速登城仕、及ばずながら、軍議評談仕らんと云て返翰認めける其暇に、老臣和田今井等酒肴を出し饗應する。山下何げなく今朝當屋形より旅人體の武士

罷出候樣見受け候。いか成人哉と尋けるに、兩人答けるは、彼等は三木浪人の由雲州へ罷越候由、近頃京都に滯留致し候て當家の若旦那に馴染の由、書翰を賴まれ持參候もの也と隙なく申ければ、山下扨は仔細なしと相馬が返翰を受取り暇を乞ふて立歸り、勝基へ捧げ老臣中へ兩所の物語致しければ、大將を始め老臣悅び、山下も宿所へ歸り休息すべき由仰ければ引下りけり。

難波安東三星へ籠る幷兩家由來の事

同十八日早朝、平野の城主難波利介武宗末子同苗治郎太夫・弟與左衞門宗吉・同重左衞門・福原彌左衞門家臣助五郎・堂滿六左衞門・衣畑七內、其外山本・赤坂・小坂田勇士十一人、足輕三十餘人、都合七十餘人、山口の城主安東相馬安貞・次男同苗鄕左衞門・同助之丞・同左馬之介・同平五郎・伊吹杢之進家人山下權六・原口七郎・西河內市兵衞・今西五郎作・山口伊平・安東茂太夫・原五衞門、其外勇士三十人、足輕三十五人、都合人數六十八人參着する。大將勝基兩人へ對面有て斜ならず悅び給ひ、種々饗應有て軍議御相談あつて、鞍置馬一疋宛を給り、大手口東の丸の大將に命ぜらる。柳澤太郎兵衞弓の者二十人、鐵炮足輕三十人差添て檢使として附られ、兩人柳澤と對面して、諸勢東の丸に積る。難波家の旗は鶴の丸に八幡春日兩神と號を書き、安東は藤の丸に八幡の號を書き、柳澤は花菱に裾黑に染めたり。難波次郎太夫・安東鄕左衞門・柳澤三人追手口へ人數を配り、利介相馬兩人は本丸に有て惣軍談をなす。安東難波兩家の由來を尋ぬるに、何れも藤原の姓にして、安東は左大臣藤原敎實卿の後胤にして、元弘の亂後醍醐天皇隱州に御下向の時、安東新藏人親政伯州船上の旅館に馳參て御神方に奉ㇾ仕。此時丸の字の印旗を下し給ふて、今に家の印とする。其子千代市丸親次、英田保大川庄ゝ地頭職を蒙り山口に在城してより、今相馬泰貞に至る迄代々相續して、英田保司也。難波は花山院家難波大納言藤原家國卿の御子國經、前の備前守に任ぜられ、御子孫此國に殘て、平氏の世に

*水島久作なる本書中或は久兵或は久俵に作り天神山記には久佐に作る何れが是なるか今原本の儘とせり

經俊・經家・經遠・恒房等、元弘の亂れに備前守宗祐、大塔宮御身方に奉レ仕、勳功あつて尊雲親王舞鶴の旗印を下し給はり、則家の紋とす。建武三年箱根合戰の時、新田義貞に隨て精兵十六黨の其一人也。宗祐五代孫紀伊守宗衡、山名家の旗頭として英田郡平野大ケ尾築て居す。其子大膳太夫可宗、其子左京之介宗久・其子利介武宗也。兩家共に名家也。

軍談評定手配の事

勝基老臣中へ軍評定承り度旨被レ仰出一に依て諸將出仕、西の大將の左座後藤左馬之介基政・同善太夫、其次難波利介武宗・安東相馬泰貞・柳澤太郎兵衛、右座は後藤左近・*水島久作・井上山兵衛・山下六左衛門・山本權内也。其外、福田・浮川・龍門・振田等也。相集る諸歴々には、廣戸新之丞・有元右衛門太夫・猪股孫四郎・安東源左衛門・大町甚右衛門・高取右近等、其外並居たり。于レ時後藤左馬之介殿、いかに各、周匝の城主佐々部勘解由は浦上家の舊恩を思ひて、浮田へ隨はずといへども、威勢に恐れ面をかたむけ家老共降人に出し、名家相續を賴置き其身城を渡すと聞えければ、鷲山の城主保志賀藤内兵衛大勇名譽の士ならばこそ今迄城を持こたへ候へ共、大勢に小勢なれば始終は落城すべし。急ぎ後詰の勢を遣しなば大利も得ばやと思ひ、たとひ落城するとも切拔けて助命をすべし。彼が當城に來りなば一方の將ともなるべき者を、見殺しにすること本意にあらずと申されければ、水島久俵、御尤の仰に候得共今朝忍びの者共罷歸り承り候に、備前勢鷹巣城を責るとて夜前眞木山へ取登り候由、後詰勢近附を見れば眞木山より打出で跡を切らば難義たるべし。此義克く御賢慮あつて然るべしと云ふ。勝基是を聞給ひ、さすれば備前勢は手に逢たる破れ城より責る也。何分保志賀事捨置難く、克々評義して救ひの勢を遣すべしと仰ければ、難波利介、御意の趣御尤に覺え候。鷲山へ密使を遣し返答次第に打立可レ申、當城に集る夫々に、諸卒の持口を極め可レ致奉レ存候。銘々受取場所により地

利を考へ、諸卒掛引等諸將の心得肝要に候と申ければ、一同尤と申し、保志賀へ密使は何れに宜敷やと申所に、相馬申けるは、陣中大切の御使成ば、老臣中御存寄も是あるや。左も是なくば拙者家來今西五郎作と申者、今年二十一歳大膽不敵の若者、御用ひ候はゞ仰付られ度と申ける。勝基御感あつて、幸の事とて今西を出されて家老後藤左近密書を渡す。大將より大切の使首尾克歸りういやつと仰を受け、今西五郎作出行ける。夫より持口の次第、先東の丸は難波安東兩家の族所緣のもの馳集る。中にも浦上の浪人後藤河内守久基・小堀備前吉秋・奥山源六友長・下山牛內正氏追々馳付ければ、此旨兩人より大將へ訴へければ、勝基何れも御對面有て、後藤河內守へは鞍置馬を給り、外三人へ鎗太刀を給る。又爰に備前國由津里城主たりし難波三郎左衞門、幷に、足井伊織兩人家來五六人召連れ、緣者なれば難波が手へ馳集る。則利介案內して御前に出る。大將大悅あつて、難波には馬一疋足井には鎗一筋給り、二手の將を命ぜらる。吉野の新免粟井等病氣に付、名代として新免より本位田駿河、粟井より須々木右京兩勢合六十餘人參着する。其勢程なく百餘人と成る。名有武士五百餘人馬武者三百餘人惣人數七千六百餘人と仰せり。東の丸難波・安東・柳澤三人の手勢勇士七百二十人、弓鐵炮足輕等二百五十人。西の丸は浮川將監・龍川又市・赤堀・福島、其外和氣勝間田の諸士勇士八十餘人、弓鐵炮足輕等、都合百八十餘人。南の矢倉は、難波三郎左衞門・足井伊織・福田左內・西山九郎左衞門等勇士三十餘人足輕雜兵六十餘人。北の矢倉は小坂田織部・同惣左衞門・有元右衞門太夫・豊田・梶並兩庄の諸士合勇士八十餘人、足輕雜人百五十人。本丸大將旗本は、後藤左馬之介・同喜太夫・家老後藤左近・水島久兵・山下六左衞門、其外當家普代の士百餘人、隱居分老人後藤肥前入道了齋・佐々木入道道階・江見入道幽齋・軍奉行井上山兵衞・山本權內也。南出丸後藤河內守・小堀備前・下山牛內・奥山源六、其外園田・青山・丸尾・芦田・西田・高取等勇士十一騎足輕五十人。明見に稻荷の森へ難波與三左衞門・小坂田勘兵衞・栖原藏人・植月鄉の諸士等六十餘人。小矢田口は猪股修理介・大町甚左衞門・原田

與三太夫、諏訪の大宮司安東源左衛門•上原主水•幸村右衛門•皆木勘四郎等が勢足輕百十餘人、垂井吾左衛門•長瀨與五郎小田亦四郎•仁木源五•今井久衛門、此五人は弓の者三十人連て、所々の山影に忍びて浮勢也。豐田參郎三左衛門•芦田源左衛門•竹内市郎兵衛•菅田笠井三宅六人は、弓鐵炮の兵五十人隨て長臺寺に陣取り、振田太郎兵一族十一人兵糧奉行として、足輕雜人等を連て手捌の役と定る也。其外新參の諸士大將の旗本に控へけり。銘々持口へ赴き地利を計り用意する。

今西鷲山より歸る見遣勢勝間合戰の事

去程に今西五郎作馳歸て、星賀が返翰を後藤左近に出しければ、左近大將の御前へ諸將を集め披見する所、返翰の趣は當城元より兵糧不足に付、最早長く籠城は成がたく、討死の覺悟に罷在候所、後詰の勢急々御著向被ㇾ成下ㇾのよし、御仁情の程不ㇾ淺大悅に仕候。助命して一方を打破り、伺候仕候。君の御馬前において、速に討死可ㇾ仕候。願はくは御加勢を下山猪の內古城へ籠め、吉野山の嶺に火を上げ給る成ば、城中一度に打出て、是非一方を打破り大將へ貴顏を得、各參會すべしとの事也。

此時今西を御前へ召連れ軍の樣子御尋に付、五郎作申上けるは、寄手城中の衰微を計り兵糧の道を留、火急の合戰は不ㇾ仕、見合居たり。某城中へ入込まんと靑野山の嶺より敵陣を見及ぶに、飯岡三ケ所に陣取り其間二丁計り成ば、吉ケ原河西に出で暮方を相待ち諸陣をあやしみ、周匝の川原より町裏へ忍び入り火を放ちければ、此間の天氣、頻りに大火と成り諸陣悉く相騷ぐ。其隙を伺ひ漸く罷通り、入城仕候と申上候。大將を始め列座の諸士、今西の計作驚入と御譽め有て、褒美として備前打の太刀一振給る。五郎作頂戴して面目をほどこしける。斯て後藤河內守難波與左衛門兩人は、勇士十餘人足輕五十人を隨へ、下山牛內を案內者として同二十四日の五ッ半時に打立けるが、牛內は古鄉の事故殊に先祖の居城なれば、時こそ得たりと笑顏して、諸卒に先立ち馳せけるが、位田の村中打過ぐれ

ば、片原に大勢の人音して、押寄する體なるぞ、油斷すなとさゝやく人音、森蔭にかゝる火も見えけるに、扨も不審の事と馬を止めて伺ひ聞けば、何ものにせよ通すまじと云聲して、騷ぐ體成ば場を見合ひ、備を立居る所へ鐵炮打掛鬨を作り掛れば、難波與三右衛門大音上、いか成者か名を名乘り勝負を決せよ。卒爾をば致すなと云ければ、森の内より答けるは、我等は眞木山の衆徒等覺圓と云大惡坊也。浮田殿に賴まれ、此勝間山に城を築ん爲めに昨日より爰にあり。其方にも姓名を名乘て見給へ卒爾には通すまじと云ふ。此時後藤河内守、かしこき坊主が高言かな。我は三星城より鷲山の城見遣の御加勢成ぞ。道を開いて早く通せよ。手向ひせば首を擧るぞと高聲に呼はつたれば、覺圓も答へ、存外なる過言かな。成ば手柄に通て見よとあざ笑ふて、其勢ひ山も崩るゝ計り也。下山半内急と案じ、御坊は當所の產成人か少し覺のある聲と云へば、覺圓答へて、左右人は誰人ぞ。我は下山半内也。浪人して漂泊する所、上方にて噂を聞けば合戰の樣子、後藤家に賴まれて古鄕へ歸らんと思付、朋友連達罷下るに、世評聞に所詮後藤氏負軍と聞えける故、俄に思付古鄕に歸り古城に栖籠り、浮田家へ降參して長く家名を殘し度き存念故忍び通るの所に、先刻より承れば、貴僧浮田家へ賴まれ給ふとあれば何か心置なし。先刻朋友共鷲山見遣など申も、若三星勢の旁哉も難レ計、僞を申て候。此上貴僧の手寄を以て能に計ひ玉はれと賴みければ、覺圓武道は勝れたれども智慧淺き者なれば、から〳〵と打笑ひ、左もあるかと得心せし所に、かたはらより、何分實否わかりがたし夜明け迄控へ給へ。夜明次第對面して兎も角と云ふ。後藤難波も半内が即智の計略如何あらんと見合居れども、承引せねば詮なし。若者共打破て通らんと云共、難波押て、夜中殊に森川に籠る敵勢卒爾してあやまちすなと云所に、河内守山法師に、此邊の田夫野人共何程の事かあらんと云まゝに、鐵炮を打懸け鬨つくり責かゝる。是を軍の始としていどみ戰ふ。闇夜なれども、敵の篝火を目當に頻りに鐵炮を打せければ、覺圓大にこまりいらつて下知すれども、備前より始の士二人足輕二十人計の事成ば、地利は知らず田夫野人

の者共、武具なくして脱うすならば、悉く打連れて皆ちり／＼に逃去り、今は漸く十二三人に成ければ、覺間も戰ひ盡てにげ去けり。此暇に時移り漸く夜明方に下山猪の內の城へ登り、下山一族普代の者を呼集めけるに、程なく百餘人となり、陣小屋を拵させ難波後藤兩人に勇士五人足輕三十人を殘置き、半內は勇士三人鐵炮弓の者召連、二十四日の暮方に猪の內の城を立ち、青野山の峯へ登り、相圖ののろしをあげて少し休足して樣子を伺ひ見るに、鷲山より受けの火をあげざる故、如何はせんと思ひながら、闇夜なれば木の根に取付漸々と鷲山近く忍び寄り、樣子伺ひ夜明を待居けり。

鷲山落城の事

鷲山城中は永く籠城して兵糧つき、討死と覺悟を極めて居る所に、三星より後詰すると聞て、思ひ留りて相圖ののろし今や／＼と待ける所に、城內に野心の者有て、本丸の丑寅の角より出火してもえ上る。是を見て三方より閧を上て責立る。思ひ懸けなき事成ば、城內大に騷ぎ上を下へと散亂する。寄手氣を得て責立る。城將星賀藤內兵衛少も騷がず、兼て討死と思ひ極し事成ば、討死して名を後代に傳よと、馬引寄て打乘り朱幣取て打振り、續けや／＼者共と一方を打破れと城門ひらかせ乘出す。鯰江又七・大津重左衛門・秋山重郎左衛門を始め我先にと切て出る。敵勢三方より取卷戰ふ。夜明方より四ツ時に至る迄戰ふ。中にも秋山重郎右衛門打物達者成ば、當るを幸ひ切て廻る。大津は大身の鑓を馬の平首に付けて多勢中を縱横馳廻る。秋山も痛手負ふて引退く。大津は備前國住人和氣五郎と打組て討死する。城將星賀も近附く敵を追拂ひ、小高き所へ登て軍の樣子を見居る所に、鯰江も漸く敵を打散らし馳歸り、いざ此隙に落給へと云ふ。星賀聞て、義者を討死させ生ながらへて何かせん。唯今爰にて樣子を聞けば、三星の加勢位田の勝間で眞木田の惡僧と大に戰ふと聞く。夫故延引する條、たとへ爰を落行とも諸方に充滿する敵、死耻をさらさんよりいさぎよく討死して名を末世

*惜しまぬ者は云々の誤なるべし

に殘さんと、云もあへず三間柄の大身の鑓を小腋にかいこみ、鞍かさに立上り、當城の大將星賀藤内兵衛基治武運に盡て討死するぞ。首をとつて恩賞にあづかれと蜘手十文字に乘廻し、當るを幸ひ突立ければ、此鑓にへきえきして向ふ者もなき所に、敵將兒島三保之介、きたなき者共がふるまひかなと云て、掛合せんとする所に、老武者一騎馳來り引留て申けるは、死者狂ひする者にあやうき振舞し給ふな。唯遠矢に射させ給へと、精兵ども散々に射る矢雨の如し。痛手數所負て今は叶はじと、馬引寄せ城下尾崎に上り切腹す。大將討死すれば、殘りし者共は思ひ〳〵に成にける。扨も下山半内は、漸々と近付き伺ひ見れば落城せし樣なり。されば民家へ立寄り尋るに、落城して城方殘らず討死の由を聞て、無念止む事なく、此儘歸るも面目なく思ひ、備前勢陣小屋近く忍び寄て見けるに、晝の軍に草臥伏寢入たる程なれば、足輕共へ申聞け五ヶ所に火を掛けゝるに依て、陣中大に騷ぎ鎧着せずうろたへ廻り、鎧着れども太刀鑓も持ぬも有て、爰かしこに逃迷ふ體を、纔かの人數にて首三ッ取て、小勢と見えざる内引取て下知して引歸る。猪の內の城へ番を付置き三星へ歸り、物語して諸士の勳功を申上ける。三人幷足輕入野久六へ感狀を給る。下山半內は舊所安堵の折紙を下さる。唯星賀討死を、大將を始め*惜をしむ者はなかりけり。

鷹巢城合戰落城する事

去程に延原彈正は、江見市之丞・同次郎兄弟が籠りたる鷲巢の城をせめんと、眞木山へ楯籠り住僧と談ずる所に、鷹巢山と云は、嶺高く谷深く切れて要害堅固の城成ゆゑ、林野矢鑓等の城を捨て楯籠る。又小勢なれども、小坂田淸水等の老臣ども何れも勇士の聞え有者なれば、うかつには攻難く、山家八名の庄官幷に田夫共をなづけ賴み、南の谷より火を放ち申さるべしとて、頃者三月末の事成ば、此間の天氣といふ折節、東風の吹きければ幸ひと燒立ければ、城中大に難儀に及ぶ。殊に江見家衰

*自國は治國の當字なるべきか

微して小勢といひ、江見源内左衞門・同九郎次郎等の名譽の一族、國の衰微を計り、秀吉を賴て自國*せざるゆゑ、漸々普代の家來三十餘人、其外浪人田夫の野人ども、山中殊に路次惡敷遠所なれば、三星の落城の後ならでは、敵來るまじと油斷をして居る所に、案に相違して俄の事なるゆゑ、江見兄弟諸卒に向ひ申しけるは、當家の滅亡爰に來れり。雜人どもは勝手次第に落し、普代重恩の者共は我馬前にて討死せよと申聞け討て出る。是を見て我おとらじと切て出で、をめき叫んで防戰す。家老小坂田三郎兵衞・清水帶刀等、むらがる敵の中へ面もふらず戰ふ所、備前の池土佐と云者と渡り合、千變萬化と働きしが、終に帶刀受太刀となり討れける所に、清水が郎黨廣田七郎兵衞敵の中深く切り入りしが、主人討れしと聞て敵を捨て取て返し、池土佐と渡り合組て落し、難なくふせて首を取り、主君の首を取返し一所に埋置き、軍濟で古郷播州へ歸り、江見次郎は亂軍の中に討死する。此透に江見市之丞・小坂田三郎兵衞兩人は切拂って助レ命。其外打ちつ打れつ、死殘る者共は思ひ〳〵に逃散て、終に落城するぞ是非もなき。三月二十七日の事成り。江見次郎を始め討死の人々の首塚は、海田村卒都婆崎にあり。

三星軍傳記　卷一終

三星軍傳記　巻二

延原彈正間者を入て三星の要害を見せる事

去程に延原彈正は、鷲山鷹巢兩城を思ひの儘に攻落し、今は三星城に成りければ、密に副臣*池上源太兵衞を遣はし、三星要害を見せけるに、池上悉く繪圖にして言上しけるは、三星は山高ふして峯三つにわかれて、中の峯を本丸と號し、東西南北に出丸あり。山の高さ凡三丁餘りと見え、西は山續きといへども谷深く切れて、往來有て平地に同じ位、たか〳〵に堤を築き柵を結び、北は名木より流れ出る川にて亂杭逆茂木透間なく、東は名にあふ大川の上にて嶮岨巖石にて鹿猿も通りがたし。大川口は芝土手高く築て大木戸の外に平場を殘し、川岸にさゝくを結び入田耕作三丁餘り、堀をほり堤高く築き上げたり。又三倉田長臺寺といふ小山に砦を築きたり。中々容易には責がたく覺え候。能御賢慮あつて然るべしと云ふ。是を聞て彈正始め諸將評議まち〳〵なり。何れ急に責取る事成がたき趣使者を以て岡山へ注進す。岡山にも評定有て、所詮延原が力に及ぶまじと、阿部小平太を奉行として兵糧米數十艘積登しける。

此頃漸く勝間城を成就して、延原彈正二十九日の夜眞木山より勝間城へ積(移カ)り、鷲山、鷹巢兩所に於て討死のものを改めけるに、池田土佐守・光石源吾・藤田惣藏・藤野牧平・矢田權六・戸田武平次、其外勇士十八人、足輕雜人等二百三十八人、比類なく働きしたる人々には、兒島三保之介を始め延原彌三郎・池上九郎兵・河本與太郎・澁田作卜、其外勇士十一人、夫々勲功の次第書認め岡山へ訴へける。爰に諸勢評議しけるは、是迄にさへ是程死せしが、三星を責ば幾人か討死せんと、片づを呑んで居たりけり。

*副臣は服心の意カ

平田合戰味方勝軍の事

扨も三星城中には、諸將を集めて軍評定しけるに安東申けるは、勝間城へ夜討を懸け、勢の付ざる先に追崩し然るべしと云ふ。後藤左近、敵大勢成ば卒爾の軍して味方多く損亡せば、集勢なれば日々に減じ申べし。能御賢慮有べしと云ふ。難波利介、各申さる所尤に覺え候。左近殿申さるゝ通り、味方敗軍せば勇氣おとろふべし。先今の内出立して平田へ出張して湯の郷の下山影に伏兵を仕置き、夜明て敵來りなば、弱々と引取り去らば跡を追ふべし。其時伏兵横鑓を入て責立てなば、必定勝利有べし。手始の戰ならば深入せぬ樣にして、少し成とも勝軍して味方の勇氣をまし、其間に勝間を責ばやといふ。是を聞て安東始め皆尤と同じける。難波次郎太夫・小堀備前兩人に、勝れたる勇士二十人、足輕五十人差添、四月朔日夜半に打立ち位田平田の高見に、安藤助之丞は、粟井が家來須々木右京が手の者共鐵炮の上手成ば、是を先に立て、勇士えらみて十三人都合六十餘人、湯ノ口尻の山影に忍び居て、敵追來らば不意を打たんと出立ける。又敵には多勢と見せん爲、後藤喜太夫を將として、打隨ふ諸士には安東源左衛門・佐々木新三郎・流江與三、其外勇士十餘人、弓鐵炮足輕五十人、都合百餘人林野城へ楯籠る。藤に丸の旗朝風に吹なびかしてすさまじかりし次第也。明れば卯月二日早朝、勝間城其外川東に陣取ければ、備前勢ども是を見て三星勢逆寄せんも計り難しと、油斷をすなとかたづを呑でさゝやきける。諸將共評するには、三星城勢ひ日々に增と見えたり。林野城にも旗手見ゆる物見せよと云所に、何にもせよ平田の出張何程の事かあらん。追散して手並を見せよと、若さむらひどもすゝみけるを、彈正堅く制して、敵地の利を能辨へて出張する事なれば、容易には懸り難しと差留ける。是非なく控へ居る所に、川東下倉敷に陣取たる者共、あれしきの小勢何程の事あらん長評議詮なしと、下知をも待たず打立ち、藤野七郎太夫馬に鞭打ち、早川岸に打のぞみければ、澁

田孫惣・大構權平つゞいてさつと乘入て、水嵩高き大川なれども、何の苦もなく打渡り、平田の陣へ押寄する。此時勝間城より是を見て、若者共が卒爾の軍して、深く取者哉と見物して居たりしが、藤田大構諸軍を惣懸りにせよと云ふ儘に、ひた〳〵と押寄せ、無二無三に攻かゝる事といへども、足輕共にせり合ふて難波小勢等緑引に引ければ、備前勢勝に乘て追懸る。手近くなれば引返し少し戰ひ、暇有ば引き、難なく湯郷の小川邊迄引寄せ、兼て工み置たる事成ば、安東須々木に下知して鐵炮頻に打せ、手負死人多く、たまり兼て我先にと逃ける所に、安東尾崎をつたひ峯より坂落しに責かければ、備前勢大に敗北して、大構權平は須々木が手の者藤生彥七が鐵炮に當り、馬より逆樣に落て死す。澁田も安東が手の者黑藪佐內と渡り合ひ、既に危き所へ、藤野かけ戾して助太刀して漸く引取る。其外の者共は今日を限りと戰ふて、ぶんどり高名したりけれども、早暮方に近附ければ安東下知して、軍は是迄なり長追すなと諸卒を引上げ、思ひの儘に勝軍して引取ける。安東が手へ兜首三つ、須々木が手へ一つ、其外捨て逃げたる武具取持せて勝鬨を上げ引取りけり。三星遠見の者馳歸りて勝軍の趣言上す。もの始よしと噂とり〲成處へ、安東須々木立歸り、兜首四つ大將の御前に捧げ、勝軍の次第物語しければ、大將を始め諸將御譽あつて、安東須々木藤生彥七三人へ感狀を賜る。何も面目也。

位田合戰敵味方討死の事

扨三星城には、今日の軍に勝たりとも、敵大軍なれば夜討抔入まじきものにもあらじと、持口堅固に相守るべしと觸れられて、明日は此勢に勝間城を追落せよと軍議有て、明三日打立つ人々には後藤河內守久基を大將として、相隨ふ人々には、小坂田惣右衞門・水島久作・有元七郎左衞門・福本惣兵衞・上原惣左衞門・幸村右衞門・芦田源左衞門・右手河內・福田將監・皆木右衞門・小坂孫六等十一騎、弓鐵炮の者ども都合百六十餘人、其夜八つ時半に打立つ。其次備は難波利介武家大將として、相隨ふ

者は、楢原藏人・岡崎半吾・大町甚右衛門・原田與五惣・豊田三郎左衛門・植月五四郎・水島彌市右衛門・赤堀孫九郎・山本權平・高取源左衛門・奥田與八郎・梶並彌次郎十二騎、其外名有士三十人、弓鐵炮の者都合二百餘人。跡備は後藤左馬介基政を大將として、相隨ふ勇士山下六左衛門・西山九郎右衛門・難波重郎左衛門・高取右近・龍川又市・福田左門・間島右門、其外植月・廣野等の鄕士三十餘人、弓鐵炮の兵六十人、都合二百三十餘人、夜の明方迄に打立て、先陣は位田の入口に陣取り、次は平田下少し高見に備へ、勝間城を見渡す所に、平田上山の尾尻に陣取ける東川の勢押として、安東梶之介・柳澤多郎兵衛・有元が家臣鷲田三郎を始め岡本・芦田等、戸國駿河・右手右平太・豊田が家臣野々上藤左衛門・國留治部等勇士十一人、鐵炮の者五十人付て百餘人、畑仲の耕地に陣取る。此時勝間城には夜討の懸らん事を恐れて、かゞりを數多たいて足元の用心計りして、遠所の事は心に懸らず居たりしが、夜明て見れば敵陣近く早押寄する勢成ば、何も持口を堅固して見えける所に、何ものゝ仕業にや、勝間城より西北に當て在家に出火出來て、山林へもえ上りければ、城中大に驚き騷ぐ體なれば、先備後藤久基、諸卒に下知して城外近く押寄せ、鐵炮を打せければ、跡の陣も同音に関を作り、惣がゝりに責戰ひける。辰刻より午刻迄打ちつ打たれつ揉みにもんで戰ひける。城方少し引色なりければ、年頃二十餘と見えける若武者、栗毛の馬のたくましきに白あわふかせて馳來り、きたなき味方の振舞哉、かへせ〳〵と云儘に、三尺五寸の太刀を打振て、當るを幸ひ切て廻れば、城方の兵是に氣を得て盛り返し、千變萬化と働きけるに、河内守の先將切立てられて見えける所へ、西山九郎右衛門貞直と名乘て、諸卒を勇め踏留て防戰する。是を見て件の若武者馬をよせ、備前の國の住人兒島甚三郎高藤と云者也。いざ組給へ西山と云て、太刀投捨て寄ければ、西山につこと打笑ひ、太刀投捨てむんづと組み、兩馬が間にどうと落ち、上を下へと揉み合しが、西山無雙の大力なれば既に兒島を取て押へ、首かきゝつて指上げたり。兒島三保介こなたの方より是を見て、云甲斐なきやつばらかなと、

諸卒をいさめ西山を見懸けて打て掛る。西山ひるまず諸卒をいさめ防戰すといへども、弟の敵と怒憤の太刀先にて、味方の兵切り立てられ、西山も既に危ふく見えける所へ、難波武宗諸卒に下知し、西山討すな勇めや／＼と云儘に、眞一文字に掛立てなんなく兒島と西山とが間を乗りわけ、西山を引上げんとする所に、兒島三保介直高にて候。難波殿と見えしはひが目か、備前鍛冶の刄物の切あぢ御覧候へと云ければ、難波しづ／＼と馬立直し、間近く成て駒をひかへ、三間柄の鑓を杖につき高聲に申けるは、御邊當手の將兒島殿にて候や。仰の如く難波利介武宗にて候。我等若年より鑓少し遣ひ覺え候。足下得物はいかにといふ。兒島太刀にて候といふ。難波持たる鑓を捨て三尺二寸の太刀をぬいて戰ひけるが、双方名高き勇士なれば、千變萬化と秘術を盡す。敵も味方もかたづを呑て見物して居たりしが、如何したりけん、兒島が打はづして引く太刀、難波が甲を打落されて大わらはに成て戰ひしが、兒島が家來助太刀せんと馳來るを見て、難波が家來衣畑七内馳來り、最前難波が捨たる鑓を取手も見せず、兒島が馬の太股がばと突ければ、さしもの駿馬も前膝を折て伏にけるを付入て、難波が打太刀に兒島米かみを切られてよわる所へ、飛掛て取て押へ、首かき切て差上げたり。是に氣を得て味方勇を振ふて責戰ふ。彈正は賴切たる兒島兄弟を討れ、今は如何せんと鑓を落し、亂軍の中へかけ入て死者狂に戰ふ所に、河內守落合せて双方手だれの勇者成ば、切先より火の出る計り戰ふ內、久基危ふく見ゆる所に、上原惣左衞門・幸村與七郎・皆木・福田等馳集て、彈正を中に取込ければ、彈正が家來日笠の者ども十餘人馳付て、火水に成て戰ひしが、彈正數ケ所痛手負ふて危き所へ、上原・幸村我討留んと突て掛るを、日笠次郎懸ふさがつて防戰す。此時佐瀨の穢多見物して有りけるを賴み、彈正を負ふて位田村奥山さして逃退く。日笠の兄弟討死して敗軍す。日は暮方になりければ、此日の軍は是迄也と、勝閧を揚げて引取ける。扨川東押として畑仲に陣取たる安東梶助・柳澤等は、川西の軍見物して徒に日暮し引取るも面目なしと思ひ、日暮て後是非に足輕共に計事を云含

*大仙は大神山にして即大山なり大山に下山神社あり下山氏の創建に係る下山氏と大山との關係ありしこと大山雜考に詳なり就いて見るべし

め、備前勢の陣取たる上の山へ火を放ちければ、四月初めの事なれば、盛にもえあがりければ、備前勢大に驚き騒ぐ所へ押寄せ、鐵炮頻りに打せければ叶はず、小原をさして逃行を、追付にして雜兵の首を五つ取て、是土産として引取けるこそ勇敢。夜に入り歸城して討取首大將の實檢に備へ、軍の次第言上せられければ、難波・後藤・西山三人に、勝基公自筆の感狀を賜る。其外安東・柳澤・幸村與七郎・上原惣左衞門・皆木・福田、難波が家人春名作五郎・衣田七內、有元が下鷲田三郎等に御褒美を下され、誠に弓箭の面目也。此日の軍に味方討死後藤が手へ小坂孫介、小坂田が家へ三田權六、皆木が家へ大佛太郎、難波が手に岡崎半內、大町が家人谷口義道、後藤左馬之介が手に西田七郎・廣野平四郎・龍川亦三郎〆八人、足輕雜人三十餘人、備前勢大將分三人、勇士十六人、足輕雜人都合二百三十餘と云ふ。延原彈正漸々穢多に助けられ助命せし故、世の人口草に

　をしむ名を捨て逃げ行く宇喜多勢穢多におはれて命延原

備前勢下山の城を責むる事

扨勝間城には、今朝岩見田の在家を放火せしは、下山等の奴原のけいさく成るべし。にくきもの共今朝猪の內城を責落せ迚、明日四日卯の刻に、津田與市左衞門・吉田佐五兵衞兩人を將として、諸勇士鐵炮の者都合百餘人勝間城を打立て、下山猪の內城へ押寄せける。元來此城は下山等代々の居城にして、要害堅固の城なれども、天文の頃尼子勢の爲に落城す。其時半內が祖父筑前守清氏、其子大膳久氏・源五郎氏勝籠城すといへども、大勢に取込られ清氏久氏等討死する。氏勝は漸く切拔て伯州大仙へ逃行と云ふ。此節落城して開城成は、俄に惣廻り程取繕ひし事なれば、持こらふべき樣なけれ共、此儘明渡すにも無念に思ひ靜まり返て居たり。寄手の者どもふしんながら、先鐵炮にておどし見よとて頻に打せけれども、纔かの人數なれば一ヶ所へ寄合故、少しもさはる事なく、寄手の者

共は早落失せて明城成と心得、切岸近く攻寄する。用意の石を當るを幸ひ投懸けゝる。寄手大に難儀して石に打たれて死する者多く、我先にと逃下りければ、しすましたりと城內の者落支度して、間道より落延けり。下山次郎兵衞●同多郎左衞門跡に殘て、城に火を掛燒落しけるを見て、寄手共城は落たれども、敵の首一つだにも取らざる事殘念成ば、追討にせよとひしめきけれども、思ひ〳〵逃延て一人も討れずして三星城へ馳付ける。此時前手には津田與次郎●小井彥介●今村權內等、名有士討死し、手負の者三十餘人と云ふ。偖も岩見田を放火せしは下山と心得て責たれども、是は後藤左馬之介殿謀にて、西尾左平が宵より忍び行て放火せしは、下山家の難儀とこそ云あへり。

三星城勢勝間城を攻むる事

三星城には諸將評議あつて、翌五日、安東相馬泰貞●山下六左衞門基則を將として、相隨ふ諸士には富坂右京●奥田與八郎●樫村彥六●石田三郎兵衞●岡田權六●山本與次郎●難波唯六●垂井五右衞門●小田又四郎●長瀧三郎●江田多郎等十一騎、其外名有勇士二十餘人、足輕鐵炮者二百餘人先陣に進む。其次難波三郎左衞門●井上山兵衞將として、梶並彌次郎●戶國帶刀●福本惣兵衞●竹內與市兵衞●芦田源左衞門●豐田伊介●瀧野三左衞門●大町喜兵衞●今西久兵衞●安東佐平を始め勇士二十餘人、弓鐵炮者都合百八十餘人、跡は後藤喜太夫殿旗本の勢百餘人、難波與三右衞門●同重郎左衞門●檜原藏人●高取右近●和氣一族、神崎與五郎●福田將監等の勢集て二百餘人、惣人數七百餘人、夜の明けざる內に位田耕地へ押寄せ三段に陣を取ける。扨城內には下山城を責落し、後に敵なければ是を賴みに籠城して、靜り返て居る所へ、先陣山下かた近々と押寄せ鬨を作りけれども、人音なし。山下强勇成ば諸卒をはげまし、柵の木を引崩させ我先にと攻入ければ、近く引受け城內より鐵炮頻りに打せければ、山下勢多く手を負ひければ、安藤是を見て楯を用ひ漸くに引上けれども、城方の將共深く計て追討せず。

切戸口を堅固して出合打を見合せ、攻近付ば弓鐵炮にて遠矢に射て一人も出合ざれば、味方の損亡のみにてすべき樣なく、諸將評議して其日は徒に引取ける。爰に山下六左衞門は手勢多く討れ無念に思ひけん、手のもの二人引連れ殘て日をくらし、川を傳ひて城下を忍び下へ〳〵と下りける所に、備前より兵糧を積登したる船數多あり。河岸に米穀多く積かさね有けるを見て、用意の火道具を出し、何げもなく立廻り、數ヶ所に火を放ち置き、又川に入逃延、三人とも無事に立歸りける。此火えん〳〵と燒上りけるを見て、城中大に驚き、うろたへ騷ぐ事大方ならず。初の程は夜討と心得て、銘々持口の用心計りして米穀の燒るを見やりもせざりける。人音もせざりければ、雜人共寄合ひ火は漸くに消しにけり。此時味方引殘りて責なば勝間は落すべきに、諸將思慮なき故とさゝやきけり。山下が働き皆感じけり。大將御稱美あつて感狀を賜る。今朝味方の者は山下が家來樫淵彥七・安東家人彈次兵衞・溝口養太夫始め十六人死せり。

延原彈正長光寺を招き賴む事

扨も延原彈正は、數ヶ所痛手を負ひ治する事なく、諸卒も悉く勞れ、其上備前より積登せたる兵糧數百石燒失ひたれば、大に困り、日笠傳內を以て岡山へ言上す。加勢を乞ひ燒殘る兵糧米を城內へ取入れ、只籠城堅くして、三星城に變もあらば忍びを入て兵糧を燒捨てんと、肝膽をくだく折から、眞木山より使僧來て申樣は、此間の合戰の樣子外より承り候處、三星城兵粮乏しく、永く籠城相なり申さず、女童老人子供夫々緣者の元へ落し遣はすよし。然ば籠城の士ども如何せんと、思ひ煩ひ居り候樣覺え候。湯鄕村長光寺三星城出入の僧にて候間、彼を御招き有て御含められて、難波・安東・山下・柳澤等の人々と味方に參候樣、謀計を厚く御賴みあれかしと申ければ、是を聞て彈正大に悅び、即時に長光寺へ使者を以て相招きける。長光寺は元備前の產にて、當時浮田家中に所緣多き人なれば、

辭退にも及ばず參られければ、さま〴〵饗應し叮嚀に盡し其後閑所へ招き、延原長光寺に、御見聞の通り味方敗軍、此上は貴僧の御智略を以て、三星落城の計義頼入と慇懃に申ける。長光寺答けるは、大切の御頼に預り近頃迷惑仕る。然共我とも思召御頼みの義、如何樣とも計見申べし。併大將分の人々を味方へ招くこと致しがたかるべし。去ながら、御望みの人を仰聞れば幾重にも計ひ申べしと云ふ。彈正大に悅び、願くは難波安藤兩家の人々、其外井上・山下・柳澤等の者共は、容易には降申間敷、何なりとも貴僧の御存じよりに計ひ給はるべしと云ふ。長光寺申樣は、恩賞の地を承り度と申ければ、諸將集て評議すといへども、何レも他國人計り成れば不案内の所に、角南隼人と云者素英田郡の角南村の產にして、角南伊賀守入道法印が子成れども、隼人、守を招き尋けるに依て申ける樣は、安東家の事は數代英田の保司なれば、本領の外江見大川の庄山家等宛行はれ可レ然。難波家は鎌倉の御代より三十代、盛衰は候得共平野・楢原等の本領ははなれずと承り傳候。本領安堵せしめ、勝田郡小吉野庄司に命せられ、勝田北分の諸士等難波が武威に恐れ、降人と成り、後月の手間入なく可レ然樣存する所也。豐田西の庄、柳澤に梶並庄、山下に植月鄕にて可レ然旨申ければ、彈正長光寺等隼人が物語を聞て、尤も可レ然とて其旨厚く賴まれければ、長光寺彈正とかたく契約して、計義相調ふ上は、直家の御眞筆の折紙を賜はるべく由、約をなして長光寺退出せられければ、角南隼人を使者として岡山へ注進す。加勢延引なき樣を願ひ遣はすこそ道理なれ。

三星城變あつて新免粟井等引拂ふ事

此頃、延原彈正引籠つて軍せざれば、如何せんと評議に、諸將連終日詰の丸へ相談し居たる所、新免家名代本位田駿河晚方下城しけるに、駿河が家來香山半六と云者、主人より少しおくれて引下りけるが、後藤左馬之介殿の前を通りけるに、香山主人におくれし故そこ〳〵にして行過ぎけるに、

青木强て呼戾し爭論に及び大に戰ひ、終には香山を討ち青木も手疵を負ひ、本位田は斯くとも知らず陣屋に歸り、香山が歸るを相待つ處に、粟井が家人横田權內立歸て斯と告ければ、本位田大に立腹して須々木共に、横田に事の樣子を問ひ見るに、右馬之介殿御前禮儀を咎め、其上主君駿河事も禮を知らずと非法するに付て爭論に及びし處へ、互に拔合せ戰ひしが、青木危ふく見えける所に、右馬之介殿足輕兩人助太刀して討せし由。是を聞て駿河守、基政へ訴へける樣は、香山無禮の段は恐入候得共、御糺明も是なく無沙汰に打果し給ふ事、承引仕難く候間、此上は青木を御渡し被レ下候樣仕度との事也。然れ共左馬之介殿承引なく、其上本位田が事迄非義の沙汰申されし故、兩人ども大に立腹して、其夜密に陣拂ひして和田の東光寺へ引取ける。跡にて大將勝基聞し召されて、左馬之介が計卒爾の至り、大將たる者は、贔負の沙汰なく糺明して慈悲を專らに可レ計に、不速の至なれば迚甚御機嫌惡敷、後藤左近より安東難波兩人を招き、御相談これあるといへども、早兩家の者引拂ふて跡の事なれば、難波安東兩人より、衣畑與左衞門和田源藏兩人を使者として東光寺へ遣はし、本位田須々木等に對面して兩家の書翰渡し、樣々申なだめけれども承引せず答ける樣は、御兩使の御厚志不レ淺忝覺候へども、一旦陣拂ひ仕是迄引取候事、無二餘儀一御斷に及び候。尤兩公御懇意の旨は、兩君どもへも具さに申聞け、追々御禮答に及び申べくとの事也。兩使の趣難波安東、大將へ申上ければ、暫く御返事もなく、良有て仰けるは、左馬之介が思慮なき故破れの端を求めしと仰られて、餘の御事も仰せられざりければ、兩人も返す詞もなく感じ入てぞ居たりしが、良あつて利介申けるは、いまだ年若の御事故、少し强將たる御生付に候得共、我等御諫言申入度奉レ存候。唯御立腹を安じ給へかしと申ければ、相馬も共々申なだめ漸に退出する。誠に勝基の仰の如く、是味方の破れの端と成こそ、是非はなしかな。

長光寺三星城へ登り計義の事

扨も世の諺にも、恩を仇にて報ずるかや。長光寺は三星城に出入の僧にて、後藤家の恩義淺からざりしか共、延原彈正に賴まれ、開師上人より重恩の後藤家を覆さんと胸だくみして、三星城へ登城し大將勝基公の御前に出で、軍中御見舞申入れ、夫より山下六左衞門が宿所へ尋ね、對面して軍中御見舞の挨拶終て後、備前勢敗北の事噂終て、扨所々合戰の樣承るに、味方裏切有て落城する事多し。よつて眞木山僧たち、山下井上兩使の內を進め與よ。御承引に於ては恩賞は望みに任せ申べき旨、內々御越といへども、本意ならぬ事と思ひ斷り致し遣はし候得ども、再應の相賴み越に付、若御當家の御運末成時は敗軍の時の降人とも違ひ、一廉の身上にも相成られ候事、無沙汰仕置も實意にあらずと御慇意に任せ申入候間、御賢慮あつて然るべしと云ければ、山下聞て答けるは、如ㇾ仰左樣なる事も軍中の習ひ無事にはあらねども、井上が事は存ぜず先拙に於いては存もよらずと、苦わらひして座を立退き、奥に入て出でざりければ、長光寺手持無沙汰に退立して東の丸へ赴き、難波を尋ね取次を以て對面致し度旨申入ければ、程なく利介出向ひ對面する。長光寺軍中見舞厚く述て座を進みより、此度愚僧無二餘儀一眞木山に賴まれ、密事申入度登城仕る。極密に御聞被二成下一ば大慶に奉ㇾ存と平伏して演ければ、難波何事を賴まれ給ふぞと云ふ。此間の軍備前勢敗北の體、夫に付御兩家の儀は御緣者の儀は兎も角も、後藤家重恩の御家にも之なく、猶又浮田家にも危*味には夢々存せず候間、當城を御開き有て宇喜多家へ御合體候はゞ、御本領安堵の外安東氏へ江見の庄半分山家五ヶ村林野內等、難波家は御一族御本領の上林野檜原等一圓に參らせ、勝田北分押の爲小吉野庄司に御取持申べし。能々御賢慮有て然るべしと云ば、難波答けるは、足下申さるゝが如く、拙者兩家は普代には是なき事はいふに及ばず。又浮田家も差て遺恨あるにもなけれど、餘義なく後藤寄て籠城する

上は、今更浮田家の招きに應じ武名を穢すこと罷成らず。此上は浮田後藤の和睦を願ふ所也。此義相調ふ上は恩賞の望みなし。其元は當城へ出入して重恩に預りながら、眞木山邪僧に組して後藤家を亡ぼす企心得がたし。以來當城へ立入事無用たるべし。早々下城致すべしとはぢしめられ立出ゑ所もなき折節、柳澤彌市郎山下が方の樣子を聞て立歸り見れば、長光寺難波にはぢしめられてはう〳〵の體にて立出んとする所なるに、出合頭に惡敷坊主め首振切て取せんと飛掛るを、彼が兄太郎兵衞暫待てと押留て、是長光寺能聞け、此後味方に返り忠の者出來なば愚僧が首を一番にはぬるぞ、先夫迄はゆるし返すとて仲間共に追出させければ、大膽不敵の長光寺も人の見る目も恥かしく、衣の袖を引かむつてぞ歸りける。是よりして若城内に逆心の者もあらんかと、互に心置合けるぞ道理なれ。此間安藤が家人西河内市兵衞といふ者、此頃の合戰に手疵負て密に入湯して居たりしを、長光寺招き寄せ件の事を語り聞せ、何卒主君浮田方へ申なびけなば、其方事も浮田御直の士に取立て、大村の主に致すべしと云ければ、市兵衞大に悅び、何卒主君相馬を御味方に合體仕候樣、身に替て取成申べしと受合ひ、其夜密に城へ歸り主人相馬に物語りして嘶しけるに、恩賞地無二相違一條々契約證文、延原が血判したるを取歸り見せける。相馬逆心の心は夢々なけれども、思慮深き者なれば、何卒して彈正を討て、備前勢を追崩さんと肝たんをくだく折からなれば、幸ひかなと思ひ付一途に胸を定め、硯引寄せ返翰して、市兵衞に渡す。下郎成ば悅て立歸りける。其文曰、此度我等を其御陣へ招き給ふ事御厚志不レ淺覺え候。然ば明十六日夕密に長光寺へ罷下り候間、近頃に候得共其許樣にも御出來被二成下一ば、直々得二貴顏を一幾重にも御閑談申入度候。心事は其節に可二申談一候如レ件。と書たりける。相馬が工みは、彈正を長光寺へおびき出し討取企也。萬一不レ參して彼が城へ招きなば、討死せば是非彈正を討て本意を達せんとの志し成しに、跡にて思へば浮田の運強く、後藤家の滅亡時來りけん、安東不審を受けて、非業の死を致す事是非もなき事かな。

安東相馬延原を謀討評議の事

雀は鷹の心知らずとかや。西河内市兵衛は、主人相馬へ謀書を以て長光寺へ馳歸り、則延原への返書を渡し、相馬口上の趣を謹で相演べければ、長光寺大に悦び直に勝間城へ馳行き、相馬が返翰を彈正に渡しければ、彈正披見して諸將を集め是を見せければ、何れも大悦して評議の上、彌〻明十六日夕貴寺へ罷越し對面の上軍談申入るべく旨、貴僧宜敷申達し呉よとの事にて早々立歸り、西河内に委細申聞、何れ双方とも忍の事なれば、其方供して平士體にて罷越可レ然と申ける故、其旨歸て主人相馬へ言上す。仕負ふせたりと大に悦び、去ながら勝基に無沙汰に計ひ候義も本意ならず。若又許容なき時は、折角存立たる大望を無げに成すこと如何せんと、親子相談しけるが、悴鄕左衞門申様は、一命を投打若仕損じ給はゞ後代迄御名の穢れ、何分にも難波殿へ相談申然るべくと云て、密に難波武宗を招き、始終の樣子を語りければ、利介聞て面白き計義かな、今に始ぬ足下の計略、彌彈正長光寺へ參るならば勝負有べし。足下親子計にては萬一仕損じなば疑ひを受る道理、兩家の手の者撰出し、强勇十八下部に拵へ召連れられ度、鄕左衞門、次郎太夫兩人は鐵炮の者二十人連て、道路に伏置き彼が人數の多少を見て計らふべし。計略の坪に落ち彈正は討留るとも、是非一方を切破り歸らんと働く者の有るはひつぢやう、其者共を生捕にして事を計り、此者共に案內させて勝間城を乘取給へ、大將の御前は某請ケ物と勇みにいさむ。兩人が心の內ぞたくましゝ。

安東相馬不慮最期鄕左衞門并上を討事

定なきは人の身の上かな。安東相馬が次男に鄕左衞門と云ふて、今年十九歲にして器量骨柄人に勝れ健氣なる若者成しが、山下六左衞門が妹玉菊といふ女、大將藤基の奥方へ仕へて有しが、是も人

に勝れし美女成けるが、いつとなく郷左衞門を見初、戀したひける事限りなく、御臺所是を察し玉ひ不便に思ひ、難波利介を御賴み有て相馬方へ御相談ある。然るに山下が素性を尋見るに、今當家に於ては小身なれども、素赤松家の門葉にして由緒正しき者なれば、御臺所の仰に任せ可ㇾ申旨返答に及び、昨十三日吉日なれば、軍中ながら婚姻の取結び相調ひける所に、右婚禮に玉野といふ女を御臺所より附られ、東の丸に泊りて本丸に歸り、御臺所へ始終の樣子申上げる時に、右御禮として山下六左衞門伺公して、御前の禮終て、緣談首尾克成就したる御悅びの御酒下さる。六左衞門を始め一座の女中連、軍中に珍敷祝言抔と噂とりどりうたひさゞめく折から、各玉野に向ひ何ぞ珍敷事はなきやと尋ね給ふ。玉野答て申樣は、少々不審の事是有候。追て申上んと云ふ。御臺所も山下も何事かは知らねども、聞召れ度と列座の人を拂はせ給ひ、唯山下一人を殘し置給ひて御尋有ければ、玉野申上けるは、夜前深更に及び人音致し、相馬殿の居間へ入込み、密事の相談有ㇾ之明方に立歸りし。此節の人心萬一御家の御大事にもあらんと、少もねむらず伺ひ聞候得ども、密事の譯は聞え申さず。其人は西河內市兵衞といふ人と慥に聞覺え候と云ふ。御臺所も御不審の體にて、山下いかにと仰ければ、六左衞門御答も不ㇾ申能く思案しけるが、良有て申樣は、其西河內は此頃の合戰に手疵を負ひ、入湯して居ると承り候。旁以心得がたし。よくよく御賢慮あつて然るべしと申上ければ、老臣中へ御披露あり、打寄り玉野招き再應尋られけれ共、右申上候外委細存申さず候由答へける所へ、山下六左衞門進出て申けるは、此間長光寺軍中御見舞と號して登城の節、拙者方へ立寄り長噺し致し、延原當城を責めあぐんで何卒籠城の士を味方に招き度旨、眞木山の郞徒等より申越旨、浮田の味方に付けば恩賞の地は望みに任せ取持可ㇾ申抔と色々勸候間、是を思ひ考へ見るに、長光寺西河內をなづけて、安東を味方に招き候條推察致す處也。全體安東が事は浮田家より手入、下心是有事も覺束なく、兼て心懸に御座候。先達て彼が在城へ我等罷越候節、未夜の明ざる內に旅拵の士二人立出候を、門外へ徒

士共送り出て、慇懃に挨拶して立わかれ候。其間片原に見合せ居て、後案内を乞ひ罷通り用事濟て饗應の席、何氣なく今朝當城より罷出し旅拵の士二人行合候が、如何成人やと尋見る所、安東が舊臣和田一學答けるは、彼士は三士の浪人にて雲州へ罷通候由、播州の親族方より書翰を相賴まれ届呉候處暮近く相成り一夜を明させ候人也と申事、唯今思へば浪人風情の者の饗應には過分に覺え候。又此間勝間攻の時も、彼が勢かひ〴〵敷軍せざる故拙者が家子數多く討れ、何角の樣子心得難しと云ふ。是を聞て列座の人々横手を打て、此旨大將へ申上げ仰せに任せんと、後藤左近、逸々勝基へ言上する。是を聞給ひ仰けるは、軍中の習ひ驚くべきにはあらねども、彼等兩家は先より當家の所レ憑、殊に近來引立遣候恩分有る事故、予が片腕とも賴みに思ひしに、當家の舊恩を忘却して逆心を企候條是非に及ばず。彼等兩家の者共敵と成ば迚も籠城叶ふ間敷、御泪ぐみ給ひ既に御覺悟の御氣色なれば、山下陸左衛門申けるは、仰はさる事に候得共、未だ難波事は疑ふのみにて必定し難し。縦ひ難波も安東と同する共、御家普代の諸歴々、不肖ながら某罷在候間御心強く可レ然。唯此は片時も早く安東を討果すの計略こそ肝要の事と諫めければ、勝基快然と打笑み給ひ、然らば何れも手延ぬ内先安東を討取るべしと、さりながら若難波も一致成ば、東の丸を堅めなば容易には討難し。樣子を聞見よと宣ふ所に、柳澤彌市郎最前より次の間に有けるが罷出て、安東が逆心思ひも寄らざる事候得共、此義は慥なる事不レ存上は申上がたし。難波殿事は乍レ恐某能存罷在候迚、長光寺へ難波が受答の逸々申上ければ、大將を始め列座の人々、左も有るべしと少し安堵の思をなす所に、後藤左馬之介殿、長評定に時刻移り、事洩れては六ケ敷、早押寄て討べしと申ければ、御臺所出給ひ、彌事極らば自ら計略を以て安々と討取るべしと宣ひければ、大將始め何も實に尤と申ければ、使を立相馬を呼給ふに、相馬御臺所使ひならば何事か知らねども、元より曇なき身なれば何ぞ連歌の一つも上戾などゝ思ひ、身の上の大事とは露しらず、上下大小さわやかに、鬼介といふ僕一人を召連れ、西の丸へ赴き案内を

乞ふて座敷に通りければ、御臺所出向ひ相馬殿近頃御苦勞と仰せ給へば、相馬平伏して此間は御意に依て、婚姻前後首尾克相濟大慶仕候。軍議に取紛れ御禮にさへ遲滯仕り恐入候。御高免の程奉レ願候。又今日は御使を下し給ひ伺候仕候。御用仰聞られ度と相演けれは、御臺所是は近頃迷惑、長籠城軍義のみに嘸退屈し給はんと存、麁茶一つ參らせ度と仰の下に、局玉野菓子盆を目八分に持出で、相馬が前に置、少し跡へ寄る。相馬こは難レ有と菓子臺を取て戴く所を、御臺所拔打に切付給ふ。思掛なき事成ばさしもの相馬も、刀取手も無き內に首は前にぞ落ちにける。こなたの間には左馬之介殿を始め、老臣達若仕損じ給はゞ打留んと、堅づを吞てひかへ居しが、天晴御手柄遊ばしたりと皆打寄て擧にける所、勝基公、相馬は首尾克討たれども、鄉左衞門始め助之丞平五郞其外一族共皆強勇者成ば、難波柳澤を呼寄て本の丸の間を切らんと、本丸の東口を堅め用意致すべしと、仰に隨ひ若士共爰に集り詰る處に、相馬が仲間鬼介は奧の樣子は知らねども、物騷敷人音聞て主人はいかにと尋れど、知らぬと答る人計りふしん晴ず。下郞成ば奧へは行れず。唯一馳に歸つてこんと立出けるを、井上重兵衞追かけ討んとするに、此仲間安東が身を放さず召連れる大强力者成ば返し合せて切結び、井上聞ゆる勇者成ども暫く勝負は果ざりける。此體を東の丸より見付喧嘩々々と云ふを聞付け、安東鄉左衞門馳來り、いかに鬼介おくれな引なと云儘に、井上と切結び井上を討て鬼介を連歸へり、事の樣子を聞けどわからざれば、何〻にもせよ無體に井上が鬼介を追討事子細有べし。父の身の上覺束なし。鬼介來れとかけ行所を鬼介引留め、縱ひ何程働き給ふとも一騎打にては叶ふまじ。御一門御一所に成され度と諫めければ、鄉左衞門も少し控て居たりける所に、重兵衞が鄉左衞門に討れしと聞て、井上山兵衞馳付て、又鄉左衞門と切結び火水に成て戰ひける。本丸より難波柳澤兩人ども、頻りに招き給ふ。難波は安東が逆心抔とは、讒人有て變事出來致したりと思ひければ、上下大小常よりも猶さわやかに、柳澤と打連て喧嘩の場所へ行掛る。本丸よりは後藤左近●水島久作、捕手役は幸村右

衛門・水島早助、双方より出合見れば、兩人共聞ゆる勇士共、何れ勝負も果てざりける。尤鄕左衞門時移る程戰ひし事に既に危く見えける所へ双方より聲を掛け、兩人とも卒爾有な上意成と云儘に、幸村水島立入て双方へ分け、鄕左衞門は安東助之丞に預け、山兵衞は井上次郎三郎に預け、幸村は安東が屋敷、水島は井上が屋敷に付置、難波・柳澤・後藤・水島四人の衆は詰の丸大將の御前に上り、兩人共無事に取納めける旨言上しければ、大將四人の衆へ夫々挨拶有て引下る。扨今度捕手の役に撰み出されける兩人の事、幸村は去る頃、陣中へ大鹿一つ飛來りければ、弓よ鐵炮よと云內飛掛て打乘しが、なんなく乘たふし手柄して、三枝上りの角を双方へ頭中より引さきて、諸人の目を驚かしける大力なり。又水島は物ごとに早きこと飛鳥のごとし。依て早助と號し、元龜三年矢櫃城責の時、十餘丁跡の備に有けるが、先手の者ども鐵炮の打方惡敷當らざるを見て、一さんに馳行、鐵炮を以て大將を討て高名したる者也。兩人とも名譽の士なり。

安東井上死後評定治りの事

爰に本丸には、難波・柳澤等迄心置、皆甲胄して居られける所に、思ひの外に兩人は常にかはらぬ上下にて、ゆう〳〵として入來れば、各俄に衣服を改め座を繕ひて兩人を通しける。兩人不審ながら座敷に直りければ、後藤基政申されけるは、兩所とも近頃御苦勞千萬、扨今度不慮ノ義出來、此上は宜敷賴み居ると慇懃に宣給へば、難波利介答へて、軍中此頃は猶大切の場合、委細は存せず候得共、味方同士討仕出給ふは双方共卒爾の至、殊に老臣の井上若輩の鄕左衞門と喧嘩抔とは定めて深き遺恨成か、相馬は今朝奥御殿へ出仕の由、是程の變事に何とて聞せ給んやと尋ねければ、後藤左近されば候。安東相馬事逆心を企る條露顯致すに付、奥御殿に於て御臺所の御手に掛けられ、此旨披露致すべくの所、悴鄕左衞門來り、無體に井上重兵衞と切結び打果の由、是を聞て山兵衞馳付相戰ふ者と云。難波

利介、こは存ずる掛なき大變をな仕出し給ふ者かな。是非なき次第、安東を無殘の死をさせたりと兩眼に泪を浮め、こぶしを握り無念の面色、山下陸左衛門進寄り、難波氏足下樣子御存じなきか、但じ安東が非名云ひくるめんと思召かと詰掛れば、武宗苦笑ひして、過言云はれな山下、我等六十に及びて兩舌は申さんと云ふ。山下答へて、拙者迚も其通り、安東が逆心明白の證據見給へと、一通を柳澤が前に差出せば、太郎兵衛取て披見する。上書は井上山兵衛宛長光寺と有り。一座の人々いざ讀み給へと云ふ。柳澤讀けるは

先達て登城の砌り、山下氏へ委細入置候得共御承引無之。然る所難波柳澤へ大恩の地を宛行ひ候得共承引致さず。安東相馬殿は江見林野兩庄山家等不殘宛行れ降申され候。貴殿へ飯岡鄕不殘本所阿曾下山共宛行候間、早々御降可然候。御報相待所候。

と讀上たり。是を聞て並居る諸士安東が逆心明白成といへば、難波利介かむりふつて、各是を實と思召るゝ條當座の道理に候得共、中々安東逆心抔企る事思ひも依らぬ、此上なき大忠臣たるを、讒者實否も糺し給はず御手討は何事ぞ。御當家の滅亡到來せしも殘念至極、早刻限は夜明方、無事にあつたら敵將彈正が首取て、追付け大將の實檢に入るものをと、老の眼に泪を流し、懷中の一通取出し後藤左近に、是を披見し疑ひ晴らされよと差付る。左近披見して讀上げるに、

貴殿味方に降給ふにおいては、本領安堵の外、江見林野兩庄山家五ヶ村等一圓に宛行可申候。直家直書相渡置候條不可相違候。依狀如件。

延原彈正家忠判

安東相馬殿

と書たるを、家忠が加判共に切さき、裏に敵將延原彈正が首、安東相馬之介泰貞太刀下に討掛る者也。卯月十六日寅の下刻と、相馬が自筆にて書付たり。各是を見て、こは何事と仰天する。難波利

介其計略を物語らんと、安東が家來西河内市兵衛入湯して居しを長光寺招き、主人相馬を味方に付なば、其方をも浮田家御直の士に取立べく抔と頼まれ、下郎成ば慾にふけり此證文を受取立歸り、主君相馬に斯く物語りけるに、素より相馬何かな計略の手段も有んと、かんたんをくだく折からなれば幸ひと心付、思案を極め返翰調へ、市兵衛へも心底は知らせず持せ遣し、彈正が返答委細申越條堅く約して有しに、彌相馬が計略の坪に落ち、今宵密に彈正長光寺へ出合、軍義閑談をすべき條一決しければ、鄉左衞門を以て拙者へ密談するに付、兩士の勇士を撰み出し、勝れたる小勢を以て討取計略、成就して有ける也。命冥加の延原や、果報つたなき安東と、語るを聞て大將を始め、並居る諸士暫く詞もなかりしが、こなたの間より御臺所、始終の樣子聞給ひ御愁傷不レ淺、か程の忠臣何故手にはかけたるぞと、御後悔の餘りふしゝづみ給へば、御臺樣の御歎き恐入といふ儘に、玉野は懷劍逆手に、咽ぶえかき切り伏にけり。こは何故の自害ぞと立騷ぐを、兄柳澤太郎兵衛其傍へ立寄り自害するには子細有らん、語れ聞んと尋れば、玉野は苦しき息つき直し、相馬殿を殺せしは、自からがはしたなき詞のゆゑにこふ成行き、奥樣迄御歎きかけ、どふも生ては居られぬ故覺悟じました。心掛りは母樣の御歎き、よふ死んだと斷じて給れと苦しき體、勝基公、何、玉野其方讒人では無ぞ。大忠臣縱ひ讒人有迚も許容せずば討べきか、事に女の知る事にもなしと仰給ひければ、兄太郎兵衛も恥入て、いかに各是は小事、片時も早く跡の治り評し給へと云ふ。左近、柳澤の申さるゝ通り跡落着の評義が肝要と元の座敷へ打通る。御臺所玉野がそばへ近く寄給ひ、其方が戀人難波次郎が妻に殿より仰有て親武宗得心し。われ死骸は難波家の廟所へ送り得さするぞ。二世の契りをそひとげよと、仰にはつと起返り、御有難やと手を合せ、其儘息はたえにけり。哀といふも限りなし。後藤左近、相馬殿廣大の忠をむなしうして、非道の死を遂げられし事、一族の憤り深かるべし。又井上山兵衛も、從弟の重兵衛討れし恨み各いかゞと云ければ、大將是を聞給ひ、井上事に心置ず、兎角安東家

の憤りやすんじ度と存る也。難波氏能に計ひ給はれと、仰に利介、斯戰場に赴者死は一旦の覺悟、名を惜むは武士の道なるに、僞て敵に下る返翰も、忠義ならで書くべきか、却て逆心抔と世の人口に殘る事無鬱憤有べし。如何計ひ可レ然と云へば、左近を始め列座の人々、兎にも角にも難波殿御存分に任せ申べしと頼入ば、然ば某申べし。安東が非名と井上が死首も御家の爲忠義は一つ、井上重兵衛が首を相馬が首として獄門にかけ、安東が死骸は念頃に取納吊ひ給へと申に付、大將を始め一同に可レ然と申、安東助之丞・井上次郎三郎兩人を召出され、後藤左近より評義の趣申渡され、兩人共恨念なく御請申し、無事に治りける。東の丸大手に似首を獄門に掛、其札を利介書たりけるは、

覺

一、安東相馬之助企ニ逆心ニ之處、世忰鄉左衛親迚も難レ遁首を討て差出すに依て、如レ斯行ふ者也。

と書たり。城内の人々、難波が計ひ實に尤と思はぬものはなかりけり。寄手の方には是を見てあきれ果、頼みも切れて岡山へ加勢を乞ふて、徒に日を送りける。

三星軍傳記　卷二終

三星軍傳記　巻三

安東井上跡目幷に郷左衛門落命の事

斯て同十三日井上次郎三郎を呼出し、後藤右馬之介殿被二仰渡一候は、井上重兵衛事忠臣の働き比類無討死に候へ共、安藤相馬無異の難を受けて相果ければ、一族共の憤り散じ難く、評定の上重兵衛が首を獄門に被レ懸たり。依て彼等も自得して安堵致す處也。重兵衛が跡目悴重五郎へ無二相違一被二仰付一、父の勤功として加増地十貫文被二下置一候間、其旨承知致され可レ然との事也。次郎三郎有難く御請申、井上一黨も欝憤を散じ、葬送の儀式を取計ひける所へ、安東家舊臣和田藏人罷出、主人郷左衛門義急所の手疵迚も本腹叶難く相見え候間、御暇給り候はゞ在城へ引取申度との願なれば、其旨大將へ伺れける。勝基和田を御召出有て仰られけるは、願ひの通り聞届候。尤右様の大病人連歸る事無二覺束一思ふ也。心置なく勝手に任せ可レ申との事也。和田は大悦して引下る。其後評議有て、後藤杢三郎殿水島久作兩人御見舞として、安東が陣へ遣され、兩使郷左衛門枕邊へ行、大將の御書讀聞せ、其文に曰、

父相馬之介、敵彈正を計討の企成就せし所に、不慮に横死殘念不レ過也。然れども泰貞の軍配當第一の勳功と稱者也。獨其元多勢を引受比類なき働、諸人目を驚す事候。恩賞重而沙汰可レ申、仍而狀如レ件。天正八年卯月十八日　勝基判。

安東郷左衛門殿。

是を聞てむつくと起き兩使へ禮をなし、亡父が忠臣殊に數ならぬ拙者迄御稱美の御墨付頂戴致す事、弓箭之面目難レ有奉レ存候。勝基公生々世々の御厚恩、詞に謝し難く、宜敷賴み奉ると云終て伏けるが、其後言舌わからず次第々々に息もおとろへて、程なく末期に及びける。兩人立歸り郷左衛門御

愛の事申上ければ、大將始め聞く人袖をしぼりける。御臺所は玉野が最期と云ひ、玉菊の心の内ぞ推給ひ、御愁傷不レ淺老臣中評議のうへ安東助之丞を召れ、親子の追善料として金子一袋賜る。是を察し受取り其夜密に兩人の死骸在城山口へ引取り弔ひける。

難波利介常福寺に砦を築く事

扨難波は、安東と兩旗にて東の丸の大將たりしに、相馬弁郷左衞門親子共に相果ければ、一臣の將と成り、其上頃日何角の計ひ宜敷迚、惣軍師と稱し給ふて、何事も武宗に任せられける。威勢日々に増す。然るに友野常福寺坂は、彼が在城程近にして究竟の關所成りとて、一族福原彌市・安東が臣和田藏人兩人を召寄せ、新免粟井等引拂ふの樣子申聞き、彼等兩家若宇喜田へ合體しては事六ケ敷、其外紛らは敵者領内へ入候はゞ宜敷からず思ふなり。常福寺に砦を築きて、兩家の士ども相守るべしと申付ければ、兩人ども畏て候とて在所へ歸り早速取掛り、人夫を以て新關を立る。安東家より、山本武藏・今井庄藏・和田權平、鐵砲十挺足輕二十五人、都合人數七十餘人常福寺の關へ出張、平田の渡し場に番人を付置き、夜に入らばかゞりをたかせ相守る。山口城には相馬が父の入道、舊臣今井舍人等、相馬逆心の非名を受し事口惜しく思ひ居る事ならば、常福寺へ遣し置し武士共へ、若宇喜田家の間者入込なば此上家の汚名たるべし。晝夜油斷無レ之樣皆々相守べく申渡しける哉。

常福寺にて浮田の間者を召捕の事

斯て同二十一日の夜、常福寺の關守ども深更に及ですや〳〵と寢入掛りし所に、多勢の人音しけるを足輕ども罷出相待所へ、山伏體の者二人通り掛り申樣は、爰は關所成かと云ふ。兩人ともかむりを取り、我等義は兒島の五流家より播州船越山へ急の用事有て通る者に候。急ぎ關を開き通し給

へと云ふ。能見れば僧二人さむらひ三人下男二人也。いかゞはせんとさゝやきける。和田權平・山本半平出向ひ、御坊達定て聞及び給はん。今合戰半成ば疑敷旅人改の爲、此關を建置る所也。御荷物并に懐中の品相改め其上ならでは通し難し。何れも夜明迄待給へと云ふ。一人の坊主申樣、我物にも無ㇾ是大切の品に候間、改めなしに通し玉へと云ども、罷成ぬと云ふ。此者共さゝやきけるは、打破て通れと云儘に關の戸に差掛りければ、狼藉者有と聲々に云と等しく、後の山影より頻に鐵砲打ければ大にひるむ所を、足輕落合來り坊主二人に繩を掛、徒士共を追拂ひ三星城へ連行ける。爰に士一人手向ひもせず跡に控へて居るが、事片附て後關守の前に畏り、私事はあの僧抔と一所には無ㇾ之御通し給へと相願ふ。何國より何方へ通る者成ぞと尋ねければ、拙者義は平井八右衛門方より難波殿御在所へ參る者也と答ふ。仍て此者には、案內を付て通し遣す。三星城に於て兩人の僧を糺明するに、浮田より新免伊賀守へ遣す使者也。所持の書翰取上披見するに、新免は下地より浮田家へ心ざしある由明白に相知れける。右の僧共いましめ置き、爰に又別の使僧を拵へ、子細を能云ひ聞せ、浮田家の書翰を持せ、小原城へ遣し見れども、折節伊賀病中にて家老より請取のみの返翰に、追て御答申上るとの事也。委細分らず。右の坊主ども常福寺にて鐵砲疵を受け、殊の外痛み難義仕候に付、助命して湯鄉へ入湯を免じければ、仁情厚事備前勢の人迄沙汰し感じける。

三星へ兵粮を取集る事

三星城には敵寄るといふ事もなく、猶城にも變事出來、手元世話しければ軍も出す事もなく、唯徒に日を送りけるに、兵粮米乏敷成て奉行古田太郎兵衛・西田嘉兵衛兩人より、老臣中へ願ひ出ければ、老臣諸士頭不ㇾ殘寄合評議するといへども、惣人數七千餘人の扶持米なれば、かりそめの事ならず。多力ならでは出來がたしとて、福祐の百姓共に出させ然るべく迚、西田嘉兵衛に地方奉行岡村

五左衛門兩人小役人四五人召連て在村へ入り、最寄々々へ徳人共呼出して、米大豆搗麥等分限相應に差出べく候。當秋の年貢に立用致し遣候條、其時々名主小役人等迄自得致させ、夫々分限に應じ、三石五石より七八石御受申差出ける所に、植月北分上町川の百姓太田彌六と云者に相當り、身元有者成しに此事を聞て、貯への米穀悉く家こせの藪中に持込隱置き、右呼出しの砌殊の外不如意の由申立斷に及ぶ。又訴人の者有て露顯しけるに、西田嘉兵衞・岡村五右衞門兩人より、與ニ共思ひ掛なく彌六が宅へ、六尺・名主・村役人共に案内させ、悉くさがし出すの所に、米十石餘搗麥其外雜穀有レ之。此由三星城老臣中へ伺ひければ、國中の見せしめにせんと米十石取上られ、雜穀は妻子へ被レ下、其身は勝間田河原に於て首をはね獄門に懸られたり。是を見て其後は福者ども出精して差出す。中にも澤の角屋八兵衞・勝間田米屋久右衞門・植月の平田又七・中島村の田丸九平・廣戸竹の內助六・新野東分寺坂彥兵衞・勝中村土居彥右衞門・小吉野庄余野西谷兵衞・柿村米屋太郎左衞門・末村甚左衞門・和氣の權右衞門〆十一人、右は米十餘石宛雜穀等多分差出し候者ゆゑ、永代日記に名前記し置く者也。米二百石餘、大豆七十石餘、搗麥粟二百五十石餘、都合五百餘石を取集め、城內へ取納め、安堵の思ひをなす。此時右之役人の印形證文相渡置き、右在レ之今に持傳へり。

備前の加勢馳登る事

斯て同二十三日、井上が親族阿曾仕福田と云者馳來り、備前の加勢昨日到着仕候。先陣の者昨晩勝間へ着候。後陣は飯岡邊迄登り居る。大將は浮田左京之介政家、諸勢一萬餘騎と聞えしが七八千は慥成事に候。御心得有て可レ然と申ける。後藤左近福田に出向ひ、深切之段不レ淺、大將にも御滿足の所也。尤其許當時敵地同前成は、老人妻子の養育嘸心配有べし。急ぎ立歸り表向は備前方へ隨ひて世を遁れ給へと云ふ。福田泪を流し何卒御利運を得させ給へ、餘義なく仰に任せ兎も角も仕る

べしと暇を告て歸りけり。備前方へ手を入て、當時世を遁ると雖ども、信實厚き武士成ば、何卒して功を立んと思ひ日を送りけるが、程なく三星も落城し、大將勝基も討死と聞えければ、妻子に暇乞して高野山へ行き、後藤家の諸靈追善の爲剃髪すと云ふ噂なり。福田は實有る士成れば、疑ふなく感涙を催しける。

三星城後藤喜太夫京都へ登る事

備前の加勢勝間城へ着陣する由相聞えければ、諸大將を召集め仰有は、備前に於ても迚も延原如きの手にはあふまじと思ひしや、今朝福田が申聞ば浮田左京亮政家を大將として多勢責登り、慥に七八千と聞え候。さすれば油斷成がたし。軍議評定有て然るべしと有ければ、後藤左近各唯今聞給ふ通り近々新手の軍始るべし。存意の趣演舌有て宜敷方を用ひ度存る也と云ければ、柳澤多郎兵衞尋ねけるは、京都の便りは相聞え申さずと云ふ。水島久作申條は、直家秀吉一體の事計がたく、浮田家も秀吉合體して信長公に隨身せば、和を入ては如何と存ずれども慥成事知難しと云ふ。左馬之助是を聞給ひ、其儀杢之進基景へ、浮田家と不和と成る事軍議をなす事毎度申遣候得ども、信長公の傍に仕へながら、知る間敷様は有間敷と云ふ。難波利介、我等愚案する所今當國の姿、久米郡には荒神山の城主花房を始め、菅納平田の一族浮田家を頼み、苫大庭眞島三郡諸士、皆毛利家に隨ひ、東半國にも江見・大野・川副等は羽柴家を頼みて、山陰道の軍に出張したる者多し。新免粟井等が事も此間の通り、是を思ふに當城へ隨ふ所は勝田南北英田半成り。其内も飯岡郷抔敵地も同前、此軍に打勝とも太守直家を討にもあらず。一族の左京亮や延原如きの外將を打取る程の事、信長公未當家を見はなし給はずば、公命を以て和睦を願は敷存ると申せば、大將を始め列座の諸將皆尤と感稱す。此時勝基の叔父に後藤肥前入道了齋と云ふ翁有けるが、難波が異見聞給ひて仰有るは、予は老て弓

＊五萬七萬の誤なるべし

箭に携はられずといへども、唯今難波武宗の異見我武運長久の計ひたるべし。大將を始め老臣中能思案を有るべしと仰有り。老臣水島・井上を始め、御兩所の御詞御尤に覺え奉ると申ける。勝基然らば其旨相決すべしと仰有り。後藤右馬之介、京都へ歎訴して下知を待つ內、軍は如何と申ければ、難波利介其儀は御氣遣ひにおよばず。當時兵粮を取入れ籠城する上は、譬へ＊五萬七千の勢押寄るとも、何れも持口を堅固にして平場の掛合さへせずんば、敵手立を盡すとも持こたへ申すべしと申せば、然らば此旨信長公へ歎訴せんと、勝基自筆にて調へ、名代として後藤喜太夫、差添への士には難波治郎・山下小治郎、同二十四日卯の刻に密に三星城を立て、京都さして馳登る。依レ之譬へ敵寄す共みだりの軍致間敷の旨、夫々持口へ申渡しければ、何れも籠城堅固にして待にけり。

牛尾豐前守が使者來る事

斯て此頃毛利家の持城、苫大庭眞島等數ヶ城成りしに、香々美の庄舛形の城に牛尾豐前守在城して、苫郡の押として居たり。此牛尾は元尼子家の臣にて、雲州牛尾の城主にて、尼子家の老職成りしに、難波利介は父左京進宗久雲州に仕へし時懇意たりしか共、尼子家滅亡の後散々と成り、牛尾は毛利家の旗下と成て舛形に在城する。難波も本國成れば英田郡に歸りける。舊友のよしみを以て折節音信しけるに、當春備前勢と每度の合戰、殊に去る頃岩尾山に籠置たる鹽冶佐介と云ふ大切の勇士、皿の溫泉に入て居る所を荒神山の城より聞付、花房大勢を以て取卷き、終に花房が勢の爲に鹽冶討れ、其後合戰に暇なきに依て牛尾も肝膽をくだく折から、備前の多勢三星城へ向ひけるに依て、少しく軍の隙成ば豐前の守が使者難波が方へ來る。其意趣は、此度浮田家と合戰之由、此方の手透き候はゞ御見舞申度存ずる所、手元の少戰に取紛れ、其儀に不レ殘、乍レ去隔意無レ之間萬一御勝無レ之時は、左衞門尉殿岩尾山城へ御移り有レ之に於ては、御力を合せ可レ申候。此旨貴所樣御含み可レ

然事に候と也。難波其旨を大將へ申上候ければ、不レ斜二大悦一有二、則使者平郡逸平太を饗應有て、自筆の返翰を調へ渡し、平郡へ備前打の太刀一振を遣し歸されける。難波も別書を調へて懇意不レ淺、大悦の返翰に及ぶ。使者歸て後、大將一族老臣の面々へ内々披露有り、何れも幸ひたるべしとおもはぬ人はなかりけり。

入田原合戰勝軍の事

斯て勝間城には、加勢重てましければ大に氣を得て悦び勇む事限りなし。二十四日休足して政家彈正に軍義を尋ねけるに、是れ迄の軍の次第籠城の士の强弱等、逸々物語りけるを聞て、左すれば容易には落城すまじ。さりながら折角是迄多勢馳登りながら、徒に日を送らば世のあざけりにあふべし。明日は新手を以て一責て心見んと申されければ、延原答へける樣は、御尤の御事と存候得ども、敵は地利を計て伏兵し、味方は新手の若武者共、卒爾の軍は成がたし。明晩より忍びの者を所々へ遣し、地利を考へ、伏兵の有無見糺し候上、五ツ時より後物靜に押寄せ、平場の軍然るべく存候と云ふ。左京亮其外列座の諸士も其儀に同じ、もの馴れたる士共をえらみ、大山・林野・尾中山邊の高き峯々へ遣はし、宵より見せけれども何の樣子もあらざれば、池上源太兵衞・岡孫太夫兩人將として其勢千五百人先陣に進み、其次延原右京・三石與三左衞門を將として千五百人三番備へ、浮田左京亮政家が旗本勢は服部刑部が勢を合せて三千餘人、跡備へは小島源多左衞門・福岡左衞門を將として千五百餘人、都合七千六百餘人勝間城を打立て、先陣は入田原へ押寄ける。次備へは湯鄉原より川東へ押渡り、倉敷向ふ佐瀨原に陣を取り、大將浮田は湯鄉上の山影に諸勢を置き、其身は林野尾鼻の峯へ取登り松のしげみに床机を立、小島が勢林野尾鼻へ押詰ければ、先陣は入田原の外堀近く責めけれども、城内には兼て覺悟の事なれば持口を堅固にして、銘々印を立て淸々と吹きなびかして、

靜まりきつて待居たり。林野城は後藤喜太夫殿の持口たりしに、後藤河内守久基相替て守り居る所に、城内少も騷ぐ體なければ、不審ながら寄手兵城外近く責寄て、かんこをならしほらかひ吹立て、諸軍同音に鬨を作りけれども、内に音なし。先陣岡孫太夫、何程の事かあらん、柵築を打破て引崩せと下知しければ、築地の下へひた〳〵と押寄る。此手は難波三郎左衞門・足井伊織・福田佐内・西山九郎左衞門等が持口、又宮の尾出丸は小堀備前守・下山半内・奥山源六郎・青山・丸尾・西田が堅めたる所へ鐵砲を頻りに打掛けれども、築地の影なれば内に事なし。又小堀下山等が土矢倉に居るを見て、弓を挽き矢を射掛けれども、是も上矢にして中へさはらざりければ、何も鑓をおろし矢倉の下木戸口へ詰かけて、さま〳〵とのゝしりけれ共出合はざりければ、彌〻城内に謀事あらんと思ひ、さすが築地も越えかねて責あぐみ居ける所に、こなたの山より相圖と見へて色旗をふり、かんこをならしけるとひとしく、先備への中より年頃三十計と見えて、大成る男なり。色黑きひげ生えたる武者白糸おどしの鎧を着て、三間柄の大身の鑓を引さげ、唯一人大木戸の前へ歩み寄り大音揚て申けるは、先刻より押詰るといへども何も出合ひ給はず。我等不肖の者成れども、此度加勢の爲に馳登る備前の國小兒*の住人加地藤市郎政盛と云者也。城内に我と思ふ人は出合ふて勝負を決し給へと、扇を揚て打招きければ、敵の招くに出合ざるもほいなければ、如何はせんと小堀難波等さゝやき居る所へ、東の丸より大男が黑皮縅の鎧を着し、三間柄の鎗をさげて一さんに駈來り、兩人の前にて少し會釋して木戸を開かせ踊出で、敵將加地殿とやら嘸待兼ね給はん。我は當地東丸大將難波が手の者堂滿六左衞門正泰と云者也。主君武宗より鎗の手少しく受繼ぎ候。不肖ながら御相手に成申さんと云て立向ひければ、兩陣互に鳴りをしづめ見物する。双方聲を懸け鑓を合すも互に引手なかりしや。時うつる程戰ひしが、如何したりけん加地右の足をすこしつゝまづくと見えしが、堂滿得たりと付入て引かつぎどつと投付け、おきあがらんとする處を組伏て首をとる。是を軍の始として備前勢堂滿を目がけて

*小兒とあるは、兒島郡の誤か加地氏は備前源氏佐々木の一流にして將綱の後裔に係り此頃迄代々備前兒島に居りしものなり

打て掛る。難波・小堀・下山等堂滿討すなもの共と、我先に切て出で當るを幸ひ切まくれば、備前勢少し引足に成ければ、其透間に堂滿を救ふてさつと引入れ、木戸指堅めて勝鬨をどつとつくる。備前勢氣をいらち、又鐵砲を頻に打たせをめきさけんで攻けれども、城内少も騒がざれば大將岡孫太夫眞先に進み、云甲斐なき者共かな、進めや〱と下知すれば、鑓先を揃て又木戸先へ詰寄せ、既に築地を打こぼたんとする所を、富坂右京鐵炮を以て、土矢倉に至りざまの穴よりねらひを極めどうと打つ。岡が運や强かりけん、少し下りて乘たる馬のみけんよりあばらへ打ぬかれ、さしもの岡も眞逆樣にどうと落ちけるを、漸々に引おこし後陣の中へ逃げ行けば、惣大將政家林野尾かた峯より引鐘を打て引拂ひ、今日の軍は止にけり。斯て堂滿六左衛門は加地が首を主君難波に捧ぐ。武宗則堂滿に首を持たせ、大將勝基の實檢に入れける。難波三郎左衛門始め小堀・下山・福田等伺候して、軍の次第富坂が鐵炮の高名等言上する。右京が鐵炮の間三丁計も有けるに、誠に名人たる者と一同に譽ける。堂滿六左衛門に感狀を下し賜る。富坂右京に二十玉の鐵砲を賜る。四人の將たち、何れも御譽に預る。扨も此時岡孫太夫即死せば、富坂も感狀をもらふべきにと云人も有り。何も弓馬之面目かな。

寄手評定倉敷合戰の事

扨も浮田左京亮は、初て合戰の數に加へし加地藤市郎政盛を討せ、其外諸士足輕等百餘人討れ、岡孫太夫も辛じて漸く命を助り、此樣子にては力責には參るまじと思ひ、何ぞ城内に變事の謀も有るべしと、諸大將を集めて評議する所に、先達て安東相馬を味方に招きし事成就致すの所に、倅鄕左衛門と云若者父相馬を討て切腹致す由、何れも名ををしむ勇士共多ければ是を聞て、然らば下部の惡黨等を僞りすかし、兵粮藏焰硝藏等を燒拂はせ候より外有まじく、去りながら唯一戰に利を失

ひて評議のみに日を送る抔と、世の人の口も恥る所なれば、明日の軍を評し候へと申されければ、彈正が曰、先林野城を責取て勢を籠置き、三星城內の變を伺ひ、軍を進め可レ然と存ずると云ふ。何れも其義然るべしと一決して、二十七日朝池上源多兵衞・光石主水を先陣として、人數千五百人、其次福岡志摩・片上新左衞門を將として千五百餘人、其跡延原彈正二千餘騎、夜の明ざる內に湯鄉瀨を打渡り、三倉田佐瀨原の耕地に陣を取る。大將延原彈正は、長臺寺山に本陣を据ゑたり。浮田左京亮政家は六千餘騎を三段に分て、先陣二陣は入田原へ押寄て、大將政家は竹ノ尾山に本陣を据ゑたり。三星城諸將此體を見て、今日の軍は林野城後藤河內守の持口小勢にては難儀たるべし迚、西の丸小矢田口の勢を減じ、山下陸左衞門・小坂田織部兩人に勇士三十人鐵炮百人添て差遣す。此勢搦手の方より詰の丸へ取登り、河內守に力を合せ待居ける所に、入田原の寄手攻太鼓を打つとひとしく、池上光石が勢荒木田下瀨を打渡り、福岡片上が勢は佐瀨原より森ヶ瀨を渡り、東西の寄手同音に喚きさけんで責立る。此時本丸に山下殘て、小坂田織部・上原惣左衞門等大手口に引下り、靜り返て控へ居る。池上勢は荒木田へ押迫る。光石主水東門坂を責登る。南門口福岡・片上が兩勢木戶口近く攻寄る。近〻と引受け足輕頭小林源次兵衞・江田帶刀鐵炮を頻りに打せければ、寄手多く討れてたまり兼ね引色に成る所を、向ふの本陣より太鼓を打て大將彈正、河岸へ押出す。此體を見て、ふみ戾しける片上下知して、鐵砲を打せければ凌ぎがたく、小林・江田三ノ丸へ退きければ、寄手共も外築地を乘破り三ノ丸の岸下へ押寄る。光石主水は何程の事かあらん乘破て高名にせよと下知すれば、我先にと東西の門坂を責登るを、後藤・小坂田頻に下知してまくり落す。此時東門の堅めに、上原惣左衞門・幸村右門・奥田與八郎先として大强の弓取、矢たばをほどき、さし詰め引詰散々にゐる矢に、時の間に死人數多出來ければ、寄手ども引足に成りける。西の門には梶並彌次郎・右手・小坂田鐵砲の上手共足輕等小玉こめさせ取替り〱打立つれば、あだ玉一つもなく打れて、またゝく內に死人の山を築きに

けり。早日も西山になりければ、向ふの本陣より引鐘をついて引取ける。味方は陣門をさし堅めて休足する。今日討死味方三十餘人、寄手二百餘人と聞えけり。

入田口合戰富坂が家來高名の事

入田口の先陣藤井八郎太夫・岡孫太夫は、此間の軍に手ごりしければ、楯を數百丁並べさせて其透より鐵砲を打せ責近付きけれども、城内には足輕共を築地の蔭に伏せて相守りければ、林野合戰急なる敵人數を廻し無勢成と心得、藤井八郎太夫眞先に進み、倉敷の軍急成ば無勢成ぞ打破つて高名せよと大音に下知しければ、はやり切たる若武者ども、皆ひた〳〵と柵きはへ押寄る。是を見て福田佐内鐵砲を打せける。足井伊織・西村九郎左衛門は、矢倉の上よりさし詰引詰散々に射る矢にたまりかねて引足になる所を、岡・藤井兩人踏留て戰ふ所に、こなたの矢倉の蔭より富坂右京三番玉の鐵炮にてねらひをすましどふと打ち、藤井が下腹より馬の尻へ打通し、跡に控へし徒武者二人打たれければ、岡孫太夫漸に引退き跡へ逃入りける。備前勢藤井が死骸を捨て逃げ行くを見て、富坂が家人西村佐平、築地を飛越し馳行て、八郎太夫が首を討て立上らんとする所へ、和田助四郎・岸本清兵衛究竟の武者二騎落合せて、西村に討て掛る。西村すかさず切結んで、上段下段秘術を盡して相戰ふ。難波三郎左衛門、西村討すな者共と頻に下知しければ、西山九郎左衛門・植月五四郎・廣野平四郎・菅田・笠井等切立出る。寄手も多勢踏戻し火水に成て責戰ふ。西山九郎左衛門縱横十文字に乘廻し、四尺三寸の太刀を以て當るを幸ひ切伏せければ、近付敵もなかりければ、西山が元へかけ行き當る敵を三人討て西山を助け、味方の陣へ引て行く。和田・岸本等西村をば得討ずして賴みに思ふ家の子三人討れ、今は何をか惜むべき、いざ付入にして討死せよと死物狂ひに責戰ふ。難波三郎左衛門强弓の矢繼ばやなるが、散々に射ければ和田・岸本薄手を負ひければ、郎等共馬の口を取て押戻し味方の陣

へ逃行けば、此透に味方を引入れ木戸さし堅め、此日の軍は止めにけり。西村佐平に感狀を賜り、西山富坂等御譽に預り、太刀一振宛賜る。此手將難波・福田・足井軍功不レ淺由御稱美に預る。何れも弓馬の面目也。

安東が家人西河内市兵衛惡事徒黨の事

爰に西河内市兵衛は、寄手の惣大將浮田左京之亮の陣へ伺候して、御大將へ密事の願ひ御座候由願ひければ、其旨を大將へ言上する所、何にもせよ通し見よとて政家の御前へ召出されければ、市兵衛謹で申ける樣は、私義は安東相馬が家來西河内市兵衛と申者に候所、去る頃の合戰に薄手を負ひ入湯して罷在候處、長光寺より强て相招かれ、主君相馬を味方へ降らしめ候樣なされ度延原殿御賴に付、則主君相馬を種々申勸め、長光寺において彈正殿對談の上、計議取計ふべき旨、事成就仕り罷在候處、安東逆心を企候趣露顯に及び、御臺所のあざとき手立にかゝつて生害仕り、又相馬が次男鄕左衛門は井上黨と同士討して相果候に付、安東が一族本在へ逃歸り籠居致し罷在候仕合にて、主なしの身と被レ成候處、先達て長光寺の仰られるには、主君相馬を備前方へ進めあふせ候はゞ、其方をも浮田御直の士に取立可レ遣との事に御座候得ども、安東家運つたなく斯の仕合に被レ成候。乍レ恐慈悲の上御家に召遣ひ被レ成下ば、忠節を盡し申度と云ふ。政家は彼が面體得と見て、邪智深き者とは思ひながら、尤ともの願ひ聞届遣すべし、勳功に依て恩賞は望みに任せ遣すべし。して其方は城内樣子能辨へ居るべし。兵粮藏焰硝藏等を燒拂ふ手立はなきかと詩玉ふ。市兵衛暫く思案して答へけるは、本意ならず候へ共、御奉公仕る上は幾重にも計り見申べしと云ふ。政家是を聞て、うゐやつかな、去ながら汝一人にては事あやふし。手下を付て計義をなすべし。百姓成ば田地一町、足輕體成ば知行十貫文遣すべし。幾人なり共手下を取り此二ケ所を燒拂ひ、成就の上は其方は一庄の

主となし遣すべしと仰ければ、大に悦び退出して近郷を掛廻り、忍び〳〵に徒黨するこそ恐しけれ。

林野城三ノ丸破れ常福寺勢備前勢を襲ふ事

同二十八日の朝、長臺寺の陣より人數三千計りを二段に分て、森ヶ瀨上河原兩所を押出し、喚きさけんで責立る。又爰に三倉田より荒木田へ打渡て、池上源太兵衞・光石主水二千餘騎、明神の森蔭に陣を取て、大手の軍を見合せて居たりしが、寄手三の丸外築地を乘破りければ、城内こらへ兼て見ける所に、池上・光石城の搦手に押寄んと、別所のじり耕作をみきりに押寄て行ける所、常福寺の砦に居ける難波・安東が兩勢、平田の圓照寺に遠見して居たりしが、此體を見て別所の山手へ押出しければ備前勢大に驚き、いか成る勢ぞと見渡せば、鶴の丸・藤の花輪の旗成れば難波・安東兩家の勢ぞ、卒爾に山へ押上て跡を切られ難儀すなと、俄に備を立て見合せける。難波・安東が勢も小勢成ば松蔭に陣備へして、多勢の體を見せて守り居る。本丸より山下六左衞門此體を見て、搦手は氣遣ひなし迚、蘆田岡本等に足輕二十八人添て殘し置き、大手の口へ馳下り、後藤・小坂田に力を合せ防戰するといへども、寄手大勢なれば三の丸東門口を乘破られ、敵悉く込入りければ皆二の丸へ逃登る。爰に上原惣左衞門・幸村右衞門・奥田與八郎唯三人、二の丸の外成る高見に立とゞまつて、指詰引詰散々に射る矢に、ひし〳〵と込入りたる敵共成ば、あだ矢迚は少しもなく死人の山を築けり。早日も暮方に成りければ、敵も引鐘を打て引取りけり。此日の軍常福寺勢が横鑓に、池上・光石が兩勢恐怖して搦手へ寄ざる故、漸々に城を持こたへける迚、常福寺の勇士共御稱美有て難波彥右衞門・安東助之丞兩人方へ御使者を賜る。福原彌重郎・室滿六之進・山本武藏・今井庄藏・山本半平・和田權平次右六人の者共、小勢を以て敵の大勢をおそふ事勳功不少候條、御感不淺との御事、使赤堀佐之吉相演べける。兩家の士ども大悅致しける。

浮田政家入田合戰西丸用水を切落す事

宇喜田左京亮三星城内をはかり考るに、兵粮米幷、用水等の差支なければ、長く籠城の覺悟して勢を押へ、卒爾の軍せざれば、力攻にして落城する事出來難し。此上は兎角國人をなづけ、城中の變を伺ひ事を計らんと思ひ、こざかしき輿子共を商人に拵へ十方へ出し、宇喜多家の政法仁情厚く甚だ宜敷旨を披露させ、強敵無道の田夫共をかたらい、種々の謀計をこそなしにける。斯て二十九日午の刻、林野城軍危く見えければ、本城より見張の勢を送らんとする頃、鈴の尾の本陣より責鐘を打ければ、入田原先備、城を見上て責寄る。兼て心得置たる事成ば、難波・小堀等諸卒に下知して城門を差堅め、靜り返て待ける所に、次備より足輕體の者共に數百人鎌鍬を持せ、牛窓源八郎・服部刑部を大將として西の丸谷尻へ押寄せ、聲をも立てず築堤下へひた〳〵と寄るを見て、此手の大將浮川將監・龍門又市・福島・赤堀等鐵炮を打懸け防ぎけれども、大勢成ば楯をかつぎ一時に責め、近き柵築地の下を堀崩し、なんなく外構破りける。和氣勝間鄉の士共勇を振ふて防戰する。此時小矢田口の手より有元右衞門大夫・小坂田惣左衞門、勢を分て押廻す。本丸よりも水島久作、勇士引連れ馳下る。纔の谷間の事成ば防方手便もなく、兩方の尾形より遠矢に射よと云ふ儘に、弓鐵砲を以て防ぐといへども、寄手の者共楯をかつぎ竹束を戴き、喚きさけんで責登る所へ、宇喜川治部左衞門・福島源藏・和氣周防等の大力共、兼て貯へ置たる大石五十貫七十貫有るをも手がるく取て投ければ、細谷の事成ば是に打れてへきえきして逃下るを、大將牛窓服部用水は切落したれども、諸卒數多討れければ引上んとする所へ、南の尾形の森蔭より福本彦之丞が三番玉の鐵砲を以て、服部をねらひどうと打ち、刑部は右のあばらより打抜れて、跡にひかへし郎等二人打ければ、漸服部を介抱して引退く。此時、敵將浮田左京亮は入田原へ打おろし、南口の寄手の跡をつめ、たま〳〵引味方を追返し、既

*備勢は備前勢の誤か

に南口の切岸近く責近づくを、近々と引受け鐵炮を打たせふせぎけれども、多勢跡をつめて、死人をふみ越え〳〵楯板をいたゞき連て、南の丸の大木戸を破らんとひしめきければ、小堀・難波・下山等何も勇士の譽ある者成ば、鎗をおろし諸卒を勵まし、防戰する此體を見て、本の丸より柳澤多郎兵衞諸卒を下知し、あの責口をすくへよと、東の尾形より鐵炮を打せけるに、寄手大にこまり逃下りけるを見て、柳澤下知しけるは、寄手の者共が臆病神の引くうち横鎗を入て突崩せと云へば、柳澤左源太を始め、難波が手の者岡崎運平・岡杢兵衞・植月彦治・楢原右京等究竟の若者共、我先にと打て出で、備前勢の右の横へ討て掛る。是を見て敵將政家も旗本の勢を崩して、爰を救ふて双方火水に成て責戰ふ。城將勝基と難波は、東の矢倉にて軍を見物して居けるが、浮田が勇動を見て、難波は小坂田菅兵衞と難波三左衞門を呼寄せ、汝等兩人川向ひへ渡り、山蔭をつたひ下り入田原へ押寄せ、政家が本陣を切崩し政家と引組て討死せよと云含め、東の丸より平野・岡崎を始として、勇士三十餘人、本丸より江見源三・赤堀孫兵衞を始め勇士二十餘人、其外足輕等都合百五十人を差添へければ、小坂田・難波兩人は手勢合せて二百餘人を引率し、林野城下を打下る。難波利介は矢倉に有て諸手の軍配してぞ居る所に、西の丸の寄手の引口を見合せて、大將政家諸軍に下知して繰り引にして引退く。難波も味方小勢にしてつかれし事を計て、相圖の鐘をならし引入らんとする所に、難波・小坂田は折角打出しに敵にも出合ずして引く事無念に思ひ、東の山裾へ取上り、浮田が旗を見かけて遠矢を射るに、はたして其矢旗紋を二筋とも縫つらぬきければ、城内より是を見て、勝太鼓を打てときの聲を揚るを聞て、寄手勢又もり返して、いどみ戰ふて木戸近く押返す。此時備勢*の弓手の方の後より、垂井又右衞門・小田亦四郎・長瀬三郎等が打て出て、横鑓を入て責戰ひければ、寄手多く討死する。中にも柳澤左源太は備前の國の住人原村武右衞門を組打にする。岡崎運平は服部左平太を討取る。味方にも植月彦之丞打死する。既に日暮れければ、双方相引にして軍は止みにけり。小堀・難

波・下山・福田が手へ兜首十三とる。中にも足井伊織は旗頭戸川太郎左衞門が首を取る。味方の勇士六人討死する。足輕雜人三十餘人。寄手の討死は西の丸にて三百餘人、南口にて百八十人、凡五百人と聞えけり。小堀田の二の矢、小寺左川が馬のふとばらにふかく立ちければ、兩人が弓勢は寄手共目を驚しけるとかや。

三星軍傳記　卷三終

三星軍傳記　巻四

三星城兵糧燒失の事

爰に西河内市兵衞、忍び〳〵に近邊を掛廻り、密に惡黨十六人をなづけ召連れ、宇喜多が本陣へ行き、彌々計らば恩賞の地相違なく下し置かれる樣言上しければ、大將政家大に悦び惡黨共を召出し、其方共西河内に賴れしは神妙の至なり、契約の通り宛行ふべし、身に替へて勳功致すべしと、仰を受けて下りける所、諏訪大宮少司が手の者松平仁平は、六尺ゆたかに黑ひげ生たる大男、跡に殘りて申けるは、私は生ながらの百姓なれども、大宮少司に賴まれ出陣致し候處、西河内强て賴に付罷出る者也。此度の働成就仕らば、本所小吉野庄中村に於て百姓の頭に御取立下されなば、一命を投打相働き可レ申と云ば、大將莞爾と打笑ひ、尤も成る願ひ聞届くべし。市兵衞に心を合せ首尾克しあふせよと仰を受けて引下り、强慾無道の惡黨共計略をこそさゝやき居ける。片山紋左衞門・神田作兵衞に鐵炮兵三十人を差添へ、市兵衞が見繼として下されければ、兩人西河内と計義を示し、闇夜に火も燒さず案内して、難なく三星の搦手へ馳付、片山・神田兩人は川向ひ牛田崎と云所に伏兵し、市兵衞は十六人の者を隨へ川端の柵を破り忍び込、そろり〳〵と兵糧藏の邊へ行き樣子を伺ひけれども、番人共能寢入りしや人音もせざりければ、懷中より火打を出し火を打て火繩に移し、與子に渡し、勝手を云聞せければ、十四五人の者馳廻りて火を放ちければ、一時にさつともえ上るを、諸方のかゝり番人共見付、大に驚きうろたへさわぎ、唯火を消さんと思ふ計にて、聲を立てず防といへども、惣廻り十餘ケ所より燒上りたる事なれば、兵糧奉行古田多郎兵衞一族十三人の者共頻に働きけるを、向ふに控へたる片山・神田は諸方より集る者を防がん爲に、鬨を作て鐵炮を打せる故、諸手の集る者

共進み得ず、兎や角と猶豫の内、夥く積上たる兵糧米穀土藏等へ火移り燒上れば、近き陣屋も銘々持口を大事にして、誰が防ぐ者もなく、唯古田が一族番與子の者計り成る中にも、振田與五郎・同甚内等は勇士の聞え有れば、西河内・松原等を見付打て掛り戰ひしが、西河内薄手を負てあしらひ兼しに、惡黨等來りて戰ふ内、片山・神田が打せし鐵炮に、與五郎足を打れたゞよふ所を、松原付入首を打ち、甚内も取卷れ討死す。古田が一族十三人討死す。其外與子八十餘人只一時に失せにけり。祖父振田將監入道八十八歳成りしが、火の中へ飛入死にけり。哀なる有樣かな。扨々西河内市兵衛は思ひの儘に兵糧を燒拂ひ、大功を立たれども、天のなす所にして味方の放ちたる鐵炮に當り、其外薄手を數ヶ所負ふて歩行も叶はず、手下の者共引退く。片山・神田も小勢成れば共に引取ける。道筋小矢田口にて早東雲に成ければ見付、通すまじとせまり取卷き、片山・神田も下知して防ぎ戰ふに、此手は原田・大町・諏訪の大宮少司等が持口成ば、幸村與七郎・福本惣兵衛等鑓先を揃へて突立れば、與子の者多く討れ、片山・神田も死物狂ひに働きけるに、少し城方引色になる所に、大町幸平と神田作兵衛渡り合しに、作兵衛は鎗を受はづし右の高股を突れ、漂ふ所を郎等共大町をへだて戰ふ。上原惣左衛門は片山と戰ひしに、兜を刎落され危く見えけるが、片山鑓を受はづし、右の脇腹を突かれ伏所を、上原が郎等廣友作内引來て首を取る。松原仁左衛門は數ヶ所の痛手負ふて逃退く。神田も逃延ければ城門に引入ける。中にも松原薄手なれば、神田・西河内兩人かき持せ、漸々に宇喜多の陣に歸り、米穀悉く燒失候由言上しければ、政家大に悦び、松原を始め手下へ御稱美の挨拶有て、手負共へ醫師を付られける哉。

籠城の諸將評議の事

此度火事場見改として、加藤杢之丞・山本彦惣兩人罷越立歸り、兵糧米殘すくなく燒失致せし旨、

古田が一類十三人義勇討死の次第言上して引取ける。頃は五月朔日の早天成ば、旗頭の面々詰の丸へ登城し、當賀を相演べ小矢田口の勇士働の事、古田一族討死の事、幷、祖父將監入道淨圓最期の次第、御稱美の御噺終りて後大將勝基宣ふ樣は、各長籠城深切不ㇾ淺感悅致す所也。然と云へども、當家の運かたむく上は是非に及ばず。家にも身にも瑕瑾なき內覺悟すべしと仰ければ、後藤左近仰せ尤に候得共、大將たる御身成ば、先諸將の評議を御聞有て、御賢慮然るべしと云ふ。難波利介進み出で申樣は、兵糧燒失の上は永く籠城成間敷、乍ㇾ去燒殘る米穀凡小積り今四五日は氣遣候まじ。其間には京都の便も聞え申べし。此上逆心の族も出來、彌〻當城保難候上は日指山へ開き然べしと存候。究竟の城地を以て、去る頃尼子勝久上月城より爰に移ると、江見・大野・川副等の者兵糧の手當に、近鄕の米穀を取集置たれども、山中鹿之助・立原源多平等を始め名譽の勇士共も終に粮盡て、勝久生害し給ふて日指山長城寺の要害むなしく成。取集たる米穀は、江見與市右衛門支配して有ㇾ之、我等能く存る所也。さすれば當分兵糧の差支も候はず。是へ御移り候はゞ、某居城妙見山聊か小城成ども、東南西三方嶮岨のすり山にて、人馬の足溜り是なく、西北の山續き一方を防がば落る事なし。安東・某が兩勢を以て常福寺を堅め、三百騎計り籠り相守らば、是より奧へ寄手入間敷覺候と云へば、後藤左近が曰、難波氏の異見尤も理に當り候得共、江見九郎次郎・大野川副等當家の旗本を嫌ひ、山中鹿之助と相計て尼子勝久を引入れんとの事也。尤今、與市右衛門は勝基公の御恩不ㇾ淺者也。又新免・粟井等當家を背なば敵地に近し、各の存意申給へよと云ふ。芦田源左衛門我等風情近頃出過が間敷候へ共、廣戸家舊城金剛寺こそ要害好所に奉ㇾ存候。御評議有て然るべしと云ふ。爰に有元右衛門の大夫を始め、豐田・梶並等菩提寺の城へ籠城有ば、兵粮等も後所の禰者共に出させ候はんと云ふ。後藤河內守進み出、各の評議何も尤と聞え候得共、當城より西へ開かば毛利家を賴むに似たり。京都の樣子を相待ち、信長公に隨はんと思はゞ東へ引かずんば成まじ。先長城寺の樣子を伺ひ聞て然

るべくやと云ひければ、一同尤と一決しける所、長城寺當時無住にして、蓮華寺兼用の地成ば幸ひの事也。兩觀上人は難波三郎左衞門・足井伊織等が伯父成ば、何れ蓮花寺へ相談有て然るべしとて、難波三郎左衞門・足井伊織兩人徒士仲間纔十餘人にて蓮華寺へ趣ける。夫より後藤左馬介殿難波に向ひ、足下の居城は聞しにこえし名城、又日指山の要害承り度と申されければ、難波答へけるは、先刻より申通り聊の小城にて、千人の餘は居り難く候得共、兵粮さへ續候得ば三百の勢にて籠りなば、外より落事成間敷と覺え候。長城寺は山の高さ五丁程も有て、嶺平にして東南西三方へ尾形差出て、其間の谷間に水田有て人馬の養ひ自由を得、北は嶮岨にして大川の上にそびえ、人馬の足の立所なく、三ッの尾崎を出丸として相守るに於ては、敵幾萬騎寄るとも苦しからず。城内は三萬五萬の人數楯籠る共せまからず。其故に山中鹿之助名譽の勇士、上月を開かば爰へ移と定めし所也と委細に物語りければ、列座の諸士賴母敷思ひ、蓮華寺の吉左右を待居たりける。

京都の便り幷蓮花寺の有姿を聞て勝基覺悟の事

斯て京都の飛脚到來あり。京士安東右京・難波右馬之介兩人より利介への書翰評定所に於て披露する所に、宇喜多直家より相届候趣は

後藤勝基毛利家へ一味仕候條依二明白一、難二捨置一奉レ存候。此旨御許容被二成下一ば、早々打果可レ申との事成りしかば、御許容無レ之、羽柴筑前守殿へ實否御問合被レ成候處、秀吉よりも彌〻毛利家へ隨心の趣申上候樣承知仕候。此旨御含可レ然奉レ存候。尤基景殿御事は今以て御側近く御懇意不レ淺由、何分御國元の樣子承度候。猶御前宜敷御披露奉レ賴候。二十六日辰の刻認る、

と也。大將を始め列座の諸士是を聞て、扨は秀吉直家彌〻合體して、當家を亡す企決定也。如何して然るべくやと評定まち〳〵成る所へ、毛利家より使者として香川五郎兵衞と云者來る。牛尾豐前

守よりの書翰に、
先達て御報の趣承知致、其旨隆景へ相達し罷在候間、其表難レ保候はゞ、岩尾山城へ御移り然るべく存候。御報次第勝基御迎ひの勢差向け可レ申候。
猶香川五郎兵衛口上にて申べくとの事成り。難波書翰を大將へ捧げ此旨披露しければ、各喜悦して使者香川をもてなし、老臣旗頭評定半の所へ、難波足井蓮華寺より馳歸り、何の會釋もなく評定の間へ打通り大將へ禮をなせば、勝基兩所共火急早打大義至極、蓮華寺の樣子いかに〳〵と仰有ば、兩人謹で申けるは、御前を始め、老臣中御待兼候はん。何角差置申上候。蓮花寺へ委細得度申入樣子承り候所、小原新兎彌〻浮田へ隨身して、大野・川副が領地を悉く掠め樣江見が領地へ責下る趣、所々に出陣して甚だ微勢なるに依て、長城寺の城廓は手領に依て烏越城へ楯籠り候由、此間日指山の米穀取拂ひ岩越坂の城へ出陣する由、長城寺は開城に相成居候。尤蓮華寺申され候は、京都の御下知有て三星城難レ保候はゞ、當山へ御越有ば、此山の峯に假城を築き、諸勢士居福城に籠て粟田口を切ふさぎなば、是亦究竟の地也。兵粮も五七日の間三千人位の扶持は、當寺に貯置く雜穀有べしと懇意に申さるに付、峯に登り見計ひ候處、日指山より少し高く覺候。宜敷所に候。御賢慮有て然るべしと言上する。是を聞て左近申樣は、蓮華寺へ開くとも、遠所の山なれば兵粮の手當無二覺束一、毛利家へ一味仕ば信長公へ對し本意不レ成、殊に基景君の御身の上も計難しと、手を組て居ける所に、大將勝基仰けるは、運つきて討死するは武士の道、今更驚くべきにあらずと座を立て奥に入り、頓て出給ひ被二仰渡一けるは、左馬之介は牛尾を頼で毛利家へ下るべし。左近は是より京都へ登り、喜太夫と談合して、信長公へ歎訴して基景を守立よ、若毛利家の世と成る共、後藤の苗字殘るべし。先左馬之介に姉人を付岩尾山へ遣し、跡に殘て予が切腹せば、信長公へも毛利家へも、一旦の義理は立べしと宣ふ。並居る諸士も御覺悟を感入る。又難波利介へ仰せけるは、直家秀吉合體して讒訴

せば基景が助命も計り難し。斯もあらんと兼ての覺悟、局ふさが腹に男子出生、横山八郎を勘當と號し彼に添ふて追出し、平田の里に忍入る筈、足下命を全ふして彥右衞門を降參させ、難波家を相續させ、彼小兒を守立て、後藤の名字を繼せ給へと泪と共に賴み給ふ。武宗暫く答もなかりしが、良有て某事此度の軍善惡共に討死と兼ての覺悟、此義御免被ㇾ下度と辭しけれども、强て御賴に付承知仕り受合ければ、大將大に悅び給ひ、牛尾を賴みの書翰を調へ、香川へ御渡し有て猶懇に仰ければ、香川大悅して歸りけり。老臣旗頭の面々、大將の御心中を感じ落涙に及びけり。

御臺に左馬之介殿付添岩尾山城へ退く事

斯て勝基公御臺所に仰らるゝは、最早當城難ㇾ保。さすれば毛利家を賴み、岩尾山舛形兩城の內へ開くか、當城にて討死するかの外なし。御身が事は敵といへ共親の事、殊に當手の大將政家も親族の事なれば、我討死せば爰を遁れ親類へ便り、後世菩提を吊ひ給へと宣へば、御臺所こは存じかけなき事仰られ候哉。親たりとも兄弟たりとも、聊も哀む事なし。備前に歸り助命する心底露計も候はじ、何國へ成とも召連給へ。誠敵の娘と思召御見捨候はゞ、只今自害仕候と覺悟の體なれば、大將も御感あつて、其心底ならば心置なし。敵と成り味方となるは武士の習ひ、必ず恨み給ふなと宣ひければ、御臺所も御安堵有て、然ば基政に附て毛利家へ下るべし。供は誰が宜敷かと申ければ、基政の父肥前入道了齋申は、愚老が案ずる所、毛利家に於て連枝とも稱する上原右衞門大夫元祐、素爰に籠り居る上原主水は惣左衞門が妹聟にて、男子一人出生の後其妻世を去り、其子を主水が養育して成人す。上原七郎是なり。元祐が父上原隼人佐祐勝が妻は、前の小吉野庄司猪股加賀守正藏が嫡女にして元祐母也。加賀守に子供多く有て其次男子にて、主水正俊とて修理介唯正が父也。其次の女子我妻にて、基政が母也。其次女子雲州浪人龜井刑部大夫永綱が妻と成、男子二人生じて、後に

尼子家滅亡して永綱浪人し、妻子共猪股が方に養育して成人す。兄新三郎は佐々木入道道階の養子、弟新四郎去冬より大將の小姓に召仕ゆる。此譯にて、基政を始め、猪股・上原・龜井等皆元祐が親族也。近頃音信絶えけれ共、近付けばしたしかるべし。上原・猪股等に相談あつて然るべし、と語り給へば、列座の諸士是を聞て、幸ひの事なり迚、上原兄弟猪股相談有て、上原惣左衞門・同七郎・龜井新四郎、藝州へ下る事一決して、御臺所姫君は左馬之介殿の同室也。奥女中五人召連給ふ。上原・龜井の外御附添の士には、水島久作・後藤新左衞門・難波重郎左衞門・山本彥右衞門・井上新兵衞・福原彌三右衞門・浮川喜内・赤堀孫左衞門・福田孫左衞門・仁木源吾・今井久太夫・豐田勘助十五人、其外勇士二十人、足輕仲間六十餘人、都合百餘人。五月朔日夕丑の刻、密に立出、岩尾山城へ赴給ふ。後藤左近之進は、次男亦次郎・古田兵左衞門・柳澤彌市郎四人に、足輕仲間等纔十餘人召連、是も寅の刻計に京都へ登りける。此時後藤代々の重寶を悉く分け、左馬之介殿へ讓り給ふもあり、京都へ持參して基景殿へも讓り給ふ品多かりけり。扨も御臺所姫君も、大將御覺悟の事は夢にもしらず。明日は大將も跡より御越し被レ成候事と思召して、御別れも惜み給はざりしに、是ぞ一世の御別と察し參らせたる人々は、互に顏を見合せて、皆感涙に及びしも哀といふも限りなし。

植月鄕野田の原合戰の事

爰に西河内松原等が手下の惡黨ども、城の北山蔭に忍び居たりしに、夜更て搦手の門より御乘物の出るは落人と心付、急ぎ浮田の陣に馳付て斯と告げしらせけるに、小島久内兵衞と云者に、勇士十人鐵炮組足輕五十八人差向てければ、惡黨共十餘人案内して跡をしたひ追掛けるが、夜明方に野田原に追付、跡より鐵炮を放ち、大音揚げて戻せ返せと罵りけるに、左馬之介殿は此邊の野武士ならんと心得て、少し小高き所へ備を立テ狼藉し、卒爾はし致すなと控へ居る所に、無二無三に打て懸る

を、水島久作・後藤新左衛門・上原惣右衛門諸勢をいさめ防戰す。其隙に、仁木源吾が案内して、片原の山寺へ御乘物を昇入させ、上原七郎・龜井新四郎・難波重郎左衛門究竟の若物ども、門前に相守る。水島久作・上原惣左衛門等、鎗を揃へて追々惡黨共を突立ければ、是にへきえきして引色に成る所を、小島久內兵衛一足も引ず、進や〳〵と勢すれば又もり返して、惡黨共の鬼藤太・矢田權六・荒內代六・末田鄕藏・宮山市內等枕に討死す。味方も豐田勘助・井上等小島勢に取卷れて討死す。上原・山本等兒島が勢を押へ防戰する內に、岩尾山より迎として湯原五左衛門二百餘人を率して馳付、荒手を入て戰ひけるに、小島勢切立てられて崩ける。小島も敵に加勢の加るを見て、馬のはなを引直し、捨鞍を打て逃けるを、勝に乘て追討けるを、後藤新左衛門制して引戾し、湯原に挨拶して圓照寺へ使を立見れば、早迎ひ勢ども御乘物守護し、左馬之介殿御一所に御立有と聞ければ、後藤・水島・上原等心靜に御跡を拂ひ、岩尾山城へ入にける。此軍の始に鐵炮を頻に打てば難義たるべきに、政家より御乘物奪取歸れ、必ず率爾して御臺所姬君に御あやまち有ては宜しからずと申聞置し故、玉なき鐵炮を打しとかや。

備前勢計義を定めて攻寄る事

爰に浮田左京之介政家は、明日の軍の評議に諸大將を集めて、いまだ異見も聞かざる所へ、鬼藤太が落人の注進を聞て、小島久內兵衛差向け、跡にて延原が陣所へ申遣けるは、毛利家より加勢の由相聞候間、勢の近かざる內、明早天諸手一同に責寄て可レ然存候。此旨御心得られたくとの事也。延原彈正は、夜の內に門を越え、林野城下へ押寄る。浮田政家は勢を三ツに分け、左備は牛窓源八郎、右岡孫太夫・角南隼人正、兩陣とも夜の內に三星城下へ押寄せて、夜の明るを待て居ける。政家が本陣も、城下近く押詰て、相圖を待居ける所へ、小島久內兵衛漸くに馳歸り、野田原合戰の次第、言

上の趣は、鬼藤太が案内にて、頻に追掛け野田原と申所にて追付、鐵炮を打せければ、落人共踏止めて相戰ひ、惡黨等一命を投げて戰ふといへども、元より下郎の事成ば、敵の勇士に切立られ十餘人の者共七八人は討死する。殘る奴原は手負と成、山林へ逃散て便りなく、敵には新手の替つて無二無三に切立られ、引味方を何國迄も追討しければ、磯部兵部松永等始め十一人討死する。最早手負小勢なれば返し合す手便もつき罷歸り候也と申せば。政家然らば敵の加勢幾程成や。小島答けるは惡黨は散々亂軍の事なれば、慥に見知り難く候得共、毛利勢は五六百騎と申上る。政家聞て然らば油斷はならじと、牛窓が與子を分て押として、山田彥太郎に五百餘人を附て、小矢田河原へ出張する所へ、惡黨組の死殘が立歸りて申けるは、跡はしらず。野田原へ出しは湯原牛尾の印也。御用意あつて然るべしと言上す。然らば敵に加勢の無き內責落さんと、諸手へ陣觸をして短兵急に責にけり。

勝基諸士へ暇を賜り東の丸酒宴の事

斯て勝基公は御臺所姬君をだましすかして、岩尾山城へ落し給ひて、籠城の諸士を招寄せ仰有は、永く籠城深切不ㇾ淺、禮は詞に盡し難く、當家の運つきて當城を保つ事今日限りと覺え候。此上は各の存意に任せ、何れ成とも身を片付け、家名相續の謀略を計らひ給へと、暇の盃を賜り、忠節不ㇾ淺人々には種々の遺物を賜り親敷仰を蒙り、列座の諸士生々世々の御厚恩報じがたくと御心中を察し、感淚にむせび居たりしも、はや東雲に晴渡りければ暇を告げ、銘々持口へ向はんと申ければ、外樣の諸將は最早當城へ歸り給ふ事なかれ。譜代重恩の者、我先途見届けんと思ふ者は格別也と仰られて、暫く奧へ入給ふて頓て甲冑して出給ひ、予が一生の晴軍なれば、いさぎよき合戰して討死すべし。各も予が追善と思ひ給はゞ、敵の勇士をなやまし開き給へとの給へば、仰にや及ぶべしと、持口さして急ぎ行、大將は東丸へ移り、難波利介と名殘ををしみ給ひ、兩人も今日を限りの事成ば、

さま〳〵饗應、暫時御心を慰め給らせんと、盃の數重り、賴政のくせ舞を謠ひ給へば、兩人も御跡を付る。諏訪大宮少司笛をふく。梶並彌四郎傍にありあふ兜を取て、皷の拍子をあはせ時を移しける。

林野落城幷山本降人に出る事

林野城には、後藤河内守久元・小坂田織部等を始、此手の勇士共、誠に今日を限りの事なれば、今は何をか惜むべきとて、前々より貯へ置たる大石材木等を取集、靜まり返て居たりしを、片上・三石が兩勢、三の丸を責取り、二の丸へ責登らんと喚きさけべ共、少も騷がざれば、池上・光石明城と心得、誰か先乘して高名せよと下知すれば、はやり切た若者共、我先にと攻近づき、二の丸の切岸へひた〳〵と押詰め、築地を乘越えんとひしめきけるを、後藤・小坂田等諸卒に下知して、材木を投掛け、大石を轉ばし、兩人は本丸の矢倉に上り、矢たばをといてさん〴〵に射ければ、寄手の兵大に討れけるを、延原是を見て、福岡・片上が兩勢搦手へ廻れと下知しければ、荒木田より搦手へこそ押廻し、山の半腹迄攻登るを見て、後藤・小坂田等搦手へ人數を廻し、本丸の表矢倉に火を放ち、是を大手の防として、搦手へ大石材木を轉し、敵をさゝへ切て出、三星城へぞつぼみける。此時惣大將政家入田口を責させ居たりしに、林野城の火を見て、林野は落城せしぞ攻そんじておくれを取なと、諸卒を勵ましける。福岡・片上が兩勢、林野の落人を追掛け、城の後の小谷を追下る。政家も本陣を川東の三海田の山根に移す。延原は林野城へ登り、燒殘りたる陣に籠り勝鬨を作り、諸手の軍を見物す。爰に羽仁山の城主山本與次郎と云者、元難波家の族たりしが、去る天文の頃、主君難波が家を押領して、後藤家の旗下と成て、既に羽仁山の城主と成し者成るが、夜前密に肥前入道了齋御自害被成し御首を盜取て、浮田の陣へ持參して降人と成る。强敵不道の山本哉、以前と云ひ今度といひ、冥加の程ぞ恐しゝと、云はぬ者こそ無かりけり。去れども是を始として、降人と成る者多かり

けり。

搦手合戰菅の黨退口の事

斯て小矢田河原に遠見の者を殘し置、牛窓源八郎搦手の方へと押寄ければ、落支度の者ども大に驚き思ひ〳〵に逃退く。爰に菅家の嫌（惣カ）領有元右衛門の大夫佐綱は、一族相集て一備にして、牛窓が勢の前を靜に通らんとする所へ、鐵炮を打掛けさゝへければ、豐田・福本・皆木等を始め、おめ〳〵と逃退、名を穢すなといふ程に、牛窓が先備を無二無三に切崩す。是を見て、大將牛窓諸卒を勵まし、敵は名に負ふ菅原の者ども成ば、打取て高名せよと喚き叫んで責戰ふ。爰に豐田 家人、野々上藤太、皆木が家來大佛太郎、敵に取卷れて危ふく見えけるを、皆木右衛門・豐田三郎左衛門馳歸りて是を救ひ、高所へあがり、一息繼て居る所に、有元右衛門大夫・同苗七郎左衛門・福本惣兵衛、左右を拂ふて、戸國・宮坂・右手・小板等、一備にて多勢を割て通る。此時分林野城炎々ともえ上りけるを、牛窓、早林野は落城するぞ、進めや者共高名せよと勵ましければ、山田兵内・竹井善兵衛・須田孫六等、鎗先揃へて勇を振ふて突立るを、幸村兄弟・原田與惣等渡り合ひ、防戰する内、有元は切拔て、豐田皆木と一所になる。福本敵に取卷かれて危ふく見えけるを、有元が家人鷲田八郎・高江次郎等、落合ふて敵種林利藤太・木村定兵衛兩人を討ち、福本主從を救ふて是も一所になる。其儘敵も追はざれば、菅家一族無事に開山高福寺へ登り、三星の樣子遠見して居たりしが、彌落城の體を見て下山し、原田は在所へ引歸る。其外の族は、皆有元が城へ一所に引て籠城しけり。

中島合戰難波が槍渡し柳澤勇戰の事

斯て浮田政家は、延原に林野城を落させ、三星城を得落さでは耻辱なりと思ひけん、軍勢殘らず

*旗勢は旗本勢の誤なるべし

川を渡し、中島より大手口へ押詰て、無二無三に攻立る。爰に角南隼人正、大音揚て、城兵は過半落去たるぞ、何程の事かあらん、木戸築地を打破て先乘して高名せよと、大木戸を押破り、稲荷森の大門口矢倉ひた〳〵と攻詰けれど、難波與三右衛門・小坂田菅兵衛等、物なれたる者成ば少も騒ず、靜まり返て待ける所へ、早大門打破て込入程に、纔に細谷の馬場を込登る所へ、稲荷森の中に貯置たる大石を轉しければ、此手の强勇共誠に今日を限りの事成ば、五十〆八十〆有大石も、手ごろく取て投付ければ、是に打れて死する者數知らず。たまり兼て跡へ引んとすれ共、大將政家諸卒に下知し、一足も引事なかれと跡を詰、旗本を操出し大木戸の前へ責詰りぬ。城將勝基は難波柳澤と酒宴して有けるが、川を越たるを見て、我冥途の土産に、政家が首持參せんと、武具を取て召給ひ、馬引寄て乘給へば、難波・柳澤も、敵將の首は我等が討て土産にせんと打立ければ、後藤河内守を始め、其座に有し諏訪大宮少司・梶並神務・山下六左衛門・上原主水・大町勘三郎を先として、眞先に進み、北の小川を開き打出て、敵將政家が横合より打て掛る。大功の勇士誠に今日を限りと思切りたる事成れば、無二無三に駈崩し、當るを幸ひ、切伏せ突伏せ勇を振ふ。寄手は多勢なれども大戸木へ込入て、引く事も進む事もならざれば、政家の旗勢*防ぐと云へ共、終に切崩されて右往左往に逃散りけり。勝基公元より打物の達者なれば、三尺六寸の太刀を以て働き給ふ、此太刀先に當りし者梨割に逢ふ者數を知らず。難波・柳澤鎗を以て左右を突まくる。山下上原は、政家を目懸け進み寄る所、備前岡田左近太・和田助四郎・豐岡甚内・楢崎右衛門究竟の勇士、かけふさがつて防戰する其隙に、政家漸く逃げ延び川へ馬を入れ、向ふの岸へ乘上らんとする所を、難波利介こなたの川岸より名譽の鎗先覺え給へと、三間柄の大身の槍を投付ければ、政家が馬の尻より下腹へぐさと立て落馬するを、土手影より大勢來て助延る。此所河はゞ四十餘間たりしに、投越したる鎗少し下るといへども、難波勇力諸人目を驚す。後世に難波が槍渡しと云は此事也。

此時大將勝基、政家を追掛け川を越えんとし給ふを、河內守久元馬の口を取り、大將たる御身なれば、亂軍の中に御討死候事後世の耻に候間、是非城內へ入らせ給へと諫めける所へ、山下六左衞門馳來り、御馬の口を取て城へ向けゝれば、廣戶新之丞・浮川等馬の尻を弓にてたゝきければ、程もなく城內へ上て入給ふ。難波利介は手勢の殘兵を集め、多勢を掛散らし、楢原さして引退く。山下を始め、普代の者は城に入けり。柳澤多郎兵衞は數度の戰ひに、薄手のうへ先刻よりの戰ひに痛手を負ふて、覺悟を極め鞍かさに立揚り、寄手の者共克聞て後世に傳へよ。唯今鎗を渡せしは、難波利介武宗也。斯申某は柳澤多郎兵衞基貞、我等後藤家重恩を報ぜん爲め討死する。首を取て高名に備へよと、三尺八寸の太刀を眞頭にかざし、むらがる敵の中へ唯一騎ゑしやくもなく驅入て、當るを幸ひ切て廻る。誰か出合勝負を決する者もなく、遠矢に射取れと雨霰の如く放つ矢に、終に討死して、首は河本八郎に取られけり。爰に諏訪大宮少司敵五人に取込られて、危ふく見えける所に、出雲井四郎・石川源內馳來て、敵三人打て引取り、大町甚三右衞門・梶並四郎敵に駈けなやまされしを、大町が家來田中兵衞、梶並が家來土井久內防戰して討死する。上原主水は敵中深く切入て、既に危ふき所、豐田伴介・芦田源左衞門落合ふて、三人共に引取りける。爰に小坂田菅兵衞・同苗織部・難波與三右衞門、數多の敵を追散らし、中島の合戰を見物して居けるが、早日も暮れければ、寄手共勢を引揚けり。東の丸へ歸らんと見上れば、早火もえ上りければ、大將御自害遂げられしと、皆愁傷して引退きけり。

大手搦手惣合戰の事

斯て大將政家は、三海田中島へ押寄せ、牛窓は搦手へ寄せける。入田口は藤井八左衞門が勢計り成ば、小堀備前守・下山半內・奥山源六を始め、勇士三十餘人搦手へ廻て相待ける所に、牛窓が勢共、

※前に堀道とありて此處堀坂に作る何れが是なるを知らず

菅家の者共落去る跡なれば、爰は無人と心得、我先にと押破り込入けるが、案の如くさしたる人もなければ、本丸へ先乘して印を立んと、切岸の下へ押詰ける所へ、兼て貯へ置たる大石材木を頻に投掛け、ひるむ所を思ひ切たる强勇共、鎗先を揃へて突立ければ、散々に成て敗北し、牛窓も川中へ逃歸るを見て、小堀備前守遠矢を射るに、牛窓乘たる馬の太腹射られて、落馬するを見て、下山牛内川へ飛入て追懸る所へ、備前勢佐井田次郎・船岡八郎かけふさがつて討死する。其隙に牛窓漸く逃延ければ、相隨ふ者共跡をも見ず逃て行く。此頃諸方の攻口喚き叫ぶ聲大山も崩るゝ如く也。入田口にも藤井八左衞門、山の半途迄攻登り、先勢は城内へ込入らんとひしめきければ、難波三郎左衞門・福田・足井諸卒に下知して切て出で、尾形の坂道を上るより、堀道權平・流江與惣・宮山喜内を先として、鑓ぶすまを作て突立て〱打下れば、たまり兼て逃下るを、八左衞門踏止つ　諸卒をはげまし居る所を、難波三郎左衞門矢倉より放つ矢に、片腹ふかく射られて伏けるを、郎等共肩にかけ逃下るを、流江※堀坂頻に追掛けゝれば、藤井が手の者防戰して七八人討死する。早日も暮方になれば、福井・足井等呼返して城を見れば、早東の丸炎々と燒上るを見て、思ひ〱に引退きける。爰に足井又右衞門・長瀬與五郎・小田又四郎三人は西の丸の下に在て、牛窓が引行勢をさゝへ、散々に切くづし、敵五人討て退き、難波が居城へ入にけり。其外諸手の人々勇戰して、高名の者多しと云へども、亂軍成ばつまびらかにならず。

大庵寺において勝基自害の事

斯て勝基公は、東の丸に火を放て、本丸へ歸り御自害の用意有ける所、河内守久基申けるは、當城にて御自害あるは、毛利家牛尾へ對し義理惡鋪、殊に御臺所姫君の御恨み候べし。一先當城を開き岩尾へ移り給へ。牛尾と合體して切返し給へと樣々諫めければ、良有て、久基申所尤に候得共、

岩尾山へ行けば信長公へ義理立たず。此上は大庵寺の薬師如來、當家代々の尊佛なれば、彼の寺へ行き自害すべし。覺悟の上は供に及ず、密に落行べしと御暇を賜はりけれども、強て御供の人々列を揃へて相隨ひ、御先拂は龍門亦市・山本權內・井上山兵衛尉、御近習には後藤河內守久元・廣戸新之丞廣義・浮川將監・江見幽齋・福原彌重郎・安東源左衛門・柳澤市松・下山半六・佐々木新三郎・高取六之進・奥田與八郎・植月五四郎・出雲井四郎兵衛・田中玄順・富坂新左衛門・廣山孫左衛門・山中三郎次・淸水孫兵衛・福島源三・神崎與五兵衛二十一人、御跡拂ひは山下陸左衛門・福田佐內・水島甲助・都合二十七人、其外御家普代の組頭・青木權內・西井惣三郎・寺坂・西田等百餘人、頃は天正八年五月二日酉の下刻、後藤家重代の城を捨て、西の谷より中山路へ落給ひけるを、山住の强盜共見付、さゝへ戰ふと云へども、先備の將井上・龍門等悉く打散して、長門の村境へ差かゝる所を、牛窓・光石等が勢跡をしたひ、鐵炮打掛けるに、山下六左衛門・福田水島等踏留て戰ふ。此隙に恙なく大庵寺へ入給ふ。住僧共出給ひ、禮義終りて、河內守久元より御遺物、幷追善料一箱渡されける。大將は大尊薬師如來へ拜終て、首に掛させ給ふ系圖の卷物を河內守久元へ渡し給ひ、足下長く助命して、基景や基政が後見して、後藤の名字を起させ給へと、厚く賴み給へば、兼て自害の覺悟なれども、是非なく御受けされければ、諸士へ御遺言あつて、御心靜に自害遂げさせ給ふ。此度御供の士、皆自害の覺悟成れども、大將の御遺言の趣を以て、河內守强て留られける故、何もとゞまりける所、浮川將監は大將御同年、今年四十二歲、少より御側付添し士成が、諸士に向ひ我等事は近頃病身にして、助命して後の御役に立事成難し、敵大將の御首を搜出さんとする時、某が首を御用に立、渡し賜るべしと云もあへず、腹かき切て伏にける所へ、山下・福田・水島等漸く敵を追返し馳來りければ、はや大將は御自害を遂げ給ふゆゑ、切腹と見えければ、列座の人差留ける。河內守遺言の趣演聞せ給へば止りける所、多勢追來り寺を取圍み、大將の首渡すか、さなくば寺中へ踏込まんとどよめきけれ共、少

も騷がず、山下六左衞門、浮川が首を弓手にさゝげ、寄手の人々能聞れよ、作陽の惣大將四郎左衞門の尉藤原勝基公御武運盡させ給ひ、爰に御自害遂させ給ふ也。首をしくば寄手取て見よ、山下六左衞門元則が守護致すと云て、三尺八寸の太刀水もたまらざるをひらめかし、仁王立に立たれければ、寄手の者共あきれ果てゝ控へ居る。此時河内守久元より、敵將光石主水方へ使者を立、斯なる上はかこみをとき給へば、大將の首は渡し申さんとの事なり。和談調ひ光石主水首を受取り、かこみをひらき引取りける。斯て翌三日、御死骸を葬り奉る。住僧へ追善を賴み置、思ひ〳〵に成にけり。大滝寺の御法名を勝元院殿行忍利求大居士と號す。

浮川將監は浮光院義仙信士と號して、御追福懇に吊ける。扨も山下は浮川將監が首なれども手に捧げ、大將の御首容易に渡すまじと勢ひするどく見せたる故、擬ひなく大將の首と思ひて、光石が受取ることそ理かな。勝基御年四十二歲、東美の惣大將、浮川一人が供として冥途黃泉の旅路に赴給ふ事、哀といふも限りなし。此浮川は元浦上家の舊臣浮田源太兵衞と云者の子也。其ゆゑに直家謀叛を企て主家を押領する時、樣々諫けれども敢て用ゐざるゆゑ、親類の緣を切て宗景へ忠節を盡し、彼が爲に討死する。所緣あつて勝基の扶助を受け候士成るが、誠忠父に同じく爰に忠死を遂げ、勝基の首に變て直家の實檢に預かる。此時眼をひらき笑顏して、不思議を顯すと云ふ。天晴の士と譽をあらは。其沙汰隣國にかくれなしと。依て世忰浮川喜內、毛利家の御聞に達し立身すと云ふ。實に信なるかな〳〵。

三星軍傳記　卷四終

三星軍傳記　巻五

浮田政家林野城に在て宇喜多家の制法觸渡す事

扨も三星及ニ落城にければ、浮田左京亮政家は、林野城を取結び在城して、勝軍の次第、敵味方討死の姓名等委細相認め、大將勝基の首、備府へ送り、使者は河村郡治兵衛と云ふ者也。夫より浮田家の制法を近郷へ觸渡しけるに依て、英田勝田兩郡の諸士降人、其外名主村長等馳參る輩數を知らず。中にも山本與次郞・高取右近等降人の始なれば、彼等を賴て降る者多し。勝田北分は未だ降人見えざりける所に、小吉野庄に、眞加部城主原田與五惣・同與四郞等降人と成る。是等を始めとして、大方降人とこそなりにける。然共有元が旗下菅家の族等一人もくだる者なし。英田郡に難波を始め江見・安東等未だくだらず。爰に小原城主新免伊賀守が名代同苗修理介馳參る。粟井の須々木も馳來て、皆降人と成けるに、難波は居城に楯籠り、常福寺も關を堅め、楢原の宿端に、湖の邊に兵を伏て恐るけしき更になし。爰に有元右衛門大夫は、三星城退口一族を集め評議しけるは、此儘おめ〳〵降參するも言甲斐なしとて、居城大別當城の修覆して籠城の用意しけるに、高取右近・原田兄弟は、野心を企て降人と成て、浮田が陣へ行て此事を語る。是を聞て降人に出る者多し。爰に福田孫九郞と云者、是も菅家の流れたりしに、去る天文の頃上原家の臣と成り、主從の恩厚かりしに依て、主君元詮が命を受て、上原善五郞と云ふ地方奉行と談合して、三星城内に在ける貢帳を取揃へ、浮田陣へ持參して、浮田が家の扶持人と成て、兩人共立身すると聞えけれ共、福田は後に貞心をあらはす。原田・高取等は、忠孝の道を戀し一身の榮華を望み、一旦は立身したれ共兩家共末惡し。事わりかな〳〵。

＊取嗳は如何なる意の當字なるや未考

難波居城に楯籠り後和談する事

斯て難波理介武宗は、總の一族を集て居城妙見山に楯籠り、浮田の大軍を引受け相待けるこそ不敵なれ。是を聞て相集る諸士は、一族楢原右近・福原彌十郎・岡崎孫九郎、其外長瀬與五郎・小坂田菅兵衛・垂井亦右衛門等を始め降軍の諸士馳集て、程なく勇士二百三十餘人とぞ成にけり。爰に後藤河内守に、後藤家の殘兵付隨ひ參じければ、追々に馳集て都合人數五百餘人と成にける。爰に又安東家の一族、立栖尾城に栖籠る兩家の勢を以て、常福寺の關を堅め、平田渡し場に伏兵して、恐れ氣も無く有ㇾ奕成ければ、浮田政家・延原等諸士を集て異見を聞ける所に、角南入道如慶申樣は、此上難波を力攻になされなば、諸卒數多討死すべし、彼が居城總の小城と云へ共、嶮岨の摺山にて、人馬の足の立所なき名城成故、右へ赤松勢再度攻たれ共落ずして、山名持城と承り傳へ候と言上する。是を聞て如何はせんと、備前勢思ひ煩て居ける所に、蓮華寺の上人備前より歸るさに、軍中の見廻りとして立寄給ひけるに依て、角南密に物語して取嗳＊あれかしと申けるを聞て、上人兩將へ和議可ㇾ然思はれける所へ、延原和議に越したる事無ㇾ之と申し、其外諸士頭の人々も一同一決して、蓮華寺へ任せ申べしとの事にて、暇をつげて歸り給ふが、難波が居城へ立寄給ひて武宗に對面有て、和議可ㇾ然旨取嗳れけれ共、難波も終に勝べき軍の覺はなけれ共、流石三星の城剛將とも稱せられし身なれば、おめ／＼と降人と成て、家名を穢す事難ㇾ成し。必死の籠城成ば、容易に和談難ㇾ仕旨を申ければ、蓮華寺樣々と言葉を盡し給へば、籠城の士共理に服して、和談有ㇾ之可ㇾ然由申ければ、然らば兎角もと言ゝ、其儘武宗は剃髮して淨意齋と號す。翌日蓮華寺に案内にて、難波彦左衛門尉・同與三右衛門・楢原右近・小坂田菅兵衛・長瀬與五郎・垂井亦右衛門等は騎馬、其外福原岡崎等、道具は長柄先箱、上下八數數百餘人、林野城へ登城しければ、徒士頭大森三五郎門外へ出向ひ、蓮華寺へ禮を演べけ

るを見て、各馬より下りて挨拶しければ、大森案内にて入城する。二の丸の口へ角南如慶出向ひ、夫々挨拶有て、案内して座敷へ通りければ、大將政家の左前に延原彈正・三石、右座に牛窓・池上等列座して居られける所へ、蓮華寺も御通り有て申されけるは、今日登城いたし、難波彥右衞門父武宗、三星城に於て怨敵をなすと云へ共、御當家の御武運强して敵し難し、終に落城に及と云へ共、難波は一城の主として無下に降る事をはづかしみ、居城に栖籠と申せ共、所詮勝事あたはざる事を辨て、愚息彥右衞門政勝を始め、一族幷籠城の諸士頭等、今改て御當家へ仕へ申さん爲、拙僧案內仕條、何事も御許容有て御旗下に加へ給へと述給ふ。難波を始平伏して彥右衞門申けるは、唯今蓮華寺口述の如く、愚父を始め一族共、是迄敵たひ候段御許容有て、御旗下に加へ給はゞ、一同大慶仕候と言上す。大將政家仰けるは、此度蓮華寺御厚志の御執持、殊に難波家の事は本國に於て承傳る舊家成れば、歸國の上大守へ宜敷申上べし。敵と成味方と成も武士の習ひ、貴父武宗並びなき者成しか共、後藤家の運つたなき故也。今より改て當家へ忠節を盡し給へと懇に仰ければ、何れも大悅して禮を述て退出する。降人ノ法成ば難波も勝南郡の所領を取散し、英田郡の本領安堵す。小坂田も右に同じ。長瀨垂井兩人所替になる。爰に江見家も所々出陣し、留主なれ共、一族の與一右衞門・同藤次郎兩人登城して、舊領安堵を願すむと云へ共、安東家は延原が憤深くしてすまず、蓮華寺へ政家被レ申けるは、難波理介へ直に對面の上、歸國いたされ度旨賴れける。依て其翌日淨意齋、薄衣黑綾の十德紋紗の立付をはき、短刀帶し、太刀をば舊臣森名助五郎に持せて登城しける。大將始諸士頭の人々叮嚀を盡し、慇懃に饗應し給ふに依て、淨意入道安堵して暇を乞て退出する。蓮華寺も其夜福原の構に泊り給ひ、翌日歸寺し給ふ。安東家和談の事、種々取持見給へ共、不レ調事こそうたてけれ。

安東が居城亡落の事

爰に山口城には、蓮華寺を心頼に思ひ、一左右を相待居たりける。蓮華寺歸寺の砌、福原構へ安東助之丞を招き、延原が憤深きに依て、和議調ざるの旨具に被二仰達一ければ、厚禮を述て馳歸り、祖父入道に向ひ、扨も江見難波兩家共和議調候へ共、當家の儀は、延原彈正が憤深きに依て、是非に取ひしぎ候積り一決仕候條相極候。此上は如何に計ひ可レ然哉、御賢慮有て然るべしと言上しければ、入道和田・今井等の舊臣を舍人入道申ける樣は、此上は是非に不レ及、某一人當城に踏留て思ひの儘軍して、討死仕るべし。御一族の旁、片時も早落させ給へと云ふ。入道是を聞て予が思ふ所と同じ。今井が異見理に當れり。助之丞は支度して上京し、右京と談合して信長公へ歎訴すべし。平五郎は幼きものや婦人を連て、何國へ成共立退べし。某今井と爰に討死して、家名は穢すまじ。早々落よと有ければ、兩人共詞を揃へ、仰の趣御尤にも候へ共、數多の一族落行、御老仁を殘し置奉る事は天の恐有べく覺候。此儀は御免下されかし。御先途を見屆け奉らんと申ければ、老翁是を聞て、其方共が申條、斷にも候得共、此小勢にて大軍を引受、所詮犬死、予が事は老の身にて、此場を落去り何國にても、高名する身にあらざれば、先祖代々の當城にて討死して、名を末世に殘すべし。汝等は此場を落行、信長公へ仕へ忠節を盡し、家名の相續せよ、詞を返さば勘當たるぞと仰ければ、兩人も十方に暮れ居たる所に、今井舍人、老君の仰にまかせ、跡不レ構と早落給へと諫ければ、此上は仰に隨ひ申さんとて、兩人は婦人幼子等引具して落にけるを見て、舍人入道は心能討死せんとて、老公東翁軒に向ひ、見苦からぬやう御自害をとげさせ給へと進め參らせ、其身思ひ極めし事成ば、はづかしからざる出立にて、足輕與子五十餘人、謀計を云ふくめ、爰かしへこ配置、旗差物等多く立ならべ、心靜に敵寄來るを相待ける事こそ無敵也。爰に林野城には軍評定有て、三石主水大將として。相隨ふ人々には和田石崎等を始として、其勢千二百餘人、角南如慶が弟角南覺左衛門は、利地の案内能く辨へけるもの成ば、先陣に命ぜられ、鐵炮兵弓兵等二百餘人引具して、先陣にすゝむ。

頃は五月八日卯刻計りに、常福寺の砦々打越けるを見て、難波も加勢の用意して居たりける。春名助五郎・堂蒲六内・衣畑七内等に、鐵炮の兵弓仕等百餘人、濱ヶ市へ押出して陣取けるを見て、三石が陣より軍使をたてゝ、先川西に控へ給へと言おくりけるに依て、難波が勢河岸に打望みて見物して居ける所に、先陣の將角南覺左衞門、城下へ押寄鬨をどつと作りければ、三陣同音にをめきさけぶ聲、天地も響、大山も崩る計りなり。爰に今井舍人入道は、兼て覺悟の事成ば、思ふ儘に引受て鐵炮を頻に打せければ、寄手の先勢坂半途にてすゝみ兼て居たる所へ、郎等二人に馬の口を取せて、年老たる武者一騎門外へ乘出し、高聲に申けるは、我等事は安東家累代の臣、今井舍人入道兼孝と云ふ者也。首を取て高名に備へ給へと言ふ儘に、むらがる敵中へ切て入、縱横十文字に乘廻し、三尺餘の太刀を持て、當るを幸ひ切立ければ、寄手の大勢崩立つ所を、角南下知して遠矢に射る。其矢雨あられの如し。多くうらかき最早働きがたく成ければ、馬上ながら兜を脱て、首ねの髮なぜ上げ、太刀取直し首にかけて前へ引落して失にける。天晴猛將哉と感ぜぬものぞなかりけり。其暇に三石主水勢を進て、我先に乘入て見けるに、手ごたへもせぬ弱兵共迯行計りにて、用立ものもなければ、散々に追ひちらし、角南勢も共に乘入て勝鬨を作り、詰の丸大將の居所へ踏込み見れば、安東入道藤翁軒上段に敷皮して座し、前の机の香爐に名香を燒いて、其身は直垂に烏帽子を着して自害してぞ居たりける。是を見て首を取んとするを、三石しばしと留て申けるは、流石安東ぞ、今井が最後の振舞と云ひ、此有姿と言ひ、をしむべき家成ルにと稱して後、角南覺左衞門首を討て取納、城に火を掛け燒拂ひ、難波が加勢の將へ禮をなして退陣する。偖も安東家重代の居城、一時の煙と成はてける事こそ、うたてけれ。

浮田政家歸陣西河內が事

爰に浮田政家林の城に楯籠、催促に隨ふて東美の諸士悉相隨ふと云へ共、豊田庄司・有元右衞門大夫佐綱は菅家の嫡領にして、勝田郡北分の押へたりしか共、此度後藤家に賴まれ、三星籠城すと云へ共落城に及ければ、是非なく本所に歸り居けると云へ共、流石に降參にも出がたく、居城を取結び籠城すると聞えけるが、左はなくして桑村與七郎名代として、林野へ登城して勝軍の賀しける。依て東美不ㇾ殘平均したる旨、岡山へ云送られければ、林野城番として、片岡土佐守と森藤新五左衞門とを差置かれ、政家は諸卒引具し、歸府せられけることゝ成ければ、御見立として江見・難波・新免等を始め、廣戸・原田其外郷村の士等迄登城し、國境迄見送もの多し。同十六日朝林野城立給ひて、岡山迄は陸路、夫より舟にて歸府せられける。此時延原彈正は、福本にて政家とわかれを告て去る。峠へ越し在所に歸らんとする所、峠の前道の邊に浪人體の士四五人待伏して、延原駕籠へ一書を以訴訟する。此者共は西河內市兵衞が與子にて、市兵衞儀痛手ゆゑ終に相果候處、先達て御約束の恩賞の御沙汰無ㇾ之、猶主君安東家を潰し給へば、老若の者共路頭に相立、歎敷奉ㇾ存る。息子小四郎へ跡目相續被ㇾ仰付ㇾ度との願ひなり。延原兼て覺有る事成ば、松原仁左衞門・西河內小四郎兩人を召出、父市兵衞が勳功少からず。然る所、存ニ得いたさず候段是非に及ばず。仁左衞門心添、小四郎を守立遣すべし。岡山に歸り政家と相談いたし、追て恩賞沙汰申べしと懇の仰を受て立歸りけるが、主家斷絶して、多くの役介養育仕度旨申立候條、上聞に達し。右願ひし趣御聞屆け有りて、則山口村の內二十貫文、川北村の內西河內十五貫、小四郎に賜はる。松原は本所に、吉野庄中村に於て田畑一町五反を賜り、百姓頭と成る。素西河內も安東族にして、種姓賤からず。後に肥前入道より安東の家名を免ずと言ふ。扨も勝基の御臺は、升形城に在て、大庵寺に於て御自害とげ給ひ、左馬之助基政は藝州に下り、毛利家の扶助を受け給ふ。相伴の人々も毛利家へ仕る人多し。後藤河內守は、難波が居城に居られけるが、難波も和議調ひければ郡へ登り、後藤淸門と談合して信長公へ仕かへ、

は三千石、清川久基千石宛分賜ると云ふ。難波六郎・安東右京兩人共、御旗本に仕へける。此外敗軍の諸士、盛衰さま〳〵なりしこと、しるすにいとまあらず。

有元が居城夜討、菅家亡落の事

爰に大別當城主有元右衞門大夫佐綱は、菅家の嫡領にして、北勝田の押へ菅の黨の旗頭なれば、敗軍して阿容と降參する事を恥ぢ、旗下の一族等を集め、居城の後八卷山を切開き籠城せんと、庄内の人夫を集め兵粮取集、城普請頻に急ぎける所に、浮田政家諸勢を引て歸國すると聞えければ、少し油斷して居けるを、原田が家人是を聞て、主君へ語りしかば、原田與五惣急ぎ林野城へ馳行、城普請成就せざる內、攻取給へと言上する。片岡森藤等始め、實に尤と一決して、則森藤新五左衞門を將として、石塚八郎兵衞・岡孫左衞門・和田市九郎其勢千餘人、地利の案內者成れば、高取右近・原田與五惣・同與四郎・福田孫七、百餘人、都合惣勢千二百人、同十九日の午の刻に林野城を打立馳登り、申の刻計に諏訪の社へ著て、人馬の息を繼がせ急ぎける。戌の刻計に黑河野に着陣して、人數を三手に分け、原田與五惣が案內者として、和田市九郎・長瀨次郎・黑本源內等三百餘人、西の谷を登り搦手へ寄る。福田が案內にして岡孫左衞門・同新介・福井惣內等二百餘人、東坂へ攻登る。高取右近先陣として森藤新五左衞門・石塚八郎兵衞が勢五百餘人、西坂より攻登り、大手口へ攻寄せける。此時搦手へ寄たる原田が家人、後の築地を乘越え火を放けるに依て、茅屋の柴部屋へ火うつり、炎々と燃上る。是を見て三方の寄手同音に鬨を作つて攻立れば、城內大きに驚騷ぐと云へ共、本陣幷八卷山等へ人數分け、爰には纔老若婦人等、百人には足ざりける事成ば、防ぎなきと言へ共、大將佐綱少も騷がず、闘本勘介を呼寄せ、汝等兄弟幼子婦人を連て片時も早く立退き、何國へも身を隱し、敵退ば守立てよとこま〳〵に言聞せ、物の具取て肩に掛け、重代の太刀をはき、大手門へ馳向ひ、敵

の有様を見渡せば、先陣に進みけるは高取右近・原田兄弟成ければ、惡き彼等が振舞哉、早打立よと下知すれば、鷲田八郎心得たれば、鐵炮を頻に打せける。佐綱矢倉のはざまを開き、さん〴〵に射ければ、寄手のもの共射立られて引けるを、高取右近、引事なかれと頻に下知して進み寄るを見て、豐田吉郎左衞門・小坂五四郎等鑓先を揃へて、高取を目懸て突立る。此時本城より見付て、有元七郎左衞門・福本宗兵衞等を始め、勇士共馳下り、搦手の和田・原田等が攻口の後へ打て懸る。東坂・岡・福田が攻口へは、有元重兵衞・右手佐平太等が防戰す。福田孫七は生得義士成れ共、年久敷上原家の扶助を受けけるが、主君上原元詮か命に依て、無ニ是非一浮田へ降人と成て、寄手に向ふと云へ共、元來菅家の族成ば、此城の間道を知て向ひ居ける所へ、あんの如く關本兄弟幼君を守護して落來りけるが、勘介福田を見て身づくろひして打懸る。孫七、せき給ふな關本、我等今討手に向ふと云へ共古人を忘れず。心靜に落給へと云ふ。是を聞て大きに歡び、然らば見遁給ふか、然らば足下此間道より忍入て、先乘して高名し給へと言て落行ける。福田は夫より手の者共を引連、間道より忍入、印を立て鬨を作る。是に氣を得て三方の寄手鬨を合て攻立る。森藤・石塚等、早福田にせんこされしぞ、分取高名せよ者共と勢ひすれば、我おとらじと勇戰す。爰に有元七郎左衞門・福本惣兵衞は、原田兄弟と鑓を合て戰ふ所へ、原田が家來落合て既に危く見えける所へ、高江三郎・鷲田八郎馳來て防戰する。原田が手のもの切立られて、終に與五惣切所へ追詰られて、有元に討れけり。與四郎は迯延たり。右手方の高取右近、眞先に進みて働ける所へ、高取源左衞門と云者、右近が從弟成れ共、去る天文の始尼子が亂に高取城を落去り、小吉野庄に入て猪股加賀守に扶助を受て後、有元家を賴て爰に居たりしが、右近が攻口へ立向ひ、高聲に申ける樣は、右近能聞かれよ。同じ菅家の流を受け當家の討手に向ふ事心得ず。爰は古菅原直兼卿御所跡、今に嫡領の有元相續の城へ弓を引事御先祖の恐れ在り。一家の好みに、某と勝負を決せよと云ふ儘に、二尺八寸の太刀を眞甲にかざし、右近を目懸て討て

懸る。右近家來末菅・黒坂等押へだてゝ防戰する。是を見て小坂五四郎・小田又四郎等、源左衛門を討せじと勇戰する。城將右衛門大夫佐綱は、黒糸をどしの鎧着て、鹿毛馬に靑貝の鞍置て、氣高く乘て門外に乘出、高聲に當城の主有元右衛門大輔菅原佐綱、武運つきて討死する。首取て高名に備へよと云ふて、三尺計りの太刀を眞甲に指かざし、むらがる敵中へ何の會釋もなく切て入る。是を見て普代の家人、芦田・岡本等馬先に勇戰する。辻八助討死す。岡本作内も大藤五郎と引組て終に討死する。森藤勢引包て討んとすれ共、有元馬上の達者成ば、十文字に乘破て打て通る所を、石塚八郎少し小高き所へ上りて、散々に射ける矢に、馬の太腹をふかく射られ、屛風をたふす如くに倒れける所に、雨あられの如く射る矢多く、鎧の裏かいて急所のいたでなれば、短刀を咽喉に突立てぞ伏ければ、備前勢落重て首を打んとする所へ、有元七郎左衛門・豐田勘兵衛等、死骸の前に立ふ塞つて防戰する內、有元十兵衛首を打て迯退を見て、高取・豐田等人なき方へと迯退ければ、其外のもの共、思ひ〳〵迯散ければ、夜明になる。夫より在城の大別當へ攻よると云へ共、皆落散て人なければ、勝鬨をあげて引退ける時、豐田勘兵衛・皆木孫兵衛夜明がたに馳參りけれ共、すべき樣もなく、黒河野の松原に忍び居ける所へ、高取右近痛手を負て駕籠に乘て引取けるを見付、正敷敵の手負ならん、討留て佐綱の亡靈へ備へんと、新手の者共二十餘人、高取が通りける道の左右より討て懸り、散々切立ける。高取勢三十餘人、中にも岩本・末菅・黒坂等の者共踏とゞまつて防戰する內、からうじて右近迯のびける。此時末菅作內を始め六人討死する。豐田が手の者野上藤內、新庄權內と云ふものに討れにけり。大別當八巻兩城共燒拂、兩構燒殘し、石塚八郎兵衛に、人數百五十人を付て殘置、森藤・岡・和田等歸陣する。有元が家來鷲田高江を始め、悉降人と成る。豐田吉郎左衛門・有元七郎左衛門等は、長光金剛寺へ入て隱れ居しが、一族共悉降人と成ければ、信長公へ歎訴するとて、都をさして登りけるとぞ聞えける。菅家代々の在城、唯一時に亡落して失ける事こそうたてけれ。時節成か

なし。

安東肥前入道歸國して家を興す事

其時安東家の所領英田保の押へとして、角南覺左衞門大畑の城に在城すると云へ共、安東家の族等あえて用ざるに依て、先如慶入道入替つて仁情を施しけるゆゑ、大方は隨心すと云へ共、安東一族等角南に腰を折事殘念に思ひ、何卒して角南を退けむと謀略なしけれ共其印なき所に、前の眞加部城主安東信濃守の次男肥前守と言ふ者、久保木城に在て一家の統領たりしに、去る天文の頃、雲州尼子が時亂に落城して、播州へ立越え赤松家へ仕へ、加東郡に在城して、今は年老て隱居し居たる。此人文武兩道に達し、智勇兼備の人なるゆゑ、去る小鹽合戰の時、廣大の勳功有て大恩の地を賜り、子孫繁榮して居られければ、安東家の族の播州に馳參じ、國の有姿を入道に語ければ、古鄕の事成ば一族の歎を感じ、羽柴筑前守へ談じ、信長公へ愁訴しければ、浮田家へ仰下され、英田郡舊領を安堵して、同九年の春肥前入道歸國する。子孫保内に威を振ふ。角南如慶は河井庄へ所替に成る。入道再久保木に在城して、山口城相馬が遺跡を取立、眞加部を一圓に原田與四郎に賜りしかば、眞加部の城主安藤源左衞門は、肥前入道が甥なるが、浮田家より、眞加部を一圓に原田與四郎に賜りしかば、力なく上方へ漂泊して、折々入道の方に便る。又有元佐綱が一子も、入道が外孫なれば、是も家來關本勘介助抱して播州へ赴きしを、安東德兵衞養子として臣等共に扶助して置く。又粟井近江之介子供三人父におくれ、家臣須々木右京が後見して有けるが、近年主家を蔑にして、諸事須々木ノ心の儘にするに依て、兄三郎平は都に漂泊する。弟新兵衞は安藤德兵衞扶助して置けるが、是等は何れも入道の爲には外孫なれば、憤り不レ斜。何卒して彼等が家を起さむと計議を考へ居けるに、同十年の夏、信長公爲ニ光秀がニ御生害、上方大亂と成て難波安本を始、有元粟井等も心願をむなしうして下りける。此頃、原田

與四郎武威盛にして、隣郷のもの共を見侮り、他領を掠取り、我意日々に增長しければ、近郷武士大町を始め桑村諏訪の社士等、原田が非義成る旨訴訟すると云へ共、兄與五惣討死の勳功不ㇾ淺に依て、何の沙汰も無ㇾ之、何れも心外止事なふして居たりける所に、安東源左衛門歸國して、伯父入道の許へ行、身の上事を物語しければ、原田が非義諸人惡みし事こそ幸ひ成とて、入道源左衛門云含めけるに依て、小原へ赴き母方の叔父新免備中守を賴みければ、備中守是を聞て、家族を集て評議しける所に、上原七郎備中國高松合戰に日畑城を落て、所緣たるに依て新免家に便り居て爰に居合安東と一致してひたすらに賴けるに依て、新免宗貫より原田が非義增長の事、悉を一書に認め、太守へ訴へ給ふ折節、有元七郎左衛門上方より歸り、新免家へ立寄、國の有姿を聞に、原田威にほこり隣郷の武士共を苗代にしけると云へども、大町を始め幾の所領も減じられて、小身と成果て、原田が下に立て月日を送りけると聞えければ、急ぎ在所に歸り菅家の族を相集め、原田が非義惡事增長する條讒訴させて、安東上原等と心を合せて相待けるとかや。

原田が居城討果す事

同六年夏、備前より林野城番の輩へ原田を討果すべしとの事にて、新免安東兩家へ討手の役を被ㇾ仰下ㇾけるに依て、大きに喜ける。爰に有元に告此事を聞ひて幼けれ共、武の器量有ものにて、窃に有元七郎左衛門方へ使者を立、新免安東兩家の輩に先達て原田が首を取て、亡父が靈へ備へさせ給へと云ひ送りけるとかや。斯て五月二十六日夜討と極め、安東源左衛門を先手の將として、安東左右介を大將として、勇士十六人、鐵炮兵其外人數六十餘人、都合其勢百餘人、久保木城を打立て、大川筋を打登り、芦河内より打立て越す。新免勢は上原七郎事左京亮を先陣として、新免源太夫・同修理之介・平田武二・弓鐵炮兵五十八人、都合其勢百三十人餘、小原城を打立て、ことゝ峠より栗井庄へ

越し、小房城下を打越して、久賀より打て下る。高取萬四郎・福田孫介・福野等上原が所縁成れば馳加る。有元七郎左衛門・福本助之進・豊田勘兵衛・桑村等菅家の一族共相集て、諏訪社へ打出社士等と調合て城後へ打越す。安東勢大町へ打越ければ、大町與惣が家人安藤左兵衛谷口藤吾加勢する。爰に福原勘解由も馳加へ、松ケ瀬に打届ける。水増て高く見えけれ共、大町が家人共瀬切して何の苦もなく打渡り、夜討事成ば人馬の音靜に攻寄る。新免勢も城下の北の原へ押寄て相圖を待て控へ居る所に、有元與子のもの山路をつたひて攻近づき、城の後の方より忍び入、柴薪の小屋へ火を放けるに依て、炎々と燃上る。是を見て三方の寄手同音に鬨を作つて攻立る。城内には思ひ寄ざる事成ば大きに驚騒ぎ、上を下へとうろたへさわぐを、城將原田は少も騒がず下知して門戸を堅め、皆甲冑して身を堅め、矢倉に上り寄手の陣を打見れは、敵は安東・新免等何れも多勢と見えければ、所詮叶ふまじとや思ひけん弟五郎を呼びて、汝は幼子婦人を召連、裏道より落べし。首尾好落延なば、難波を頼みて扶助を受べし。敵に取籠られば、幼子を差殺して敵に渡す事なかれと、云含てぞ落しける。夫より舊臣高江・爪田・磯部等をまねきて、當家運命爰に極ると覺ゆる。何れも勇しき能討死して、名を末世に殘されよ。予も共に討死する覺悟成れば、必おくする事なしとて、大手口の敵を鐵炮にて打立ければ、引色に成る所へ、主従纔十一人切て出、散々勇戰すれ共、新免勢平田武二、安東勢加藤孫市等聞ゆる勇士共駈ふさがつて攻戰ふ。原田も勇者成れ共、手のもの多く打れて、今は唯高江次郎瀧野三郎兵衛等附添計に成りければ、軍は是限りなりとて、興福寺へと馳ける所に、向の天神の森蔭より、有元重兵衛と流江與惣、鐵炮を頻に打て攻かゝりければ、漸々寺中に迯入て、高江次郎が門前に防戰する内、與四郎は堂庭にて腹かき切て伏にける。瀧野三郎は平田に討れける。高江は福田に討れける。原田が首をば、高取萬四郎が取たりける。此間に、安東源左衛門・上原左京・新免源太夫、城へ先乘して殘兵共を追散し、印を建て勝鬨をつくる。有元勢菅家の族は、裏門を打破て込

み入、高名と聞ぞえける。新発・安東城内を悉改め、城番として安東源左衞門・上原左京兩人を殘置き、諸勢夫々に引取ける。斯て新発伊賀守・安東入道殿方より此度の軍、勳功の者共の次第逸々日記に印し、新発治部左衞門を以て、大守へ言上しられけるに依て、六月中旬安東源左衞門・上原左京、備府へ召れて原田が所領を兩人に宛行、歸國して舊所へ歸る。是偏に新発・安東兩家の規模なり。扨、此軍實證を尋ぬるに、安東家の流江與惣、新発家の平田武二、菅家に有元重兵衞・高取萬四郎・福田孫市、此五人なれども、新発家の勳功は上原に讓り、安東家の勳功は安東源左衞門に讓りて、兩家を起すと云ふ。菅家有元等の勳功高取に讓りしと云ふ。高取・福田・流江等も、恩地を賜ると聞えける。

安東入道が智計を以有元粟井兩家を興す事

斯て有元舊城西構に、石塚八郎兵衞居住して、菅家の舊知を支配して居たりしに、不圖亂心して近習の侍共手討にして、無レ罪下女下部等十三人迄切殺けるに依て、近臣小塚彥惣と云ふ者、武道人に勝れしものなるが、下具足に身を堅め、彼が前へ行き諫ければ、暫くものをもいはざりしが、良有て威たけ高に成て、石塚を始めおのれ等下賤の身として、予が舊城を穢し、不屆至極と云もあへず、石塚を眞二つに切付、其身も其所にたほれて生體なく成ければ、生殘るもの共大きに恐れをなし、石塚を駕籠に乘せて本國へ歸る。爰は古へ三穗太郎滿佐の下屋敷と云傳ふ。不思議成かな〳〵。其後、岡新介・浮履六左衞門兩人代官として、久常の構に居して、貢物を取納居たりけるを、有元家を譜代の者心外止事なふして、毎々安東入道の元へ音信して愁傷する。依レ之、安東入道も何卒して家を起させんと思ひ、一族を集て評議しけるに、岡・浮履等も石塚が有姿を聞て、驚騷して居ける由風聞有レ之よし聞えければ、安東左右介に計事云含め、屈究のさむらい十餘人付て、酒肴を持たせ岡・浮履が居所へ遣しける。彼者居城へ立越え案内を乞て内に通る。土產の品を出し一禮終て、安東左

右介兩人に向ひ、足下兩所當城に於て、有元が舊領を押へ仁情をほどこし給ふ事、滿足たるべき事に候得共、御聞傳も候哉、有元一子小吉と申者、拙者方に扶助し罷在候處、一族共每度問音信して、心外の憤祖父入道へ物語、悲歎の涕を流し候故、御兩所を賴、何卒再有元家を起させ度推參仕る。偏に賴存ると平伏してぞ述ければ、岡・浮田も迷惑の賴と思へ共、御尤の思召、此方迚もあだには存不㆑申と請て、種々の饗應してぞかへしける。跡に兩人相談しけるは、安東が承知せずば變を起すべしと思の外、安東と心を合せ、戸川肥後守へ賴て、有元が遺跡相續の願ふ所聞屆け有て、小吉を岡山へ召出され、有元勘四郎佐明と號し、高圓鄉五ヶ村を賜る。爰に粟井が家老須々木右京、主家を苗代にして、古傍輩共を被官同前にもてなしけるに依て、舊臣藤生・藤井・湯淺・長畑等の者、密に安東が方へ行て、須々木が非義非法成事を憤、落涙を流しければ、入道須々木が惡行を悉一書に認め訴訟させけるに依て、備府隣鄉の武士江見難波家へ御問合有㆑之共、兩人共無㆓相違㆒條言上しければ、彌非義に落入、江見伊豆守難波飛驒守兩家へ仰付られ、國臣拂相成、兩家の武士共國境へ送り追放、高畑城を燒拂ふ。其後江見・難波・安東三家連印を以て、粟井家相續を願ければ御聞屆け有㆑之。粟井近江介が子三郎平正晴被㆓召出㆒粟井庄內三ヶ村を賜り、高山城に在城する。是皆安東肥前守盛信入道が智略の德とやいはん。規模なるかな〳〵。偖も安東相馬、非名受て不慮の最後におよぶといへども、誠忠正しきに依て、安東家再家を興す。原田・高取等一家の好みを忘れ有元を亡し、遠からず家を失ふ。又高取右近、一族に惡まれ國を退く。なすべきは仁なり。不仁にして家を失ふものかぞへがたし。恐るべし〳〵。

三星軍傳記　卷五終

備前國人

佐柿入道常圓物語

(一名高松城攻物語)

※冠城とは備中冠山城をいふ

備前國人 佐柿入道常圓物語

著者不詳

佐柿彌右衛門入道常圓と云者、百餘歳迄長命成る者也　村瀨安兵衛内々、常圓は秀吉公の御供にて、備中高松攻を目のあたり見たる人と聞及て、常圓へ常に出入する町人に賴み、懸ニ御目ー て高松攻の不審なる事を承度と尋ねければ、同道仕候得と有ける故、ある時彼町人とつれて參たり。常圓ふとき杖つきて座敷へ出て見ると其儘、さて／＼若き人の奇特なる事哉。さて我等にあひて高松攻の不審なる事聞度とは、何事にやと云ふ。安兵衛先づ、懸ニ御目ー忝存候。さて秀吉公高松城御攻被レ成候事、門前村よりカヘルガハナ迄大方一里程の長さに堤を御築候。其間に城よりウカ／＼と仕、見物して居申候も不審に存候。將又毛利家大軍にて後詰に出候て陣向、たゞ間は二十町にたらざる所に居て見物したるのみにて、長き堤を切てはなす事さへ不レ成、一戰の事は承不レ及レ申候事、不審千萬に候と申す。常圓云、いかにも尤の不審に候。いで／＼其時の事語り聞せ可レ申。我其時は御馬廻にて、御馬の跡ほうじの時も御供仕たる事なれば、委敷存候。先づ鳥取の城はゆる／＼と御取巻、兵糧詰に被レ成御落し候しが、それとは事かはり、次に※冠の城は一時攻に攻落し被レ成候。手負死人も多く候いき。此勢を聞き、河屋の城は早速明け退きたるゆゑに、備前備中の境の上に御人數を被レ備候。一兩日御座候ひしが、高松の城は水攻可レ然と思召けるにや、被レ仰けるは、我只今馬を乘行くべし。その足あと次第に早々ほうじをさしかへと被ニ仰付ー、其儘御乘出し被レ成、御供たゞ七八人にて、門前村よりカイルガハナ迄御乘被レ成候。此時城中より鐵炮打かけ、御羽織に玉二つまであたり候へども、すこしもさわがず御乘通り被レ成候。それより前に被ニ仰付ーたる塀數百間、幷に井樓矢倉

を夜中に御つけさせ被レ成けるが、一夜の間に悉く塀をかけ、五十間に一ツ宛矢倉をあげ、外より見れば矢倉に白土迄つけ申候。白土は白土にあらず。白紙にて張たる障子を以てかこひたる也。矢倉々々より弓鐵炮にて、打すくめ射すくめて、塀の陰にては堤を築候。中々小人數の城兵の出べき様はなかりし也。扨堤も出來て、秀吉の御運にやよりけん、三日の間しのつく程一雨ふりけり。門前村の外にひろさ三十間程の砂川あり。つねは脚袢のぬるゝばかりの淺水也。川上に大井村と云ふある故に、川の名を大井川と云ふ。彼三日の大雨にて川瀧と成て流るゝ時、秀吉の仰にて人數二千計手と手を取合て、此川の門前村の前へひら〳〵と入て、人にて水をせかせ玉ひければ、其川下は二三尺迄はなき程淺瀬と成ける所を、土俵を以てつき切り、門前村の前の堤の口へ入ければ、逆卷て城外へ水滔々と、目コスらぬ間に大海の如く成ける。扨城外の山々の城の方へ流るゝ雨脚は云ふに不レ及、備前の方の山半分に溝を付て、備中高松の方へ流しかけるなり。於レ今其山水備中の田地へ取り申故に、備前の水にて備中の田を作ると俗の申は、此時よりとぞ。右の譯にて、城中の兵何の分別出すべき様もなく、寢耳に水の入たる様にて、あきれたるばかりと見え申候。扨毛利家の後詰も、彼ミセ櫓に見驚き、僉議評定はかもゆかぬ間に、城は水にひたりける故、城主清水氏切腹す。やがて京の大變申來りければ、和議して互に誓紙人質取かはし、人數御引取被レ成候時、彼堤を切てはなさせ、其儘御引取被レ成候へば、假に毛利家の陣所との間大海の如くに成て、たとひ追討の心ありても、何ともすべき様なき事にてありし也。備前の秀家は幼少にて岡山の城より出向、半田山のあたりにて、秀吉公御對面なりし時、秀吉公のめされたる乘輿の中に入たまひ、樣々御ねんごろにていろ〳〵御はなし抔被レ成、今より以後我養子と御約束被レ成、沼の城のあたり迄御つれ被レ成、それより御かへし被レ成ける也。秀家よりの加勢の人數も先へ押させ玉ふ。扨飛脚を被レ遣二播州一、町在郷に限らず、法華宗の出家悉く城下へ集り候へ、萬部の御經被二仰付一給ふて、信長公の御吊可レ被レ成と、しき波に

被二仰遣一、御乗輿の内にてはひたもの御眠被レ成、正體なく見えさせ玉ひ、をり〳〵御馬にめしけるが、たわいもなく御ねふり被レ成、四五度御落馬被レ成ける程に、姫路に御着被レ成て御やすみ被レ成、御法事も三七日も過て後こそ、上方御出馬なるべきと申けるに、姫路へ御着被レ成たる夜中に、はや御陣觸にて、明る朝は御出馬也。後に思ひ合せ候へば、かく御くたびれ被レ成、其上御とぶらひに日數有レ之と、光秀方へ聞えたるやらん。明智左馬亮に人數を分て安土へ遣し、油斷したる所に、急に御上り故、山崎にて明智の謀は後に成り、敗軍したると存候。尼崎にて諸大名髮を切て、信長公の事をなげき玉ふ時、秀吉公もなげき玉ひて、此上は何れも一味同心にて、明智を討取可レ申外は無二御座一候。何れも左樣に被二思召一候へと敬て、成程慇懃に同輩の模樣も見えける也。明智敗軍の時、諸大名へ御あしらひは、ほねをり〳〵と被レ仰、皆家來あしらひに被レ成、大に威がつき候ひしなり、とかたられける。

右佐柿彌右衛門入道常圓は、二百五十石被レ下隱居被レ申候。其子は盲目にて孫を子とし、少將樣より二百五十石被レ下、是も佐柿彌右衛門と申けるが、死して無レ子して跡つぶれ申處に、少將樣佐柿の跡はつぶすべからずとて、石田鶴右衛門二男を跡に御立被レ成、佐柿彌右衛門とて居けるが、あほうつくしして跡つぶれ申候。

村瀬安兵衛は、伊木勘解由にて二百石賜り居申候。右常圓の物語聞候は、浪人の内若き時の事也。

貞享四年卯の十月安兵衛物語之通書付也。

備前國人佐柿入道常圓物語　終

大正十一年一月二十日印刷
大正十一年一月廿五日發行

非賣品

吉備群書集成刊行會

編纂者　田中誠一
東京市四谷區簞笥町二十七番地

發行兼印刷者　村田攬雄
東京市京橋區三十間堀三丁目四番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

吉備群書集成

發行所
東京市京橋區三十間堀三丁目四番地
吉備群書集成刊行會
振替口座東京五四五二九番

吉備群書集成刊行會